

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (38)

東九州自動車道建設（志布志 I C ～鹿屋串良 J C T 間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

かわ く ぼ
川 久 保 遺 跡 4
A 地 点

（鹿屋市串良町）

縄文時代早期編

第 1 分冊

2021年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



川久保遺跡A地点遠景

序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）建設に伴って、平成26年度から平成29年度にかけて実施した川久保遺跡 A 地点の縄文時代早期・前期・古代・中世の発掘調査の記録です。

川久保遺跡は、鹿屋市串良町に所在し、旧石器時代、縄文時代草創期・早期・前期・後期・晩期、弥生時代、古墳時代から近世までの遺構や遺物が発見されました。縄文時代早期は276基の集石や12基の連穴土坑ほか多数の遺構が検出され、また出土した土器型式も縄文時代早期前半の前平式土器から、早期末の轟系土器群まで、ほぼ途切れることなく出土しています。また、中世に関しては、掘立柱建物跡・土坑墓・土坑が、溝や古道に区画されて検出されており、出土した輸入陶磁器等の存在とともに、地域の歴史を考えるうえで貴重な発見となりました。

本報告書が、県民の皆様をはじめ、多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心を広げ、地域の歴史や文化への理解を高める一助になれば幸いです。

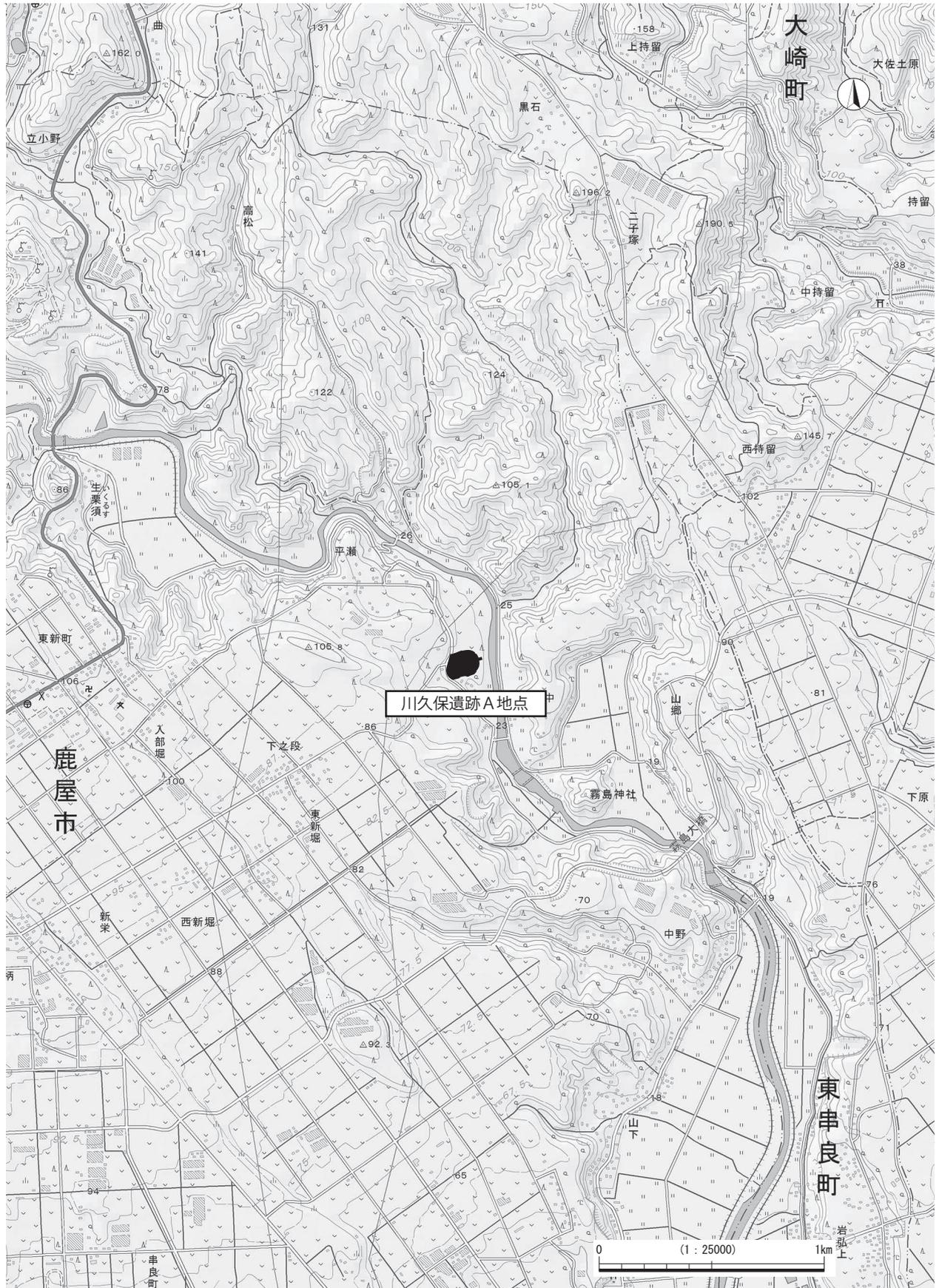
最後に、発掘調査から報告書刊行まで御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会等の関係各機関並びに発掘調査や報告書作成において御指導・御協力いただきました皆様に対し厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長 中原一成

報 告 書 抄 録

ふりがな	かわくぼいせきよん えーちてん じょうもんじだいそうき・ぜんき・こだい・ちゅうせいへん							
書名	川久保遺跡4 A地点 縄文時代早期・前期・古代・中世編							
副書名	東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編集者名	岩永勇亮 肥後弘章（埋蔵文化財調査センター） 松崎卓郎 中田裕樹（埋蔵文化財サポートシステム）							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター							
発行年月	西暦2021年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
かわくぼいせき 川久保遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 くしらちょう 串良町 ほそやまだ 細山田	46203	203-349	31° 26' 40"	130° 56' 26"	試掘調査 2015.11.4～ 2016.1.28 本調査 ①2014.5.12～ 2015.1.28 ②2015.5.9～ 2016.1.27 ③2016.5.11～ 2017.1.27 ④2017.5.8～ 2018.3.9	27,327㎡ (表面積) 96,403㎡ (延面積)	東九州自動車道 建設（志布志IC～ 鹿屋串良JCT間） に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
川久保遺跡 A地点	散布地	旧石器時代		礫群 28基		ナイフ形石器, 台形石器, 剥片尖頭器, 細石刃核, 細石刃, 石核, 磨石, 敲石, 叩石		哇原型細石刃核が多く出土する傾向がある。
		縄文時代草創期		礫群 4基		隆線文土器, 細石刃核, 細石刃, 石鏃, 石核, 磨石, 敲石, 叩石		
		縄文時代早期		集石 276基 連穴土坑 12基 土坑 21基 磨石集積遺構 1基		岩本式土器, 前平式土器, 志風頭式土器, 加栗山式土器, 吉田式土器, 石坂式土器, 下剥峯式土器, 押型文土器, 塞ノ神式土器, 菅浜式土器, 右京西式土器, 轟A式土器他, 耳栓, 石鏃, 石核, 磨石, 敲石, 叩石		南九州の縄文時代早期のほとんどの型式が出土している。
		縄文時代前期		集石 23基		西之菌式土器, 轟B式土器, 曾畑式土器, 磨製石斧, 石鏃, 磨石		—
		縄文時代後期・晩期		土坑		黒川式土器, 刻目突帯文土器, 打製石斧		—
		弥生時代		竪穴住居跡		下条式土器, 山ノ口式土器, 石包丁		—
		古墳時代		竪穴住居跡 鍛冶関連遺構		成川式土器, 鞆羽口, 高坏脚転用鞆羽口, 鉄滓, 勾玉, 管玉		—
		古代・中世		掘立柱建物跡 34基 竪穴建物跡 3基 古道跡, 溝跡 土坑墓 3基		須恵器, 土師器, 黒色土器, 墨書土器, 瓦器, 青磁, 白磁, 滑石製石鍋, 土錘		溝と古道で区画されたなかに, 建物跡が並ぶ
		近世		炭焼窯跡 2基		古銭, 五輪塔, 石臼		—
要約	川久保遺跡A地点は、旧石器時代から縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と連綿と生活の痕跡が見られる複合遺跡である。縄文時代早期の遺構としては、276基を検出した集石のほかに、早期前半の連穴土坑12基などが検出されている。早期の土器は、ほぼすべての型式が出土している。また、中世の掘立柱建物跡群が溝と古道で区画されて検出されている。							



川久保遺跡A地点位置図

例言

- 1 本編は、東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う川久保遺跡発掘調査報告書「川久保遺跡4 A地点 縄文時代早期・前期・古代・中世編」である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」）が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」）へ調査委託し、埋文調査センターが実施した。本遺跡は、A・B・C・D地点に区分して調査を行った。
- 4 川久保遺跡A地点の調査は、平成26年度～平成29年度まで実施し、全てを完了した。なお平成26年度は、大福コンサルタント株式会社、平成27年度・平成28年度は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、平成29年度は、株式会社島田組に発掘調査支援業務を委託した。詳細については、第I章に記した。
- 5 整理・報告書作成事業については、平成29年度は、埋文調査センターの第一整理作業所、平成30年度・平成31年度は、第二整理作業所において実施した。なお平成30年度は、大福コンサルタント株式会社、平成31年度・令和2年度は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託した。
- 6 掲載した遺構番号は、遺構・土器・石器がそれぞれ通し番号で本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。本文・挿図・表・図版の番号は、一致する。
- 7 遺物注記等で用いた遺跡略号は、「KKB」である。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 本編で使用したレベル数値は、海拔絶対高である。
- 10 本編で使用した方位は全て国土座標第II系による座標北（G.N.）であり、磁北はこれより西偏約6度30分である。
- 11 遺構の埋土や土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を参考にした。
- 12 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者及び受託業者が行った。また、空中写真の撮影は、株式会社ふじたに委託した。
- 13 本編に係る遺構及び遺物の実測・トレース図の作成は、岩永・肥後・受託業者が整理作業員とともに行った。また、遺物実測（石器）の一部を大福コンサルタント株式会社、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、株式会社島田組、株式会社九州文化財総合研究所に委託し、岩永・肥後・受託業者が監修を行った。
- 14 出土遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）の写場で、岩永・肥後・受託業者及び埋文調査センターの福永修一・西園

勝彦が行った。

- 15 本編の執筆は、次のように分担した。

第I章	岩永・肥後・松崎
第II章	肥後・黒川
第III章	岩永・松崎
第IV章	
第1節 縄文時代早期の成果	
遺構	岩永・坂井
土器	岩永・肥後・富永・磯村
石器	松崎・本村
第2節 縄文時代前期の成果	
遺構	岩永・坂井
土器	岩永
石器	松崎・本村
第3節 古代の成果	
遺構	岩永・富永
遺物	中田・井手
第4節 中世の成果	
遺構	岩永・富永
遺物	中田・井手
第5節 自然科学分析	岩永（編集）

第V章 総括

第1節	岩永・松崎
第2節	岩永・松崎
第3節	岩永・中田

図版 …… 肥後

- 16 本編に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、埋文センターで保管し、展示・活用を図ることにしている。

凡例

- 1 本編に掲載してある遺構図・遺物出土状況等の1グリッド（1マス）は、10m四方である。
- 2 遺構の平面図の基本的な縮尺は1/20である。
- 3 遺構の断面図については、基本的には平面図と同縮尺とした。
- 4 遺構の実測で用いた表現方法については、実測表現の凡例のとおりである。
- 5 遺構配置図は、縮尺をそれぞれ別途に掲載した。
- 6 遺構番号に関しては、調査時に付したのから、報告書掲載順に振り直した。
- 7 遺物図の基本的な縮尺は、以下のとおりである。土器：1/3、石斧：1/2、礫器・磨石類：1/3、剥片石器：1/1
- 8 上記の縮尺で図版に収まらない実測図に関しては、適宜、縮尺を変更して掲載した。

総目次

【第1分冊】

巻頭図版

序文

報告書抄録

川久保遺跡A地点位置図

例言・凡例

目次

第I章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

第2節 事前調査

第3節 本調査

第4節 整理・報告書作成

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境

第3節 東九州自動車道関連の遺跡

第III章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

第2節 層序

第IV章 調査の成果

第1節 縄文時代早期の成果

1 遺構

2 遺物

【第2分冊】

第2節 縄文時代前期の成果

1 遺構

2 遺物

第3節 古代の成果

1 遺構

2 遺物

第4節 中世の成果

1 遺構

2 遺物

第5節 自然科学分析

第V章 総括

第1節 縄文時代早期

第2節 縄文時代前期

第3節 古代・中世

【第3分冊】

写真図版

本文目次

巻頭図版

序文

報告書抄録

川久保遺跡A地点位置図

例言・凡例

目次

第I章 発掘調査の経過 1

第1節 調査に至るまでの経緯 1

第2節 事前調査 1

第3節 本調査 2

第4節 整理・報告書作成 6

第II章 遺跡の位置と環境 10

第1節 地理的環境 10

第2節 歴史的環境 10

第3節 東九州自動車道関連の遺跡 14

第III章 調査の方法と層序 19

第1節 調査の方法 19

第2節 層序 24

第IV章 調査の成果 30

第1節 縄文時代早期の成果 30

1 遺構 30

2 遺物 170

挿図目次

第 1 図 周辺遺跡位置図 …………… 13	第 52 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石28 …………… 77
第 2 図 東九州自動車道関連（志布志 I C～鹿屋串良 J C T 間）遺跡位置図 …………… 18	第 53 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石29 …………… 78
第 3 図 周辺地形及びグリッド配置図 …………… 20	第 54 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石30 …………… 79
第 4 図 標準土層図 …………… 24	第 55 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石31 …………… 80
第 5 図 土層断面図位置図 …………… 24	第 56 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石32 …………… 81
第 6 図 土層断面図① …………… 25	第 57 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石33 …………… 82
第 7 図 土層断面図② …………… 26	第 58 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石34 …………… 83
第 8 図 土層断面図③ …………… 27	第 59 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石35 …………… 84
第 9 図 土層断面図④ …………… 28	第 60 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石36 …………… 85
第 10 図 土層断面図⑤ …………… 29	第 61 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石37 …………… 86
第 11 図 縄文時代早期Ⅶ b 層検出集石配置図 …………… 37	第 62 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石38 …………… 87
第 12 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石配置図 …………… 38	第 63 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石39 …………… 88
第 13 図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石配置図 …………… 39	第 64 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石40 …………… 89
第 14 図 縄文時代早期Ⅶ b 層検出集石 1 …………… 40	第 65 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石41 …………… 90
第 15 図 縄文時代早期Ⅶ b 層検出集石 2 …………… 41	第 66 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石42 …………… 91
第 16 図 縄文時代早期Ⅶ b 層検出集石 3 …………… 42	第 67 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石43 …………… 92
第 17 図 縄文時代早期Ⅶ b 層検出集石 4 …………… 43	第 68 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石44 …………… 93
第 18 図 縄文時代早期Ⅶ b 層検出集石 5 …………… 44	第 69 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石45 …………… 94
第 19 図 縄文時代早期Ⅶ b 層検出集石 6 …………… 45	第 70 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石46 …………… 95
第 20 図 縄文時代早期Ⅶ b 層上位検出集石 1 …………… 45	第 71 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石47 …………… 96
第 21 図 縄文時代早期Ⅶ b 層上位検出集石 2 …………… 46	第 72 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石48 …………… 97
第 22 図 縄文時代早期Ⅶ a 層下位検出集石 1 …………… 47	第 73 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石49 …………… 98
第 23 図 縄文時代早期Ⅶ a 層下位検出集石 2 …………… 48	第 74 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石50 …………… 99
第 24 図 縄文時代早期Ⅶ a 層下位検出集石 3 …………… 49	第 75 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石51 …………… 100
第 25 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 1 …………… 50	第 76 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石52 …………… 101
第 26 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 2 …………… 51	第 77 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石53 …………… 102
第 27 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 3 …………… 52	第 78 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石54 …………… 103
第 28 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 4 …………… 53	第 79 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石55 …………… 104
第 29 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 5 …………… 54	第 80 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石56 …………… 105
第 30 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 6 …………… 55	第 81 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石57 …………… 106
第 31 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 7 …………… 56	第 82 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石58 …………… 107
第 32 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 8 …………… 57	第 83 図 縄文時代早期Ⅶ a 層上位検出集石 1 …………… 108
第 33 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石 9 …………… 58	第 84 図 縄文時代早期Ⅶ a 層上位検出集石 2 …………… 109
第 34 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石10 …………… 59	第 85 図 縄文時代早期Ⅶ a 層上位検出集石 3 …………… 110
第 35 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石11 …………… 60	第 86 図 縄文時代早期Ⅶ a 層上位検出集石 4 …………… 111
第 36 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石12 …………… 61	第 87 図 縄文時代早期Ⅶ a 層上位検出集石 5 …………… 112
第 37 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石13 …………… 62	第 88 図 縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石 1 …………… 112
第 38 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石14 …………… 63	第 89 図 縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石 2 …………… 113
第 39 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石15 …………… 64	第 90 図 縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石 3 …………… 114
第 40 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石16 …………… 65	第 91 図 縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石 4 …………… 115
第 41 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石17 …………… 66	第 92 図 縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石 5 …………… 116
第 42 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石18 …………… 67	第 93 図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 1 …………… 116
第 43 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石19 …………… 68	第 94 図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 2 …………… 117
第 44 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石20 …………… 69	第 95 図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 3 …………… 118
第 45 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石21 …………… 70	第 96 図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 4 …………… 119
第 46 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石22 …………… 71	第 97 図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 5 …………… 120
第 47 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石23 …………… 72	第 98 図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 6 …………… 121
第 48 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石24 …………… 73	第 99 図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 7 …………… 122
第 49 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石25 …………… 74	第100図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 8 …………… 123
第 50 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石26 …………… 75	第101図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石 9 …………… 124
第 51 図 縄文時代早期Ⅶ a 層検出集石27 …………… 76	第102図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石10 …………… 125
	第103図 縄文時代早期Ⅵ層検出集石11 …………… 126

第104図	縄文時代早期VI層検出集石12	127	第158図	6類土器8	195
第105図	縄文時代早期VI層検出集石13	128	第159図	6類土器9	196
第106図	縄文時代早期VI層検出集石14	129	第160図	6類土器10	197
第107図	縄文時代早期VI層検出集石15	130	第161図	6類土器11	198
第108図	縄文時代早期VI層検出集石16	131	第162図	6類土器12	199
第109図	縄文時代早期VI層検出集石17	132	第163図	7類土器分布図	203
第110図	縄文時代早期VI層検出集石18	133	第164図	7類土器	205
第111図	縄文時代早期VI層検出集石19	134	第165図	8～10類土器分布図	206
第112図	縄文時代早期VI層検出集石20	135	第166図	8類土器	208
第113図	縄文時代早期VI層検出集石21	136	第167図	9類土器	208
第114図	縄文時代早期VI層検出集石22	137	第168図	10類土器	209
第115図	磨石集積	138	第169図	11類土器分布図	210
第116図	磨石集積出土石器	138	第170図	11類土器	211
第117図	集石内出土土器1	146	第171図	12類土器分布図	213
第118図	集石内出土土器2	147	第172図	12類土器1	214
第119図	集石内出土土器1	148	第173図	12類土器2	215
第120図	集石内出土土器2	149	第174図	12類土器3	216
第121図	縄文時代早期 連穴土坑・土坑配置図	153	第175図	12類土器4	217
第122図	縄文時代早期VII a層検出連穴土坑1	154	第176図	12類土器5	218
第123図	縄文時代早期VII a層検出連穴土坑2	155	第177図	12類土器6	219
第124図	縄文時代早期VII a層検出連穴土坑3	156	第178図	12類土器7	220
第125図	縄文時代早期VII a層検出連穴土坑4	157	第179図	12類土器8	221
第126図	縄文時代早期VII a層検出連穴土坑5	158	第180図	12類土器9	222
第127図	縄文時代早期VII a層検出連穴土坑6	159	第181図	13～15類土器分布図	225
第128図	縄文時代早期VII a層検出土坑1	160	第182図	耳栓・垂飾品分布図	226
第129図	縄文時代早期VII a層検出土坑2	161	第183図	13類土器	227
第130図	縄文時代早期VII a層検出土坑3	162	第184図	14類土器	227
第131図	縄文時代早期VII a層検出土坑4	163	第185図	15類土器・その他土器	228
第132図	縄文時代早期VII a層検出土坑5	164	第186図	耳栓1	228
第133図	縄文時代早期VII a層検出土坑6	165	第187図	耳栓2・垂飾品	229
第134図	縄文時代早期VII a層検出土坑7	166	第188図	VII層出土石器分布図	231
第135図	縄文時代早期VII a層検出土坑8	167	第189図	VI層出土石器分布図	234
第136図	縄文時代早期VII a層検出土坑9	168	第190図	VII層出土石器1	236
第137図	縄文時代早期VII a層検出土坑10	169	第191図	VII層出土石器2	237
第138図	1～3類土器分布図	170	第192図	VII層出土石器3	238
第139図	1類土器	172	第193図	VII層出土石器4	239
第140図	2類土器1	174	第194図	VII層出土石器5	240
第141図	2類土器2	175	第195図	VII層出土石器6	241
第142図	3類土器	177	第196図	VII層出土石器7	242
第143図	4類土器分布図	178	第197図	VII層出土石器8	243
第144図	4 a類土器	179	第198図	VI層出土石器1	244
第145図	4 b類土器	179	第199図	VI層出土石器2	245
第146図	4 c類土器	179	第200図	VI層出土石器3	246
第147図	5類土器分布図	182	第201図	VI層出土石器4	247
第148図	5類土器1	183	第202図	VI層出土石器5	248
第149図	5類土器2	184	第203図	VI層出土石器6	249
第150図	6類土器分布図	187	第204図	VI層出土石器7	250
第151図	6類土器1	188	第205図	VI層出土石器8	251
第152図	6類土器2	189	第206図	VI層出土石器9	252
第153図	6類土器3	190	第207図	VI層出土石器10	253
第154図	6類土器4	191	第208図	VI層出土石器11	254
第155図	6類土器5	192	第209図	VI層出土石器12	255
第156図	6類土器6	193	第210図	VI層出土石器13	256
第157図	6類土器7	194	第211図	VI層出土石器14	257

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表 …………… 12	第18表 1類土器観察表 …………… 171
第2表 東九州自動車道関連（志布志IC～ 鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表① …………… 14	第19表 2類土器観察表 …………… 175
第3表 東九州自動車道関連（志布志IC～ 鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表② …………… 15	第20表 3類土器観察表 …………… 176
第4表 東九州自動車道関連（志布志IC～ 鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表③ …………… 16	第21表 4類土器観察表 …………… 180
第5表 東九州自動車道関連（志布志IC～ 鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表④ …………… 17	第22表 5類土器観察表 …………… 185
第6表 東九州自動車道関連（志布志IC～ 鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表⑤ …………… 18	第23表 6類土器観察表 1 …………… 200
第7表 石器分類表 …………… 22	第24表 6類土器観察表 2 …………… 201
第8表 石材分類表 …………… 23	第25表 6類土器観察表 3 …………… 202
第9表 VII a層検出集石に伴う土坑法量一覧 …………… 58	第26表 7 a類土器観察表 …………… 204
第10表 縄文時代早期集石 1 …………… 139	第27表 7 b類土器観察表 …………… 204
第11表 縄文時代早期集石 2 …………… 140	第28表 8類土器観察表 …………… 207
第12表 縄文時代早期集石 3 …………… 141	第29表 9類土器観察表 …………… 207
第13表 縄文時代早期集石 4 …………… 142	第30表 10類土器観察表 …………… 207
第14表 縄文時代早期集石 5 …………… 143	第31表 11類土器観察表 …………… 212
第15表 集石内出土土器観察表 …………… 144	第32表 12類土器観察表 1 …………… 223
第16表 磨石集積及び集石内出土土器観察表 …… 145	第33表 12類土器観察表 2 …………… 224
第17表 縄文時代早期土坑 …………… 169	第34表 13類土器観察表 …………… 229
	第35表 14類土器観察表 …………… 230
	第36表 15類土器・その他土器・耳栓観察表 …… 230
	第37表 VII層出土土器観察表 …………… 258
	第38表 VI層出土土器観察表 …………… 259

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）は、東九州自動車道（志布志 I C～末吉 I C）建設を計画し、当該事業区間における埋蔵文化財の有無について、県教委に照会を行った。これを受けて、鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）は、平成12年2月に、志布志 I C～鹿屋串良 J C T間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。この分布調査結果をもとに事業区内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）の4者で協議を重ね対応を検討してきた。その後、日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業計画の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化や道路建設工事計画の変更に伴い、遺跡についてもより綿密な把握が求められることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査と試掘調査及び確認調査が実施されることとなった。なお、志布志 I C～鹿屋串良 J C T間については、平成14年4月に再度分布調査を実施した。その後、日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成16年3月には、国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は、日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は、日本道路公団が鹿児島県へ再委託することになり、これまでの確認書や協定書は、そのまま継承されることになった。また、日本道路公団からの再委託による発掘調査は、曾於弥五郎 I Cまでで終了し、曾於弥五郎 I Cからの先線部は、国土交通省からの受託事業として委託することになった。なお、平成21年度までの当該区間の確認調査は、事業の円滑な推進を図る観点から本発掘調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが、平成23年度からは、文化庁の国庫補助事業を導入し、県内遺跡事前調査事業として鹿児島県教育委員会が実施することになった。これをふまえ平成23年度は、荒園遺跡・永吉天神段遺跡・堂園平遺跡、平成24年度は、町田堀遺跡・牧山遺跡・京の塚遺跡（現細山田段遺跡）・宮脇遺跡、平成25年度は、小牧遺跡・安良遺跡・木森遺跡、平成26年度は、川久保遺跡・春日堀遺跡・小牧古墳群（現安楽小牧 B 遺跡）の確認調査を実施した。

近年は、東九州自動車道建設事業等の増加に伴い、埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ、その対応が困難な状況となりつつあった。そこで、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を平成25年度に設立し、国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。川久保遺跡については、平成26年度に埋文センターによる確認調査で旧石器時代、縄文時代早期及び晩期、古墳時代、古代の遺物包含層が確認された。なお本調査は、民間調査組織と支援業務委託を契約して実施することとした。また、遺跡が広範囲に及ぶため、地形等を勘案して調査区を A～D 地点に区分することとした。

第 2 節 事前調査

1 分布調査・詳細分布調査

川久保遺跡に関する分布調査は、詳細分布調査を含めて2回実施した。1回目の分布調査は、文化財課が平成12年2月に志布志 I C～鹿屋串良 J C T間について実施した。この結果、川久保遺跡を含む50か所の遺跡で、面積にして854,100㎡を確認した。その後、より詳細な情報を得ることを目的として平成14年4月に県文化課が詳細分布調査を実施した。この結果、川久保遺跡を含む遺跡面積の合計は、384,400㎡を確認した。

2 試掘調査

川久保遺跡における試掘調査は、遺跡の東側を中心に平成25年度に県教委が実施した。試掘調査の結果、古墳時代の遺構や遺物包含層を確認した。また、平成27年度の本調査時には、A地点・B地点について薩摩火山灰層以下の状況確認のため試掘トレンチを設けた。その結果、B地点では遺構や遺物は確認されなかったが、A地点の約1,000㎡で縄文時代草創期から旧石器時代の包含層を確認した。

3 確認調査

川久保遺跡の確認調査は、平成26年11月4日～平成27年1月28日に実施した。調査対象は、遺跡の西側の約4,700㎡であった。調査は、6m×2mのトレンチを11か所設定し、掘削を行った。調査の結果、遺跡の全面で中世から縄文時代早期の包含層を2面確認し、遺跡の一部の約900㎡からは、旧石器時代の包含層を確認した。本時の確認調査範囲は、後日C地点として本調査が行われた。

調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
調査企画	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
調査担当	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
事務担当	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

第3節 本調査

試掘調査・確認調査の結果をふまえ、本調査は、平成26年度～平成30年度までの5か年で実施している。第1回は、平成26年4月11日～平成27年3月12日まで、第2回は、平成27年5月9日～平成28年1月27日まで、第3回は、平成28年4月11日～平成29年3月10日まで、第4回は、民間が平成29年5月9日～平成30年1月26日まで実施し、埋文調査センターが平成29年4月11日～平成30年3月9日までの期間で調査を実施した。また、第5回は、平成30年12月10日～平成31年2月22日までの期間で調査を実施した。なお、平成30年度が川久保遺跡の本調査最終年度であるが、A地点の本調査は、平成29年度が最終年度である。

以下では概要と体制を記し、経過は日誌抄で記述する。

1 概要

平成26年度

大福コンサルタント株式会社に支援業務を委託し、遺跡の東側を中心に5,830㎡の調査を実施した。その結果、縄文時代前期と晩期の遺物、弥生時代の竪穴住居跡、古墳時代の竪穴住居跡及び鍛冶関連建物跡、古代・中世の掘立柱建物跡、溝状遺構や道跡等を発見した。

平成27年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託し、川久保遺跡全体で18,534㎡を対象に調査を実施した。その結果、縄文時代前期・晩期の遺構・遺物、弥生時代及び古墳時代の竪穴住居跡、古代の土坑、中世の掘立柱建物跡及び溝状遺構を発見した。また、トレンチ調査により、旧石器時代、縄文時代早期の遺構・遺物を確認した。

平成28年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステムに支援業務を委託し、遺跡全体で34,230㎡を対象に調査を実施した。その結果、旧石器時代細石器文化期の遺物、縄文時代早期の集石遺構と遺物、縄文時代前期・晩期、弥生時代の遺物、古墳時代の竪穴住居跡・製鉄関連の遺構と遺物、中

世の土坑・道跡と遺物を発見した。

平成29年度

埋文調査センター（直営）と調査支援業務を委託した株式会社島田組（民活）の2班体制で本調査を実施した。調査対象面積は、37,809㎡である。A地点の調査の最終年度である。その結果、旧石器時代は、ナイフ形石器文化期から細石器文化期の遺構と遺物、縄文時代草創期の礫群・連穴土坑等の遺構と遺物を発見した。また、縄文時代早期の連穴土坑・土坑・集石遺構等の遺構と遺物、縄文時代後期の石器集積遺構と遺物を確認した。さらに、縄文時代晩期の集石遺構と遺物、弥生時代終末期から古墳時代にかけての竪穴住居跡・土坑等の遺構と遺物を発見した。また、本調査と並行して遺物洗浄・注記の基礎整理作業を実施した。

平成30年度

埋文調査センター（直営）で本調査を実施した。調査対象面積は、2,283㎡である。調査の結果、縄文時代晩期の集石遺構と遺物が出土した。古墳時代では、土坑1基と焼土を検出した。遺物は、古墳時代は、成川式土器が出土し、古代は、土師甕・内黒土師器・須恵器等が出土した。中世の遺物は、青磁が出土している。また、本調査と並行してC地点の報告書の刊行とA地点の遺物洗浄や注記等の基礎整理作業を実施した。

2 調査体制

平成26年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局 大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	(公財)鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
調査企画	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
調査担当	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
事務担当	〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
現地指導	東アジア古代鉄文化研究センター(愛媛大学) センター長(教授) 村上 恭 通 鹿児島大学法文学部人文学科 教授 本田 道 輝 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 准教授 中 村 直 子 佐賀大学文化教育学部 教授 重 藤 輝 行 広島大学文学研究科 准教授 野 島 永

調査の委託

委託先 大福コンサルタント株式会社
 主任技術者 原 口 道 朗
 主任調査支援員 重 留 康 宏
 調査支援員 岩 下 直 樹
 調査支援員 花 田 寛 典

委託内容 発掘調査支援業務
 測量業務
 土木業務

検査 中間検査：平成26年10月28日
 完成検査：平成27年 2月20日（実地検査）
 平成27年 3月 4日（成果物検査）

平成27年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 (公財) 鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 " センター長 堂 込 秀 人
 調査企画 " 総務課長兼係長 有 村 貢
 " 調査課長 八木澤 一郎
 " 調査第二係長 寺 原 徹
 調査担当 " 統括調査員 岩 永 勇 亮
 " 副統括調査員 倉 元 良 文
 " 副統括調査員 松 下 建 生
 事務担当 " 主事 荒 瀬 勝 己
 現地指導 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
 センター長 中 村 直 子

調査の委託

委託先 株式会社埋蔵文化財サポートシステム
 主任技術者 権現領 美千代
 主任調査支援員 島 内 浩 輔
 調査支援員 松 崎 卓 郎
 調査支援員 立 神 勇 志
 調査支援員 坂 井 靖 奈
 調査支援員 沖 野 沙和美
 調査支援員 磯 村 康 行
 研修生 富 永 朋 実

委託内容 発掘調査支援業務
 測量業務
 土木業務

検査 中間検査：平成 27 年 10 月 27 日
 完成検査：平成 28 年 3 月 1 日（実地検査）
 平成 28 年 3 月 11 日（成果物検査）

平成28年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 (公財) 鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 " センター長 堂 込 秀 人
 調査企画 " 総務課長兼係長 有 村 貢
 " 調査課長 八木澤 一郎
 " 調査第二係長 宗 岡 克 英
 調査担当 " 統括調査員 岩 永 勇 亮
 " 副統括調査員 湯場崎 辰 巳
 " 副統括調査員 山 形 敏 行
 事務担当 " 主事 荒 瀬 勝 己
 現地指導 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
 センター長 中 村 直 子

調査の委託

委託先 株式会社埋蔵文化財サポートシステム
 主任技術者 牧 美千代
 主任調査支援員 島 内 浩 輔
 調査支援員 松 崎 卓 郎
 調査支援員 中 田 裕 樹
 調査支援員 内 田 賢 一
 調査支援員 立 神 勇 志
 調査支援員 中 村 耕 治
 調査支援員 沖 野 沙和美
 調査支援員 磯 村 康 行
 調査支援員 富 永 朋 実

委託内容 発掘調査支援業務
 測量業務
 土木業務

検査 中間検査：平成 28 年 10 月 7 日
 完成検査：平成 29 年 2 月 22 日（実地検査）
 平成 29 年 2 月 24 日（成果物検査）

平成29年度（直営）

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 (公財) 鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 " センター長 前 迫 亮 一
 調査企画 " 総務課長兼係長 中 村 伸一郎
 " 調査課長 中 原 一 成
 " 調査第一係長 今 村 敏 照
 調査担当 " 文化財専門員 山 形 敏 行
 " 文化財専門員 石 畑 浩 一
 " 文化財専門員 三 垣 恵 一
 " 文化財専門員 徳 永 愛 雄
 " 文化財専門員 楸 田 岳 志
 （平成29年 5月～11月）

〃 文化財専門員 本 高 謙 治
 〃 文化財専門員 相 良 典 隆
 〃 文化財調査員 木 場 浅 葱
 〃 文化財調査員 新屋敷 久美子
 〃 文化財調査員 福 地 祥 平
 (平成29年5月～8月, 12月～平成30年3月)
 事務担当 〃 主事 荒 瀬 勝 己
 〃 事業推進員 川 崎 麻 衣
 現地指導 鹿児島県考古学会
 会長 本 田 道 輝
 鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
 センター長 中 村 直 子

調査の委託

委託先 株式会社島田組
 主任調査支援員 宮 下 貴 浩
 調査支援員 大 橋 裕 子

委託内容 測量業務
 検査 中間検査：平成29年11月22日
 完成検査：平成30年3月6日(成果物検査)

民間組織への業務委託は、平成30年1月26日をもって終了した。

その後、当初の計画どおり、直営による調査を2月まで継続するにあたって、調査を円滑かつ効率的に実施するため、発掘業務の一部を別途民間調査組織に委託して実施した。

委託先 株式会社島田組
 委託期間 平成30年2月1日～平成30年2月23日

委託内容 測量業務
 土工業務
 検査 完成検査：平成30年3月13日(成果物検査)

この他、VI・VII層及びIX層(縄文時代早期から旧石器時代)の調査において、測量業務の迅速化を図るために「遺構実測図作成業務委託」を実施した。

委託先 株式会社ジパングサーベイ
 委託期間 平成29年10月12日～平成30年2月23日
 委託内容 測量業務
 検査 完成検査：平成30年3月13日(成果物検査)

平成29年度(民活)

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 (公財)鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 〃 センター長 前 迫 亮 一
 調査企画 〃 総務課長兼係長 中 村 伸一郎
 〃 調査課長 中 原 一 成
 〃 調査第一係長 今 村 敏 照
 調査担当 〃 文化財専門員 馬 籠 亮 道

事務担当 〃 主査 荒 瀬 勝 己
 〃 事業推進員 川 崎 麻 衣

調査の委託

委託先 株式会社島田組
 主任技術者 山 本 隆 広
 主任調査支援員 宮 下 貴 浩
 調査支援員 大 橋 裕 子
 調査支援員 清 岡 廣 子
 (～8月)
 調査支援員 丹 生 泰 雪
 (9月～)

委託内容 発掘調査支援業務
 測量業務
 土工業務

検査 中間検査：平成29年11月22日
 完成検査：平成30年2月23日(実地検査)
 完成検査：平成30年3月6日(成果物検査)

平成30年度(直営)

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 (公財)鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

〃 センター長 前 迫 亮 一
 調査企画 〃 総務課長兼係長 中 村 伸一郎
 〃 調査課長 中 原 一 成
 〃 調査第三係長 三 垣 恵 一
 調査担当 〃 文化財専門員 楸 田 岳 志
 〃 文化財専門員 本 高 謙 治
 〃 文化財調査員 大 坪 啓 子
 事務担当 〃 主査 小 牧 智 子
 〃 事業推進員 塩 屋 奈 諸 美

3 調査の経過(日誌抄より)

本調査について、日誌抄を月ごとに集約して記した。なお、ここでは、A地点についてのみ記している。

平成26年度

5月 F～J35～38区 表土掘削。C～E32～34区 表土掘削、IV層遺構検出及び掘削、V a層遺構検出。B～E35～38区、H～K34・35区 表土掘削、IV層遺構検出及び掘削。
 6月 C～E32～34区 V a層遺構検出及び掘削。B～E35～38区 IV層遺構検出及び掘削、V a層遺構検出及び掘削。H～K34・35区、F～J35～38区 IV層遺構検出及び掘削。G32～34区 表土掘削、IV層遺構検出及び掘削。
 7月 H～K33・34区、F～J35～38区 IV層遺構検出及び掘削。D～G35・36区 表土掘削、IV層遺構

検出及び掘削。

- 8月 B～E35～38区 V層遺構検出。F～H35～38区 IV層遺構検出及び掘削。G32～34区 IV層遺構検出及び掘削，V a層遺構検出。F・G38・39区 V a層遺構検出及び掘削。G～I35～38区 V a層遺構検出及び掘削。
- 9月 G～I35～38区 V a層遺構掘削。D～G35～37区 IV層遺構掘削，V a層遺構検出及び掘削。
- 10月 I～K33・34区 IV層包含層掘削。C～K35～38区 V a層遺構検出及び掘削。G32～34区 IV層遺構検出及び掘削。D～G35～37区 IV層遺構検出及び掘削，V a層遺構検出及び掘削。
- 11月 D～K35～38区 IV層包含層掘削，V a層遺構検出及び掘削。F・G39・40区 IV層遺構検出及び掘削，V a層遺構検出及び掘削。
- 12月 D36・37区，I～K35～38区 IV層遺構検出及び掘削，V a層遺構検出。E～I35～38区 IV層遺構検出及び掘削。
- 1月 E～H36～38区 IV層遺構検出及び掘削，V a層遺構検出。D～G32～34区 V a層遺構検出。

平成27年度

- 5月 G～K34・35区 V a層遺構検出及び掘削。B～D32～35区 表土掘削，V a層遺構検出及び掘削。B～G31区 表土掘削，V a層遺構検出。
- 6月 G～K34・35区 V a層包含層掘削。B～G31区 V a層遺構検出及び掘削。
- 7月 G32・33区 IV層包含層掘削，V a層遺構検出及び掘削，V層包含層掘削。E～K32～35区 V a層遺構掘削，V a層包含層掘削，集石検出。B～D32～35区 V a層遺構掘削（古墳時代）。
- 8月 F・G32・33区 V a層包含層掘削。I・J35区 V a層包含層掘削，集石検出。B～G31区 V a層遺構掘削。
- 9月 B～D32～35区 V a層遺構掘削（古墳時代）。
- 10月 6日 空撮。
- 11月 B～G31～35区 V a層遺構掘削（古墳時代）。
- 12月 A～F31～35区 無遺物層掘削。
- 1月 A～F31～35区 無遺物層掘削。
- 2月 B～E32・33区 V c層無遺物層掘削。

平成28年度

- 5月 B31～35区，C・D31～35区，E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区 無遺物層掘削，VI層包含層掘削。B26区，C～E25・26区 表土掘削，IV・V a層遺構検出及び掘削，IV層包含層掘削。F24・25区，G24～26区，H～K23～26区 表土掘削。
- 6月 B～D31～35区 VII層包含層掘削，VIII層遺構検出及び掘削，IX層（旧石器）包含層掘削。E～G31

～35区，G・H34・35区，I～K33～35区 VII層包含層掘削。F24・25区，G24～26区，H～K23～26区，IV層包含層掘削。

- 7月 E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区 先行トレンチ掘削。K・L32～36区，M32～35区 表土掘削。B26区，C～E25・26区 VI～VIII層包含層掘削，先行トレンチ掘削。
- 8月 B～D31～35区 IX・X層包含層掘削。E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区 VIII～X層包含層掘削。K・L32～36区，M32～35区 IV・V層包含層掘削。B26区，C～E25・26区 表土掘削，IV層包含層掘削。F24・25区，G24～26区，H～K23～26区 V～VII層包含層掘削。J～L23～26区，M24～27区 表土掘削，III・IV層包含層掘削。
- 9月 B31～35区，C・D31～35区，E～G31～35区，G・H34・35区，I～K33～35区 IX・X層包含層掘削。G・H32～34区，I・J33・34区 表土掘削，V層遺構検出。B26区，C～E25・26区 V～VII層包含層掘削。
- 10月 G・H32～34区，I・J33・34区 V層遺構掘削。B26区，C～E25・26区 VI～VIII層包含層掘削。J～L23～26区，M24～27区 IV層包含層掘削。
- 11月 K・L32～36区，M32～35区 VI層包含層掘削。G・H32～34区，I・J33・34区 IV・V層遺構掘削。B～F27区 表土掘削，IV層包含層掘削。J～L23～26区，M24～27区 V層包含層掘削。F～L27区 IV・V層包含層掘削。B～F28～31区，G28～31区 表土掘削，IV層包含層掘削。
- 12月 K・L32～36区，M32～35区 VI層包含層掘削。G・H32～34区，I・J33・34区 V層包含層掘削。B～F27区 IV層包含層掘削・遺構掘削。J～L23～26区，M24～27区 V層包含層掘削。F～L27区 IV～VII層包含層掘削，VIII層遺構検出及び掘削。B～F28～31区，G28～31区 IV層包含層掘削・遺構掘削。
- 1月 K・L32～36区，M32～35区 VII層包含層掘削。G・H32～34区，I・J33・34区 V a層遺構掘削。B～G30・31区 IV層包含層掘削・遺構掘削。

平成29年度（直営）

- 5月 B～G26～31区 V a層遺構検出及び掘削。F27区，G28～30区 表土掘削。B・C27～29区，F・G26・27区，G～I29～31区，I27区，J～L27～31区 V層遺構検出及び掘削。
- 6月 8日 空撮。
F・G26・27区 V c～VI層遺構検出及び掘削。F～K27・28区 VI層包含層掘削。H29区，H～J30区 表土掘削，V層遺構検出及び掘削。

G～I 32～34区 VI層包含層掘削。G～I 32・33区 VII a層包含層掘削。

7月 G～K 32・33区 VII a層包含層掘削。G～K 32・33区 VII b層包含層掘削。L・M 32区 IX層包含層掘削。

8月 B～E 27・28区 VI層包含層掘削。G～I 31区表土掘削。G 33区, K 32・33区 VII b層包含層掘削。H～M 32・33区 IX層包含層掘削。G～I 32区, K 32区 先行トレンチ掘削 (IX層以下)。

9月 F 27区, J 30区 VI層包含層掘削。B～E 27・28区, J～L 28～32区 VI～VII層包含層掘削。E・F 29～31区 V a層包含層掘削。

10月 B～L 27区, B 27・28区, B～D 28区, I 28区先行トレンチ (旧石器)。C・D 28区 VIII層遺構検出。H 27区 IX層包含層掘削。H 28区 VI～IX層包含層掘削。H 30区 VI層包含層掘削。I 29・30区 VI～IX層包含層掘削。I 29・30区 V層包含層掘削。I 31区 IX層包含層掘削。J 27区 VI～IX層包含層掘削。J 28区 VI・VII層包含層掘削。J 29区 V～VII層包含層掘削。

11月 E・F 28区 V層包含層掘削。H～J 29・30区, H・I 30区 V～VII b層包含層掘削, 遺構検出及び掘削。I～K 27区, J～L 28～30区, J・K 31区 IX層包含層掘削。

12月 E・F 28区 V層包含層掘削。H 29・30区 VI・VII層包含層掘削。I 27区, I～L 28～30区, K 27区, K 31区 IX層包含層掘削。

1月 B・C 30区, D 29・30区, E・F 28～30区 VI・VII層包含層掘削。K 30区, L 31区 IX層包含層掘削。F 28・29区, G 29区 確認トレンチ掘削 (旧石器)。B 29～31区, E～H 29～31区 VII層包含層掘削。

2月 D 30区, B～F 31区, H 31区 IX層掘削。I 30・31区 VI層包含層掘削。B～D 28区 確認トレンチ掘削 (旧石器)。

3月 遺物洗浄・整理。9日 作業終了。

平成29年度 (民活)

5月 G・H 31～34区, I・J 31～33区 V b層無遺物層掘削, VI・VII層包含層掘削・遺構検出及び掘削。K・L 33区 VII・VIII層包含層掘削・遺構検出及び掘削。K・L 32・34～36区, M 32・34・35区先行トレンチ掘削 (IX層)。遺物仕分け。

6月 G・H 31～34区, I 31～33区 VI層包含層掘削。J 31～33区 VI・VII層包含層掘削・遺構検出及び掘削。K・L 33区 VIII層包含層掘削・遺構検出及び掘削。K・L 32・34～36区, M 32・34・35区 VIII・IX層包含層掘削・遺構検出及び掘削。J 35区, K 34～36区, L 34・35区 VIII～X層包含層掘削・遺構検出及び掘削。遺物仕分け, 遺物洗浄, 遺物収納箱作成。

7月 J 35区, K～M 32・33区 VIII・IX層包含層掘削・遺構検出及び掘削。J 33・34区, L～M 32～34区 IX層包含層掘削・遺構検出及び掘削。K～M 33区 IX～X II層先行トレンチ掘削・遺構検出及び掘削。遺物収納箱作成, 遺物仕分け, 遺物洗浄。

8月 K 34～36区, L 34・35区 VIII～X層包含層掘削, 遺構検出及び掘削。L・M 33区 IX～X II層トレンチ掘削, 遺構検出及び掘削。遺物収納箱作成, 遺物仕分け, 遺物洗浄。

9月 遺物収納箱作成, 遺物仕分け, 遺物洗浄。

10月 遺物収納箱作成, 遺物仕分け, 遺物洗浄。

11月 F 28・29区, G 27・28区 古墳時代遺構検出及び掘削, 遺物収納箱作成, 遺物仕分け, 遺物洗浄。

12月 F 28・29区, G 27・28区 古墳時代遺構検出及び掘削, 遺物収納箱作成, 遺物仕分け, 遺物洗浄。

1月 26日 A地点調査終了。遺物仕分け。

第4節 整理・報告書作成

A地点に係る整理・報告書作成の基礎整理作業は, 平成27年度, 平成29年度～令和元年度に実施した。令和元年度～令和2年度には, 旧石器時代縄文時代草創期編の報告書作成作業を実施し, 令和2年度には, 縄文時代早期・前期・古代・中世編の報告書作成作業を実施した。平成27年度は, 平成27年5月11日～平成27年1月22日まで, 平成29年度は, 平成29年4月19日～平成30年3月9日まで, 平成30年度は, 平成30年5月7日～平成31年2月15日まで, 令和元年度は, 令和元年5月7日～令和2年2月14日まで作業を実施した。令和2年度は, 令和2年5月7日～令和3年2月12日まで作業を実施した。

1 概要

基礎整理作業は, 文化財課から委託を受けた埋文調査センターが実施することとなり, 大福コンサルタント株式会社へ他遺跡分と合わせて, 基礎整理作業の遺物洗浄・注記を部分業務として委託した。

平成29年度

埋文調査センターが基礎整理作業を実施した。遺物洗浄・注記・分類・実測等の業務を実施した。

平成30年度

基礎整理作業を福山中学校跡に新設した埋文調査センター第2整理作業所で行った。また, 大福コンサルタント株式会社に集石トレース, 石器実測を委託した。

令和元年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステムにA地点の旧石器時代～縄文時代草創期の報告書作成業務を委託した。

令和2年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステムにA地点の旧石器時代～縄文時代草創期編の編集作業等の報告書作成業務を委託した。

2 調査体制

平成27年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 (公財) 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃 センター長 堂 込 秀 人
調査企画 〃 総務課長兼係長 有 村 貢
〃 調査課長 八木澤 一 郎
〃 調査第二係長 寺 原 徹
作成担当 〃 文化財専門員 岩 永 勇 亮
事務担当 〃 主査 荒 瀬 勝 己
調査の委託
委託先 大福コンサルタント株式会社
調査支援員 岩 下 直 樹
調査支援員 長 濱 武 史
調査支援員 川 俣 幸 次
調査支援員 倉 本 るみ子

委託内容 基礎整理作業 (遺物洗浄・注記)

平成29年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 (公財) 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃 センター長 前 迫 亮 一
調査企画 〃 総務課長兼係長 中 村 伸一郎
〃 調査課長 中 原 一 成
〃 調査第三係長 福 永 修 一
作成担当 〃 文化財専門員 岩 永 勇 亮
〃 文化財調査員 中 村 有 希
〃 文化財調査員 北 園 和 代
(平成29年12月～平成30年11月)
事務担当 〃 主査 荒 瀬 勝 己
〃 事業推進員 川 崎 麻 衣

平成30年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 (公財) 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃 センター長 前 迫 亮 一

調査企画 〃 総務課長兼係長 中 村 伸一郎
〃 調査課長 中 原 一 成
〃 調査第三係長 三 垣 恵 一
作成担当 〃 文化財専門員 山 形 敏 行
〃 文化財調査員 中 村 有 希
事務担当 〃 主査 小 牧 智 子
〃 事業推進員 塩 屋 奈 諸 美

令和元年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 (公財) 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃 センター長 中 原 一 成
調査企画 〃 総務課長兼係長 中 島 治
〃 調査課長 寺 原 徹
〃 調査第三係長 横 手 浩二郎
作成担当 〃 文化財専門員 岩 永 勇 亮
〃 文化財専門員 山 形 敏 行
事務担当 〃 主査 有 川 剛 弘
〃 主事 上 園 慶 子
遺物指導 南山大学人文学部
教授 大 塚 達 朗
調査担当

委託先 株式会社埋蔵文化財サポートシステム

主任調査支援員 島 内 浩 輔
調査支援員 松 崎 卓 郎
調査支援員 坂 井 靖 奈
調査支援員 中 村 耕 治
調査支援員 礪 村 康 行
調査支援員 富 永 朋 実
委託内容 整理作業及び報告書作成業務
検査 中間検査：令和元年10月18日
完成検査：令和2年3月4日 (成果物検査)

令和2年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 (公財) 鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃 センター長 中 原 一 成
調査企画 〃 総務課長兼係長 中 島 治
〃 調査課長 寺 原 徹
〃 調査第三係長 黒 川 忠 広
作成担当 〃 文化財専門員 岩 永 勇 亮
〃 文化財専門員 肥 後 弘 章
事務担当 〃 主査 有 川 剛 弘
〃 主事 上 園 慶 子

調査担当

委託先 株式会社埋蔵文化財サポートシステム

主任調査支援員 松崎 卓郎

調査支援員 中田 裕樹

調査支援員 坂井 靖奈

調査支援員 本村 実季子

調査支援員 井手 基子

調査支援員 富永 朋実

委託内容 整理作業及び報告書作成業務

検査 中間検査：令和2年10月26日

完成検査：令和3年3月4日（成果物検査）

3 調査の経過（日誌抄より）

基礎整理作業については、日誌抄を月ごとに集約して記した。

平成27年度

- 5月 オリエンテーション。遺物洗浄。遺物注記機（ジェットマーカ）による注記作業。土器・石器・礫の一次分類。実測石器の選別。
- 6月 剥片石器の超音波洗浄機による洗浄。遺物洗浄、ジェットマーカによる注記作業。遺物分類。
- 7月 遺物洗浄・ジェットマーカによる注記作業。石器の分類。
- 8月 遺物洗浄・ジェットマーカによる注記作業。石器の分類。礫の計測。遺物洗浄完了。
- 9月 ジェットマーカによる注記作業。土器・石器・鉄滓の分類。重要遺物選別。礫の計測・仕分作業。図面修正。
- 10月 注記修正。土器・石器・鉄滓の分類。分類石器の整理・収納。礫の計測。青銅製品・鉄製品処理。
- 11月 注記修正。土器・石器・鉄滓分類。包含層遺物分類。竪穴住居跡内出土遺物分類。石器分類・整理・収納。遺物台帳・礫台帳作成。図面修正。コンテナのチェックリスト作成。
- 12月 遺物分類。鉄滓・炭化物・顔料梱包材作成及び梱包、礫梱包、遺物台帳作成、写真撮影、収納作業。
- 1月 遺物台帳作成、台帳パソコン入力、データ確認作業、遺物洗浄、注記、分類作業終了。

平成29年度

- 4月 遺物洗浄、遺物分類、図面整理。
- 5月 遺物洗浄、遺物分類、図面整理、集石観察表作成。
- 6月 遺物洗浄、遺物分類、注記準備、図面整理、集石観察表作成。
- 7月 遺物洗浄、遺物分類、注記、図面整理、集石観察表作成。
- 8月 遺物洗浄、遺物分類、注記、図面整理、集石観察表作成、自然科学分析委託準備（年代測定）。
- 9月 遺物洗浄、遺物分類、注記、図面整理、集石観察

表作成、自然科学分析委託準備（年代測定）。

- 10月 遺物洗浄、遺物分類、注記、図面整理、集石観察表作成、自然科学分析委託準備（年代測定）。
- 11月 遺物洗浄、遺物分類、注記、図面整理、集石観察表作成、自然科学分析委託準備（年代測定）。
- 12月 遺物分類、注記、図面整理、石器実測、自然科学分析委託準備（年代測定）。
- 1月 遺物分類、注記、図面整理、石器実測、自然科学分析委託準備（年代測定）。
- 2月 遺物分類、注記、土器接合、鍛造剥片抽出、自然科学分析委託準備（年代測定）。
- 3月 遺物整理、図面整理。

平成30年度

- 4月 遺物洗浄、遺物分類。
- 5月 遺物洗浄、遺物整理、注記、図面チェック。
- 6月 遺物洗浄、遺物整理、注記。
- 7月 遺物洗浄、遺物整理、注記、写真整理、石器実測委託準備。
- 8月 遺物整理、図面整理、石材分類。
- 9月 遺物整理、接合、注記、台帳チェック。
- 10月 遺物整理、接合、注記。
- 11月 遺物整理、接合、注記、遺物搬入。
- 12月 遺物整理、接合、注記。
- 1月 遺物整理、接合、注記、図面チェック。
- 2月 遺物整理、注記、図面チェック。
- 3月 遺物整理、台帳整理。

令和元年度

- 5月 準備工、土器分類、土器接合、石器分類、石器接合、旧石器遺構検討、台帳入力。
- 6月 土器接合、土器拓本・実測、石器接合、旧石器実測遺物検討・実測。旧石器遺構検討。
- 7月 土器実測、土器拓本、土器分類、土器接合・復元、土器トレース、土器接合、旧石器実測遺物検討・旧石器遺構検討・図版作成・遺構図トレース・修正、原稿執筆・レイアウト。
- 8月 土器実測・拓本、土器トレース、土器復元、旧石器実測遺物検討・準備・実測・実測図確認・トレース・旧石器遺構検討・図版作成・遺構図トレース・修正、原稿執筆・レイアウト。
- 9月 土器実測、土器拓本、土器トレース、土器接合、土器復元、旧石器実測・実測図確認・トレース、旧石器遺構検討・図版作成・遺構図トレース・修正、原稿執筆・レイアウト。
- 10月 土器実測、土器拓本、土器トレース、土器接合、土器復元、旧石器実測・実測図確認・トレース、旧石器遺構検討・図版作成・遺構図トレース修正、原稿執筆・レイアウト、フローテーション。
- 11月 土器実測、土器拓本、土器トレース、土器接合、

- 土器復元，旧石器実測・実測図確認・トレース，分布図作成・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト，フローテーション。
- 12月 土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，土器復元，旧石器実測・実測図確認・トレース，分布図作成・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト，フローテーション。
- 1月 土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，土器復元，旧石器実測・実測図確認・トレース，分布図作成・図版作成・遺構図トレース・修正，原稿執筆・レイアウト，収納作業。
- 2月 土器実測，土器拓本，土器トレース，土器接合，土器復元・図版作成・原稿執筆・レイアウト，収納作業。
- 令和2年度**
- 5月 準備工，土器選別・分類，土器注記・接合，土器実測，石器選別・分類，石器実測，フローテーション。
- 6月 土器選別・分類，土器実測・製図，土器拓本，土器復元，石器選別・分類，石器実測，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆，フローテーション。
- 7月 土器選別・分類，土器実測・製図，土器拓本，土器復元，石器選別・分類，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆，フローテーション。
- 8月 土器選別・分類，土器実測・製図，土器拓本，土器復元，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆。
- 9月 土器選別・分類，土器実測・製図，土器拓本，土器接合・復元，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト・図版作成作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆。
- 10月 土器実測・製図，土器拓本，土器接合・復元，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト・図版作成作業，観察表作成，写真整理作業，原稿執筆，フローテーション。
- 11月 土器実測・製図，土器拓本，土器接合・復元・色塗り，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト・図版作成作業，観察表作成，遺物写真撮影，原稿執筆，編集。
- 12月 土器実測・製図，土器拓本，土器接合・復元・色塗り，石器実測・製図，遺構製図，遺物分布図作成，レイアウト・図版作成作業，観察表作成，遺物写真撮影，原稿執筆，編集，入稿・校正。
- 1月 土器実測，土器拓本，土器接合・復元，石器実測，校正，収納作業。
- 2月 土器実測，土器拓本，土器接合・復元，石器実測，校正，収納作業。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

川久保遺跡は、鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。遺跡の所在する鹿屋市串良町は、大隅半島南部のほぼ中央に位置し、東側では、東串良町、南側に肝属川を挟んで肝付町、西側は、鹿屋市東原町・旭原町・笠之原町、北東は、立小野台地を隔てて曾於郡大崎町と接している。串良町が位置する大隅半島は、九州山地の延長をなす東西の山地と、その間の丘陵、台地及び低地等の地形から形成されている。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地(1,119m)で、中生層の地層からなっている。西側の山地は、北部の霧島火山の山脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み、南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白尾岳・荒磯岳等500～600m級の山々と、南部の大籠柄岳(1,236.8m)を主峰に横岳・御岳等1,000m級の山々から成る山地で、山容は、急峻で深い森林に覆われている。地質は、高隈山周辺に分布する新生代古第3紀の日南層群が基盤をなしている。山地間を埋めるように、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、湾奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は堆積した後、現在に至るまで大小多くの河川で開折されている。大隅半島中央部の地形は、断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面は、ほとんど浸食されずに残った広大な台地で形成されている。一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地等に水源をもつ大小の河川が走り、志布志湾、鹿児島湾等に注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また何段かの河岸段丘も認められる。

第2節 歴史的環境

遺跡周辺の主な遺跡について、時代別に紹介する。

旧石器時代

大隅半島の主に曾於地域においては、これまで旧石器時代の遺跡はあまり知られていなかった。しかし近年東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われるようになり、大隅半島の旧石器時代の様相が明らかになりつつある。特に畦原型細石刃核が出土する遺跡が多く見られ、宮崎県から大隅半島にかけての畦原型細石器文化の広がりが確認されるようになってきた。二子塚A遺跡では、VI層(薩摩火灰)の下層から黒曜石・チャート・鉄石英等の剥片10点が出土している。天神段遺跡では、ナイフ形石器文化期(2期)と細石器文化期の3文化層が確認されている。礫群及び遺物集中域も数多く検出され、石器

製作跡も確認されている。遺物は、ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器及び細石刃核・細石刃等多くの資料が得られている。細石刃核の中には、畦原型細石刃核も見られる。荒園遺跡・次五遺跡・春日堀遺跡では、細石器文化期の遺物が出土しており、畦原型細石刃核を含んでいる。小牧遺跡・見帰遺跡・安楽小牧B遺跡・宮脇遺跡では、ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃核・スクレイパー・剥片等が出土している。その他に榎崎A遺跡・榎崎B遺跡・西丸尾遺跡・白水B遺跡等からは、ナイフ形石器文化期・細石器文化期の遺構や遺物が出土している。

縄文時代

大隅半島においては、縄文時代の遺跡が数多く知られている。特に早期については、その傾向が顕著である。しかし、草創期の遺跡は少なく、最近まで鹿屋市伊敷遺跡・上楠原遺跡・志布志市東黒土田遺跡・鎌石橋遺跡が知られていたのみであったが、近年見帰遺跡・安楽小牧B遺跡・大崎町宮脇遺跡等で、草創期の遺物が出土している。早期では、鹿屋市益畑遺跡の堅穴住居跡が知られていたが、志布志市春日堀遺跡・大崎町天神段遺跡・平良上C遺跡・永吉天神段遺跡・鹿屋市小牧遺跡・牧山遺跡・田原迫ノ上遺跡等で発見が相次いでいる。前期では、牧山遺跡で轟式の埋設土器が特筆される。天神段遺跡では、曾畑式土器に伴う磨製石剣が出土し、西日本最古の石剣であることが判明した。中期の遺跡は少ないが、細山田段遺跡では、200基を超える土坑と深浦式に伴って近畿系の大歳山式・鷹島式、瀬戸内系の船元式等が出土し、広範な交流が窺える。後期では、小牧遺跡において堅穴住居跡と埋設土器・石皿立石等多彩な遺構が検出されている。町田堀遺跡では、中岳Ⅱ式に伴う堅穴住居跡・埋設土器・石斧集積遺構等が出土している。また、2号住居跡からは、櫃原文様を施し、朱や漆が塗られた天附型の石刀が出土している。牧山遺跡では、中岳Ⅱ式の埋設土器が出土し、さらに南九州では珍しい石冠も出土している。晩期では、遺構の検出は少ないが、永吉天神段遺跡で堅穴住居跡や落とし穴が検出され、柿木段遺跡で落とし穴・土坑・石斧埋納遺構等が検出されている。

弥生時代

弥生時代においては、中期の遺跡が圧倒的に多く、前期・後期の遺跡は少ない。前期の土器は出土数も少なく天神段遺跡・町田堀遺跡で高橋式の小破片が出土しているのみである。中期前半では、鹿屋市吉ヶ崎遺跡で焼失家屋が発見され住居内に約10点の完形土器が残されていた。天神段遺跡では、中期前半の incoming 式を伴う住居跡が検出されている。中期中頃になると堅穴住居跡等多くの遺構が検出された王子遺跡をはじめとして集落を形成す

る遺跡が増加している。山ノ口式土器を伴う十三塚遺跡・田原迫ノ上遺跡・牧山遺跡・永吉天神段遺跡・荒園遺跡・安良遺跡等で竪穴住居跡が検出されている。田原迫ノ上遺跡では、掘立柱建物や円形周溝・方形周溝も検出される。牧山遺跡では、青銅製の鑿も出土している。永吉天神段遺跡では、円形周溝墓を中心とした土坑墓群・掘立柱建物が検出され、鉄鏃を副葬した土坑墓も検出されている。後期の遺跡はほとんど見られず鹿屋市高付遺跡・鎮守ヶ迫遺跡で高付式・松ノ尾式が出土している程度である。

古墳時代

大隅半島は、県内でも有数の古墳地帯で、前方後円墳17基、円墳304基が知られている。また、南九州特有の地下式横穴墓も数多く存在する。集落遺跡では、町田堀遺跡で中津野式を伴う住居跡が検出され、小牧遺跡では東原式を伴う大型の住居跡等が検出されている。永吉天神段遺跡・荒園遺跡・春日堀遺跡等でも竪穴住居跡が検出されている。荒園遺跡では、焼失家屋も見られた。志布志湾沿いには、横瀬古墳・唐仁古墳群・塚崎古墳群等の国指定史跡の高塚古墳や地下式横穴墓が多く存在するが、内陸部に高塚古墳は存在しない。代わって立小野堀遺跡では190基、町田堀遺跡では92基の地下式横穴墓が調査されている。また、立小野堀遺跡では、大型の鈴1個と小型の鈴4個がセットで副葬されている地下式横穴墓が2例検出されている。また、愛媛県の市場南組窯産の初期須恵器の大甕も出土しており5世紀前半の最古段階の地下式横穴墓の可能性も考えられている。町田堀遺跡では、円形周溝や弧状周溝を伴う地下式横穴墓や切り合い関係にある地下式横穴墓が見られる。また、立小野堀遺跡・町田堀遺跡では、墓の造られていない空間で大量の土器破片が出土し、土器破碎を伴う祭祀が行われた可能性も考えられている。

古代

大隅半島では、古代の所産と思われる須恵器や土師器は出土しているが、遺構を伴う遺跡が少ないのが現状である。鹿屋市宮ノ脇遺跡では、青銅製の帯金具(丸軛)が出土しており、有位者の存在が窺える。肝付町波見西遺跡では、掘立柱建物や土師器の坏や椀がまとまって大量に置かれた遺構が検出されている。肝付町の西山ノ上遺跡では、採集品ではあるが須恵器の風字硯が出土しており識字者がいたことが想定される。永吉天神段遺跡では、掘立柱建物や土坑が検出されている。荒園遺跡では、埋土中に開聞岳起源の紫コラ(AC874年)を含む片葉研堀が検出されている。春日堀遺跡では、掘立柱建物や竪穴建物・溝状遺構等が検出されている。溝状遺構の最下部からは土器や須恵器が多く出土し埋土中に紫コラを含んでいることが確認されている。天神段遺跡では、掘立柱建物・竪穴状遺構・土坑・炉跡・焼土跡等が検出さ

れ、土師器には、墨書土器・刻書土器・焼塩壺が含まれる。

中世・近世

川久保遺跡の北側には、北原城跡があり、その他細山田城跡・霧島城跡にも近接している。城跡で調査が行われている鹿屋市稲村城跡では、土師器・青白磁・備前焼・東播系陶器等が出土している。天神段遺跡では、掘立柱建物跡・溝・古道・鍛冶遺構が検出され、土坑墓も検出されている。1号土坑墓は、青磁椀・白磁皿・青白磁小壺・和鉄・毛抜き・和鏡・銅銭・入れ子状態の滑石製石鍋と鉄製の紡鐘車等、豊富な副葬品を有するものである。小牧遺跡では、掘立柱建物跡・竪穴建物・溝状遺構等が検出され、青磁・白磁・土師器・東播系陶器等が出土している。永吉天神段遺跡では、掘立柱建物跡・土坑墓・大型土坑・火葬土坑が検出され、青磁・白磁・東播系陶器・滑石製石鍋・銅鏡等が出土している。

〈参考・引用文献〉

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書は、鹿児島埋文報、(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターは、(公財)鹿児島埋文調査センター、(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書は、公財鹿児島埋文調七報に略することとした。

鹿児島県教育委員会2005「二子塚A遺跡」鹿児島埋文報189

(公財)鹿児島埋文調査センター2014・2015・2017「天神段遺跡1・2・3・4」

公財鹿児島埋文調七報3・6・18・19

(公財)鹿児島埋文調査センター2016「荒園遺跡1」公財鹿児島埋文調七報12

(公財)鹿児島埋文調査センター2018「見帰遺跡」公財鹿児島埋文調七報23

瀬戸口望1981「東黒土田遺跡」鹿児島考古15号

河口貞徳1982「鎌石橋遺跡」鹿児島考古16号

串良町教育委員会「益畑遺跡」串良町埋文報11

(公財)鹿児島埋文調査センター2018「平良上C遺跡」公財鹿児島埋文調七報11

(公財)鹿児島埋文調査センター2015・2016・2017・2018「永吉天神段遺跡1・2・3・4」公財鹿児島埋文調七報8・13・17・22

(公財)鹿児島埋文調査センター2016「牧山遺跡1」公財鹿児島埋文調七報14

(公財)鹿児島埋文調査センター2015・2016「田原迫之上遺跡1・2」公財鹿児島埋文調七報5・15

(公財)鹿児島埋文調査センター2015・2017「町田堀遺跡1・2」公財鹿児島埋文調七報7・20

鹿児島県教育委員会1984「王子遺跡」鹿児島埋文報34

鹿児島県教育委員会2010「石釜・十三塚遺跡」鹿児島埋文報164

鹿屋市教育委員会1984「高付遺跡」鹿屋市埋文報2

(公財)鹿児島埋文調査センター2015・2016「田原迫之上遺跡1・2」公財鹿児島埋文調七報5・15

(公財)鹿児島埋文調査センター2016「立小野堀遺跡1」公財鹿児島埋文調七報16

鹿屋市教育委員会1986「宮の脇遺跡」鹿屋市埋文報4

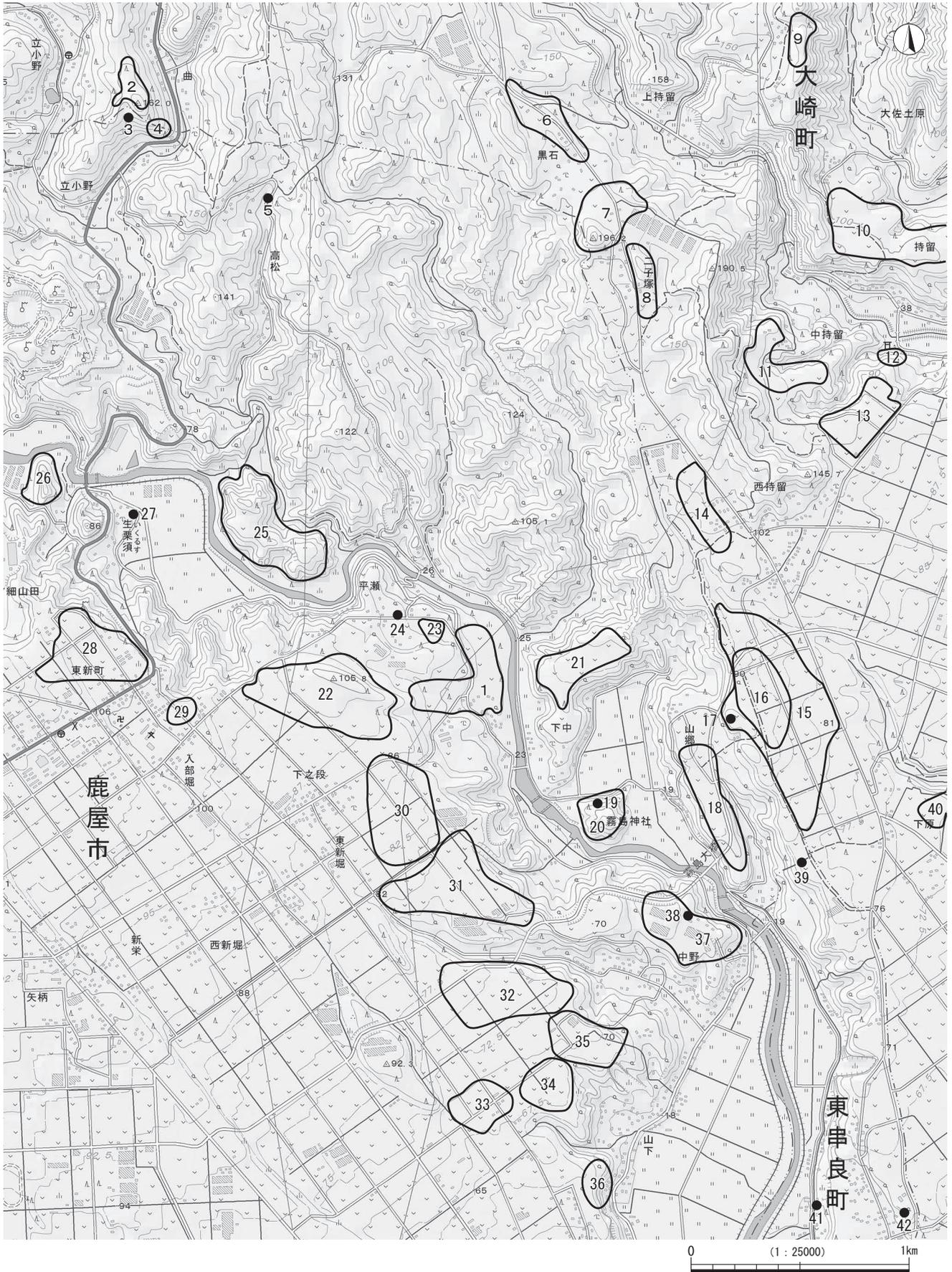
高山町教育委員会1986「波見西遺跡」高山町埋文報3

串良町教育委員会1994「稲村城跡」串良町埋文報4

高山町教育委員会1997「高山郷土誌」

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺構台帳番号		遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	203	349	川久保遺跡	鹿屋市串良町細山田川久保	河岸段丘	旧石器時代, 縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世, 近世	本報告書
2	468	43	遠見ヶ丘遺跡	曾於郡大崎町野方上立小野・曲迫	台地	中世	
3	203	293 294	立小野A・B遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文時代	
4	203	299	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地		
5	203	296	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生時代	
6	468	6	二子塚A遺跡	曾於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器時代, 縄文時代(早・晩), 弥生時代, 古墳時代	平成11年度本調査
7	468	4	二子塚B遺跡	曾於郡大崎町持留・野方二子塚	台地	縄文時代, 弥生時代	
8	468	22	二子塚C遺跡	曾於郡大崎町持留二子塚	台地	弥生時代(中・後～終末)	
9	468	18	大佐土原遺跡	曾於郡大崎町野方大佐土原	山地	弥生時代(中)	
10	468	116	佐土原遺跡	曾於郡大崎町野方佐土原	台地	縄文時代, 古墳時代	
11	468	26	栢山城跡	曾於郡大崎町持留栢山	台地	弥生時代, 古墳時代, 中世	別称「山ノ城」, 推定
12	468	2	川上神社遺跡	曾於郡大崎町持留貫ノ下	山腹段斜面	縄文時代(後)	
13	468	67	持留牧遺跡	曾於郡大崎町持留牧・東尾ノ花	台地	縄文時代, 古墳時代	平成9年度農政分布調査
14	468	117	茶ノ木遺跡	曾於郡大崎町持留茶ノ木上	台地	古墳時代	
15	468	52	細山田段遺跡 (京の塚遺跡)	曾於郡大崎町細山田段・茶ノ木	台地	縄文時代(早～晩)	平成25～27年度本調査
16	203	304	細山田段遺跡	鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文時代(後・晩), 弥生時代(前), 古墳時代	平成8年度農政分布, 平成11年度農政分布で拡大
17	203	325	京の塚古墳	鹿屋市串良町細山田下中京の塚	台地	古墳時代	
18	203	351	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	台地	縄文時代, 弥生時代	
19	203	292	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	洞穴	縄文時代	
20	203	334	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
21	203	350	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	旧石器時代, 縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世	平成27～29年度本調査
22	203	300	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	縄文時代(後・晩), 弥生時代(中), 古墳時代	平成25～29年度本調査
23	203	352	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳時代	
24	203	344	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世(鎌倉末)	
25	203	329	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世(南北朝)	
26	203	335	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	203	298	生栗須遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生時代	
28	203	295	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生時代, 古墳時代	平成25～29年度本調査
29	203	346	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生時代, 古墳時代	
30	203	347	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文時代	
31	203	348	是ヶ迫遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文時代, 弥生時代	
32	203	354	瓜々良蒔遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	台地	弥生時代	平成12年度本調査
33	203	357	熊ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文時代, 弥生時代	
34	203	356	戸場遺跡	鹿屋市串良町有里戸場	台地	弥生時代	
35	203	355	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生時代, 古墳時代	
36	203	323	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳時代	
37	203	353	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生時代	
38	203	324	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚	台地	古墳時代	
39	482	10	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳時代	
40	468	103	下原遺跡	曾於郡大崎町持留	台地	縄文時代(後), 弥生時代, 古墳時代	
41	482	29	岩弘上偶善寺跡古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世(室町)	
42	482	9	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳時代	



第1図 周辺遺跡位置図

第3節 東九州自動車道関連の遺跡

東九州自動車道については、平成26年度に鹿屋串良 JCT～加治木 JCT間が開通している。現在、志布志 IC～鹿屋串良 JCT間で工事が行われている。この区間

では、23遺跡が存在し、平成30年度までに20遺跡で本調査が行われている。ここでは、これらの遺跡の概要を第2～5表にまとめ記載する。詳細は、報告書等を参照して頂きたい。

第2表 東九州自動車道関連（志布志 IC～鹿屋串良 JCT間）遺跡一覧表①

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 H25・30年度 に埋文セン ター調査(隣 接地)	H30年度 刊行 R2年度 隣接地刊行予 定	旧石器	—	ナイフ形石器, 細石刃, 使用痕剥片, 磨石, 叩石, 敲石
					縄文早期	土坑	石坂式, 押型文, 下剥峯式, 石鏃, 磨石, 石皿
					縄文前・中期	落とし穴, 土坑	
					縄文後・晩期	—	磨消縄文, 丸尾式, 西平式, 中岳Ⅱ式, 磨石, 敲石
縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は、土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が2基検出されている。溝状遺構1号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。							
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	縄文早・後期	土坑, 集石	小牧3A, 西平式, 丸尾式
					弥生中期	竪穴建物跡	山ノ口式
					古墳時代	竪穴建物跡, 地下式横穴墓, 溝状遺構	笹貫式, 鉄鏃, 鉄鐮, 須恵器
					古代～中世	帯状硬化面, 掘立柱建物跡, 竪穴建物跡, 土坑, 土坑墓, 柱穴他	土師器, 須恵器, 青磁, 白磁, 滑石製石鍋, 炭化米塊
近世	土坑, 柱穴	—					
古墳時代後半期と中世を中心とした遺跡である。中世前半の炭化米塊は県内最古の事例として注目される。							
4	水神松	志布志市 志布志町 安楽 安楽川左岸 標高約3m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
5	安楽小牧B	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	—	ナイフ形石器, 細石刃核, 細石刃
					縄文草創期	集石	土器片, 黒曜石剥片, 磨石, 敲石, 石皿
					縄文早期	集石	吉田式, 妙見・天道ヶ尾式, 塞ノ神A式, 塞ノ神B式, 苦浜式, 耳栓, 石鏃, 磨石, 異形石器
					弥生	—	弥生土器, 石包丁
起伏のある地形に立地し、縄文時代早期を中心に旧石器時代、縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が認められる。また、塞ノ神式土器の壺形土器や、耳栓, 異形石器, 円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが、これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。※遺跡GISの変更に伴い、遺跡名を「小牧古墳群」から「安楽小牧B」に変更。							
6	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了 ※志布志市教 育委員会調査	H29年度 刊行 ※志布志市教 育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核, 細石刃, 剥片
					縄文早期	落とし穴, 連穴土坑, 土坑, 集石, 磨石集積	前平式, 加栗山式, 吉田式, 札ノ元Ⅶ類, 石坂式, 中原Ⅴ式, 下剥峯式, 桑ノ丸式, 押型文, 手向山式, 塞ノ神B式, 打製・磨製石鏃, 石鏑, 局部磨製石斧
旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は、細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被破砕礫が多量に出土した点である。							
7	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
8	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了		縄文早期	竪穴建物跡, 集石, 土器集中, 連穴土坑, 土坑	前平式, 加栗山式, 吉田式, 石坂式, 下剥峯式, 押型文, 石鏃, 石匙, 磨石, 敲石
					縄文中・後期	—	春日式, 凹線文系土器
					古墳～古代	—	須恵器
					中世	掘立柱建物跡, 杭列状遺構	須恵器, 土師器, 青磁, 白磁, 滑石製石鍋片, 鉄製品, 鉄滓
縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の竪穴建物跡, 連穴土坑, 集石, 中世の掘立柱建物跡等が発見され、遺物では縄文時代早期の土器, 石器, 石匙, 磨石・敲石の他, 中・後期の土器, 古墳～古代の須恵器, 土師器, 中世の青磁, 白磁, 滑石製石鍋片, 鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象(噴砂跡)が確認されている。							
9	田尾下	志布志市 有明町 野井倉 菱田川右岸 標高約5m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				

第3表 東九州自動車道関連（志布志IC～鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表②

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
10	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 R元年度 R2年度 作業中	縄文早期	竪穴建物跡、連穴土坑、集石、土坑、土器集中、炭化物集中、落とし穴	前平式、加栗山式、石坂式、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、手向山式、塞ノ神式、打製石鏃、打製・環状石斧、トトロ石器、磨石、台石、石皿、砥石、穿孔円礫
					弥生	竪穴建物跡	山ノ口式
					古墳～飛鳥	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、棒状礫集積遺構	甕（東原式、笹貫式）、壺、埴、高坏、須恵器高坏、棒状礫、磨製石鏃片
					古代～中世	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑墓、杭列跡、焼土跡	土師器
					近世	土坑、溝状遺構、古道、遺物集中	陶器、磁器
縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴建物跡、連穴土坑、集石、落とし穴、弥生時代の竪穴建物跡、古墳・飛鳥時代の竪穴建物跡（焼失住居跡含む）、掘立柱建物跡、溝状遺構、中世の掘立柱建物跡、堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器、打製石斧、環状石斧、トトロ石器等をはじめ、弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。							
11	牧ノ上B	志布志市 有明町 野井倉 台地上 標高約47m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
12	稲荷堀	曾於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約50m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
13	平良上C	曾於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H28年度 刊行	縄文早期	竪穴建物跡、連穴土坑、集石、埋設土器、チップ集中	吉田式、石坂式、下剥峯式、押型文、平楕式、石鏃、石匙、打製・磨製石斧、扁平打製石斧、磨石、石皿、礫石器、石核
					縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴建物跡、連穴土坑、集石、土坑が検出されている。遺物は、縄文時代早期の土器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。		
14	宮脇	曾於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	礫群	ナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器、細石器、石核、スクレイパー、搔器、使用痕剥片、磨石、叩石
					縄文早期	集石、土坑、土器集中	加栗山式、小牧3A、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、平楕式、塞ノ神式、打製石鏃、磨石
					近世	—	薩摩焼、寛永通宝
旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では、石器製作に関連すると考えられる石核、フレイク、チップ等が出土している。縄文時代早期では、集石、土坑、土器集中、ビットと土器、石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。							
15	堂園堀	曾於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
16	荒園	曾於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H28年度 (第1地点) 刊行 H30年度 R元年度 R2年度 (第2地点) (第3地点) 作業中	旧石器	—	蛙原型細石核・細石刃、敲石
					縄文早期	集石、土坑、剥片・チップ集中	前平式、吉田式、加栗山式、下剥峯式、押型文、手向山式、平楕式、塞ノ神式、苦浜式、条痕文、壺形土器、石鏃、スクレイパー、石匙、耳栓、打製・磨製石斧、磨石、石皿
					弥生中期	竪穴建物跡、土坑	吉ヶ崎式、山ノ口式、磨製石鏃未製品、砥石
					古墳	竪穴建物跡	成川式、須恵器、砥石
					古代以前	片葉研堀溝状遺構	—
					中世	掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、帯状硬化面	土師器、東播系須恵器、備前焼、陶器、青磁、華南三彩
近世以降	帯状硬化面	薩摩焼					
縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡、古代以前の片葉研堀、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。							

第4表 東九州自動車道関連（志布志IC～鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表③

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
17	永吉天神段	曾於郡大崎町永吉台地縁辺及び河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H27年度(第1地点)刊行 H28年度(第2地点1)刊行 H29年度(第2地点2)刊行 H30年度(第3地点)刊行 H31年度(第2地点3)刊行	旧石器	礫群, ブロック	尖頭器, ナイフ形石器, 台形石器, 剥片
					縄文早期	集石, 土器埋設遺構	前平式, 加栗山式, 吉田式, 手向山式, 下剥峯式, 押型文, 平椀式, 壺ノ神式, 苔浜式, 条痕文, 石鏃, 石匙, 石斧, 磨石, 敲石, 石皿
					縄文前期	—	曾畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式, 北久根山式, 中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴建物跡, 落とし穴, 土坑	入佐式, 黒川式, 刻目突帯文, 管玉, 打製石斧
					弥生	竪穴建物跡, 掘立柱建物跡, 円形周溝墓, 土坑墓群, 土坑	入来式, 山ノ口式, 黒髪式, 鉄鏃, 磨製石鏃, 管玉
					古墳	竪穴建物跡, 土坑	成川式, 須恵器
					古代	掘立柱建物跡, 土坑	須恵器, 土師器
					中世	掘立柱建物跡, 土坑墓, 地下式坑, 火葬土坑, 土坑	白磁, 青磁, 土師器, 瓦質土器, 東播系須恵器, 備前焼, 常滑焼, 湖州六花鏡, 砥石, 石塔, 古銭
					近世	近世墓	薩摩焼, 染付, 寛永通宝, 石臼
時期不明	掘立柱建物跡	—					
<p>旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から、国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁, 青磁, 瓦質土器, 東播系須恵器等が多量に出土した。また、地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。</p>							
18	細山田段	曾於郡大崎町西持留台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 R元年度 (1)刊行 R2年度 刊行	縄文早期	集石, 埋設土器	吉田式, 石坂式, 下剥峯式, 桑ノ丸式, 中原式, 押型文, 平椀式, 壺ノ神式, 苔浜式, 右京西式, 打製石鏃, 石匙, 磨・敲石, 石核
					縄文前期～中期初頭	土坑, 土器集中	曾畑式, 深浦式, 大歳山式, 鷹島式, 船元式, 打製石鏃, 石匙, 石鏃, スクレイパー, 二次加工剥片, 磨石, 敲石, 石皿, 石核
					縄文後期	土坑	辛川式, 丸尾式, 西平式, 中岳Ⅱ式, 打製石鏃, 石匙, 石鏃, スクレイパー, 磨・敲石, 打製石斧, 磨製石斧, 石皿
					縄文晩期	—	入佐式, 黒川式
					弥生前期	—	高橋式
					古墳	—	成川式
					近世以降	溝状遺構・古道	—
<p>縄文時代前期から中期初頭を中心に、縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深浦式土器, 近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器, 瀬戸内地方の船元式土器などが出土し、当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。</p>							
19	小牧	鹿屋市串良町細山田台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R2年度 作業中	旧石器	—	細石刃
					縄文早期	竪穴建物跡, 連穴土坑, 土坑, 集石	前平式, 吉田式, 石坂式, 下剥峯式, 平椀式, 条痕文, 石匙, 磨石, 石皿
					縄文前期	—	曾畑式, 深浦式, 磨石
					縄文後期	竪穴建物跡, 石皿立石遺構, 伏壺, 石斧集積遺構, 集石, 土坑	阿高式系, 岩崎上層式, 指宿式, 市来式, 石鏃, 横刃型石器, 打製石斧, 磨石, 石皿, 大珠
					縄文晩期	—	入佐式, 黒川式, 刻目突帯文
					弥生中期	—	入来式, 山ノ口式, 砥石
					古墳	竪穴建物跡, 礫集積, 土器溜, 土坑	東原式, 辻堂原式, 布留系土器, 須恵器, 鉄鏃, 鉄製品, 敲石, 勾玉, 軽石加工品
					古代	掘立柱建物跡, 焼土跡, 溝状遺構, 土坑	土師器, 須恵器, 墨書土器, 鉄器, 土錘, 焼塩土器, 土製紡錘車
中世以降	掘立柱建物跡, 土坑, 石組遺構, 溝状遺構, 杭列	土師器, 東播系須恵器, 白磁, 青磁, 墨書土器, 石鍋, 合子, 輪羽口, 刀子, 鉄製紡錘車, 焙烙, 古銭, 薩摩焼					
<p>旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落, 後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他、古墳時代の花弁形住居跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。</p>							

第5表 東九州自動車道関連（志布志IC～鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表④

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
20	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H27年度 H29年度 H30年度 (C地点) 刊行 R元年度 R2年度 (A,B,D地 点) (1)(2)刊行 作業中	旧石器	礫群	剥片尖頭器, ナイフ形石器, 蛙原型細石核
					縄文早期	堅穴建物跡, 集石, 土坑	岩本式, 前平式, 志風頭式, 加栗山式, 吉田式, 倉園B式, 石坂式, 下剥峯式, 押型文, 壱ノ神式, 苦浜式, 轟A式, 石鏃, 打製石斧, 石皿
					縄文前期	集石	曾畑式, 磨製石斧
					縄文後期	—	中岳式
					縄文晩期	集石	入佐式, 黒川式, 刻目突帯文
					弥生前期	—	高橋式
					弥生中期	堅穴建物跡	下城式, 山ノ口式
					古墳	堅穴建物跡, 鍛冶関連建物跡, 堅穴状遺構, 溝状遺構, 道跡	成川式, 輪羽口, 高坏脚転用輪羽口, 鉄鏃, 鉄滓, 勾玉, 管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器, 土師器
					中世	掘立柱建物跡, 溝状遺構, 道跡	青磁, 白磁, 瓦器椀
旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では, 集落を構成する多数の堅穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか, 専用の輪の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。							
21	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1) 刊行 H29年度 (2) 刊行	縄文早期	集石	下剥峯式, 平楯式
					縄文後期	堅穴建物跡, 埋設土器, 落とし穴, 土坑, 石斧集積遺構	中岳Ⅱ式, 石刀, 石鏃, 打製・磨製石斧, ヒスイ製垂飾, 小玉, 勾玉, 管玉
					縄文晩期	—	黒川式, 刻目突帯文
					弥生中期	堅穴建物跡	入佐式, 山ノ口式, 土製勾玉
					古墳	堅穴建物跡, 地下式横穴墓, 円形周溝墓, 溝状遺構	成川式土器, 人骨, 鉄剣, 鉄鏃, 刀子, ヤリ鉋, 異形石器
					古代	焼土跡, 道跡	土師器, 須恵器
縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され, 円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され, 高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり, 大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか, 縄文時代後期の堅穴建物跡から, 樞原文を施す完全な石刀が出土している。							
22	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (A地点1) 刊行 H30年度 R元年度 R2年度 (A地点2, B, C, D地 点) 作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	堅穴建物跡, 連穴土坑, 土坑, 集石, 石器製作跡	吉田式, 石坂式, 下剥峯式, 辻タイプ, 桑ノ丸式, 押型文, 石鏃, 石匙, スクレイパー, 磨石
					縄文前期	埋設土器(轟式)	轟式, 条痕文
					縄文後期	土坑, 落とし穴状遺構, 埋設土器, 石器集中部	市来式, 丸尾式, 西平式, 太郎迫式, 三万田式, 中岳Ⅱ式, 打製・磨製石斧, 磨石, 剥片, 石核, 台石, 石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式, 刻目突帯文
					弥生中期	堅穴建物跡, 掘立柱建物跡, 土坑	山ノ口式, 打製・磨製石斧, 磨製・打製石鏃, 磨石, 敲石, 石皿, 青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁, 白磁, 薩摩焼
旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に, 縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また, 同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が1点出土している。弥生時代中期の青銅製鑿の出土も特筆される。							
23	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は 埋文センター 調査	H26年度 (1) 刊行 H27年度 H28年度 (2) 刊行 R元年度 R2年度 (3) 作業中 ※H23～24は 埋文センター 作業	縄文早期	堅穴建物跡, 連穴土坑, 集石, 落とし穴, 土坑, 石器製作跡	前平式, 吉田式, 倉園B式, 石坂式, 下剥峯式, 辻タイプ, 桑ノ丸式, 中原式, 押型文, 手向山式, 平楯式, 壱ノ神式, 石槍, 石鏃, 石匙, 磨石, 敲石, 石皿, 打製石斧
					縄文後期	落とし穴, 礫集積	指宿式, 市来式, 石鏃, 磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	堅穴建物跡, 大型建物跡, 掘立柱建物跡, 円形・方形周溝	山ノ口式・中溝式, 擬凹線文系壺, 土製勾玉, 鉄器, 磨製石鏃, 石匙, 砥石, 敲石, 台石
					古墳時代以降	溝状遺構, 畝状遺構	土師器碗, 薩摩焼
縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では, ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型堅穴住居跡, 棟持柱をもつ掘立柱建物跡2棟を含む建物跡群, 柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており, 大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか, 縄文時代早期の堅穴住居跡, 連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。							

第6表 東九州自動車道関連（志布志IC～鹿屋串良JCT間）遺跡一覧表⑤

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
24	立小野堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H30年度 終了 ※H22～24は 埋文センター 調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 (1) 刊行 R 3年度以降 (2) 作業 ※H24は埋文 センター作業	縄文前・中期	—	深浦式
					縄文後期	—	指宿式，市来式，西平式
					弥生中期	—	山ノ口式
					古墳	地下式横穴墓，土坑墓， 溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器（刀・剣・槍・鏃・刀子・鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
<p>縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。</p>							
25	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文セン ター調査	H22年度 刊行 ※埋文セン ター作業	縄文早期	—	石坂式
					縄文後期	—	凹線文，市来式，三万田式
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物 跡，土坑	山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具，鉄鏃
					古墳	—	成川式
中世～近世	道路状遺構	洪武通寶（加治木銭）					
<p>弥生時代中期を中心とする遺跡である。花卉形・方形・円形を呈する竪穴建物跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴建物跡内から発見されている。7号住居跡の埋土内から，松木菌遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。</p>							
26	石絵	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文セン ター調査	H22年度 刊行 ※埋文セン ター作業	縄文早期	集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平格式，貝殻条痕文，鎌石橋式，轟A式，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	—	山ノ口式，須玖式
<p>縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器1個体と轟A式土器が2個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。</p>							



第2図 東九州自動車道関連（志布志IC～鹿屋串良JCT間）遺跡位置図

第三章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定方法、整理・報告書作成作業の方法、遺物・石材の分類基準の概要について述べる。

1 発掘調査の方法

川久保遺跡の発掘調査は、平成26年度～平成30年度の5か年にわたり実施した。調査対象表面積は、27,327㎡、調査対象延面積は、96,403㎡である。A地点は、平成26年度～平成29年度まで発掘調査を実施した。A地点の調査対象表面積は、25,887㎡、調査対象延面積は、70,427㎡である。A地点は、串良川右岸に隣接する笠野原台地の東側縁辺部の河岸段丘に位置し、調査地は、畑地、山林、宅地等に利用されていた。本遺跡の調査区割り（グリッド）は、大隅河川国道事務所の設置した道路建設用センターライン「STA154」と「STA155」を結ぶ延長線を基軸として、西側から東側に向かって1・2・3……、北側から南側に向かってA・B・C……とする10m間隔で設定した。グリッドは、主に遺構や遺物の出土位置の管理に用い、基本測量や地形測量、遺物の取上げや遺構のポイント等は、国土座標第Ⅱ系を基準とする座標を用いた。本調査に当たっては、調査区内の雑木や雑草の伐採を行った後、文化財課による試掘調査と埋文センターが実施した確認調査の結果に基づき、重機で表土を除去した。表土掘削後は、10mグリッドを設定し、主にIV層以下を人力によって掘り下げた。出土した遺物については、必要に応じて出土状況の写真撮影を行った後、トータルステーションで出土位置を記録し、取り上げを実施した。まとまりのある遺物や遺構に伴う遺物については、縮尺10分の1で実測を行った。遺構については、検出状況の写真撮影を実施した後、人力により埋土の掘削を行い、調査の段階に応じて適宜、写真撮影を行った。また、遺構の規模に応じて縮尺10分の1、20分の1で実測を行った。遺物包含層間にあるV層やⅧ層等の無遺物層は、重機で除去し、下層の遺物包含層を人力によって掘り下げる作業を繰り返した。なお、今回報告する旧石器時代～縄文時代草創期は、Ⅷ層の薩摩火山灰層より下位のⅨ～ⅩⅢ層に相当する。調査中に生じた掘削土については、調査区に仮置きした他、大隅河川国道事務所から指定された調査区外へ搬出し、調査が終了した調査区については、重機により埋め戻し整地を行った。

2 遺構の認定方法

遺構の認定は、検出面、埋土の状況や色調、規模等を担当者で検討し総合的に判断したうえで行った。遺構の時期の判断は、検出面の層位、埋土の堆積状況や色調、

遺構内遺物等を検討して行った。堅穴住居跡は、埋土形状、床面の状況や貼床の有無、焼土域や柱穴の有無、遺物の出土等を総合的に検討し判断した。方形、円形、楕円形等形状が異なるが、検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し区別した。掘立柱建物については、柱痕の有無やピットの間隔、埋土状況等を総合的に検討し判断した。時期は、それぞれのピットから出土する遺物で時期差が見られる場合、それぞれを検討して判断を行った。集石遺構や礫群は、礫の密集度、検出状況、掘り込みや被熱の有無等を総合的に判断して認定した。当遺跡では、礫群と集石遺構の区別について、薩摩火山灰のⅧ層を基準としてⅨ層以下を礫群、Ⅷ層以上を集石として名称を使い分けた。礫群の時期に関しては、検出面や周辺の遺物等を検討したうえで判断した。道路状遺構は、硬化面が筋状に見られる遺構で、硬化面に沿って一部に溝状遺構が伴っていた。時期判断は、遺構内遺物や埋土の状況等を検討して行った。

3 整理作業・報告書作成作業の方法

A地点では、概ね次のような作業手順により整理作業を進めた。遺物の水洗は、主として発掘作業現場で行った。石器については、超音波洗浄機を使用した。発掘調査現場では、乾燥後、主に土器の注記を実施した。注記後は、遺物カードと共に袋詰めを行い遺物台帳に必要事項を記入した。現場で水洗・注記作業を完了できなかった遺物については、埋文調査センターで実施した。注記作業は、注記用の機械と手作業で実施した。続いて遺物の一次選別を実施したが、遺物の総数が膨大であったため、旧石器時代から縄文時代にかけての遺物を中心に作業を実施した。土器の一次選別では、縄文時代の時期ごとに大きく分類を行った。石器の一次選別では、器種分類と石材の分類を行った。石器の器種分類は、石器、石核、礫に大きく分類した。石器については、剥片石器、剥片、概ね径5mm以下の小片は、碎片として分類した。礫については、大きさや加工、使用痕の有無、被熱の痕跡等を考慮して分類した。自然礫については、大きさや石材、被熱の痕跡の有無を台帳に記録して廃棄した。石材の分類については、肉眼的特徴による分類を基本とした。二次選別では、一次選別時より遺物の細かな観察に努めた。土器は、型式ごとに細分を行った。石器は、石核、剥片石器、特徴のある剥片、礫石器類の細分を進めた。二次選別完了後は、それぞれの遺物の座標データの整理を実施した。座標は、グリッド配置図に準じた任意座標には変換せず、公共座標を利用した。この座標を基に層ごとの遺物分布図の作成を行った。接合作業は、この分布図の成果を基にして、それぞれの集中域内、次に



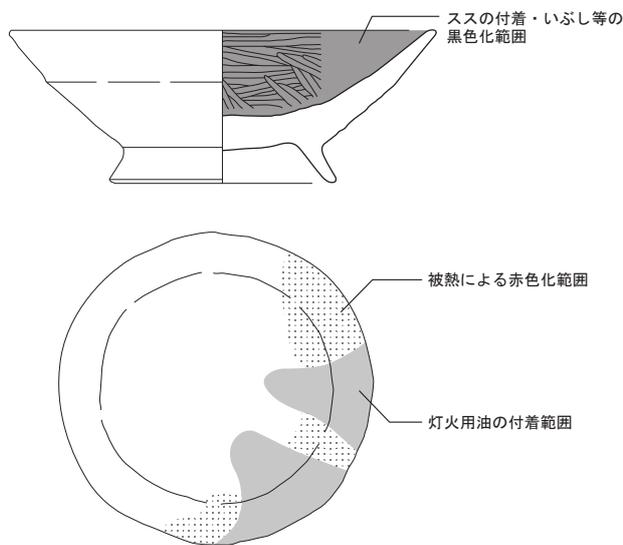
第3図 周辺地形及びグリッド配置図

隣接する集中域を中心に実施した。実測遺物の選別では、遺構出土、集中域出土、接合資料、包含層出土遺物の順で行った。遺物量が多いため実測が必要な遺物でも図化されていない遺物が存在する。実測や製図作業は業者に委託し、担当者が確認作業を行った。製図が完了した図面から業者に指示して図版レイアウトを作成した。遺構図、土層図等は、担当者が原図の修正を行い、受託者が製図、レイアウトを実施した。写真については、職員および受託者が撮影・選別し、レイアウトを行った。縄文時代早期・前期・古代・中世に関しては、文章執筆、編集作業を担当者の指導の下で支援調査員が実施した。出土遺物や記録の整理作業は、担当者の指導で受託業者が実施した。

4 土器の分類

本遺跡ではVII b・VII a層～VI層から縄文時代早期の土器群が、V a層から縄文時代前期の土器群が出土している。縄文土器の分類は以下のとおりである。

- 1 類土器 岩本式土器
- 2 類土器 前平式土器
- 3 類土器 志風頭式土器
- 4 類土器 加栗山式土器・札ノ元VII類土器
小牧3Aタイプ
- 5 類土器 吉田式土器
- 6 類土器 石坂式土器

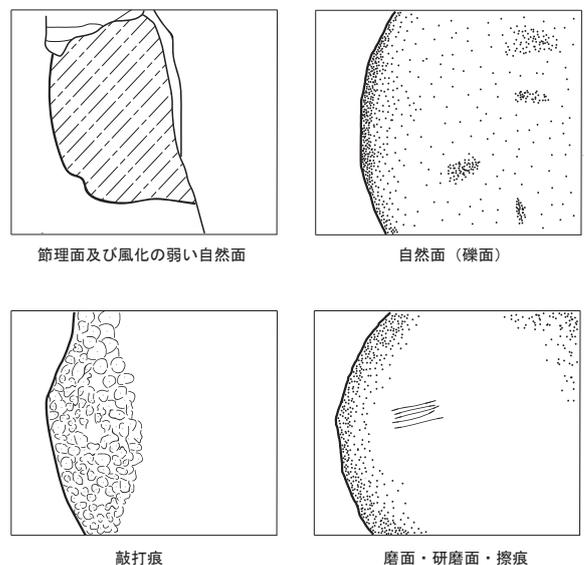


- 7 類土器 下剥峯式土器
- 8 類土器 押型文土器
- 9 類土器 手向山式土器
- 10 類土器 変形撚糸文土器
- 11 類土器 塞ノ神A式土器
- 12 類土器 塞ノ神B式土器
- 13 類土器 苫浜式土器
- 14 類土器 右京西式土器
- 15 類土器 轟A式土器
- 16 類土器 西之菌式土器
- 17 類土器 轟B式土器
- 18 類土器 曾畑式土器

なお、各土器型式は可能な限り細分をおこない、詳細は総括に記載した。掲載遺物番号は、縄文土器は1番から始まり、古代遺構の遺物は400番から始まる。石器は頭にSが付く番号(S1～)から始まる。遺構内遺物は頭に遺構名が付く番号(土坑1-1等)を付している。

5 石器の分類

本遺跡では、縄文時代早期に比定されるVII b・VII a層～VI層及び縄文時代前期に比定されるV a層から、多数の石器類が出土した。石器の分析を行うにあたっては、第7表及び第8表に示した石器分類表及び石材分類表に従って分類を行った。なお、出土した石器の器種及び点数等については、本文中にて報告する。



第7表 石器分類表

器種		分類	概要
剥片石器	打製石鏃	素材に押圧剥離が施されて三角形を呈するよう整形された石器。形状の違いにより細分した。	
		1	全体の形状が正三角形を呈するもの。
		2	全体の形状が二等辺三角形を呈するもの。
		3	全体の形状が五角形を呈するもの。
		4	柳葉形を呈し、側縁がやや緩やかに曲線を描くもの。
	5	未製品や欠損品。その他。	
	磨製石鏃	全面、あるいは部分的に研磨が施されて三角形を呈するよう整形された石器。	
	石槍	両面加工が施された槍先形の石器。	
	尖頭状石器	尖頭部が作出されて槍先形を呈するが、二次加工が石槍とは異なる石器。	
	石匙	素材に二次加工が施されて刃部及び摘み部が作出された石器。摘み部と刃部の位置関係の違いにより細分した。	
		1	縦長を呈するもの。
		2	横長を呈するもの。
	3	その他不明なもの。	
削器	剥片の側縁に、縁辺の長さの二分之一以上に連続的な調整によって刃部を作り出した石器。		
石錐	軸部と摘み状の頭部をもつ石器。		
異形石器	二次加工が施されているものの、用途等が不明な石器。		
礫石器	磨製石斧	礫や大型の剥片を素材とし、全面あるいは部分的に研磨が施されて刃部が作出されている石器。	
		1	器厚が厚く、重量感がある。刃部が蛤の形態をするものが多い。
		2	形態的には短冊形や撥形等が含まれる。定角式磨製石斧を含む。
		3	細長で鑿形石器と称されるタイプのもの。
	4	その他。1～3に当てはまらないもの。	
	打製石斧	礫や大型の剥片を素材とし、素材に二次加工が施されて刃部及び着柄のための基部が作出されたもの。	
		1	明瞭な抉りを持たず、短冊形（長方形）の器形を呈する。
		2	基部幅が刃部幅より狭い撥形を呈するもの。
	3	不明品、欠損品、その他	
	礫器類	礫の一部に打撃を加え、簡単な加工を加えたのみの石器。石斧的なもの、片刃打割器的なもの、搔器的なもの、削器的なものなどがある。	
	磨・敲石類	主に円礫を素材とし、素材の一部に磨る・敲く作業によって生じたと思われる磨痕・敲打痕を持つ石器。	
石皿類	大礫を利用し、磨面・凹面を有する石器。磨石とセット関係にあり、木の実を磨り潰したりしたものと考えられる。		
軽石製品	軽石を素材とした石器。穿孔や凹み等加工痕が見られる。		

第8表 石材分類表

石材	分類	概 要
黒曜石	1	光を通し、不純物を大量に含むもの。鹿児島市の三船、大口市の日東、五女木、錦江町の長谷等の原産地資料に類似する。
	2	飴色～黒色を基調とし、不純物をほとんど含まない良質のもの。えびの市の桑ノ木津留、大口市の上青木の原産地資料や自然面が磨りガラス状を呈する霧島系の資料に類似する。
	3	黒色で不純物を全く含まない良質のもの。佐賀県伊万里市腰岳産の資料に類似するが、一部長崎県佐世保市針尾島周辺で産出する黒色系の物も含まれる。
	4	青灰色で不純物の少ないもの。針尾中町や長崎県佐世保市東浜、淀姫等西北九州の原産地資料に類似するが、原産地不明の一群も含まれる。
	5	不純物の少ない黒色の黒曜石。まれに白色の不純物を含む。霧島山系と思われる。
	6	灰～灰白色を基調とする黒曜石で、大分県姫島の原産地資料に類似するもの。
	7	上記以外のその他のもの。
安山岩	1a	黒色を呈し、砂質感が強い。斜長石が殆ど含まれない。西北九州産であると考えられる。
	1b	1aが風化したもの。
	2	斜長石が殆ど含まれず、珪質の光沢が見られる。西北九州産と思われる。
	3a	上牛鼻産と考えられる。斜長石が密に含まれる。黒色もしくは青灰色を呈し、光沢感が強い。風化していない、もしくは、弱い風化が見られる。
	3b	2に類似するが、風化が強い。
	4	上記以外の一般的な安山岩や、その他のもの。
凝灰岩		火山灰や火山砂などが堆積し、凝固したもの。親指大の礫を含む凝灰角礫岩を含む。
花崗岩		御影石とも呼称。石英・カリ長石・雲母・角閃石・輝石などを主成分鉱物として含む。
蛇紋岩等		主に蛇紋石から成り、表面に蛇のような文様が見られるもの。ぬめつとした肌触りを有し、光沢がある。
頁岩	1	風化が顕著で、白色もしくは乳白色を呈するもの。
	2	風化が見られる。層状剥離や白筋が見られるものが多い。
	3	2に類似するが、風化がない、もしくは弱いもの。
	4	漆黒色を呈するもの。粒子が細かい。
	5	風化が全くない。光沢があり、黒色・黄橙色・白色・乳白色・青灰色などを呈する。珪質の頁岩。
	6	粘板岩に類似したもの。薄茶色を呈し剥離が強い。シルト質の頁岩。
	7	硬質頁岩の一種。長石が粒状に多量に含まれるものも含む。青灰～灰白色を呈する。
	8	上記以外のその他のもの。
砂岩	1	粒子の粗いもの。
	2	粒子の細かいもの。
粘板岩		極微小な砂粒（泥粒）が集合して固まった堆積岩の一種。頁岩に似て層状を成すが、青灰色～茶黄色を呈する。
ホルンフェルス		硬質化が著しく、鉱物が相累なって帯状もしくは斑状をなすもの。ただし、硬質化（もしくは、硅質化）した頁岩は本類に含めず、頁岩に分類した。
めのう系		めのう・玉髄・石英・タンバク石・鉄石英・水晶・石英斑岩などを総称して、本類に含めた。
チャート		珪酸を含み光沢感を有する。

第2節 層序

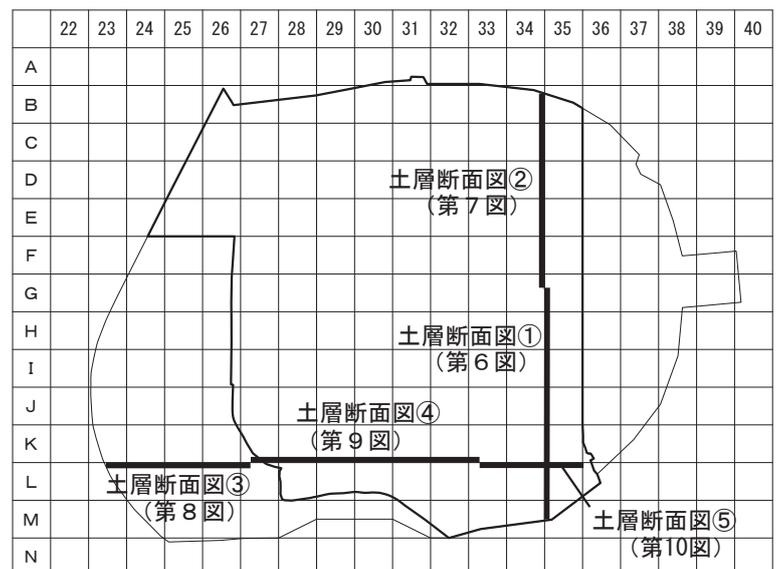
A地点では、後世の宅地や畑地の造成による削平のためB～D地点で確認された基本層序のⅡ・Ⅲ層が認められずⅣ層～ⅩⅣ層までを確認した。Ⅳ層は、主に古墳時代の遺物包含層で、大きくa・bの2層に分層した。A地点西側の谷部では、Ⅳa層が非常に厚く堆積しており、この部分のみⅣa層をさらに6層に分層している。Ⅴ層は、アカホヤ火山灰層とアカホヤ火山灰層に挟まれる形で堆積する噴砂シラス層で、アカホヤ関連の層をa～c、噴砂シラス関連の層をx・yに分層した。Ⅴ層の堆積状況としては、鬼界カルデラの爆発で幸屋降下軽石のⅤc層が堆積し、その後アカホヤ火山灰層のⅤb層が降り積もり、直後に液状化が発生してシラスを含んだ砂（噴砂）が下層から噴出している。噴砂は、比重の重い小礫層であるⅤy層が沈み、上層にⅤx層である砂が堆積している。さらにⅤb層が上部に堆積してシラス層を挟んだ状態となっている。その後、アカホヤの二次堆積層であるⅤa層が堆積する状況であった。Ⅵ・Ⅶ層は縄文時代早期の遺物包含層で、Ⅶ層はa・bの2層に分層されている。Ⅷ層は、桜島起源の薩摩火山灰である。aは火山灰層で、bは軽石が点在する層である。Ⅸ層は、細石器文化期の遺物包含層でa～cの3層に分層している。Ⅹ層はナイフ形石器文化期の遺物包含層で、ⅩⅠ層は無遺物層である。ⅩⅡ・ⅩⅢ層は、ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。ⅩⅣ層は、無遺物層の二次シラス堆積層である。

- Ⅰ層：表土である。旧耕作土，造成土を含む。場所により分層できる。
- Ⅳa層：縄文時代晩期から古墳時代の遺物包含層である。
- Ⅳb層：池田降下軽石を含んだ層である。縄文時代晩期から古墳時代の遺物包含層である。
- Ⅴa層：アカホヤ火山灰を基本とする二次堆積の腐植土である。縄文時代前期の遺物を少量包含する。
- Ⅴb層：アカホヤ火山灰一次堆積層である。幸屋降下軽石が点在する。無遺物層である。
- Ⅴx層：噴砂シラスの砂層である。無遺物層である。
- Ⅴy層：噴砂シラスの小礫層である。噴砂シラスに含まれた小礫が比重により沈んだ層である。無遺物層である。
- Ⅴc層：幸屋降下軽石層である。ブロック状に堆積している。無遺物層である。
- Ⅵ層：縄文時代早期を主体とする遺物包含層である。
- Ⅶa層：縄文時代早期の遺物包含層である。
- Ⅶb層：硬質である。縄文時代早期の遺物包含層である。
- Ⅷa層：薩摩火山灰層（P14）である。無遺物層である。
- Ⅷb層：薩摩火山灰の軽石が点在する。無遺物層である。
- Ⅸa層：細石器文化期から縄文時代草創期の遺物包含層である。
- Ⅸb層：細石器文化期から縄文時代草創期の遺物包含層である。
- Ⅸc層：細石器文化期から縄文時代草創期の遺物包含層である。
- Ⅹ層：ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
- ⅩⅠ層：二次シラスの再堆積層である。
- ⅩⅡ層：ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
- ⅩⅢ層：ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
- ⅩⅣ層：二次シラス堆積層である。無遺物層である。

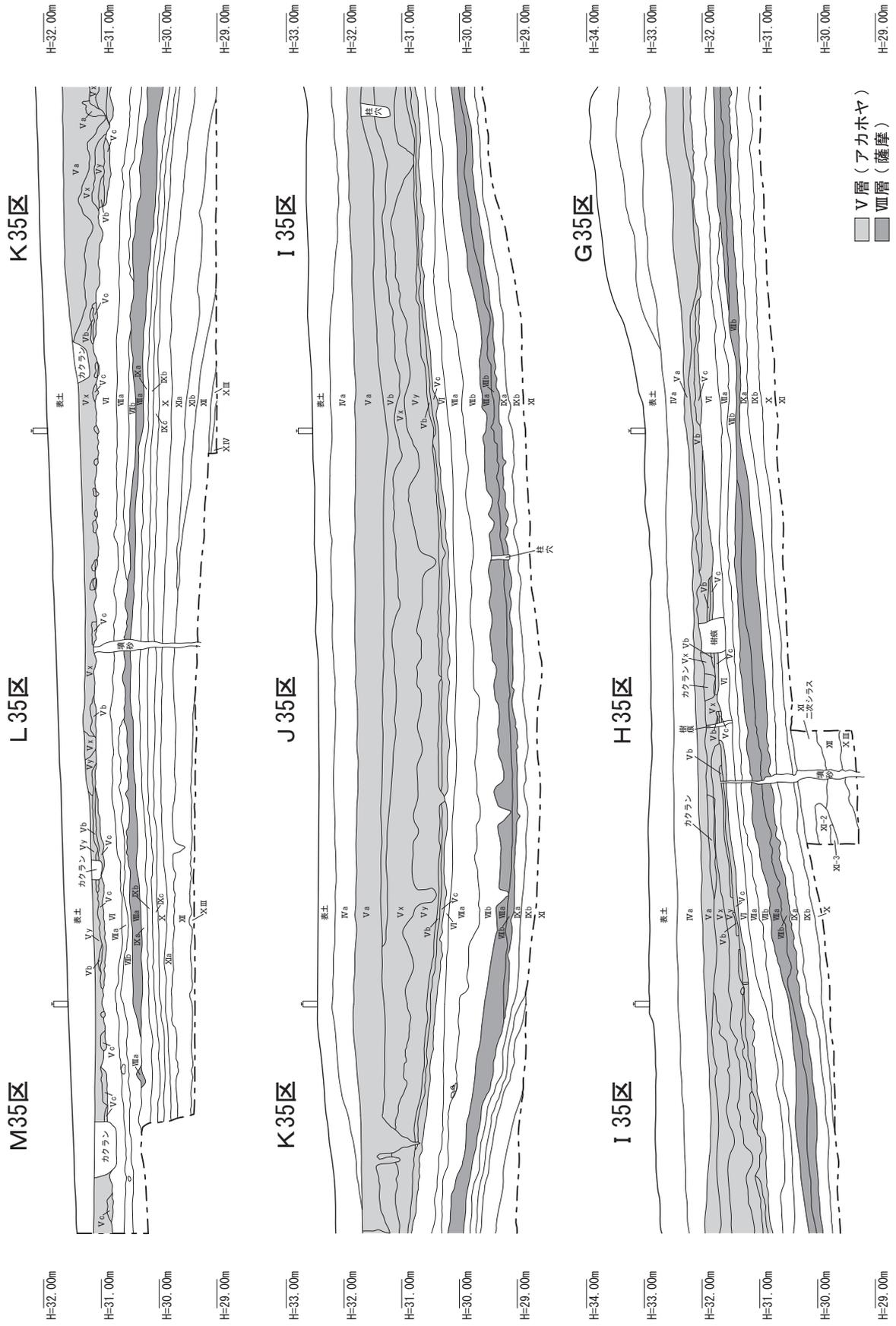
層名	色調・土質	層厚 (cm)
Ⅰ層	暗褐色土	20～40
Ⅳa層	明褐色土	20～30
Ⅳb層	明黄褐色土	5
Ⅴa層	淡黄褐色土	10～30
Ⅴb層	黄褐色火山灰土	10～30
Ⅴx層	灰白色砂	30～120
Ⅴy層	黄灰白色砂	10～20
Ⅴb層	黄褐色火山灰土	10～20
Ⅴc層	黄橙色軽石	5
Ⅵ層	暗褐色土	20～30
Ⅶa層	黒褐色土	10～30
Ⅶb層	黒色土	20～30
Ⅷa層	淡黄褐色火山灰土	20～40
Ⅷb層	淡黄褐色軽石	5
Ⅸa層	暗褐色粘質土	10
Ⅸb層	黒褐色粘質土	20
Ⅸc層	暗茶褐色粘質土	5
Ⅹ層	にぶい黄褐色粘質土	15
ⅩⅠ層	明黄褐色砂質土	10～100
ⅩⅡ層	暗褐色硬質土	30
ⅩⅢ層	黄褐色砂質土	15
ⅩⅣ層	明黄褐色砂質土	100～

□ Ⅴ層(アカホヤ) □ Ⅷ層(薩摩)

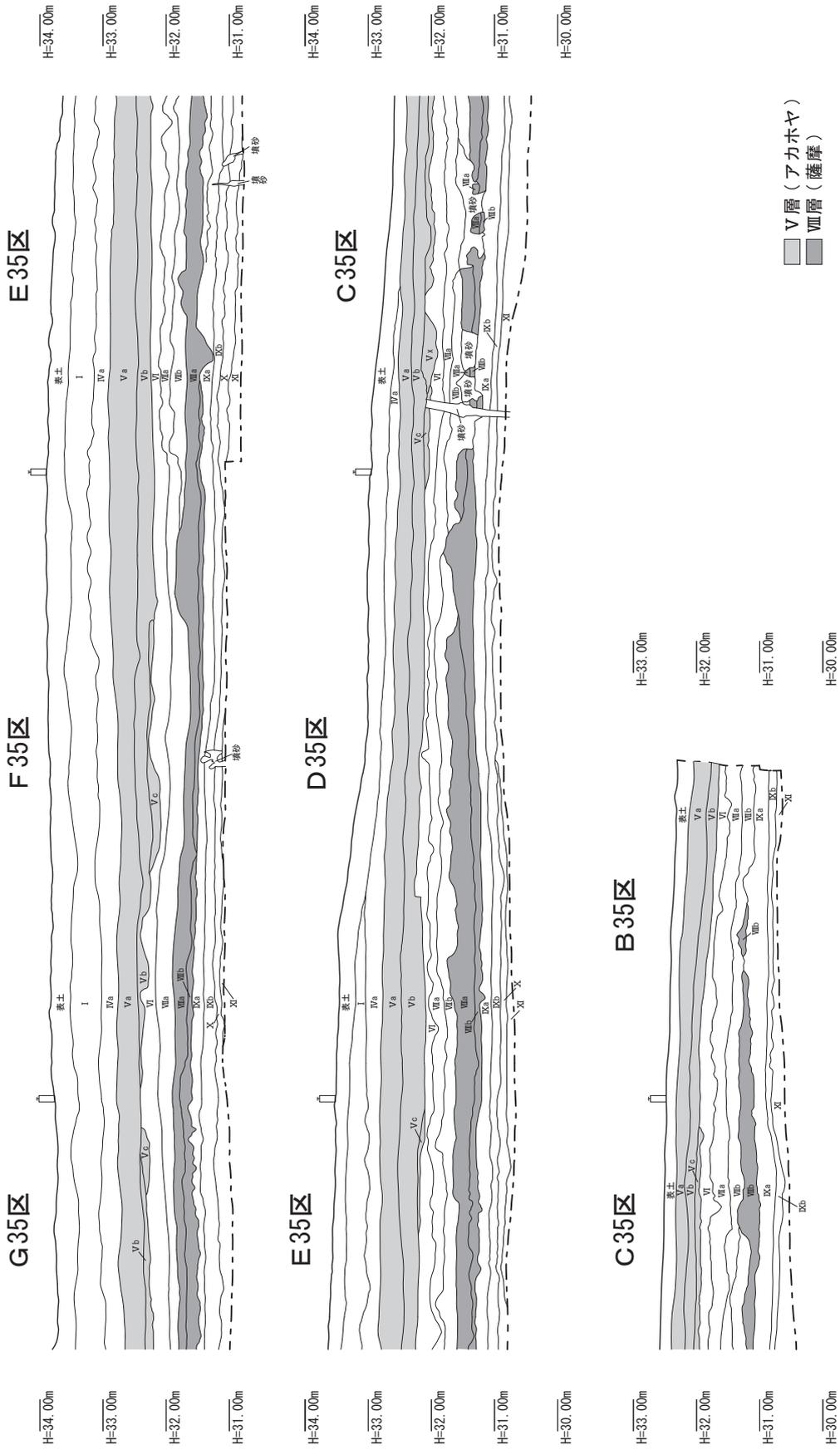
第4図 標準土層図



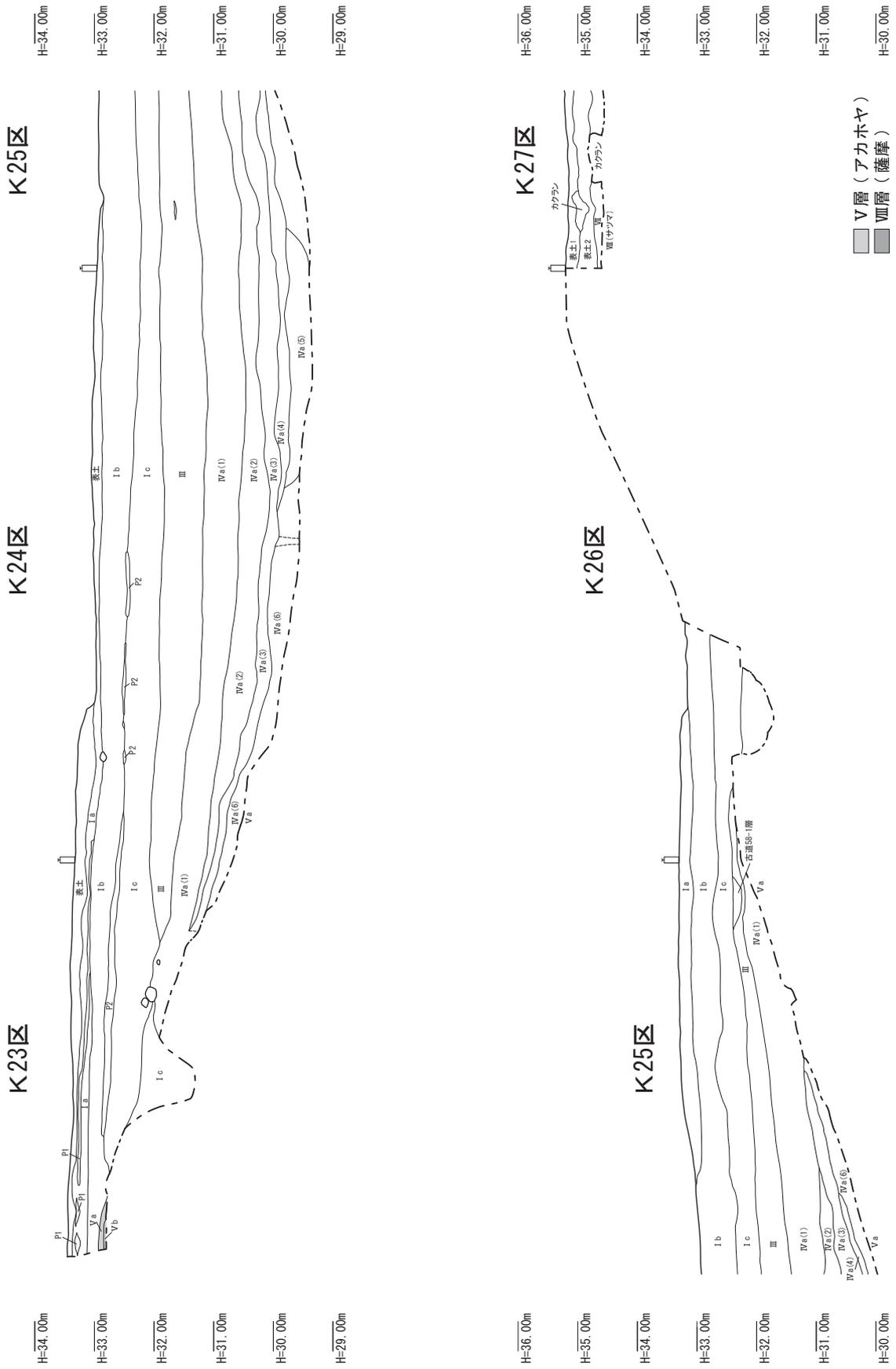
第5図 土層断面図位置図



第6図 土層断面図①



第7図 土層断面図②



第8図 土層断面図③

K27区

K28区

K29区

H=36.00m

H=35.00m

H=34.00m

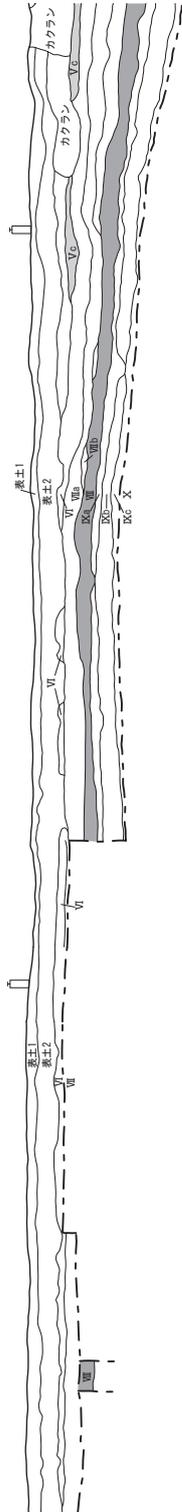
H=33.00m

H=36.00m

H=35.00m

H=34.00m

H=33.00m



K29区

K30区

K31区

H=36.00m

H=35.00m

H=34.00m

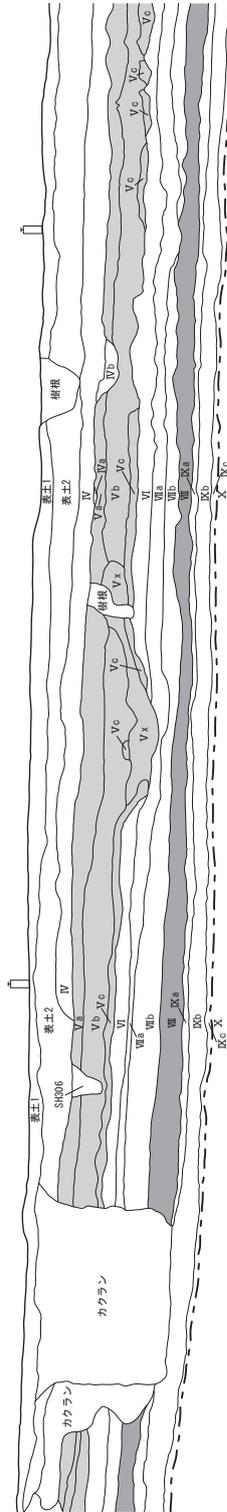
H=33.00m

H=36.00m

H=35.00m

H=34.00m

H=33.00m



K31区

K32区

K33区

H=35.00m

H=34.00m

H=33.00m

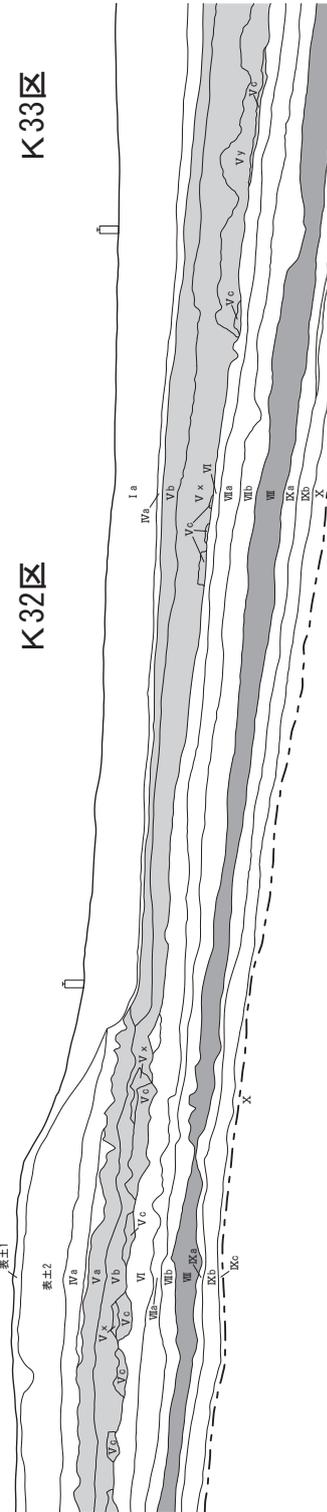
H=32.00m

H=35.00m

H=34.00m

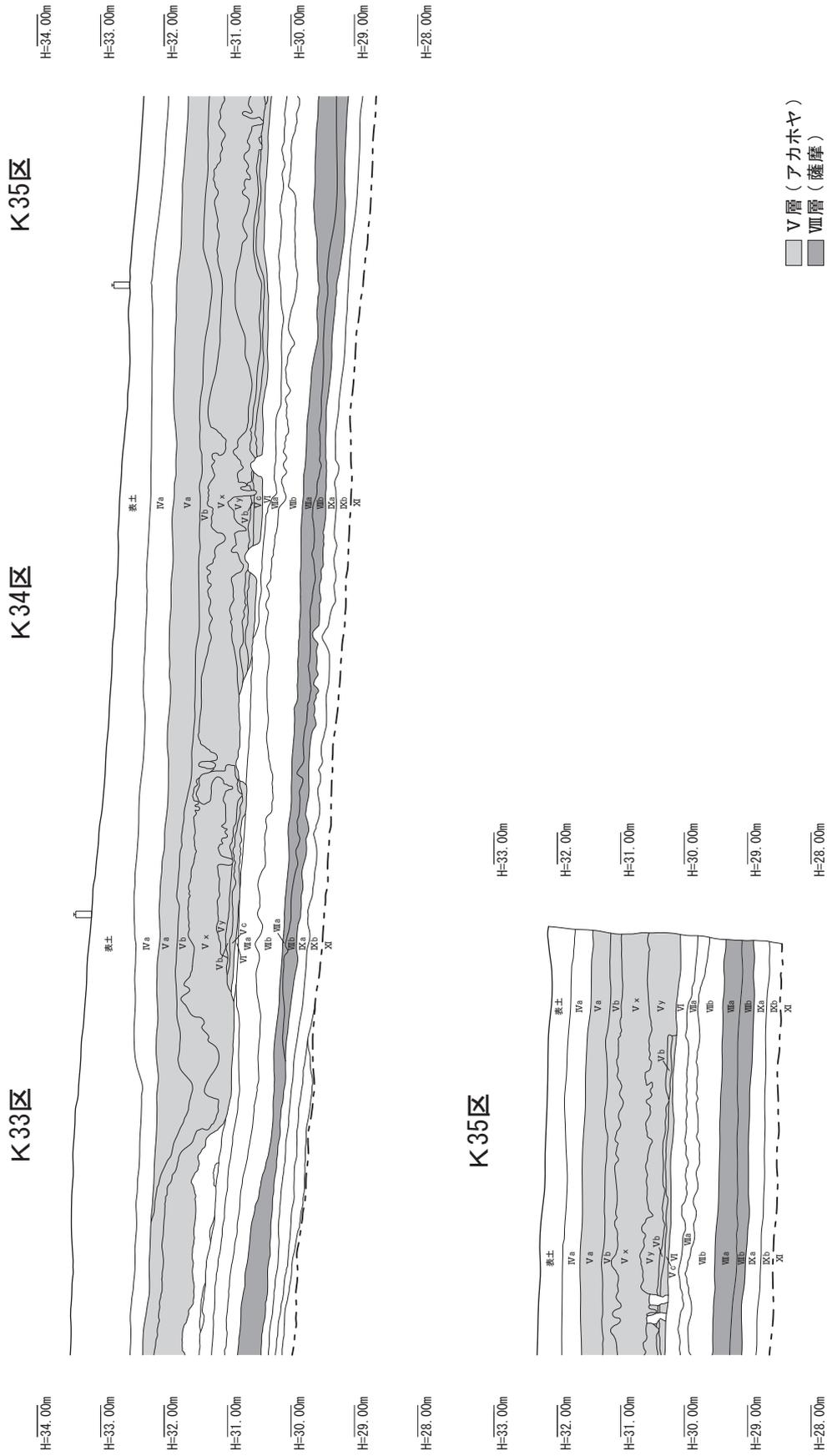
H=33.00m

H=32.00m



V層 (アカホヤヤ)
 Ⅷ層 (薩摩)

第9図 土層断面図④



第10図 土層断面図⑤

第IV章 調査の成果

第1節 縄文時代早期の成果

1 遺構

川久保遺跡A地点ではⅧ層（薩摩火山灰層）とⅤ層（アカホヤ火山灰層）に挟まれたⅦ層とⅥ層から縄文時代早期の遺構が検出されている。最も多い遺構としては集石が276基検出されている他、連穴土坑、土坑が検出されている。

（1）縄文時代早期集石

縄文時代早期の集石はⅦ・Ⅵ層から276基検出された。内訳はⅦ層検出が208基、Ⅵ層検出が68基である。基本的には検出された層ごとに遺構を掲載しており、さらに調査時の記録を基に、各層の上位、下位というような分類をおこない掲載をした。各層ごとの掲載順序は、まず土坑を伴うもの、礫の集中が見られる集石で、使用時の原形を保っている可能性が高いもの、さらに構成礫の多い順に掲載している。その他、構成礫石材・構成礫の大きさ等に特徴のあるもの等は別途特徴を記載する。また、集石は基数が多いため、各層の集石の客観的な特徴に関しては、その文末に記載することとする。

Ⅶ層検出集石

Ⅶ層は大きくⅦa層とⅦb層に分層することができる。Ⅶb層からは20基、Ⅶa層からは188基の集石が検出されており、約75%がⅦ層からの検出となっている。

Ⅶb層検出集石（第14～19図 集石1～16号）

集石1号から集石16号はⅦb層から検出された。分布は調査区の中央から南西側で検出されている。なお、Ⅶb層で検出された集石には土坑を伴うものが多い。

集石1号はⅧ層（薩摩火山灰層）に掘り込まれた土坑から検出された集石である。土坑は長軸約1.2m、短軸約1mの長方形を呈している。土坑は南向きの緩斜面に掘られているが、土坑底面は平坦に成形されている。底面からの立ち上がりは北側が緩く立ち上がり、南側は急に立ち上がる。土坑内の礫は約65%が5～10cm大の礫であり、石材はホルンフェルスが約40%と最も多い値となっている。

集石2号から集石8号は全て直径50～60cm大の小型の土坑を伴っている。深さはどれも20cm未満と浅い土坑であるが、集石7号の礫の検出状況から見ると、土坑はさらに上位から掘り込まれていた可能性が考えられる。集石6号の土坑は土坑内埋土がⅦb層の土よりもさらに黒色が強かったため、遺構プランが明確に確認できた土坑である。構成礫は集石7・8号を除くと全て土坑内に集中している。構成礫の大きさは全ての集石で5～10cm大

の礫が多い値となっているが、集石5・7号は10～15cm大の礫も約5cm未満の小礫で構成されている。

集石3号は土坑の底面中心に20cm大の大型の礫を1個据えた集石である。それ以外にも掘り込み部底面には大きめの礫を平坦面を上にして配置されている状況が確認された。

Ⅶb層検出集石の構成礫石材は集石2・4号のように70%以上を安山岩が占めるものもあれば、集石6号のようにホルンフェルス主体のものもある。集石8号は礫の数も少なく、集石と土坑の関係ははっきりしない。集石3号では炭化物を極微量伴い、集石5号では被熱を受けた礫が見られ、炭化物も極微量検出されている。集石6号はほぼ角礫のみで構成された集石であり、被熱を受けた礫は確認されなかった。

集石9号から16号は土坑を伴っていない。

集石11号はやや礫の集中域が不明であるが、その他の集石は礫の集中が見られる。構成礫の大きさは全ての集石で5～10cm大の礫を主体としており、構成礫石材は集石14号がホルンフェルスを主体としていることを除くと全て安山岩主体である。集石9号の礫は被熱を受けたものが確認でき、集石14号では極微量の炭化物が検出されている。

Ⅶb層上位検出集石（第20・21図 集石17～20号）

集石17号から20号はⅦb層上位で検出された。4基全てが調査区の南端部であるM32区から検出されている。

集石17号から19号は土坑を伴っている。

集石17号は直径90cm弱の土坑を伴い、礫は土坑の中に集中するが、一部の礫は土坑外の東側に散乱する。

集石18号は直径約60cmの土坑を伴い、礫は土坑の中に集中するが、一部の礫は土坑外の南側に散乱する。

集石19号は直径約50cmの土坑を伴い、10～15cm大の礫が土坑の中に集中し、一部の礫は土坑外の北側に散乱する。

集石20号は礫の集中域を持たない。集石17号から20号は全て5～10cm大の礫を主体として構成されている。

Ⅶb層検出集石について（第10表）

Ⅶb層から検出された集石には土坑を伴うものが11基あり、半数以上の集石に土坑が伴っていることとなる。土坑の直径は1号と17号を除くが50～60cmの土坑となっている。さらにⅦb層上位で検出されたM32区の集石17号から19号の3基の集石は、土坑内の礫が一方向に掻き出された様な様相を示し、また隣接するM33区から検出された集石7号も同様に土坑外の礫が北側に散乱する様相が見られた。

集石を構成する石材に関しては、石材を確認した12基の集石のうち、安山岩の割合が7割を超えるものが3基、5割を超えるものが6基、計9基の集石が安山岩を主体、もしくは安山岩の割合が高くなっている状況である。それに対しホルンフェルスが5割を超えるものが1基、ホルンフェルスの割合が安山岩よりも高いものが2基となっている。

集石を構成する礫の大きさに関しては、20基全ての集石で6～10cm大の礫が主体的に利用されていた。

Ⅶ a 層検出集石

Ⅶ a 層からは185基の集石が検出されている。調査時の所見から、検出面のⅦ a 層下位・Ⅶ a 層・Ⅶ a 層上位に分けて掲載する。なお、川久保遺跡では場所によりⅦ a 層の堆積が薄くなっている箇所があったため、検出面が明確ではないものは全てⅦ a 層検出としている。

Ⅶ a 層下位検出集石（第22～24図 集石21～27号）

集石21号から27号はⅦ a 層下位から検出された。分布はほぼ全ての集石が調査区南側に集中するが、集石25号のみ調査区を中心域から検出されている。Ⅶ a 層下位から検出された集石には土坑を伴うものは見られない。

集石21号は数は少ないながら礫が集中する集石であり、原形を保っていると考えられる。約90%が10～15cm大の礫である。

集石22号から27号はどれも明確な礫の集中域を持たない集石である。全て5～10cm大の礫を主体としているが、集石24号のみ10～15cm大の礫の割合もやや高くなっている。また集石24号からは土器が3点出土しているが、いずれも細片であり土器型式は不明である。さらに焼土塊も2点出土している。

集石27号には赤化した礫が6個、破碎した礫が3個確認できた。

Ⅶ a 層検出集石（第25～82図 集石28～194号）

集石28号から194号はⅦ a 層から検出された。分布は調査区を中心から南西の方向にかけて多く分布しているが、C27区等一部北側にも分布の集中が見られる。

集石28号から47号は土坑を伴っている。土坑の大きさは様々であり（第9表）、形状も円形のもの他に、集石28号のように隅丸形状を呈するものや、集石33号のように楕円形のものも見られる。土坑の大きさは最大のもので集石36号の直径約140cm、最小のもので集石43号の直径約40cmである。

集石28・31号は隅丸方形の土坑を伴い、ともに土坑の立ち上がりが急であり、土坑の深さも約30cm以上と深いという特徴を持つ。礫はともに土坑内に集中し、構成礫の大きさはともに60%近くを5～10cm大の礫を主体とし

ているが、集石28号は大きめの礫も多く見られ、10～15cm大の礫が約20%、15cm以上の礫も見られる。集石31号は5cm以下の礫の割合が約35%と小礫が目立つ集石である。

集石29・30・32・34・35・36・38・40・42・43・44・45・46・47号は円形の土坑を伴う。礫は土坑内に集中するものが多いが、集石44・45・47号のように土坑外に礫が散乱するものもある。

集石29号は円形の土坑を伴う集石の中では最も構成礫数が多く229個の礫から構成されている。礫の大きさは約50%が5～10cm大の礫であるが、それよりも大きな礫も約30%見られる。また被熱した礫も確認できる。第9表で確認できるように、Ⅶ a 層検出の土坑を持つ集石のなかでは最も深い掘り込みをもっている。

集石30号は200個の礫から構成されている。石材は安山岩を主体とし、構成礫の大きさは5～10cm大と11～15cm大の礫がほぼ同数となる。さらに21cm以上の大きさの礫が33個と、Ⅶ層・Ⅵ層の縄文時代早期集石の中では最も多い数量になっている。

集石34・35号はほぼ同じ大きさの土坑を伴っている。検出位置は20m程離れているが、構成礫数がほぼ同じであり、構成礫石材の安山岩・ホルンフェルス・砂岩の割合もほぼ同等、礫の大きさも5cm以下の小礫の割合が非常に少なく、11～15cm大の礫の数が他の集石と比べて多いという非常に似た特徴を持つ集石である。多くの集石の主体を成すのが5～10cm大の礫であるが、集石44号は11～15cm大の礫を主体として作られており、さらに大きい礫の使用も目立つ。

集石40号は20cm以上の大きな礫を含む。

集石45・46号は隣接して検出された。ほぼ同程度の大きさの土坑を伴い、礫は土坑埋土中ではなく、土坑の上部に散乱している状況で検出されている。5cm以下の小礫の割合が大きいのが特徴である。

集石33・37・39・41号は楕円形の土坑を伴う。集石41号を除くどの集石も土坑内での礫の集中がやや散漫な状況が見られる。

集石33号は多くの集石が安山岩を主体としているのに対し、ホルンフェルスが約60%を占める。また、5cm以下の小礫が多いのも特徴である。

集石39号は鬼界カルデラ噴火時の地震に伴い発生した噴砂の影響を受けており、土坑の中心付近から北方向にかけて直線上に一部の礫が紛失している状況が見られる。

集石41号は20cm以上の大きな礫を含む。

集石48号から80号は礫の集中域を持つ。集石48・49・50号は隣接して検出された集石である。平面図では2か所、断面図でも2か所に確実に集石が作られているのが確認できる。集石50号に関しては、図面上でははっきりとはしないが、「集石49号よりも下位で礫の集中が残存

する場所が見られた」とされているため、可能性として集石50号とした。しかしながら、確実な集石としては、集石48・49号の2基である。集石48号と49号には確実な時期差があり、集石48号がより古いことが分かる。集石の周辺に散在する礫もその出土レベルの上下から、下位のものは集石48号、上位のものは49号に付随すると考えられる。しかしながら、周辺の地形は南東方向に緩く傾斜しているため、集石48号に付随すると考えられる周辺の礫は、集石よりもレベルの高い位置に散在していることになる。

集石51号は約半数の礫が、5cm以下の小礫で構成されている。30cm以上の大型の礫も2個確認できるが、東側の大型の礫は出土した位置から、集石とは無関係の可能性が高い。礫の堆積に厚みが見られ、断面図を見ると上下2層に分けることができそうであり、元々あった集石を再利用する形で同じ場所に集石を作った可能性も考えられる。

集石52号は5～10cm大の礫を主体とするが、11～15cm以上の礫も目立つ集石である。北側と西側・東側の一部には15cm程度の礫で縁取りをしている様にも見える。また、配置される礫の底面が非常にきれいに揃っているのも特徴的である。礫自体もまず15cm程度の中型の礫を配置し、その後に隙間やその上に10cm以下の小型の礫を配置している様である。様々な点で丁寧に作成されていることが見てとれる。

集石53号からは石坂式土器が出土している。礫の集中域を持ち、西から東へ緩く傾斜する面に形成されている。175個の礫からなっており、60%以上が5～10cmの礫で構成されているが、11～15cmの礫も20%程度あり、さらに16～20cmの礫も見られる。約半数の礫の石材が安山岩である。

集石56号は5～10cm大の礫と11～15cm大の礫の割合がほぼ同数となる集石であり、16cm以上の大きさの礫の割合も高くなっている。

集石57号からは石坂式土器が出土している。集石57号の検出された地点(LM32・33区)は浅い窪地になっており、その窪んだ部分に集石を形成している。構成礫数は90個、構成礫の石材は約90%が安山岩である。

集石63号は構成礫の約90%が安山岩である。南側に礫の無い部分が確認できたが、その部分に関して特筆する特徴は見られなかった。

集石64号は5cm以下の小型の礫を持たない。全て11cm程度以上の礫で構成され、20cm以上の大型の礫も見られる。周辺からは縄文時代早期前半の土器である加栗山式土器や倉園B式土器が出土している。

集石66号は自然流路の様な傾斜の底の部分の浅い窪地に立地している。構成礫の約90%が安山岩である。また、ほぼ全てを11～15cm程度の中型の礫で構成し、5cm以下

の小礫は2点のみである。

集石69号から80号は構成礫数が50個以下の集石である。礫数は少ないが礫自体は集中している。安山岩を主体とする集石が多く、集石78号のように安山岩のみで構成される集石もある。

集石69号は安山岩46%、ホルンフェルス42%と、安山岩とホルンフェルスがほぼ同じ割合で構成されている。

集石70・71号は集石を構成する礫の石材にホルンフェルスを主体として使用している。集石70号は75%、集石71号は約60%の礫がホルンフェルスである。集石71号は東側へ傾斜する斜面に作られており、10cm程度以上の中型の円礫を主体に構成されている。

集石80号は安山岩・ホルンフェルス・砂岩がそれぞれ同じような割合で構成される。

集石81号から194号は礫の集中域を持たない集石である。ほとんどが安山岩を主体とし、礫の大きさは5～10cm大の礫を使用している。

集石81号は250個の礫で構成される。断面図を見ると、南西側にわずかにレベルの違う礫群が確認されることから2基の集石である可能性がある。石材は半数以上が安山岩で構成され、5～10cm大の礫を主体としている。被熱により破碎・赤色化している礫が確認できる。石坂式土器や塞ノ神式土器が出土している。

集石82号は東向きの緩斜面で検出され217個の礫で構成されている。西側に礫が集中しているが、確実な集石の中心は不明である。石材は約70%を安山岩、約80%を5～10cmの大きさの礫で構成する。

集石83号も石材の構成は確認できていないが、礫の大きさは約80%を5～10cm大の礫で構成している。

集石84号は5～10cm大の礫を主体としている。塞ノ神B式土器が2点出土している。集石内に1点のみ20cm以上の平坦な大型礫が出土しているが石皿や台石ではなく、使用痕等も確認できなかった。

集石86号は123個の礫で構成される。明らかに礫の大きさに差がある2つの集中が見られ、またわずかにではあるがレベル差も確認できることから、2基の集石がある可能性が考えられる。塞ノ神式土器が出土している。

集石88号は調査区南端で検出され、調査区外へ広がる可能性が高い。20cm以上の礫が2個確認でき、やや大きめの礫が目立つ。

集石89号は20cm以上の礫が1個確認できるが、出土レベルが他の礫より低いいため、集石85号とは無関係の可能性が高い。

集石92号は西から東へ緩やかに傾斜する斜面に作られている。やや大きめの礫が目立ち、被熱した礫も確認できた。

集石93号でも被熱した礫が確認されている。

集石95・96号からは石坂式土器が出土している。いず

れも安山岩を主体とする集石であり、集石95号はホルンフェルスの割合も30%と高い。集石95号は、東から西へ緩く傾斜する面から検出されている。礫は散在している状態で検出され、構成礫数は82個、75%程度が5～10cmの礫で構成される。集石96号では黒曜石も1点出土している。ほぼ平坦な地形で検出され、周囲の礫も全て集石96号の構成礫と考えられる。構成礫数は75個、80%近くが5～10cmの礫で構成されている。

集石97号からは吉田式土器が出土している。上位の礫と下位の礫にレベル差があるのが気にかかる。構成礫の中には赤化したものや、破碎したものも確認できる。構成礫数は77個、80%以上が5～10cmの礫で構成されている。

集石98号からは前平式土器が出土している。構成礫数は72個、そのうち80%以上が5～10cmの礫で構成されている。

集石99号は構成礫の85%が安山岩であり、安山岩の比率が非常に高い。南側に礫が集中し、わずかに離れて北側に礫が散在しているが、検出レベルからも同じ集石を構成する礫である可能性が高い。

集石105号からは石坂式土器が出土している。ほぼ平坦な地形で検出され、南北方向に礫が散在している。構成礫数は65個、75%程度が5～10cmの礫で構成されている。

集石107号は砂岩の割合が高い。集石に伴う土坑は確認されていないが、断面図を見ると掘り込みの中に集石を作っていた可能性も考えられる。

集石108号は安山岩を主体としている。構成される礫の大きさは5cm以下と、5～10cm大の礫の割合がほぼ同じであり、11～15cm大の礫の数も多い。集石に伴う土坑は確認されていないが、断面図を見ると、集石がすり鉢状になっており、掘り込みの中に作られていた可能性も考えられる。

集石110号はホルンフェルスを主体とする。

集石112号は構成礫の90%が安山岩である。礫の大きさは11～15cm大の礫の割合が多くなっている。集石113号も11～15cm大の礫の割合がやや高くなっており、20cm以上の大型の礫も確認できる。

集石118号からは加栗山式土器が出土している。一見すると南側に礫の集中域があるように見えるが、北から南へ緩く傾斜する下位部分にあたるため、集中域なしとした。構成礫数は52個、そのうち90%近くが5～10cmの礫で構成されている。

集石120・121号からは石坂式土器が出土している。いずれも被熱した礫が確認されている。

集石120号は、ほぼ平坦な地形で検出され、礫は広く散在している。構成礫の中には赤化したものや、破碎したものがわずかではあるが確認できる。構成礫数は51個、

90%近くが5～10cmの礫で構成されている。

集石121号も、ほぼ平坦な地形で検出され、一見すると南側に礫の集中域があるように見えるが、それらは小礫の集まりであり、やや大きめの礫はそれほど集中していないため、集中域なしとした。構成礫数は50個、約60%が5～10cmの礫で構成されている。

集石122号からは塞ノ神式土器が出土している。

集石128号はホルンフェルスが主体の集石であり、集石構成礫の73%がホルンフェルスである。被熱した礫が確認され、塞ノ神式土器が出土している。川久保遺跡A地点縄文時代早期集石の大部分が、安山岩を主体とする集石であるが、集石128号はその中で最も安山岩の割合が低い集石である。このようにホルンフェルスを主体とし、安山岩の割合が低い集石は、他に集石33・70・134・202号の計5基の集石があげられる。

集石134号もホルンフェルスの割合が55%と多くなっている集石である。

集石137号では被熱礫が確認されている。

集石140号からは塞ノ神式土器が出土している。塞ノ神式土器はVI層を中心に出土する土器であり、流れ込みと考えられる。被熱した礫も確認されている。

集石141号は構成礫の78%が安山岩であり、礫の大きさは5～10cm大と、11～15cm大の礫が同じ程度の割合となっている。被熱した礫も確認されている。

集石142号は安山岩が54%と半数を超えているが、ホルンフェルスの割合も43%と高くなっている。

集石147号は石材の構成は確認されていないが、礫の大きさは5～10cm大と11～15cm大が同数となっている。

集石149・150号は11～15cm大の礫の割合が大きくなっている。

集石151・153・156・162号は被熱礫が確認されている。

集石154・157号は5～10cm大と、11～15cm大の礫の構成比が同程度となっている。

集石164・165・166号はいずれもホルンフェルスの割合が高い集石であり、164号は安山岩と同数、165号はホルンフェルスが安山岩よりも高い比率になっている。

集石167号は被熱礫が確認されている。

集石168・171号は5～10cm大と、11～15cm大の礫の割合が同程度となっている。

集石172号からは石坂式土器が出土しており、被熱礫も確認されている。

集石178・179・181号はいずれもホルンフェルスの割合が高くなっている集石である。

集石183・189・190・194号は被熱礫が確認されている。

集石187号は構成礫の50%が安山岩であるが、ホルンフェルスの割合も43%と高くなっている。

集石190・191号の構成礫は砂岩を主体としている。

VII a 層上位検出集石（第83～87図 集石195～205号）

集石195号から205号は、VII a 層上位で検出された。調査区の中央から北側にかけて検出されており、M33区からは特に集中して検出されている。

集石195・196号は土坑を伴い、隣接して検出された。ともにVI層から掘り込まれている。集石の周辺にも散礫が出土しているが、どちらの集石に帰属するかは不明である。ただし、西側に位置する集石195号の構成礫がやや大きめの礫を用いているのが確認できている。集石195号に伴う土坑は、直径約70cm、深さ約10cm、集石196号に伴う土坑は、直径約78cm、深さ約5cmである。土坑の埋土等に差はなく、新旧関係は確認できなかった。

集石197・198号は礫が集中する集石であり、原形をとどめている可能性が高いと考えられる。ともに5～10cm大の礫を主体としている。

集石199号から205号は礫が散在し、原形をとどめていない。全て5～10cm大の礫を主体としている。

集石202号は構成礫の74%をホルンフェルスで構成し、高い比率となっている。

集石203・204号では被熱礫が確認されている。

VII a 層検出集石について（第9～13表）

VII a 層では185基と多数の集石が検出されている。そのため、細分された層ごとや土坑の有無ごとに、集石を見ていくこととする。

VII a 層下位で検出された集石はどれも散礫状態で検出され、唯一礫が集中する集石21号も礫数が9個と、使用時の原形は保っていない可能性が高い。石材を確認できたものは全て安山岩の割合が高く、また大多数の集石が6～10cm大の礫を主体的に利用していた。

VII a 層で検出された集石のなかで、土坑を伴う集石は20基確認されている。土坑の形状は3種類に大別でき、円形14基、楕円形4基、隅丸方形2基である。石材は安山岩を主体とするものが多いが、集石33号のみはホルンフェルスの割合が多くなっている。構成礫の大きさは6～10cm大の礫を主体とするものが多いが、円形の土坑を伴う集石30・34・35号の3基に関しては、11～15cm大の礫が多くなり、また30・35号については21cm以上の礫の割合も多くなっている。

VII a 層で検出された集石のなかで、土坑を伴わない集石は147基確認されている。9割以上の集石が安山岩を主体、もしくは安山岩の割合が高くなっており、礫の大きさも9割以上の集石が6～10cm大の礫を主体としている。

VII a 層上位で検出された集石に関しては、石材の割合が分かるものは少ない。構成礫の大きさに関しては6～10cm大を主体とするものが多い。

VI層検出集石

VI層からは71基の集石が検出されている。調査時の所見から、検出面はVI層下位・VI層に分けて掲載する。

VI層下位検出集石（第88～92図 集石206～212号）

集石206号から212号はVI層下位から検出された。分布はほぼ全ての集石が調査区南側に集中している。4基の集石に土坑が伴っていた。

集石206号から209号には土坑が伴っている。

集石206号は216個の礫から構成され、土坑の内外に礫が集中している。礫の分布状況から、土坑の深さは原形をとどめている可能性も考えられる。土坑は円形で、直径約100cm、深さ約25cmを測る。礫の石材は半数が安山岩であり、礫の大きさは5～10cm大の礫を主体としているが、11～15cm大の礫や、それ以上の大きさの礫も多い。集石の北側には鬼界カルデラ噴火に関連する地震に伴う噴砂孔が確認できるが、遺構への影響は少ないと考えられる。

集石207号は長軸約110cm、短軸約93cm、深さ約25cmの楕円形の土坑を伴っている。礫は土坑内に集中するが、集石の中心部から南側にかけては礫が見られない、または非常に少ない状況である。また、西側の礫は床着状態で検出されているが、北側から東側の礫は床から浮いた状態で検出されているのが特徴である。西側の礫の状況からすると、土坑は検出面よりさらに上から掘り込まれていたと考えられる。集石を構成する礫の大きさは5～10cm大の礫を主体とするが、11～15cm大の礫も多い。ただ、集石206号と比較すると16cm以上の礫は少ない。

集石208号は長軸約85cm、短軸約70cm、深さ約8cmの楕円形の土坑を伴っている。礫は土坑内にほぼ集中するが、集石の北側にも散在している。土坑内の礫は床面よりもわずかに浮いた状態で検出されている。90個の礫で構成され、5～10cm大の礫を主体としている。

集石209号は土坑を伴う集石としたが、礫は土坑の床面から完全に浮いた状態で検出されており、また礫は散在し数量も少ないため、流れ込みの礫である可能性も高い。

集石210号から212号は土坑を伴わず、VI層下位で検出されている。集石210号は調査時点では1基の集石として報告されていたが、礫のレベルの違いや、その分布状況から最大で3基の集石である可能性が考えられる。まず中央に円形状の礫の集合が確認できる。その北側には30cm大の礫を中心に、わずかに低いレベルで礫の集合が確認できる。また、南側にも散礫状態ではあるが、さらに低いレベルで礫の分布が確認できる。

集石211号は76個の礫が散在している。5～10cm大の礫を主体としている。土器片が2点出土しているが、小片のため詳細は不明である。

集石212号はVI層とVII a層の境目で検出された集石である。手向山式土器が出土している。集石を構成する礫は、安山岩とホルンフェルスがそれぞれ6：4の割合で構成されている。また、礫の大きさは6～10cm大が75%を占める。

VI層検出集石（第93～114図 集石213～276号）

集石213号から276号はVI層中から検出された。分布は調査区の南側から西側に偏り、北側や東側にはわずかにしか分布しない。2基の集石に土坑が伴っていた。

集石213・214号は土坑を伴っている。集石213号はややいびつな楕円形の土坑を伴い、長軸約90cm、短軸約68cm、深さ約12cmを測る。

集石214号はややいびつではあるが、円形の土坑を伴っている。直径約75cm、深さ約18cmを測る。土坑の立ち上がりは床面から急に立ち上がる形状である。礫の石材は安山岩を主体とし、6～10cm大の礫が最も多いが、11～15cm大の礫が目立つ。

集石215号から233号は、礫の集中域を持つ。集石215・216・217号は隣接して検出された。上面観から3基としたが、検出レベルはほぼ同レベルであり、特に集石216・217号の境界はやや曖昧なため、集石216・217号は1基の集石である可能性も考えられる。集石215号からは塞ノ神式土器が出土している。礫は3基合わせての数ではあるが、石材は安山岩、大きさは6～15cm大の礫を主体としているが、流紋岩の割合も約15%と高くなっている。

集石218・219号も隣接して検出された。断面図を見ると、2つの集石間には明らかに境目が確認できるため、2基の集石である可能性が高い。集石219号は6～10cm大と11～15cm大の礫がほぼ同程度出土しているのが特徴である。遺物としては前平式土器が出土している。

集石220号は深さ約35cmに渡り礫が整然と検出されている。確認した限りでは、明確な掘り込みは確認できなかったが、集石の両端の立ち上がりが、ほぼ垂直であるため、掘り込みがあった可能性が高い。石材はホルンフェルスの割合が安山岩よりも高くなっているという特徴を持つ。

集石221号は、直径約75cmの円の中に礫が集中する。石材は安山岩、6～10cm大の礫を主体としている。

集石222号は南から北へ緩く傾斜する斜面に作られている。北側の礫は斜面の下方へ転がった礫であると考えられる。量的には安山岩が多いが、ホルンフェルスの割合も高い。また、11～15cm大の礫も目立つ。

集石223号は礫の数量こそやや少ないが、集石221号とよく似た特徴を持つ。直径75cmの範囲に礫が集中する集石であり、塞ノ神B式土器2点が出土しており、石材は安山岩、5～10cm大の礫を主体とする。

集石224号からは炭化物が出土している。

集石225号の石材はホルンフェルスが51%と、半数以上がホルンフェルスで構成されている。

集石228号から233号は、集石の構成礫数が50個以下となっている。全て安山岩で6～10cm大の礫を主体としている。特に集石229・230号は約8割が安山岩である。集石231号では被熱した礫が確認されており、集石233号では炭化物が出土している。

集石234号から276号は礫の集中域を持たない。

集石234号は128個の礫で構成される。ある程度集中している礫と、周辺の散在している礫には明らかにレベル差が見られるため、同一集石を構成していた可能性は低い。VI層で検出された集石は、ほぼ全ての集石が6～10cm大の礫を主体としている。そのなかで、この集石234号のみが0～5cm大と11～15cm大の礫の割合が高くなっている。このことから見ても、集石234号を構成していた礫以外の礫もカウントしている可能性が高いと考えられ、周辺の散在している礫は集石234号関連の礫ではない可能性が高い。志風頭式土器と石坂式土器が出土している。

集石235号は125個の礫で構成される。明確な集石の中心は不明であるが、礫のレベルから見ると、遺構の南西側の礫のレベルがやや低いため、そこに凹みを作り、集石を作った可能性が考えられる。塞ノ神B式土器が1点出土している。

集石237号は北西から南東方向に緩く傾斜する斜面に作られている。92個の礫で構成され、安山岩49%、ホルンフェルス43%と、安山岩とホルンフェルスの割合がほぼ同程度となっている。このように、VI層中の集石に関しては、VII層中検出の集石と比較して、ホルンフェルスの割合が高い集石が多くみられる。

集石238号からは、塞ノ神B式土器が3点出土している。その他にも、明確ではないが塞ノ神式土器と考えられる土器小片が5点出土している。

集石239号は88個の礫で構成され、安山岩45%、ホルンフェルス32%と、安山岩主体とは言えない礫構成比となっている。

集石240号を構成する礫は広く散在している。被熱した礫が確認されている。

集石242号は73個の礫で構成され、安山岩40%、ホルンフェルス38%と、その割合は同程度となっている。

集石243号は構成礫の81%が安山岩であり、主体を成している。集石245号も同様に安山岩を主体としている。このように、安山岩の割合が8割前後の、安山岩を主体とする集石もVII層に引き続き確認できる。集石243号からは、塞ノ神B式土器が出土している。

集石246号は安山岩48%、ホルンフェルス37%と、ホルンフェルスの割合も高い。塞ノ神B式土器が出土して

いる。

集石249号は安山岩を主体としている。遺物としては、塞ノ神B式土器が出土している。また集石の周辺からも塞ノ神B式土器が多く出土している。

集石251号から276号は構成礫数が50個未満となっている。

集石251号は安山岩71%と、安山岩を主体としているが、砂岩の割合が18%と、安山岩に次ぐ割合になっている。被熱した礫が確認されている。

集石252号は安山岩43%、ホルンフェルス41%と、安山岩とホルンフェルスの割合がほぼ同程度となっている。

集石254号はホルンフェルスが58%と高い割合となっている。礫は散在し、赤化した礫や破碎した礫が検出された。塞ノ神B式土器が出土している。

集石255号は安山岩を主体としている。集石255・256号からは塞ノ神B式土器が出土している。

集石258号は安山岩44%、ホルンフェルス38%と、安山岩とホルンフェルスの割合がほぼ同程度となっている。塞ノ神B式土器が出土している。

集石260・261号は安山岩を主体としている。集石261号は地層横転部分で検出されている。ここで確認された地層横転は、その検出状況からV層からVIII層で起こっているため、少なくとも縄文時代前期以降に起こったと考

えられる。集石261号はその横転のVI層部分から検出されており、地層横転の影響を受けたには礫の出土状況は整然としている。

集石264号は安山岩48%、ホルンフェルス52%と、ホルンフェルスの割合が安山岩よりもわずかに高くなっている。塞ノ神B式土器が14点出土している。その他にも明確ではないが、塞ノ神式と考えられる土器小片6点が出土している。

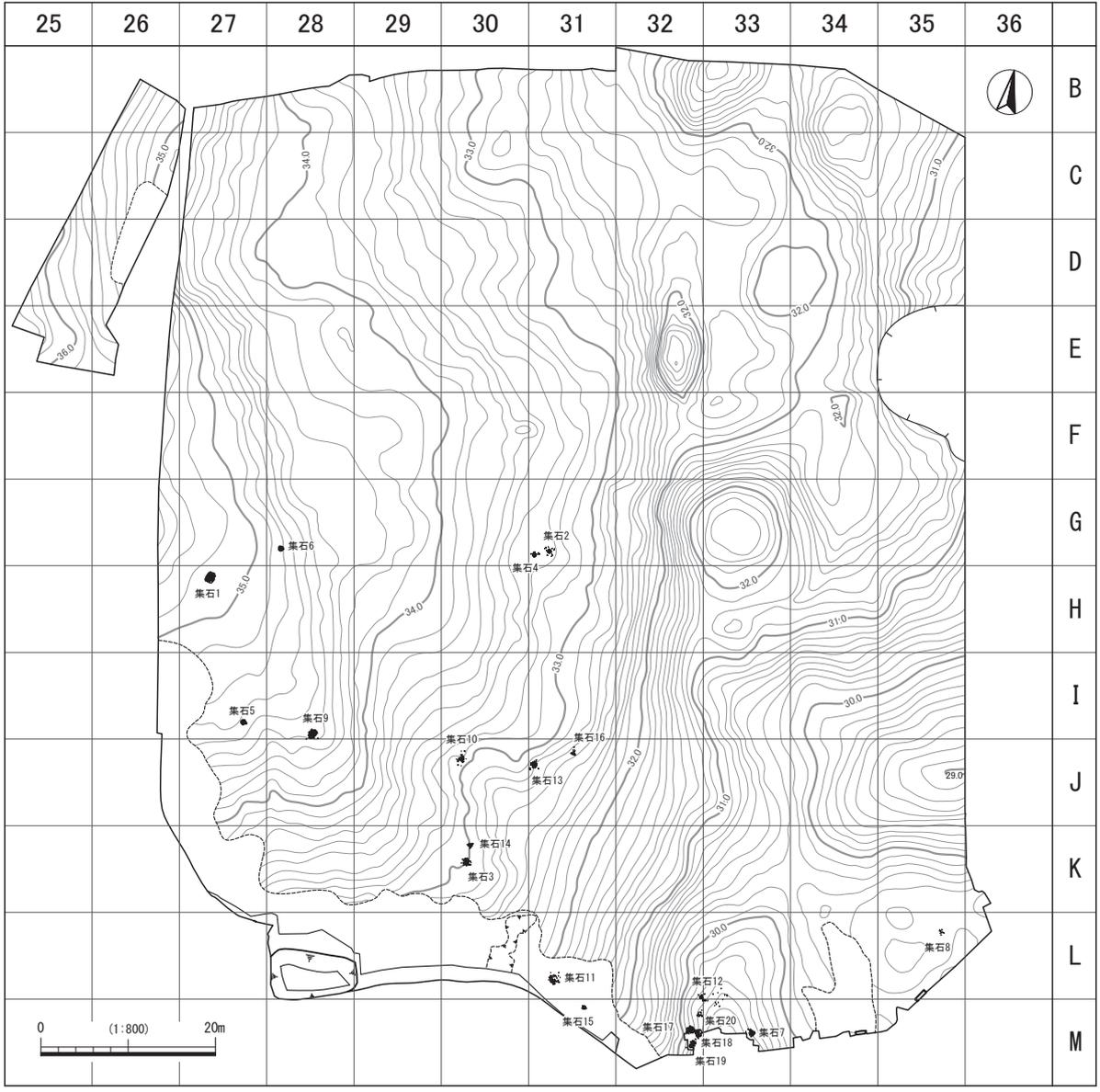
集石265号もホルンフェルスの割合が安山岩よりも高くなっている。被熱した礫も確認された。

集石266号からは塞ノ神B式土器が出土した。

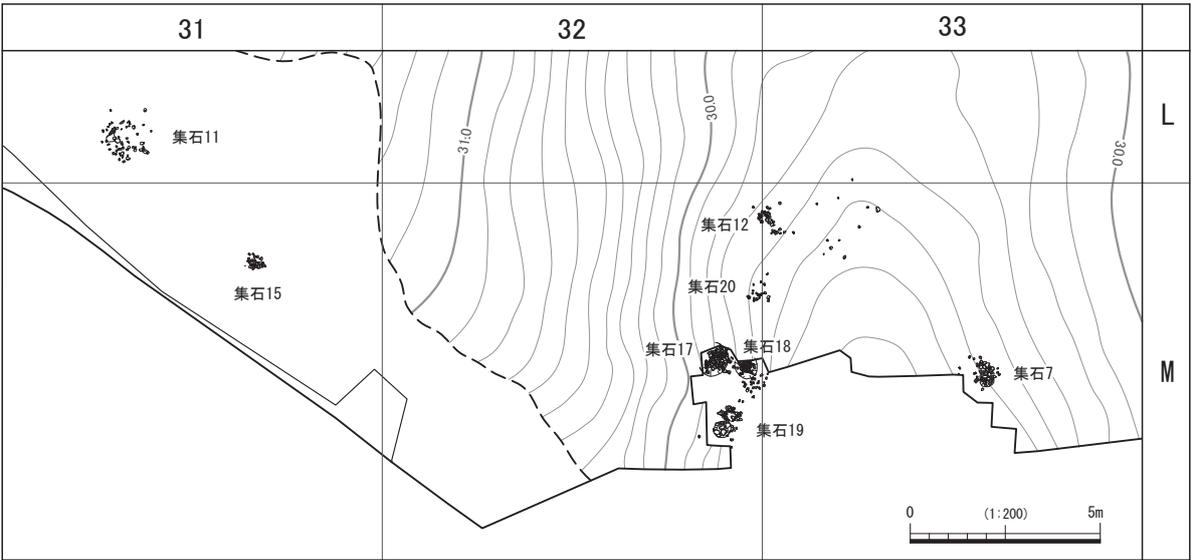
集石269・273・274・276号では被熱した礫が確認されており、集石270号からは炭化物が出土している。

VI層検出集石について（第13・14表）

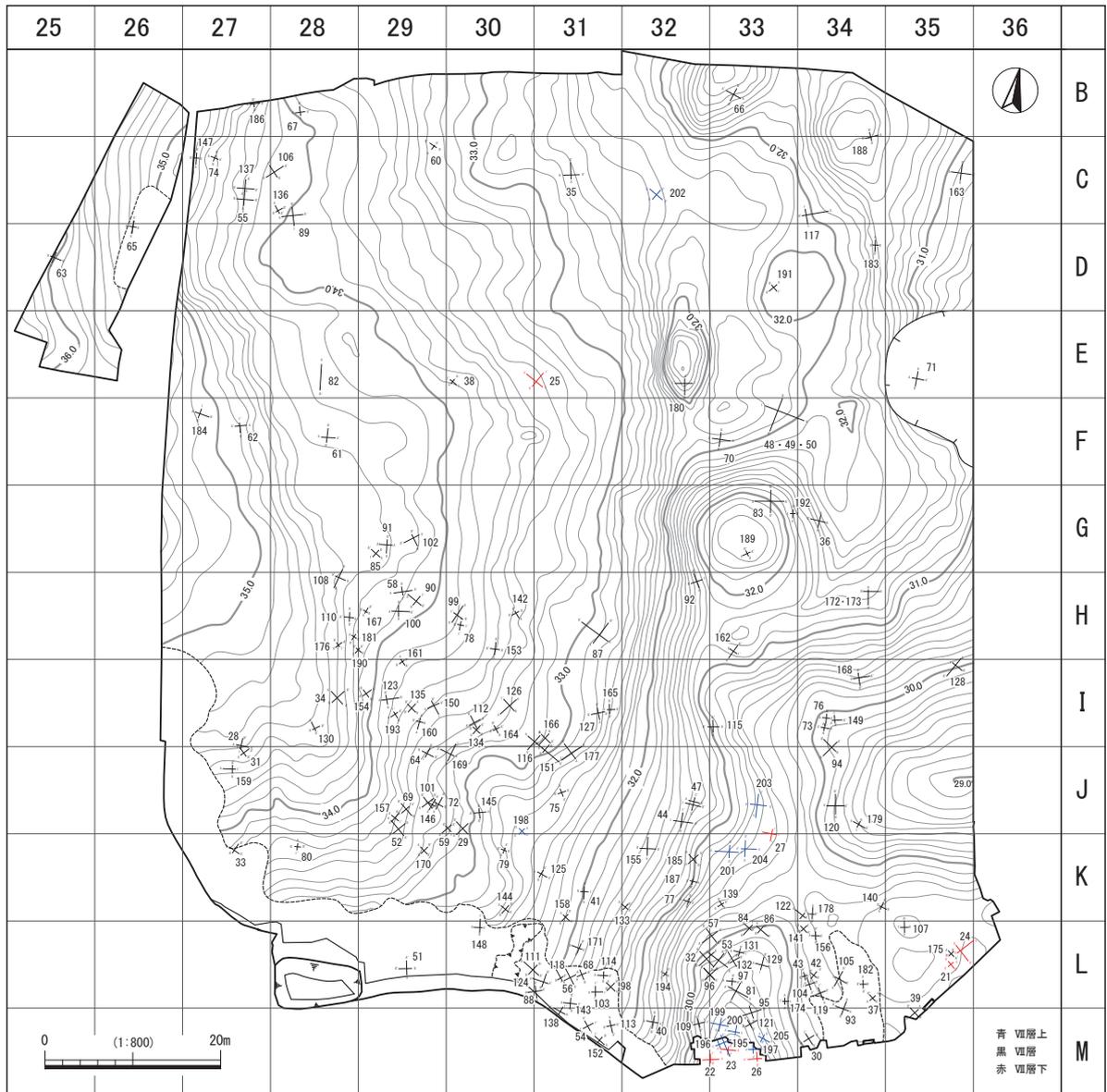
VI層で検出した集石の多くから塞ノ神B式土器が出土している。土坑を伴う集石の割合はVII層と比較すると少なくなっている。礫の大きさに関してはVII層から引き続き、6～10cm大の礫を主体とするものがほとんどであるが、集石を構成する礫の石材に関しては、安山岩を7割以上使用するような集石の割合が減り、ホルンフェルスの割合が高くなるもの、または安山岩とホルンフェルスの割合が近くなるものが多くなる傾向が見られた。



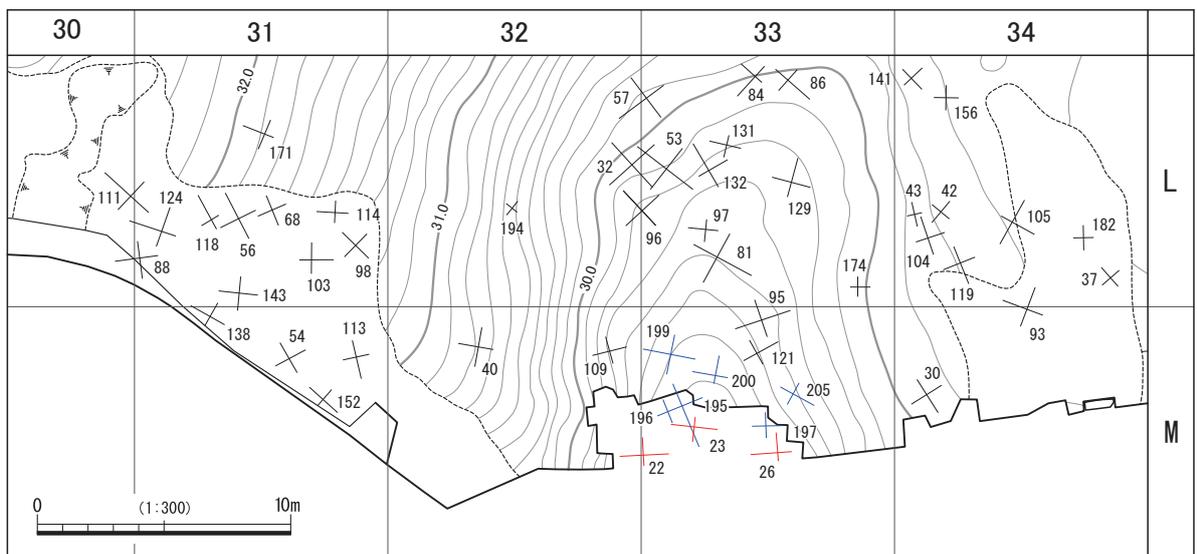
Ⅶ層上面コンタ図



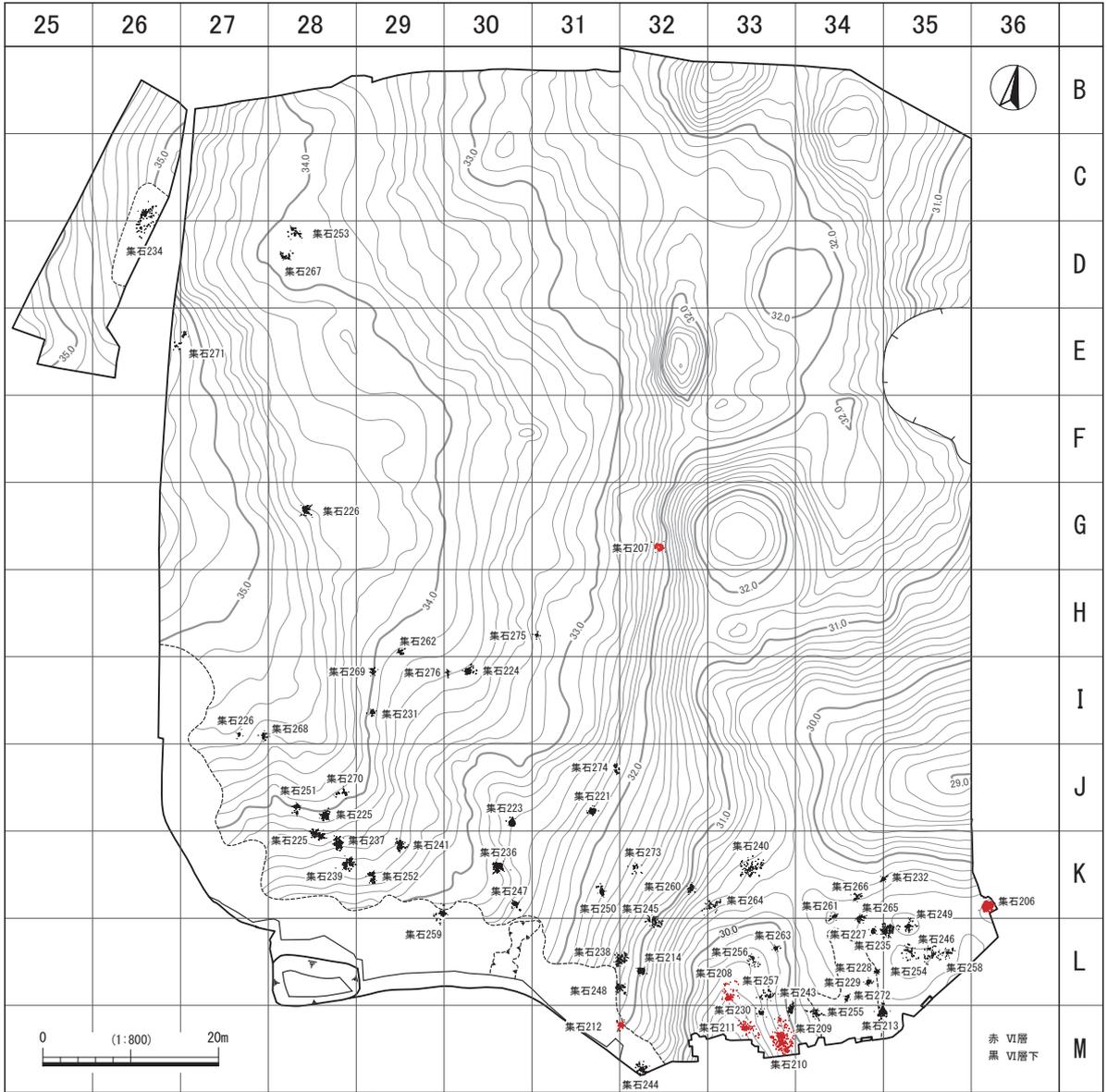
第11図 縄文時代早期Ⅶb層検出集石配置図



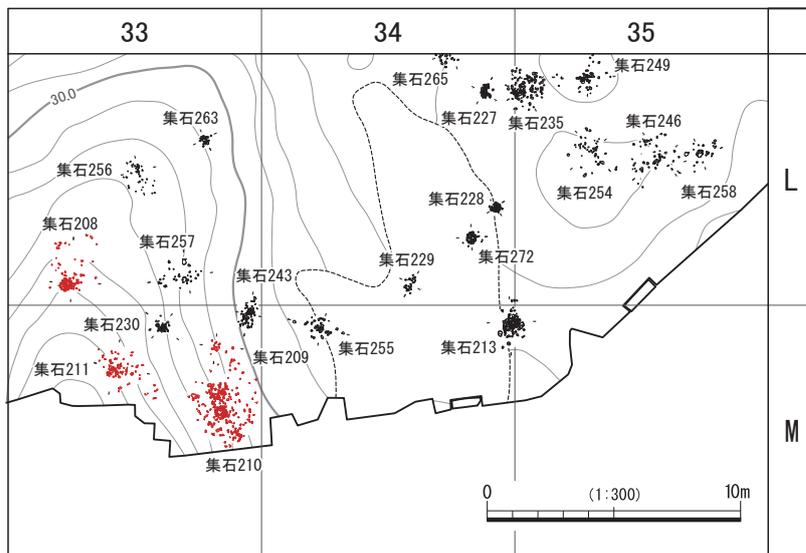
Ⅶ層上面コンタ図



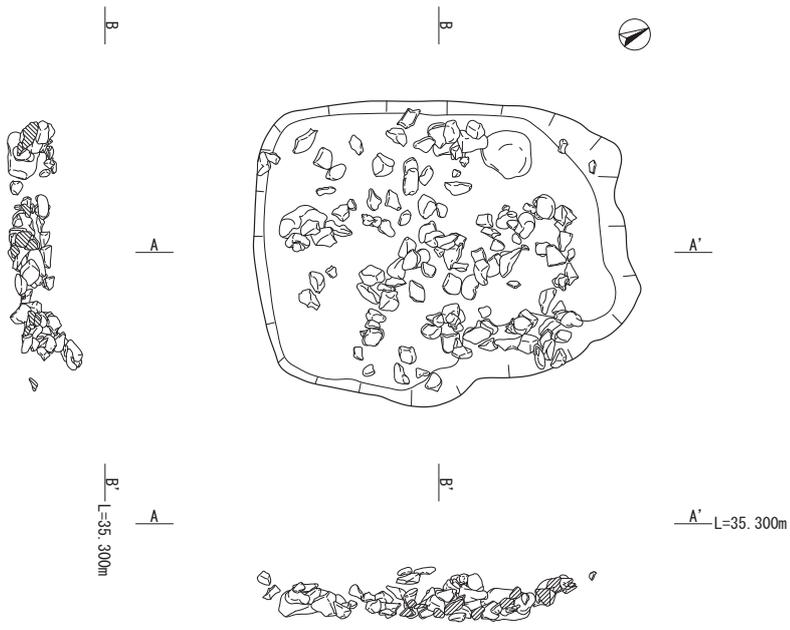
第12図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石配置図



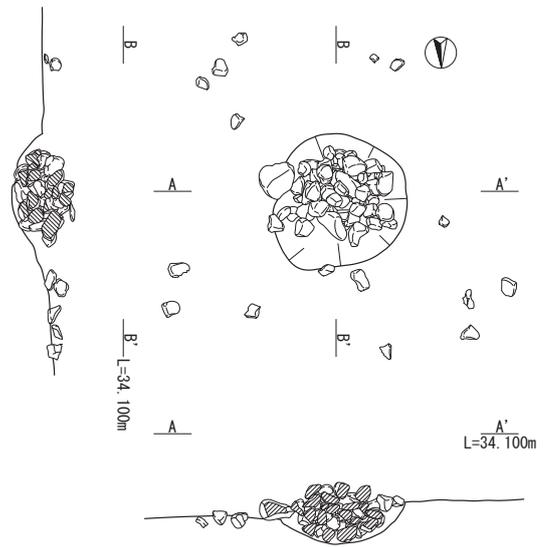
VIII層コンタ図



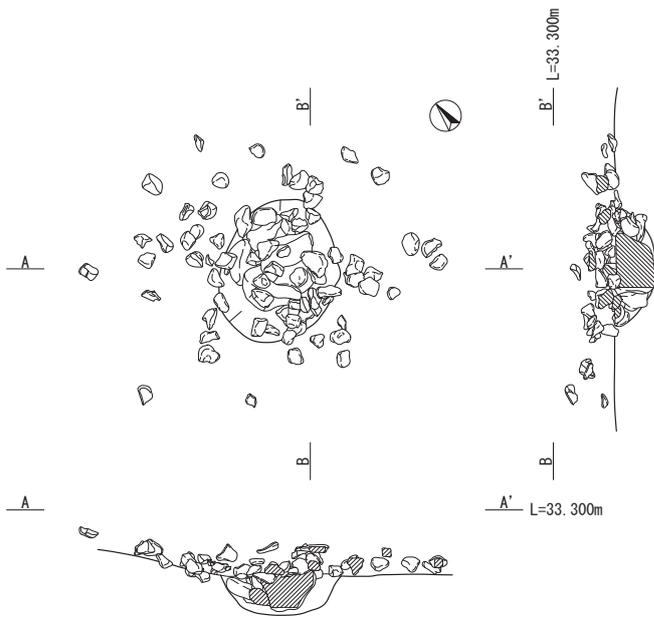
第13図 縄文時代早期VI層検出集石配置図



集石1号



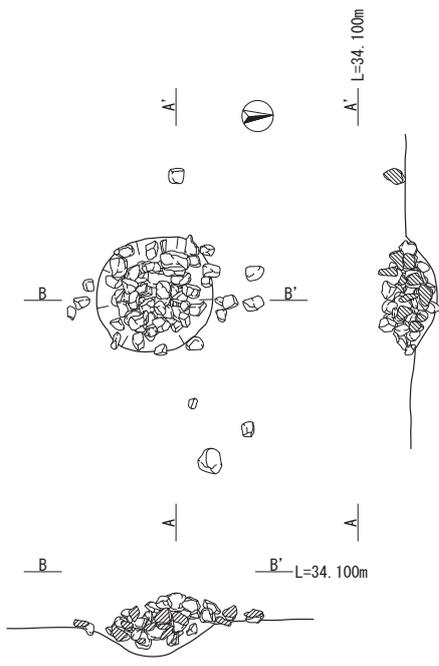
集石2号



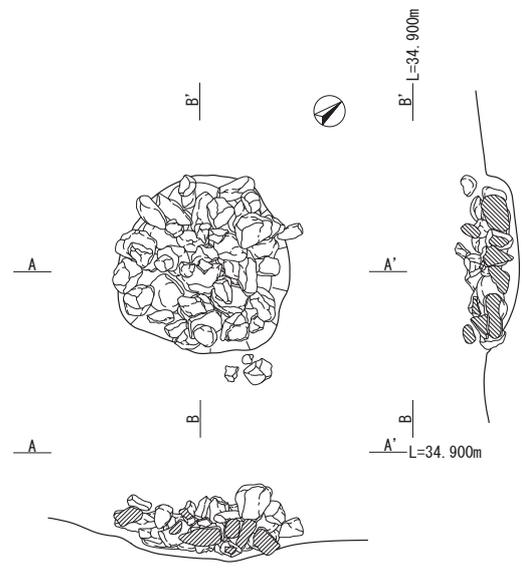
集石3号



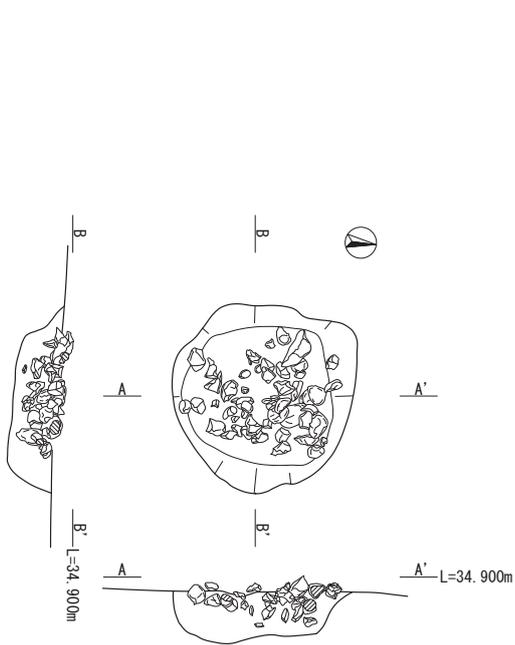
第14図 縄文時代早期Ⅶb層検出集石1



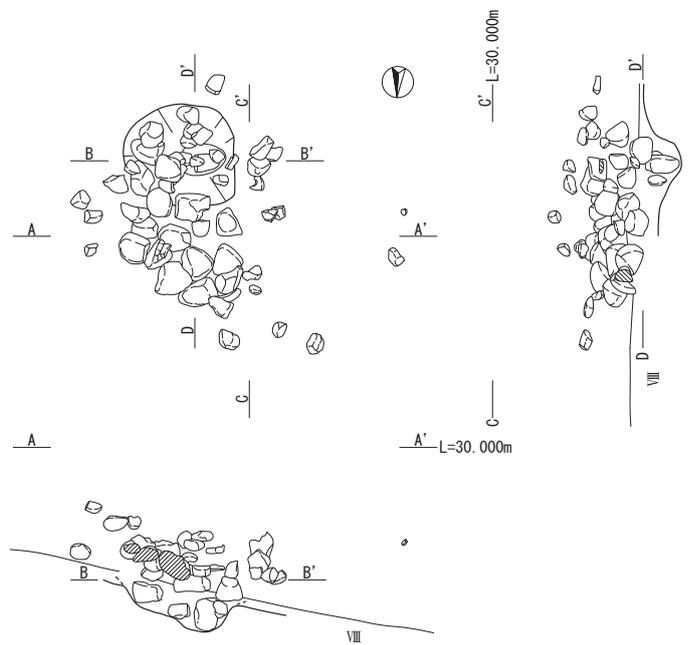
集石4号



集石5号



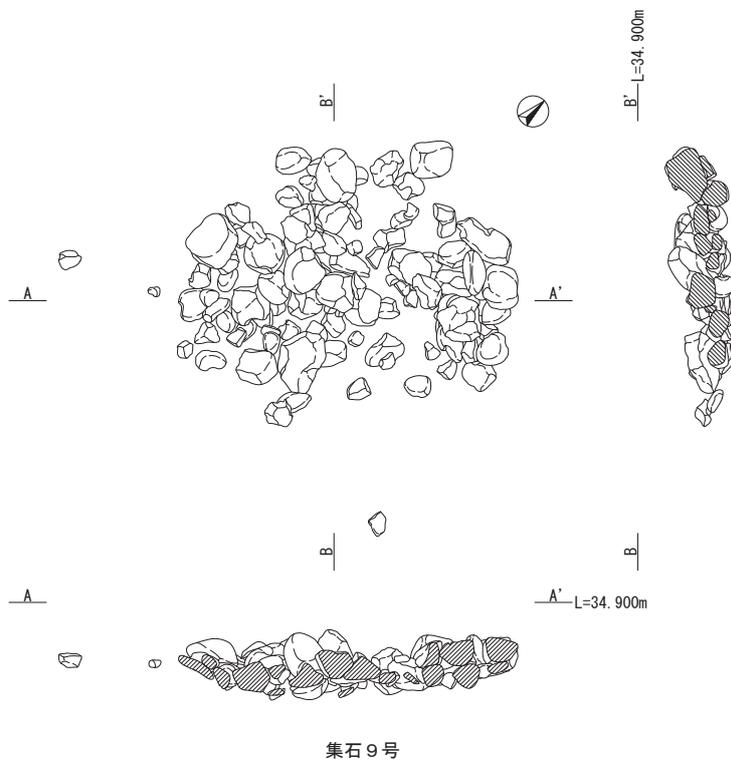
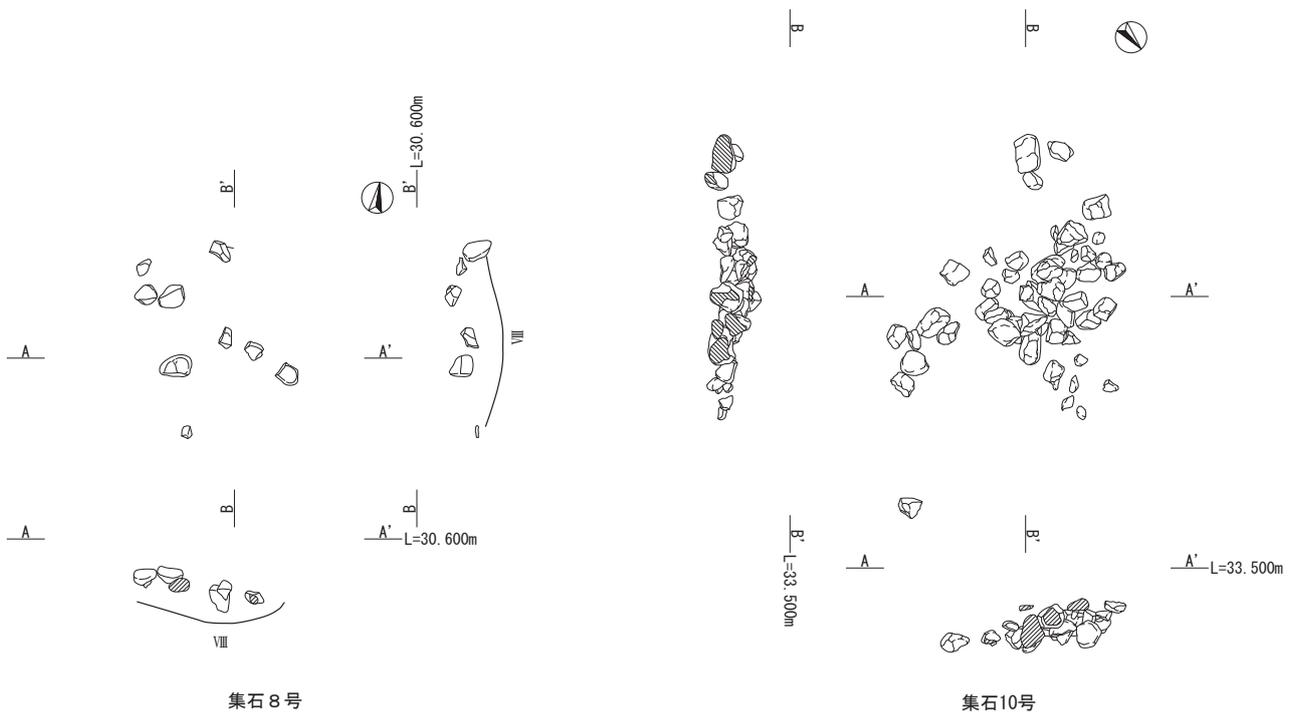
集石6号



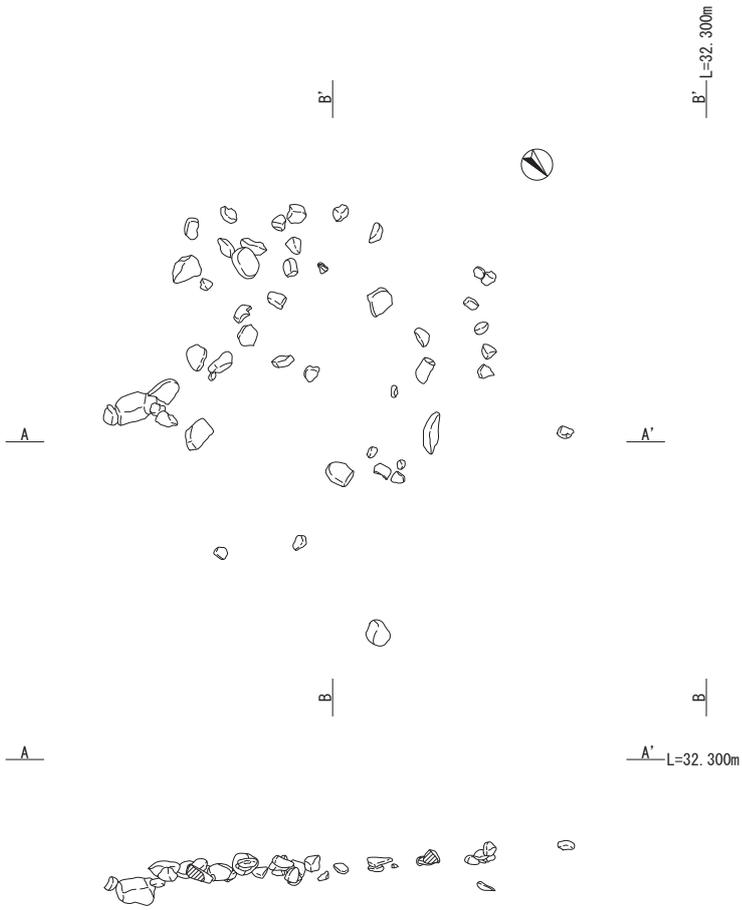
集石7号



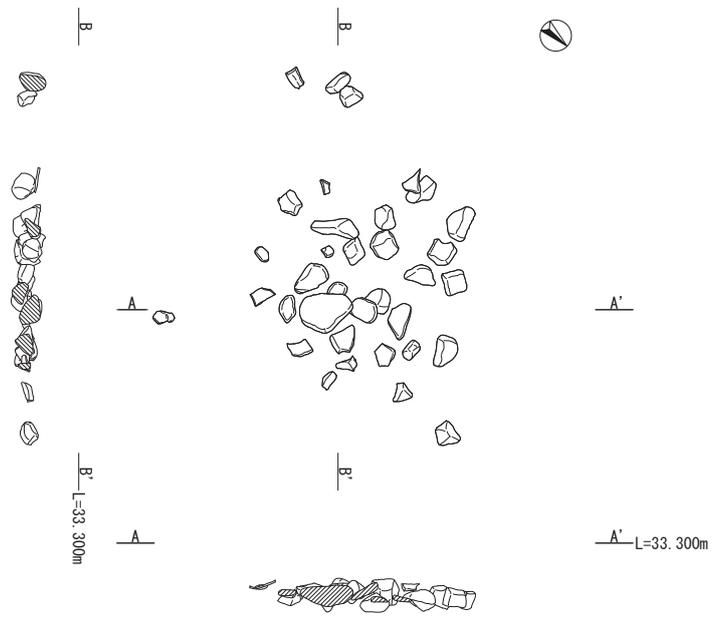
第15図 縄文時代早期VII b層検出集石2



第16図 縄文時代早期Ⅶb層検出集石3



集石11号



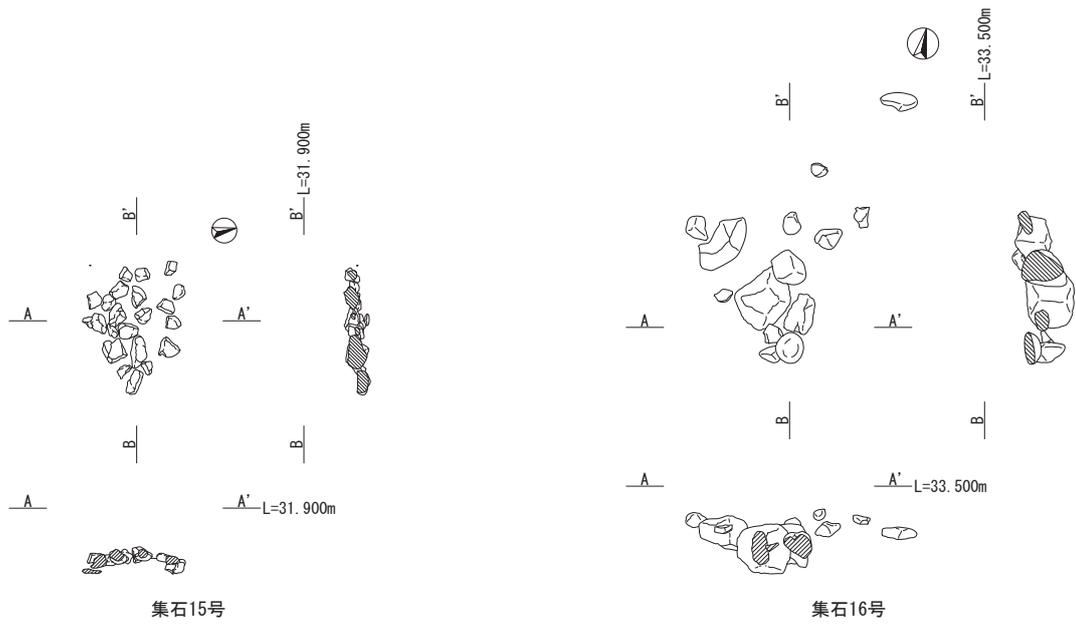
集石13号



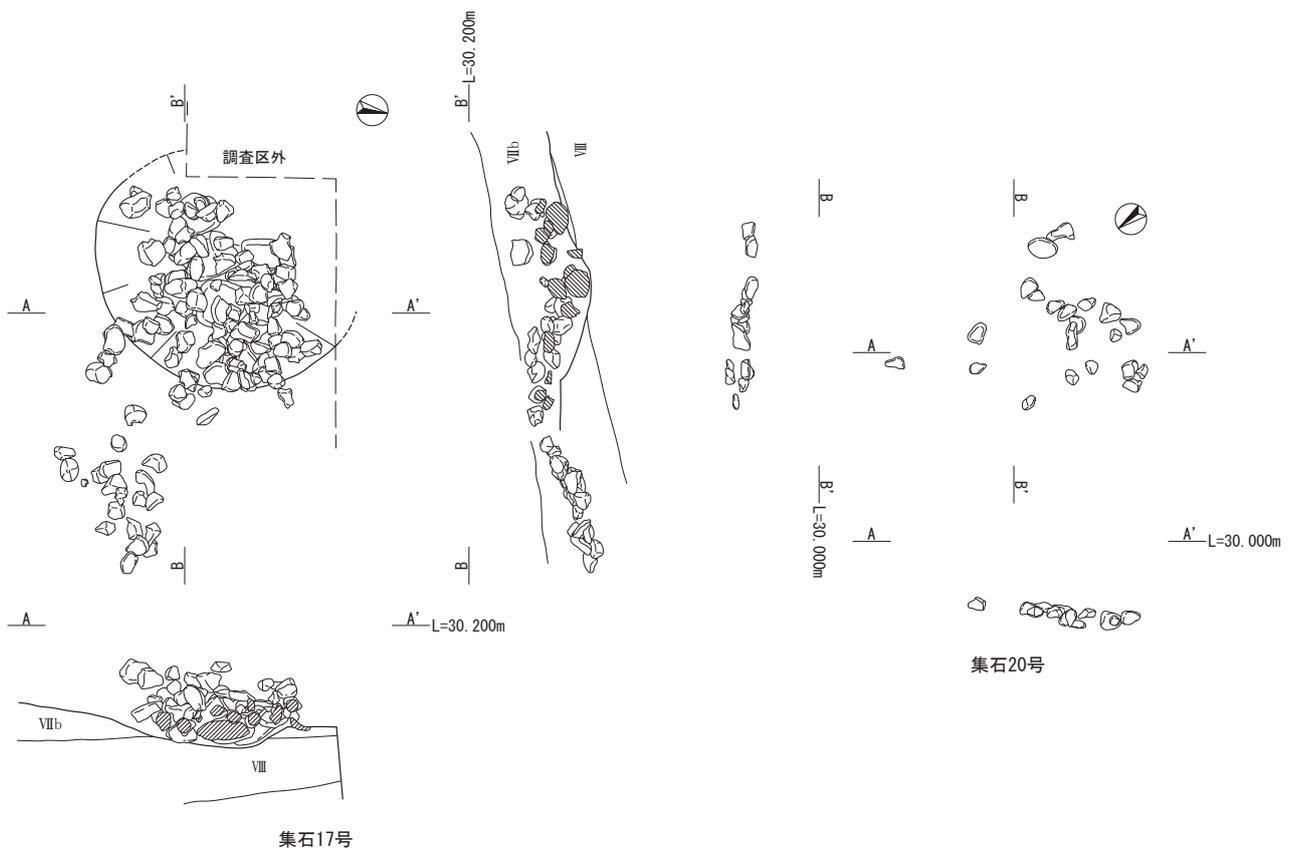
第17図 縄文時代早期VII b層検出集石4



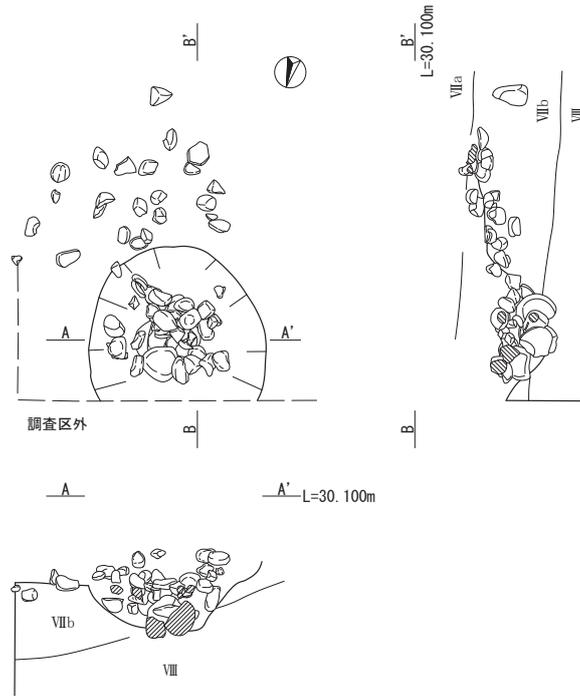
第18図 縄文時代早期VII b層検出集石5



第19図 縄文時代早期Ⅶb層検出集石6



第20図 縄文時代早期Ⅶb層上位検出集石1



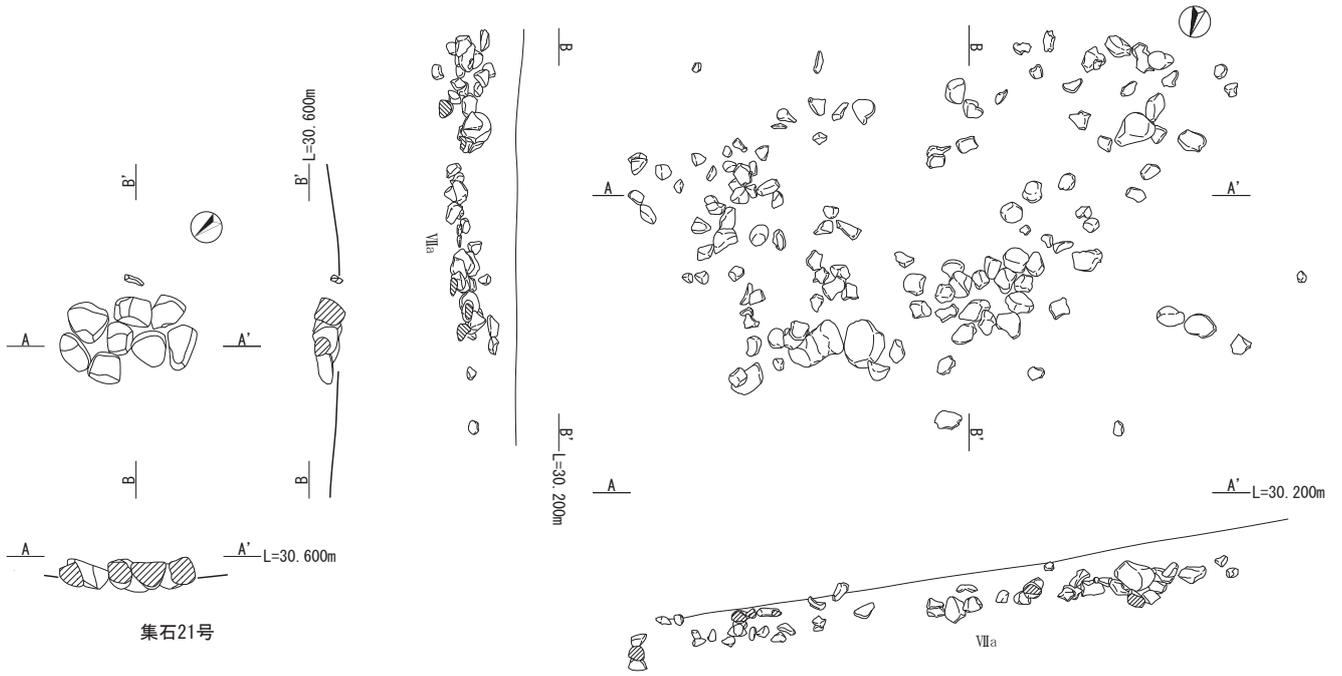
集石18号



集石19号

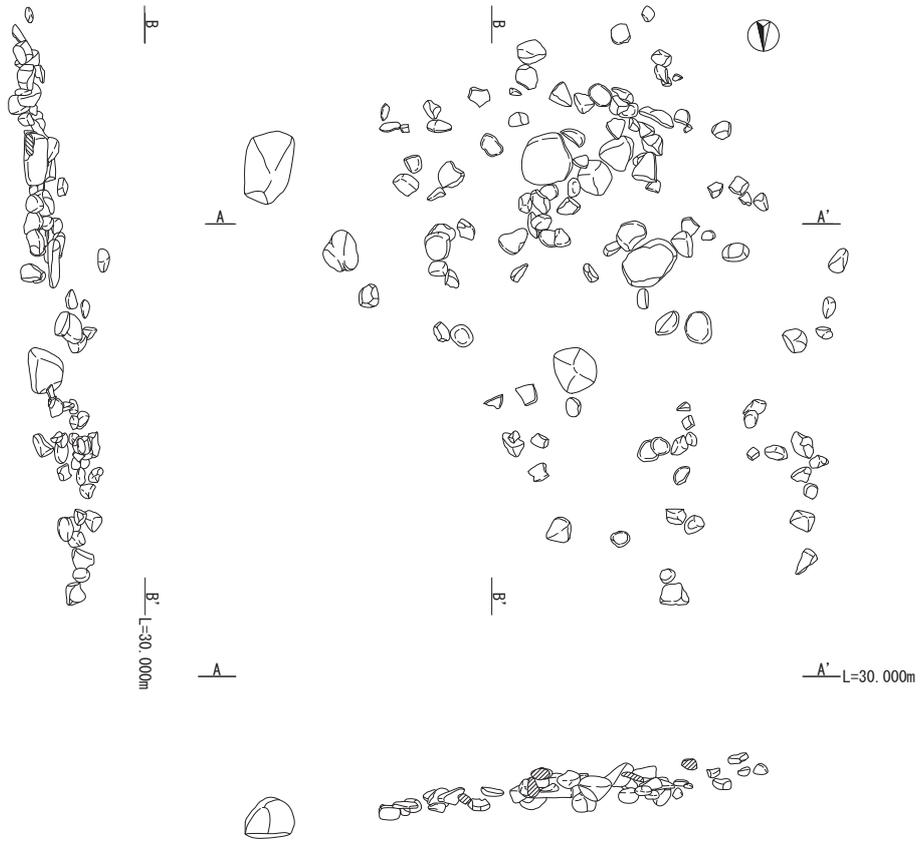


第21図 縄文時代早期Ⅶb層上位検出集石2



集石21号

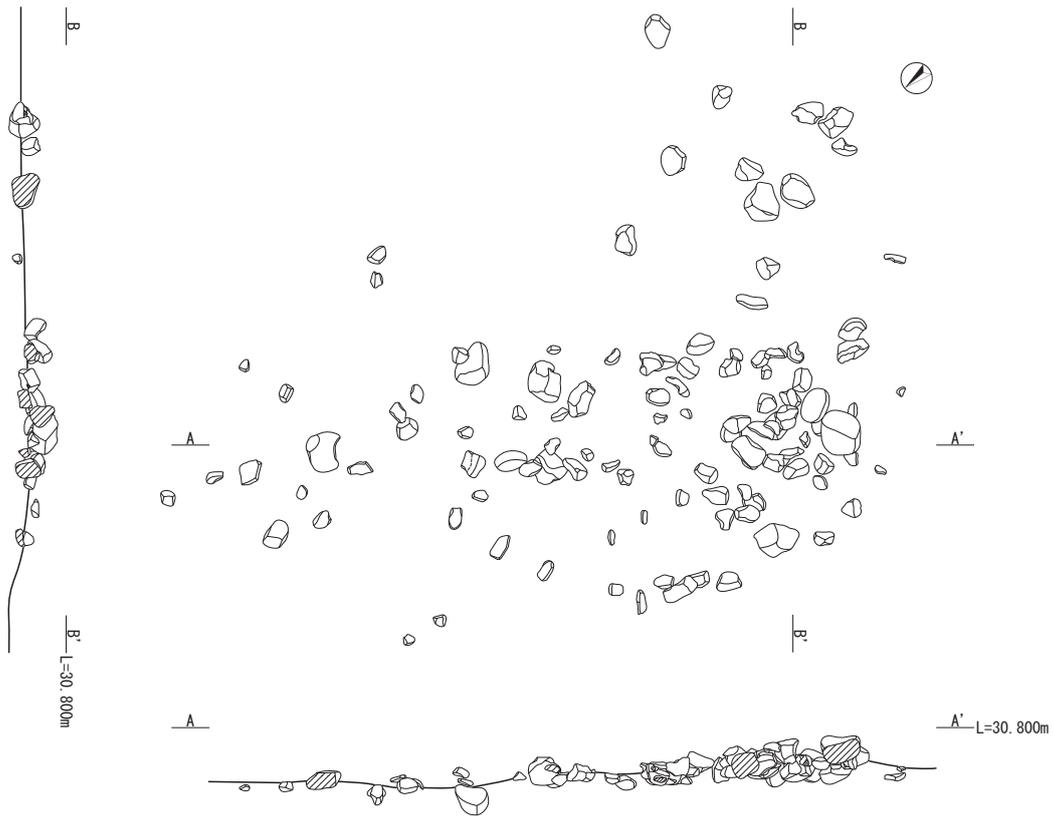
集石22号



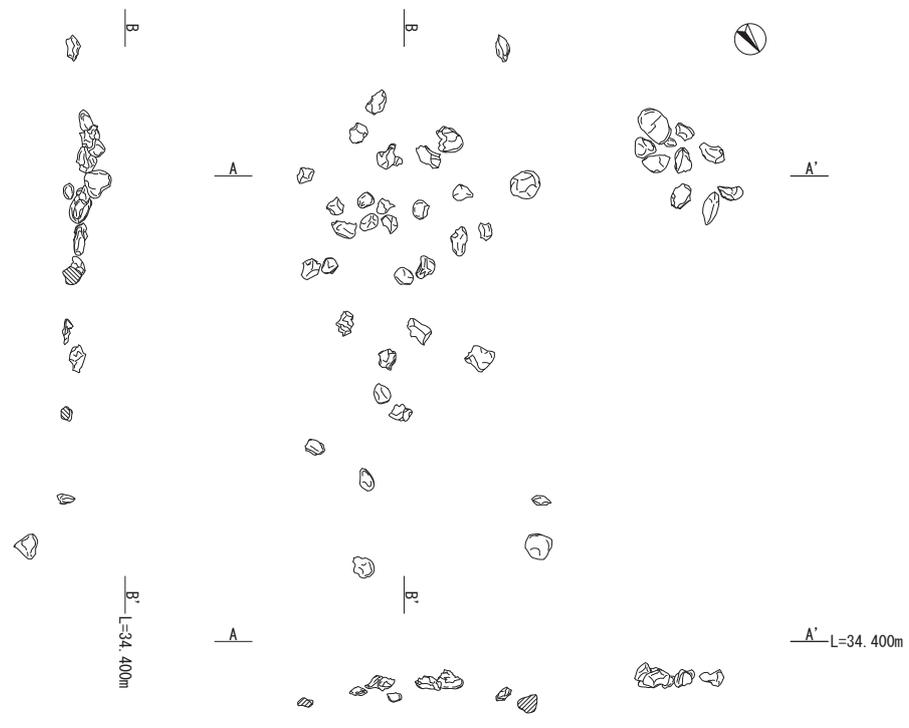
集石23号



第22図 縄文時代早期Ⅶa層下位検出集石1



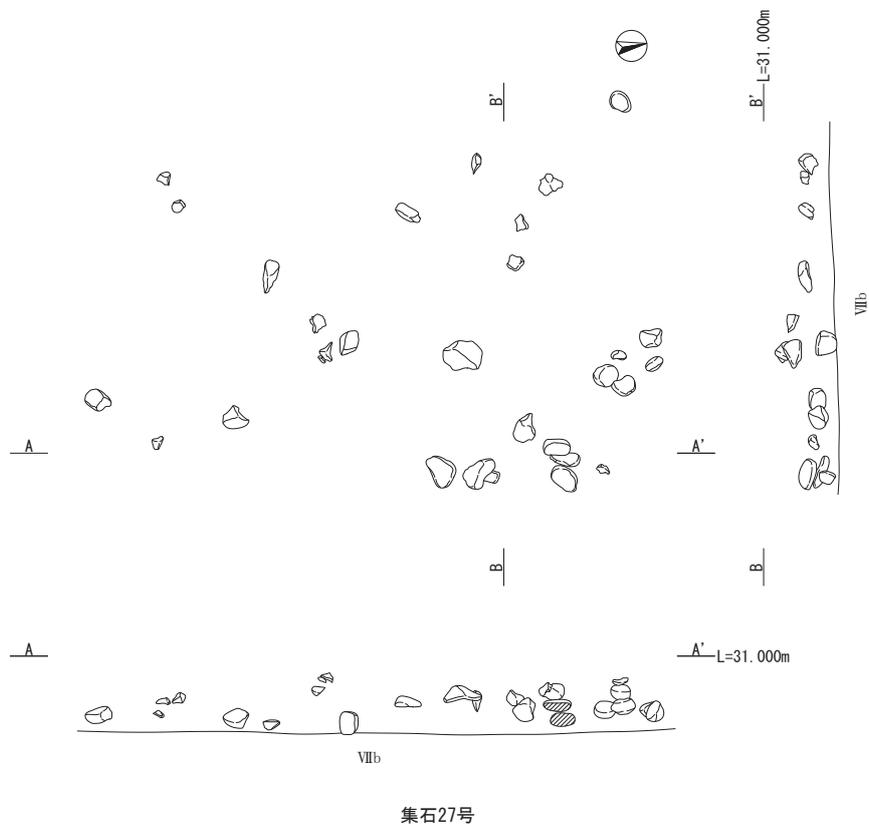
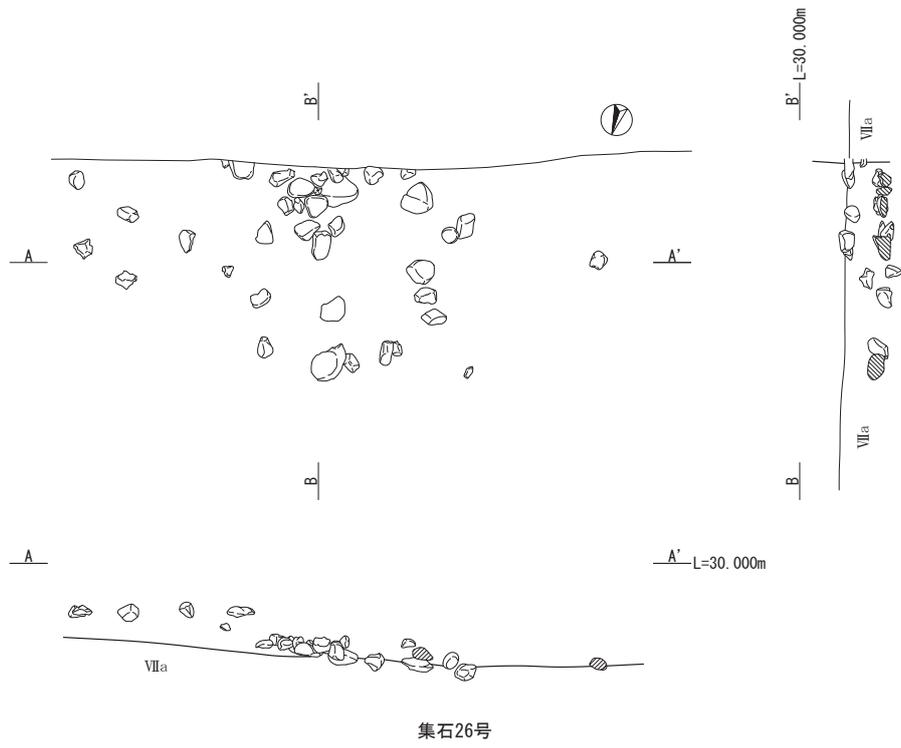
集石24号



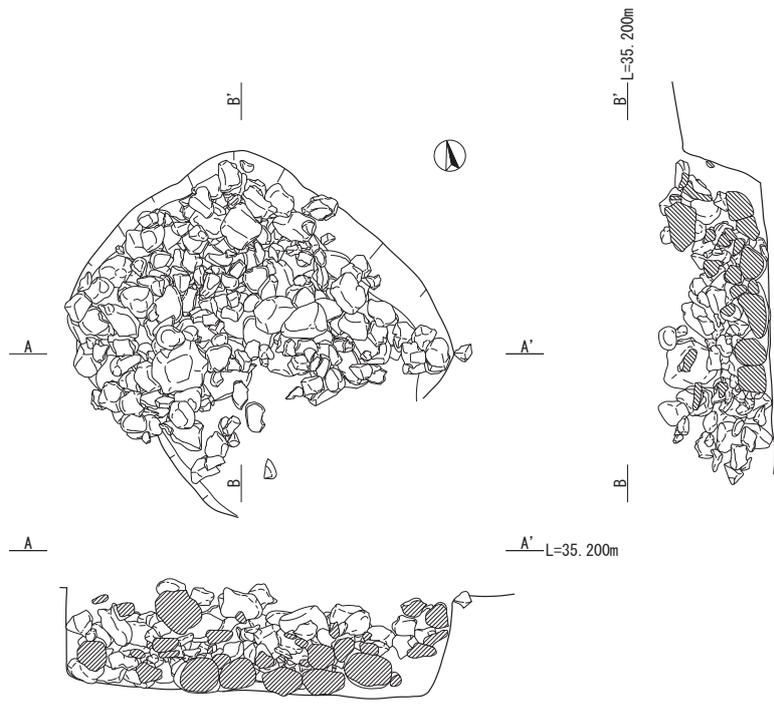
集石25号



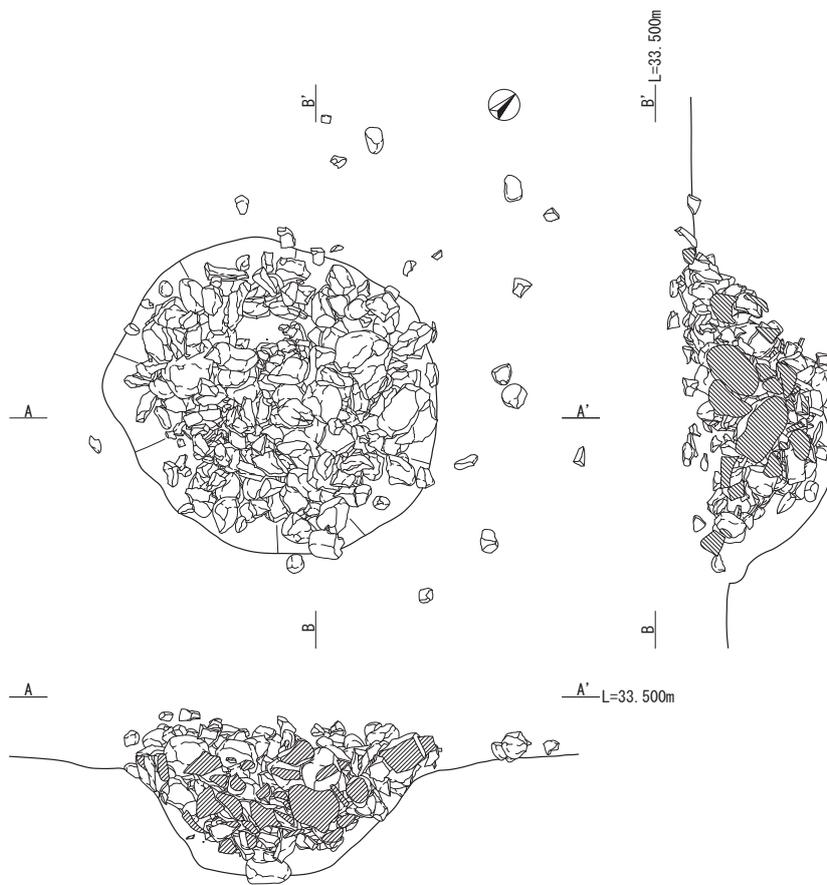
第23図 縄文時代早期Ⅶa層下位検出集石2



第24図 縄文時代早期Ⅶa層下位検出集石3



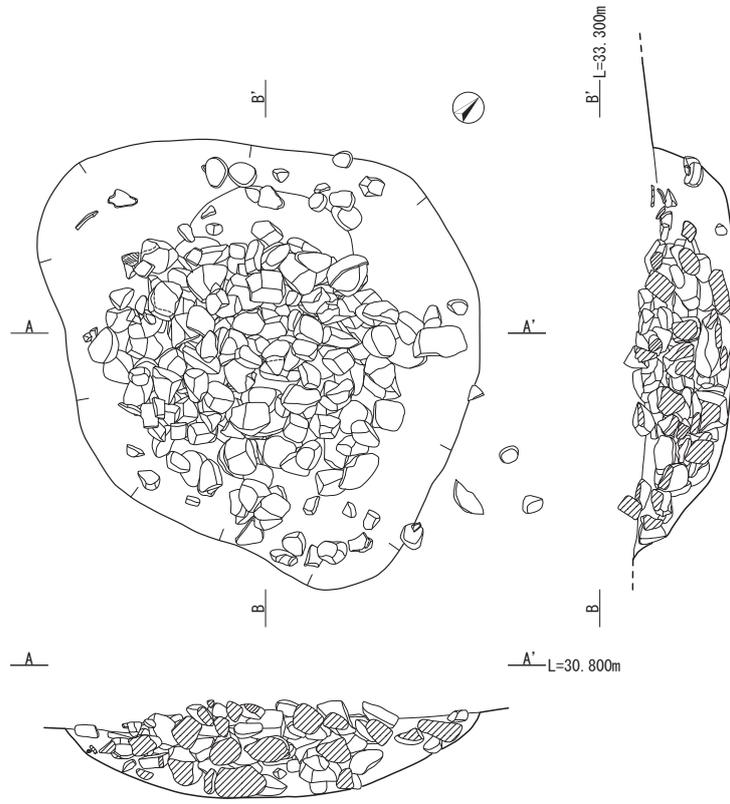
集石28号



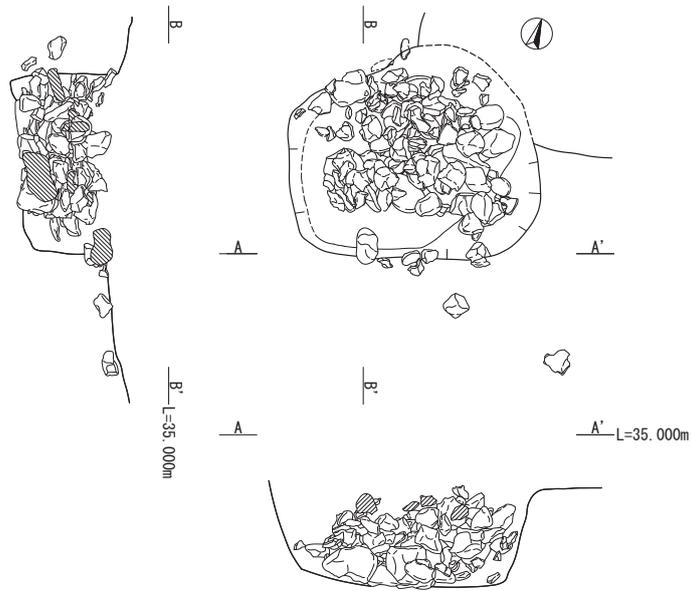
集石29号



第25図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石1



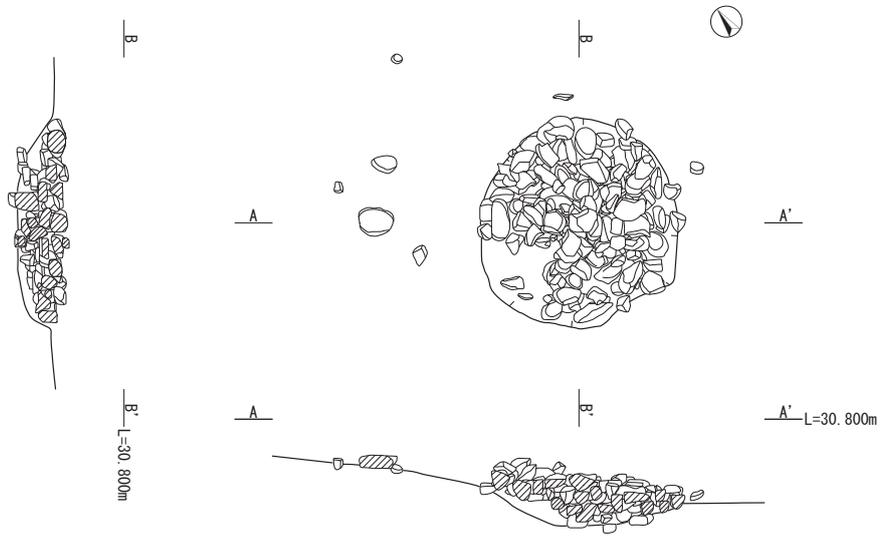
集石30号



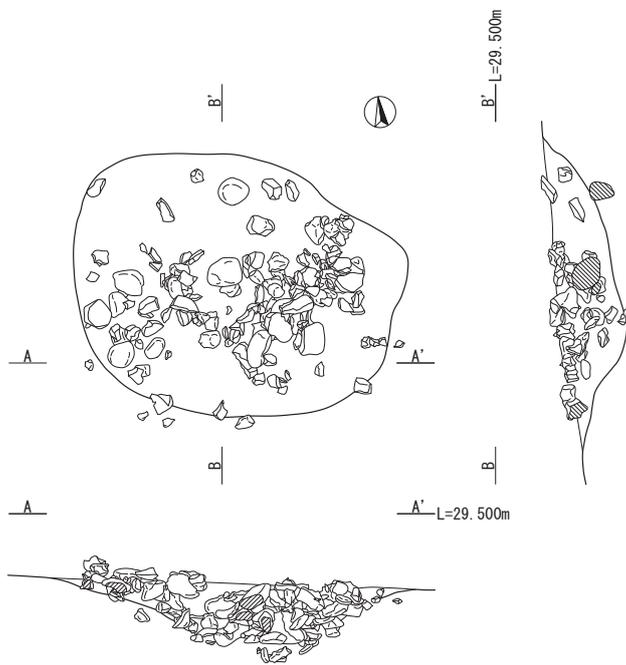
集石31号



第26図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石2



集石32号



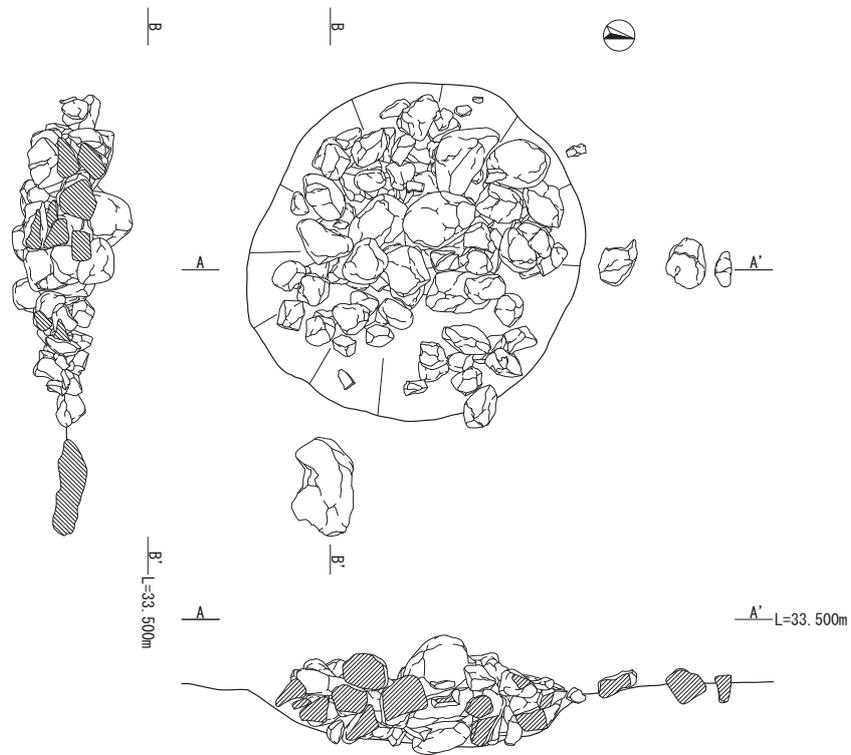
集石33号



第27図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石3



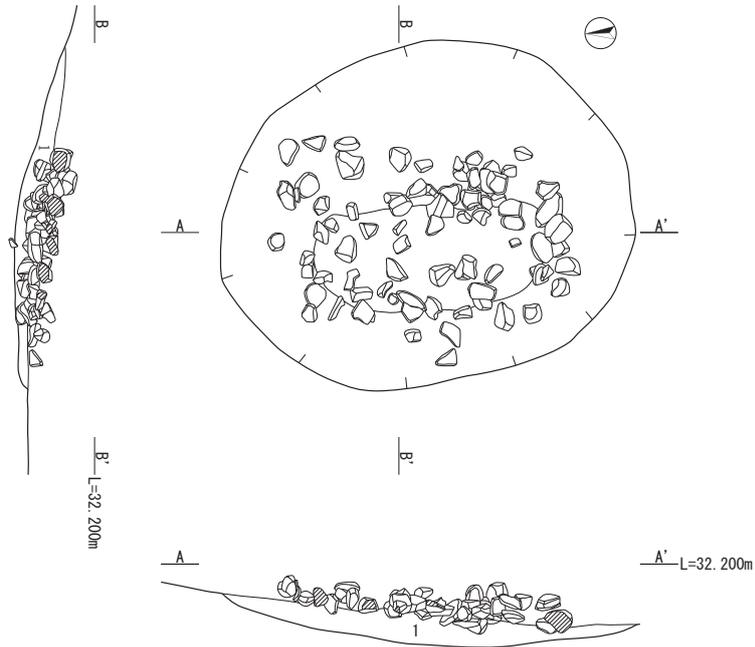
集石34号



集石35号

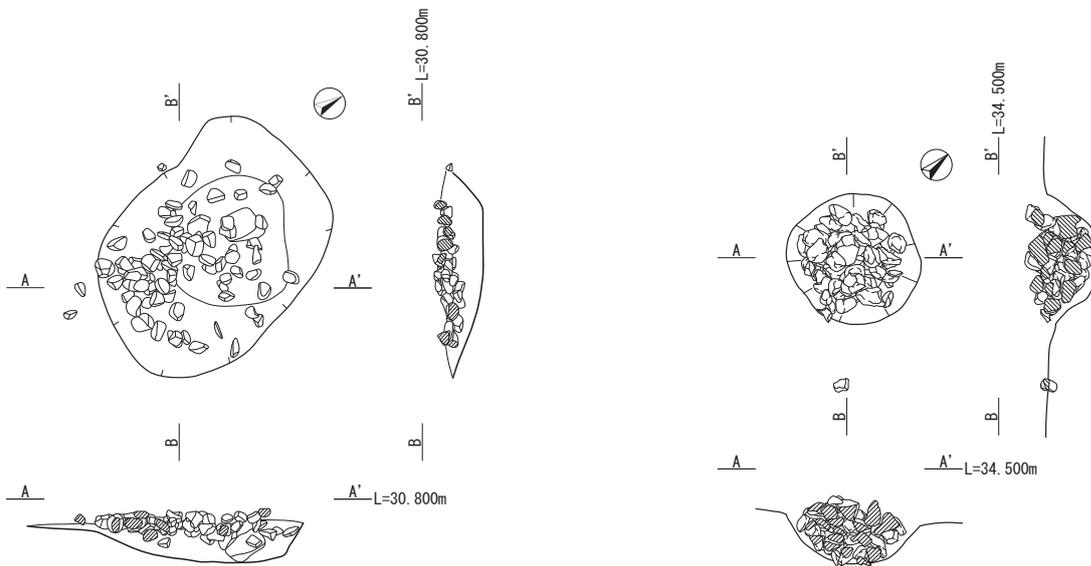


第28図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石4



1: 暗褐色土(10YR3/3)粘性やや強い、しまりなし。

集石36号

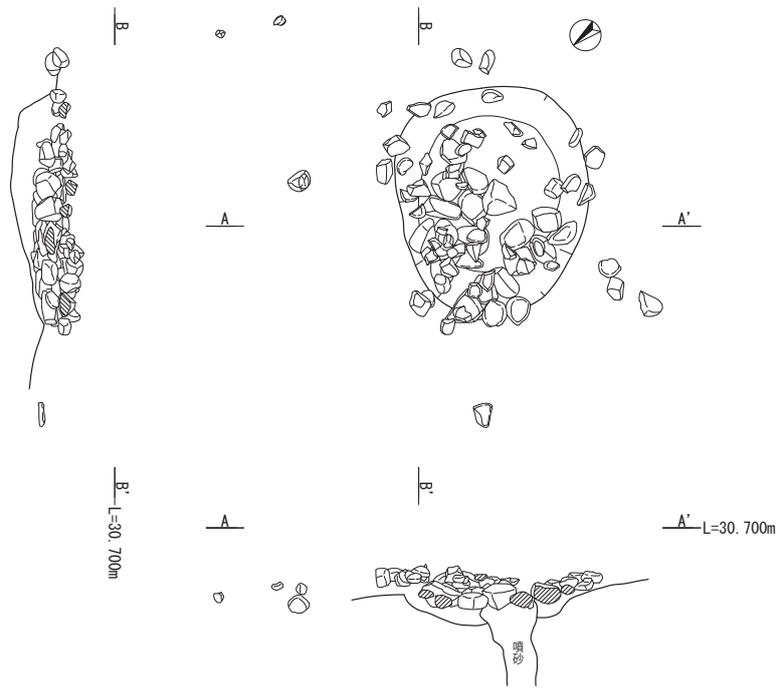


集石37号

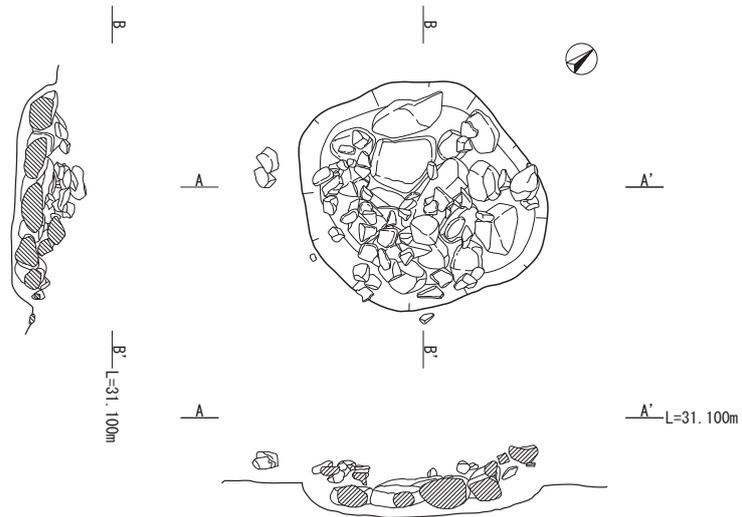
集石38号



第29図 縄文時代早期VII a層検出集石5



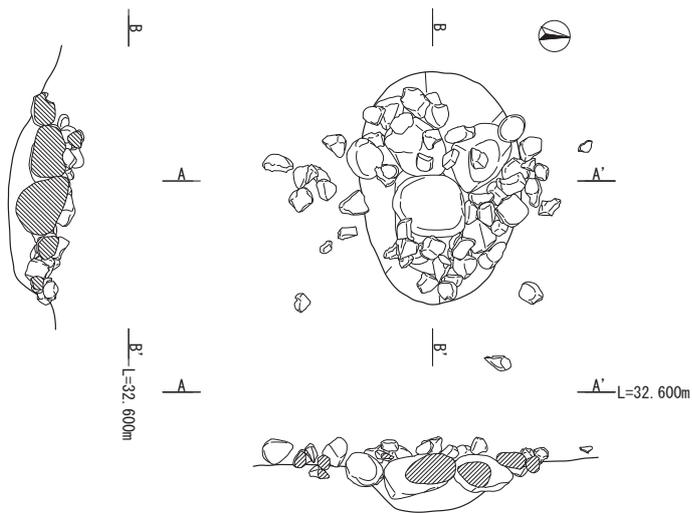
集石39号



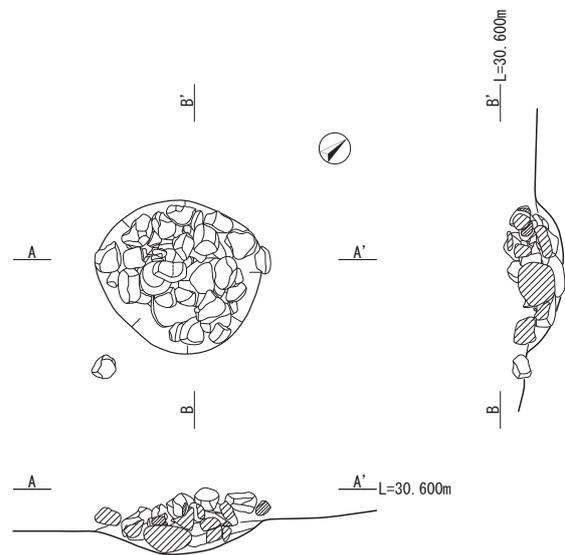
集石40号



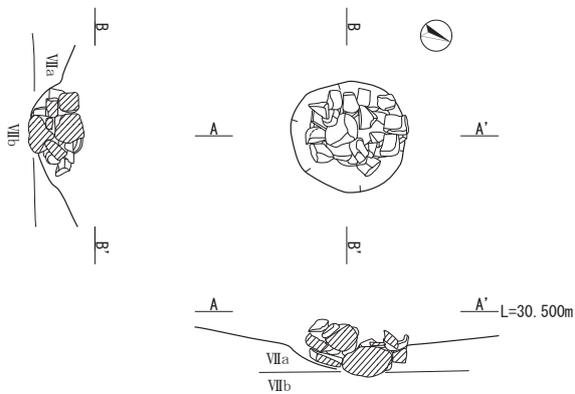
第30図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石6



集石41号



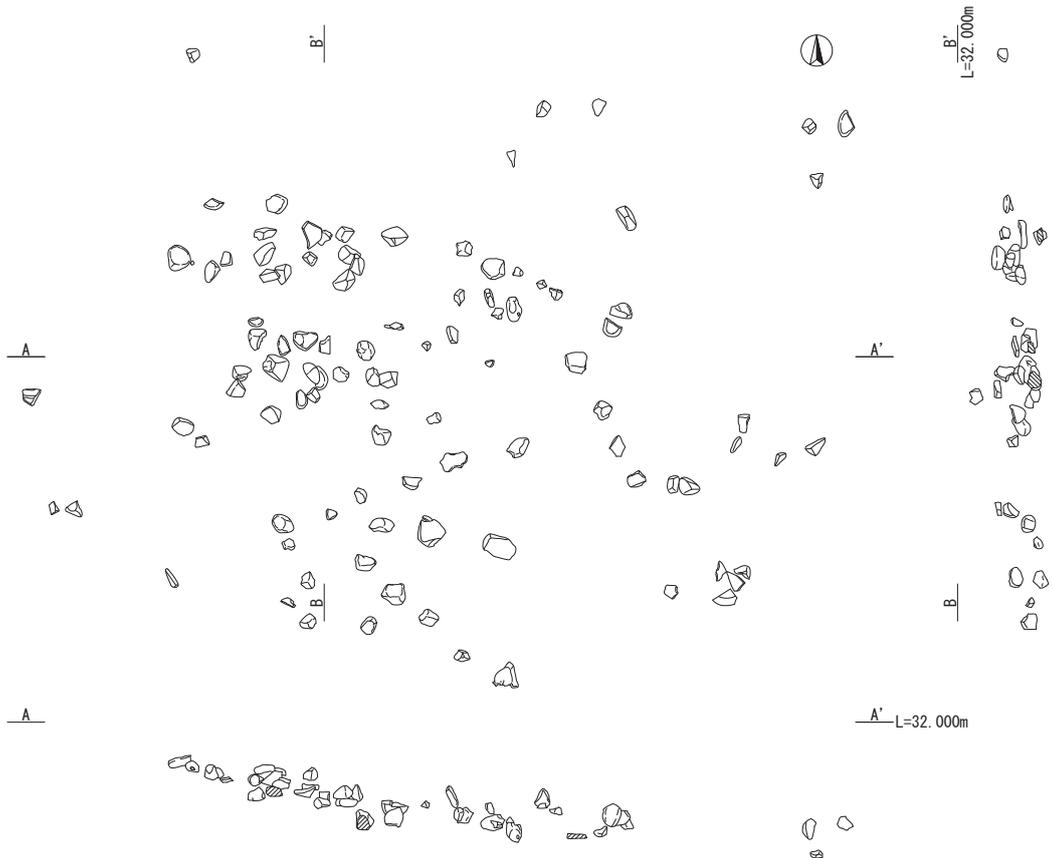
集石42号



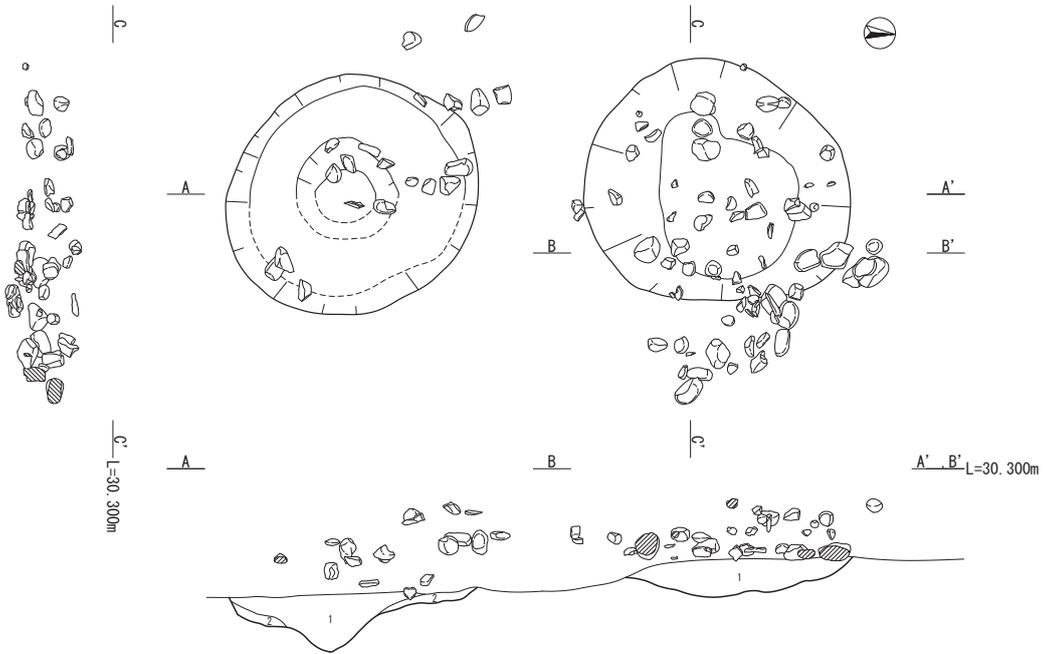
集石43号



第31図 縄文時代早期VII a層検出集石7



集石44号



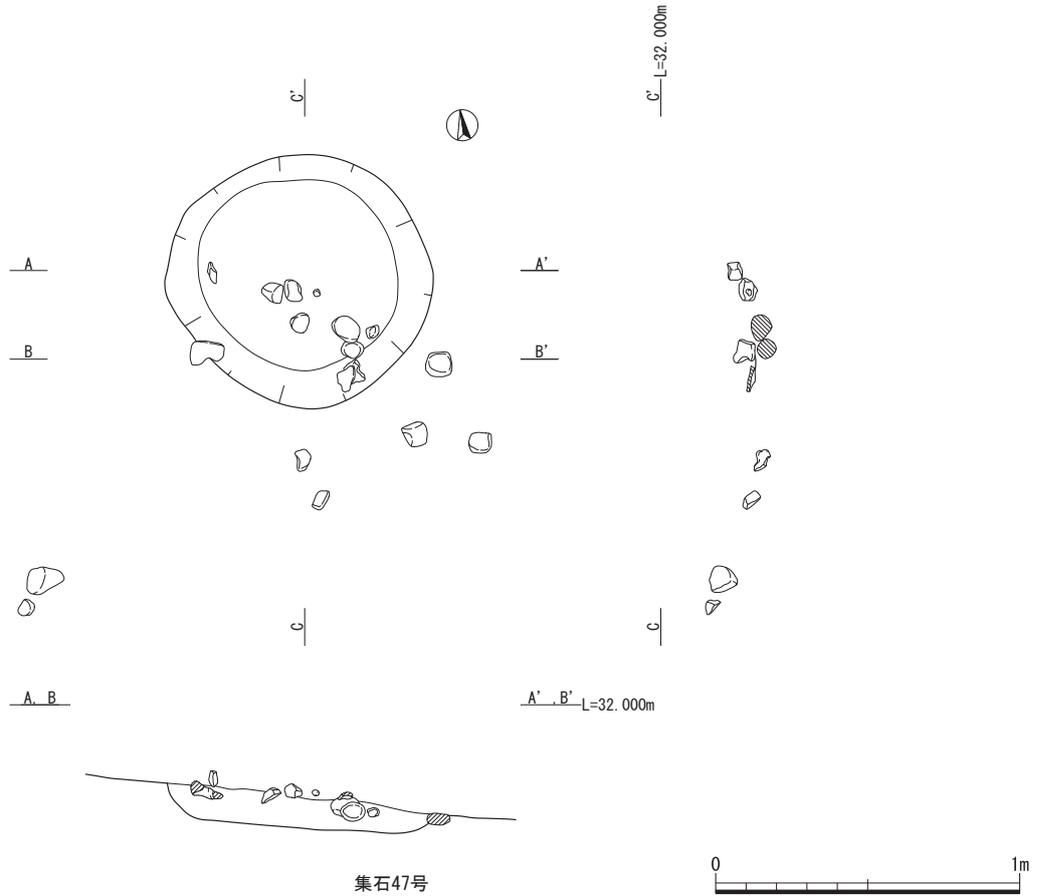
※埋土注記は本文中に記載。

集石46号

集石45号



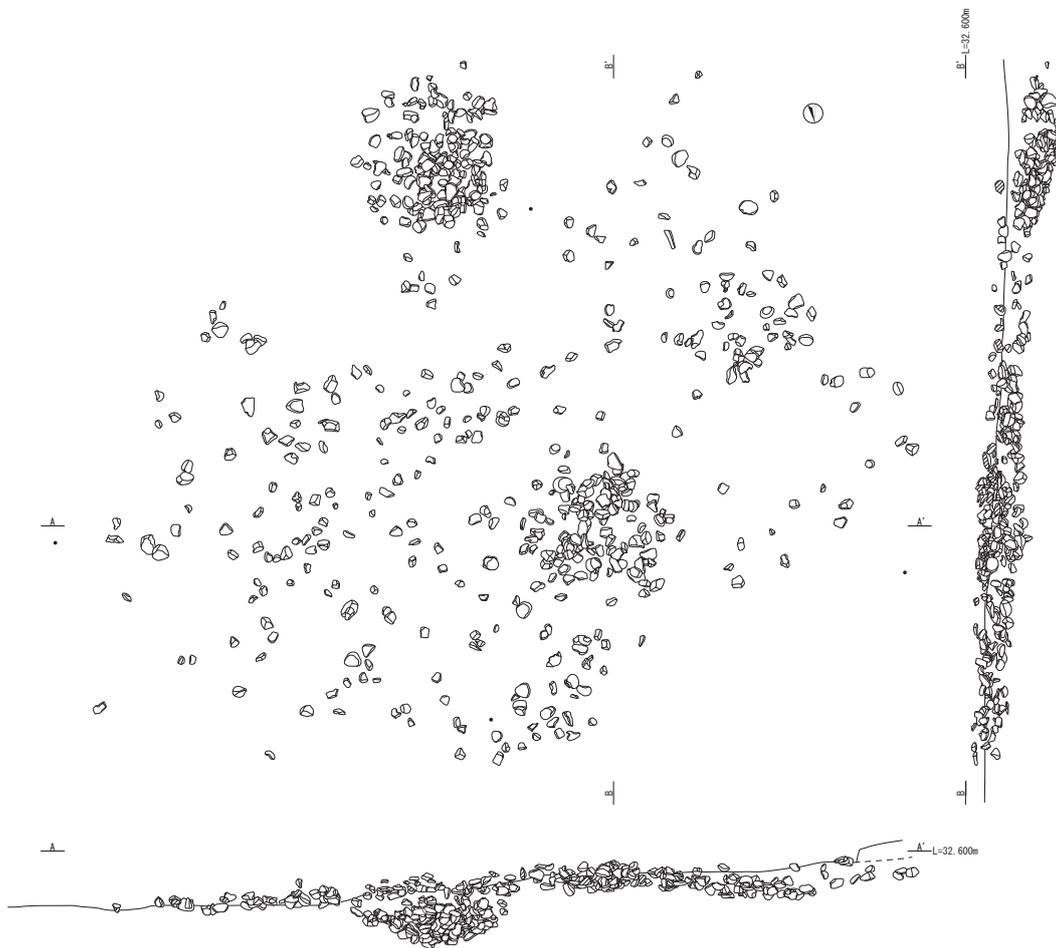
第32図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石8



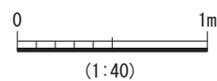
第33図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石9

第9表 Ⅶa層検出集石に伴う土坑法量一覧

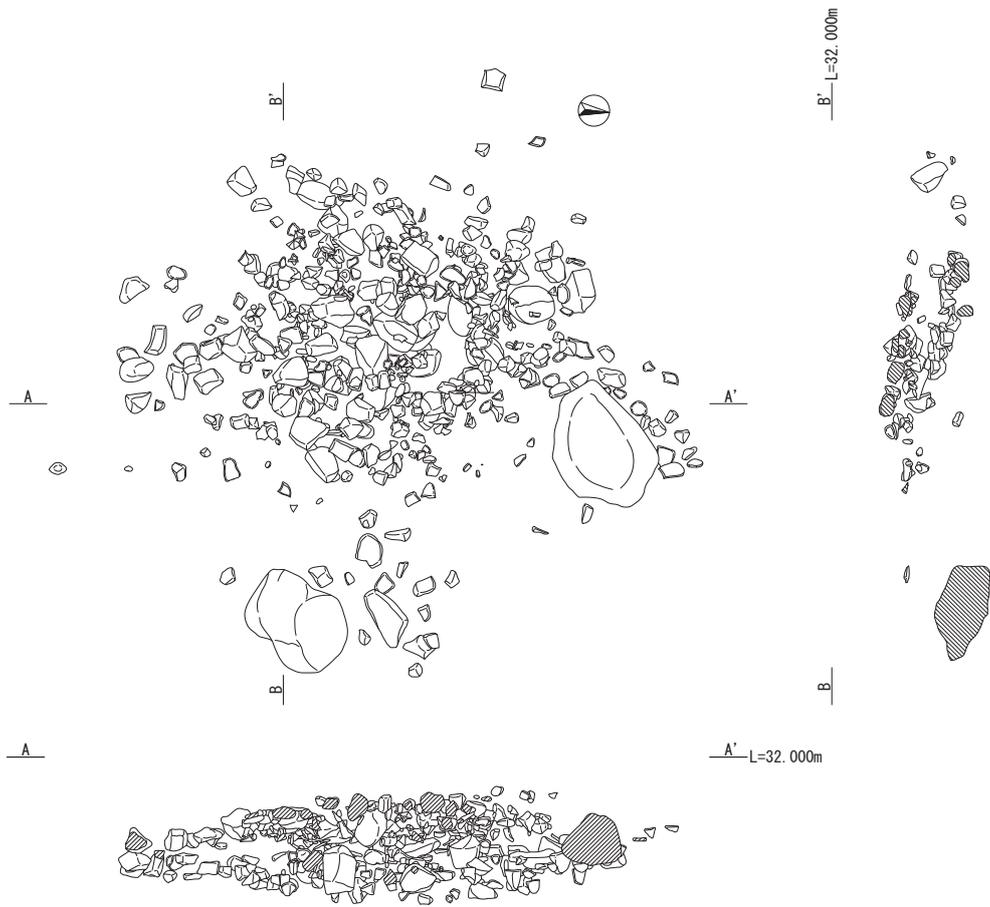
集石 番号	土坑形状	大きさ (cm)		深さ (cm)	備 考
		長軸	短軸		
28	隅丸方形	110	100	30	
29	円形	直径	110	35	
30	(円形)	直径	120	25	
31	隅丸方形	80	60	35	
32	円形	直径	65	10	
33	楕円形	110	90	25	
34	円形	直径	110	10	
35	円形	直径	110	20	
36	円形	直径	140	(10)	
37	楕円形	90	60	15	
38	円形	直径	45	15	
39	楕円形	75	60	15	
40	円形	直径	75	10	
41	楕円形	75	50	20	
42	円形	直径	55	10	
43	円形	直径	40	10	
44	円形	直径	75	不明	
45	円形	直径	90	15	
46	円形	直径	80	20	
47	円形	直径	90	10	



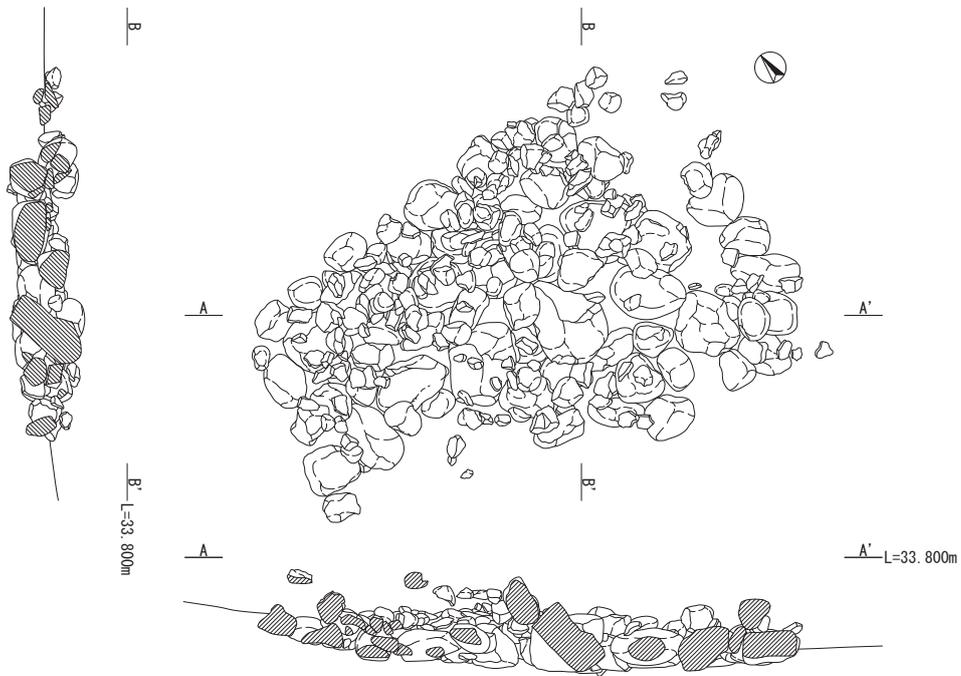
集石48・49・50号



第34図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石10



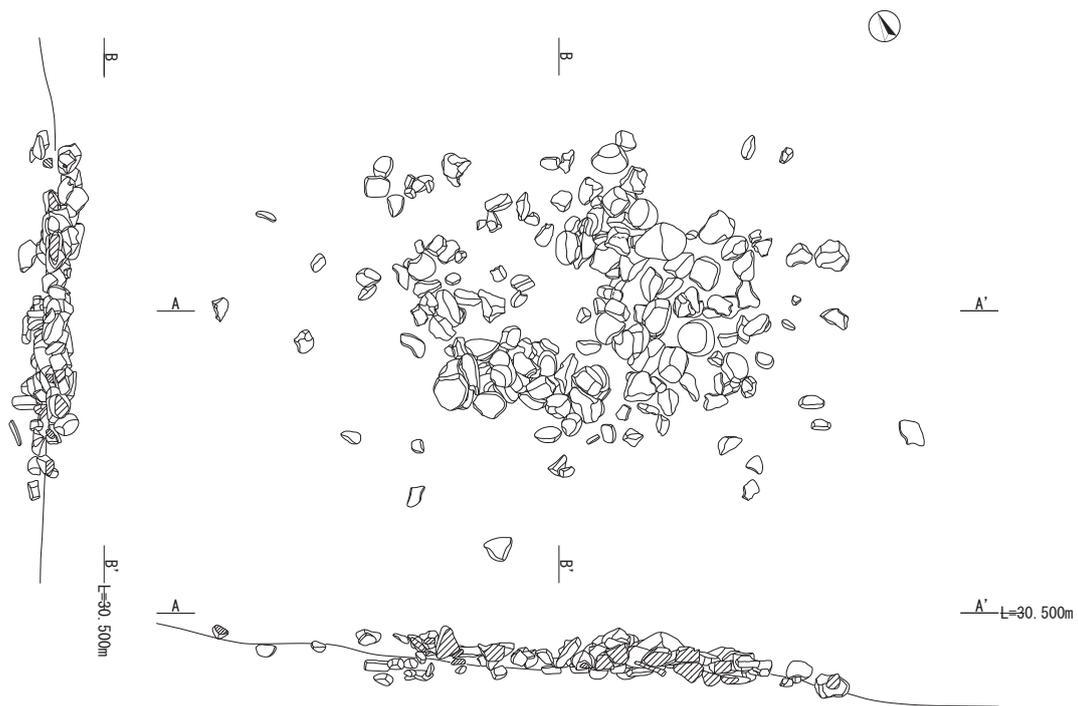
集石51号



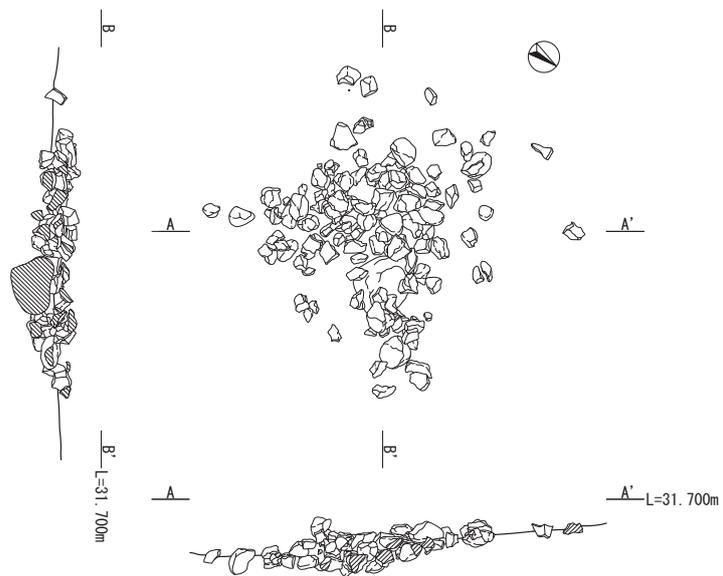
集石52号



第35図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石11



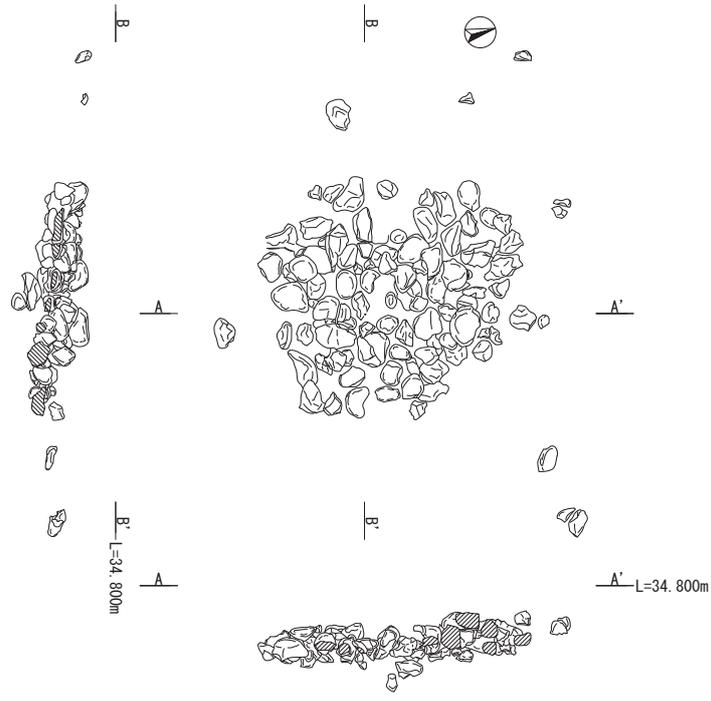
集石53号



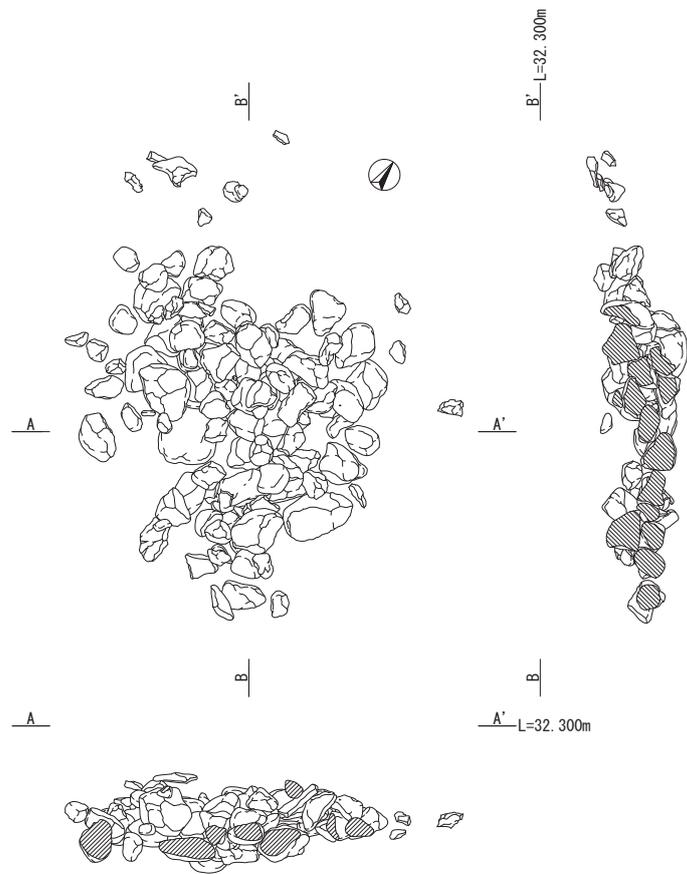
集石54号



第36図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石12



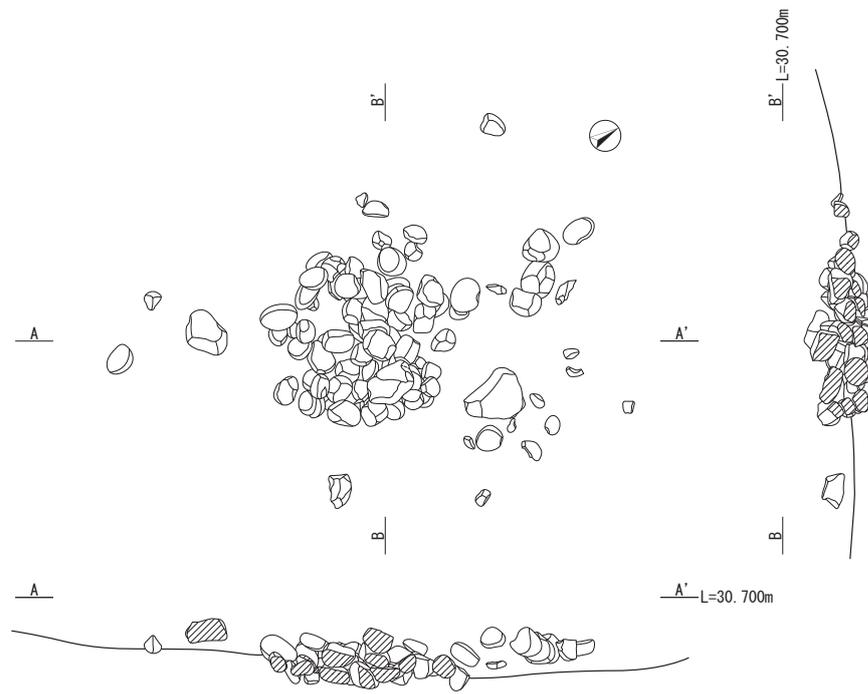
集石55号



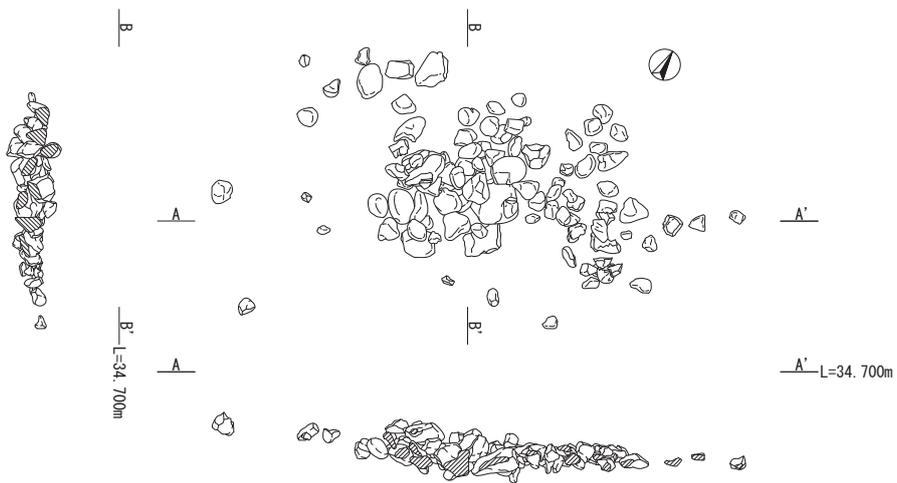
集石56号



第37図 縄文時代早期VII a層検出集石13



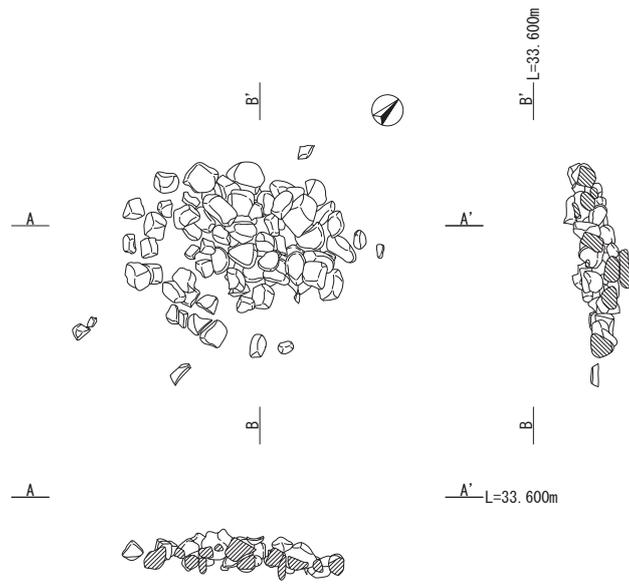
集石57号



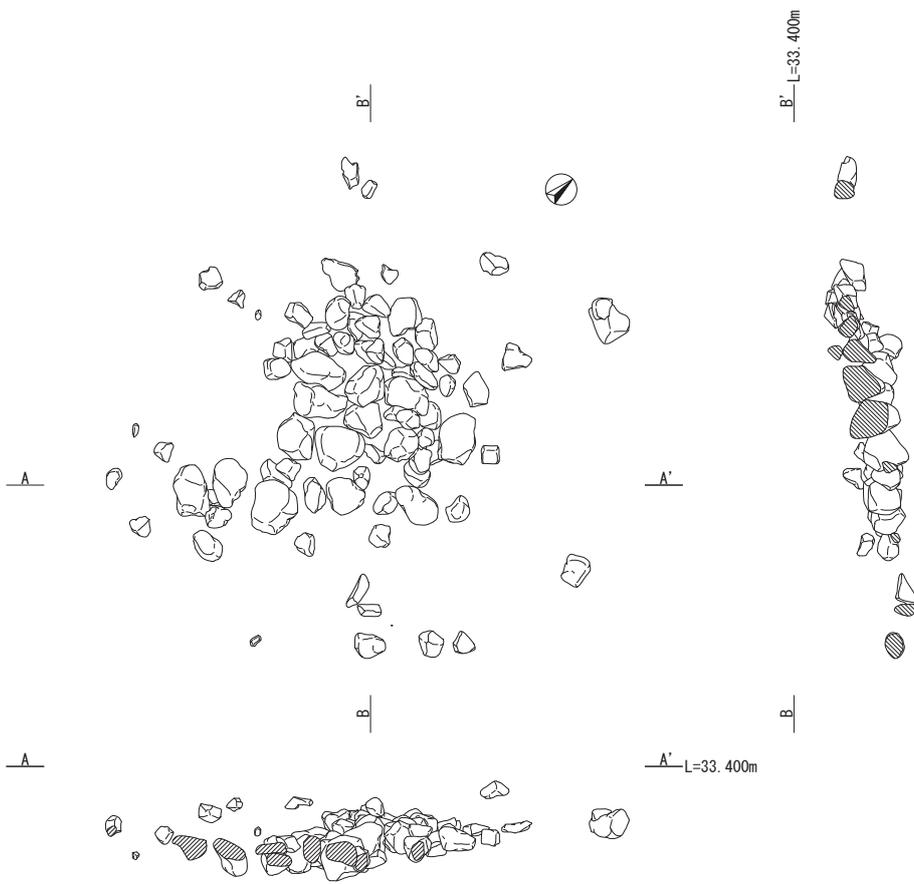
集石58号



第38図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石14



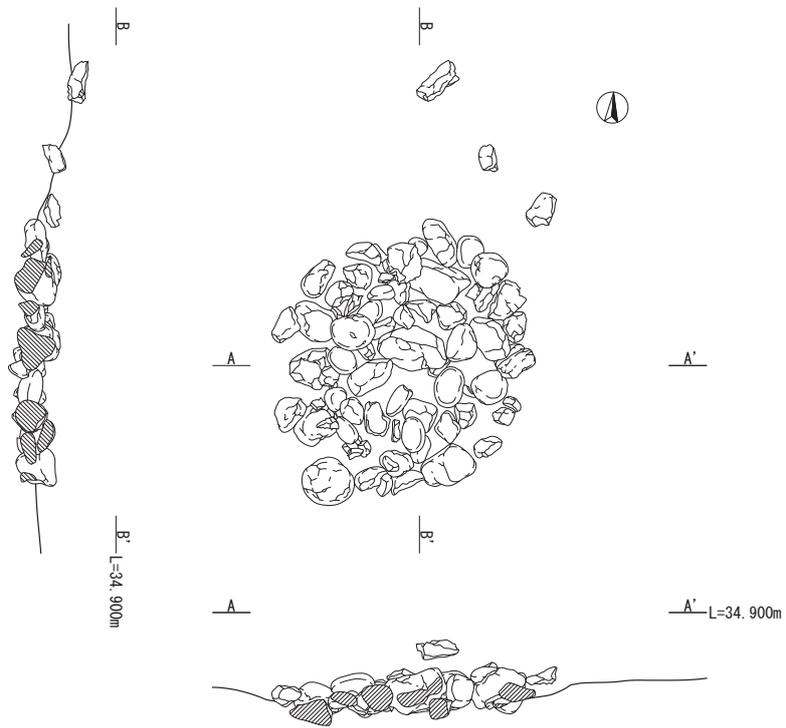
集石59号



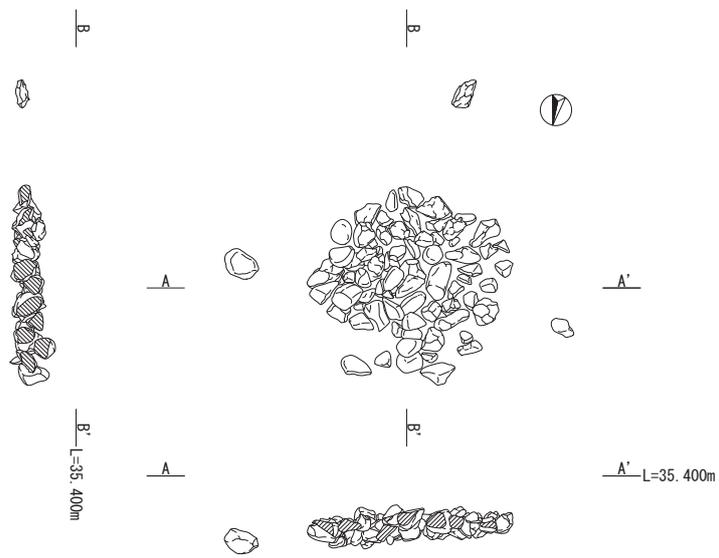
集石60号



第39図 縄文時代早期VII a層検出集石15



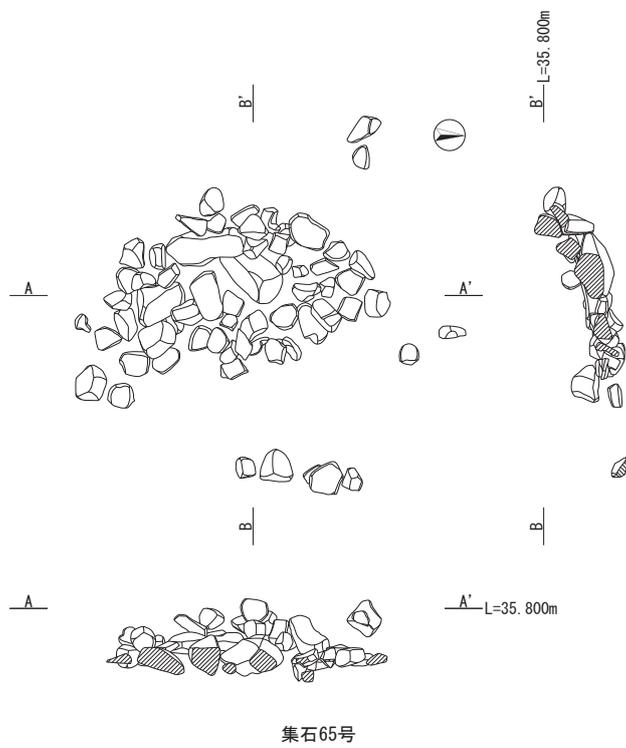
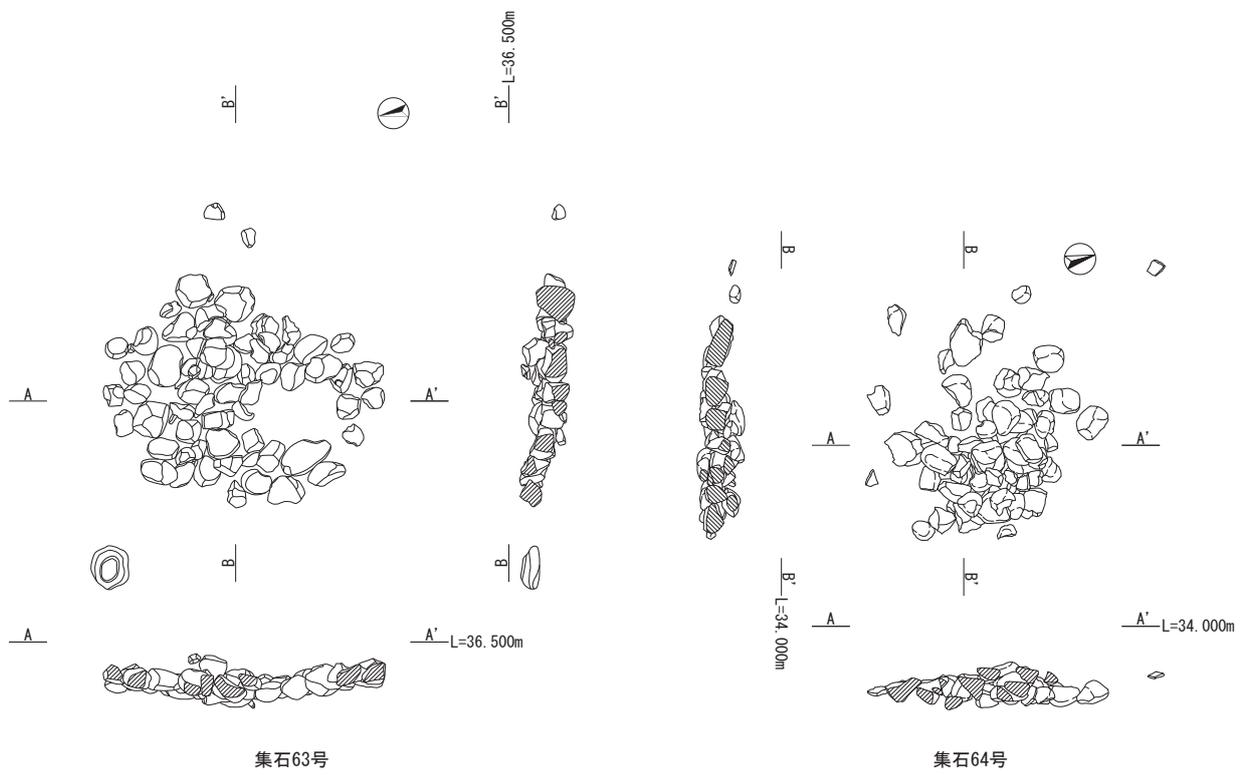
集石61号



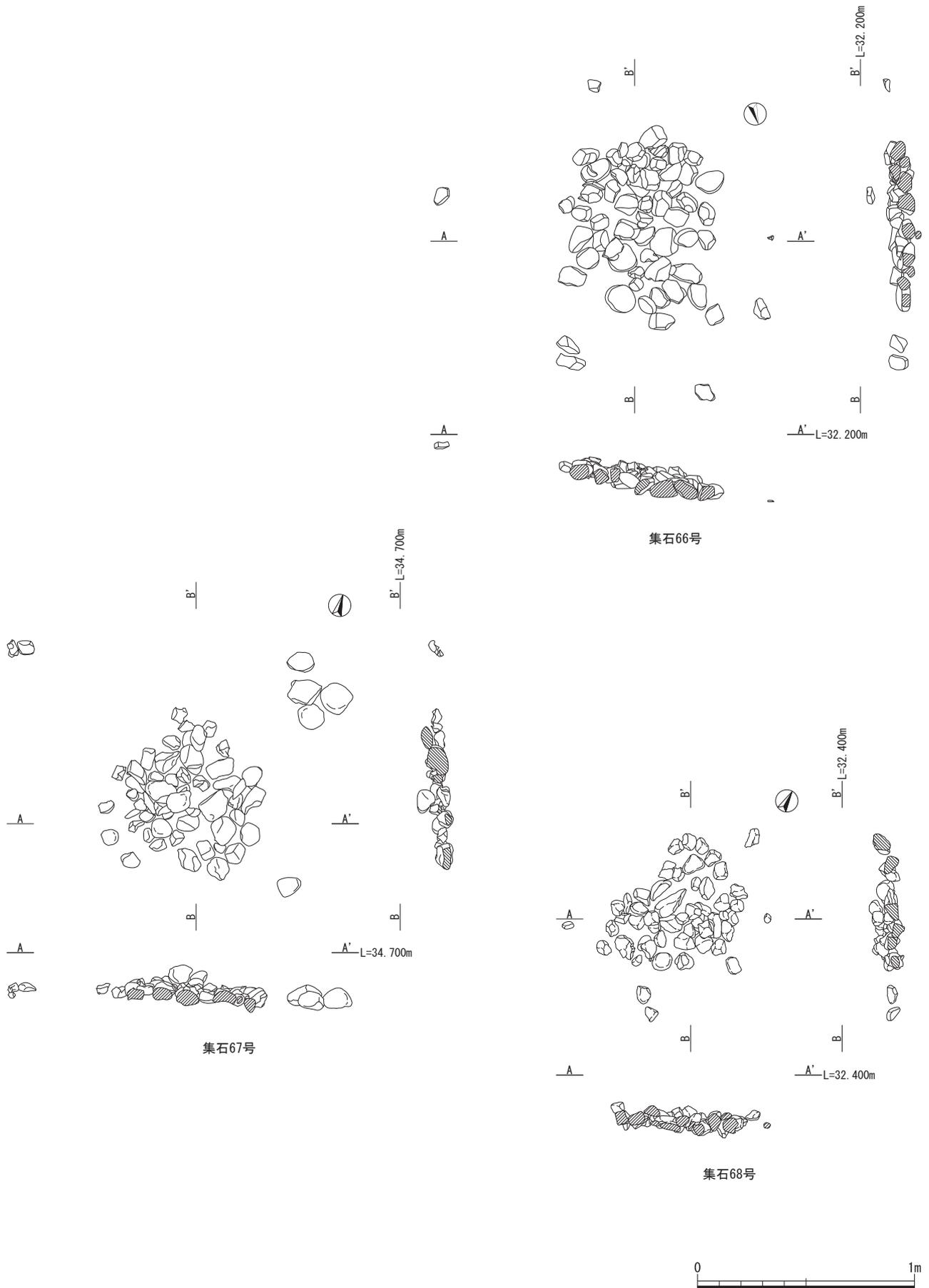
集石62号



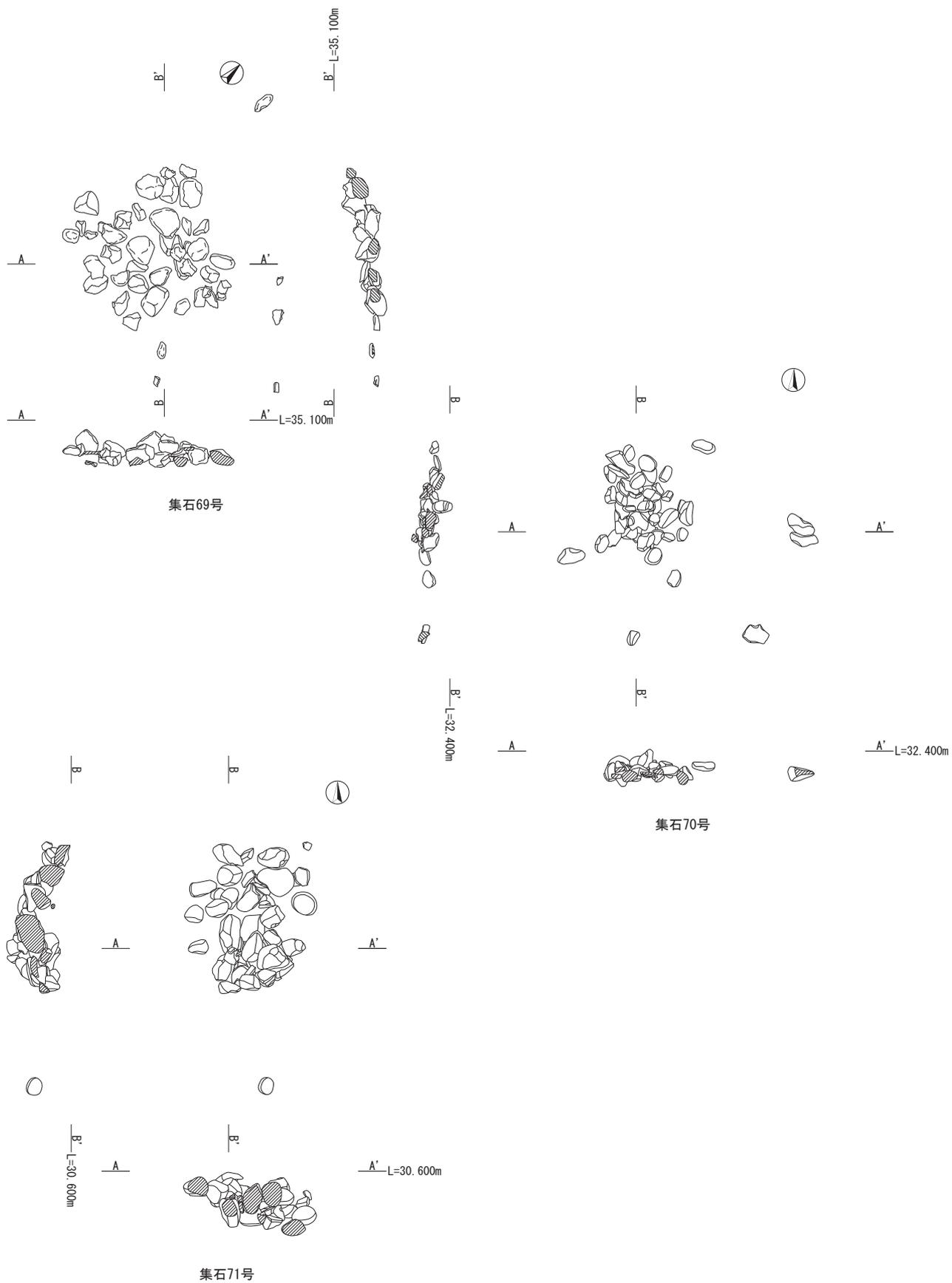
第40図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石16



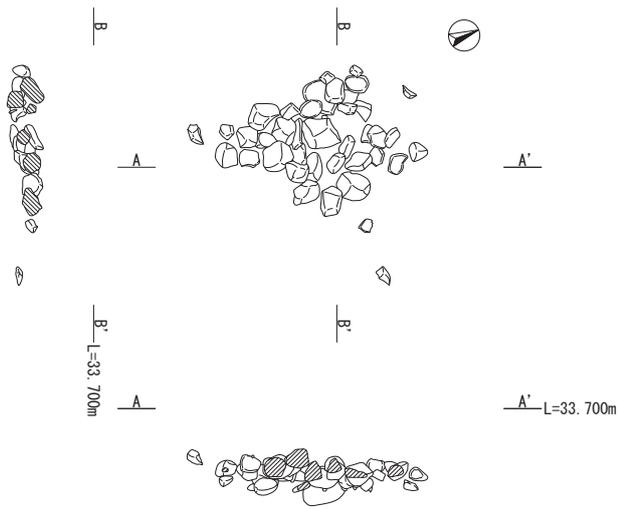
第41図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石17



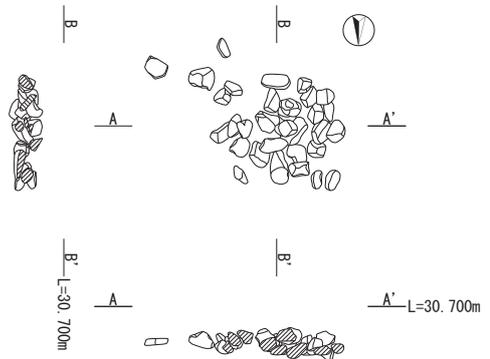
第42図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石18



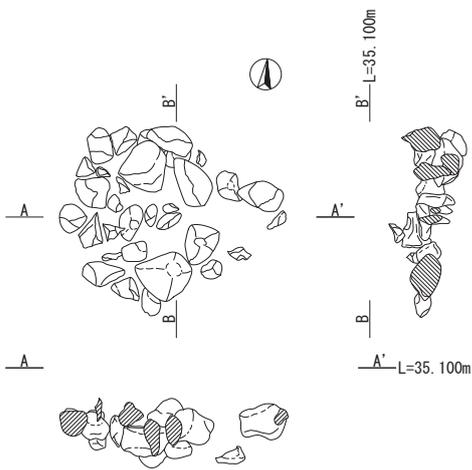
第43図 縄文時代早期VII a層検出集石19



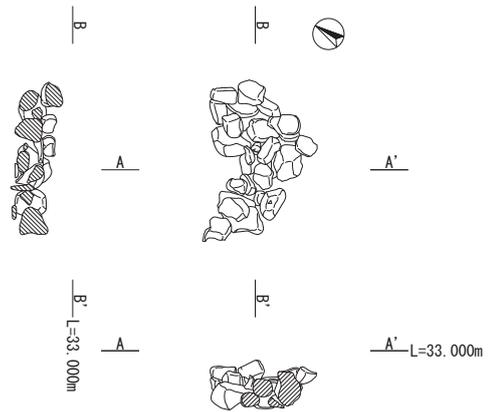
集石72号



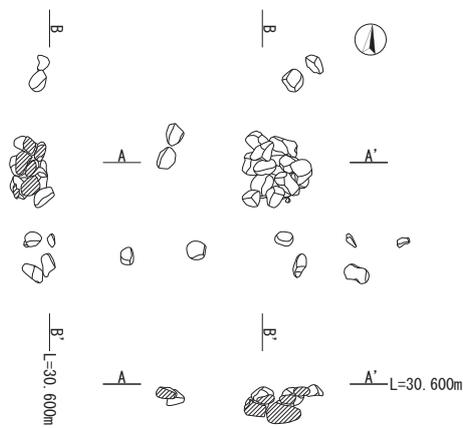
集石73号



集石74号



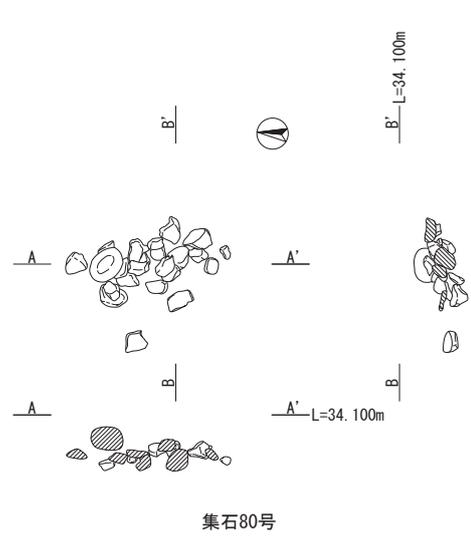
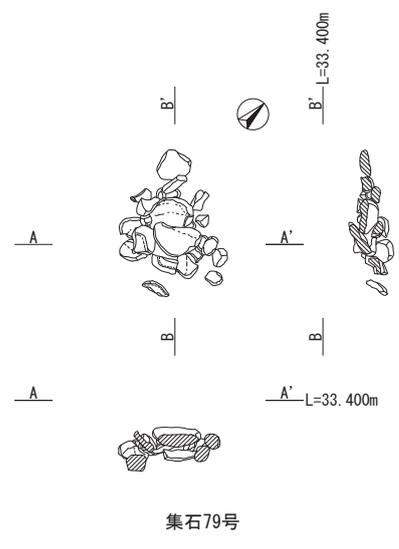
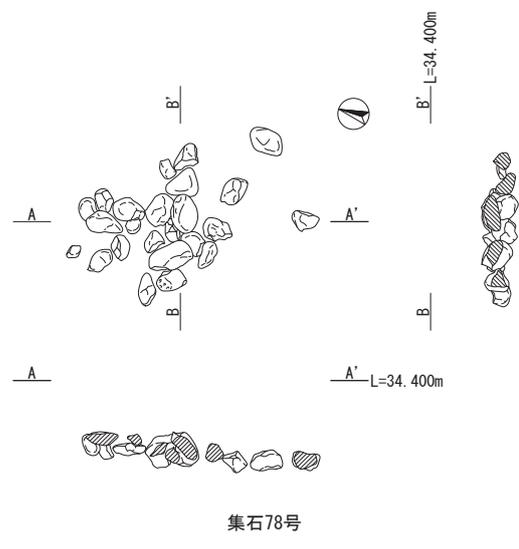
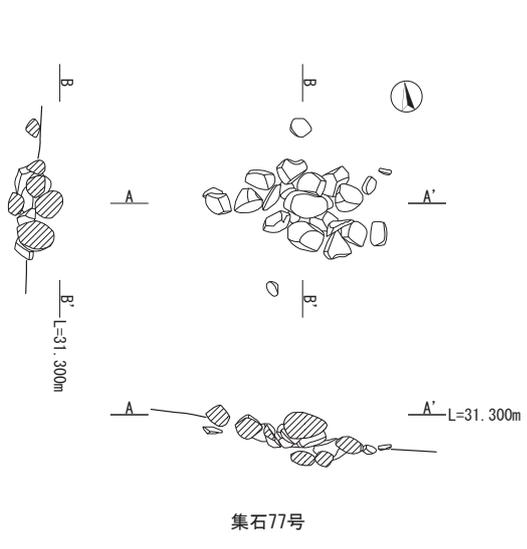
集石75号



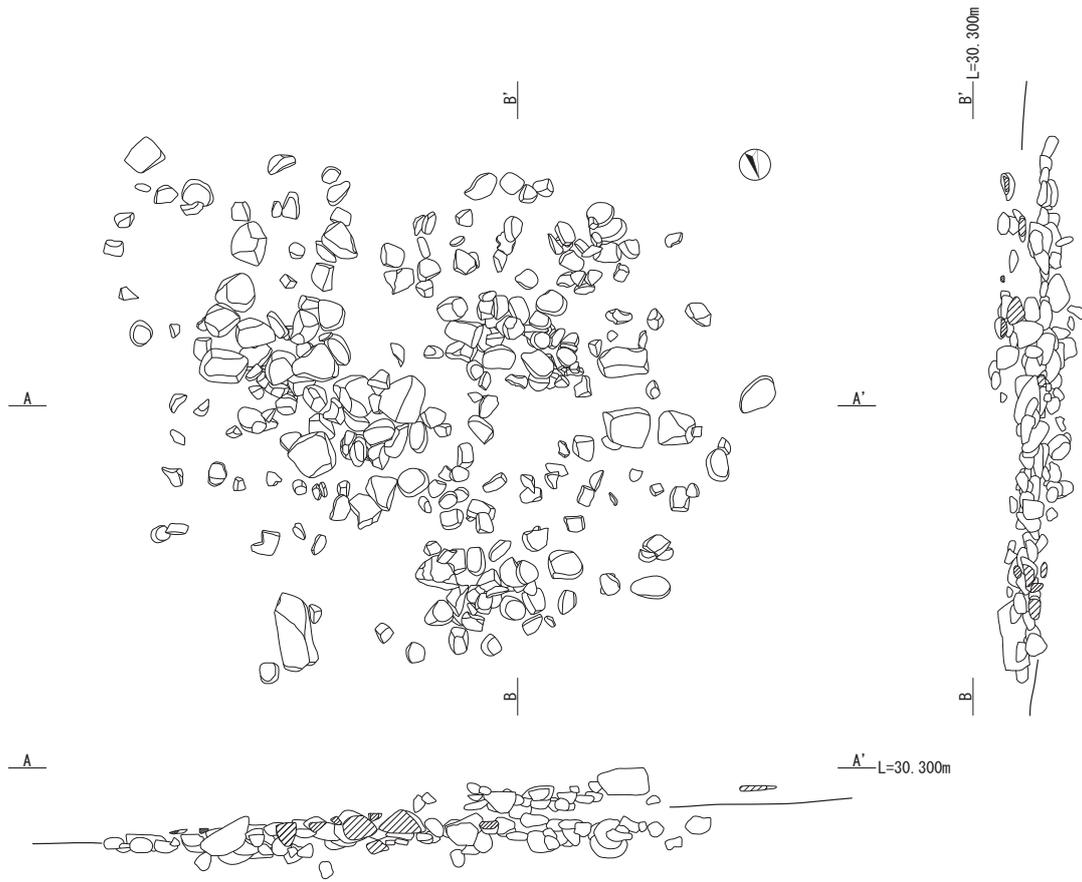
集石76号



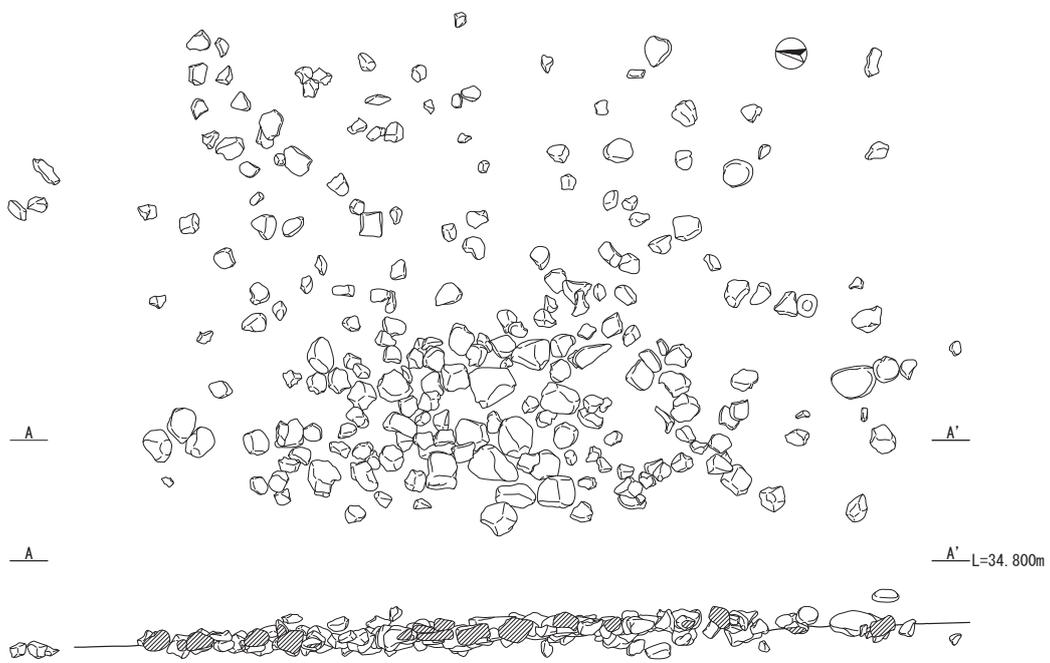
第44図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石20



第45図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石21



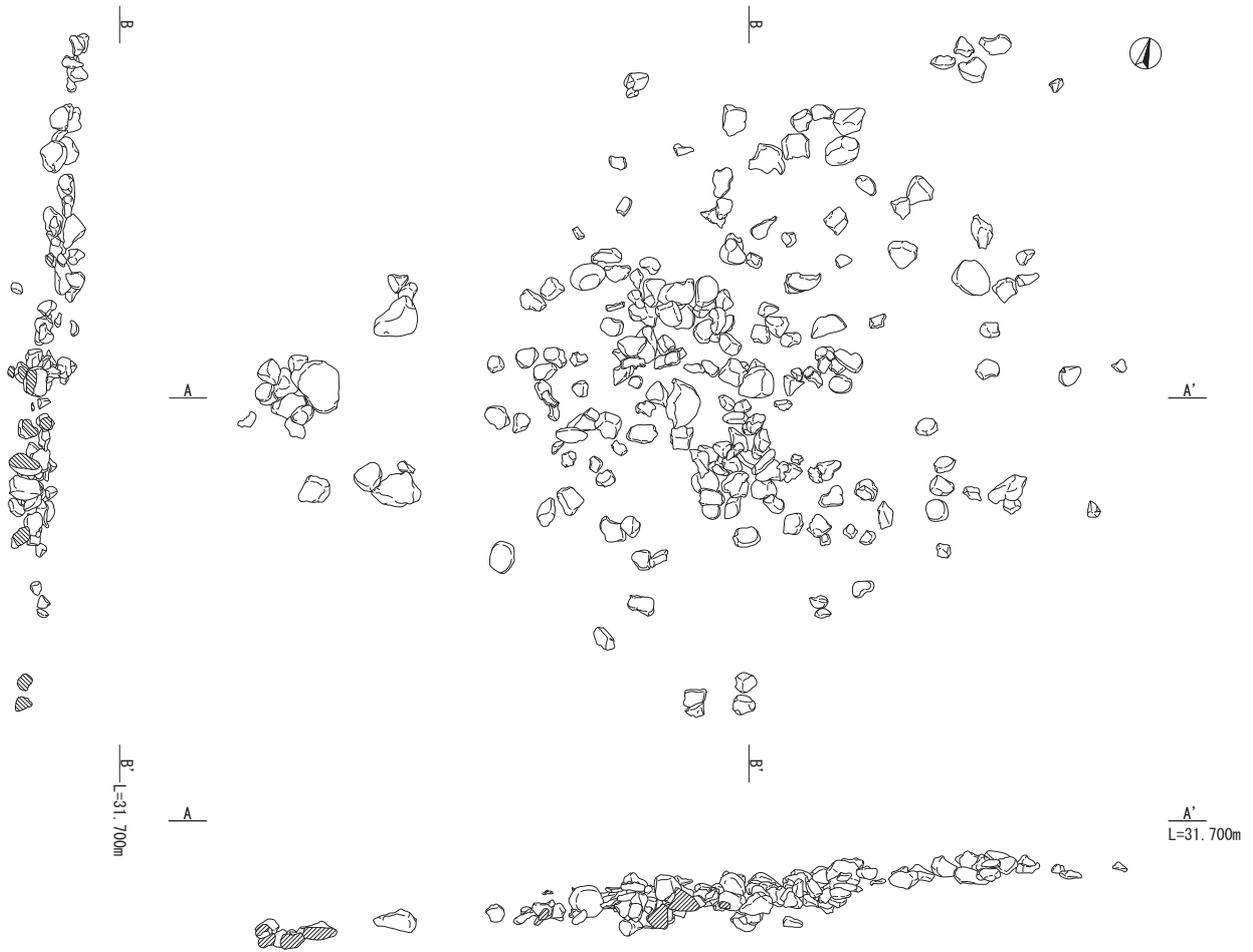
集石81号



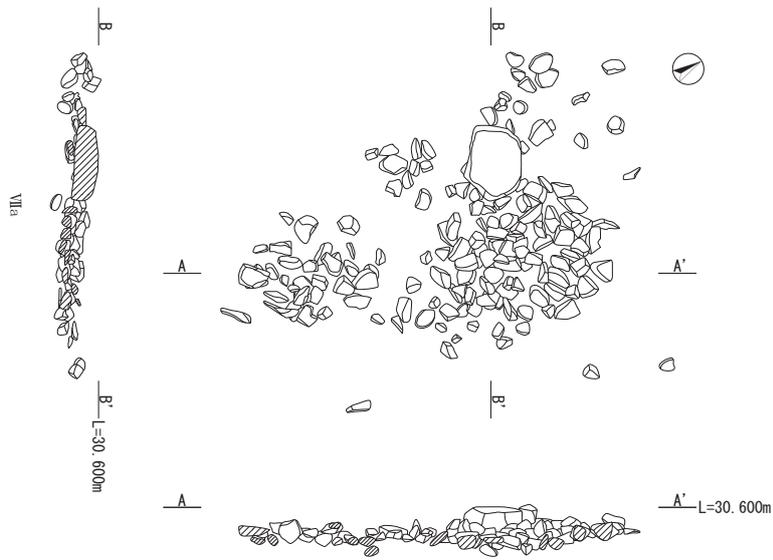
集石82号



第46図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石22



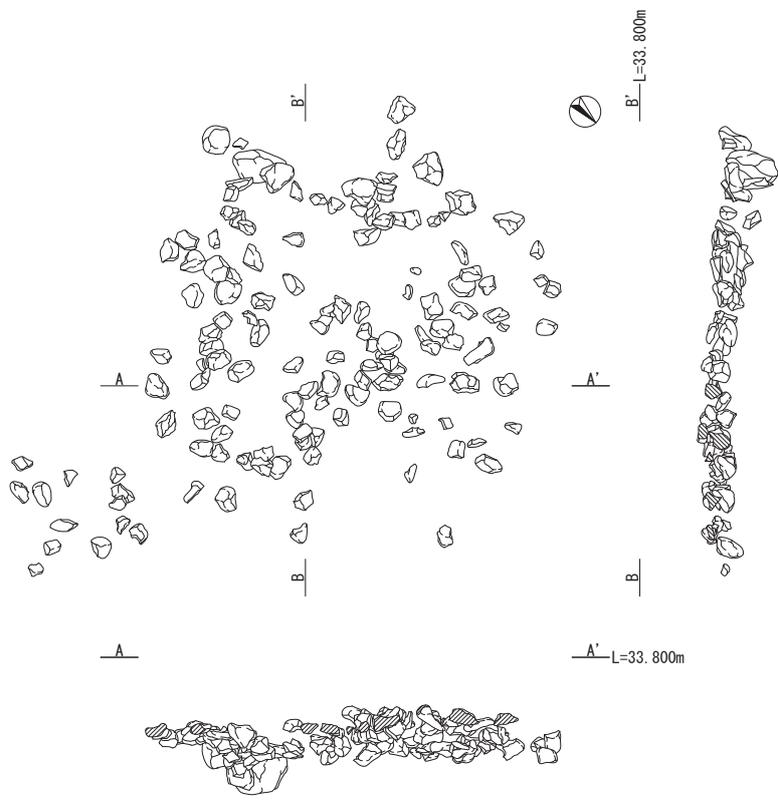
集石83号



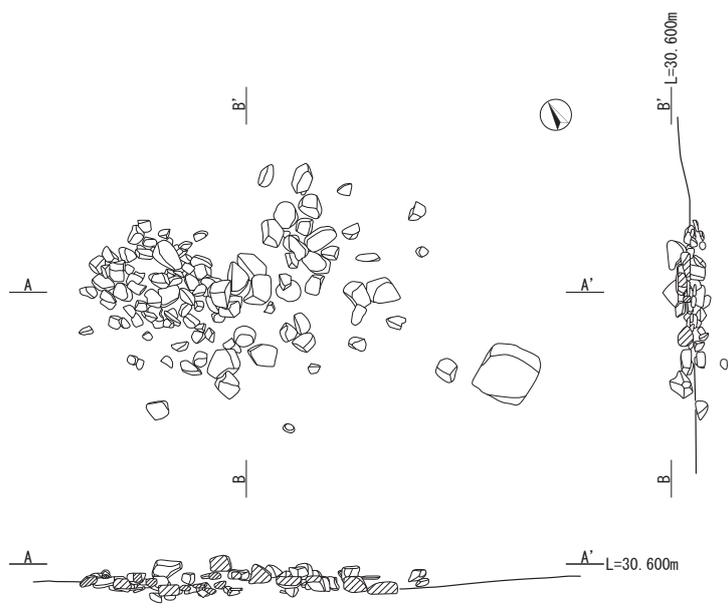
集石84号



第47図 縄文時代早期VII a層検出集石23

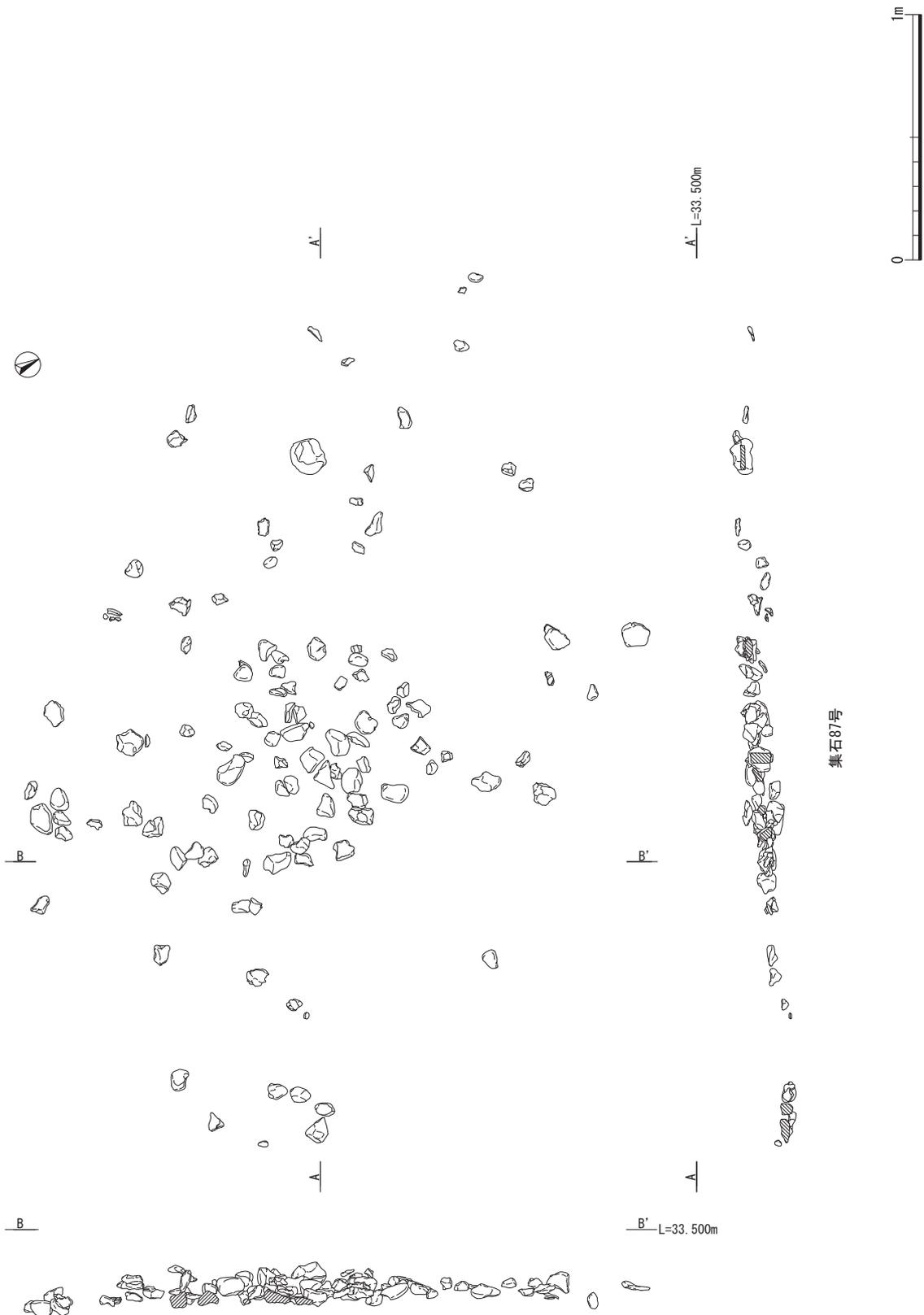


集石85号

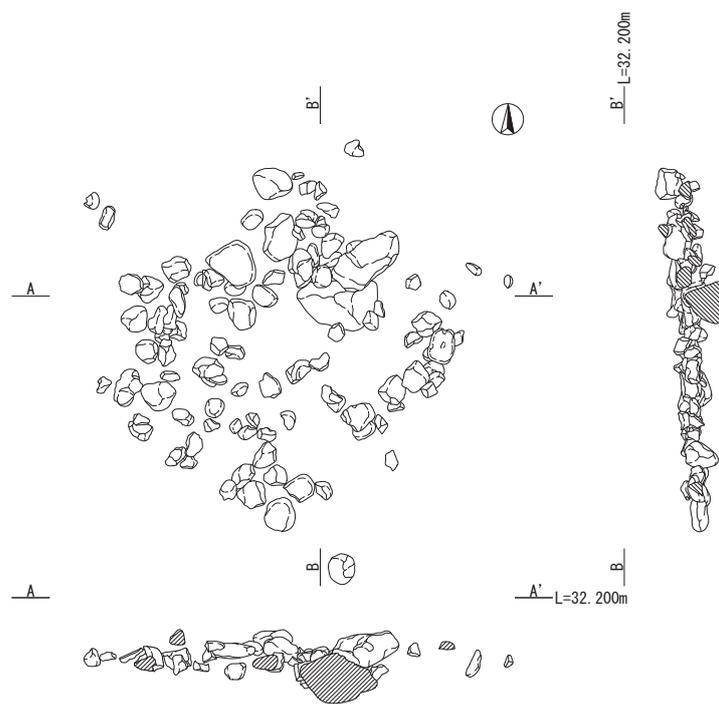


集石86号

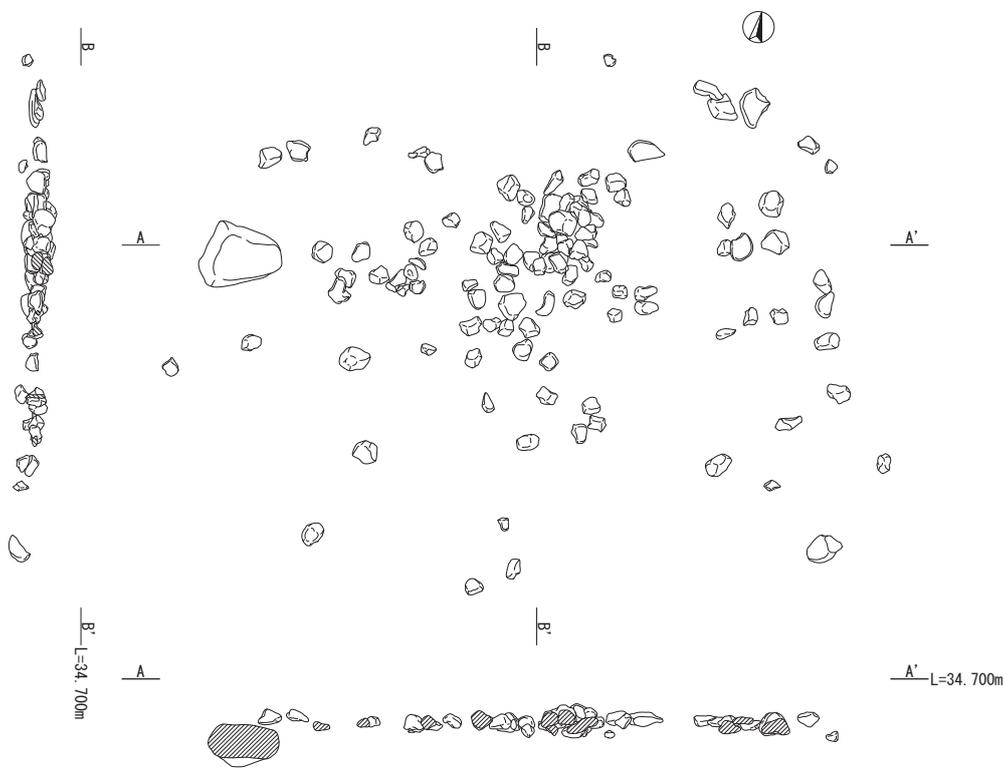
第48図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石24



第49図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石25



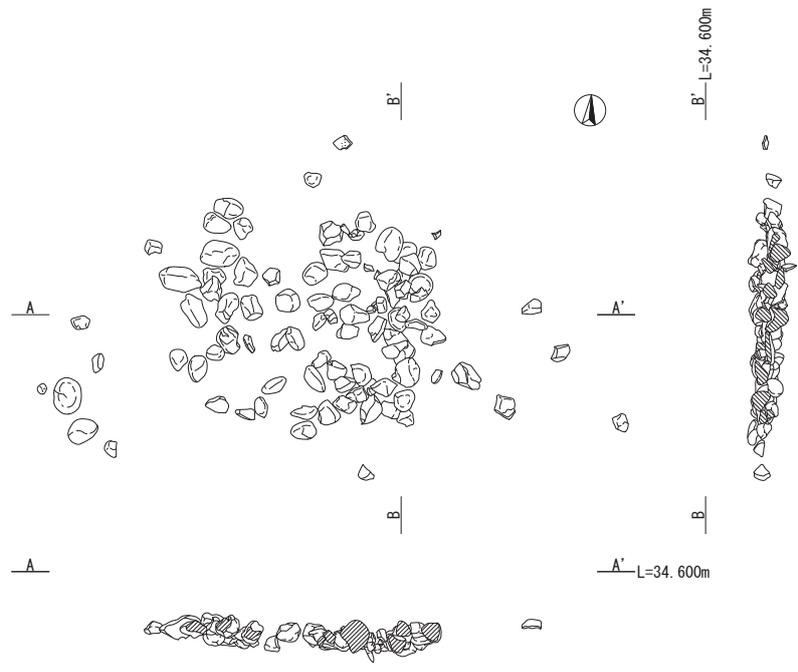
集石88号



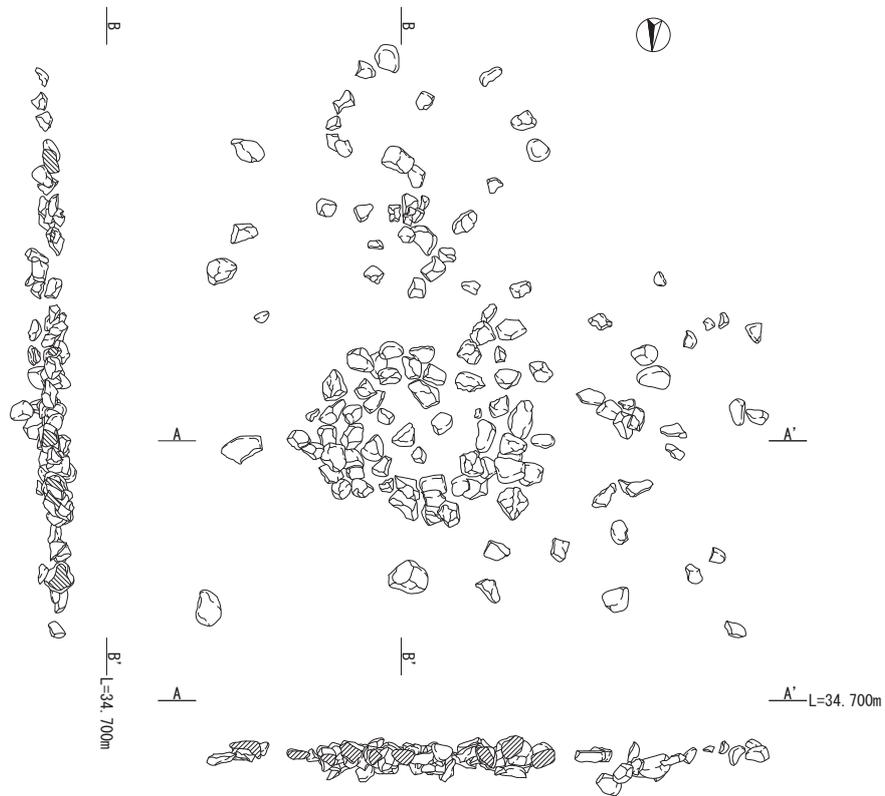
集石89号



第50図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石26



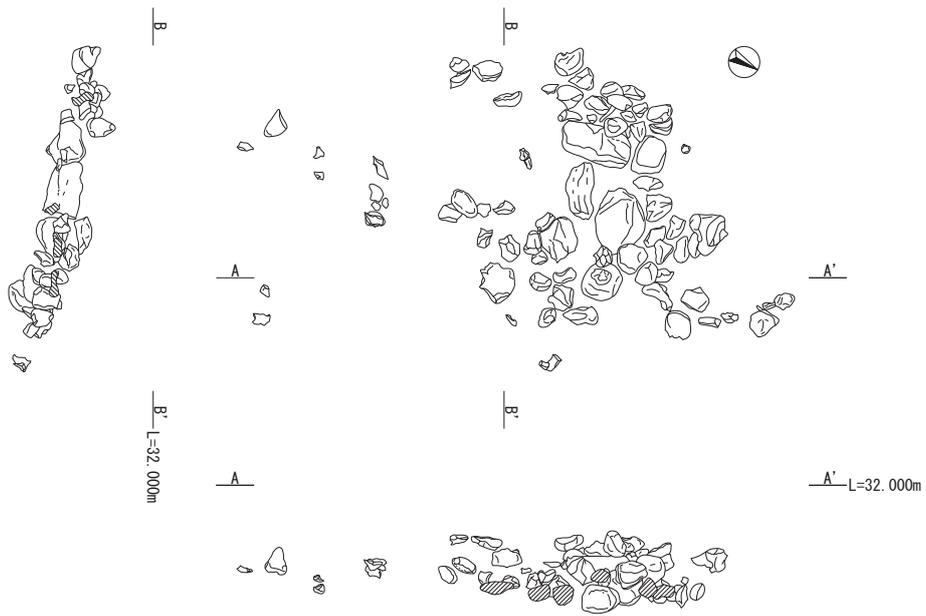
集石90号



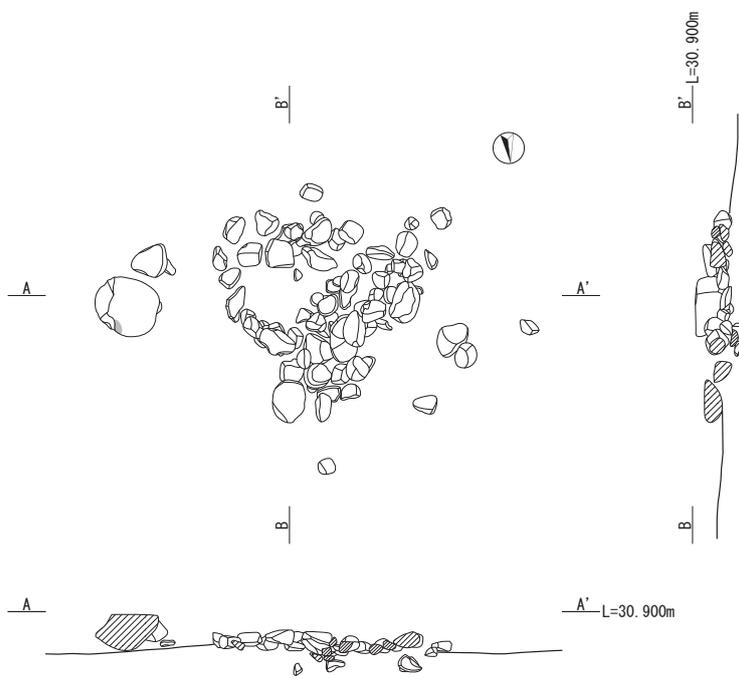
集石91号



第51図 縄文時代早期VII a層検出集石27



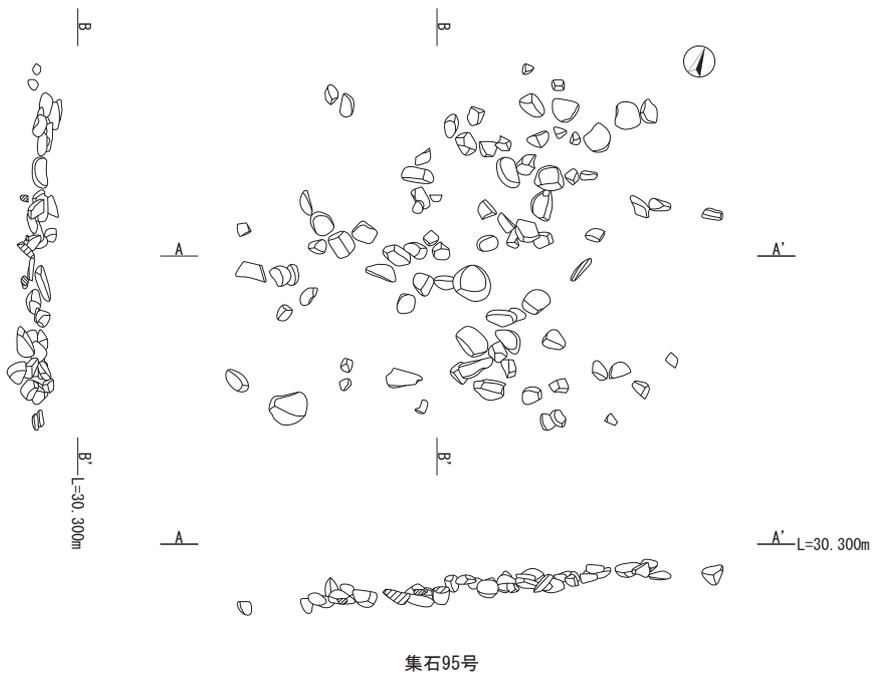
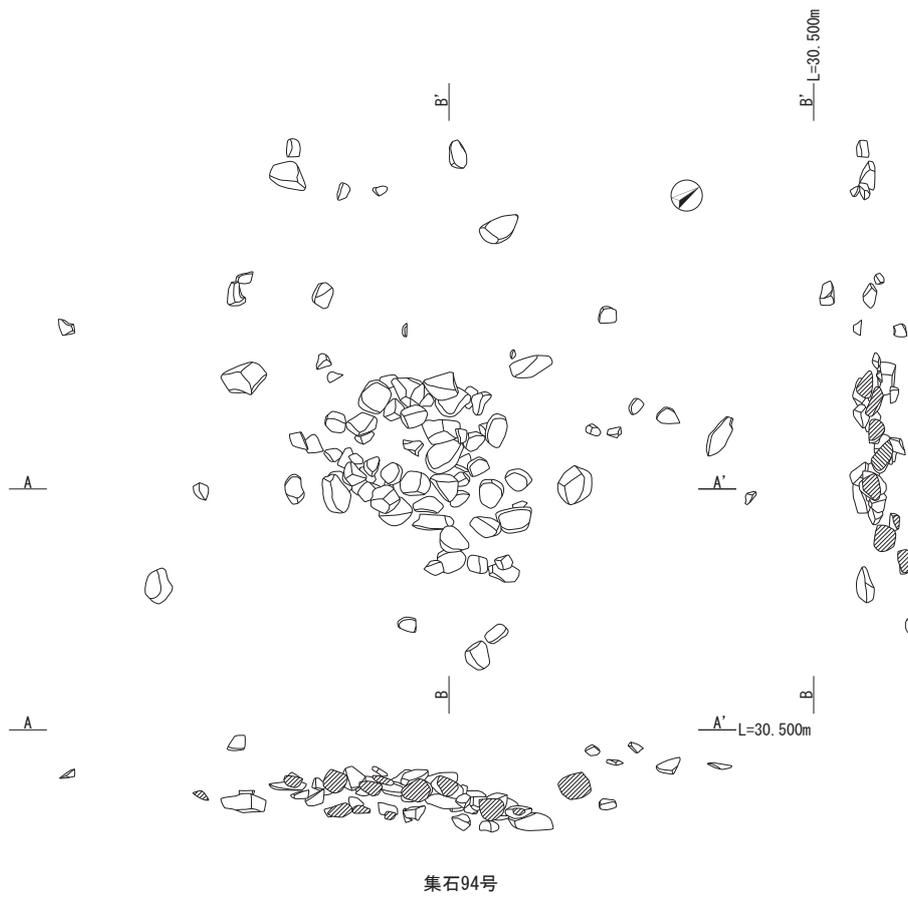
集石92号



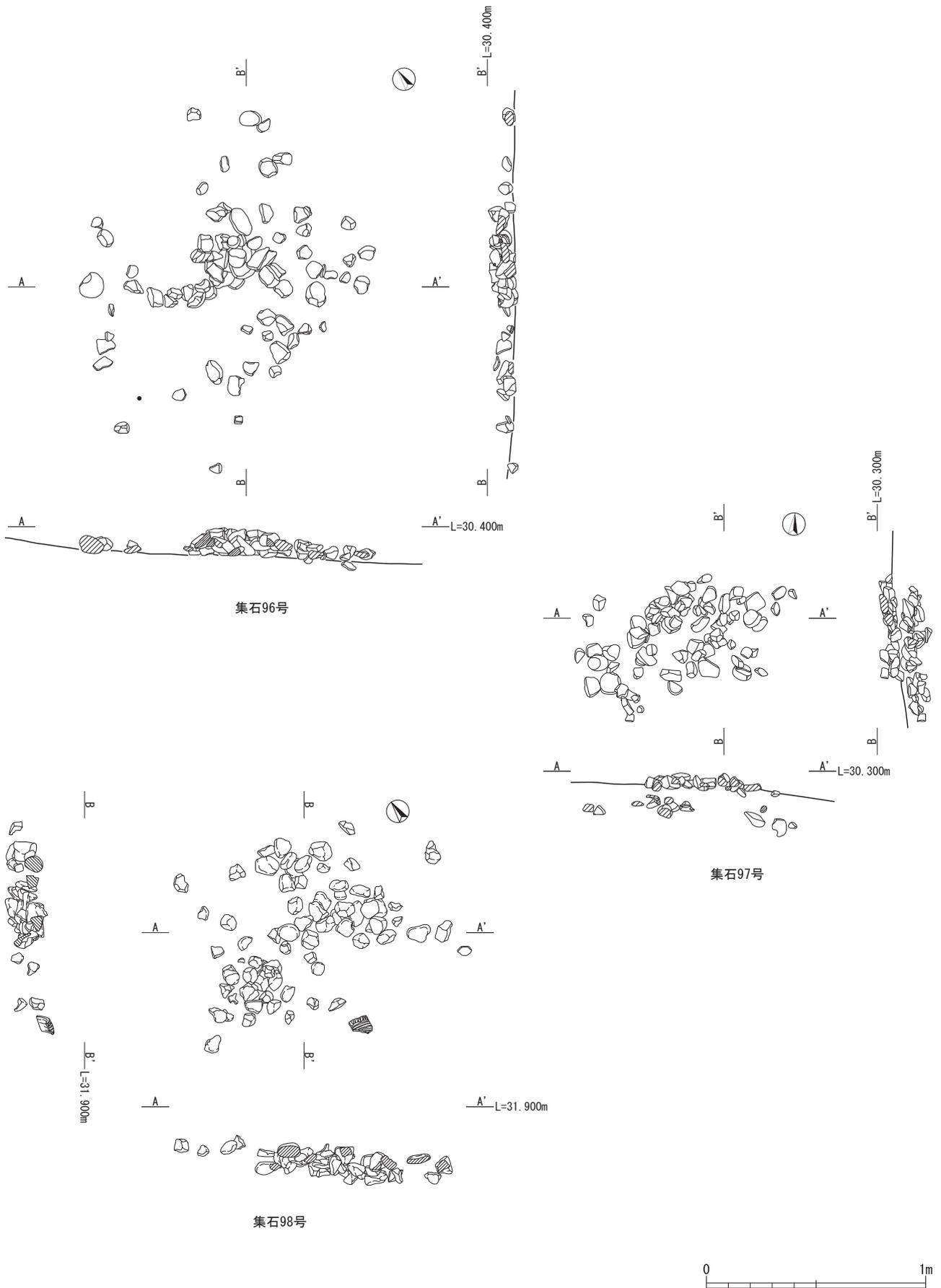
集石93号



第52図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石28



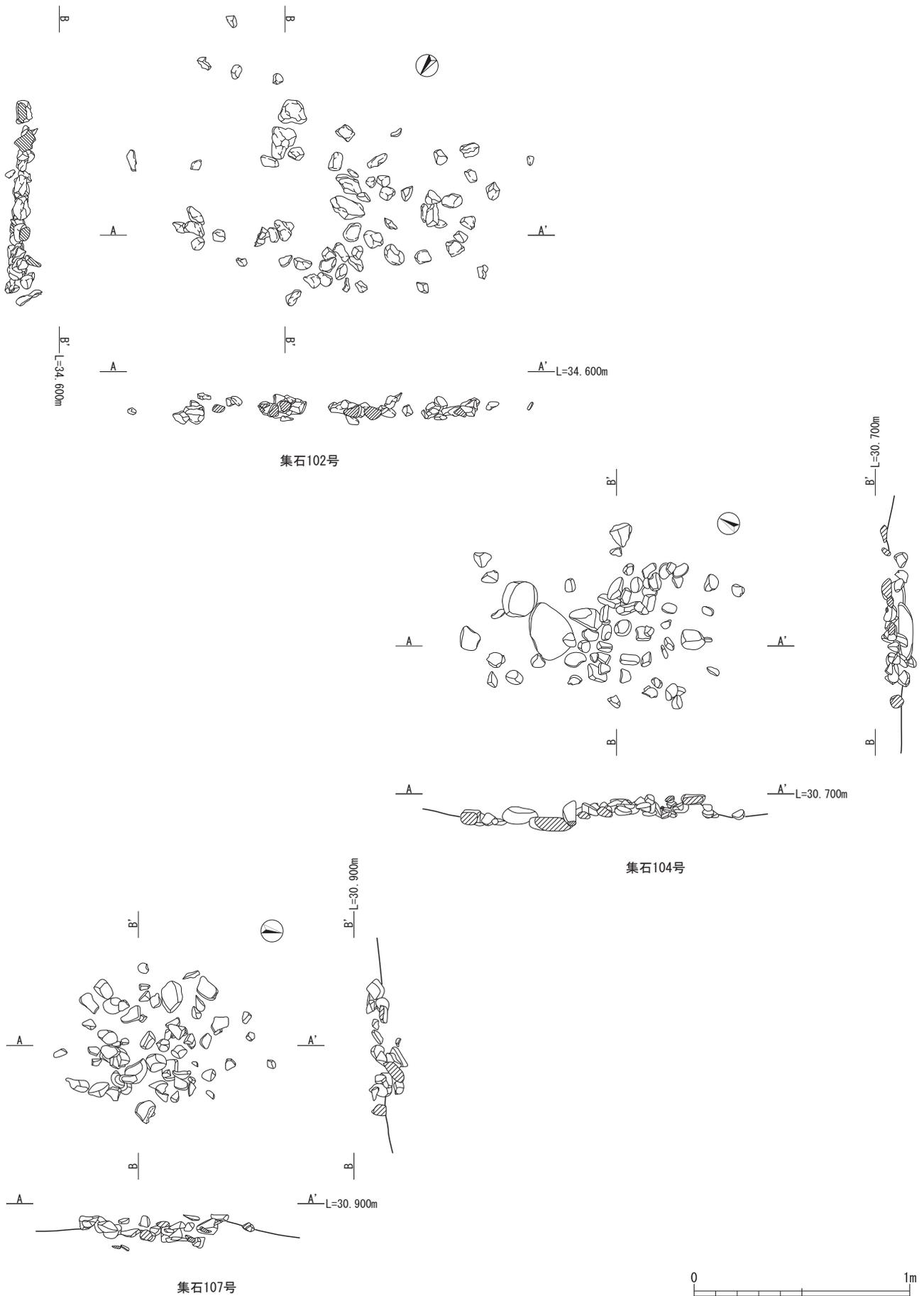
第53図 縄文時代早期VII a層検出集石29



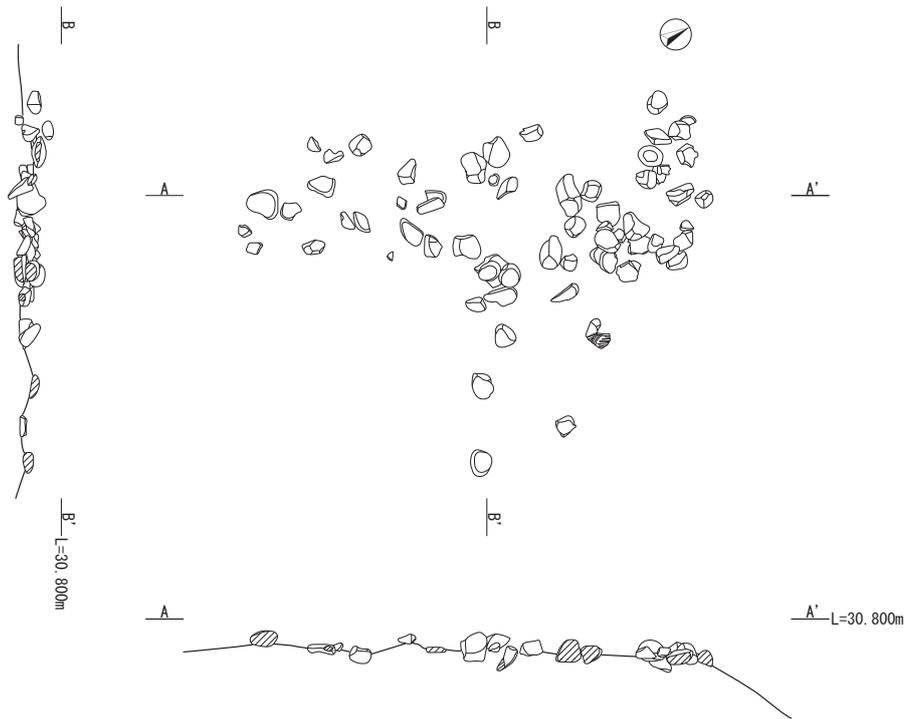
第54図 縄文時代早期VII a層検出集石30



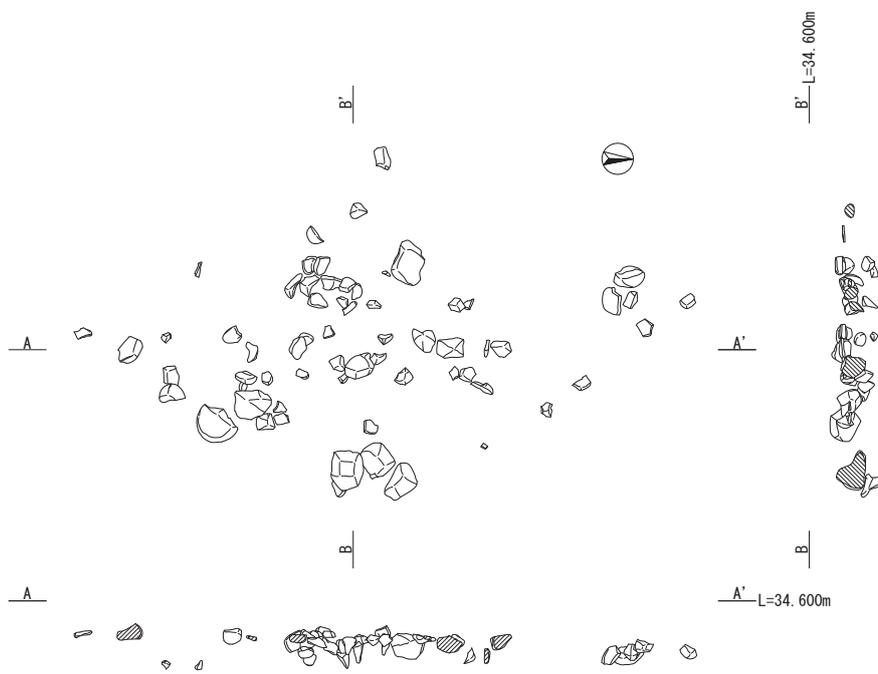
第55図 縄文時代早期VII a層検出集石31



第56図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石32



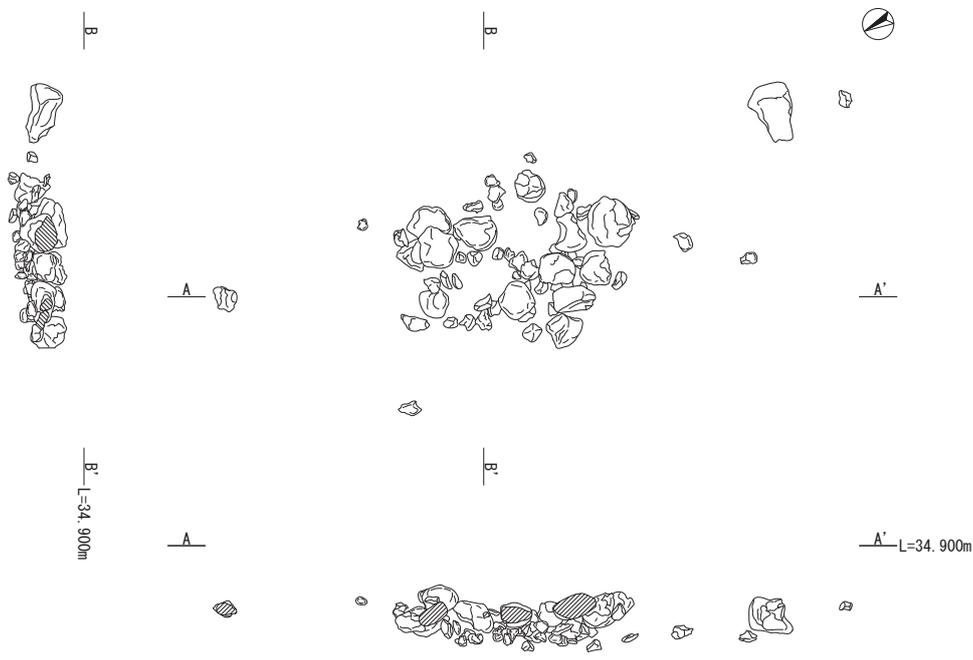
集石105号



集石106号



第57図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石33



集石108号

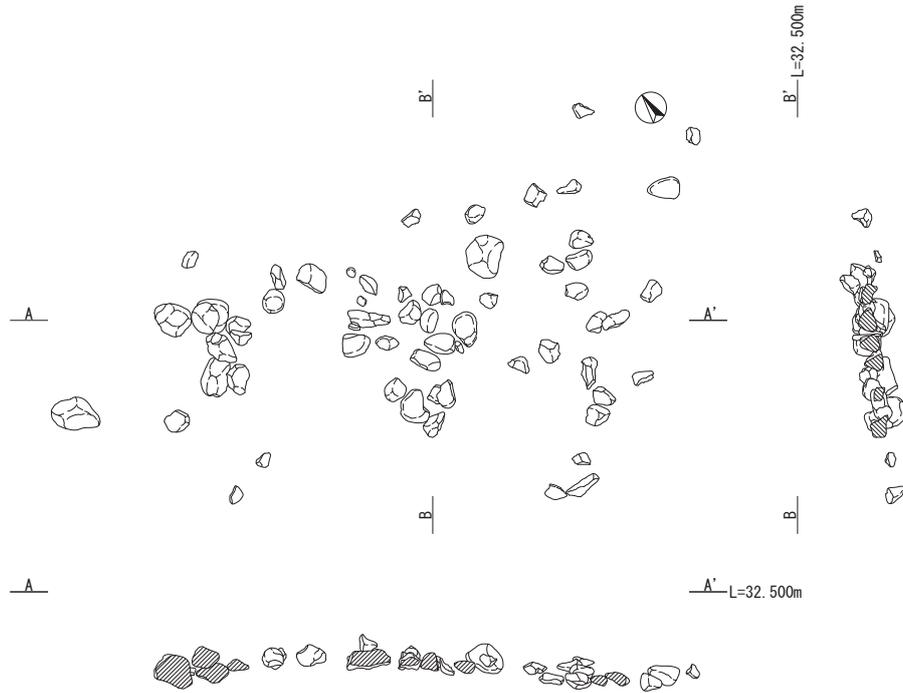


集石109号

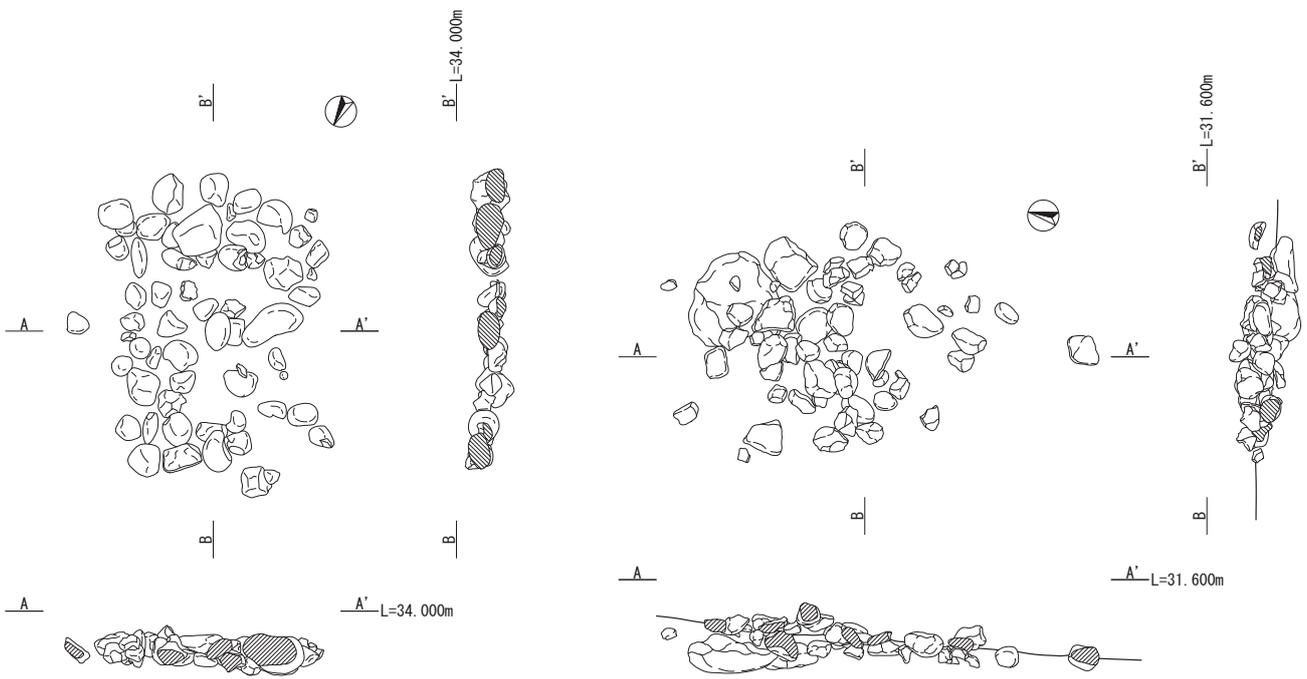
集石110号



第58図 縄文時代早期VII a層検出集石34



集石111号

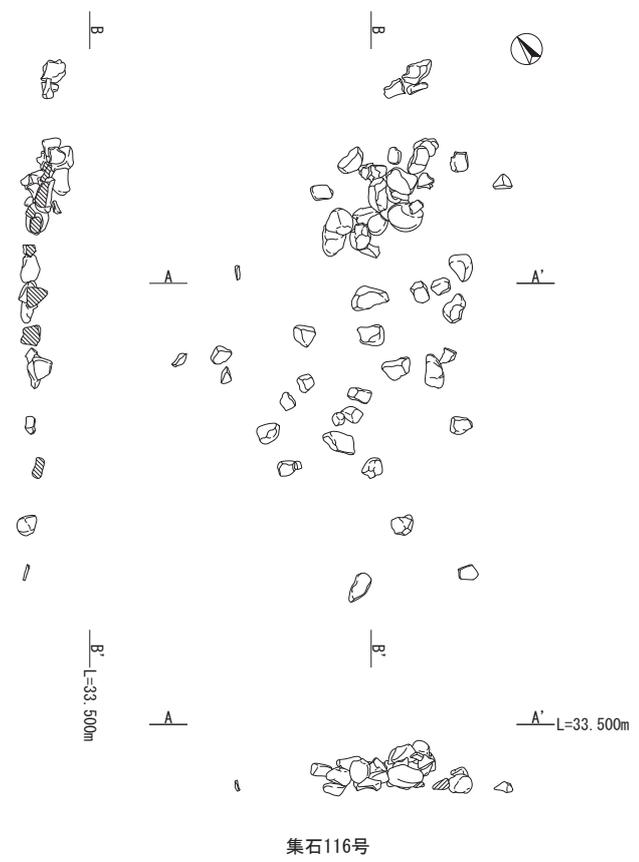
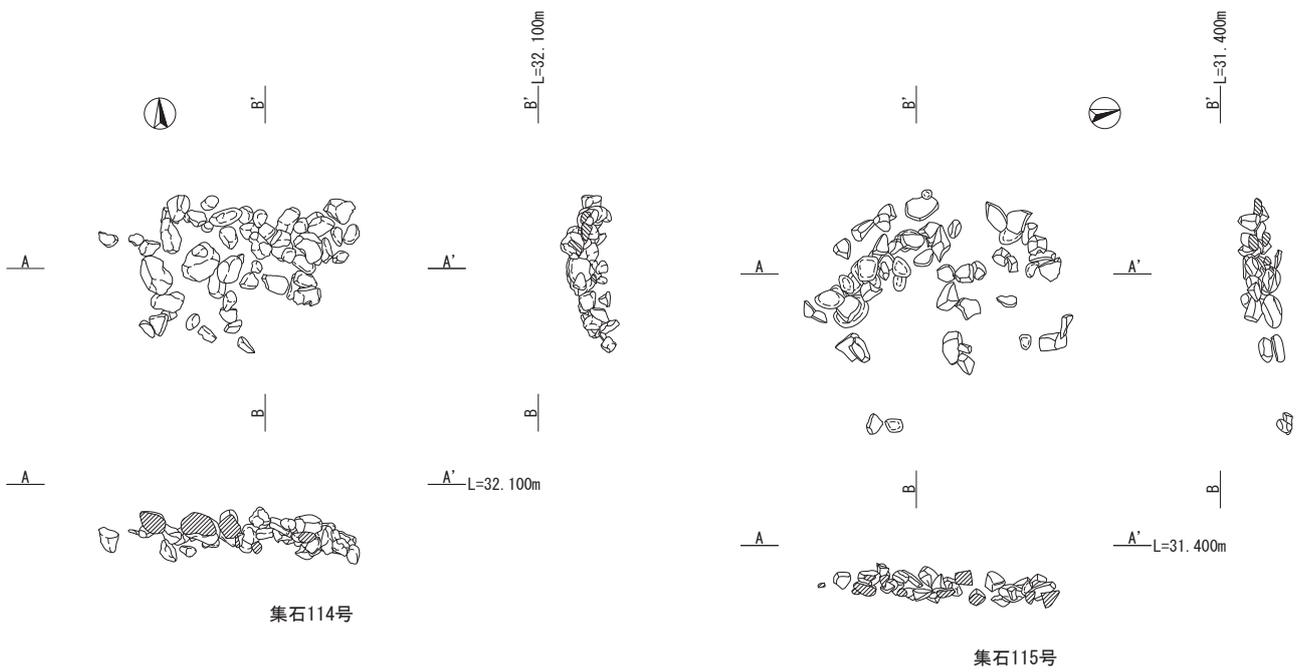


集石112号

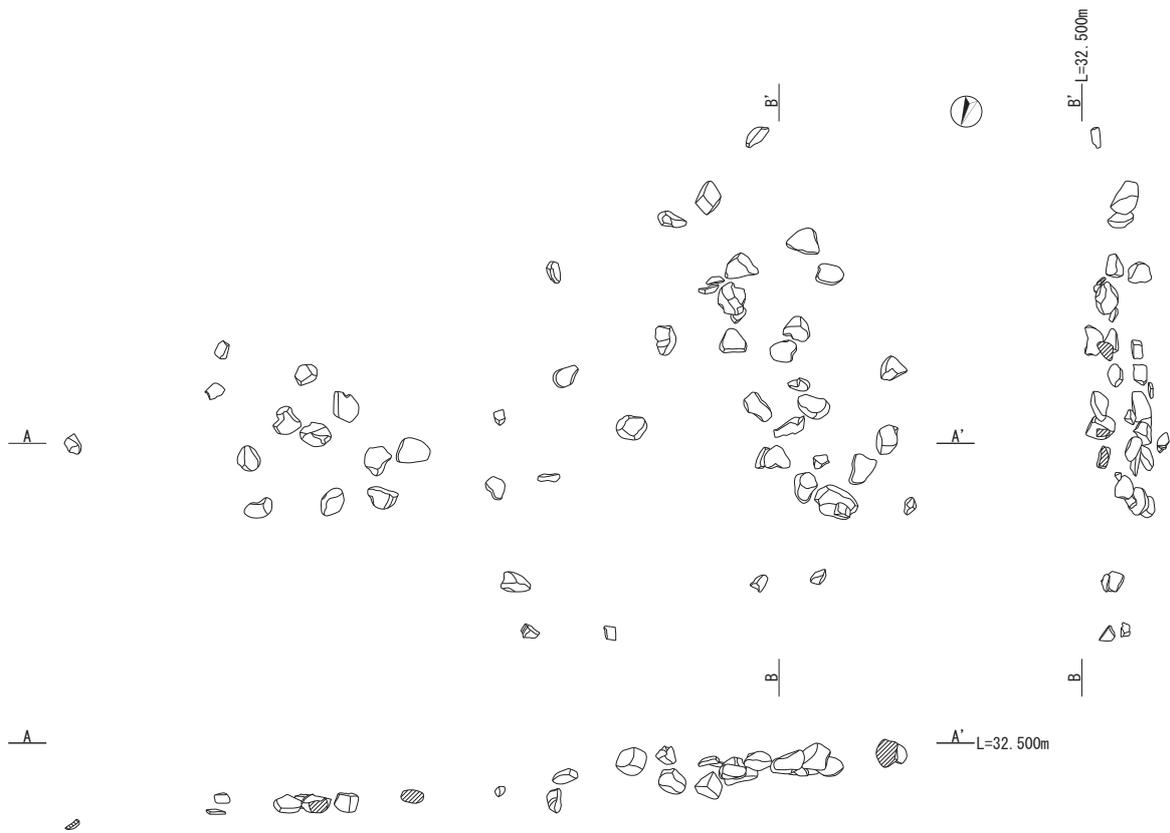
集石113号



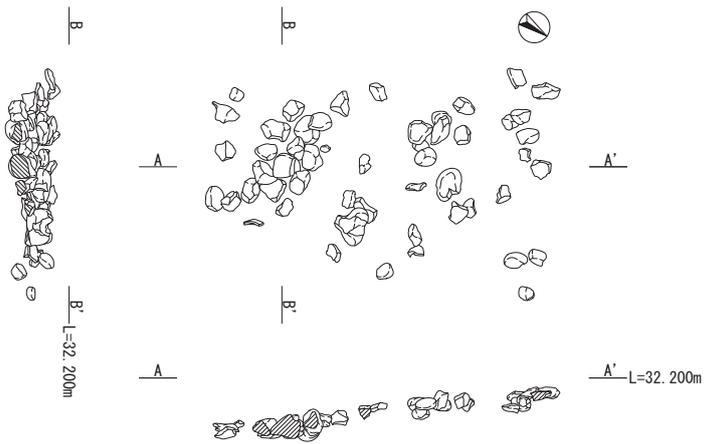
第59図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石35



第60図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石36



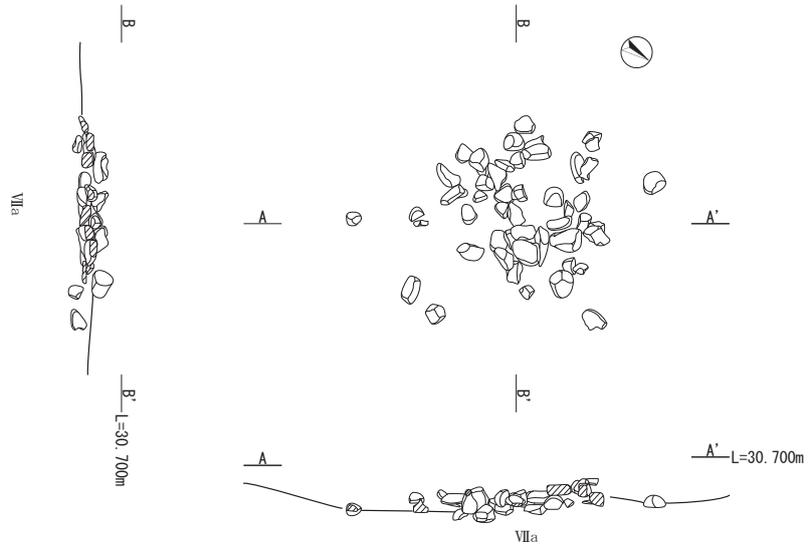
集石117号



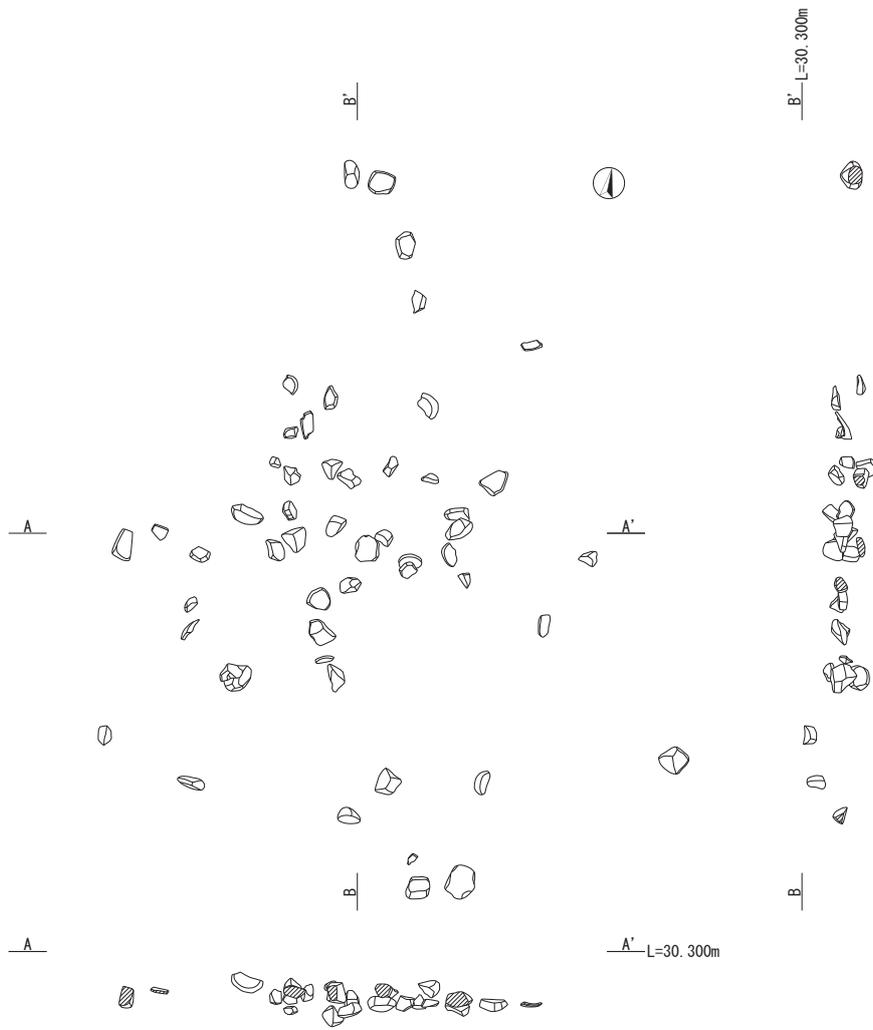
集石118号



第61図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石37



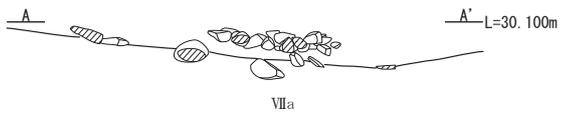
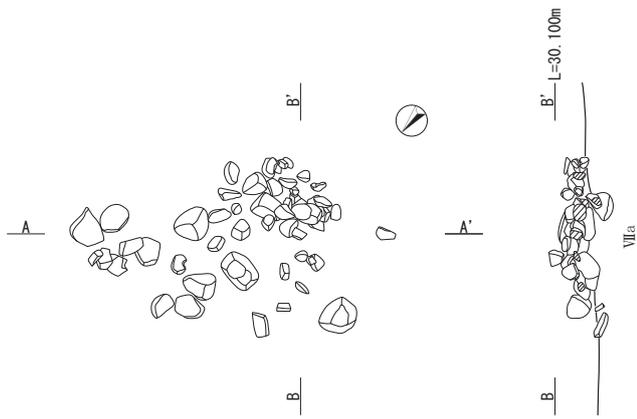
集石119号



集石120号

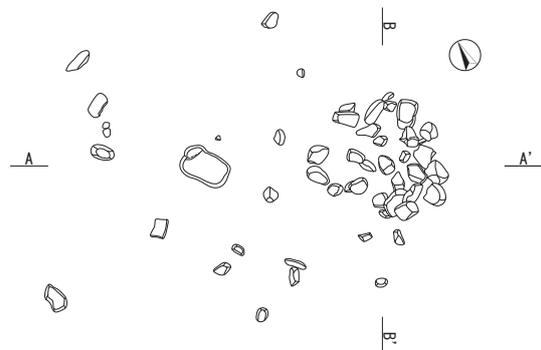
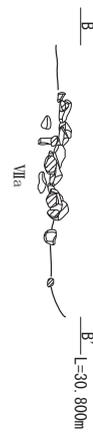


第62図 縄文時代早期VII a層検出集石38



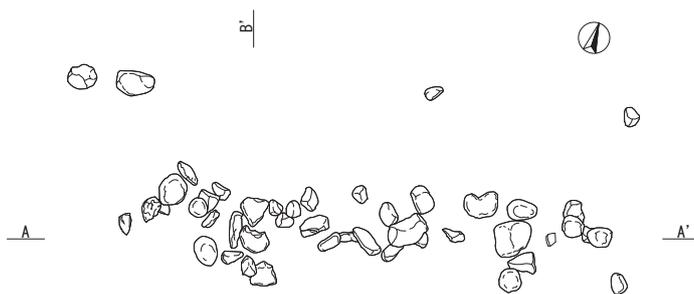
VIIa

集石121号



VIIa

集石122号



B'-L=34.400m

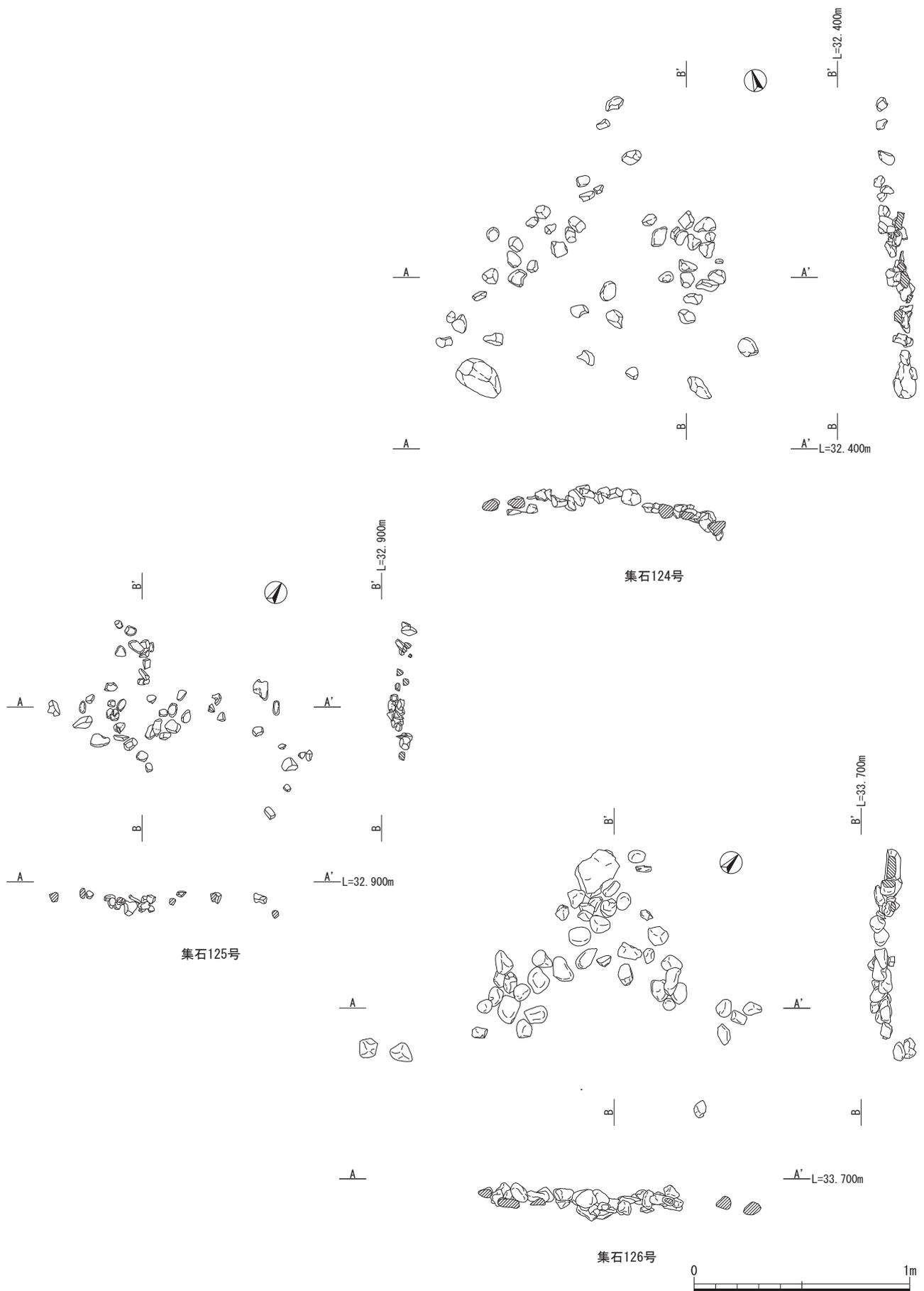


A'-L=34.400m

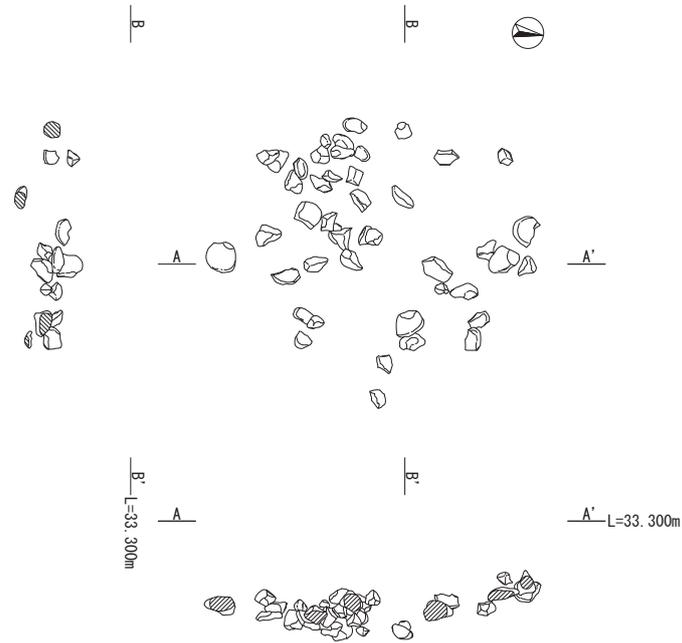
集石123号



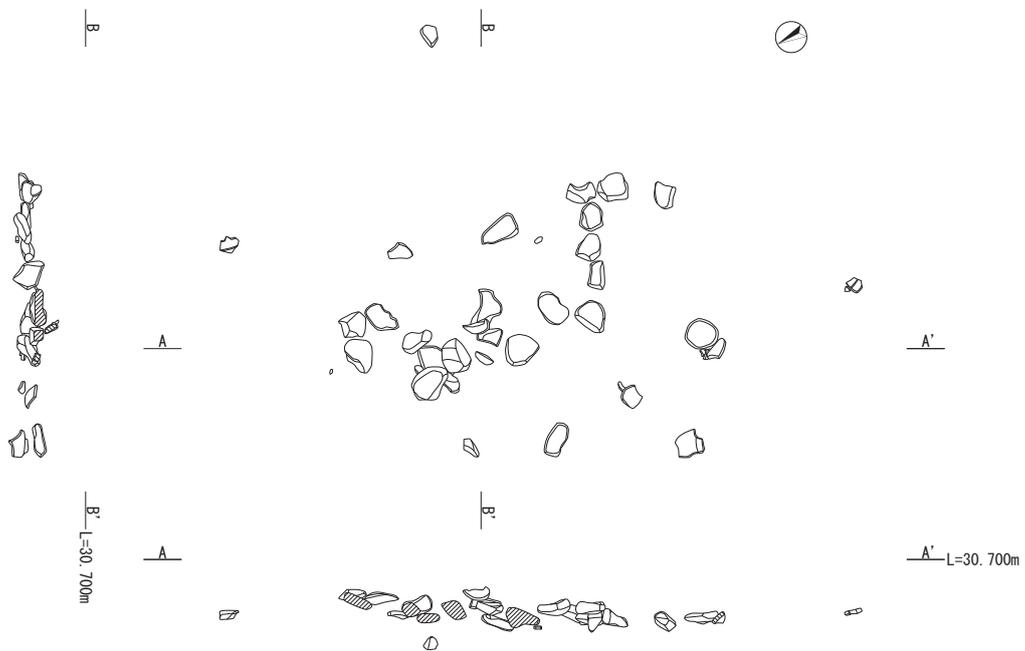
第63図 縄文時代早期VII a層検出集石39



第64図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石40



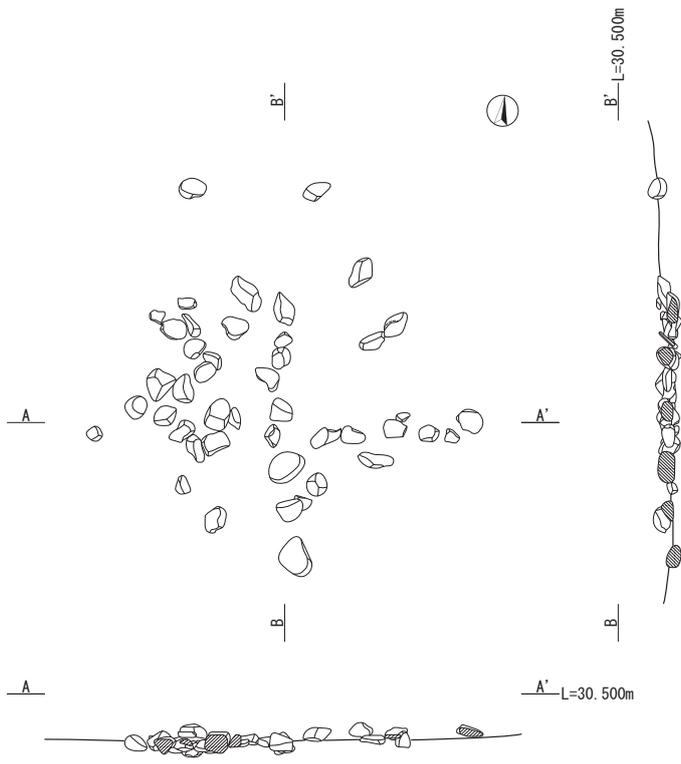
集石127号



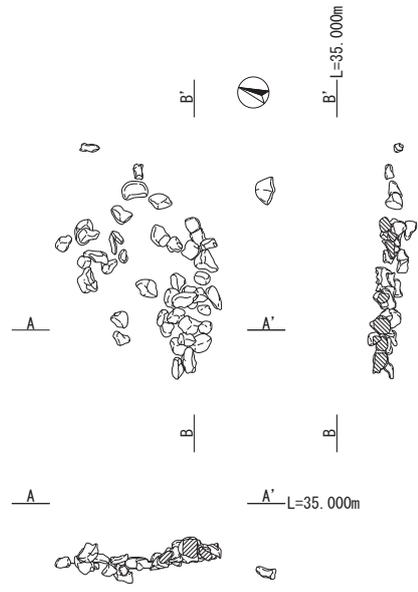
集石128号



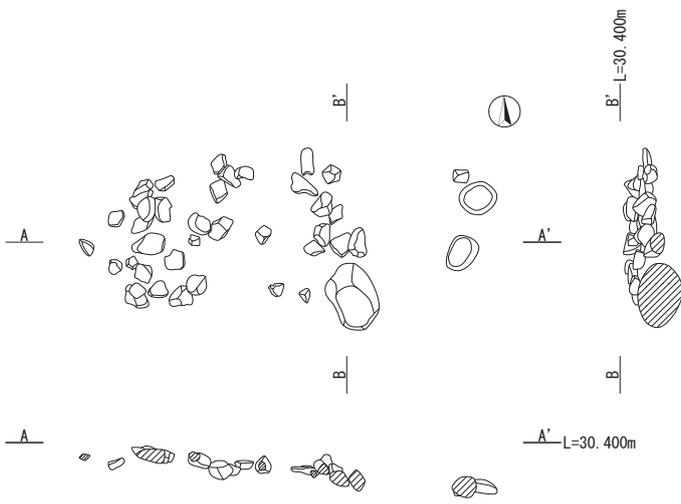
第65図 縄文時代早期VII a層検出集石41



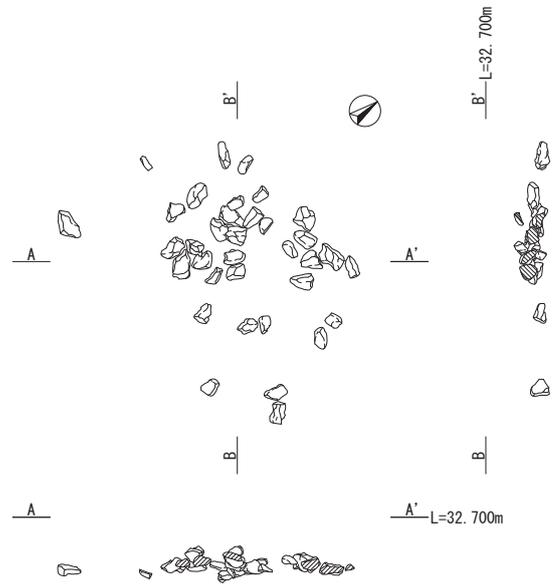
集石129号



集石130号



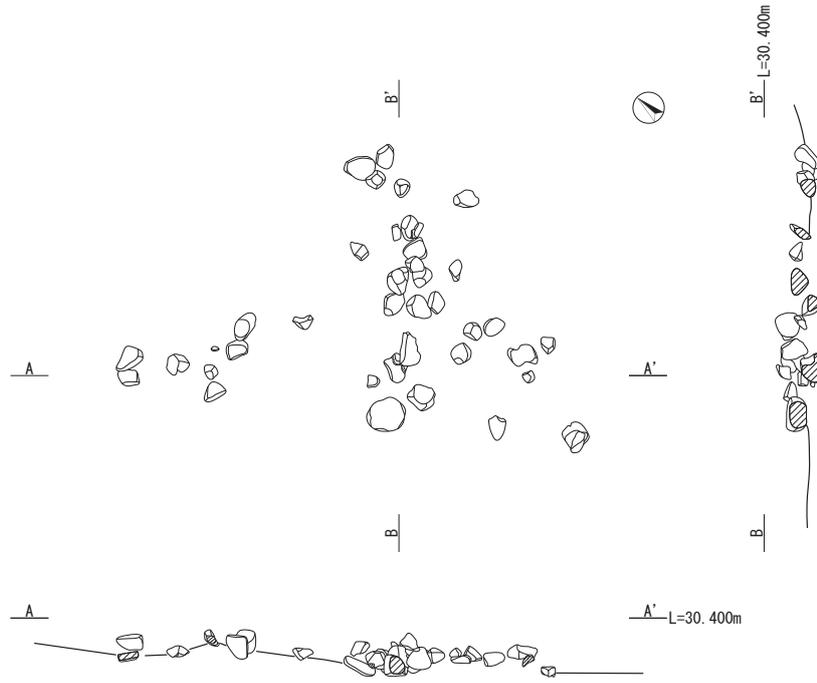
集石131号



集石134号



第66図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石42



集石132号

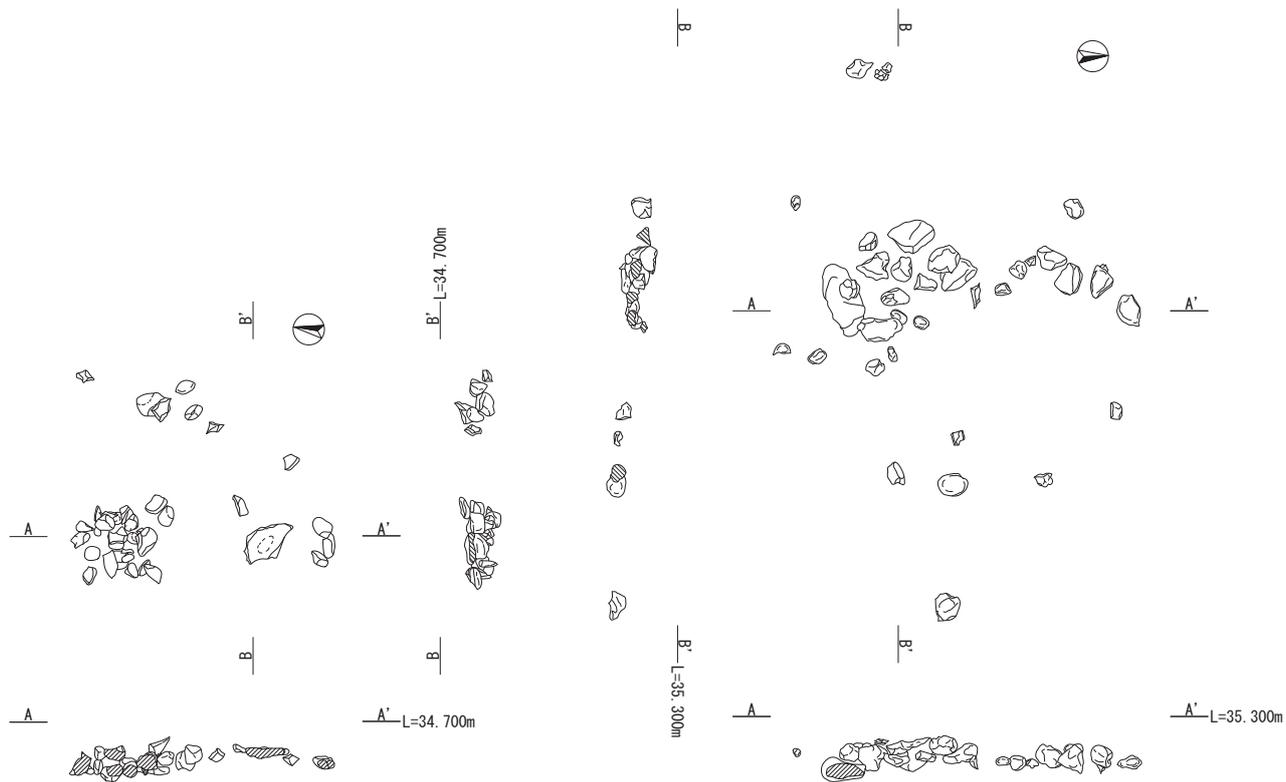


集石133号

集石135号

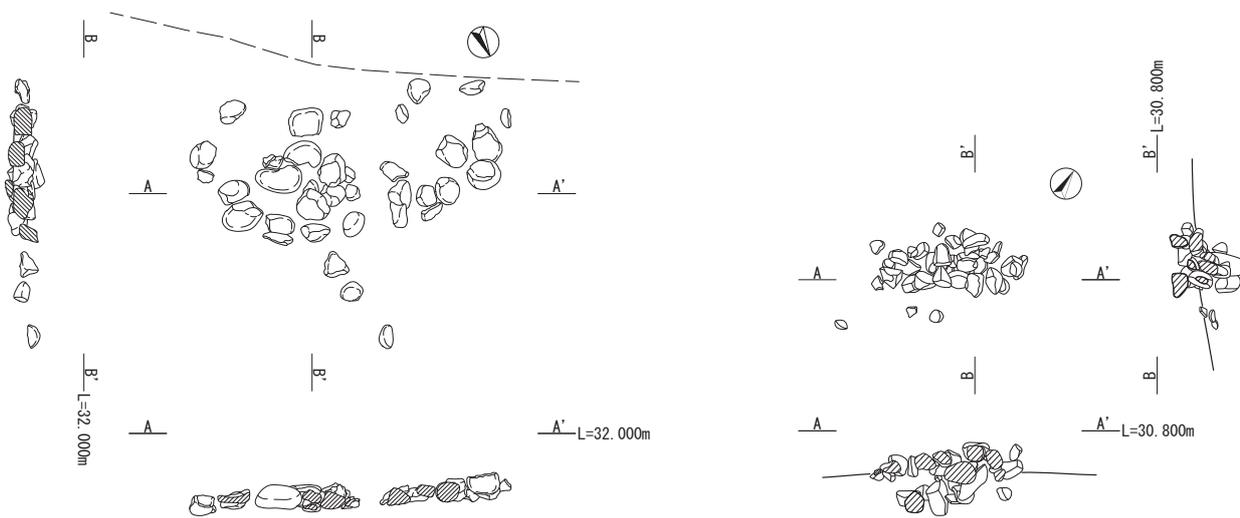


第67図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石43



集石136号

集石137号

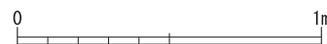
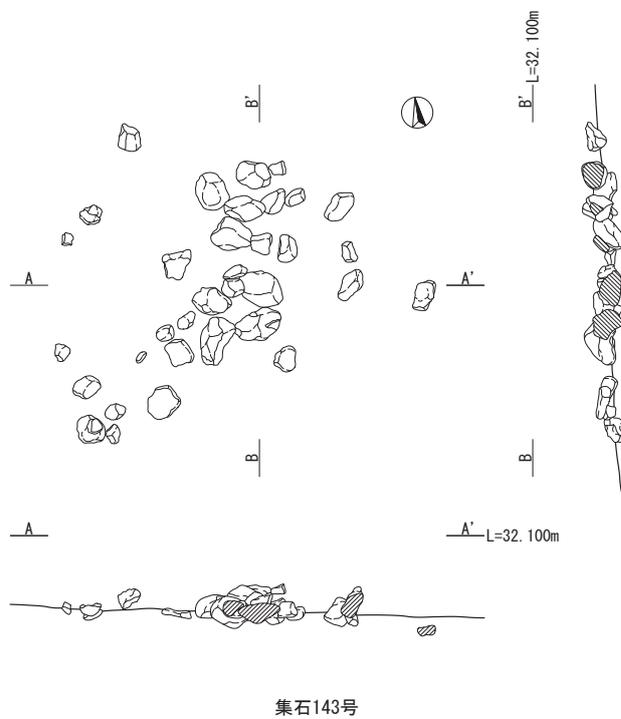
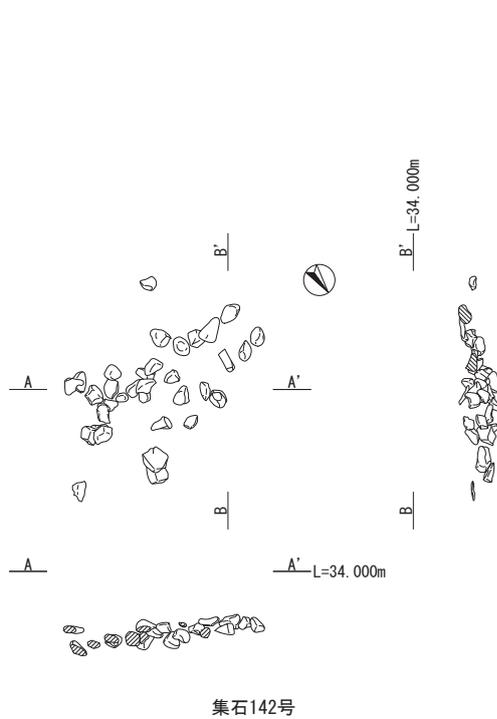
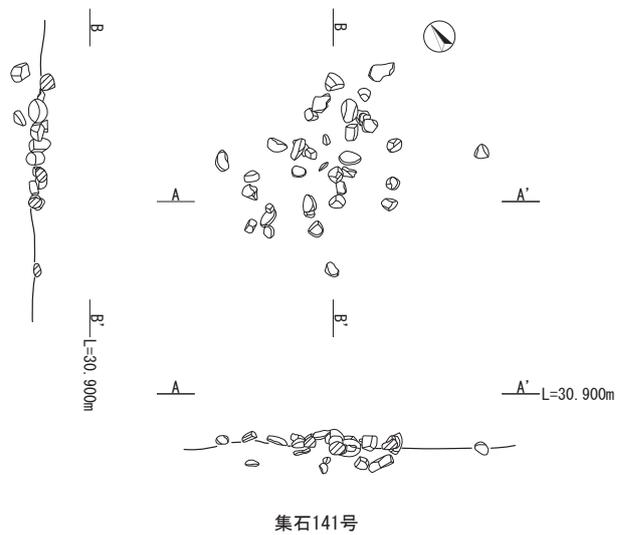
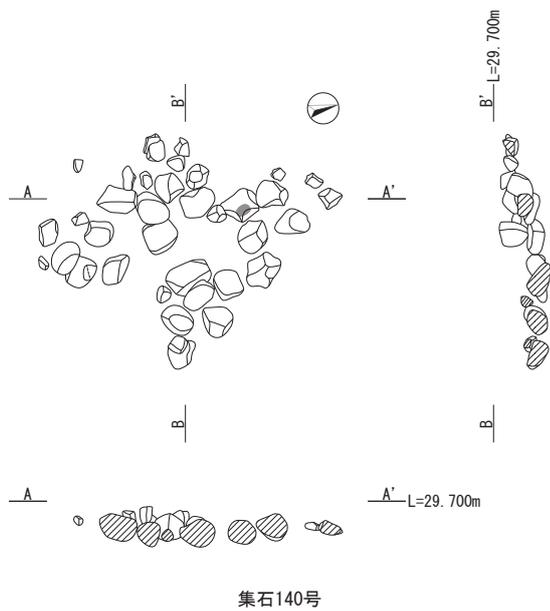


集石138号

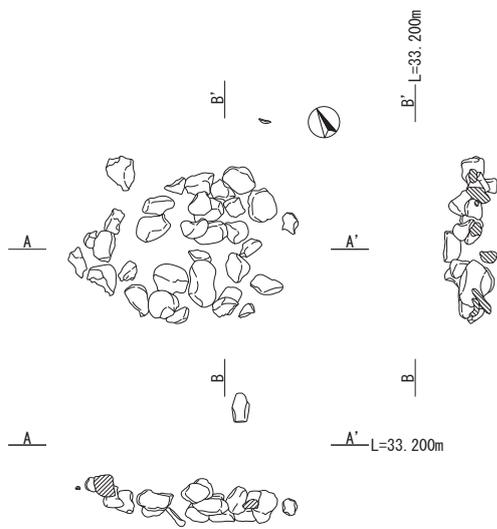
集石139号



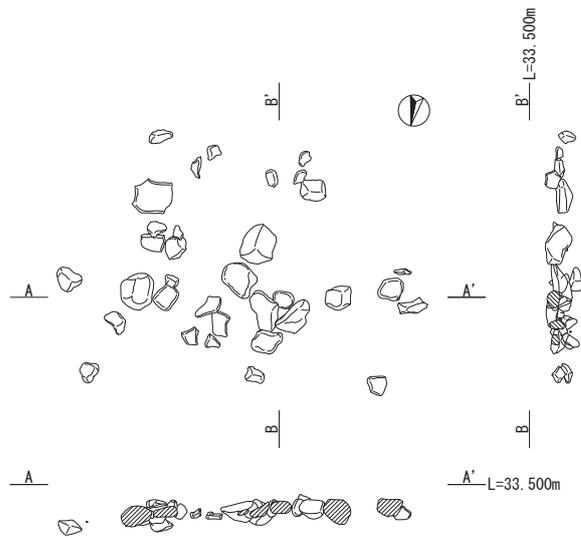
第68図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石44



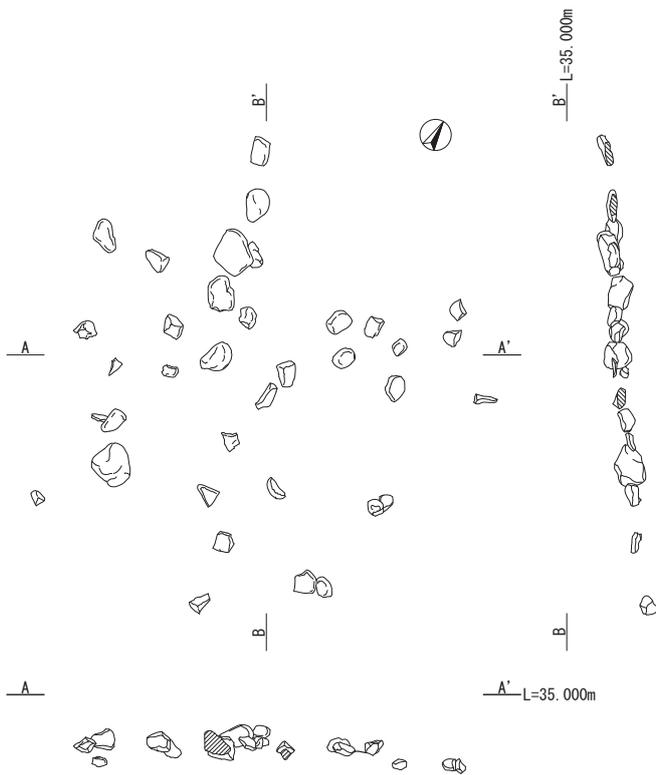
第69図 縄文時代早期VII a層検出集石45



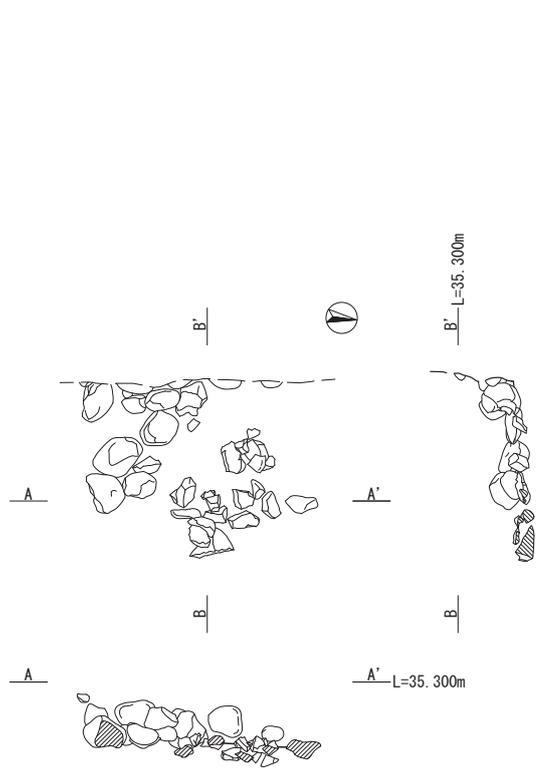
集石144号



集石145号



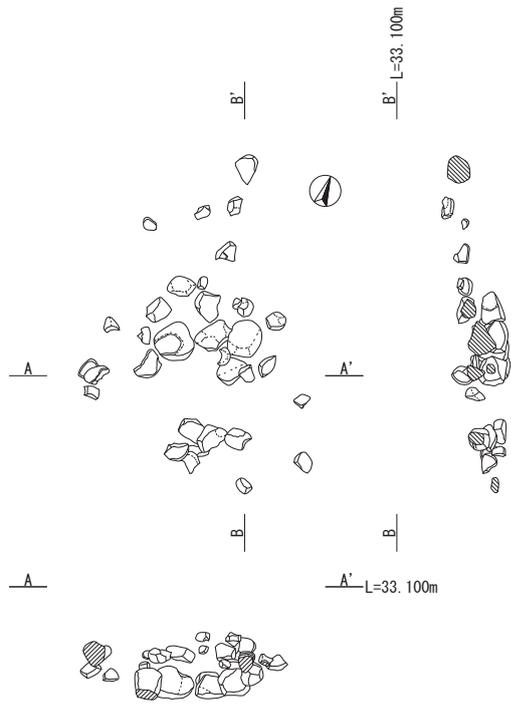
集石146号



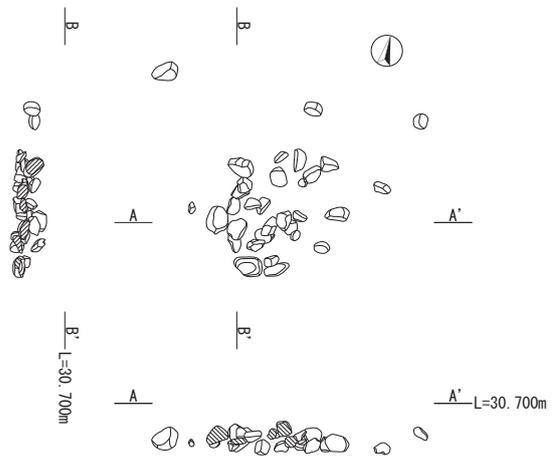
集石147号



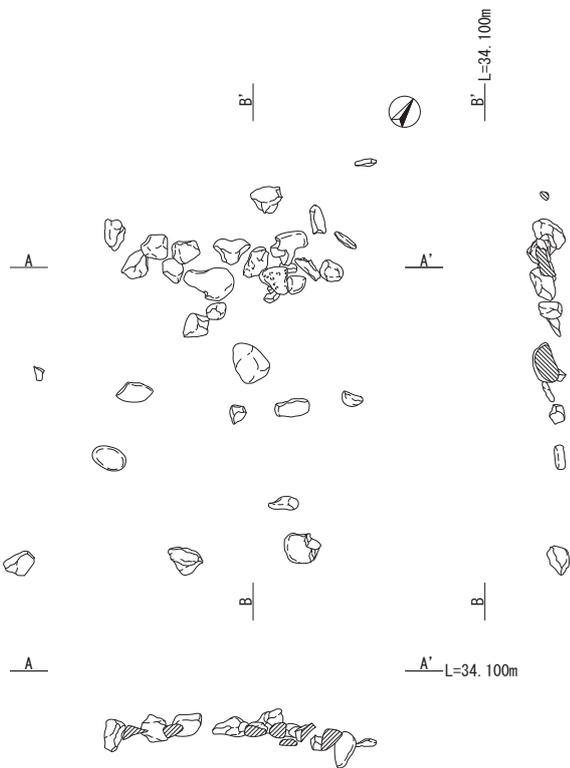
第70図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石46



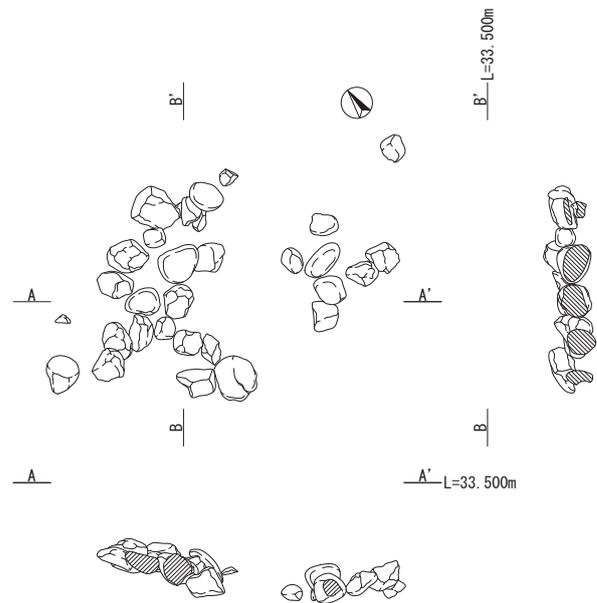
集石148号



集石149号



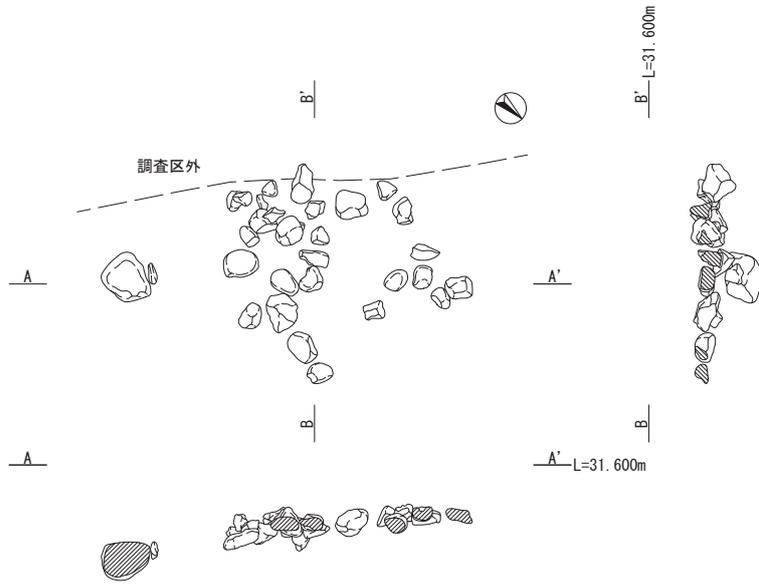
集石150号



集石151号



第71図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石47



集石152号

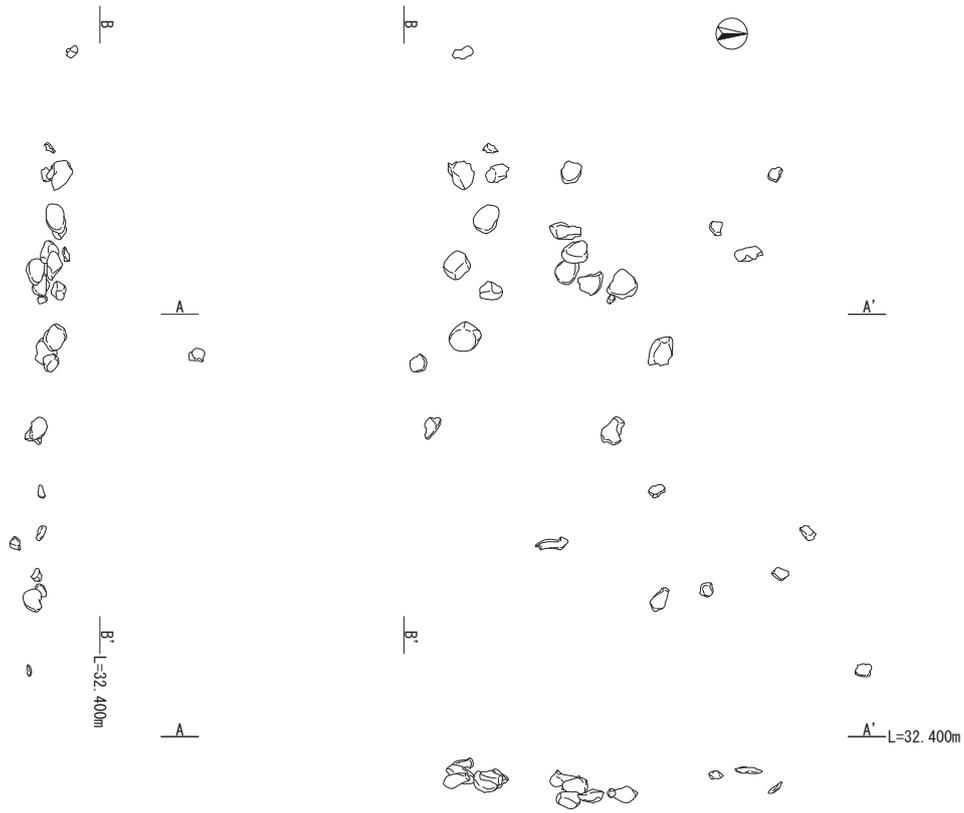


集石153号

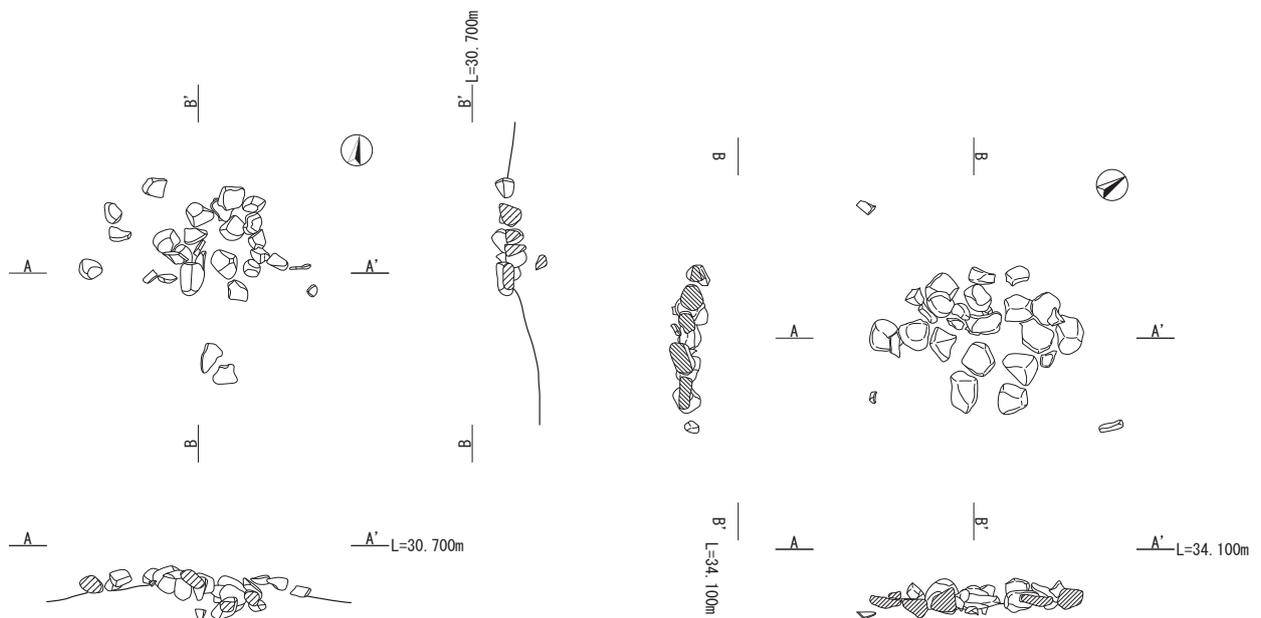
集石154号



第72図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石48



集石155号

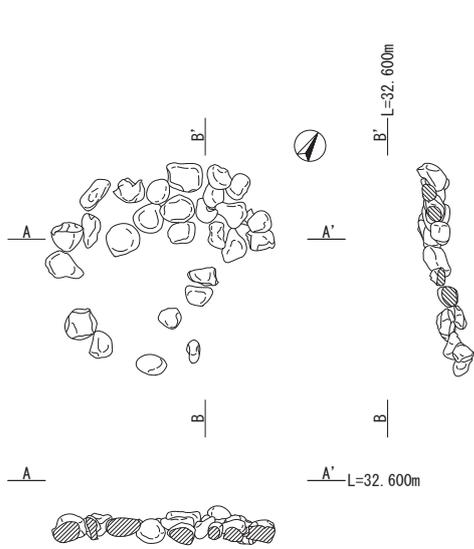


集石156号

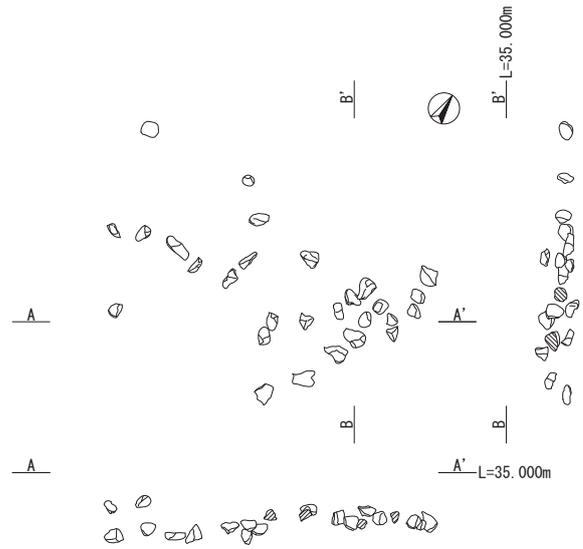
集石157号



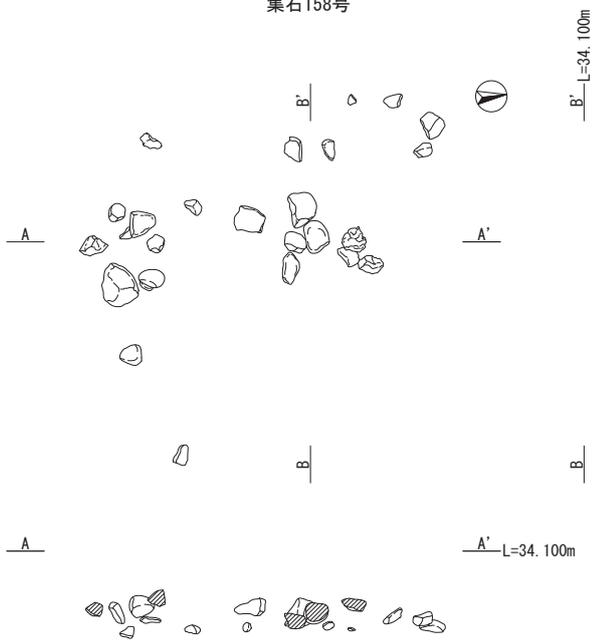
第73図 縄文時代早期VII a層検出集石49



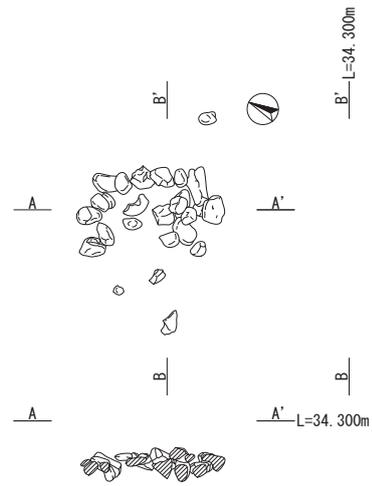
集石158号



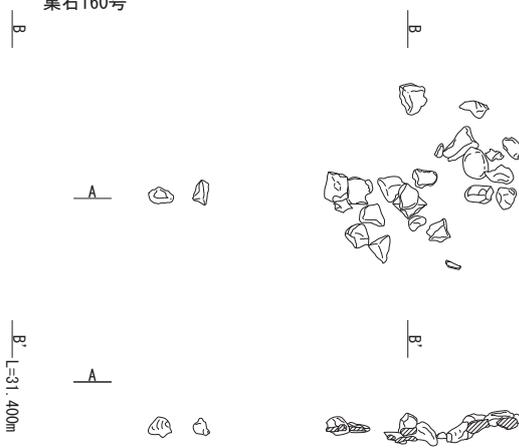
集石159号



集石160号



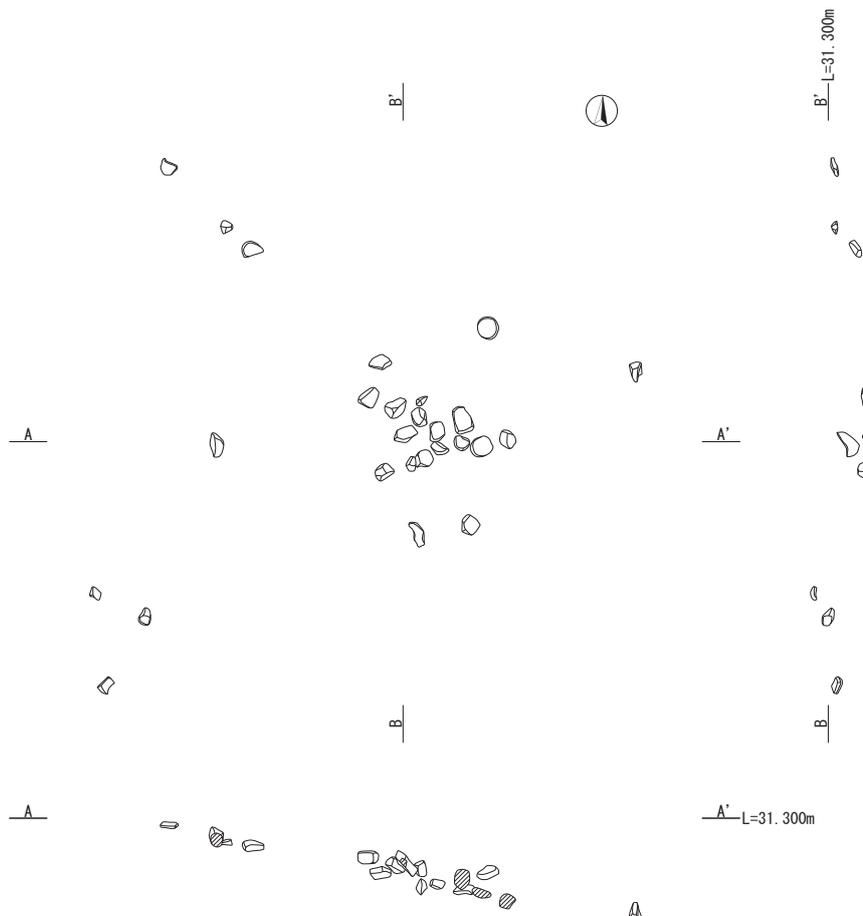
集石161号



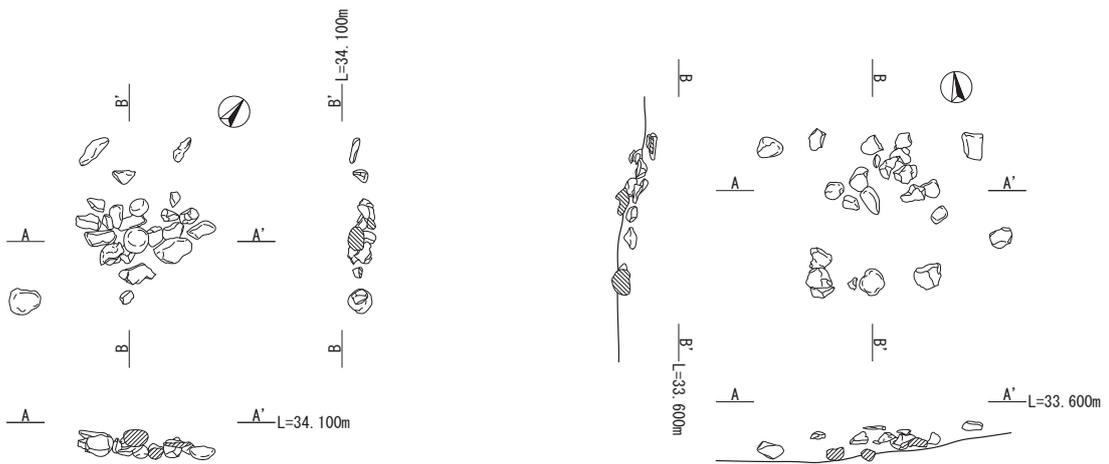
集石162号



第74図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石50



集石163号

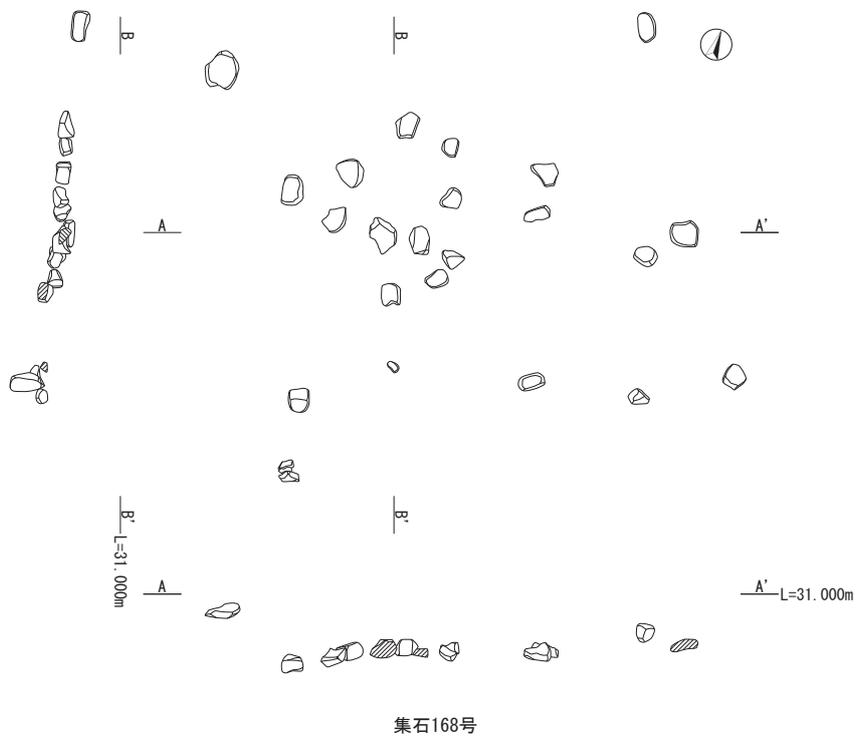
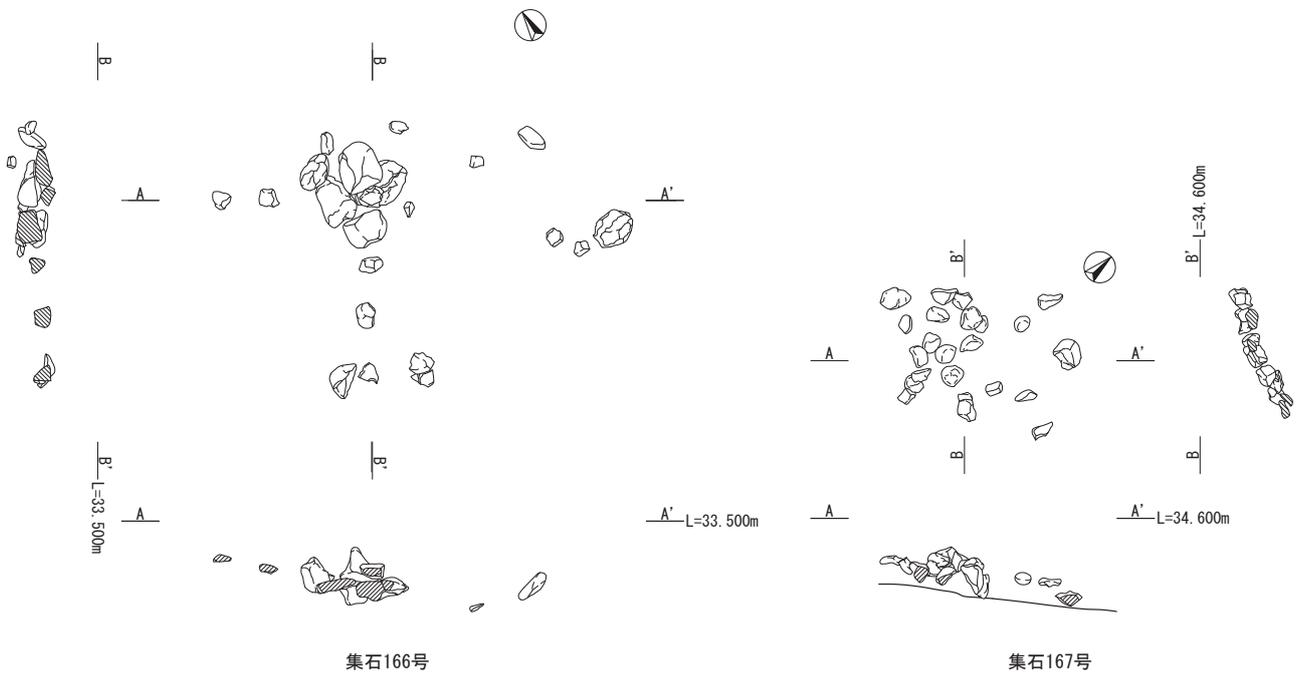


集石164号

集石165号



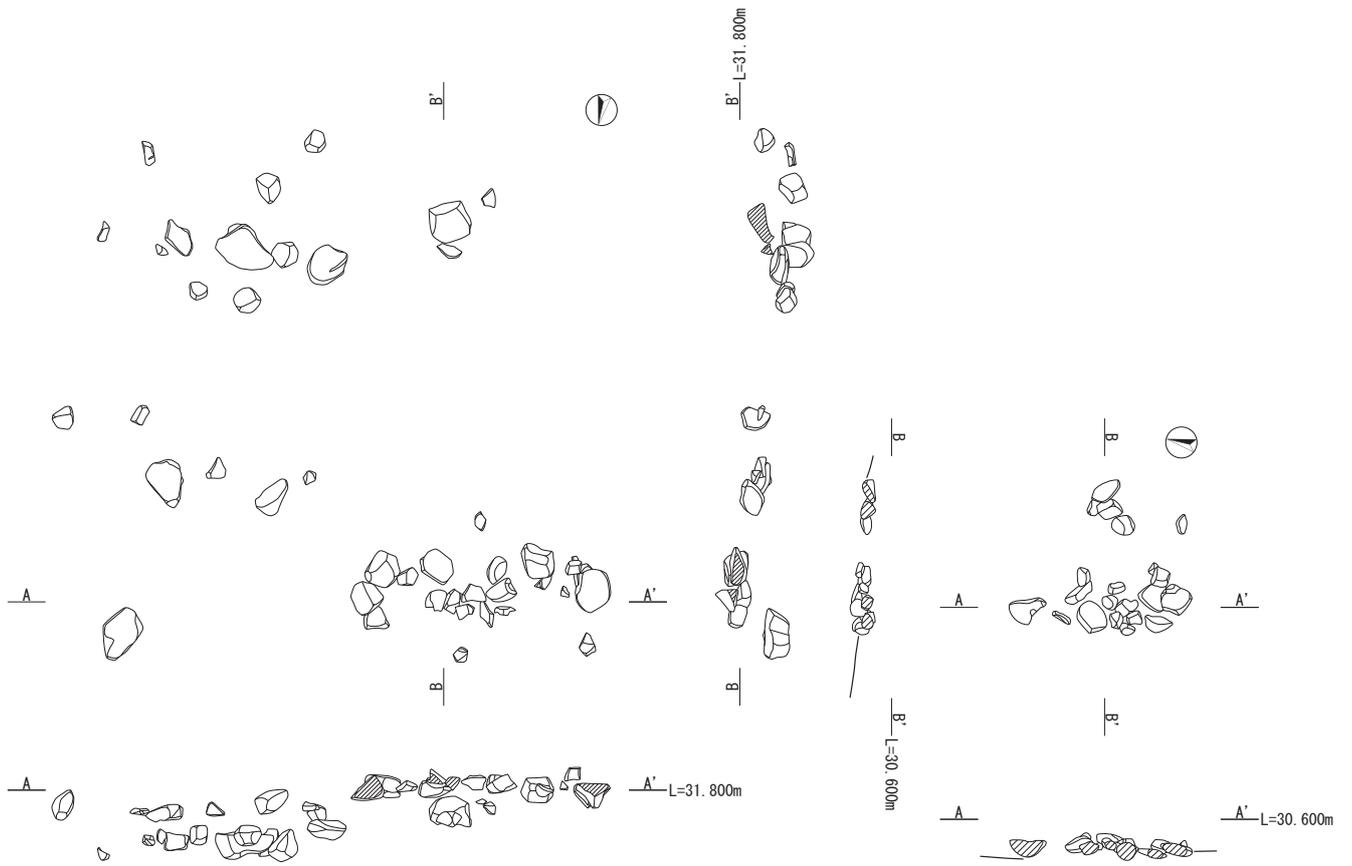
第75図 縄文時代早期VII a層検出集石51



第76図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石52

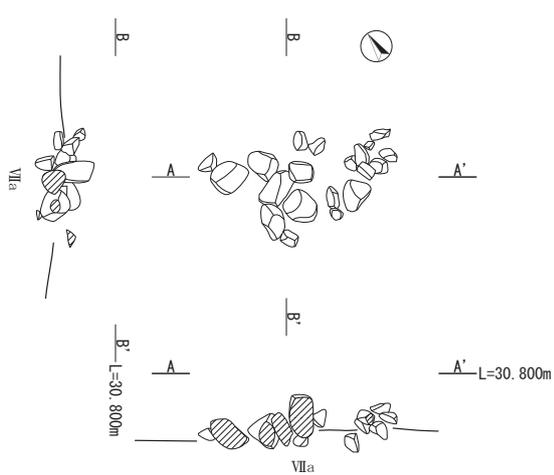


第77図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石53

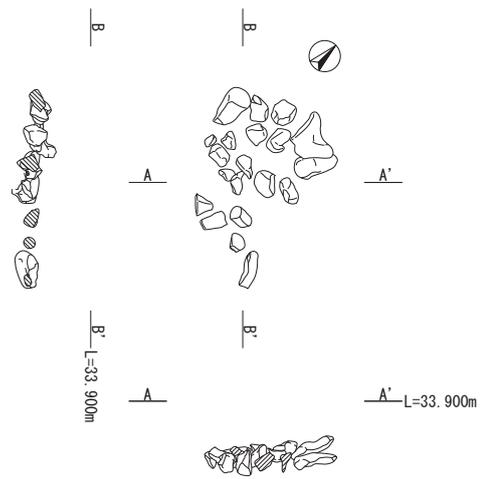


集石172・173号

集石174号



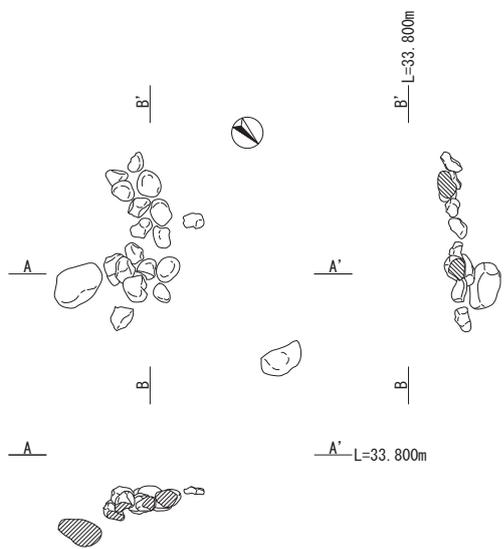
集石175号



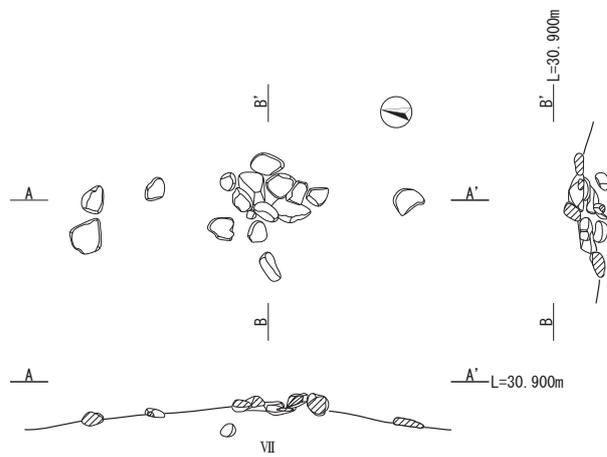
集石176号



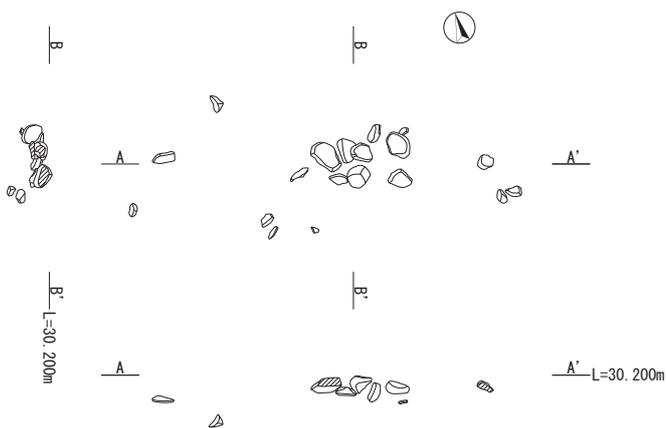
第78図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石54



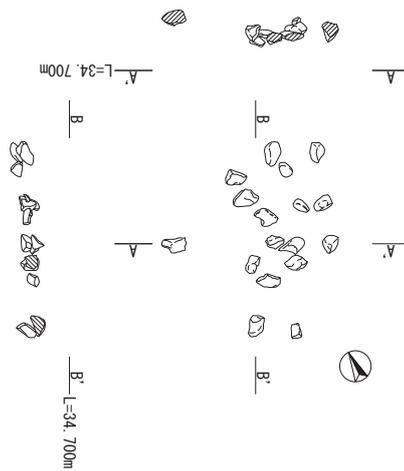
集石177号



集石178号



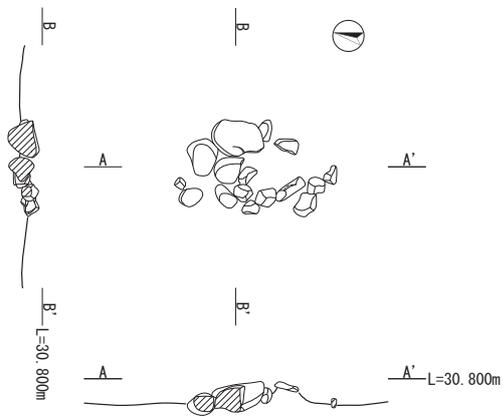
集石179号



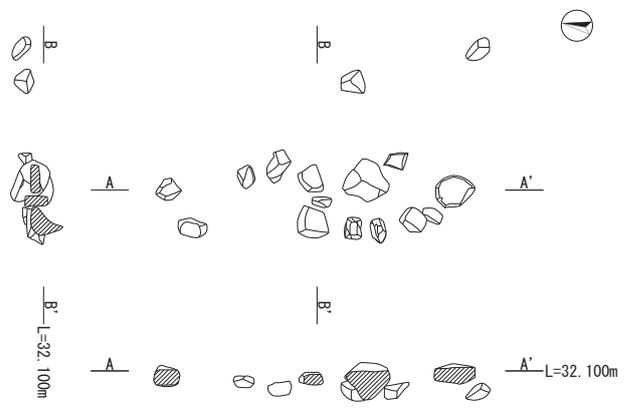
集石181号



第79図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石55



集石182号



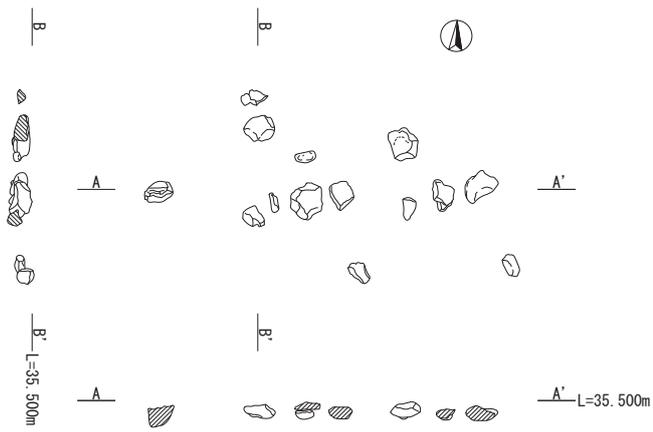
集石183号



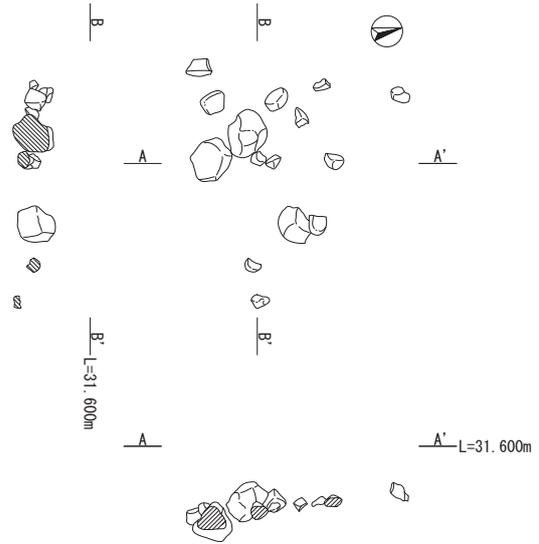
集石180号



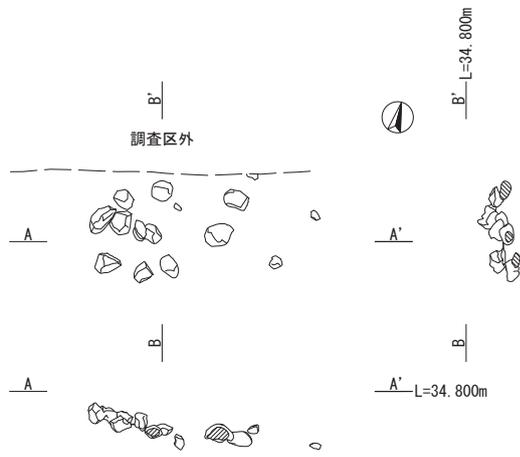
第80図 縄文時代早期Ⅶa層検出集石56



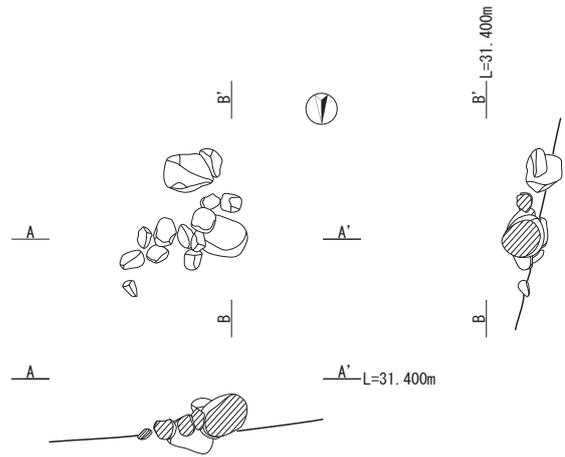
集石184号



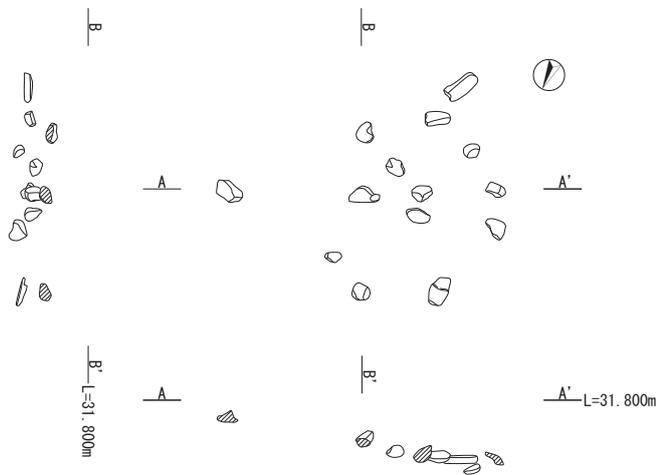
集石185号



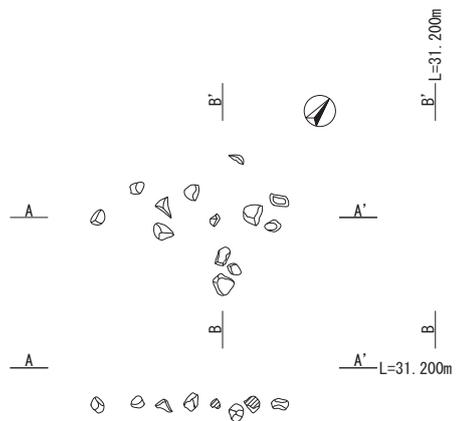
集石186号



集石187号



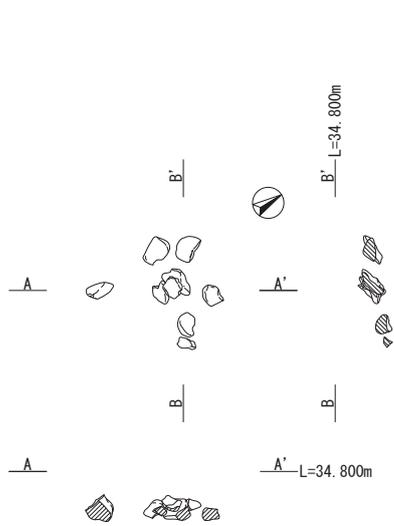
集石188号



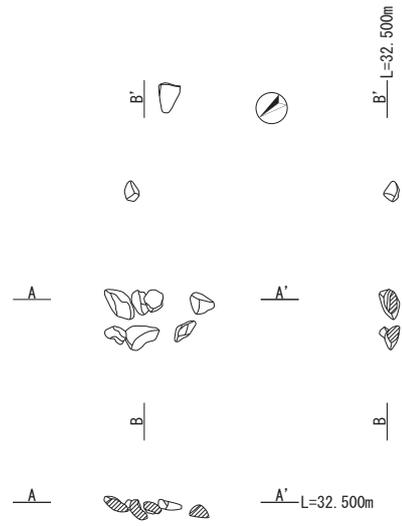
集石189号



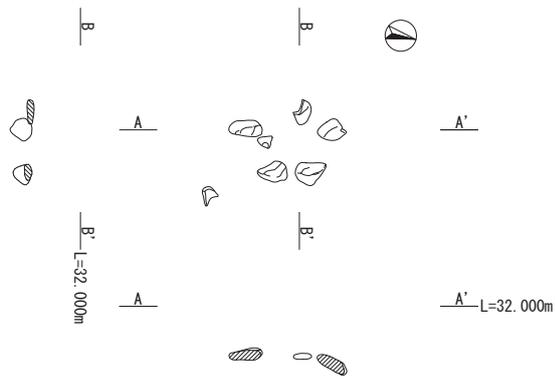
第81図 縄文時代早期VII a層検出集石57



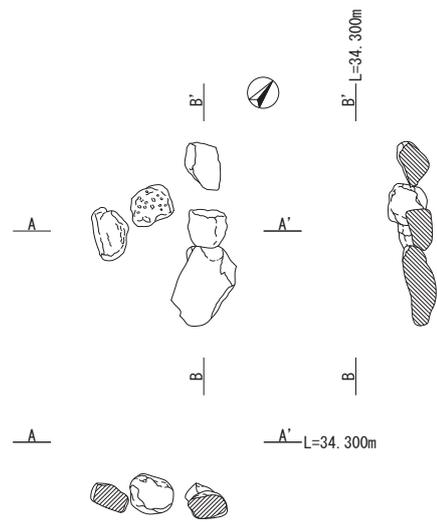
集石190号



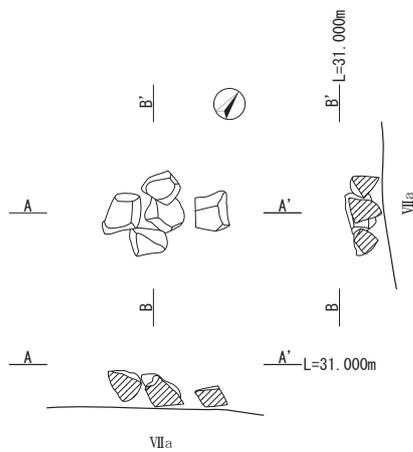
集石191号



集石192号



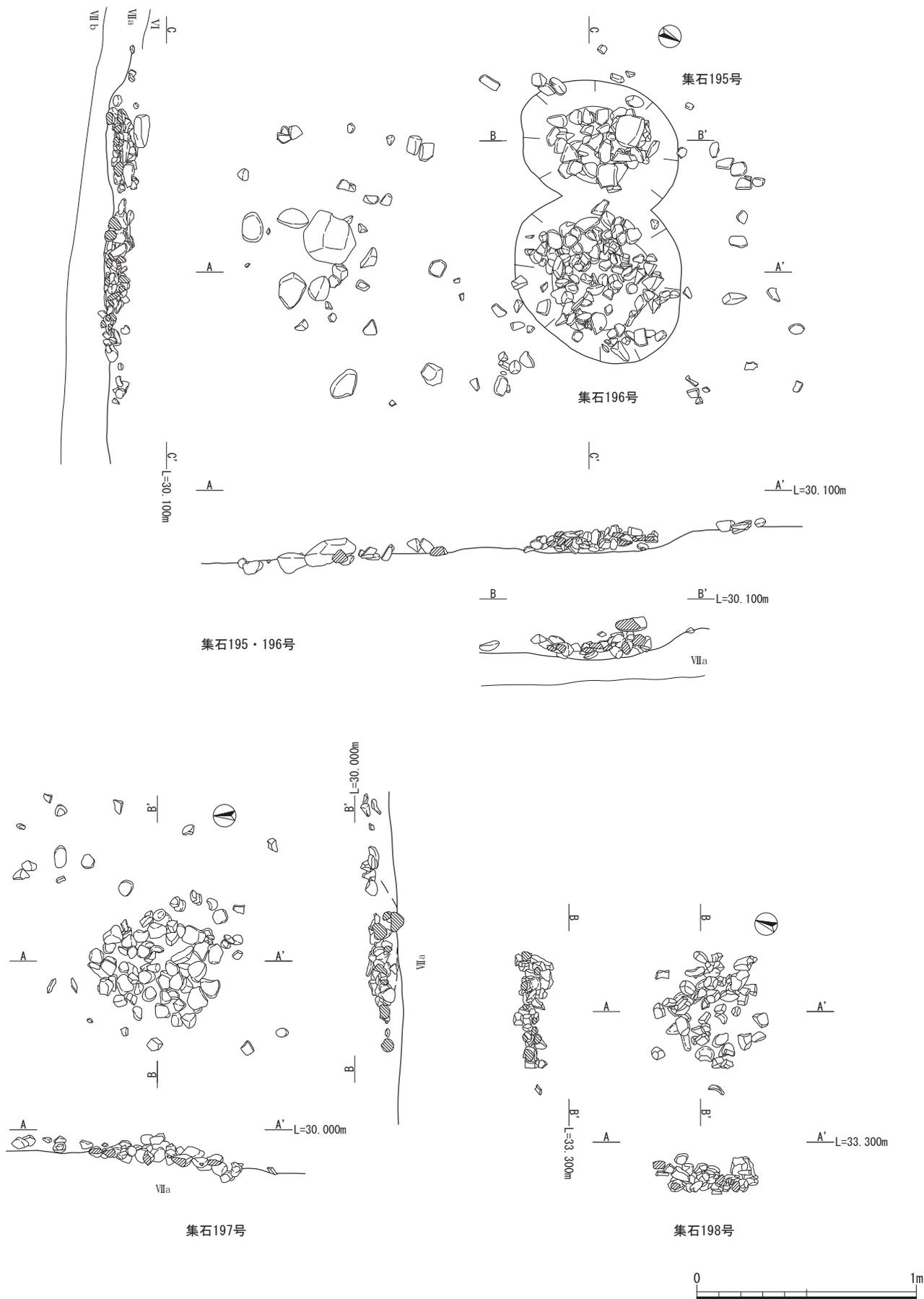
集石193号



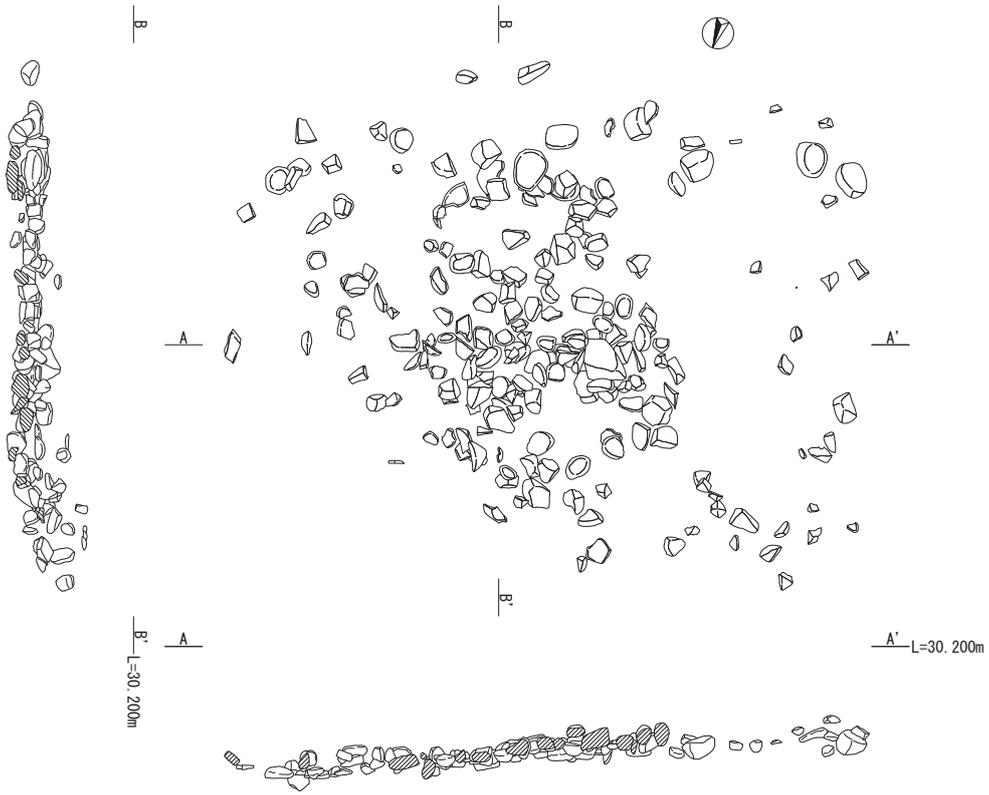
集石194号



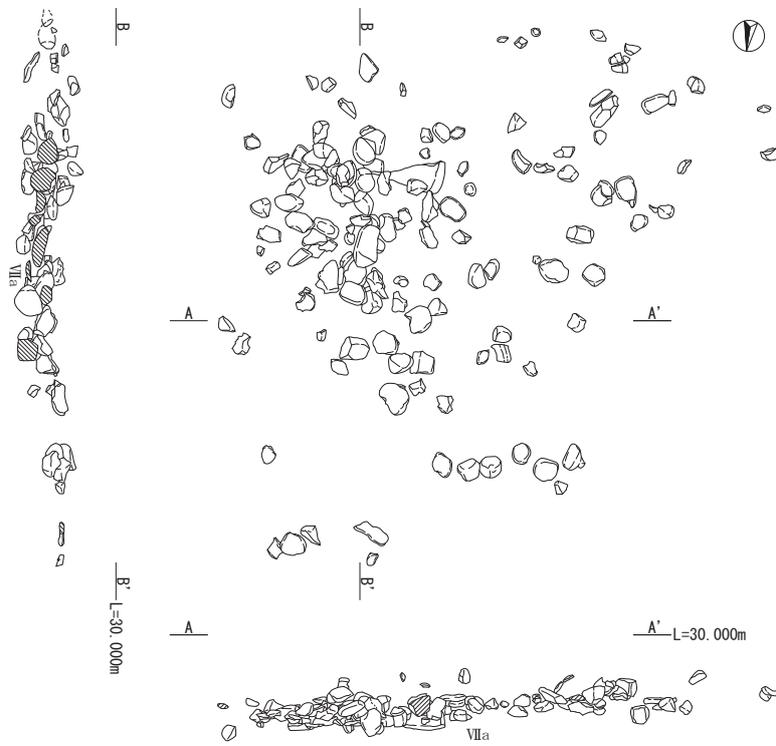
第82図 縄文時代早期VII a層検出集石58



第83図 縄文時代早期Ⅶa層上位検出集石1



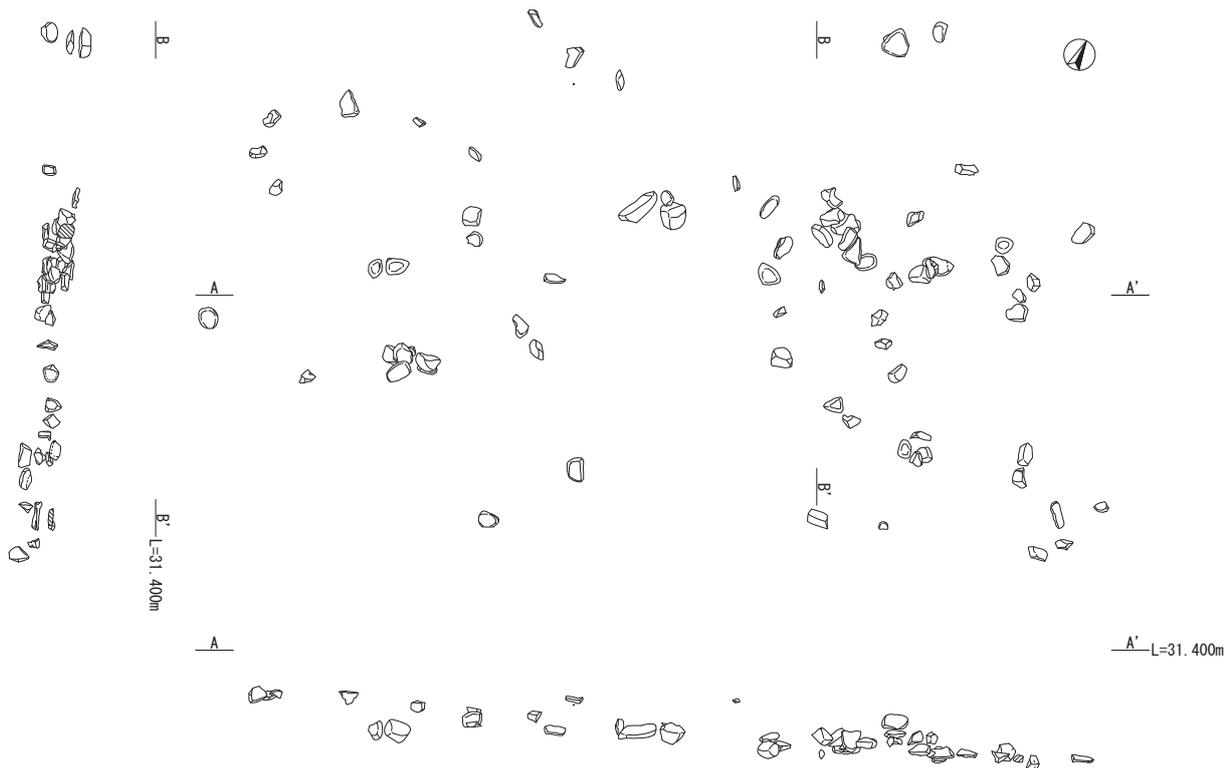
集石199号



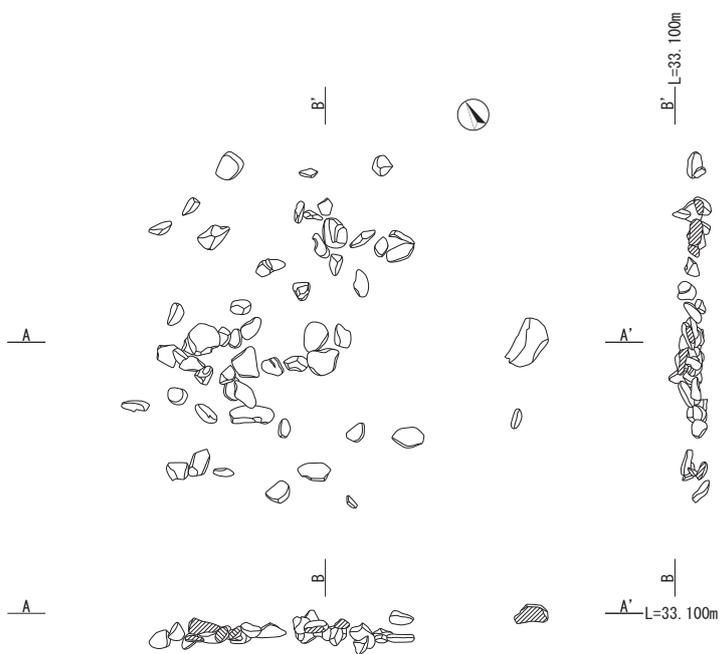
集石200号



第84図 縄文時代早期Ⅶa層上位検出集石2



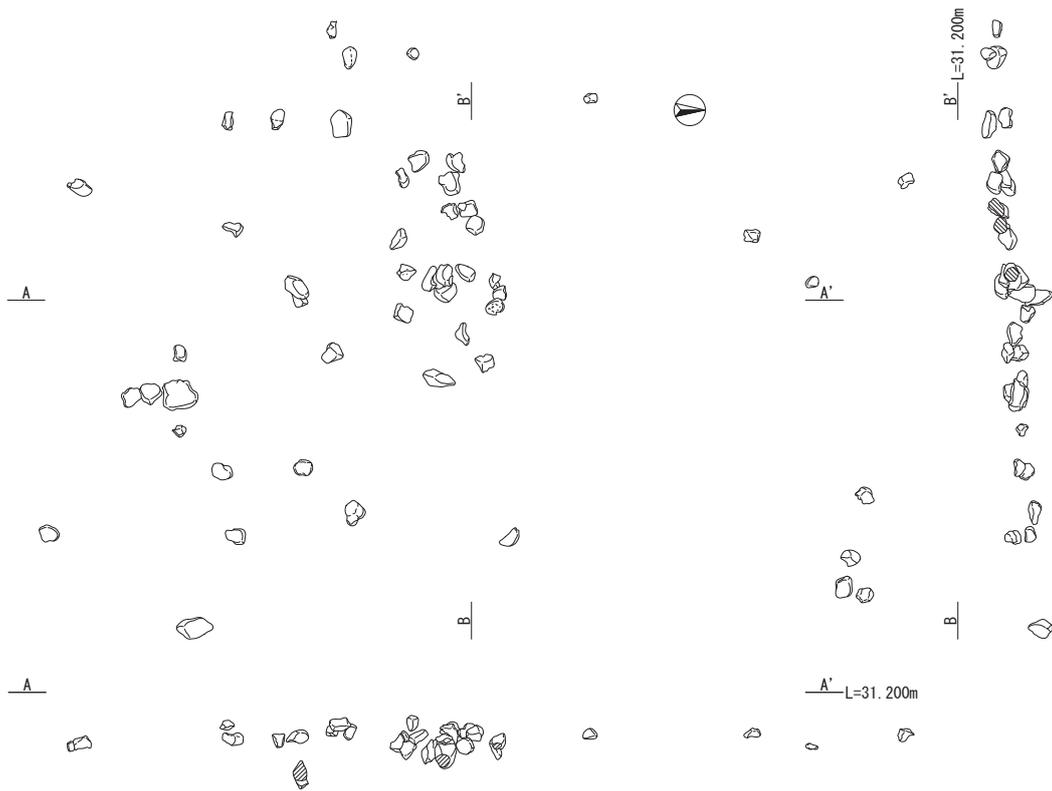
集石201号



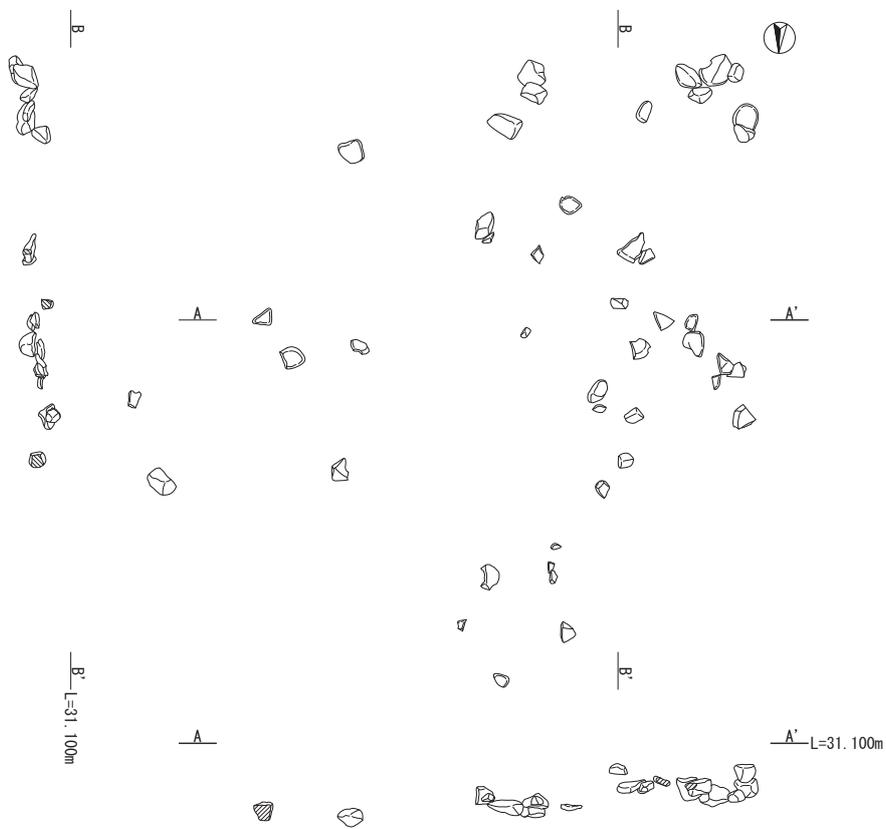
集石202号



第85図 縄文時代早期Ⅶa層上位検出集石3



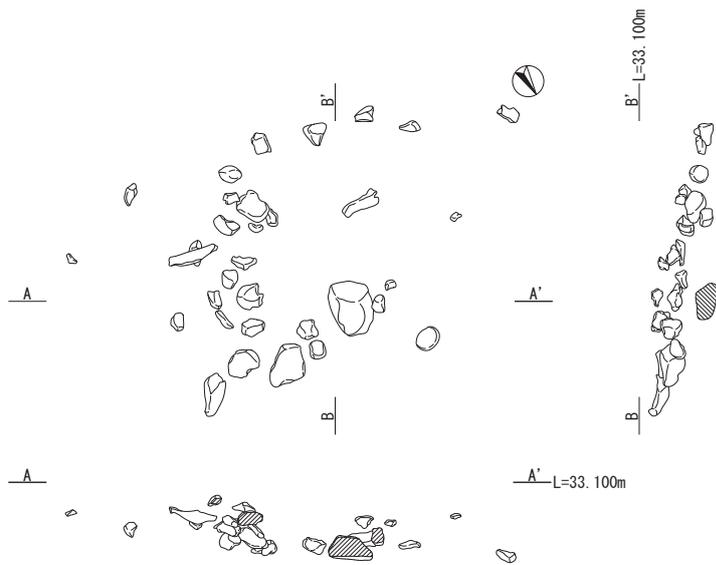
集石203号



集石204号

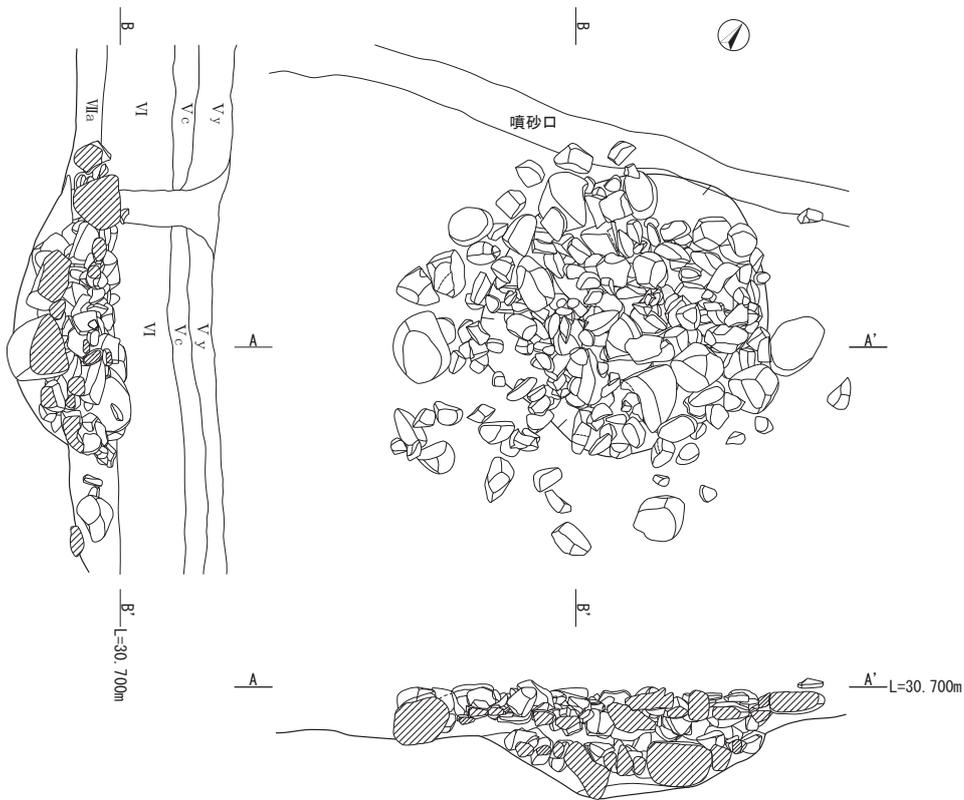


第86図 縄文時代早期Ⅶa層上位検出集石4



集石205号

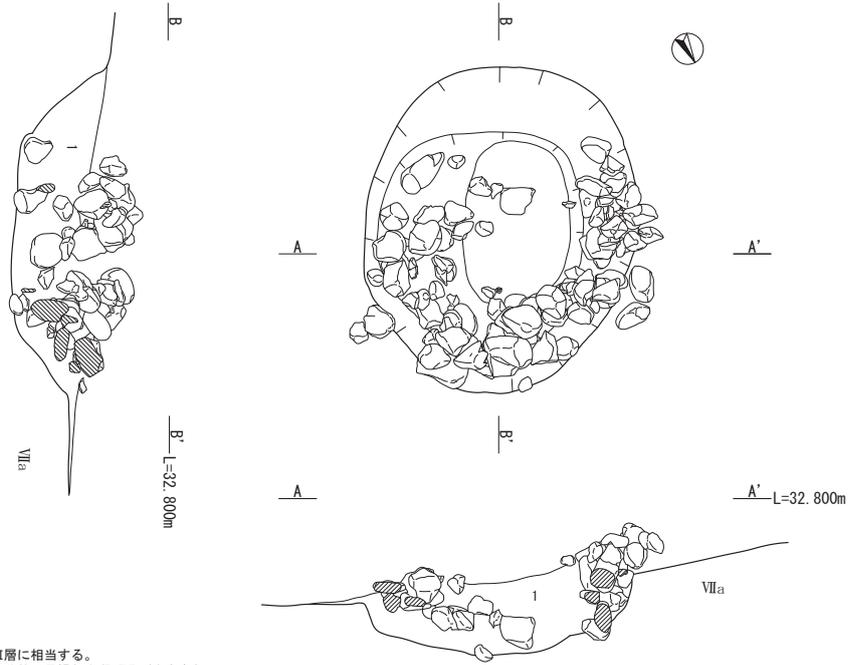
第87図 縄文時代早期Ⅶa層上位検出集石5



集石206号

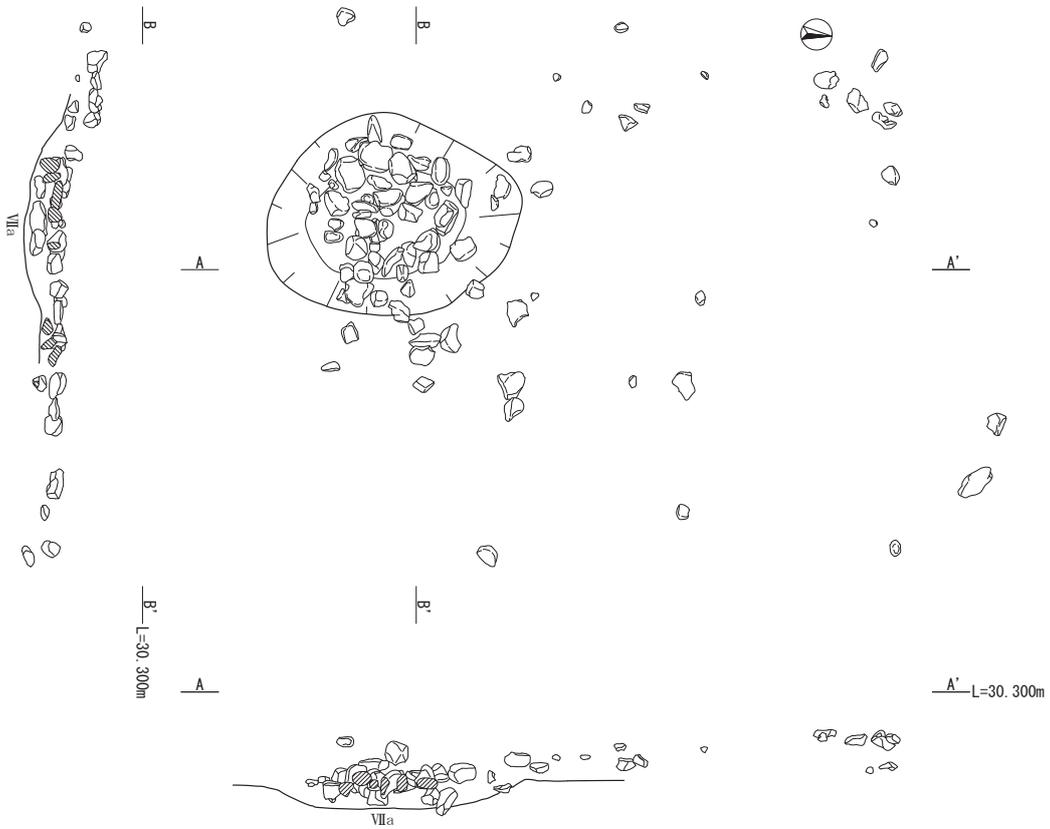


第88図 縄文時代早期Ⅵ層下位検出集石1



1: VI層に相当する。
部分的に黒褐色土(7.5YR2/2)を含む。
また黒褐色土には、白色パミス、黄褐色パミスをわずかに含む。

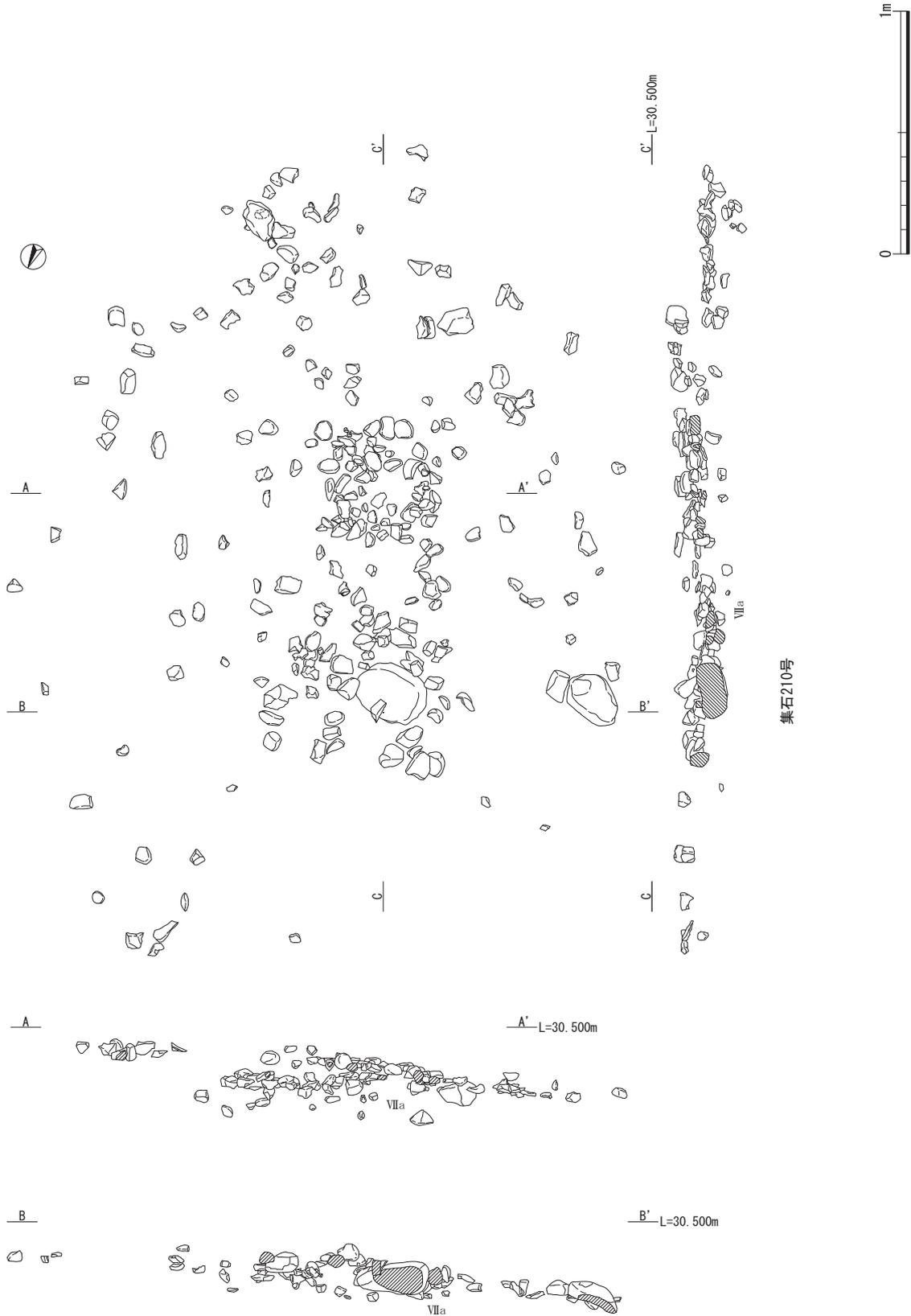
集石207号



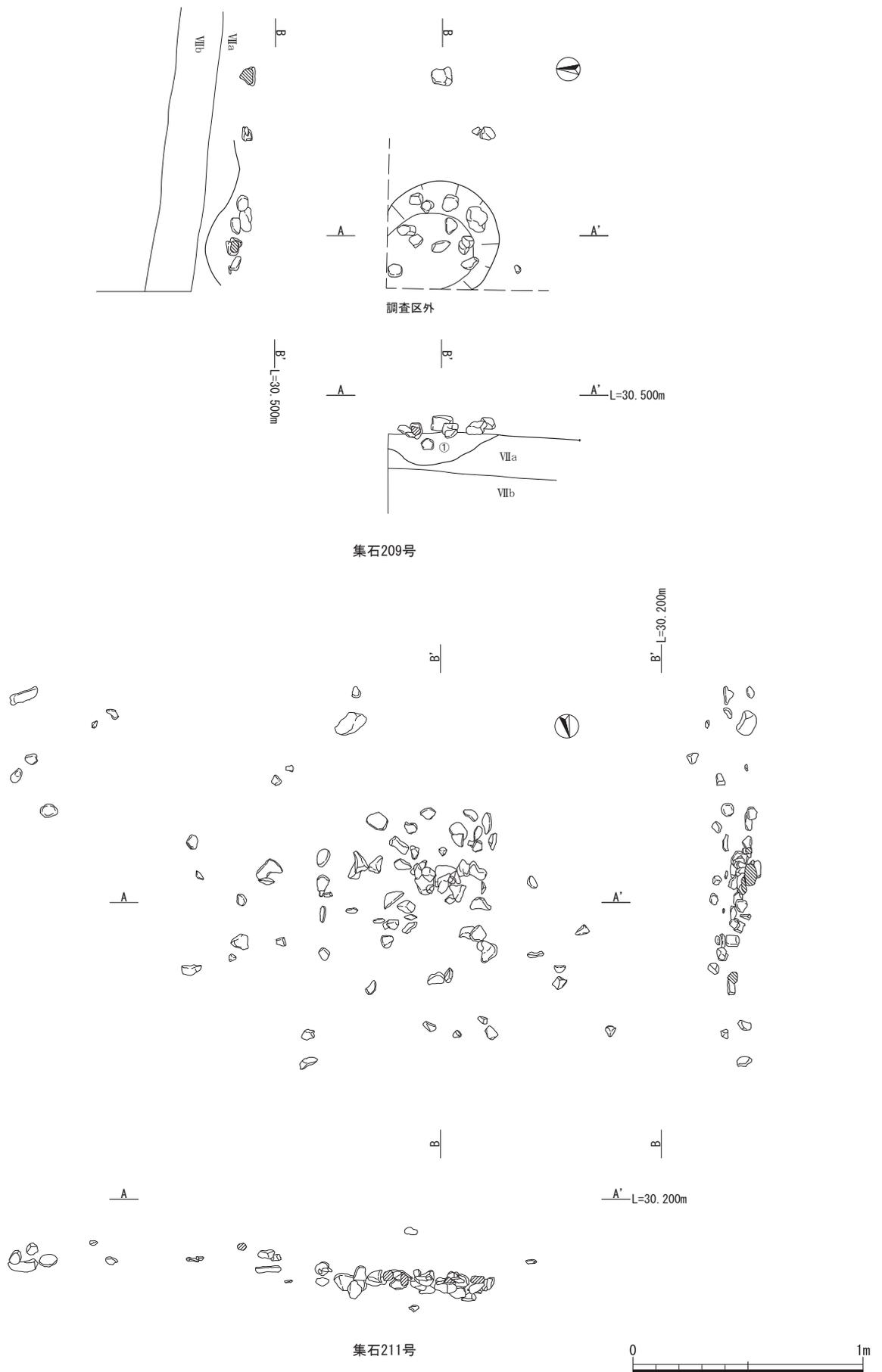
集石208号



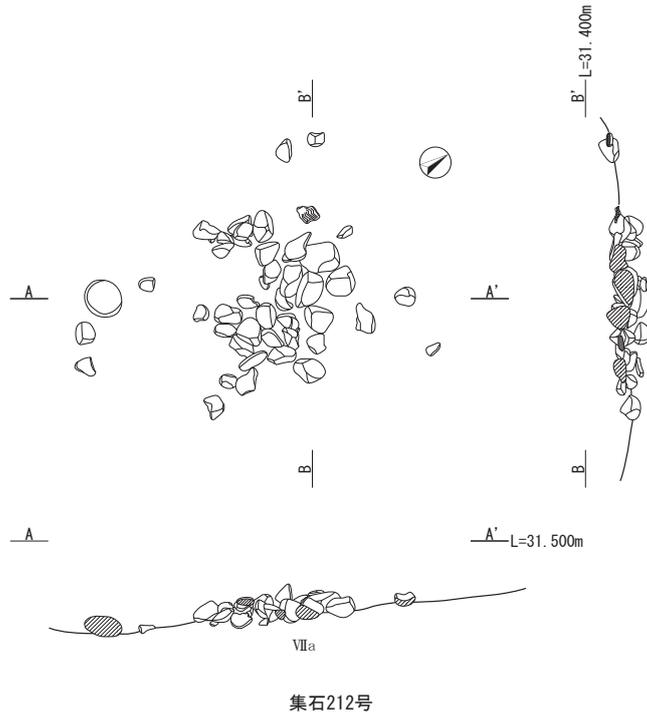
第89図 縄文時代早期VI層下位検出集石2



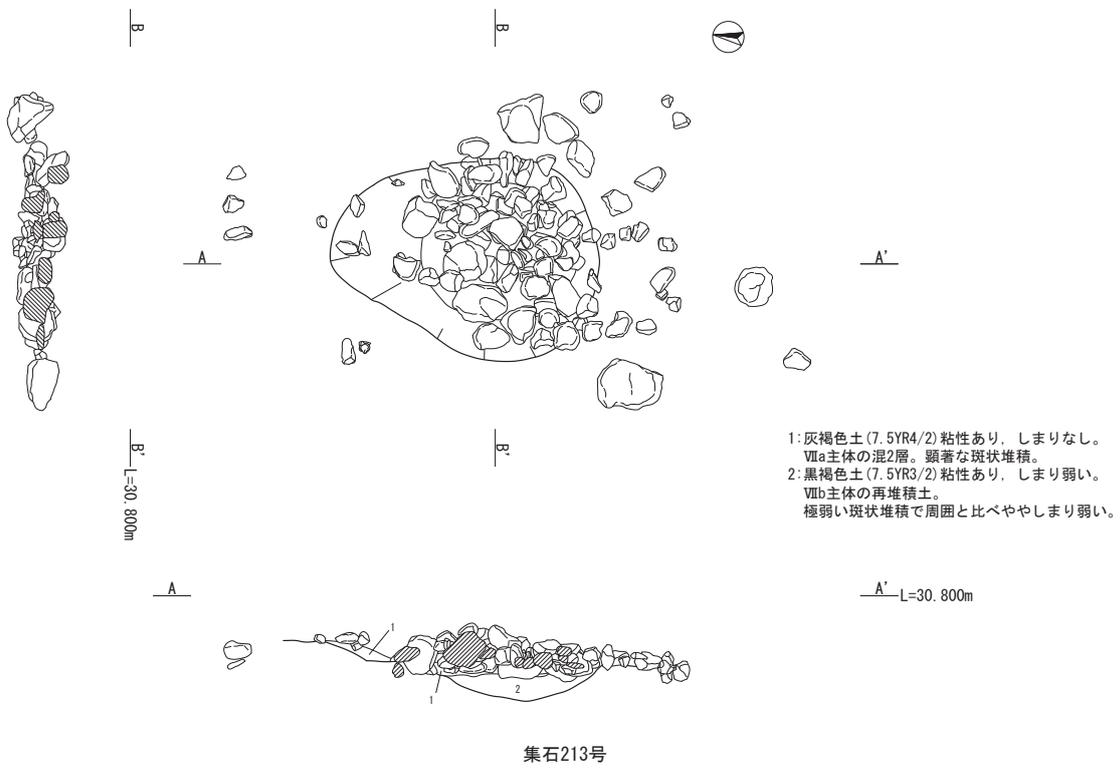
第90図 縄文時代早期VI層下位検出集石3



第91図 縄文時代早期VI層下位検出集石4

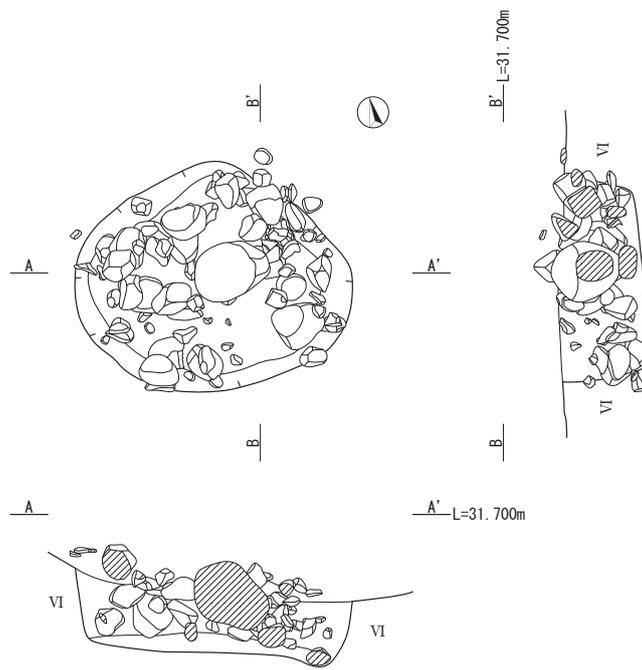


第92図 縄文時代早期VI層下位検出集石5

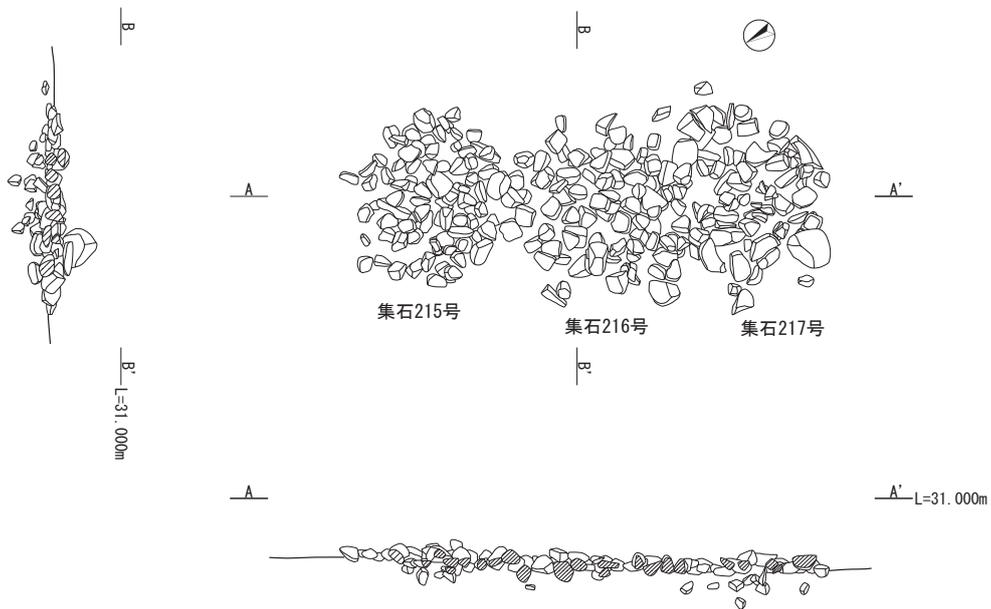


第93図 縄文時代早期VI層検出集石1

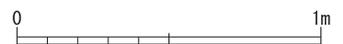




集石214号



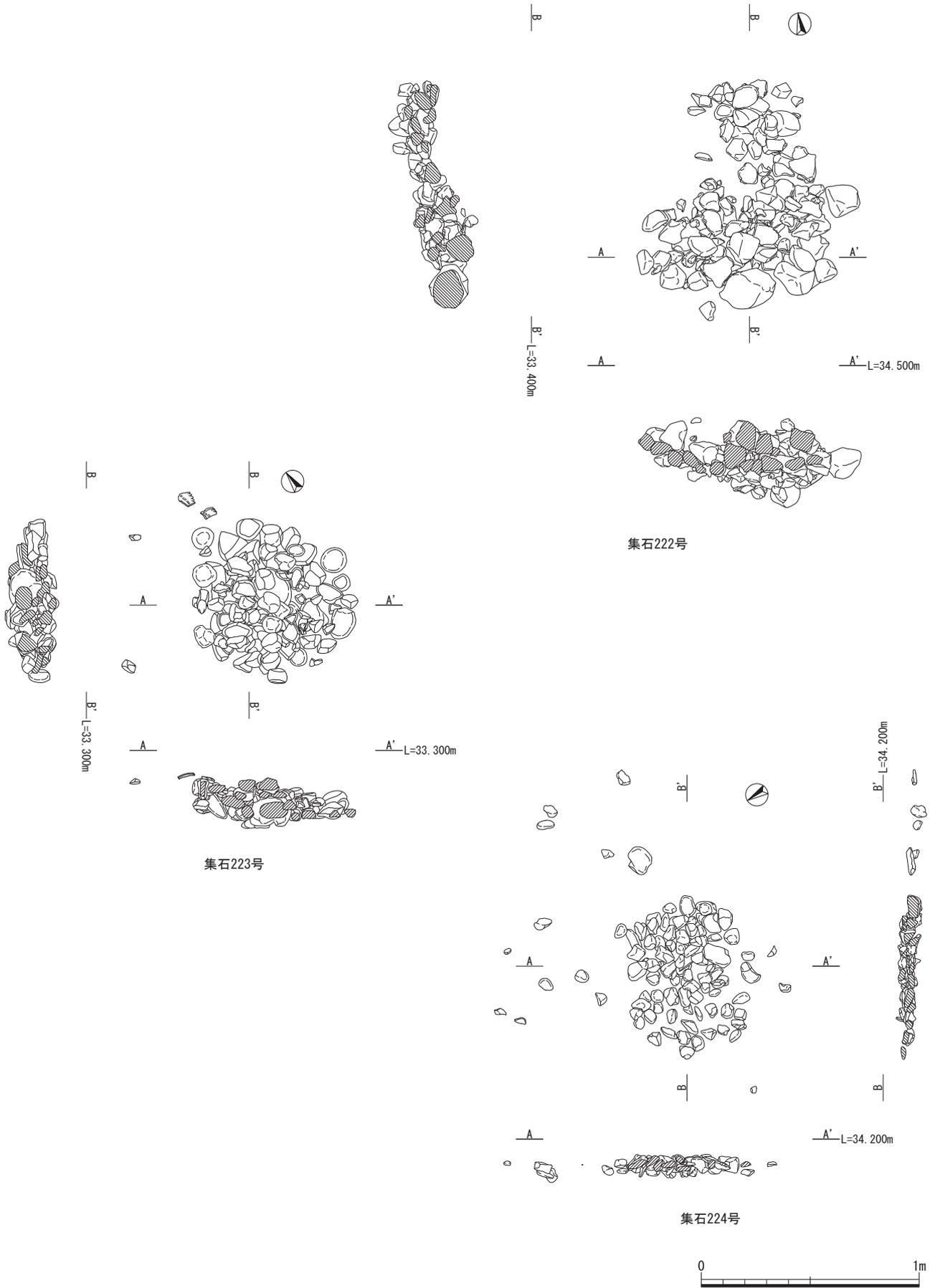
集石215・216・217号



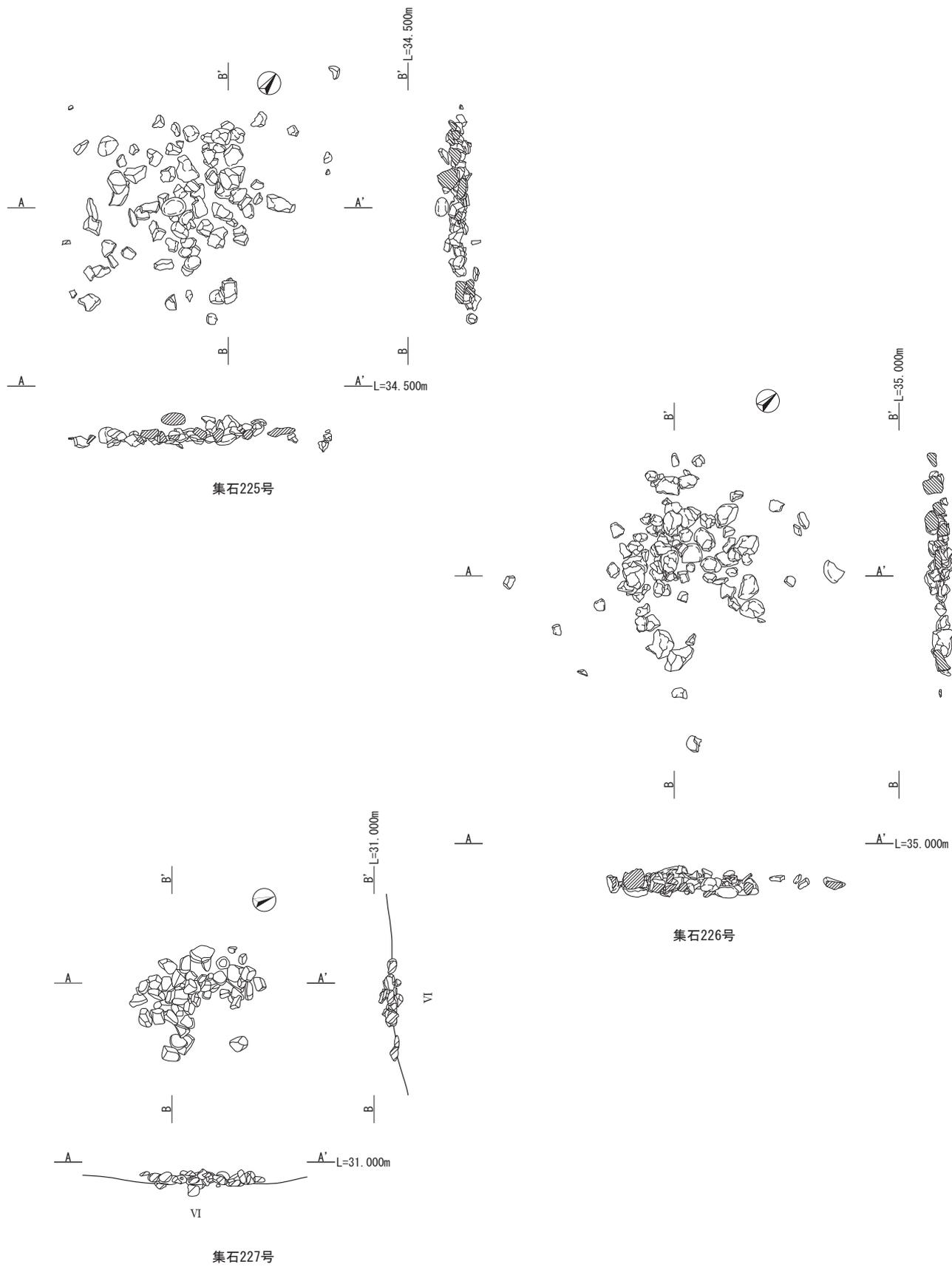
第94図 縄文時代早期VI層検出集石2



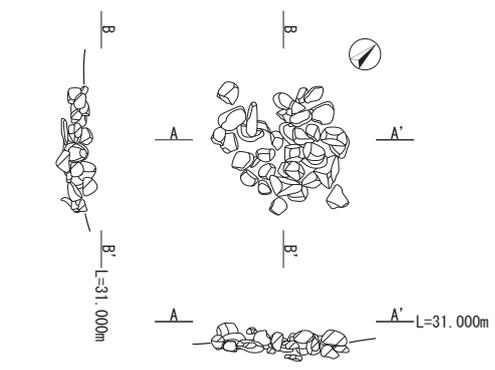
第95図 縄文時代早期VI層検出集石3



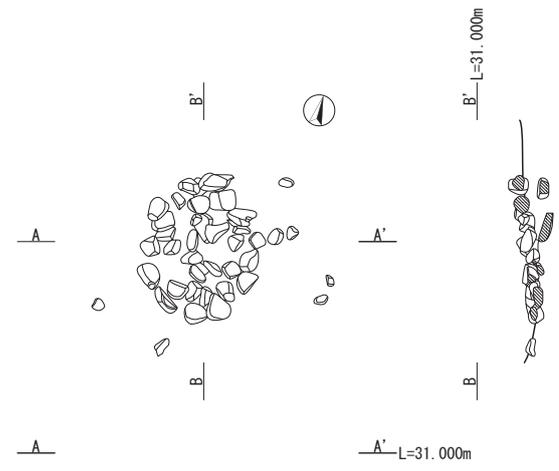
第96図 縄文時代早期VI層検出集石4



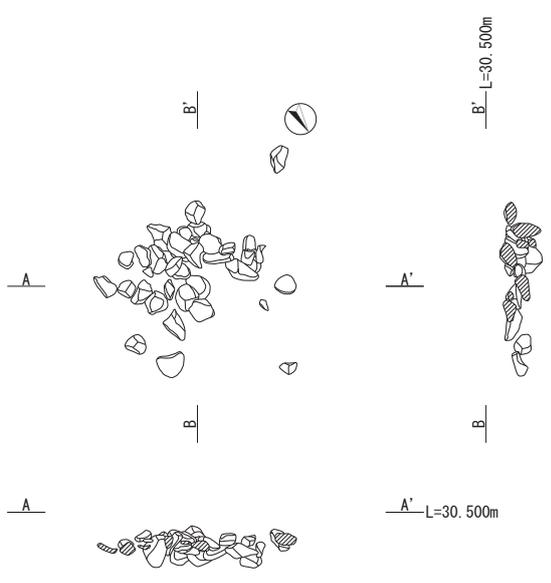
第97図 縄文時代早期VI層検出集石5



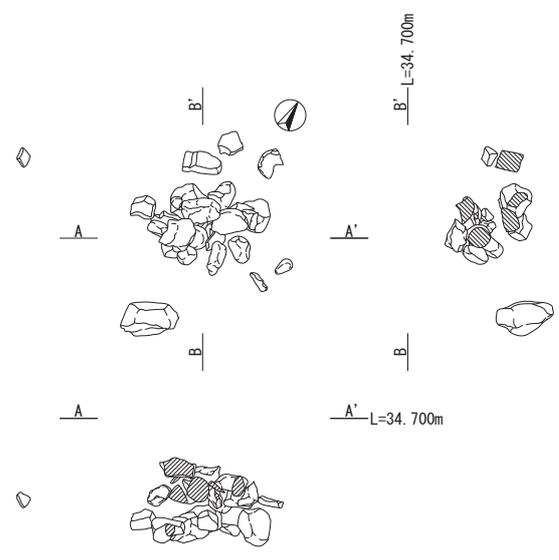
集石228号



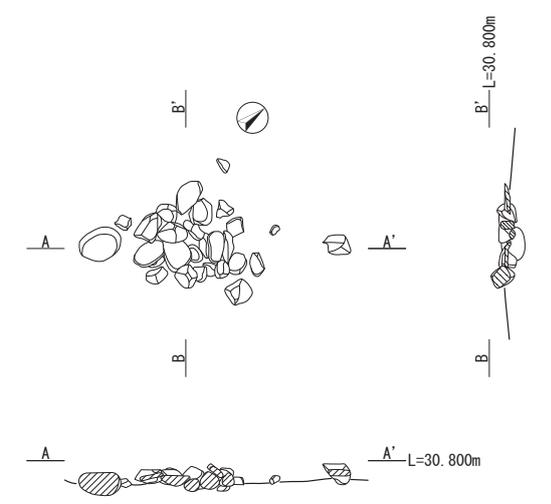
集石229号



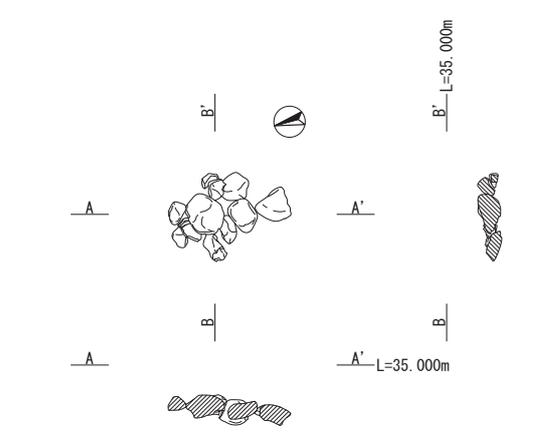
集石230号



集石231号



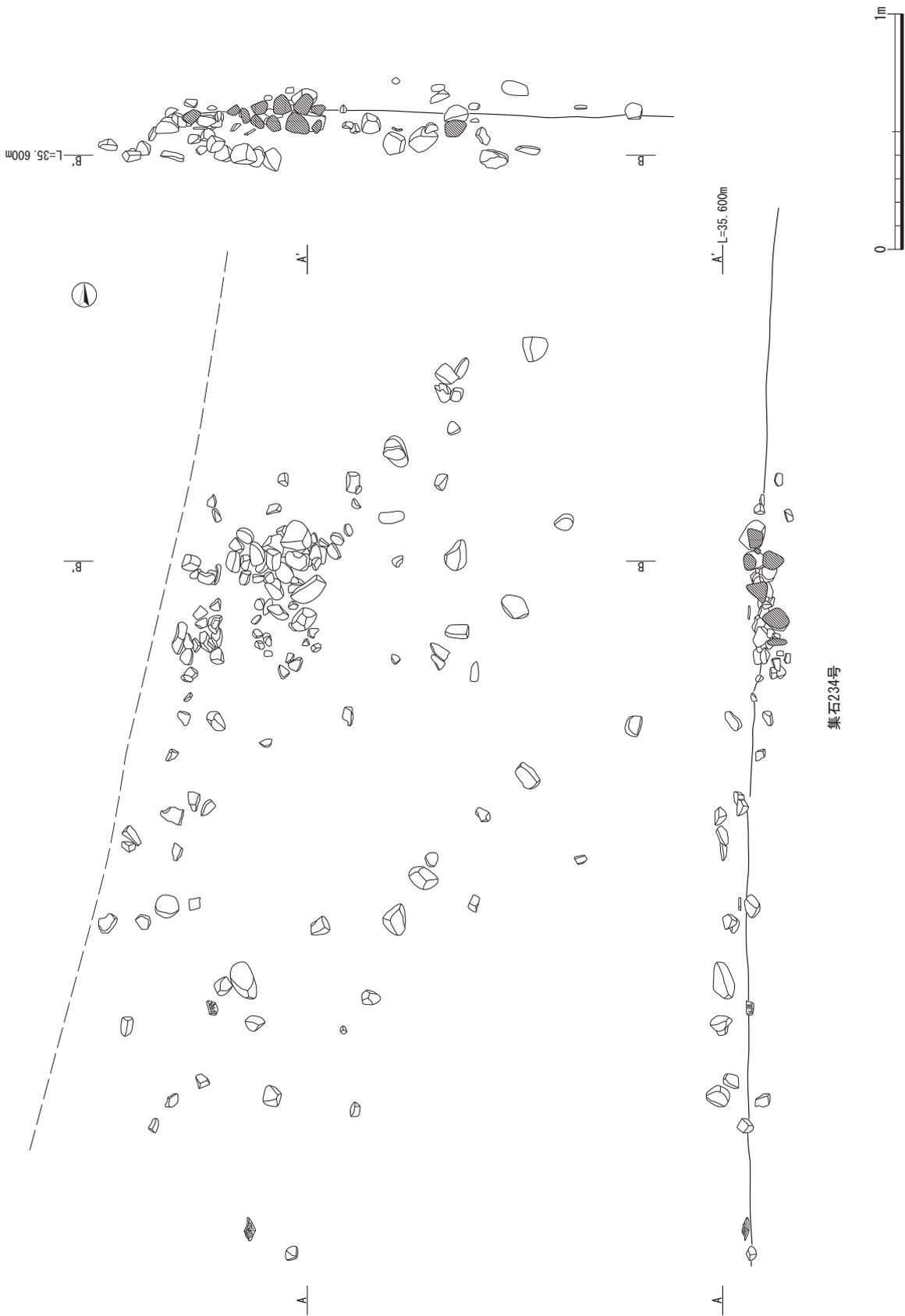
集石232号



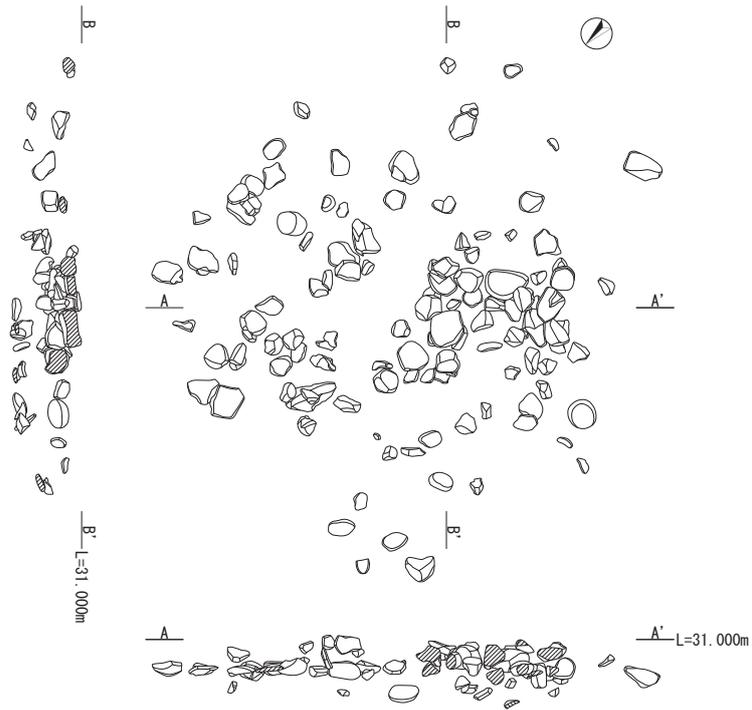
集石233号



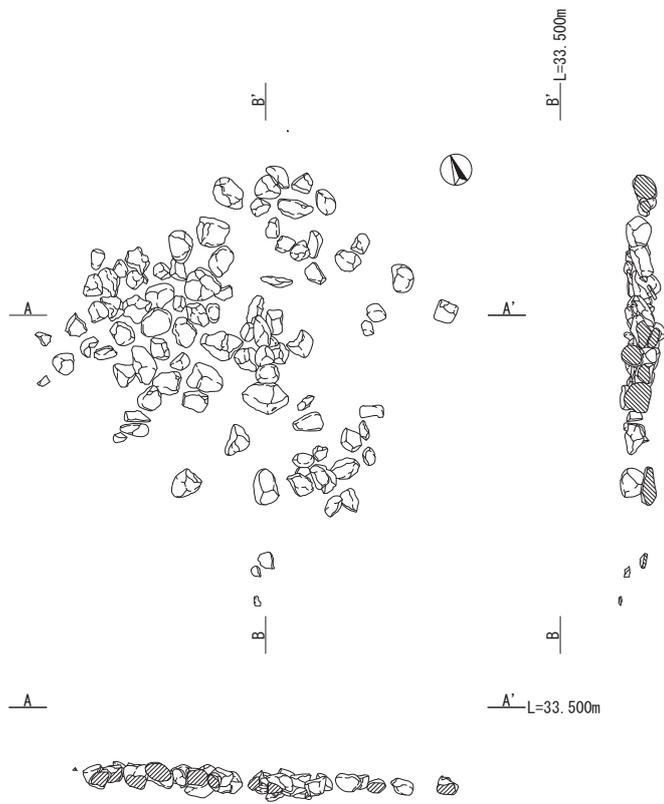
第98図 縄文時代早期VI層検出集石6



第99図 縄文時代早期VI層検出集石7



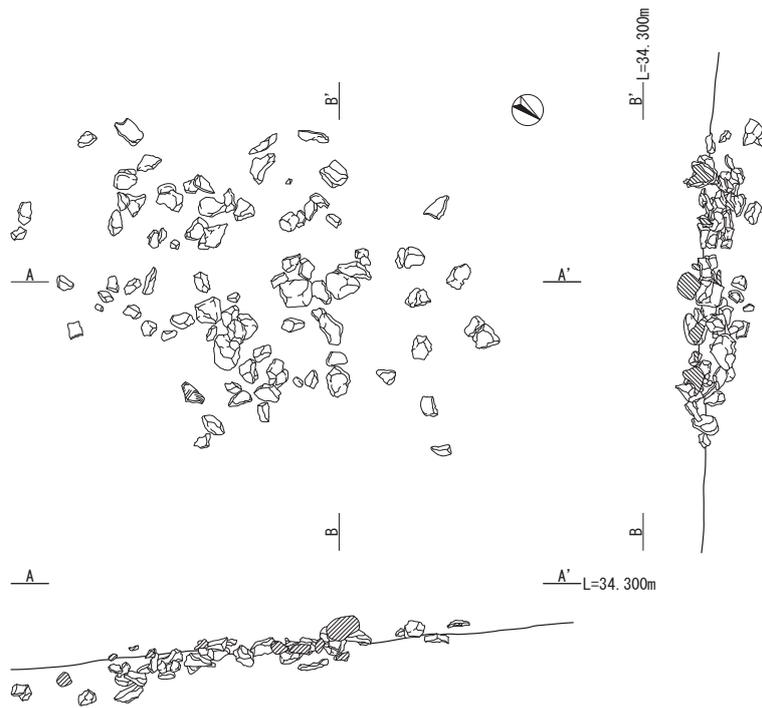
集石235号



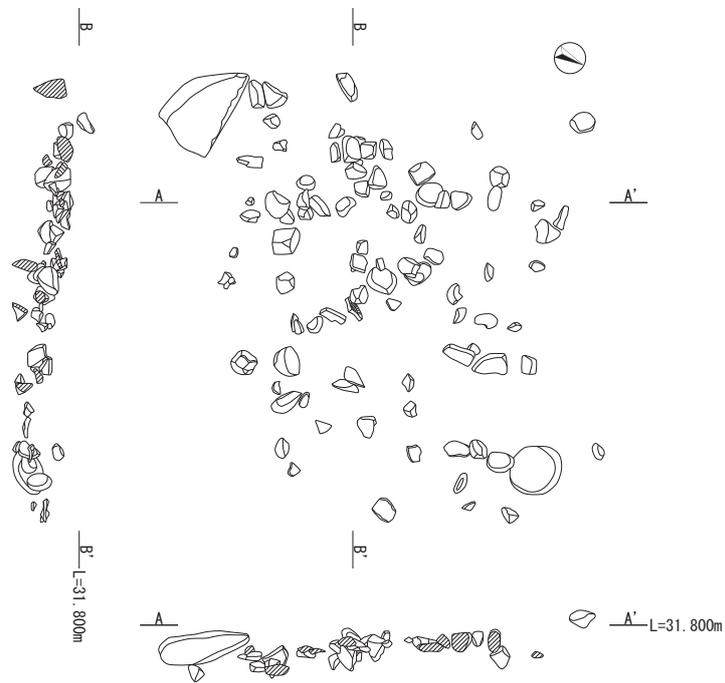
集石236号



第100図 縄文時代早期VI層検出集石 8



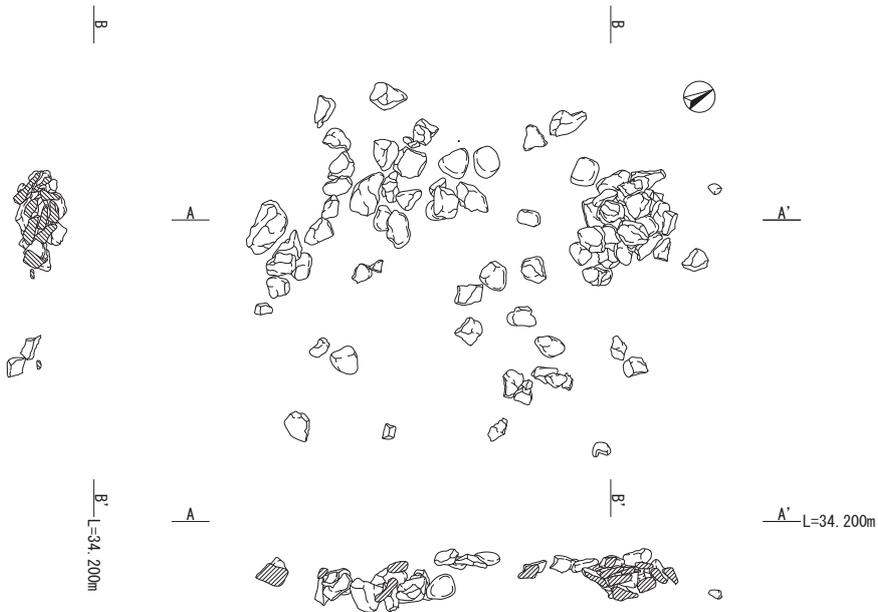
集石237号



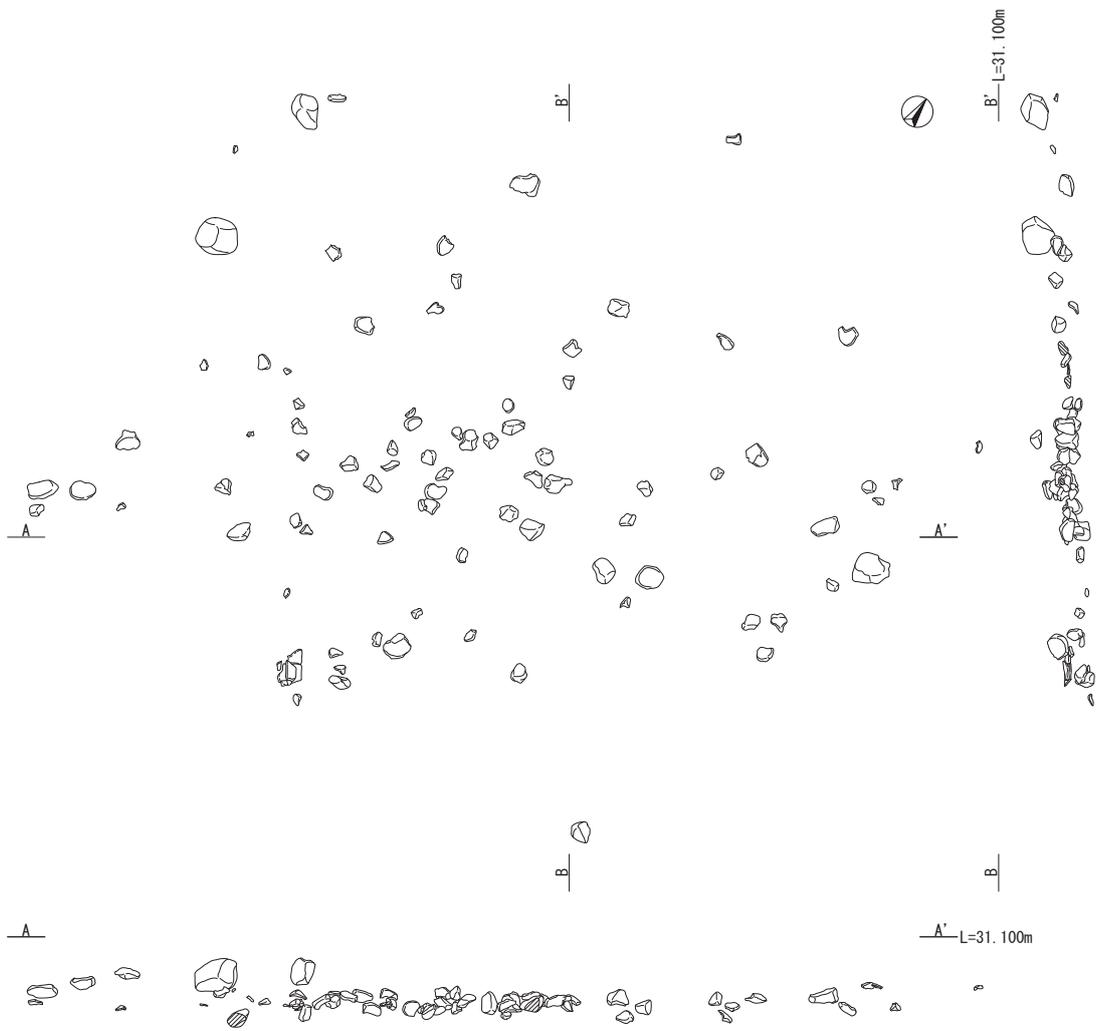
集石238号



第101図 縄文時代早期VI層検出集石9



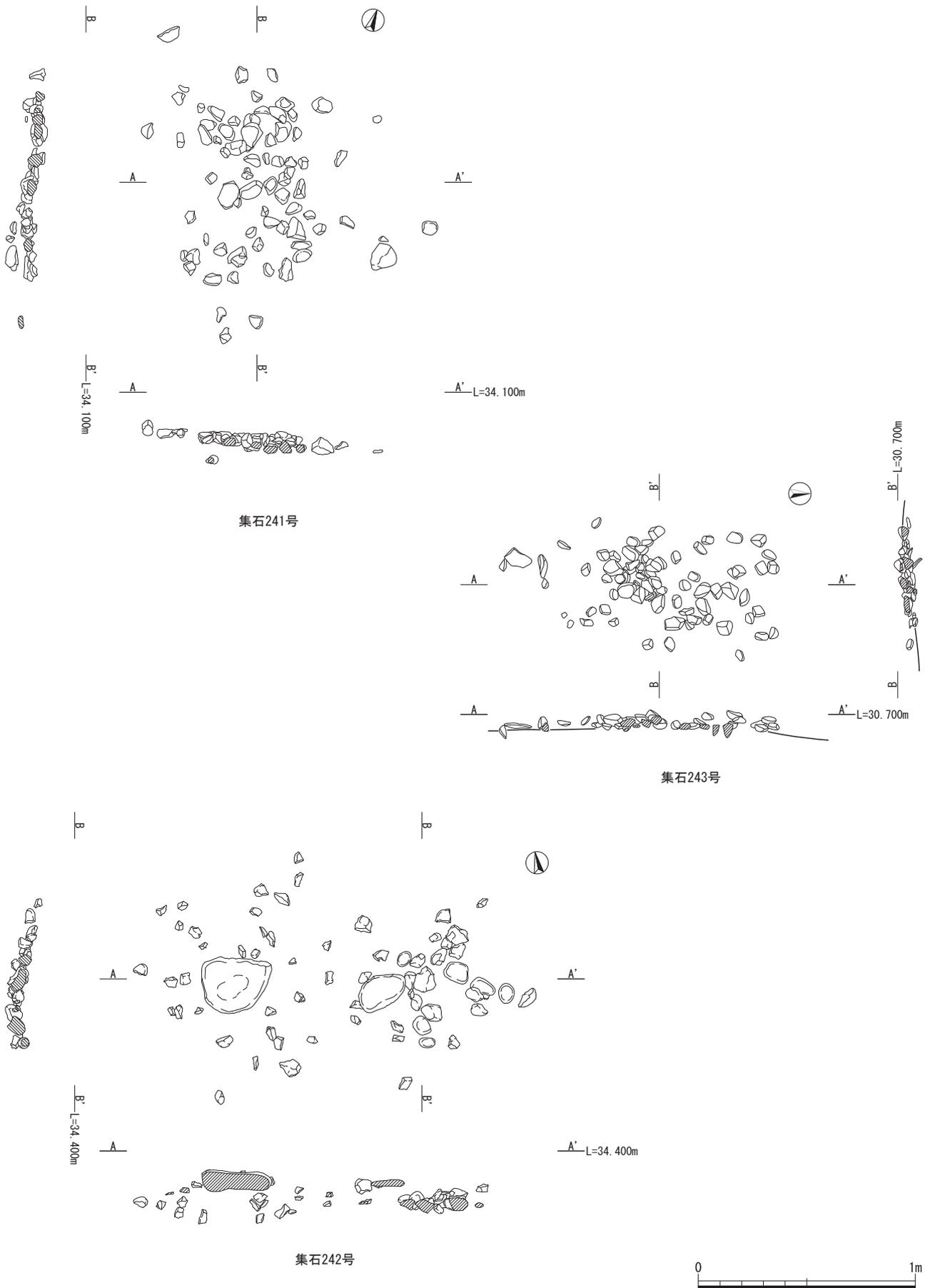
集石239号



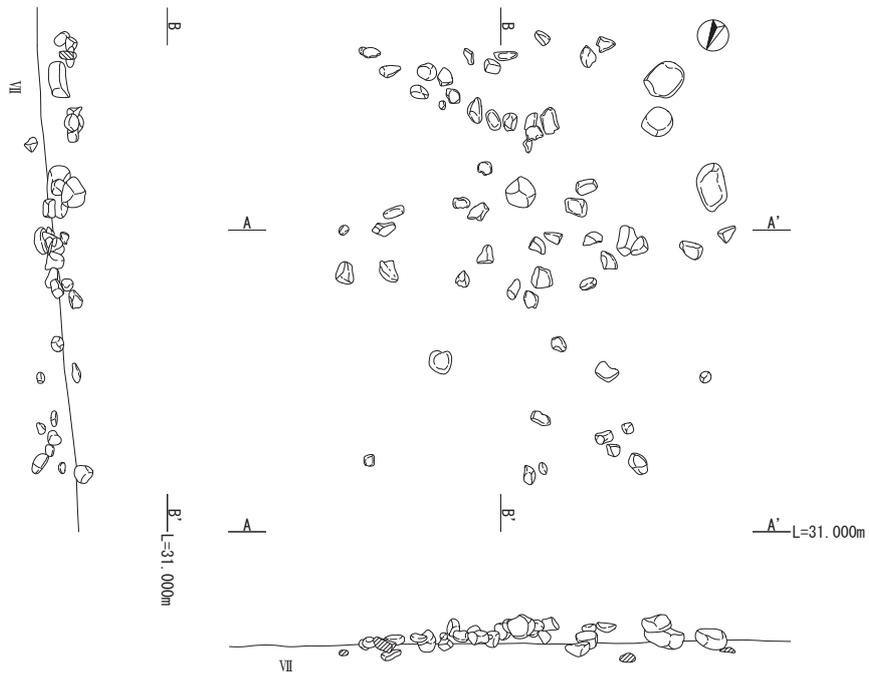
集石240号



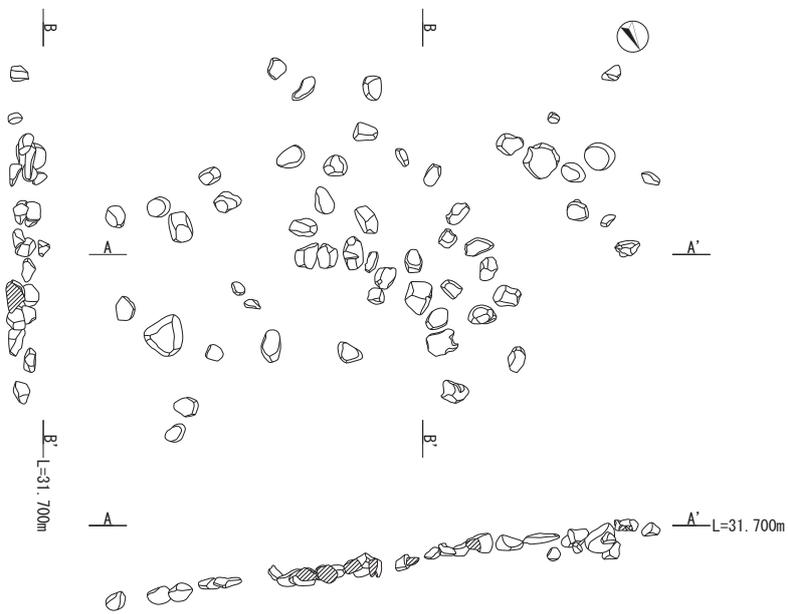
第102図 縄文時代早期VI層検出集石10



第103図 縄文時代早期VI層検出集石11



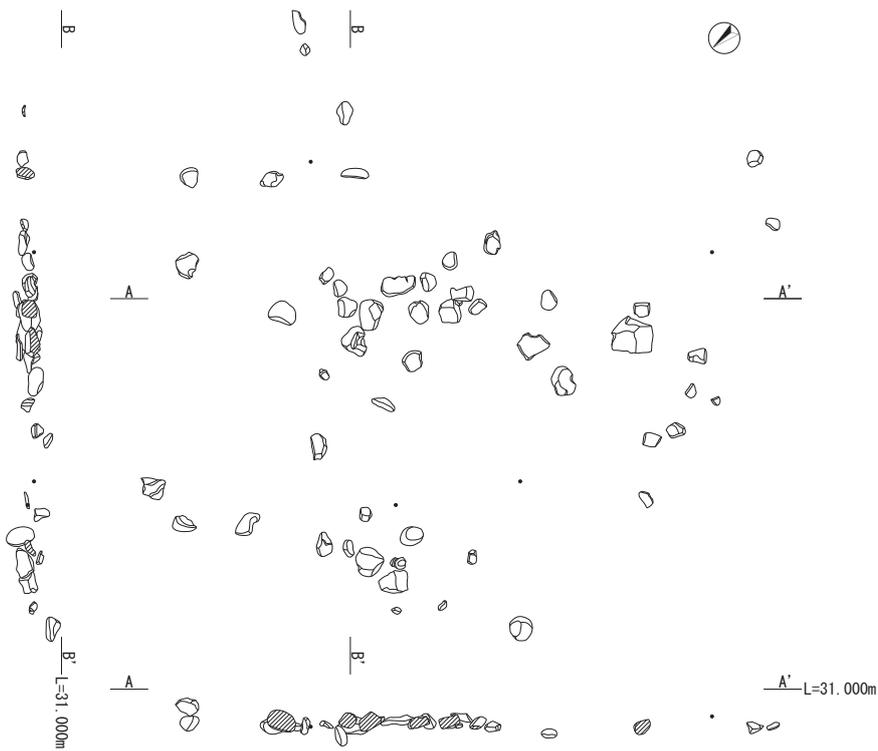
集石244号



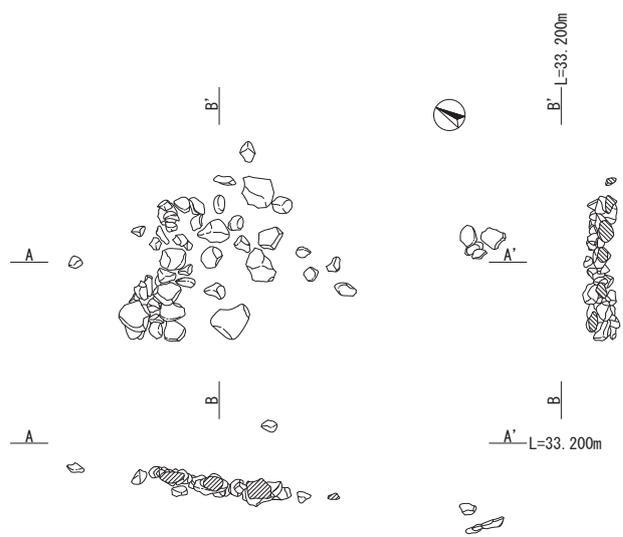
集石245号



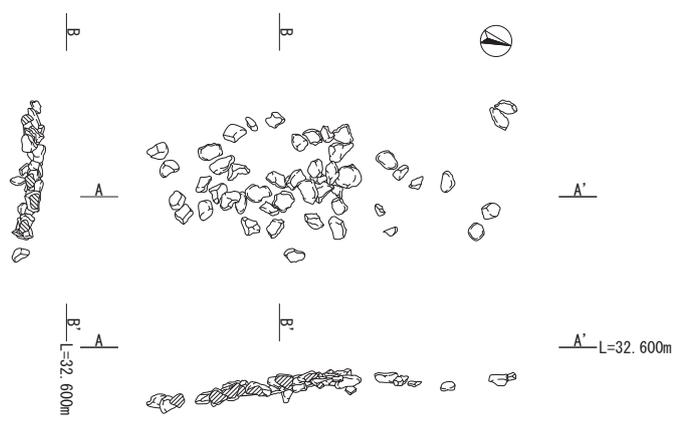
第104図 縄文時代早期VI層検出集石12



集石246号



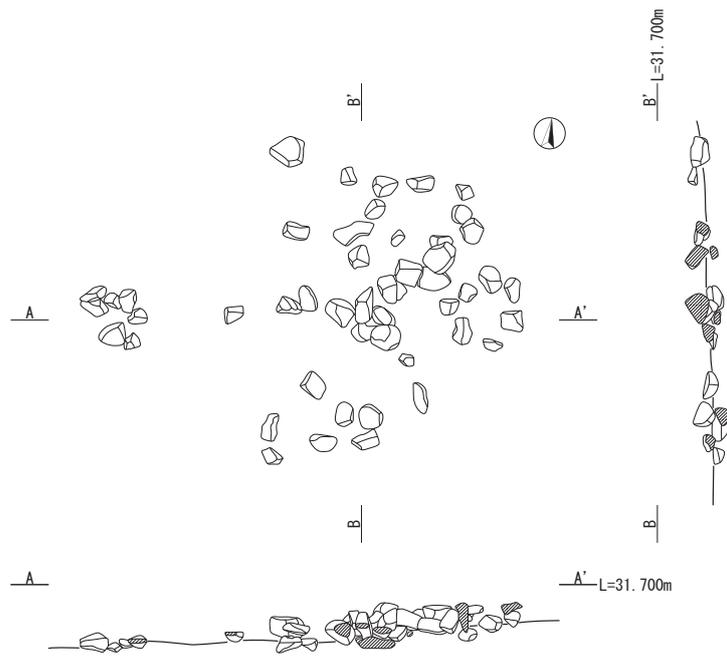
集石247号



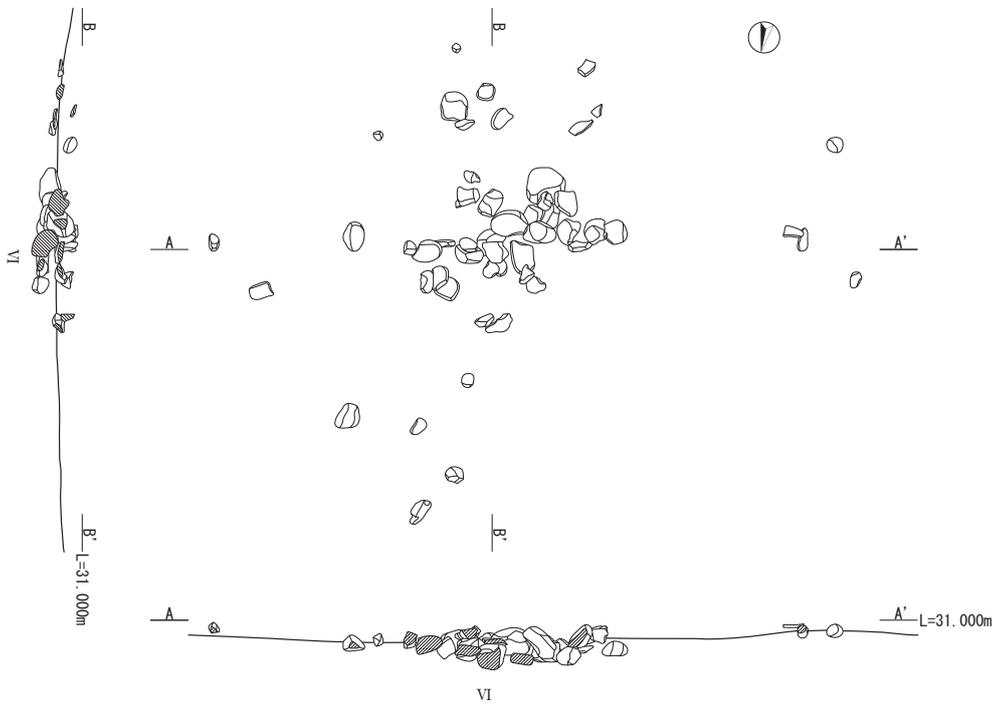
集石250号



第105図 縄文時代早期VI層検出集石13



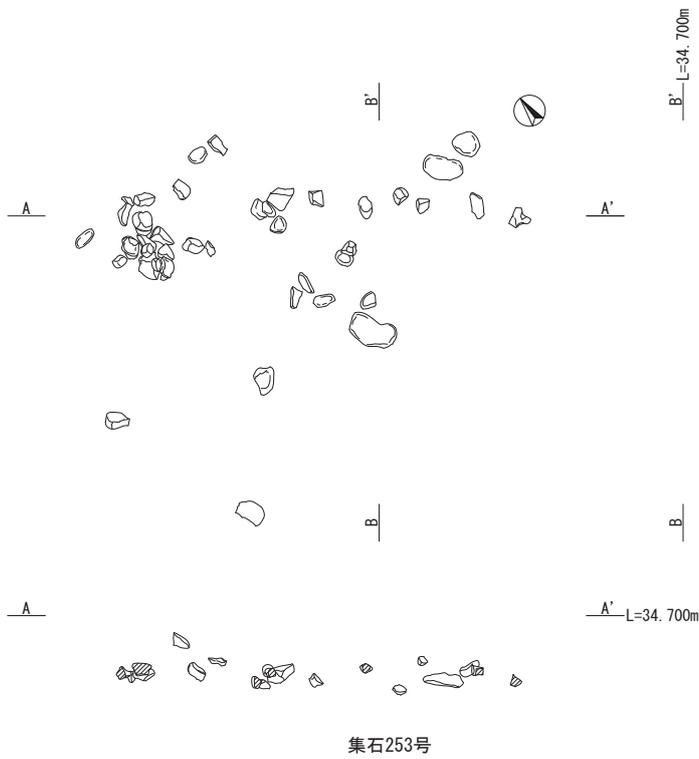
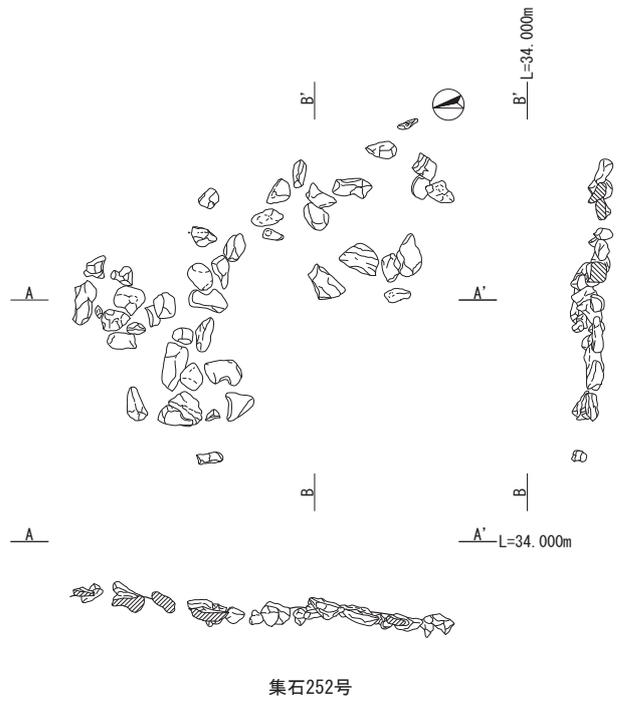
集石248号



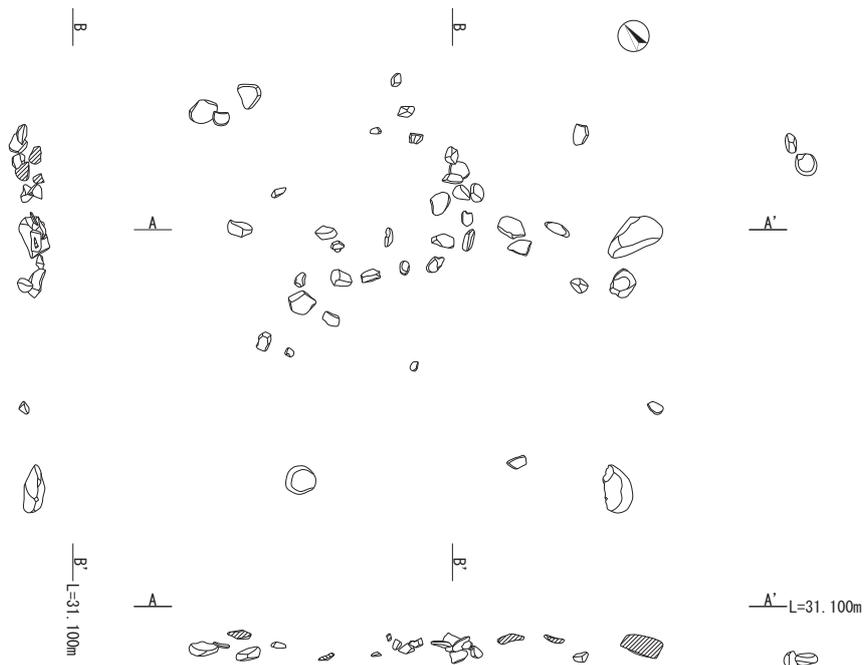
集石249号



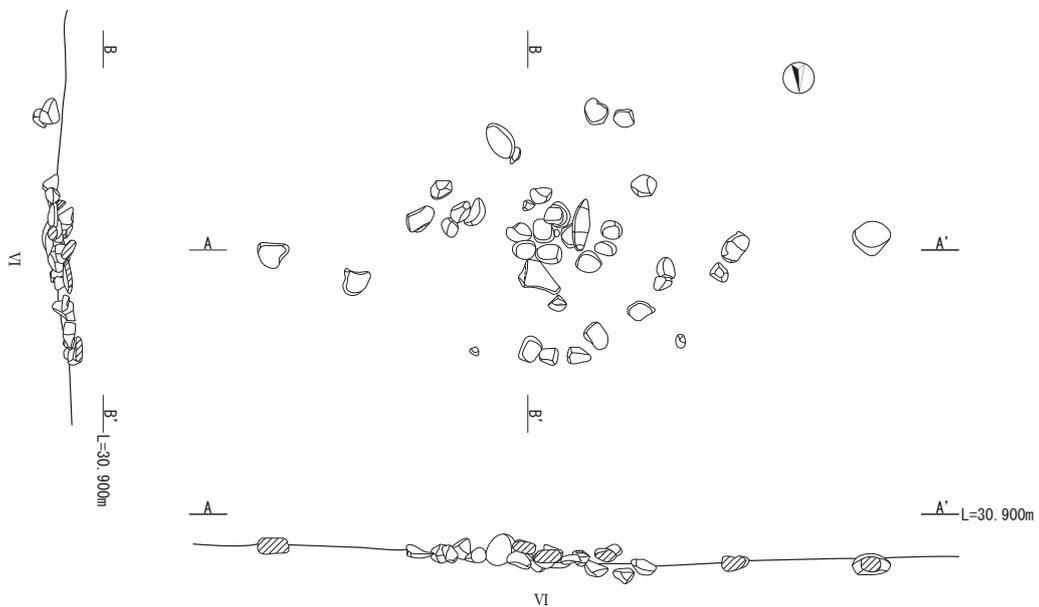
第106図 縄文時代早期VI層検出集石14



第107図 縄文時代早期VI層検出集石15



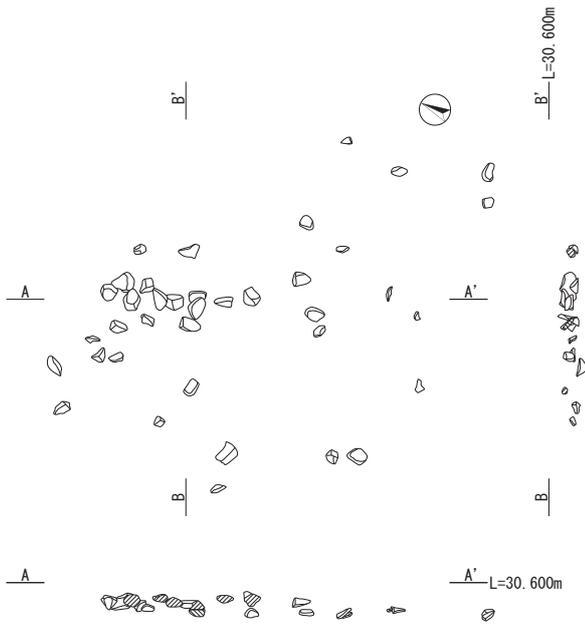
集石254号



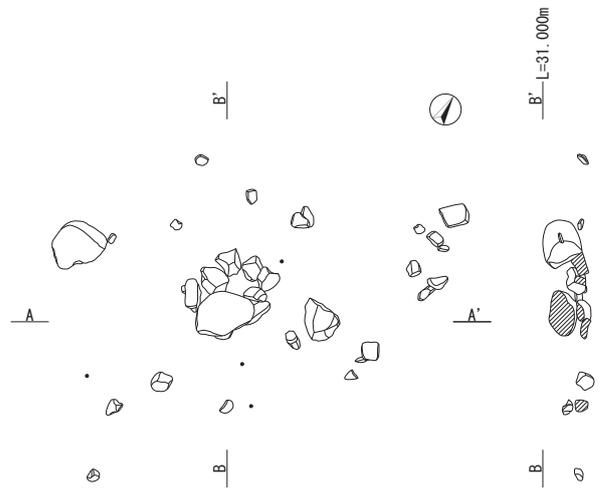
集石255号



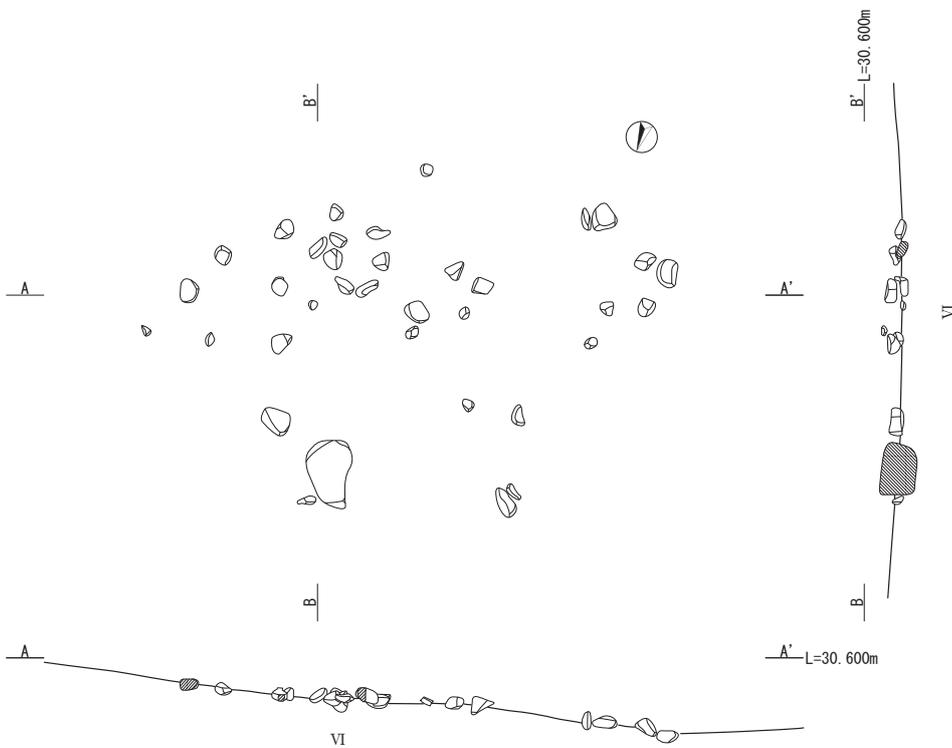
第108図 縄文時代早期VI層検出集石16



集石256号



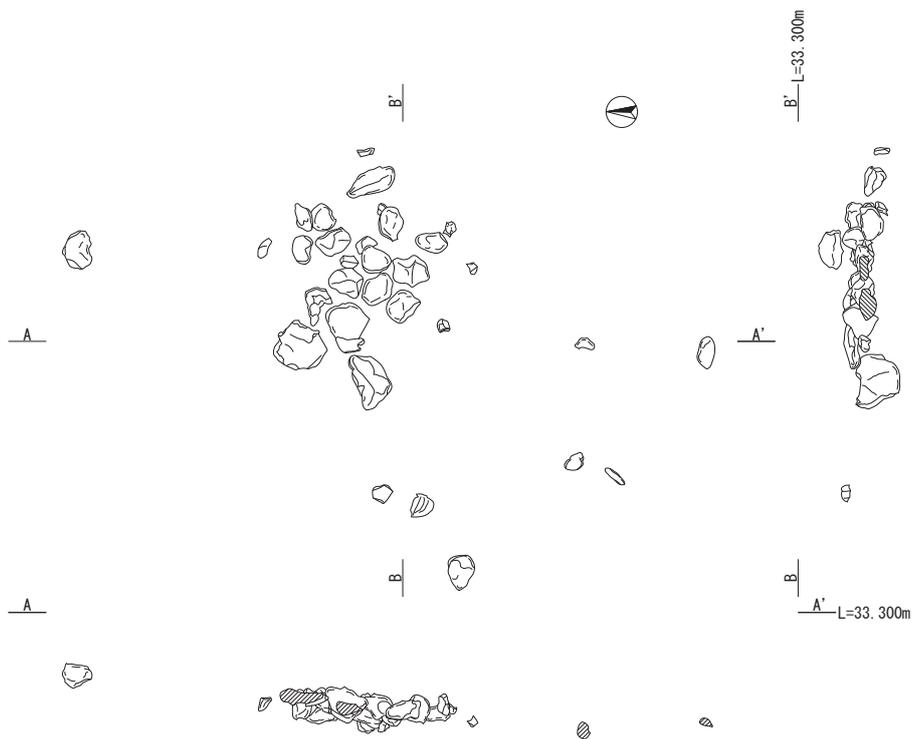
集石258号



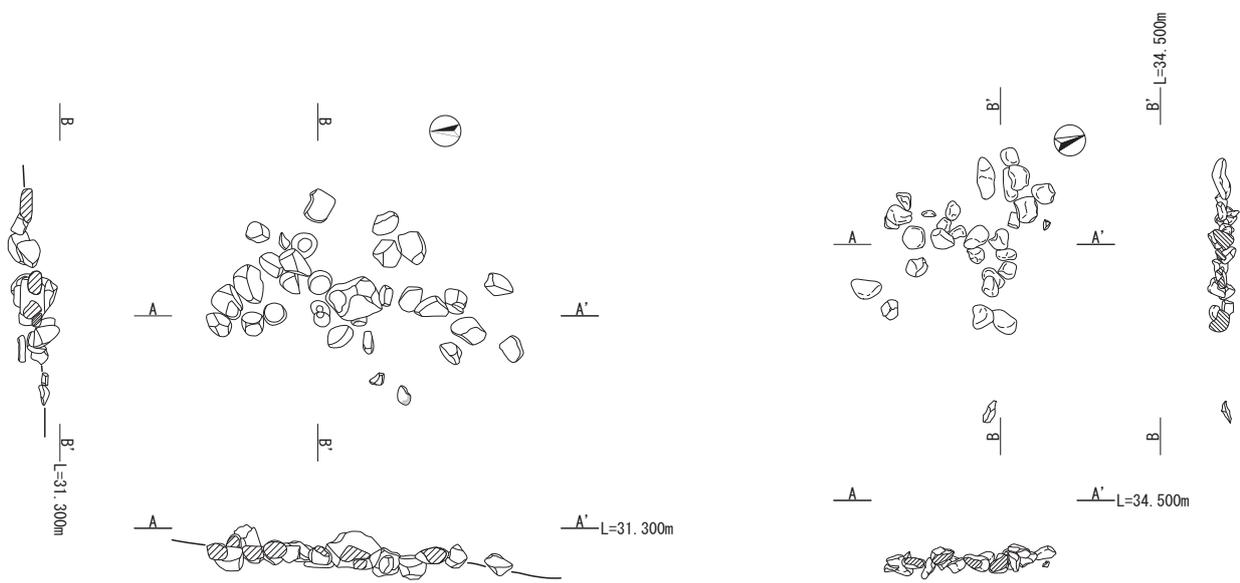
集石257号



第109図 縄文時代早期VI層検出集石17



集石259号

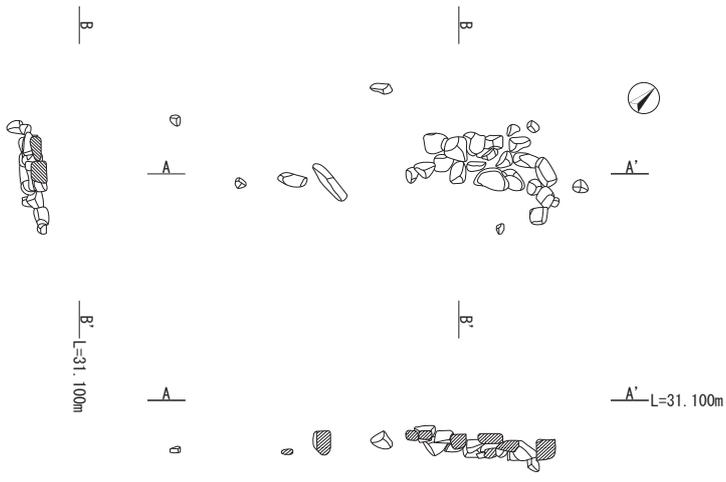


集石260号

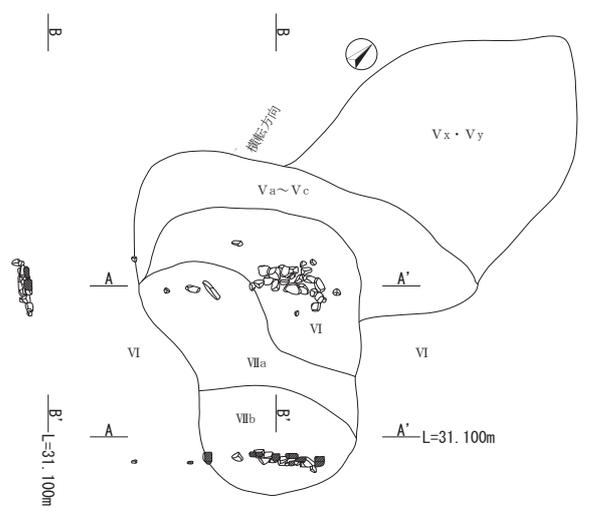
集石262号



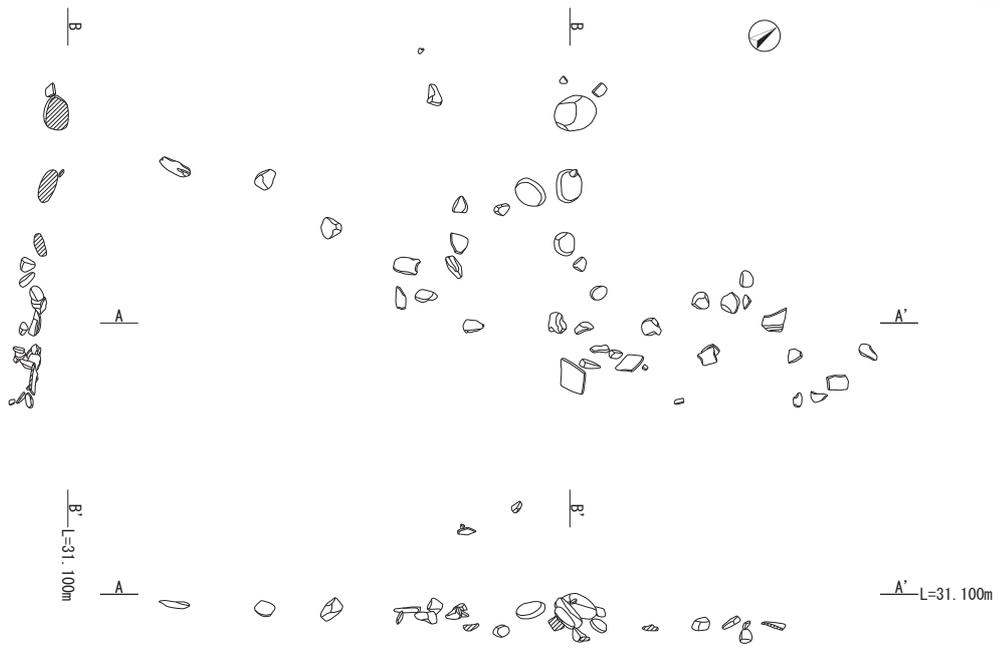
第110図 縄文時代早期VI層検出集石18



集石261号



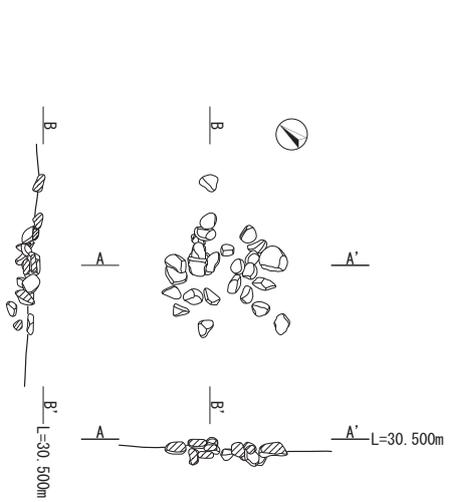
集石261号横転状況



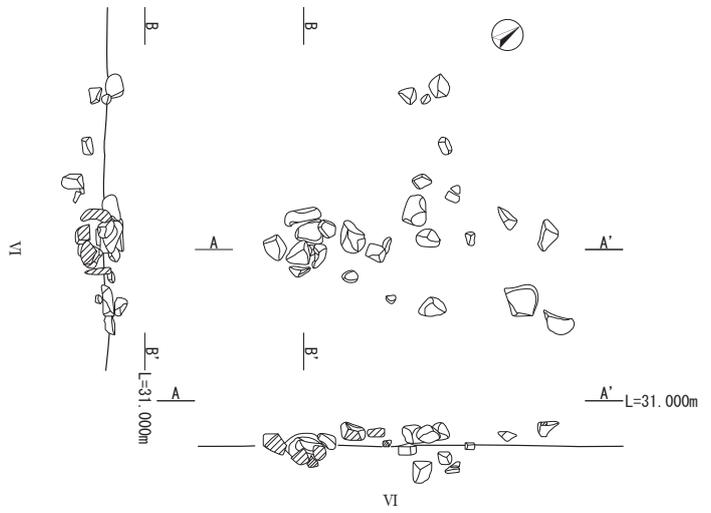
集石264号



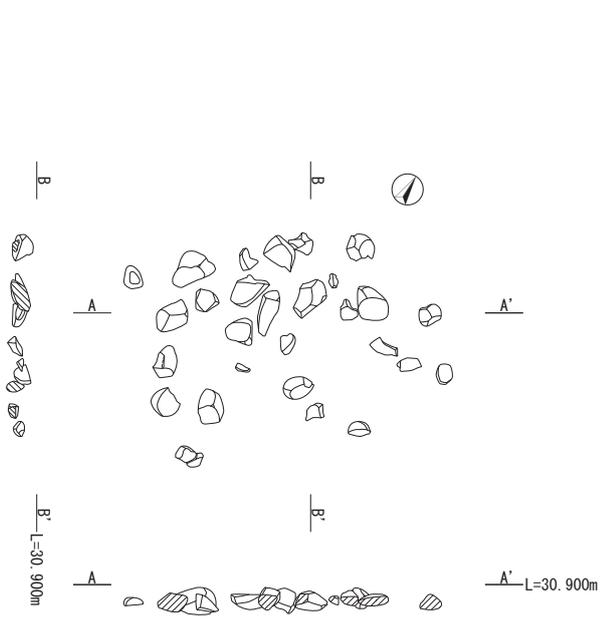
第111図 縄文時代早期VI層検出集石19



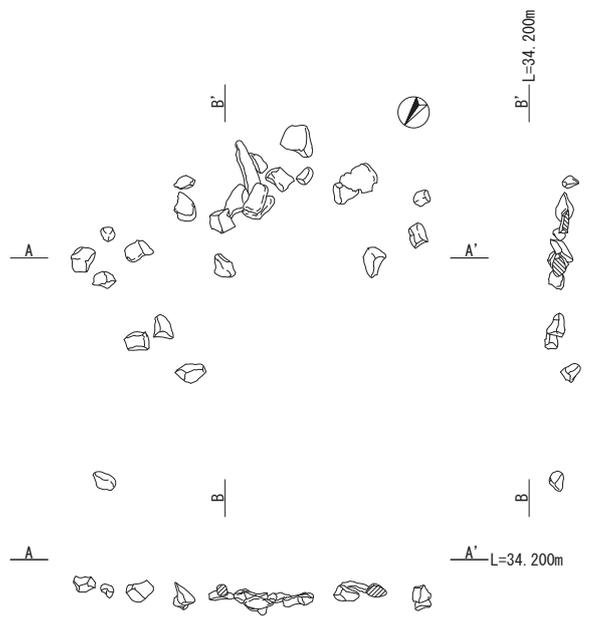
集石263号



集石266号



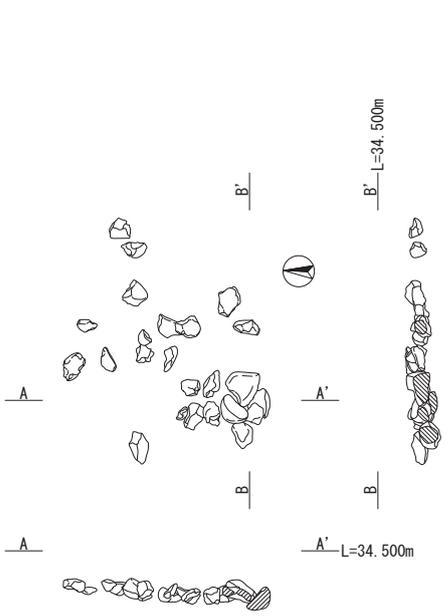
集石265号



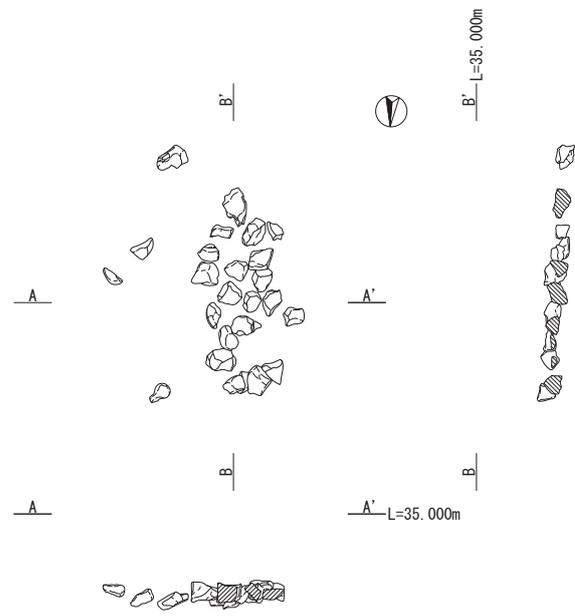
集石267号



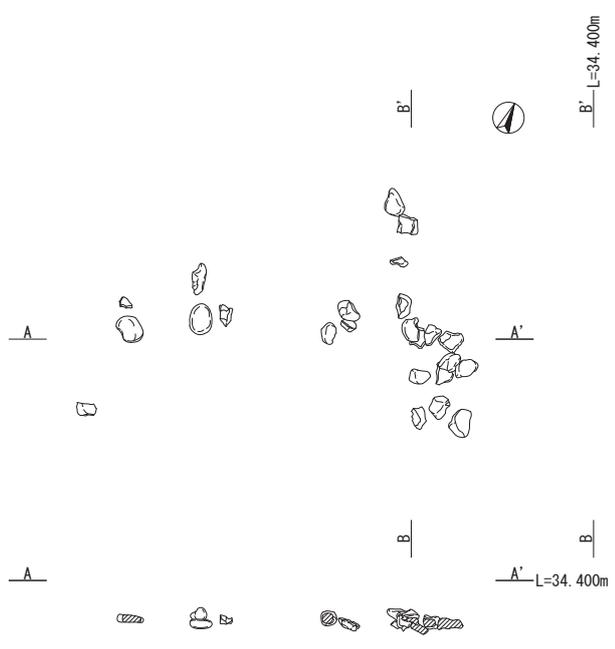
第112図 縄文時代早期VI層検出集石20



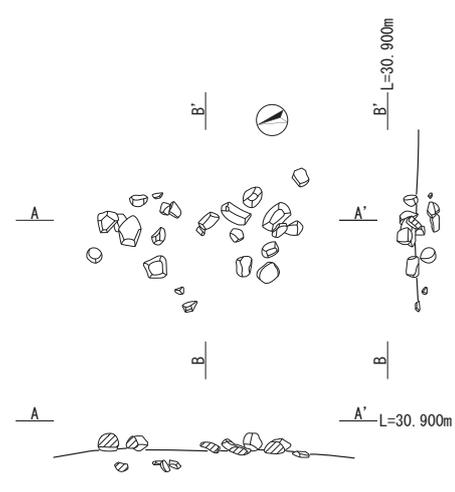
集石269号



集石268号



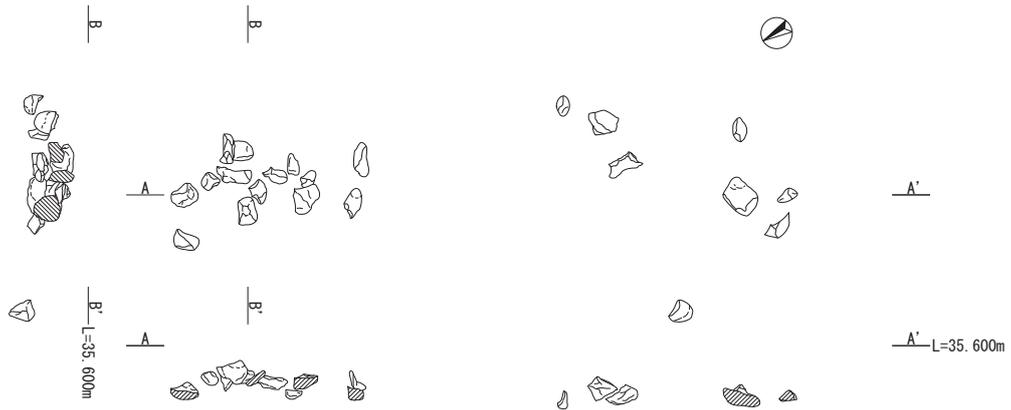
集石270号



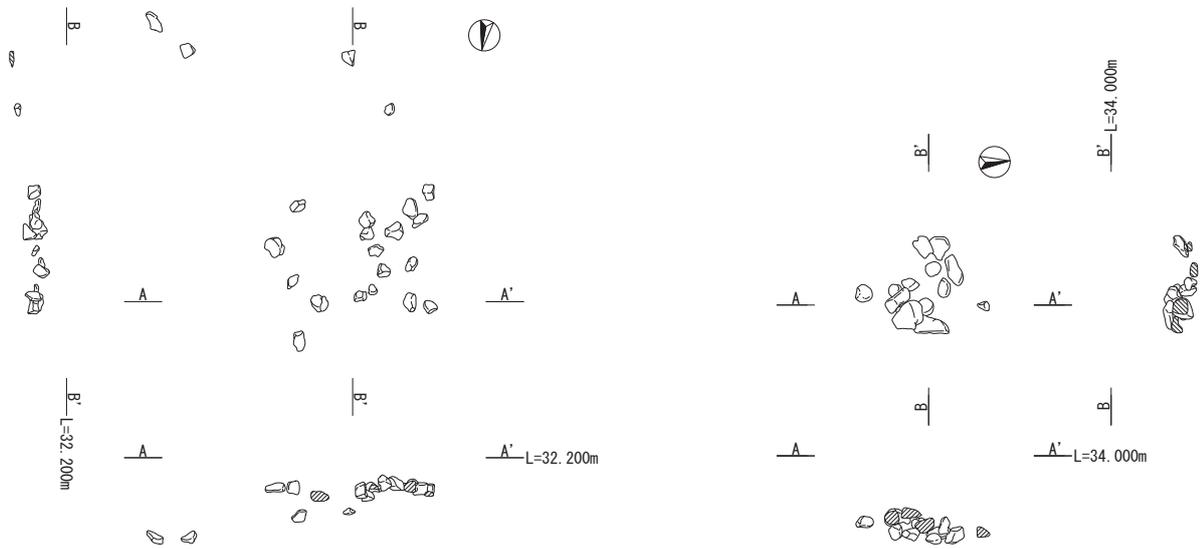
集石272号



第113図 縄文時代早期VI層検出集石21

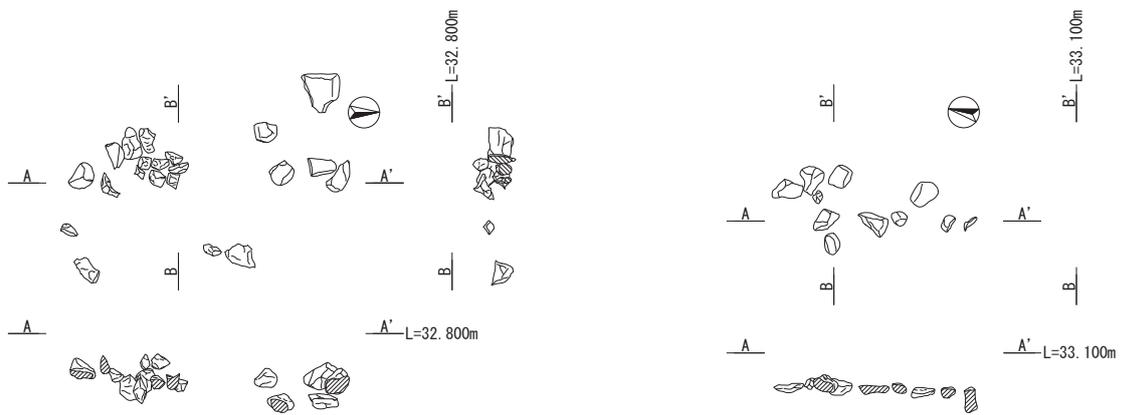


集石271号



集石273号

集石275号

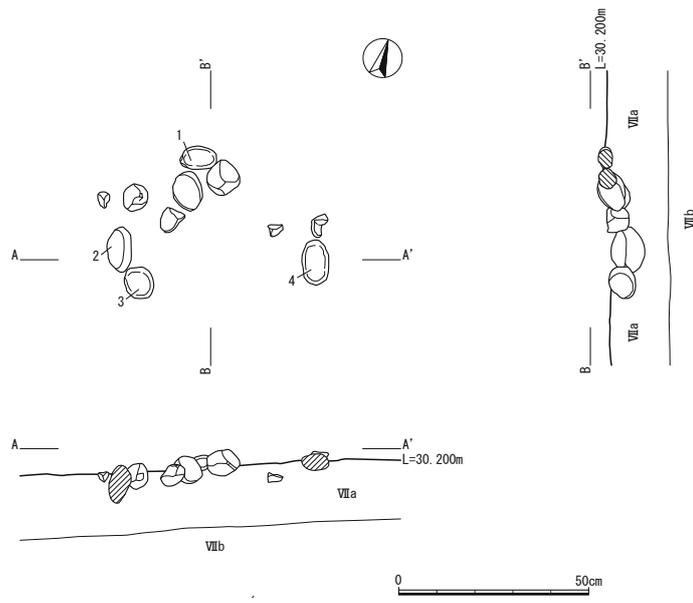


集石274号

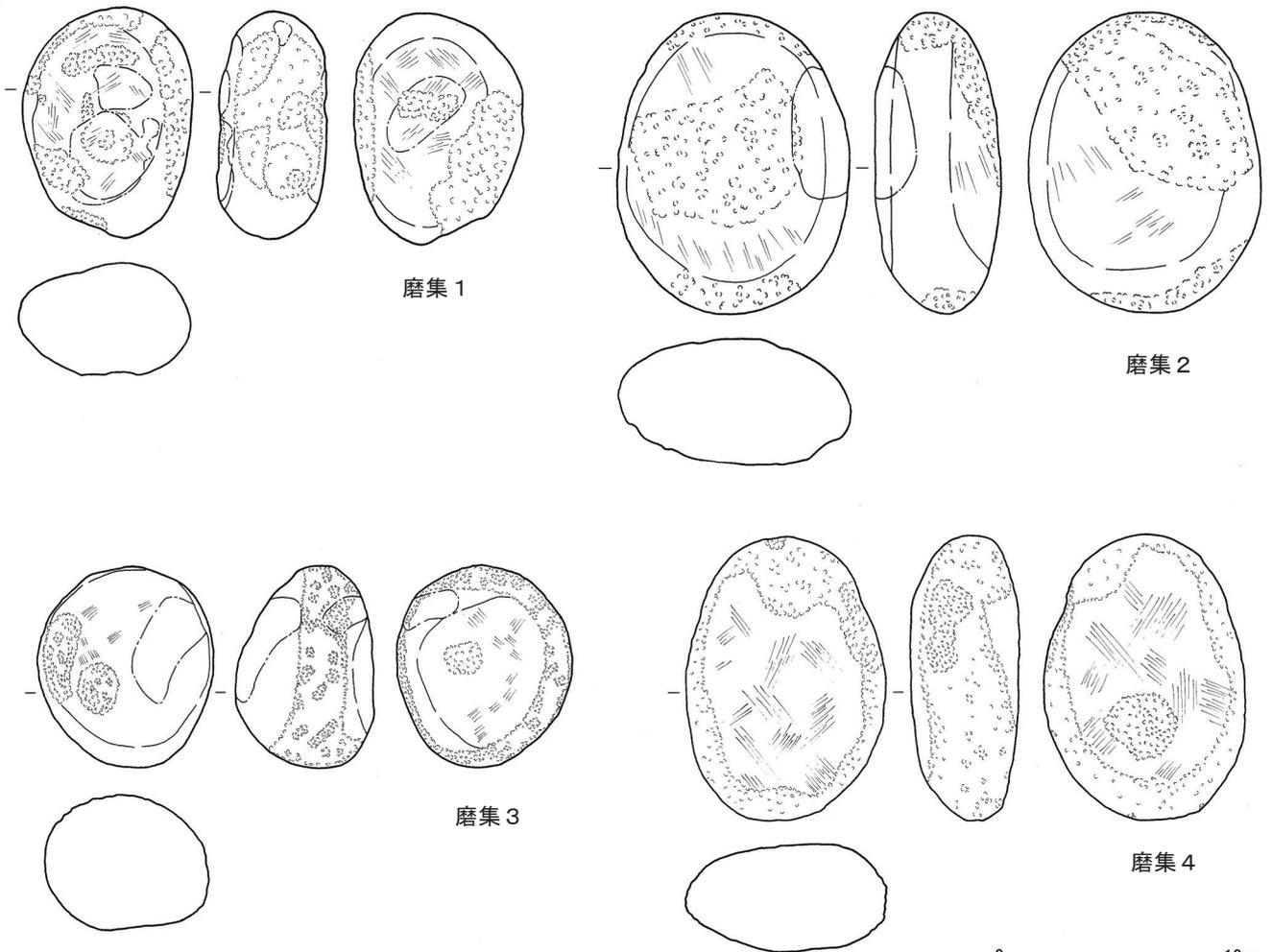
集石276号



第114図 縄文時代早期VI層検出集石22



第115図 磨石集積



第116図 磨石集積出土石器

第10表 縄文時代早期集石 1

挿図 番号	遺構 番号	検出区	層	土器	掘 込	礫の 集中	礫数	礫石材						礫の大きさ						備考		
								安山岩(数/%)		ホルンフェルス(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～5cm	～10cm	～15cm	～20cm		21cm～	数量
								数	%	数	%	数	%									
14	1	H27	VII b		○	○	140	37	26%	56	40%	46	33%		139	35	73	3	1	0	112	
	2	G31		1	○	○	93	65	70%	20	22%	5	5%	2	92	8	28	2	0	0	38	
	3	K30			○	○	82	48	59%	15	18%	18	22%		81	10	56	1	0	2	69	炭化物
15	4	G31		○	○	80	60	75%	12	15%	8	10%		80	28	36	0	0	0	64		
	5	I27		○	○	59	34	58%	20	34%	5	8%		59	4	26	18	0	0	48	被熱・炭化物	
	6	G28		○	○	56	17	30%	24	43%	15	27%		56	17	30	2	0	0	49		
	7	M33		○	○	54	-	-	-	-	-	-	-	0	3	33	14	0	0	50		
16	8	L35		△		9	-	-	-	-	-	-	-	0	1	7	1	0	0	9		
	9	I28			○	105	58	55%	37	35%	10	10%		105	6	53	17	7	2	85	被熱	
	10	J30			○	54	44	81%	5	9%	5	9%		54	12	27	5	0	0	44		
17	11	L31			△	50	-	-	-	-	-	-	0	13	30	5	1	0	49			
18	12	L32・33			○	46	-	-	-	-	-	-	0	6	36	4	0	0	46			
17	13	J31			○	35	22	63%	7	20%	5	14%		34	2	24	7	2	0	35		
18	14	K30			○	31	10	32%	18	58%	3	10%		31	6	19	6	0	0	31	炭化物	
19	15	L31			○	23	13	57%	9	39%	1	4%		23	0	19	3	0	0	22		
	16	J31			○	14	7	50%	5	36%	2	14%		14	0	9	3	2	0	14		
20	17	M32	VII b 上		○	○	129	-	-	-	-	-	-	0	11	100	8	4	0	123		
21	18	M32			○	○	62	-	-	-	-	-	-	0	11	42	3	1	0	57		
21	19	M32			○	△	53	-	-	-	-	-	-	0	12	27	7	3	1	50		
20	20	M32				21	-	-	-	-	-	-	-	0	3	18	0	0	0	21		
22	21	L35	VII a 下			○	9	8	89%	1	11%	0	0%		9	0	1	8	0	0	9	
	22	M32					124	-	-	-	-	-	-	0	25	84	5	2	0	116		
	23	M33					115	-	-	-	-	-	-	0	16	79	7	3	1	106		
23	24	L32・33	3			109	68	62%	23	21%	11	10%	7	109	12	72	17	1	0	102	土器細片ほか	
	25	E31				44	28	64%	13	30%	3	7%		44	1	40	3	0	0	44		
24	26	M33				39	-	-	-	-	-	-	0	3	26	3	0	0	32			
	27	J33	1			30	-	-	-	-	-	-	0	5	18	6	0	0	29	被熱		
25	28	I・J27		○	○	302	-	-	-	-	-	-	0	31	141	54	11	4	241			
	29	J30		○	○	229	-	-	-	-	-	-	0	30	91	42	13	7	183	被熱		
26	30	M34	12	○	○	200	139	70%	46	23%	9	5%	6	200	8	74	77	8	33	200	塞ノ神式・倉園B式	
	31	J27		○	○	166	-	-	-	-	-	-	0	45	73	10	4	0	132			
27	32	L32・33		○	○	147	80	54%	65	44%	1	1%	1	147	-	-	-	-	-	0		
	33	J27		○	△	141	22	16%	83	59%	36	26%		141	45	63	7	0	0	115		
28	34	I28		○	○	107	55	51%	36	34%	15	14%	1	107	3	41	39	4	0	87	被熱	
	35	G31	1	○	○	104	61	59%	29	28%	12	12%	2	104	2	21	39	13	11	86	炭化物	
29	36	G34		○	△	82	51	62%	24	29%	6	7%	1	82	12	62	6	0	0	80		
	37	L34		○	△	81	52	64%	16	20%	11	14%	2	81	25	40	1	0	0	66		
	38	E30	1	○		76	44	58%	24	32%	7	9%		75	17	44	0	0	0	61		
30	39	M35		○		76	-	-	-	-	-	-	0	11	51	15	0	0	77			
	40	M32		○		74	-	-	-	-	-	-	0	10	44	12	5	3	74	炭化物		
31	41	K31	1	○		61	36	59%	19	31%	6	10%		61	2	40	10	0	3	55		
	42	L34		○		44	31	70%	6	14%	3	7%	4	44	3	19	12	2	0	36		
	43	L34		○		28	11	39%	2	7%	1	4%	6	20	2	21	2	1	0	26		
32	44	J32	1	○		102	-	-	-	-	-	-	0	19	77	1	0	0	97	被熱		
	45	L33		○		73	-	-	-	-	-	-	0	31	58	4	0	0	93			
	46	L33		○		20	-	-	-	-	-	-	0									
33	47	J32	1	○		18	-	-	-	-	-	-	0	2	13	2	0	0	17			
34	48	F33・34			○	526									-	-	-	-	-	0		
	49	F33・34			○	526	276	52%	175	33%	72	14%	3	526	-	-	-	-	-	0		
	50	F33・34			○	526									-	-	-	-	-	0		
35	51	L29			○	471	326	69%	55	12%	83	18%	6	470	196	154	24	5	3	382		
	52	J・K29			○	246	116	47%	60	24%	68	28%	2	246	18	131	29	7	11	196		
36	53	L32・33	2		○	175	84	48%	40	23%	38	22%	13	175	23	100	38	2	0	163	石坂式	
	54	M31			○	130	62	48%	50	38%	13	10%	1	126	18	80	5	0	1	104	炭化物	
37	55	C27			○	121	86	71%	25	21%	10	8%		121	6	62	29	0	0	97	被熱	
	56	L31	1		○	111	76	68%	23	21%	11	10%	1	111	3	35	34	13	4	89	前平式	

第11表 縄文時代早期集石2

挿図 番号	遺構 番号	検出区	層	土 器	掘 込	礫の 集中	礫数	礫石材						礫の大きさ					備考			
								安山岩(数/%)		ホルンフェルス(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～5cm	～10cm	～15cm		～20cm	21cm～	数量
								数	%	数	%	数	%									
38	57	L32・33	VII a	1		○	90	80	89%	7	8%	2	2%	1	90	8	42	21	3	0	74	石坂式
	58	H29		1		○	100	67	67%	25	25%	7	7%		99	15	67	12	2	0	96	
39	59	J 30				○	84	72	86%	8	10%	2	2%		82	9	49	9	0	0	67	
	60	I 31				○	80	71	89%	6	8%	2	3%	1	80	3	38	19	12	0	72	
40	61	F28				○	77	47	61%	13	17%	17	22%		77	7	22	26	5	2	62	
	62	F28				○	77	56	73%	20	26%	1	1%		77	6	49	16	0	0	71	
41	63	D25				○	72	61	85%	10	14%	1	1%		72	5	37	25	1	0	68	
	64	CD26				○	69	45	65%	23	33%	1	1%		69	0	44	15	2	2	63	
	65	J 29		1		○	66	33	50%	28	42%	4	6%		65	39	18	1	0	0	58	
42	66	B33		2		○	64	57	89%	2	3%	4	6%	1	64	2	29	32	1	0	64	
	67	B28				○	60	-	-	-	-	-	-	0	1	31	20	2	0	0	54	
	68	L31				○	56	42	75%	12	21%	2	4%		56	2	34	8	1	0	45	
43	69	J 29				○	48	22	46%	20	42%	4	8%		46	4	28	15	0	0	47	
	70	F33				○	48	6	13%	36	75%	6	13%		48	0	32	11	0	0	43	
	71	E35				○	45	15	33%	26	58%	4	9%		45	1	20	13	3	0	37	
44	72	J 29				○	43	31	72%	4	9%	8	19%		43	4	27	8	0	0	39	
	73	I 34				○	34	27	79%	4	12%	3	9%		34	0	32	1	0	0	33	
	74	C27				○	32	-	-	-	-	-	-	0	1	18	8	5	0	0	32	被熱
	75	K31				○	28	25	89%	2	7%	1	4%		28	2	13	10	0	0	25	
	76	I 34				○	27	22	81%	5	19%	0	0%		27	3	20	4	0	0	27	
45	77	K32				○	25	20	80%	5	20%	0	0%		25	0	21	4	0	0	25	被熱
	78	H30				○	24	24	100%		0%		0%		24	0	13	11	0	0	24	
	79	K30				○	24	16	67%	6	25%	2	8%		24	2	15	2	2	0	21	
	80	K28				○	22	7	32%	8	36%	7	32%		22	1	18	1	0	0	20	
46	81	L33		6			250	132	53%	63	25%	35	14%	20	250	28	174	42	5	1	250	石坂式・塞ノ神式
	82	E28					219	151	69%	51	23%	13	6%	2	217	11	150	26	3	0	190	
47	83	G33					177	-	-	-	-	-	-	0	11	137	25	4	0	0	177	
	84	L33		3			159	95	60%	58	36%	3	2%	3	159	29	109	5	0	1	144	塞ノ神式
48	85	G29					140	91	65%	38	27%	11	8%		140	8	99	7	1	0	115	
	86	L33		2			123	72	59%	29	24%	22	18%		123	39	59	8	0	1	107	塞ノ神式
49	87	H31		7			119	75	63%	25	21%	12	10%		112	5	86	20	1	0	112	
	50	88		L31	1			111	61	55%	25	23%	23	21%	1	110	6	68	14	2	2	92
89		C27					109	70	64%	20	18%	19	17%		109	6	87	6	0	1	100	
51	90	H29		1			95	50	53%	25	26%	19	20%		94	7	69	13	0	0	89	
	91	G29					88	-	-	-	-	-	-	0	13	71	4	0	0	0	88	
52	92	H32					83	-	-	-	-	-	-	0	14	52	10	1	2	79	被熱	
	93	LM34					83	50	60%	17	20%	16	19%		83	8	51	14	0	1	74	被熱
53	94	I J 34					83	54	65%	18	22%	10	12%	1	83	13	50	13	1	0	77	
	95	LM33		3			82	42	51%	25	30%	13	16%	2	82	12	62	8	0	0	82	石坂式
	96	L32・33		4			75	46	61%	16	21%	4	5%	9	75	4	58	13	0	0	75	石坂式
54	97	L33		2			77	43	56%	20	26%	11	14%	3	77	9	60	3	0	0	72	吉田式・被熱
	98	L31		4			72	-	-	-	-	-	-	0	2	53	8	0	0	63	前平式	
	99	H30					72	61	85%	9	13%	2	3%		72	2	49	19	0	0	70	
55	100	H29		1			71	50	70%	15	21%	5	7%		70	1	47	18	1	0	67	
	101	J 29					71	36	51%	24	34%	10	14%	1	71	10	40	7	0	0	57	
56	102	G29					66	34	52%	22	33%	8	12%	2	66	2	48	5	2	0	57	
55	103	L31					66	46	70%	9	14%	11	17%		66	0	50	1	1	1	53	
56	104	L34					66	34	52%	15	23%	9	14%	8	66	4	50	7	2	1	64	
57	105	L34		1			65	30	46%	24	37%	8	12%	3	65	7	49	8	0	0	64	石坂式
	106	C28					65	31	48%	17	26%	16	25%		64	15	42	8	0	0	65	
56	107	L35					65	14	22%	14	22%	25	38%	12	65	10	42	8	0	0	60	
58	108	H28					63	39	62%	18	29%	6	10%		63	18	20	11	2	0	51	
	109	M32					63	34	54%	18	29%	7	11%	4	63	6	48	7	0	0	61	
	110	H28					62	18	29%	37	60%	7	11%		62	6	47	7	0	0	60	
59	111	L30					61	40	66%	13	21%	6	10%	1	60	4	43	13	1	0	61	
	112	I 30					60	54	90%	4	7%	3	5%		61	3	28	25	1	1	58	

第12表 縄文時代早期集石3

挿図 番号	遺構 番号	検出区	層	土 器	掘 込	礫の 集中	礫数	礫石材							礫の大きさ					備考		
								安山岩(数/%)		ホルノfels(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～5cm	～10cm	～15cm	～20cm		21cm～	数量
								数	%	数	%	数	%									
59	113	M31					60	39	65%	10	17%	11	18%		60	3	28	14	2	1	48	
60	114	L31					57	37	65%	10	18%	9	16%		56	7	38	8	0	0	53	
	115	I33					57	-	-	-	-	-	-	0	3	48	6	0	0	57		
	116	I31	1				54	38	70%	14	26%	2	4%		54	2	36	7	0	0	45	
61	117	CD34					52	31	60%	15	29%	6	12%		52	1	37	14	0	0	52	
	118	L31	4				52	28	54%	14	27%	9	17%		51	3	41	3	0	0	47	加栗山式
62	119	L34					51	29	57%	7	14%	12	24%	3	51	6	39	4	0	0	49	
	120	J34	3				51	35	69%	12	24%	3	6%	1	51	2	45	4	0	0	51	石坂式・被熱
63	121	M33	1				50	30	60%	9	18%	9	18%	2	50	9	29	8	0	0	46	石坂式・被熱
	122	K33・34	2				49	29	59%	14	29%	5	10%	1	49	14	33	1	1	0	49	塞ノ神式
	123	I29					48	28	58%	11	23%	7	15%	1	47	0	34	10	0	0	44	
64	124	L31					48	27	56%	19	40%	2	4%		48	3	4	40	0	1	48	
	125	K31					46	29	63%	9	20%	8	17%		46	14	32	0	0	0	46	
	126	I30					45	32	71%	9	20%	4	9%		45	0	33	11	0	1	45	
65	127	I31					45	31	69%	8	18%	6	13%		45	2	37	3	0	0	42	
	128	I35	7				30	1	3%	22	73%	3	10%		26	1	15	14	0	0	30	塞ノ神式・被熱
66	129	L33					45	23	51%	15	33%	7	16%		45	3	32	10	0	0	45	
	130	I28					44	34	77%	5	11%	5	11%		44	5	39	0	0	0	44	
	131	L33					41	24	59%	7	17%	9	22%	1	41	5	30	4	0	1	40	
67	132	L33					40	23	58%	6	15%	9	23%	2	40	4	34	2	0	0	40	
	133	L31・32					39	31	79%	7	18%	1	3%		39	4	34	1	0	0	39	
66	134	I30					38	6	16%	21	55%	11	29%		38	3	34	1	0	0	38	
67	135	I29					38	20	53%	11	29%	7	18%		38	7	23	3	0	0	33	
68	136	C27					38	-	-	-	-	-	-	0	4	31	1	1	0	37		
	137	C27					38	-	-	-	-	-	-	0	5	22	8	1	1	37	被熱	
	138	L31					37	25	68%	8	22%	4	11%		37	0	24	9	1	0	34	
	139	K33	1				37	23	62%	11	30%	1	3%	2	37	13	22	2	0	0	37	塞ノ神式・被熱
69	140	K34・35					37	29	78%	4	11%	4	11%		37	3	16	18	0	0	37	被熱
	141	L34					37	20	54%	16	43%	1	3%		37	14	23	0	0	0	37	
	142	H30					35	17	49%	9	26%	9	26%		35	1	30	0	0	0	31	
	143	L31					35	23	66%	6	17%	6	17%		35	2	17	11	3	0	33	
70	144	K30					35	28	80%	6	17%	1	3%		35	1	20	13	1	0	35	
	145	J30					35	25	71%	5	14%	2	6%	1	33	2	26	6	0	0	34	
	146	J29					35	29	83%	4	11%	2	6%		35	1	28	5	1	0	35	
	147	C27					35	-	-	-	-	-	-	0	5	12	12	0	0	29		
71	148	K30					34	28	82%	5	15%	1	3%		34	1	25	6	0	0	32	
	149	I34					34	23	68%	9	26%	2	6%		34	3	29	0	0	0	32	
	150	I29					33	19	58%	12	36%	2	6%		33	1	11	14	1	0	27	
	151	I31					31	26	84%	3	10%	2	6%		31	1	8	18	2	0	29	
72	152	M31					31	25	81%	4	13%	2	6%		31	0	21	6	1	0	28	
	153	H30					30	15	50%	9	30%	2	7%	4	30	8	19	1	0	0	28	被熱
	154	I29					30	13	43%	7	23%	10	33%		30	1	12	10	4	0	27	
73	155	K32	1				30	-	-	-	-	-	-	0	3	24	3	0	0	30	被熱	
	156	L34					30	15	50%	8	27%	7	23%		30	1	26	3	0	0	30	被熱・横転
	157	J29					29	16	55%	5	17%	8	28%		29	2	12	11	0	0	25	
74	158	K31					28	22	79%	5	18%	1	4%		28	0	18	10	0	0	28	
	159	J27					28	-	-	-	-	-	-	0	4	24	0	0	0	28		
	160	I29					27	19	70%	5	19%	2	7%	1	27	1	18	6	0	0	25	
	161	I29					26	20	77%	3	12%	3	12%		26	1	22	2	0	0	25	
	162	H33					26	-	-	-	-	-	-	0	2	16	6	0	0	24	被熱	
75	163	C35					26	16	62%	8	31%	2	8%		26	4	22	0	0	0	26	
	164	I30					24	10	42%	10	42%	4	17%		24	1	16	5	0	0	22	
	165	I31					24	8	33%	10	42%	6	25%		24	2	21	1	0	0	24	
76	166	I31					24	13	54%	10	42%		0%		23	1	12	5	4	0	22	
	167	H29					23	17	74%	4	17%	2	9%		23	0	21	2	0	0	23	被熱
	168	I34					23	16	70%	5	22%	1	4%	1	23	1	19	3	0	0	23	

第13表 縄文時代早期集石4

挿図 番号	遺構 番号	検出区	層	土器	掘込	礫の 集中	礫数	礫石材						礫の大きさ					備考				
								安山岩(数/%)	ホルンフェルス(数/%)	砂岩(数/%)	他	総数	～5cm	～10cm	～15cm	～20cm	21cm～	数量					
77	169	J 30	VII a				22	19	86%	2	9%	1	5%		22	0	9	11	2	0	22		
	170	K 29					22	15	68%	6	27%	1	5%		22	1	13	8	0	0	0	22	
	171	L 31		2			22	10	45%	5	23%	5	23%		20	0	11	9	0	0	0	20	
78	172	H34・35					21	17	40%	12	28%	13	30%	1	43	2	13	3	4	0	0	21	
	173						22									2	14	5	0	0	0	22	
	174	L 33					21	13	62%	2	10%	3	14%	3	21	2	13	6	0	0	0	21	
	175	L 35					21	14	67%	4	19%	1	5%	2	21	3	12	6	0	0	0	21	
	176	H 28					20	11	55%	3	15%	6	30%		20	1	15	3	1	0	0	20	
79	177	G 29					19	19	100%	0	0%	0	0%		19	0	15	1	1	0	0	17	
	178	K 34					18	8	44%	10	56%	0	0%		18	1	11	5	0	0	0	17	石坂式・被熱
	179	J 34		1			18	6	33%	9	50%	3	17%		18	7	10	1	0	0	0	18	
80	180	E 32					18	10	56%	3	17%	4	22%	1	18	0	16	1	0	1	1	18	
79	181	H 29					17	6	35%	7	41%	4	24%		17	0	17	0	0	0	0	17	
80	182	L 34		1			16	11	69%	2	13%	2	13%	1	16	1	11	3	1	0	0	16	
	183	D 34					16	10	63%	4	25%	2	13%		16	0	12	3	1	0	0	16	被熱
81	184	F 27					15	13	87%	1	7%	2	13%		16	0	11	4	0	0	0	15	
	185	K 32					15	-	-	-	-	-	-	0	1	11	1	2	0	0	0	15	
	186	B 27					15	-	-	-	-	-	-	0	4	10	1	0	0	0	0	15	
	187	K 32					14	12	86%	1	7%	1	7%		14	0	11	1	2	0	0	14	
	188	B C 34					14	7	50%	6	43%	1	7%		14	0	12	2	0	0	0	14	
	189	G 33					13	-	-	-	-	-	-	-	0	3	10	0	0	0	0	13	被熱
82	190	H 29					9	2	22%	3	33%	4	44%		9	0	8	1	0	0	0	9	被熱
	191	D 33					9	2	22%	2	22%	5	56%		9	0	7	2	0	0	0	9	
	192	G 33					7	-	-	-	-	-	-	0	1	4	2	0	0	0	0	7	
	193	I 29					5	3	60%	2	40%	0	0%		5	0	0	1	3	1	0	5	被熱
	194	L 32					5	5	100%	0	0%	0	0%		5	0	0	3	2	0	0	5	
83	195	M 33			○	○	243	-	-	-	-	-	-	0	49	154	14	2	1	0	0	220	
	196	M 33			○	○		-	-	-	-	-	-	0									
	197	M 33				○	93	-	-	-	-	-	-	0	11	71	8	0	0	0	0	90	
	198	J 30				○	58	40	69%	8	14%	9	16%		57	7	44	2	0	0	0	53	
84	199	M 33		1			197	-	-	-	-	-	-	0	21	142	24	1	0	0	0	188	
	200	M 33					144	-	-	-	-	-	-	0	29	96	13	1	0	0	0	139	
85	201	K 33					76	-	-	-	-	-	-	0	8	64	2	0	0	0	0	74	
	202	C 32					54	6	11%	40	74%	8	15%		54	1	45	7	1	0	0	54	
86	203	J 33					52	-	-	-	-	-	-	0	5	44	3	0	0	0	0	52	被熱
	204	K 33					45	-	-	-	-	-	-	0	8	32	5	0	0	0	0	45	被熱
87	205	M 33					33	-	-	-	-	-	-	0	4	22	4	3	0	0	0	33	
88	206	K 36			○	○	216	109	50%	38	18%	40	19%	29	216	13	118	43	15	6	0	195	
89	207	G 32			○	△	101	-	-	-	-	-	-	0	11	54	32	3	0	0	0	100	
	208	L 33			○	○	90	-	-	-	-	-	-	0	18	65	7	0	0	0	0	90	
91	209	M 33			○		16	-	-	-	-	-	-	0	2	13	1	0	0	0	16		
90	210	M 33					240	-	-	-	-	-	-	0	45	168	21	2	2	0	0	238	
91	211	M 33		2			76	-	-	-	-	-	-	0	17	55	4	0	0	0	0	76	
92	212	M 31・32		1			46	28	61%	18	39%	0	0%		46	1	33	10	0	0	0	44	手向山式
93	213	M 35			○	○	113	-	-	-	-	-	-	0	16	75	17	3	1	0	0	112	
94	214	L 32			○	○	86	59	69%	24	28%	2	2%	1	86	15	38	16	2	1	0	72	
	215	L M 35		1		○																	塞ノ神式
	216					○	252	147	58%	39	15%	30	12%	36	252	50	162	11	0	0	0	223	
	217					○																	
95	218	M 33		1		○	232	152	66%	37	16%	30	13%	13	232	18	60	1	1	0	0	80	
	219														0	64	60	1	0	0	0	125	前平式
	220	K 28				○	157	54	34%	76	48%	27	17%		157	29	77	39	1	0	0	146	
	221	J 31				○	149	93	62%	29	19%	25	17%	1	148	12	120	11	1	0	0	144	
96	222	K 28				○	136	59	43%	51	38%	24	18%		134	10	59	32	6	2	0	109	
	223	J 30		2		○	104	71	68%	17	16%	16	15%		104	6	55	28	4	1	0	94	塞ノ神式
	224	I 30				○	102	56	55%	21	21%	21	21%	2	100	6	69	8	0	0	0	83	炭化物

第14表 縄文時代早期集石5

挿図 番号	遺構 番号	検出区	層	土 器	掘 込	礫の 集中	礫数	礫石材						礫の大きさ						備考		
								安山岩(数/%)		ネリフェリス(数/%)		砂岩(数/%)		他	総数	～5cm	～10cm	～15cm	～20cm		21cm～	数量
								数	%	数	%	数	%									
97	225	J 28	VI	2		○	96	27	28%	49	51%	16	17%	1	93	8	64	11	0	0	83	
	226	G 29				○	84	47	56%	32	38%	5	6%		84	11	45	10	1	0	67	
	227	L 34				○	53	30	57%	10	19%	9	17%	4	53	9	37	1	0	0	47	
98	228	L 34			○	50	30	60%	13	26%	6	12%	1	50	0	44	3	0	0	47		
	229	L 34			○	43	33	77%	8	19%	2	5%		43	6	34	0	0	0	40		
	230	M 33		1		○	36	29	81%	7	19%	0	0%		36	2	29	4	0	0	35	
	231	I 29				○	29	20	69%	8	28%		0%		28	1	15	7	1	0	24	被熱
	232	K 34・35				○	28	14	50%	10	36%	3	11%	1	28	1	19	8	0	0	28	
	233	I 27				○	12	-	-	-	-	-	-	0	0	7	3	0	0	10	炭化物	
99	234	C D 26		3			128	81	63%	37	29%	10	8%		128	62	13	45	2	0	122	志風頭・石坂
100	235	L 34・35		1			125	70	56%	42	34%	9	7%	4	125	8	93	15	1	0	117	塞ノ神式
	236	K 30					97	58	60%	25	26%	9	9%		92	6	71	16	1	0	94	
101	237	K 28					92	45	49%	40	43%	6	7%		91	10	71	8	0	0	89	
	238	L 31・32		8			89	48	54%	32	36%	8	9%	1	89	14	65	6	1	1	87	塞ノ神式
102	239	K 28					88	40	45%	28	32%	20	23%		88	6	49	20	3	0	78	
	240	K 33					86	-	-	-	-	-	-	0	32	47	2	1	0	82	被熱	
103	241	K 29					77	47	61%	14	18%	11	14%		72	9	55	10	0	0	74	
	242	K 28					73	29	40%	28	38%	16	22%		73	14	47	5	0	2	68	
	243	L M 33		4			70	57	81%	12	17%	1	1%		70	12	56	2	0	0	70	塞ノ神式
104	244	M 32					60	-	-	-	-	-	-	0	10	46	3	1	0	60		
	245	L 32					56	44	79%	9	16%	3	5%		56	1	45	8	0	0	54	
105	246	L 35		2			54	26	48%	20	37%	3	6%	5	54	12	39	3	0	0	54	塞ノ神式
	247	K 30					54	-	-	-	-	-	-	0	14	31	5	0	0	50		
106	248	L 31・32		1			52	31	60%	16	31%	5	10%		52	0	40	7	0	0	47	
	249	L 35		2			51	42	82%	6	12%	3	6%		51	4	40	6	0	0	50	塞ノ神式
105	250	L 31		1			50	30	60%	9	18%	7	14%		46	2	46	0	0	0	48	
107	251	J 28					45	32	71%	4	9%	8	18%		44	5	29	10	0	0	44	被熱
	252	K 29					44	19	43%	18	41%	7	16%	1	45	2	27	15	0	0	44	
	253	D 28					44	29	66%	10	23%	5	11%		44	4	38	1	1	0	44	
108	254	L 35		1			43	15	35%	25	58%	3	7%		43	8	33	0	2	0	43	塞ノ神式・被熱
	255	M 34		1			39	31	79%	5	13%	3	8%		39	3	30	5	1	0	39	塞ノ神式
109	256	L 33		2			36	20	56%	13	36%	3	8%		36	10	26	0	0	0	36	塞ノ神式
	257	L 33		1			35	26	74%	8	23%	1	3%		35	7	26	2	0	1	36	
	258	L 35		5			34	15	44%	13	38%	1	3%	5	34	11	14	5	1	1	32	塞ノ神式
110	259	K 30					33	14	42%	10	30%	9	27%		33	4	14	12	3	0	33	
	260	K 32					33	27	82%	5	15%	1	3%		33	0	25	7	1	0	33	
111	261	K L 34					31	27	87%	2	6%	2	6%		31	6	19	2	1	0	28	横転
110	262	H 29					30	20	67%	7	23%	3	10%		30	3	25	2	0	0	30	
112	263	L 33					28	14	50%	5	18%	5	18%	4	28	2	24	0	0	0	26	
111	264	K 32・33		20			27	13	48%	14	52%	0	0%		27	4	19	4	0	0	27	塞ノ神式
	265	K L 34		1			27	10	37%	12	44%	4	15%	1	27	1	15	10	1	0	27	被熱
112	266	K 34		1			26	16	62%	8	31%	2	8%		26	4	15	7	0	0	26	塞ノ神式
	267	D 28					25	-	-	-	-	-	-	0	1	18	5	0	0	24		
113	268	I 28					25	-	-	-	-	-	-	0	0	21	3	0	0	24		
	269	I 29					24	11	46%	12	50%	1	4%		24	1	18	5	0	0	24	被熱
	270	J 28					24	15	63%	6	25%	2	8%		23	0	21	2	0	0	23	炭化物
114	271	E 27					23	10	43%	7	30%	6	26%		23	1	14	7	0	0	22	
113	272	L 34		1			23	15	65%	2	9%	3	13%	3	23	5	17	1	0	0	23	土器細片ほか
114	273	K 32					22	-	-	-	-	-	-	0	4	18	0	0	0	22	被熱	
	274	J 31					21	10	48%	6	29%	3	14%		19	2	15	4	0	0	21	被熱
	275	H 31					14	10	71%	4	29%		0%		14	2	8	3	0	0	13	
	276	I 30					11	6	55%	4	36%	1	9%		11	1	8	2	0	0	11	被熱

集石内出土土器（第117・118図）

集石2号からは1類土器が出土している。集石44・54・98・238号からは2類土器が出土している。集石54-1は口縁部上端に刺突文が施されず、貝殻条痕文のみで文様が施されている。集石98・238号出土は2b類土器の口縁部片である。集石118・250号からは4類土器が

出土している。集石118-1は4a類土器であり、補修孔が確認できる。集石250-1は横位方向の貝殻刺突文が施されている胴部片である。集石87・145号からは5類土器が出土している。集石41・120・237号からは6類土器が出土している。集石111・114号からは7類土器が出土している。集石146号からは9類土器が出土してい

第15表 集石内出土土器観察表

挿図番号	集石(遺物)番号	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
			外面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第117図	集石2-1	1類	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	集石13-1	7類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	
	集石41-1	6類	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい黄橙	良	
	集石44-1	2類	貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	集石54-1		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい黄橙	良	
	集石87-1	5類	刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	集石98-1	2類	刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	2b類土器
	集石111-1	7類	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		浅黄橙色	浅黄橙色	良	
	集石114-1		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	集石118-1	4類	楔形突帯 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	灰褐色	良	4a類土器
	集石120-1	6類	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	明赤褐色	良	
	集石145-1	5類	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		灰褐色	浅黄橙色	良	
第118図	集石146-1	9類	沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	集石171-1		貝殻刺突文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	にぶい褐色	良	
	集石171-2		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	集石198-1	12類	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい赤褐	良	
	集石223-1		貝殻刺突文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい褐色	良	
	集石236-1	6類	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	褐色	良	
	集石237-1		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	集石238-1	2類	刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後 ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	2b類土器
	集石246-1	12類	貝殻刺突文	貝殻条痕後 ナデ	ナデ	○	○	○		○		黒褐色	橙色	良	
	集石250-1	4類	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	明赤褐色	良	
	集石264-1	12類	沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	褐色	良	
	集石264-2		沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	褐色	良	
	集石270-1		沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	

る。集石171・198・223・236・246・264号からは12類土器が出土している。集石270号からは、やや太めの沈線文を曲線的に施した土器が出土している。小片のため詳細は不明である。

磨石集積出土石器（第116図 磨集1～4）

磨集1～4は磨・敲石である。磨集1は楕円形を呈する礫を素材としている。表面に凹みを持ち、裏面中央にも浅い凹みが見られる。下面に集中して敲打痕が見られ、上面・右側面にはわずかに確認できる。表裏面の一転破線は被熱痕である。磨集2は扁平な楕円形を呈する礫を素材としている。表裏面に集中して敲打痕が見られ、上下面にはわずかに確認できる。表面の一転鎖線は被熱痕が見られる。磨集3は表面左半に敲打痕が見られ、側面にも全周にわたって確認できる。表裏面の一点鎖線は被熱痕である。磨集4は扁平な楕円形を呈する礫を素材としている。裏面下半に浅い凹みを持つ。側面は全周にわたって敲打痕が見られる。表裏面を磨面として利用している。

集石内出土石器

集石13（第119図 集1）

集1は扁平な礫を素材とした磨・敲石である。上下面と右側面に敲打痕が見られる。

集石23（第119図 集2）

集2は扁平な楕円形を呈する礫を素材とした磨・敲石である。敲打痕は右側面に集中して見られる他、左側面・下面にも確認できる。

集石24（第119図 集3）

集3は楕円形を呈する礫を素材とした磨・敲石である。

右側面に敲打痕が集中して見られる。表裏面を磨面として利用している。

集石26（第119図 集4）

集4は小形の礫を素材とした磨・敲石である。上面から右側面にかけて集中して敲打痕が見られる。

集石51（第119図 集5）

集5は軽石製品である。長さ約43cm、幅約29cm、厚さ約23cmを測る大型品で、横断面がいびつな逆三角形状を呈している。上面は平坦になるように加工されており、中央から下端にかけて浅い溝状の凹みを持つ。

集石56（第120図 集6）

集6は石匙であり、石匙2に分類される。横長の剥片を素材とし、素材の打面側に摘部が、また、末端側に湾曲した刃部が作出されている。

集石119（第120図 集7）

集7は小形の礫を素材とした磨・敲石である。表面中央に凹みを持ち、裏面にも浅い凹みが見られる。上面に敲打痕が集中して見られ、両側面・下面にも確認できる。裏面下半を欠失している。

集石150（第120図 集8）

集8は楕円形を呈する礫を素材とした磨・敲石である。両側面に敲打痕が見られ、表面にもわずかに確認できる。

集石222（第120図 集9）

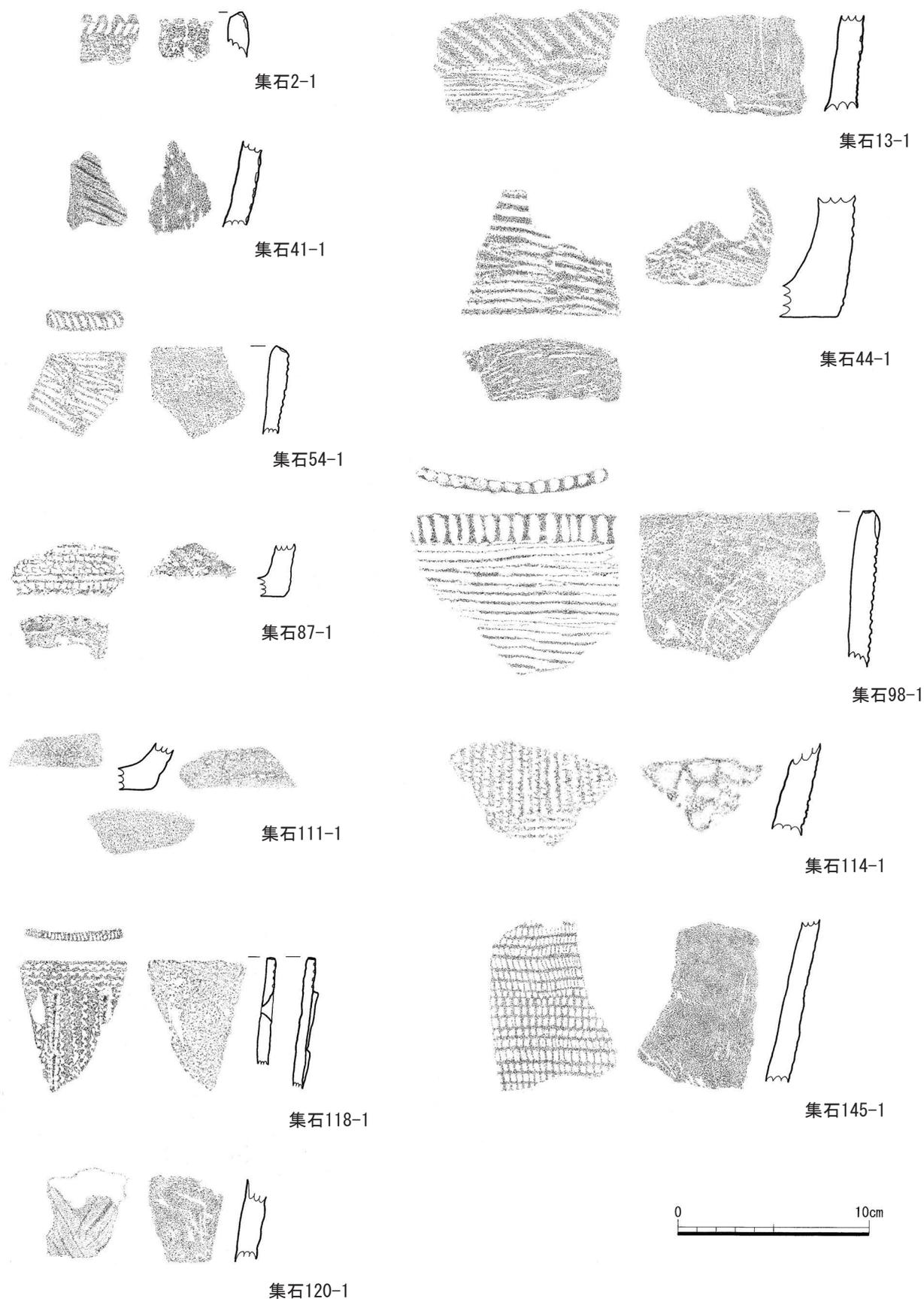
集9は台石である。断面が三角形状を呈した礫を素材としている。表面を作業面として利用しており、敲打痕が広く見られる。

集石270（第120図 集10）

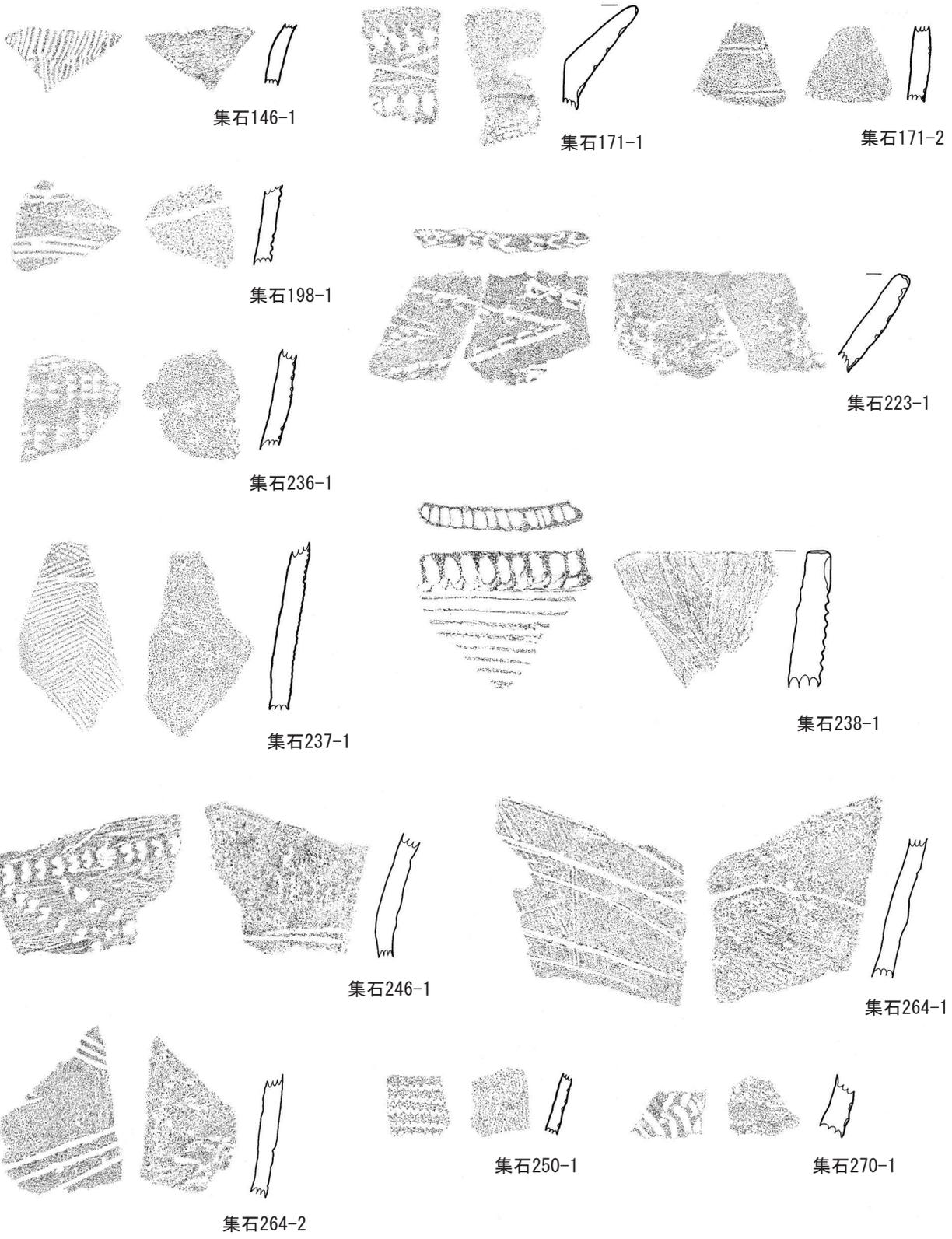
集10は扁平な楕円形を呈する礫を素材とした磨・敲石である。側面のほぼ全周にわたって敲打痕が見られる。

第16表 磨石集積及び集石内出土石器観察表

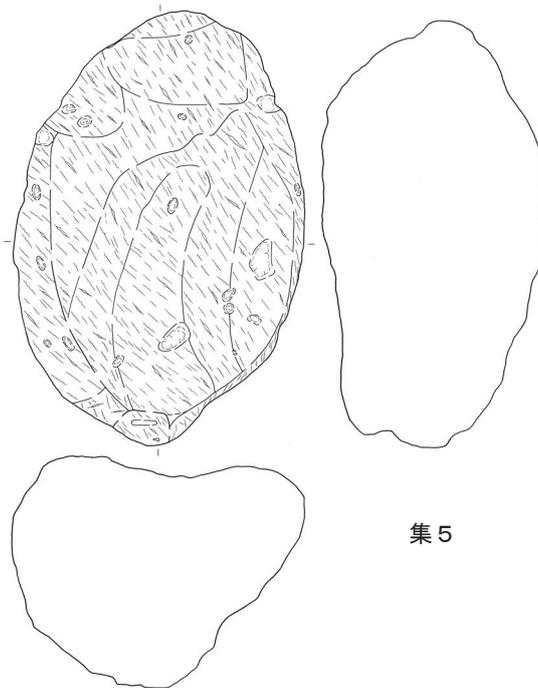
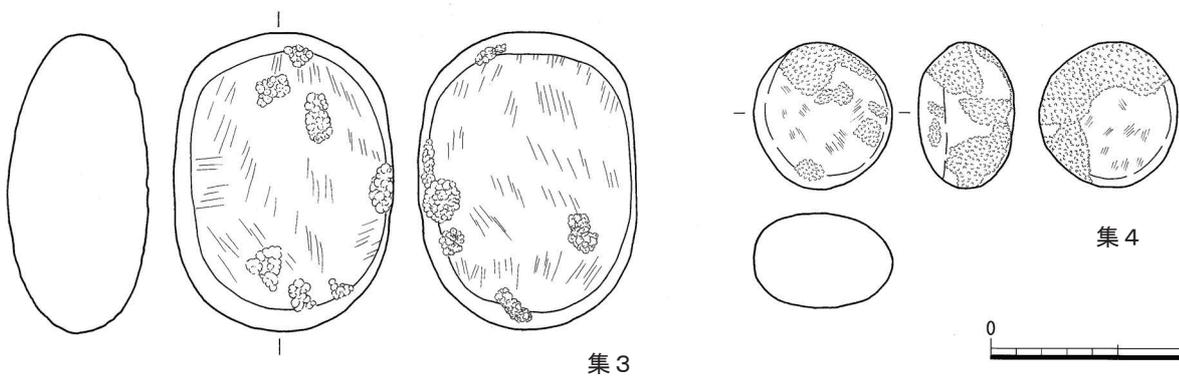
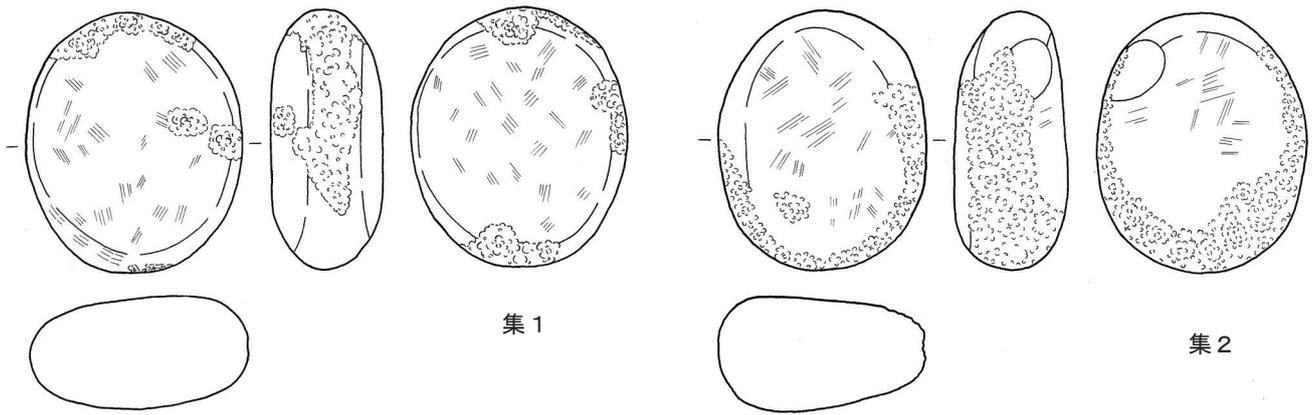
挿図番号	掲載番号	器種	石材	遺構名	出土区	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
116	磨集1	磨・敲石	安山岩4	磨石集積	L33	Ⅶ	9.50	7.00	4.50	401.00	5	
	磨集2	磨・敲石	安山岩4	磨石集積	L33	Ⅶ	12.40	9.50	5.20	798.00	10	
	磨集3	磨・敲石	安山岩4	磨石集積	L33	Ⅶ	8.40	7.20	5.60	419.00	9	
	磨集4	磨・敲石	安山岩4	磨石集積	L33	Ⅶ	11.70	8.20	4.40	527.00	1	
119	集1	磨・敲石	安山岩4	集石13	J31	Ⅶb	10.20	8.50	4.50	607.00	34	
	集2	磨・敲石	安山岩4	集石23	M33	Ⅶa下	10.00	8.00	4.40	541.00	36	
	集3	磨・敲石	安山岩4	集石24	L35	Ⅶa	11.60	8.80	5.30	864.00	69	
	集4	磨・敲石	安山岩4	集石26	M33	Ⅶa下	5.70	5.40	3.70	160.00	28	
	集5	軽石製品	軽石	集石51	L29	Ⅵ	4302.00	29.00	22.50	5250.00	402	
120	集6	石匙2	安山岩1b	集石56	L32	Ⅶa	3.05	6.60	0.70	9.30	16	
	集7	磨・敲石	砂岩1	集石119	L34	Ⅵ	8.25	7.40	3.80	280.00	1	
	集8	磨・敲石	安山岩4	集石150	I29	Ⅶa	11.20	8.60	4.70	731.00	32	
	集9	台石	安山岩4	集石222	K28	Ⅵ	16.50	19.30	8.00	3064.00	67	
	集10	磨・敲石	安山岩4	集石270	J28	Ⅵ	9.70	7.70	4.10	506.00	20	



第117图 集石内出土土器 1

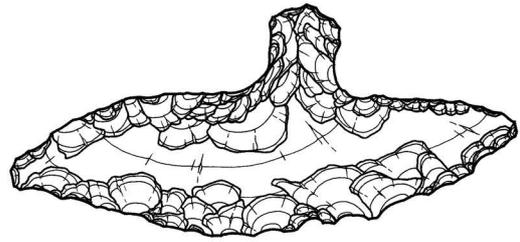
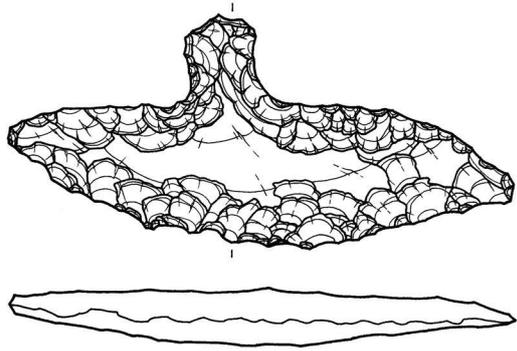


第118图 集石内出土土器 2

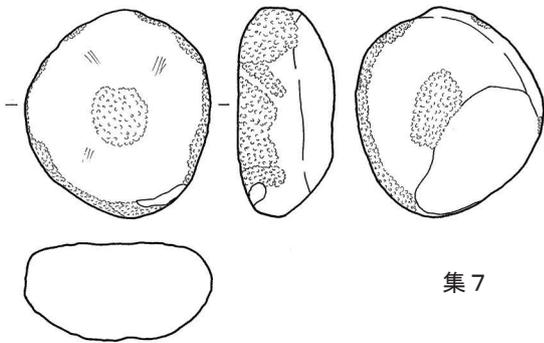


第119図 集石内出土石器 1

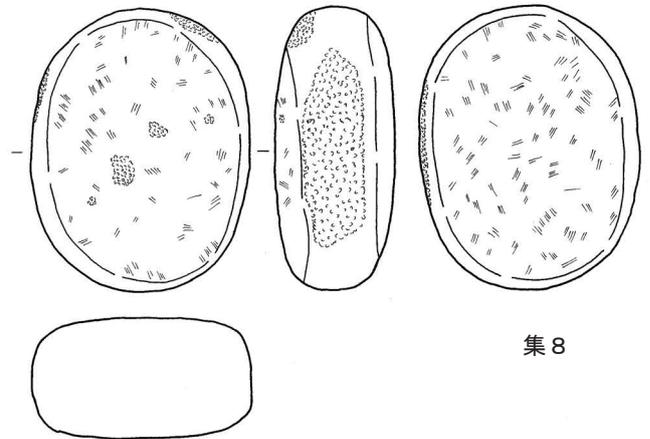
0 (1:6) 20cm



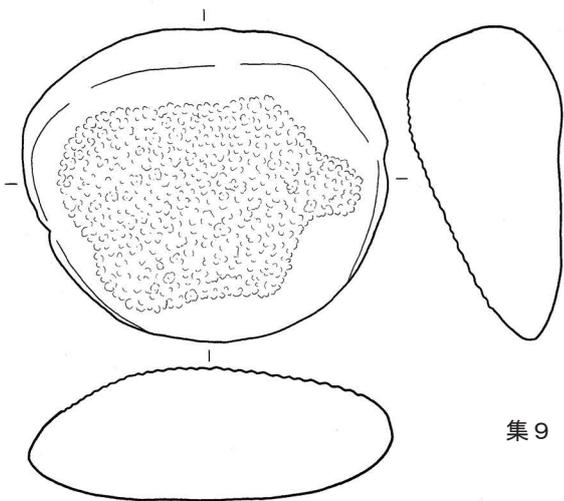
集6



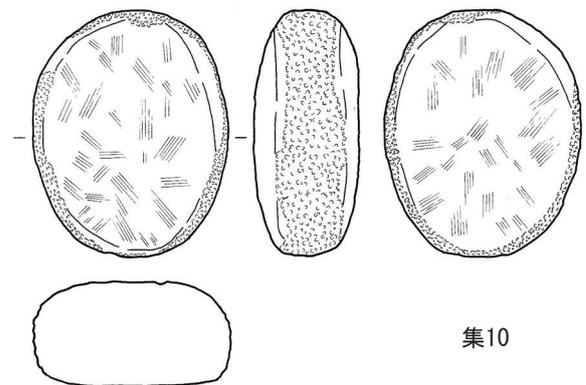
集7



集8



集9



集10



第120図 集石内出土石器2

(2) 縄文時代早期連穴土坑・土坑

縄文時代早期の土坑はⅧ層上面を中心に33基検出された。調査区の南東部から多く検出されているが、調査区の全域で確認されている。33基の土坑のうち、**土坑1～8**の8基についてはブリッジが残存していることから、いわゆる連穴土坑であると考えられる。また、**土坑9～12**の4基の土坑は一部にくびれ部を持ち、その形状から連穴土坑の可能性が非常に高く連穴土坑として扱う。連穴土坑は調査区の南東部から多く検出されている。調査区の北西部でも一定数が密集して検出されているが、連穴土坑は検出されていない。

連穴土坑 (第122～127図 連穴土坑1～12)

連穴土坑は12基検出されている。連穴土坑1～8はⅧa層である薩摩火山灰層を利用したブリッジ部分が残存している。

連穴土坑1はJ35区のⅧa層上面から検出された。東西方向を長軸とし、煙道側(西側)の円形土坑が、焚口側(東側)の楕円形土坑とトンネルでつながっている形状である。煙道側の円形土坑は直径38cmを測り、トンネル部へ向かい約45度の角度で傾斜している。断面図のとおり、トンネル部は最も深く掘り込まれており、検出面から深さは38cmである。最深部は平坦に整形されている。トンネル部やその周辺で焼土等は確認できなかった。ブリッジ部分は幅12cm、厚さ16cmであり、Ⅷa層がしっかりと残存している。焚口側の楕円形土坑は長軸111cm、短軸55cmを測り、トンネル最深部から東側の立ち上がりに向かい緩やかに立ち上がる形状をしている。埋土は単一埋土であり、明黄褐色パミスを多量に含むⅦ層起源の黒褐色砂質土が堆積している。この明黄褐色パミスについては、採取しテフラ分析をおこなっている。また、床面からは炭化物が出土していたため、年代測定をおこなっている。焚口側の楕円形土坑の埋土中程から倉園B式土器と考えられる土器片が1点出土している。

連穴土坑2はL35区のⅧa層上面から検出された。ブリッジ部分より東側は上部を樹痕による攪乱を受けている。東西方向を長軸とし、煙道側の円形土坑が、焚口側のややいびつな楕円形土坑とトンネルでつながっている形状である。煙道側の円形土坑は直径40cmを測り、急角度で掘り込まれたのちトンネル部へ向かい緩やかに傾斜する。床面は焚口側の楕円形土坑の中程で最も深くなるが、そこからほぼ水平に東側壁面まで行き、攪乱を受けはつきりとはしないが、煙道側とほぼ同じ角度で立ち上がると考えられる。ブリッジ部分はⅧa層が幅10cmで残存している。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑3はK34区のⅧa層上面で検出された。東西方向を長軸とし、煙道側の円形の土坑が、焚口側の楕円

形土坑とトンネルでつながる形状をしている。煙道側の円形土坑は直径約35cmを測り、床面に向けて垂直に掘り込まれている。連穴土坑1や2と異なり、掘り込みは一気に最深部に達し、焚口側の楕円形土坑の中程から東側に向けて緩やかに傾斜する。最深部の床面の深さは、検出面から45cmである。楕円形土坑の東側はステップ状の段が形成され、煙道側と同じくほぼ垂直に立ち上がる。ブリッジ部分はⅧa層がしっかりと残存しており、幅21cm、深さ18cmを測る。焚口側の楕円形土坑は長軸116cm、短軸66cmである。埋土はレンズ状堆積を呈す。埋土中からは礫が数点出土しているが、どれも中程よりも上位からの出土であり、流れ込みと考えられる。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑4はKL32区のⅧa層上面から検出された。煙道側の円形土坑が、焚口側の楕円形土坑とトンネルでつながる形状をしている。煙道側の円形土坑は直径23cmのほぼ正円をなす。床面に向けて緩やかに傾斜し、床面はほぼ平坦であり、焚口側ではやや急に立ち上がる。ブリッジ部分は幅6cmと狭いが幸うじてⅧa層が残存している。埋土中には礫が出土しているが、どれも自然礫であり、流れ込みと考えられる。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑5はL31区のⅧa層上面から検出された。煙道側は長軸約55cm、短軸約30cmのいびつな楕円形をなし、焚口側の楕円形土坑とトンネルでつながる。煙道側からの掘り込みは急角度で落ち込み床面に達し、焚口側の立ち上がりまでほぼ平坦であるが、トンネル部分でわずかに高まりを持つ。焚口側は約45度の角度で立ち上がる。特徴的なのはブリッジ部分であり、幅10～20cm、厚さ13cmでⅧa層が残存しており、その形状から土坑使用時の形状をほぼ保っていると考えられる。埋土はレンズ状堆積を呈し、礫が数点出土しているが、いずれも自然礫の流れ込みである。トンネル部分の床面には極わずかに焼土が確認されている。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑6はG33区Ⅷa層上面から検出された。周囲には他に連穴土坑はなく、ほぼ単独で検出されている。また、円形の窪地の中に作られているという特徴を持ち、検出面から床面までの深さも、他と比較して深い。煙道側の長軸48cm、短軸32cmの楕円形小土坑が、焚口側の長軸130cm、短軸55cmの楕円形土坑とトンネルでつながる形状をしている。床面はほぼ平坦であり、煙道側・焚口側ともに急角度で立ち上がる。トンネル部分から焚口側にかけてはしっかりとした焼土が確認されている。焼土からは少量であるが炭化物も出土している。遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑7はJ28区のⅧa層上面から検出された。煙道側は長軸30cm、短軸25cmのいびつな長方形の土坑で

あり、角部がトンネルと接合する。検出面から深さ約12cmの床面はほぼ水平であるが、煙道側のトンネル部付近がやや下がる。ブリッジは幅6～10cm、厚さ6cmでⅧa層が残存している。トンネル部分には埋土2が堆積しているが、この埋土2は不自然な堆積状況を示しており、また非常によくしまっているため、人為的に成形された可能性が高い。この埋土2は煙道側の立ち上がり付近でも確認でき、埋土2と床面のやや下がる部分の形状がきれいにつながる。煙道側のトンネル出口を部分的に深く成形したかった、もしくはトンネル部分を狭くしたかった、のどちらかの可能性が考えられる。床面は煙道側、焚口側ともに、ほぼ垂直に立ち上がる。焚口側は底辺35cm、高さ70cmの、ややいびつな二等辺三角形形状の土坑である。埋土1、2中には1～3mm程度の炭化物が確認された。焼土・遺物は出土していない。

連穴土坑8はJ27区のⅧa層下位から検出された。煙道側は、長軸32cm、短軸27cmのいびつな長方形形状の土坑であり、約45度の角度で床面へと傾斜する。床面はほぼ水平であるが、ブリッジ直下から煙道側はやや掘り下げられている。ブリッジは幅14～20cm、厚さ15cmで、Ⅷa層が非常によく残存している。床面は焚口側ではほぼ垂直に立ち上がる。埋土は主に煙道側から流入したと考えられる堆積状況を示している。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑9～12は土坑の一部にくびれ部を持つ土坑群であり、ブリッジは残存していないが、その形状から連穴土坑の可能性が高い土坑である。

連穴土坑9はJ35区のⅧa層から検出された。長軸約140cm、短軸55cmを測り、東側1/4の部分にくびれ部を持つ。床面は東側に向けて緩く傾斜する形状を呈し、立ち上がりは東西ともに約45度の角度で立ち上がる。埋土中には礫が出土しているが、いずれも自然礫であり、埋土の中程から上位で出土している点からも、流れ込みと考えられる。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

連穴土坑10はL35区のⅧa層中から検出された。長軸185cm、短軸55cmを測り、北側1/6の部分にくびれ部を持つ。床面は北側に段を作り、くびれ部から傾斜し最深部へと下がり、最深部から南側へは緩やかに傾斜し上がっていく。立ち上がりは南北ともに急角度で立ち上がる。埋土はレンズ状堆積を呈し、埋土4から石坂式土器が出土している。また、礫も出土しているが、床面付近出土のものも含めて、いずれも自然礫である。焼土・炭化物の出土は見られなかった。

連穴土坑11はL33区Ⅶb層中から検出された。遺構の東側1/3の上部は攪乱を受けており残存していない。長軸約150cm、短軸約40cmを測り、西側1/5の部分にくびれ部を持つ。断面形状からも連穴土坑の可能性を指摘できる。埋土中の礫は自然礫である。焼土・炭化物・遺物の

出土は見られなかった。

連穴土坑12はL32区X層中から検出された。土坑の床面付近のみの検出であり、本来はさらに上位から掘り込まれていたと考えられる。長軸約210cm、短軸約70cmを測り、東側1/7の部分にくびれ部を持つ。2つの焼土域を持ち、焼土aは暗褐色土中に3cm程度の焼土ブロックを含む範囲である。焼土bはブロックではなく、全体的に薄い褐色土を示す範囲である。焼土域は広いが炭化物の出土は極わずかである。西側の埋土中に礫が集中して出土しているが、いずれも自然礫である。遺物の出土は見られなかった。

土坑（第128～137図 土坑13～33）

土坑は土坑13～33の21基が検出されている。

土坑13はK35区Ⅷa層上面で検出された。形状はいびつな楕円形で、長軸120cm、短軸45cmを測る。埋土はレンズ状堆積を呈し、Ⅶ層起源の埋土が堆積している。礫が数点出土しているが、いずれも自然礫である。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑14はL35区Ⅷa層上面で検出された。形状は部分的にいびつではあるが、隅丸方形形状を呈し、長軸約125cm、短軸約70cmを測る。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑15はK32区Ⅷa層上面で検出された。形状は楕円形を呈し、長軸約150cm、短軸約55cmを測る。埋土はレンズ状堆積を呈し、Ⅶ層起源の埋土が堆積している。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑16はK31区Ⅷa層上面で検出された。いびつな楕円形状を呈し、長軸約165cm、短軸55cmを測る。埋土は土坑15に非常によく似た堆積状況である。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑17はL32区Ⅷa層中から検出された。きれいな楕円形を呈し、長軸約115cm、短軸50cmを測る。埋土はレンズ状堆積を呈し、土坑がⅨ層下位まで掘り込まれているせいか、下位にはⅨ層起源の埋土が堆積している状況が確認できる。埋土3から上位はⅦ層起源の埋土である。薩摩火山灰の大型のブロックが出土していることから、調査担当者は、この薩摩火山灰の大型ブロックが「崩落した連穴土坑のブリッジ部分であると考えられる」としている。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑18はL32区Ⅷa層上面で検出された。隅丸方形形状を呈し、長軸約120cm、短軸約65cmを測る。埋土は南側から流入したと考えられるが、埋土1と2の堆積状況は自然堆積とは考えにくく、埋土1の部分は後から別の土坑を掘り込んだ可能性が考えられる。焼土・炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑19はD34区Ⅷa層上面で検出された。東側は樹痕の影響を受けてはいるが、前後関係はあいまいである。

楕円形を呈し、長軸約105cm、短軸約80cmを測る。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑20はD34区Ⅷa層上面で検出された。楕円形を呈し、長軸約90cm、短軸約65cmを測る。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑21はG35区Ⅷa層上面で検出された。隅丸方形状を呈し、長軸約105cm、短軸約75cmを測る。埋土は単一埋土で、Ⅶ層起源の埋土が堆積している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑22はH35区Ⅷa層上面で検出された。隅丸方形状を呈し、長軸約110cm、短軸約70cmを測る。Ⅸ層上位まで掘り込まれ、埋土は単一埋土で、Ⅶ層起源の埋土が堆積している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑23はI33区Ⅷa層上面で検出された。きれいな隅丸方形状を呈し、長軸約175cm、短軸約125cmを測る。埋土は単一埋土で、Ⅶ層起源の埋土が堆積している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑24はJ34区Ⅷa層上面で検出された。いびつな隅丸方形状を呈し、長軸約105cm、短軸約55cmを測る。Ⅸ層まで掘り込まれ、埋土は単一埋土であり、隣接するグリッドにある土坑1と類似している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑25はK32区Ⅷa層上面で検出された。楕円形状を呈し、長軸約145cm、短軸約125cmを測る。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑26はL33区Ⅶb層中で検出された。遺構の西側は攪乱の影響を受けている。隅丸方形状を呈し、長軸約250cm、短軸約125cmを測る。埋土はⅦa層起源の埋土が堆積している。縄文時代早期の土坑としては最大の大きさである。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑27はG27区Ⅷa層上面で検出された。方形状を呈し、長軸約170cm、短軸約150cmを測る。土坑の南東部は、長方形状にさらに一段下がる形状をしている。埋土は単

一埋土で、Ⅶa層起源の埋土が堆積している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑28はC28区Ⅷa層上面で検出された。北西角部のみ潰れたような隅丸方形状を呈し、長軸約80cm、短軸約40cmを測る小型の土坑である。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

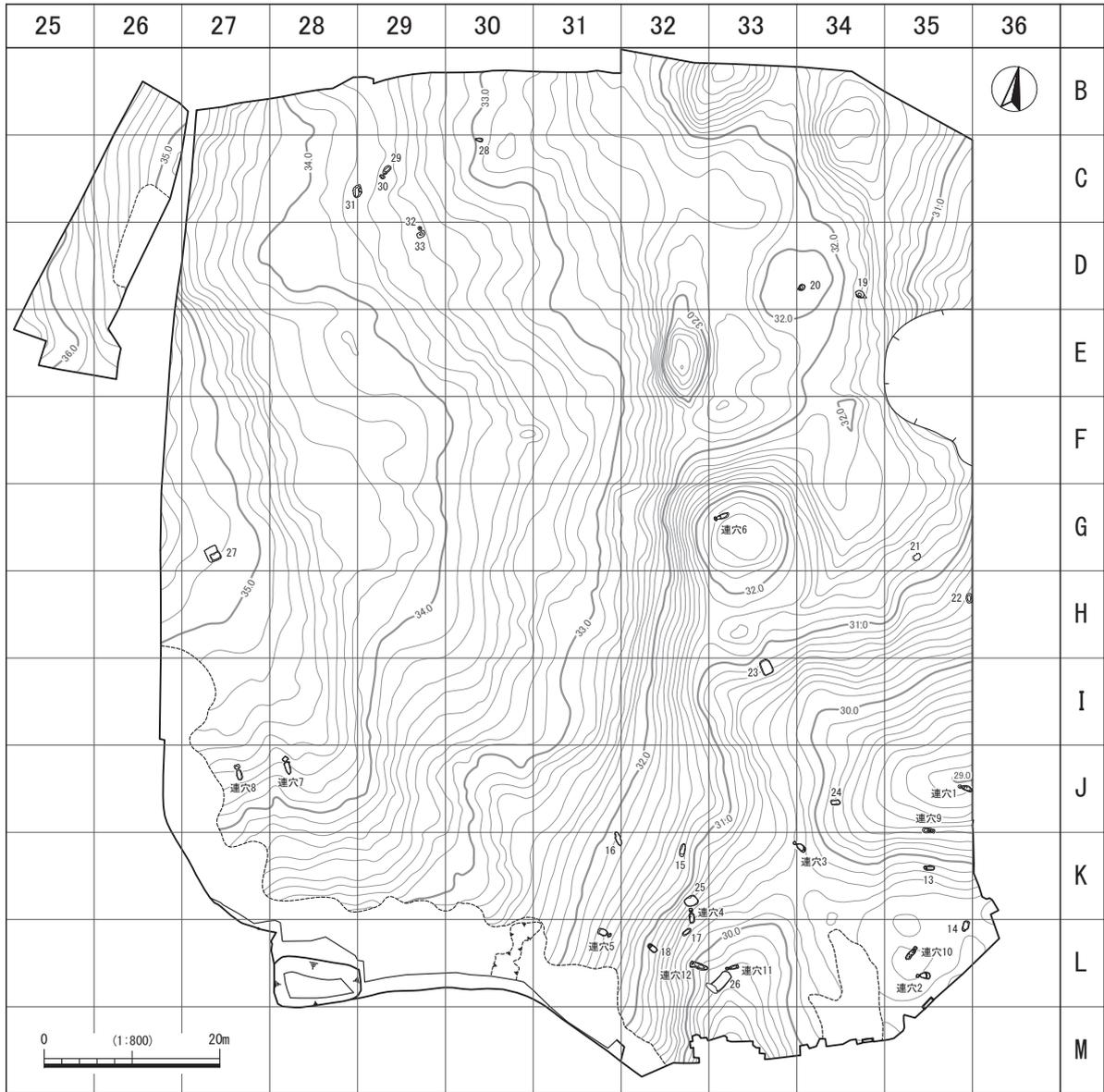
土坑29はC29区Ⅷa層上面で検出された。楕円形を呈し、長軸約120cm、短軸約60cmを測る。南側に段を1段設けている。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑30はC29区Ⅷa層上面で検出された。土坑29とは隣接している。楕円形を呈し、長軸約60cm、短軸約40cmと小型の土坑である。埋土は土坑29と類似している。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑31はC29区Ⅷa層上面で検出された。ややいびつな楕円形を呈し、長軸約140cm、短軸約95cmを測る。埋土は単一埋土で、Ⅶa層起源の埋土が堆積しているが、所々に薩摩火山灰層であるⅧa層のブロックが混ざる。炭化物が極微量ではあるが出土している。遺物の出土は見られなかった。

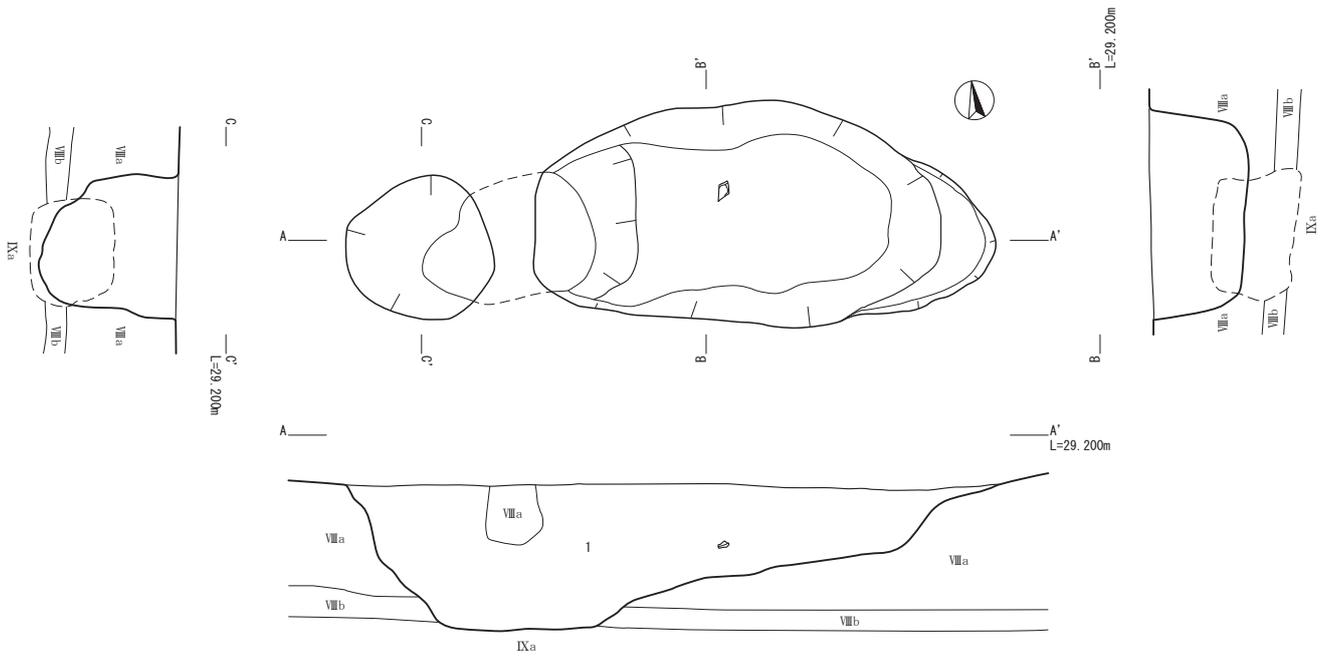
土坑32はD29区Ⅷa層上面で検出された。直径約45cmの小型の円形土坑である。縄文時代早期の土坑としては最小の土坑となる。炭化物・遺物の出土は見られなかった。

土坑33はD29区Ⅷa層上面で検出された。当初、北側に小型の円形土坑である土坑32が検出されていたため、連穴土坑の可能性をもって調査が行われたが、2つの土坑はつながらず単独の土坑であることが判明した。ややいびつながら隅丸方形状を呈し、長軸約95cm、短軸約60cmを測る。埋土堆積状況からすると、埋土2はⅦa層起源の埋土であるが、埋土1はアカホヤ火山灰起源の土であるため、縄文時代前期以降に別の遺構が作られた可能性が考えられる。炭化物・遺物の出土は見られなかった。



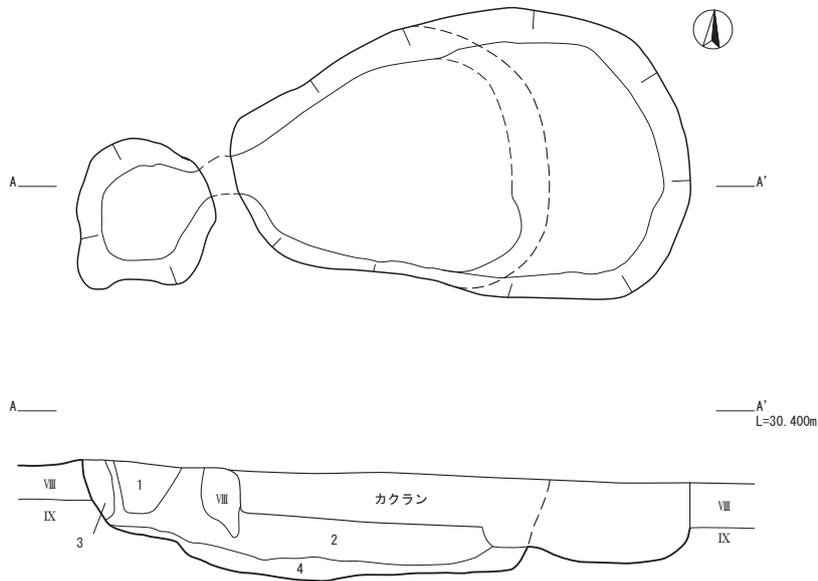
VIII層上面コンタ図

第121図 縄文時代早期 連穴土坑・土坑配置図



1: 黒褐色砂質土(10YR3/1)粘性なし、しまりあり。径1~5mm程度の明黄褐色パミスを多量、径1mmの灰黄褐色パミスを少量含む。

連穴土坑 1

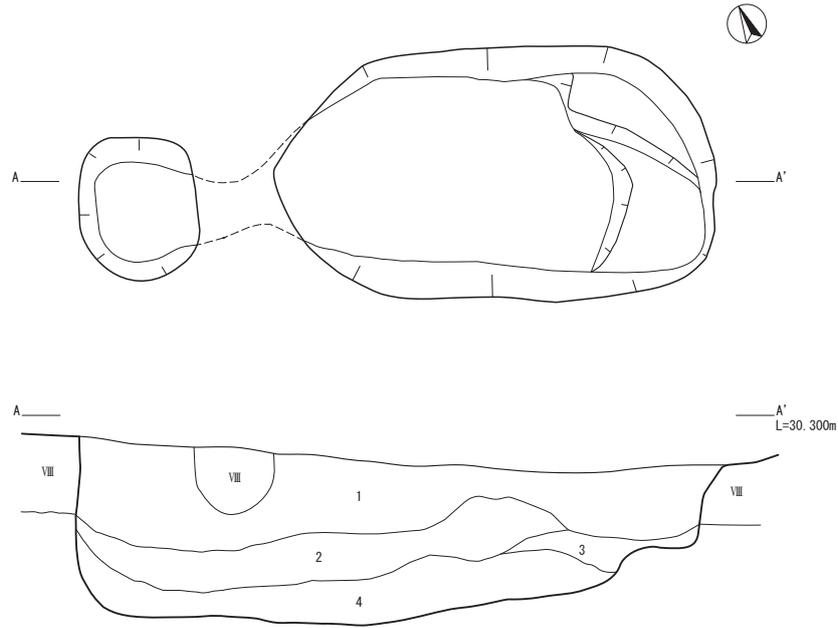


- 1: 黒褐色土(7.5YR3/2)粘性あり、しまりややあり。径1mm程度の白色パミスを若干含む。2とよく似ているがしまりやや弱く、白色パミスを若干含む。
- 2: 極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性あり、しまりあり。IX層を主体とする再堆積土。1と比べやや粘り強く、しまりもある。パミスをほとんど含まない。
- 3: 暗褐色土(7.5YR3/4)粘性あり、しまりややあり。2とVIII層の混土層。
- 4: 極暗褐色土(7.5YR2/3)粘性強い、しまりあり。IXb層主体の再堆積土。2と比べ粘り強く粒子細かい。パミスをほとんど含まない。

連穴土坑 2

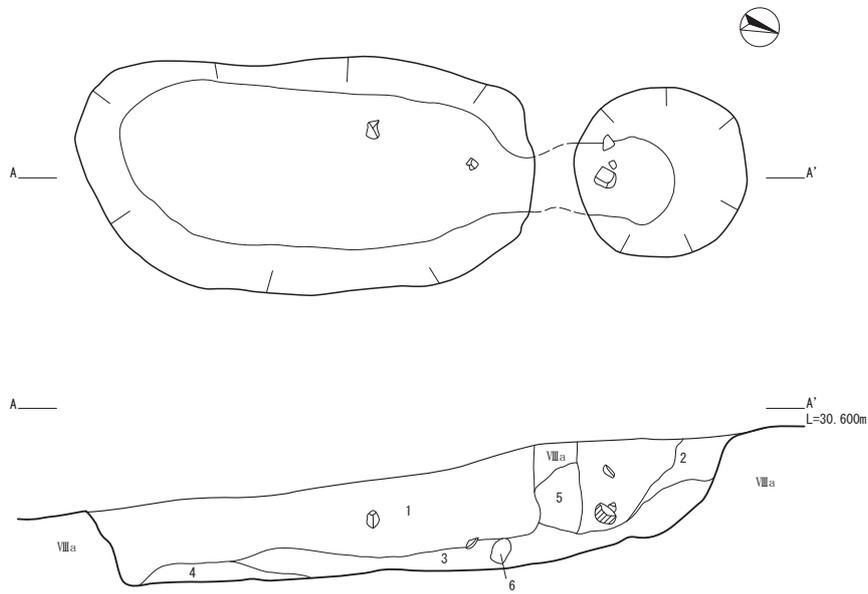


第122図 縄文時代早期VIIa層検出連穴土坑 1



- 1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) やや粘性あり、しまりあり。径1mm程度の白色パミスを中量、径2~3mm程度の黄色パミス少量含む。径5~10mm程度の薩摩火山灰ブロックを極少量含む。弱い斑状堆積でVII層を主体とする混土層。
- 2: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性あり、ややしまりあり。径1mm程度の白色パミス少量、径2~3mm程度の黄色パミスごく少量含む。弱い斑状堆積でIX層を主体とする混土層。
- 3: 暗褐色土 (10YR3/3) やや粘性あり、ややしまりあり。薩摩火山灰起源の再堆積層。わずかながら水平方向にラミナ状の堆積がみられ踏み込み土の可能性はある。
- 4: 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性強い、ややしまりあり。パミス等はほとんど含まない。IX層主体の再堆積層である。

連穴土坑 3

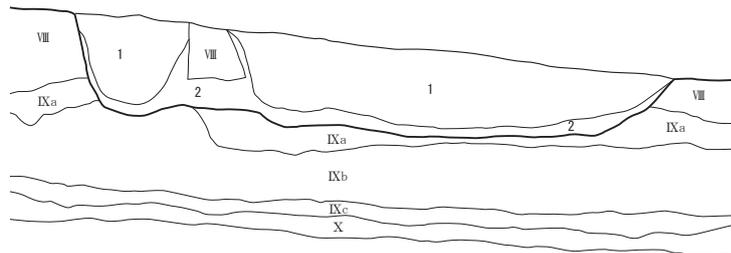
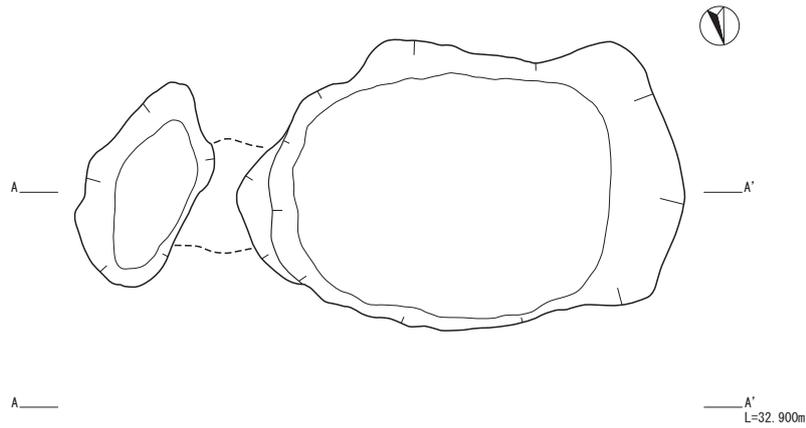


- 1: 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性あり、ややしめる。径1mm程度の白色パミスと径2~3mm程度の黄色パミス中量含む。
- 2: 黒褐色土 (2.5Y3/1) 粘性あり、ややしめる。径1mm程度の白色パミス少量含む。
- 3: 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり、しめる。パミスほとんど含まない。
- 4: 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性あり、しめる。薩摩火山灰がブロックで少量混じる。
- 5: 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) と明黄褐色土 (10YR7/6) が斑に混じる。粘性なし、しまりなし。
- 6: にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性あり、しめる。

連穴土坑 4

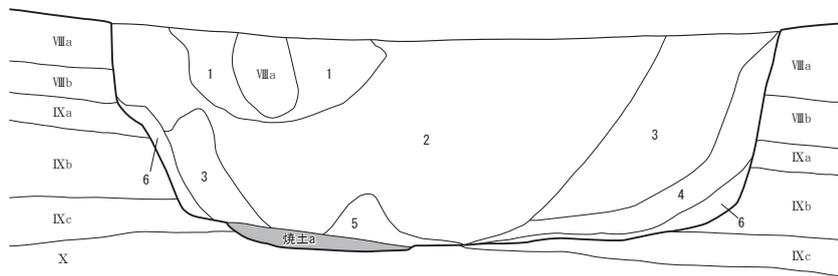
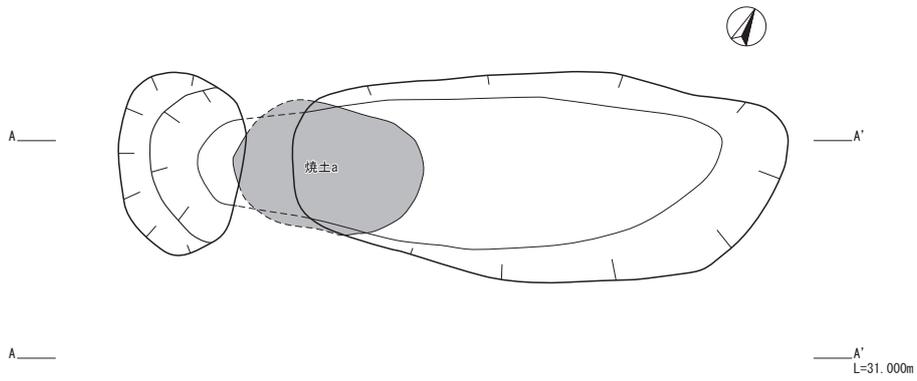


第123図 縄文時代早期VIIa層検出連穴土坑 2



1: 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし。径1~2mm程度のバミスの混じりあり。
 2: 黒褐色土 (5YR2/1) 粘性なし。

連穴土坑 5

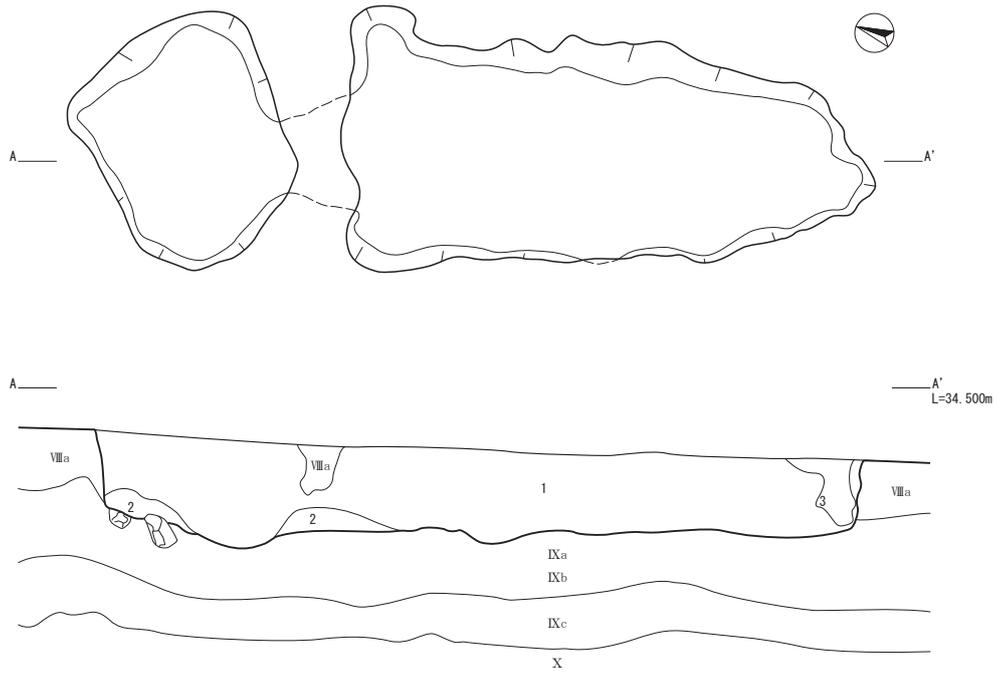


1: 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘性あり、しまり強い。極小~小の黄橙色バミスを全体的に含むが2より少ない。
 2: 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘性あり、しまり強い。極小~小の黄橙色バミスを全体的に含む。3とは黄橙色バミスの量で分層した。
 3: 黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性あり、しまり強い。1と同様な黄橙色バミスを含むが2より少ない。
 4: 黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性あり、しまりは非常に強い。若干の黄橙色バミスを含む。
 5: 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり、ややしまりあり。黄橙色バミスを含まない。
 6: 暗茶褐色粘質土 (IXc層)。
 焼土a: 暗茶褐色土 (2.5YR)。

連穴土坑 6

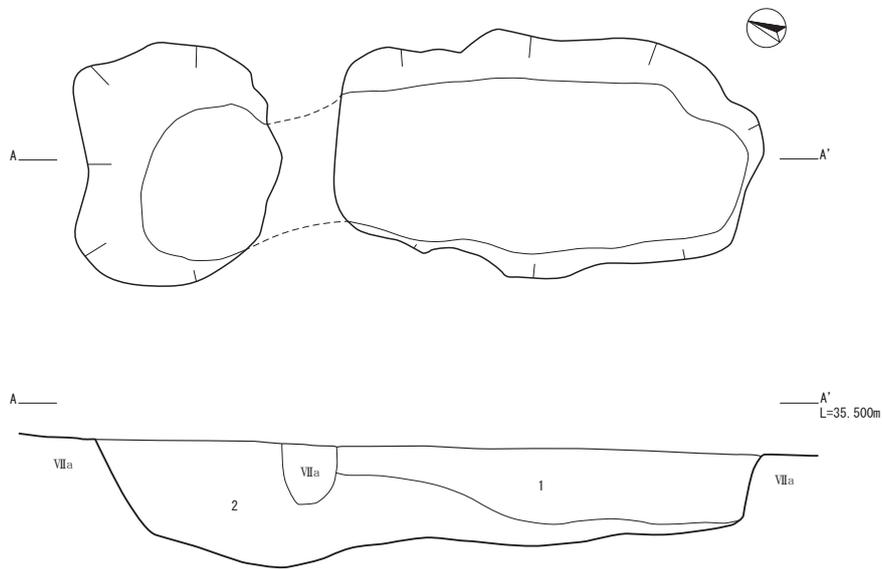


第124図 縄文時代早期VIIa層検出連穴土坑 3



- 1: 褐色土 (10YR4/4) 粘性なし、ややしまりあり。径2mm~1cm次の明黄褐色 (10YR7/6) バミスおよび極小の白色バミスを極わずかに含む。
 2: 黒褐色土 (7.5YR3/1) やや粘性あり、しまり強い。極小の白色バミスを極わずかに含む。
 3: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性なし、ややしまりあり。径2mm~1cm程度の明黄褐色 (10YR7/6) バミスおよび極小の白色バミスを極わずかに含む。

連穴土坑 7

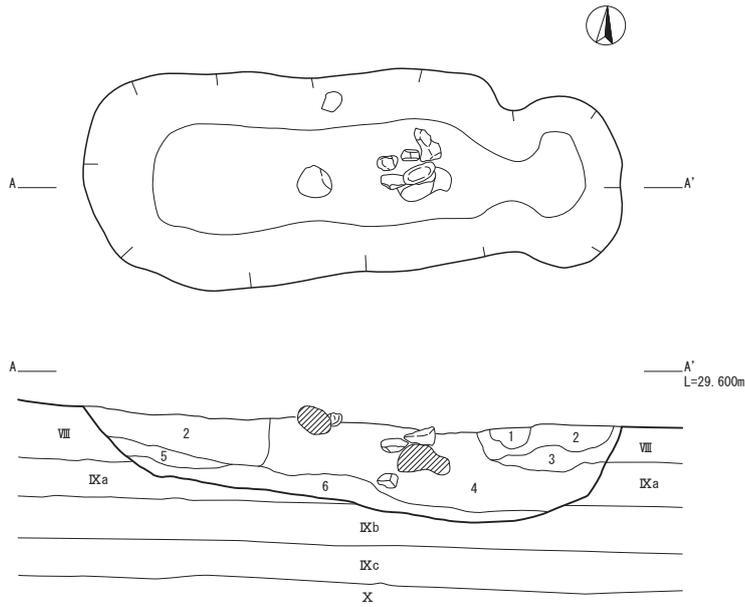


- 1: 黒色土 (10YR2/1) 白い微粒子が見られる。径2~5mm程度の黄色バミスを含む。
 2: 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘性あり。1の土が少し含まれるが、白い微粒子や黄色バミスはあまり見られない。

連穴土坑 8

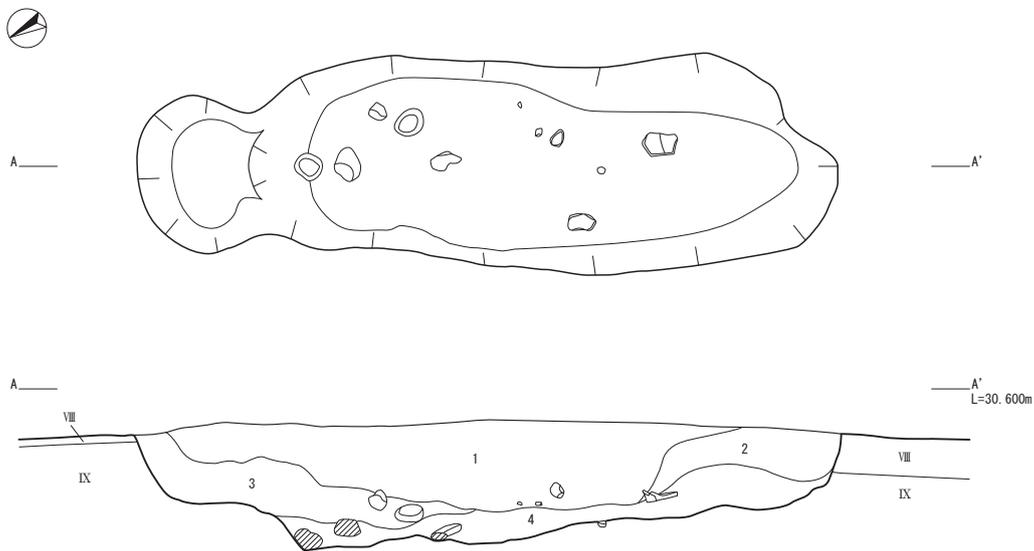


第125図 縄文時代早期VIIa層検出連穴土坑 4



- 1: 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱い、しまり弱い。薩摩火山灰起源のブロック状堆積。
- 2: 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性弱い、しまりあり。径1mm程度の白色バミス少量、径2~3mm程度の黄色バミスを中量含む。VIIb層堆積土。
- 3: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 径1mm程度の灰褐色バミスを多量、径3~4mmの黄褐色バミス (薩摩火山灰) を少量含む。VIIb層堆積土。
- 4: 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性あり、しまり弱い。IX層を主体とし1の土が少量入る。
- 5: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱い、ややしまりあり。径1mm程度の灰褐色バミスを多量に含む。VIIb層起源とみられるが、径3mm程度の黄褐色バミスを含まず、横方向のラミナ構造がみられる点で3とは異なる。
- 6: 黒褐色土 (5YR2/2) 粘性強い、しまりあり。IXa層+IXb層起源。4と比べしまりあり、粘性かなり強いが、地山より、しまり弱い。

連穴土坑 9

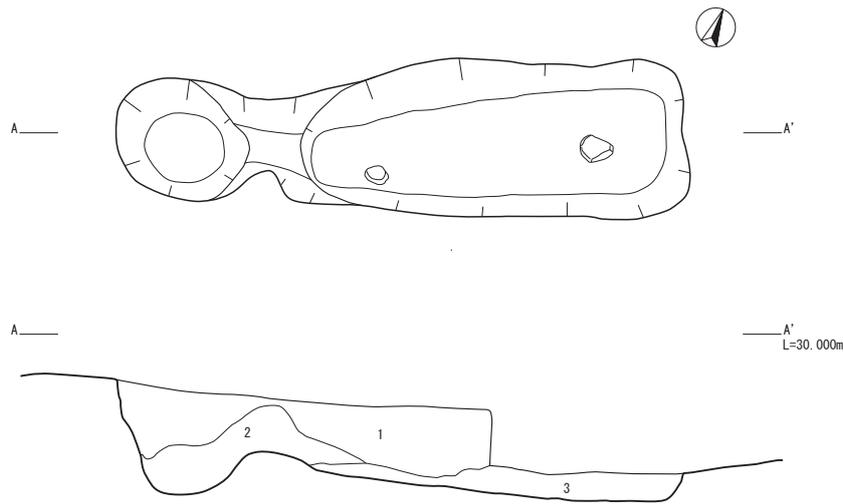


- 1: 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性あり、ややしまる。黒褐色土 (10YR3/1) がブロックで混ざる。径1mm程度の白色バミスの中量と径2~3mm程度の黄色バミスを少量含む。
- 2: にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり、ややしまる。径1mm程度の白色バミスと径2~3mm程度の黄色バミスを少量含む。
- 3: 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) 粘性あり、ややしまる。径1mm程度の白色バミスと径5mm程度の黄褐色バミスを少量含む。
- 4: 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり、しまる。バミス等をほとんど含まない。IX層主体の再堆積土。

連穴土坑 10

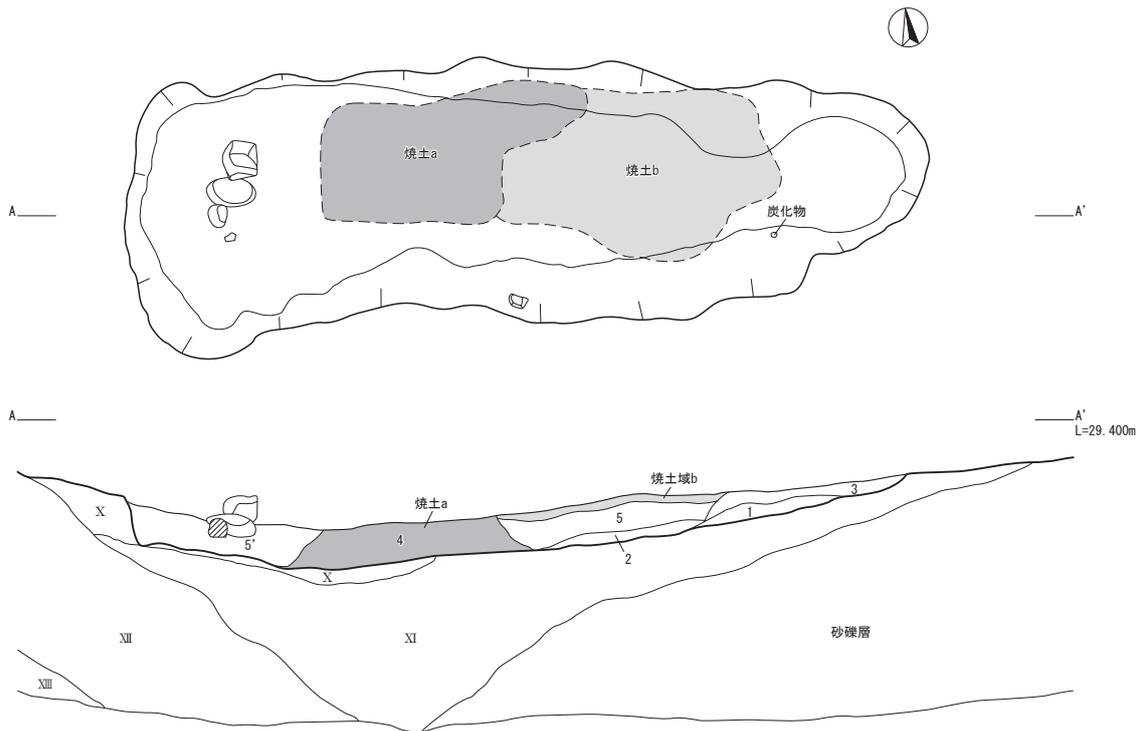


第126図 縄文時代早期VIIa層検出連穴土坑 5



- 1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性あり、しまりあり。径1mm程度の白色パミス中量と径2~3mm程度の黄色パミス少量を少量含む。VIIb層主体。弱い斑状堆積。所により径2~4cm程度の薩摩火山灰ブロックを少量含む。
- 2: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性あり、ややしまりあり。径1mm程度の白色パミスと径2~3mm程度の黄色パミス少量を少量含む。1よりやや明るい。弱い斑状堆積。
- 3: 灰黄褐色土 (7.5YR4/2) やや粘性弱い、ややしまり弱い。VIIb層主体の再堆積土だが、径1mm程度の白色パミスと径2~3mm程度の黄色パミスともにほとんど含まない。土色は2よりさらに明るい。

連穴土坑 11



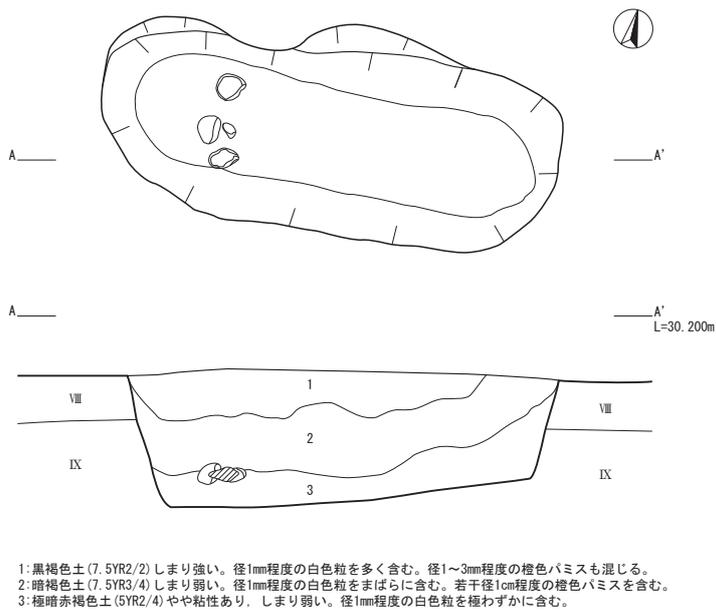
- 1: 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性あり、しまり強い。XI層の砂礫と思われる礫が多く入り、X層の土を多く含む。
- 2: 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性あり、しまり強い。XI層の礫が混ざる。1より礫は少ない。
- 3: 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性あり、しまり強い。礫は入らない。
- 4: 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性あり、しまり強い。焼土と思われる褐色土 (7.5YR4/6) が混じる。炭化物もまばらに含む。
- 5: 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性強い、しまり強い。上部はかすかに褐色。
- 5': 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性強い、しまり強い。灰層 (チョコ層)。

焼土a: 褐色土 (7.5YR4/6) 2~3cm次の焼土と思われるブロックがまばらに混じる範囲。
 焼土b: ブロック状でなく、チョコ層と焼土がほぼ完全に混ざった(全体的にうすい褐色)。

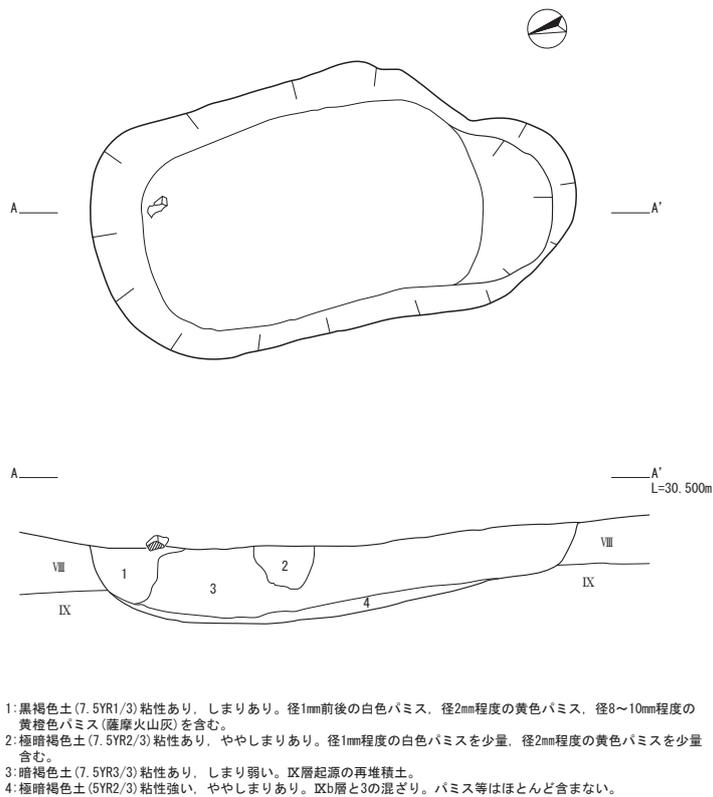
連穴土坑 12



第127図 縄文時代早期VIIa層検出連穴土坑 6



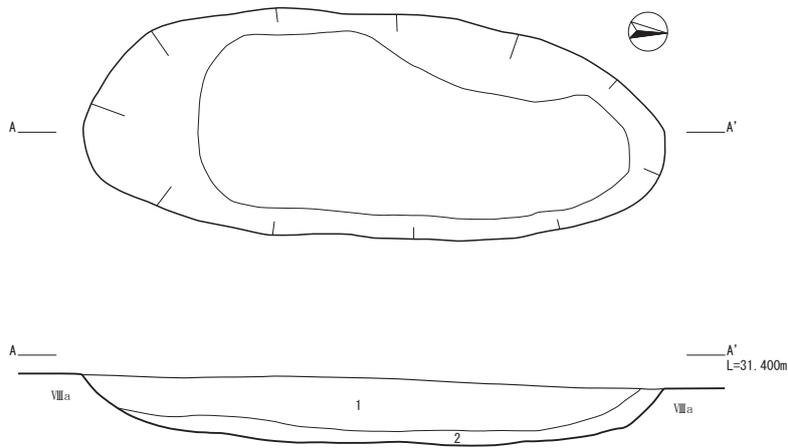
土坑 13



土坑 14

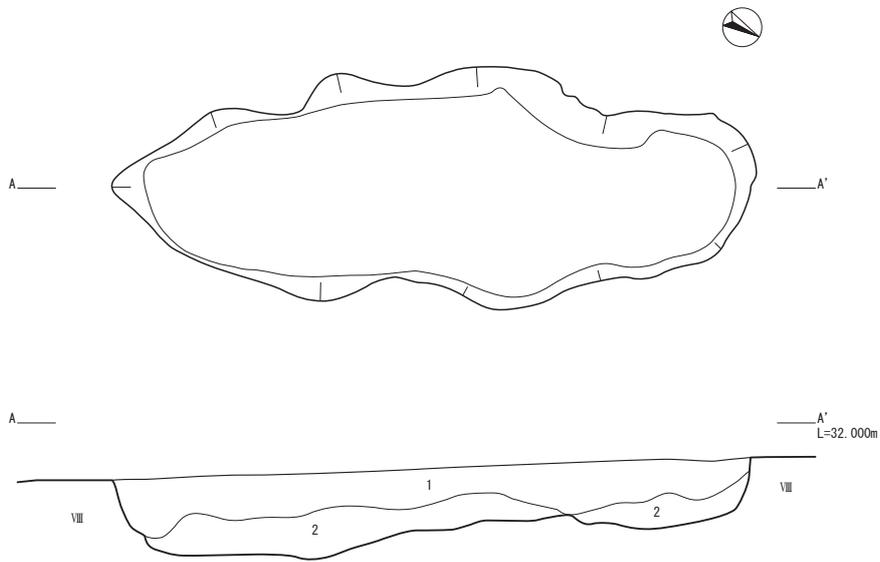


第128図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 1



1: 黒褐色土 (10YR3/2) やや粘性あり。しまりあり。径1mm以下の白色バミスを少量含む。径1mm以下のP12かP13を少量含む。
 2: 黒褐色土 (10YR2/2) より粘性強い。しまりあり。径1mm以下の白色バミスを少量含む。

土坑 15

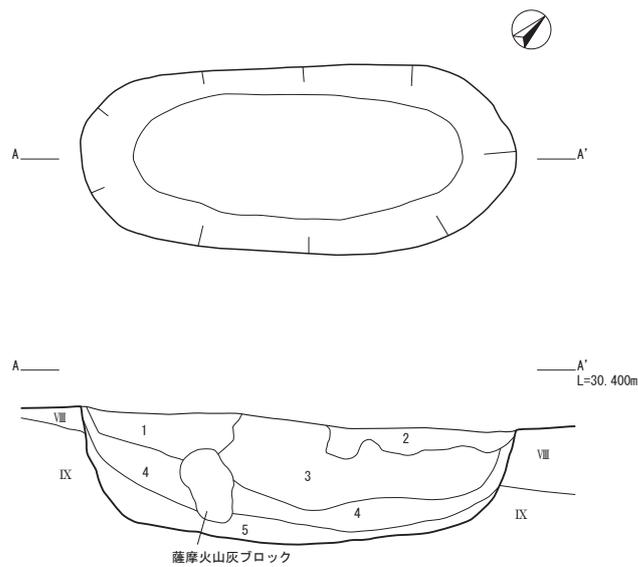


1: 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性あり。白色の微粒子を含んでいる。VII層相当。
 2: 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり。白色の微粒子をわずかに含んでいる。VII層とIX層の混土か。

土坑 16

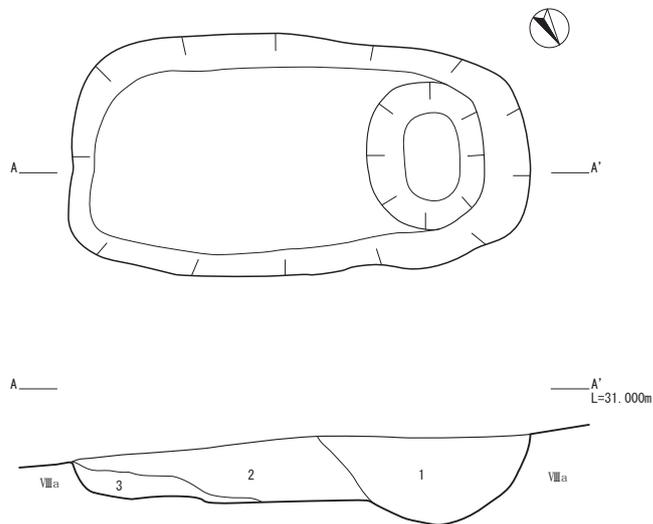


第129図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 2



- 1: 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり。しまりあり。径1mm程度の白色パミスを微量含む。IX層とVIIb層の混ざり。
- 2: 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱い。しまりあり。径2~3cm程度の薩摩火山灰ブロックを中量含む。3と似るが、薩摩火山灰ブロックの粒子がやや細かい。
- 3: 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱い。しまりあり。径3~4cm程度の薩摩火山灰ブロックを中量含む。2より薩摩火山灰ブロックがやや多い。
- 4: 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり。しまりあり。1よりやや粒子が細かく、パミスはほとんど含まない。IX層主体の再堆積土。
- 5: 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性強い。しまりあり。4よりさらに粒子が細かく、パミスはほとんど含まない。IXb層主体の再堆積土。

土坑 17

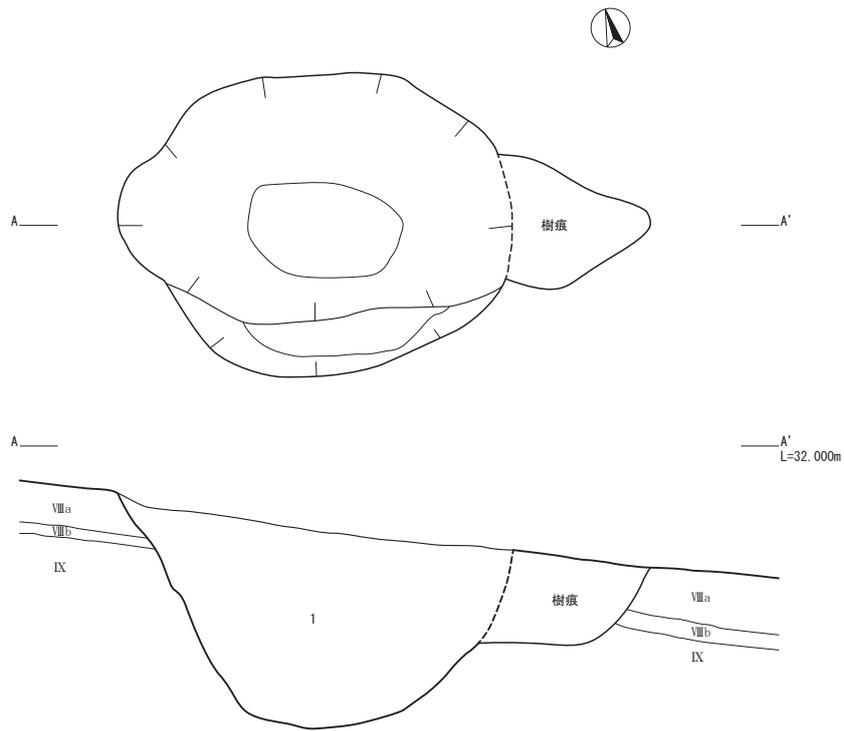


- 1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性あり。しまり弱い。径1mm程度の白色パミスを中量、径2~3mm程度の黄色パミスを少量含む。VIIb層主体。やや顕著な斑状堆積。
- 2: 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性あり。しまりあり。径1mm程度の白色パミスを少量含む。弱い斑状堆積。IX層主体。
- 3: 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり。しまりあり。径1mm程度の白色パミスを極少量含む。

土坑 18

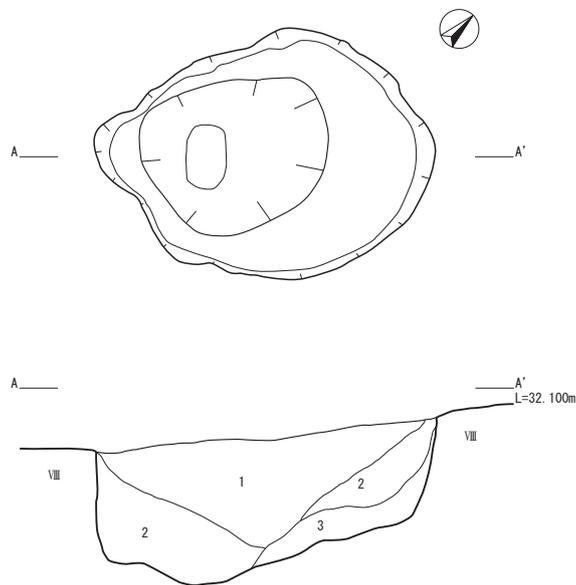


第130図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 3



1: 黒褐色土(10YR3/2) やや粘性あり。しまりなし。黄褐色土(10YR5/6) 径1mm程度の極小の桜島パミスを少量含む。

土坑 19

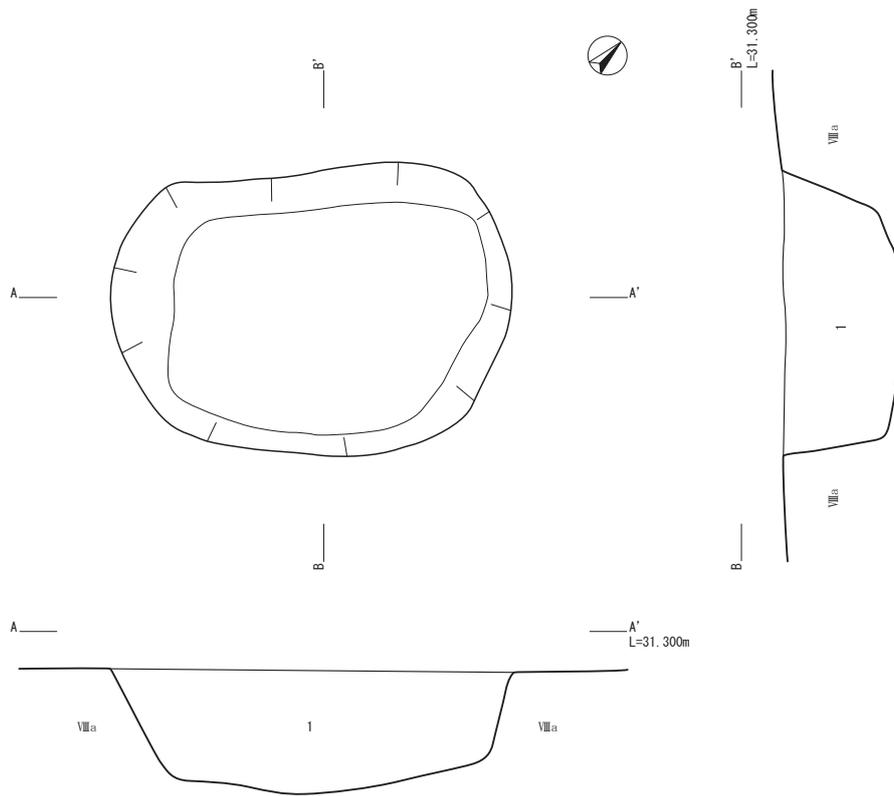


1: 黒褐色砂質土(7.5YR3/2) 粘性なし。しまりふつう。小さな橙色パミスを中量含む。
 2: 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性なし。ややしまりなし。パミスなし。
 3: 暗褐色粘質土(7.5YR3/3) 粘性あり。パミスなし。

土坑 20

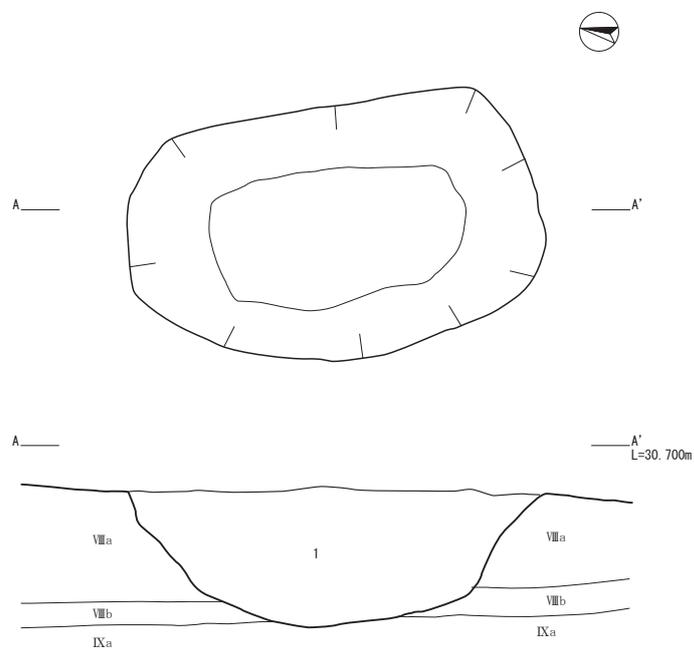


第131図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 4



1: 黒褐色砂質土(7.5YR3/2)粘性なし、しまりあり。径1~3mm程度の橙色パミスを含む。

土坑 21

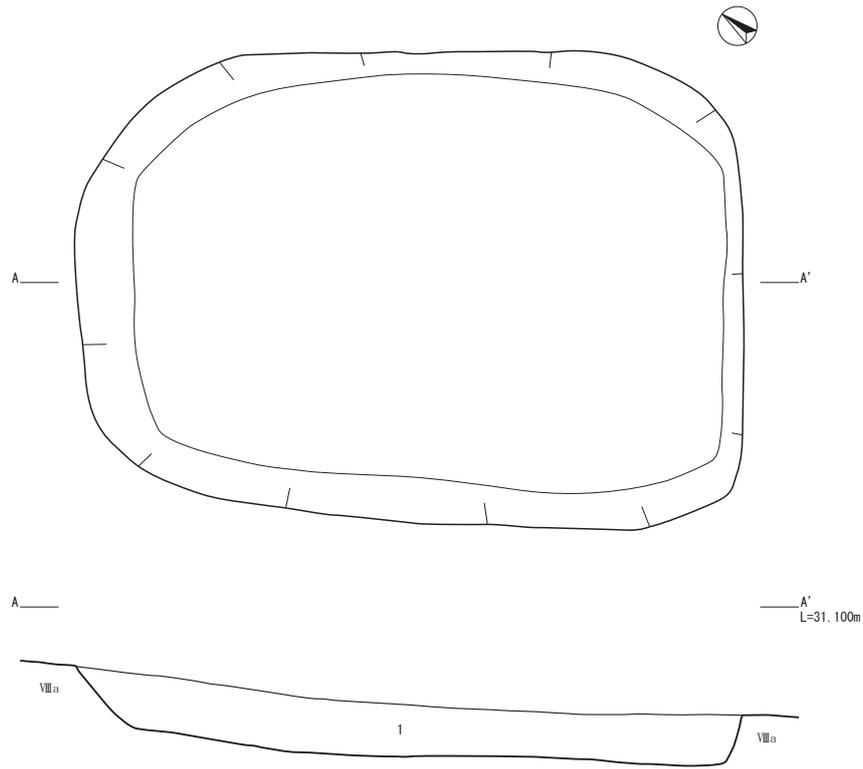


1: 黒色土(7.5YR2/1)やや粘性あり、ややしまりあり。

土坑 22

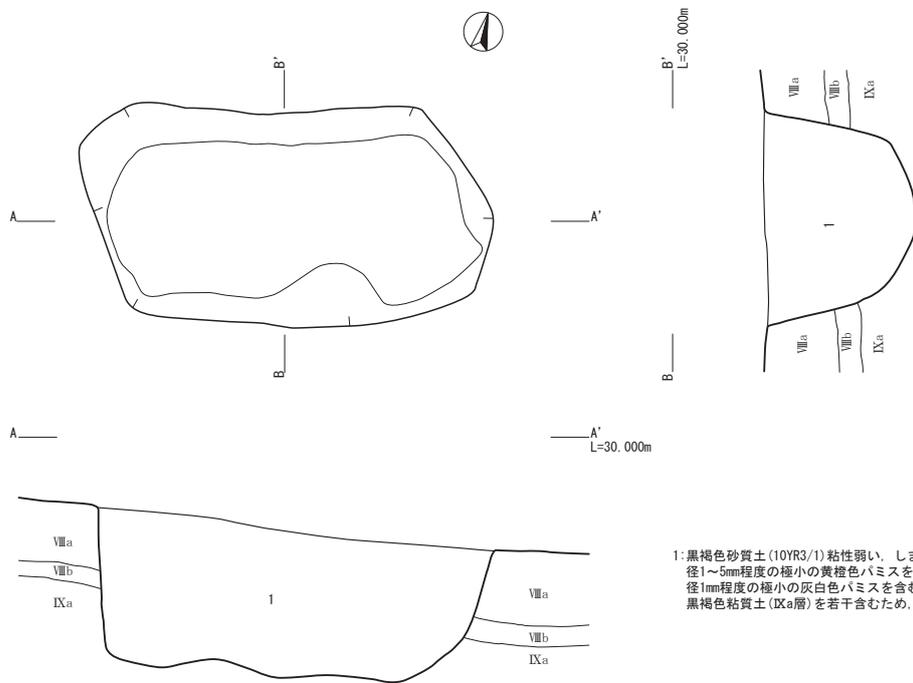


第132図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 5



1: 黒褐色土 (7.5YR2/2) 若干粘性あり、しまり強い。IXb層土が混入している。黄橙色バミスを含む。

土坑 23

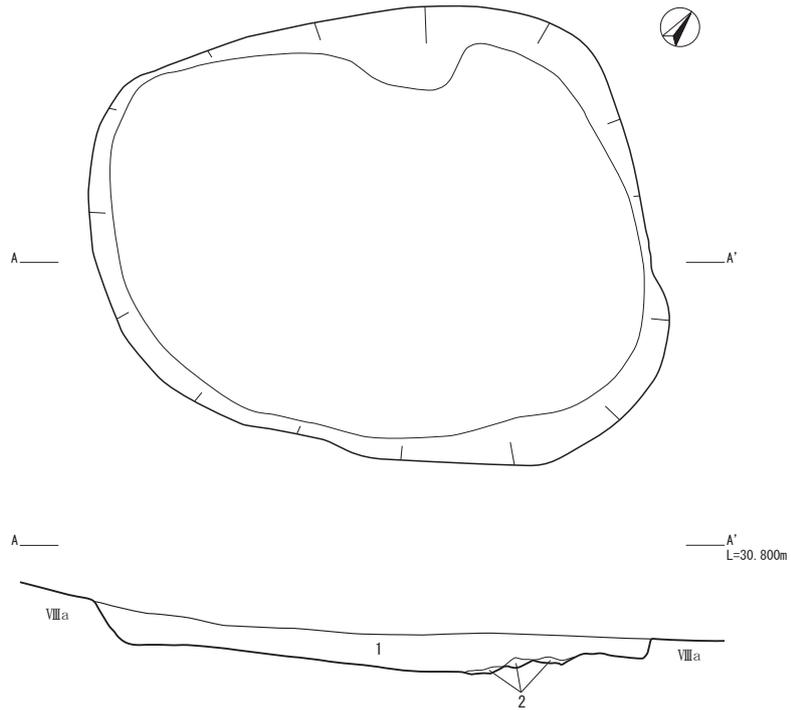


1: 黒褐色砂質土 (10YR3/1) 粘性弱い、しまりあり。
 径1~5mm程度の極小の黄橙色バミスを多量に含む。
 径1mm程度の極小の灰白色バミスを含む。
 黒褐色粘質土 (IXa層) を若干含むため、粘性あり。

土坑 24

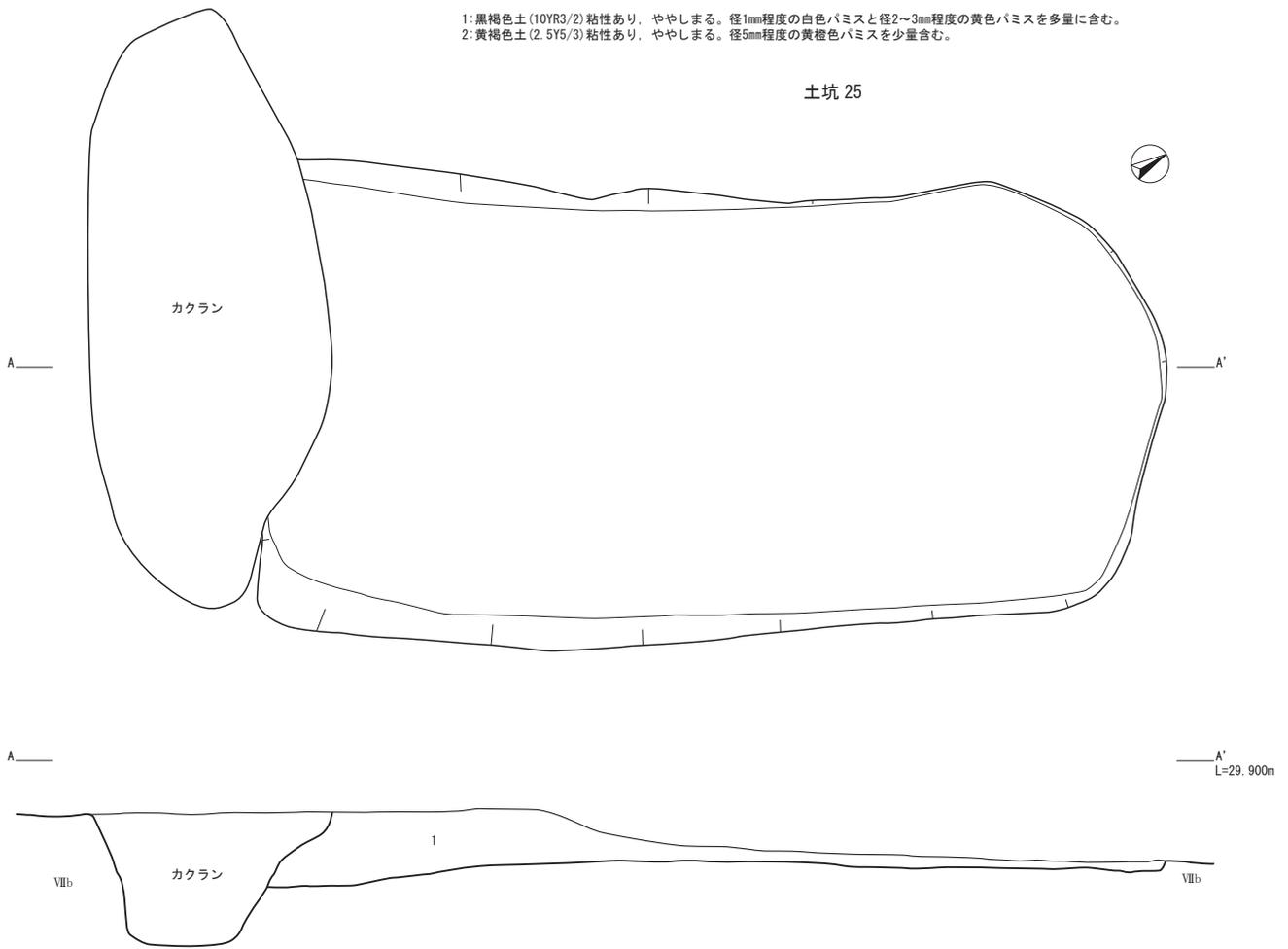


第133図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 6



1: 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり, ややしまる。径1mm程度の白色バミスと径2~3mm程度の黄色バミスを多量に含む。
 2: 黄褐色土 (2.5Y5/3) 粘性あり, ややしまる。径5mm程度の黄橙色バミスを少量含む。

土坑 25

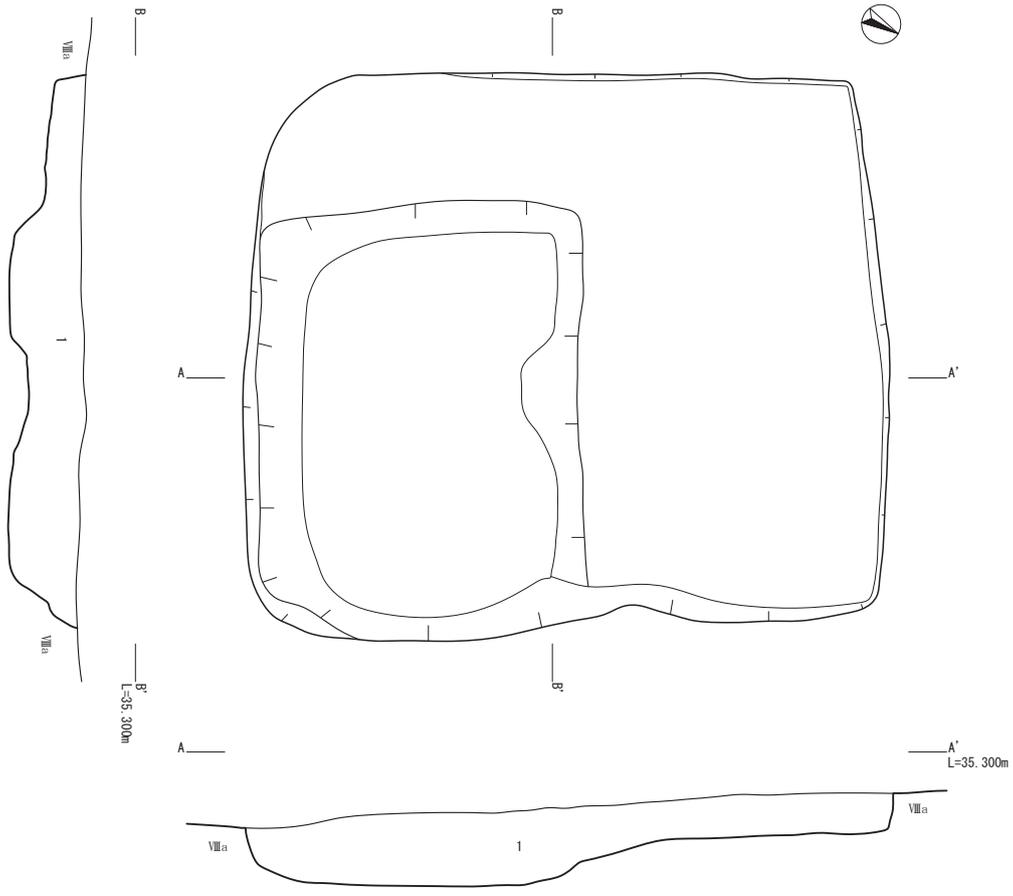


1: 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり, しまりあり。径1mm程度の白色バミスを少量含む。

土坑 26

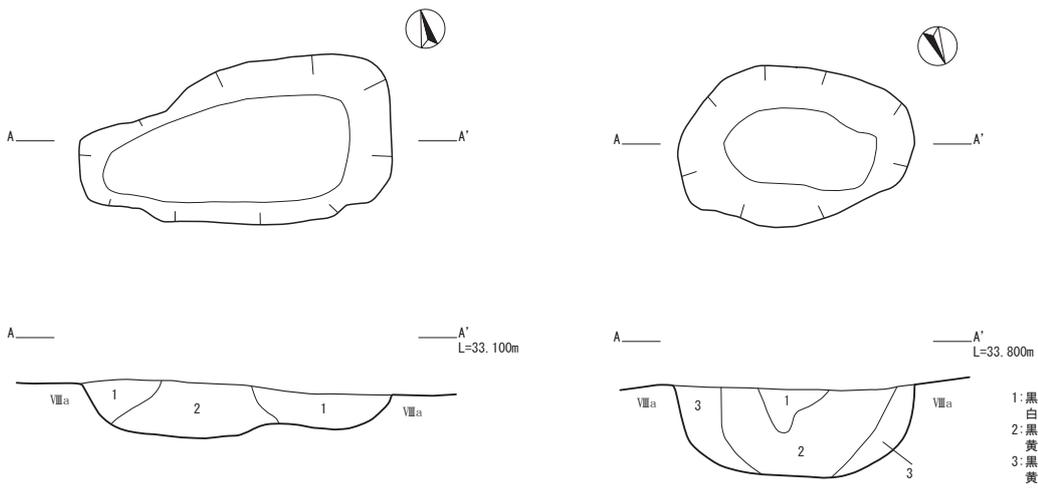


第134図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 7



1: 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性あり, しまり強い。白色粒と薩摩火山灰ブロックを極わずかに含む。

土坑 27



1: 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり, ややしまり強い。白色バミスと黄褐色バミスを極わずかに含む。
 2: 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり, しまりあり。黄褐色バミスと白色バミスを極わずかに含む。
 3: 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性あり, しまりあり。黄褐色バミスと白色バミスをわずかに含む。

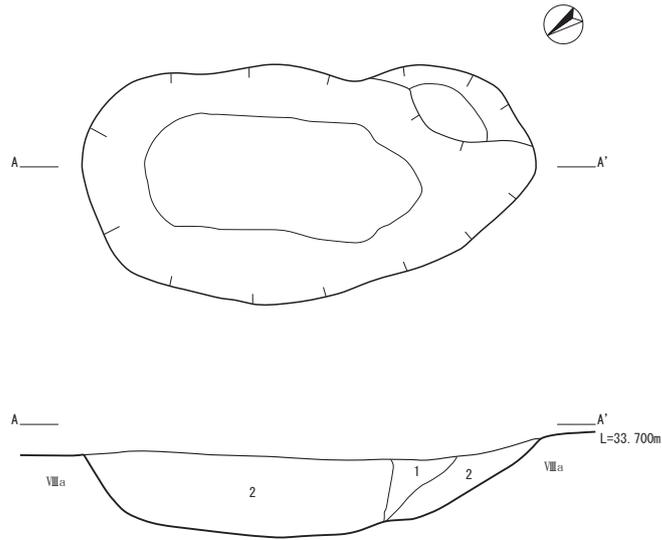
土坑 30

1: 黒色土 (7.5YR2/1) しまりあり。径1mm以下の白色バミスを少量含む。径5mm以下の黄色バミスをわずかに含む。
 2: 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり, しまりなし。1が少量混在する。下面から検出面までややまだらに見られる。

土坑 28

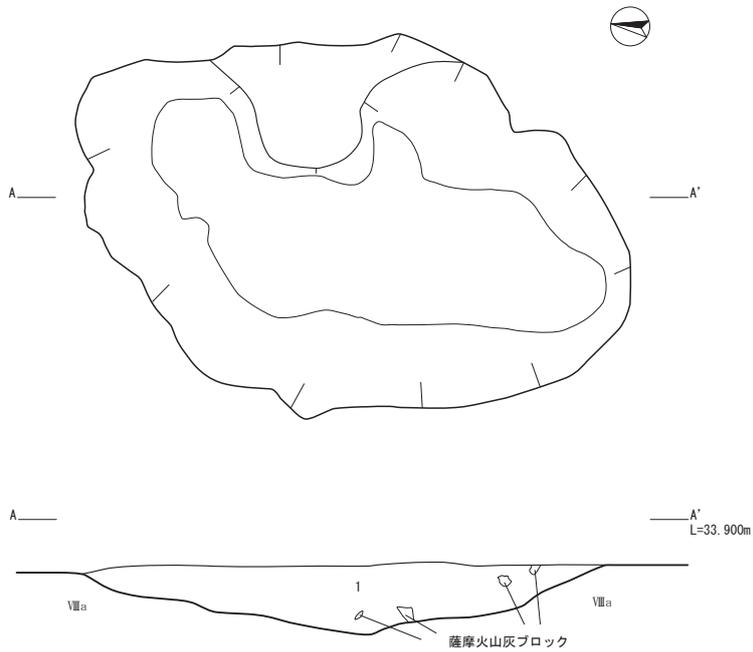


第135図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 8



- 1: 黒褐色土 (10YR2/2~10YR2/3) 若干粘性あり、しまり強い。黄橙色パミスを極わずかに含む。
 2: 黒褐色土 (10YR3/2) ~ 暗褐色土 (10YR3/3) の中間、粘性あり、しまりあり。IXa層に該当する土が混入している。

土坑 29

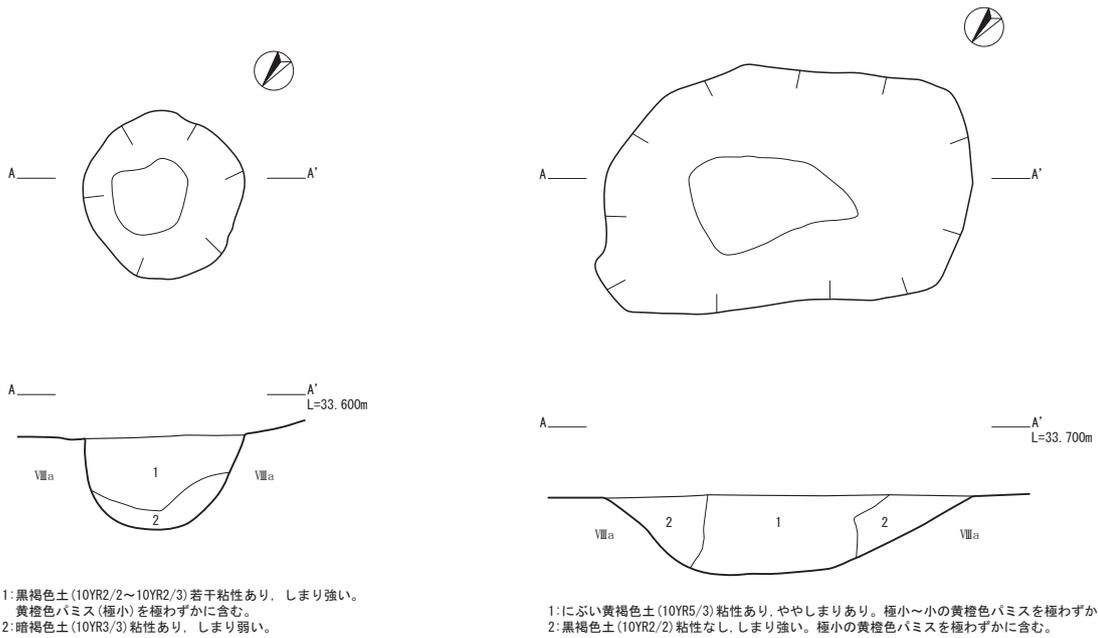


- 1: 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性あり、しまりあり。極わずかではあるが径1mm以下の極小白色粒、径1mm以下の極小炭化物、径5~20mm程度の薩摩火山灰を含む。

土坑 31



第136図 縄文時代早期VIIa層検出土坑 9



土坑 32

土坑 33



第137図 縄文時代早期VIIa層検出土坑10

第17表 縄文時代早期土坑

挿図 番号	遺構 番号	区	層	長さ (c m)		長軸方向	出土 遺物	備考
				長軸	短軸			
122	1	J 35	VII a	170	60	東西		連穴土坑 (ブリッジ残存)
	2	L 35	VII a	160	75	東西		連穴土坑 (ブリッジ残存)
123	3	L 33	VII a	165	65	東西		連穴土坑 (ブリッジ残存)
	4	K L 32	VII a	170	60	南北		連穴土坑 (ブリッジ残存)
124	5	L 31	VII a	160	75	北西 - 南東		連穴土坑 (ブリッジ残存)
	6	G 33	VII a	175	55	東西		連穴土坑 (ブリッジ残存)
125	7	J 28	VII a	200	65	東西		連穴土坑 (ブリッジ残存)
	8	J 27	VII a	175	65	東西		連穴土坑 (ブリッジ残存)
126	9	J 35	VII a	140	55	東西		(連穴土坑の可能性)
	10	L 35	VII a	185	55	東西		(連穴土坑の可能性)
127	11	L 33	VII b	150	40	東西		(連穴土坑の可能性)
	12	L 33	X	210	70	東西		(連穴土坑の可能性)
128	13	K 35	VII a	120	45	東西	石坂式	(連穴土坑の可能性)
	14	L 35	IX	125	70	北東 - 南西		(連穴土坑の可能性)
129	15	K 32	VII a	150	55	南北		(連穴土坑の可能性)
	16	K 31	VII a	165	55	南北		(連穴土坑の可能性)
130	17	L 32	VII a	115	50	北東 - 南西		(連穴土坑の可能性)
	18	L 32	VII a	120	65	南北		(連穴土坑の可能性)
131	19	D 34	VII a	105	80	—		
	20	D 34	VII a	90	65	—		
132	21	G 35	VII a	105	75	—		
	22	H 35	VII a	110	70	—		
133	23	I 33	VII a	175	125	—		
	24	J 34	VII a	105	55	—		
134	25	K 32	VII a	145	120	—		
	26	L 33	VII a	250	125	—		
135	27	G 27	VII a	170	145	—		
	28	C 30	VII a	80	40	—		
136	29	C 29	VII a	120	60	—		
135	30	C 29	VII a	60	40	—		
136	31	C 28	VII a	140	95	—		
137	32	D 29	VII a	45		—		
	33	D 29	VII a	95	60	—		

2 遺物

(1) 土器

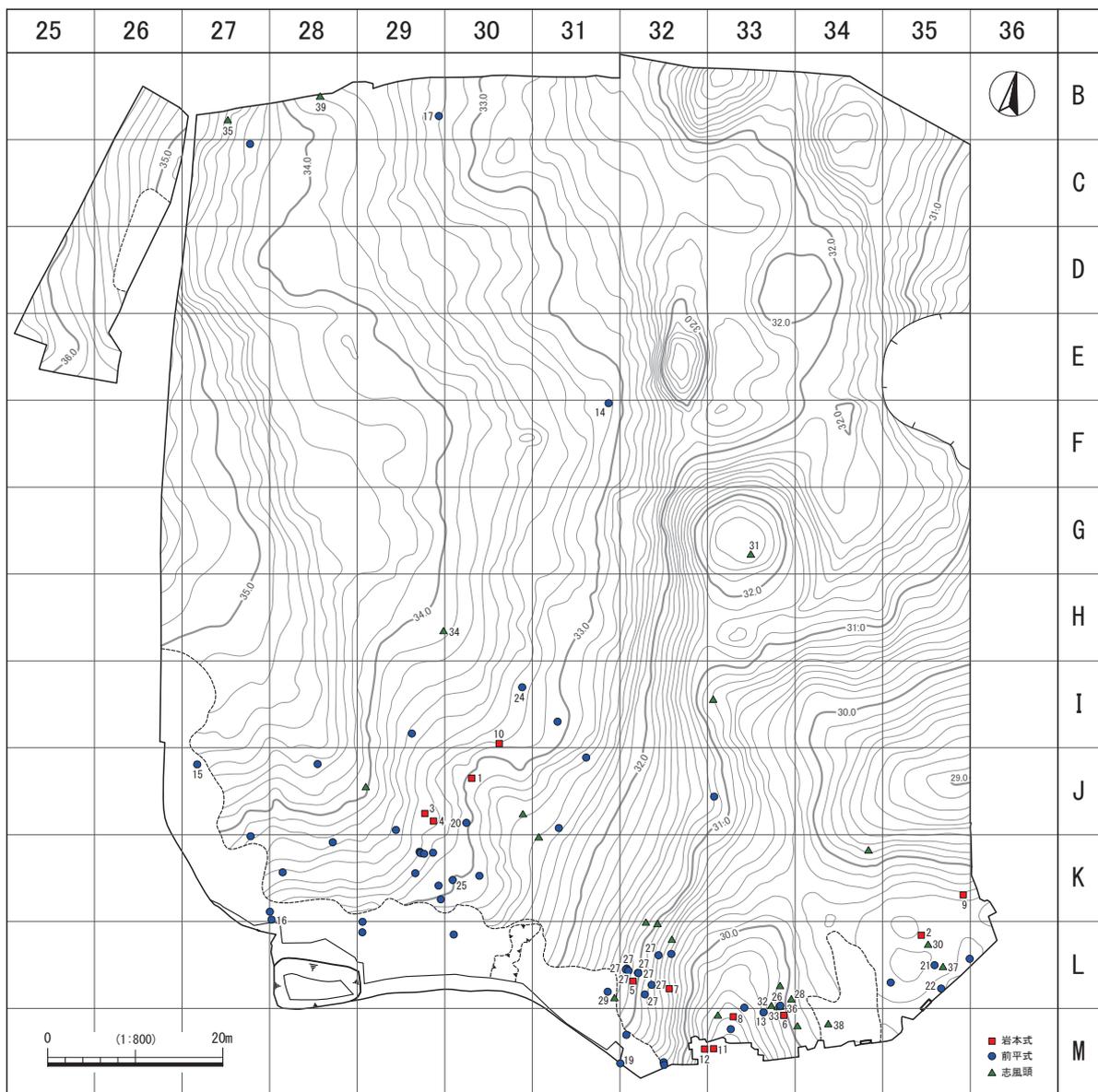
1 類土器 (第138・139図 1~12)

1 類土器は、わずかに外傾する口縁部を持つ円筒形土器である。破片でしか出土していないため、全体の器形は分からないが、深鉢型を呈すと考えられる。口唇部は内傾もしくは平坦に整形される。口唇部から口縁部上端の、いわゆる角の部分に刺突文を施すものが見られ、それらには口縁部が鋸歯状を呈するものが見られる。文様は口縁部上端に刺突文を施す。器面調整は丁寧なナデ調整、もしくは貝殻条痕調整後にナデ調整を行なっている。ナデ調整が弱く、貝殻条痕調整が薄く残るものも見られる。1 類土器の胎土はどれも非常によく似て雲母の混入が見られない点が挙げられる。出土した割合で、同様の

混和材を含んでおり、特徴としては調査区の南側のみから出土しており、この出土状況は縄文時代草創期土器の出土域と重なる。

1 は口縁部上端に縦位の貝殻腹縁による刺突文と、殻頂部を用いた貝殻刺突文の2種類の刺突文を施す土器である。口縁部から口唇部にかけても殻頂部を用いた刺突文を1列施しており、その影響で口唇部がわずかに小波状を呈している。口縁部上位と無文帯の境目には横位の貝殻腹縁による刺突文が1条施されている。器面調整は内外ともにナデ調整が行われており、外面のナデ調整には工具痕が残っているため工具ナデ調整が行われたと考えられる。内面口縁部上端は強く指押さえが行われており、大きく凹む部分も見られる。

2 は口唇部が欠落しているが、1と同様の文様や器面



VIII層上面コンタ図

第138図 1~3類土器分布図

調整が施されている土器である。施文原体の貝殻が異なるようであり、1と比較してやや差異が見られる。また、器壁の厚さも若干異なる。1と同一個体なら途中で施文原体が変わった可能性が考えられる。

3は口縁部上端に殻頂部を用いた刺突文が3列施される土器である。1列目の刺突文は口縁部上端から口唇部にかけて施されている。また、わずかにではあるが縦位の貝殻腹縁刺突文も確認でき、1や2と同様に文様が施されると考えられる。無文帯との境目には横位の貝殻腹縁刺突文が1列施されている。器面は丁寧な工具ナデが行われており、口唇部も丁寧にナデられている。この口唇部の丁寧なナデ調整が1・2と異なることから別個体と考えられる。内面は器面が大きく剥落している。

4も1～3と同様の文様や器面調整が施される土器である。

5は口唇部及び口縁部上端に貝殻刺突文を施す土器である。口縁部上端の貝殻腹縁を用いたと考えられる刺突文は右上から左下へ斜位に施されている。無文帯との間に特に区画は設けていないが、刺突文の下端がきれいに揃っているため、刺突文を施した後に、胴部の器面調整を行なったと考えられる。内外面ともに工具ナデが行われている。口唇部もナデ調整が行われ、内傾する。

6は口縁部上端に1列の縦位貝殻腹縁刺突文を施す土器である。口唇部にも刺突文が施されているが、施文原体は不明である。口唇部の刺突文はやや深く施されるため、口唇部は見た目鋸歯状を呈している。器面は内外面ともに工具ナデ調整が行われている。口縁部上端の刺突文直下が、やや凹み文様の下端が揃っているため、刺突文を施文後に器面調整を行なったと考えられる。1と同様に内面口縁部上端は指押さえが行われており、やや凹む。

7は口縁部上端から口唇部にかけて1列の縦位貝殻腹縁刺突文を施す土器である。外面の器面調整には部分的に貝殻条痕が残り、貝殻条痕調整後にナデ調整を行なったと考えられる。内面は丁寧なナデ調整が行われている。

8は波状口縁を呈す土器である。摩滅が激しく施文原体は不明であるが、口縁部上端に1列の縦位刺突文が施されている。また、部分的に口縁部上端から口唇部にかけても刺突文が施されているようである。内外面及び口唇部に工具ナデ調整が行われている。

9は口縁部上端に1列の縦位貝殻腹縁刺突文を施す土器である。口縁部上端から口唇部にかけても刺突文が施されており、口唇部がわずかに鋸歯状を呈している。口縁部上端の文様直下は大きく凹み、明らかに文様を施文後に無文部に器面調整を行なったことが確認できる。器面調整は内外面ともに貝殻条痕調整後にナデ調整が行われており、部分的には丁寧に貝殻条痕をナデ消しているが、貝殻条痕調整が残る部分も多く、ムラが目立つ。口唇部もナデ調整が行われている。

10は口縁部上端及び、口縁部上端から口唇部にかけて斜位の刺突文を施す土器である。施された刺突文の内部にわずかに節が確認できるため、施文は貝殻を用いているのが分かるが、刺突文が細いため、特に口唇部にかけての文様はキザミのようにも見える。破片資料ではあるが、破片の右側では口縁部上端と、口唇部にかけての刺突文がきれいに1列ずつ施されているが、破片の左側は2列の刺突文が一体化している。これはただ単に雑に文様を施文しているのではなく、部分的に意図してそのような施文を行なっている可能性も考える必要がある。器面調整は外面は工具ナデ調整、内面は丁寧なナデ調整が行われている。

11は欠損が多い資料であるが、口縁部上端から口唇部

第18表 1類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様(口縁部)	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第139図	1	J30	VIIb	1類土器	貝殻刺突文	工具ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい黄橙	良	
	2	L35	VI		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	3	J29	VIIa		貝殻刺突文	工具ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	4	J29	VI		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	5	L32	VIIa		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	6	M33	VIIa		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	7	L32	VI		貝殻刺突文	貝→ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	8	M33	VIIa		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		褐色	黒褐色	良	
	9	K35	VIIa		貝殻刺突文	貝→ナデ	貝→ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	にぶい橙色	良	
	10	I30	VIIa		貝殻刺突文	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい橙色	良	
	11	M33	VIIb		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	石英粒やや大
	12	M32	VIIb		貝殻刺突文	貝→ナデ	貝→ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	

にかけて1列の縦位貝殻腹縁刺突文を施す土器である。器面調整は内外面ともにナデ調整を行なっている。出土した1類土器はどれも似たような胎土を持つが、この11だけは混入される石英の粒の大きさが他と比較して大きいのが特徴である。

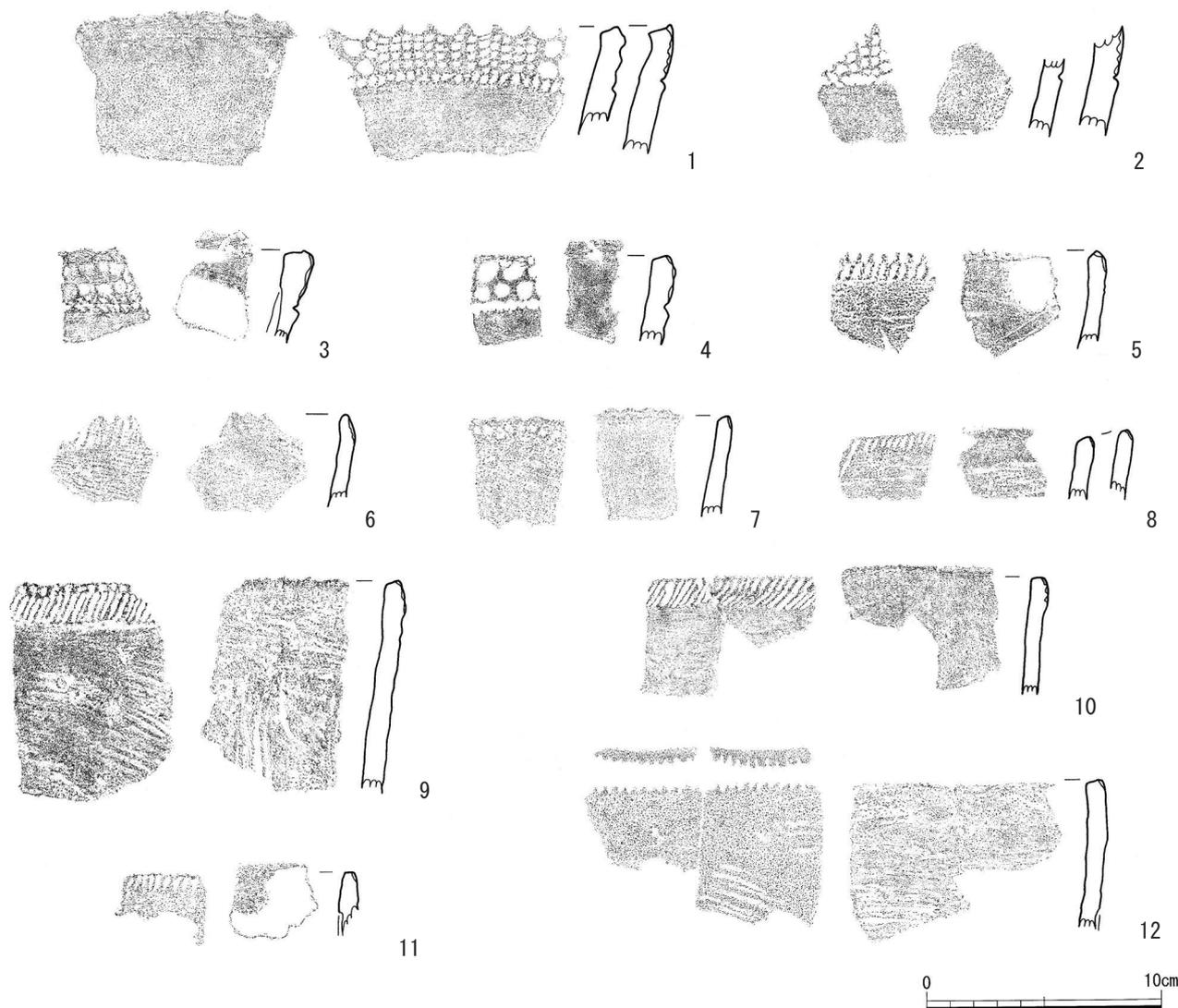
12は口縁部上端から口唇部にかけて1列の貝殻刺突文を施す土器である。刺突文内部にわずかに節が確認できる。器面調整は内外面ともに、貝殻条痕調整後にナデ調整が行われており、わずかに貝殻条痕が確認できる。口唇部にもナデ調整が行われている。

2類土器 (第138・140・141図 13~26)

2類土器は、平底の底部を持ち、口縁部に向かいわずかに外傾する器形を持つ深鉢型土器である。口唇部は内傾するもの、丸みを持つもの、平坦に整形されるものが見られる。文様は口縁部上端に棒状工具による刺突文を

施し、口縁部上端から口唇部にかけて、もしくは口唇部に刺突文や押圧文を施している。器面調整は貝殻条痕調整が行われており、貝殻条痕調整は斜位や横位方向に行われている。口唇部が内傾もしくは丸みを持ち、胴部の器面調整が主に斜位の貝殻条痕調整により行われるものを2a類土器、口唇部を平坦に整形し、胴部の器面調整が横位の貝殻条痕調整により行われるものを2b類と細分した。2類土器は調査範囲の南側を中心に出土しており、中心から北側には、極少量を除き、ほとんど出土していない。

13~18は2a類土器である。13は口縁部上端に縦位の刺突文を1列施す土器である。口唇部にも刺突文を施す。胴部外面には横位の貝殻条痕調整が行われている。胴部の貝殻条痕調整が浅く、1類の可能性も考えられたが、器面が全体的に摩滅しているため2類とした。内面はナデ調整が行われている。上述のとおり器面が摩滅してい



第139図 1類土器

るため、刺突文の施文原体は不明である。

14は口縁部上端から口唇部にかけて棒状工具により刺突文が施される土器である。外面は斜位の貝殻条痕による器面調整、内面は工具ナデによる器面調整が行われている。他の2類土器と比較して全体的に施文が粗く、内面の器面調整も雑である。また、土器の色調も他の2類と比較して暗い色調であり、異なっているのが特徴である。

15は口縁部上端及び、口縁部上端から口唇部にかけて2列の刺突文を施す土器である。刺突文ははっきりとは分からないが貝殻の殻頂部で行われていると考えられる。外面は横位の貝殻条痕による器面調整、内面は工具ナデによる器面調整が行われている。内面の器面調整は口縁部上端のみ横方向に、それよりも下位は斜位方向に調整が行われている。15はアカホヤ火山灰よりも上位のV a層より出土しており、本来はVII層にあったものが何らかの原因で浮き上がったと考えられる。後述の17も同様である。

16は口唇部が丸みを帯びる土器である。口縁部上端に2列の棒状工具による刺突文を施し、胴部外面には斜位方向の貝殻条痕調整が施される。内面は工具ナデによる器面調整が行われている。

17も口唇部が丸みを帯びる土器である。部分的に口唇部に1条の沈線文のようなものが確認できるが、意図して施した文様かどうかははっきりしない。口縁部上端に2列の棒状工具刺突文、その下位に順に横位の貝殻条痕調整、斜位の貝殻条痕調整が行われている。貝殻条痕調整は先に斜位の調整が行われ、その後、刺突文との境界に横位の調整が行われたことが文様の重なりから分かる。内面は全体的に斜位方向の工具ナデ調整が行われている。

18は口縁部上端に2列の棒状工具刺突文、外面器面調整を斜位の貝殻条痕調整、内面器面調整を工具ナデ調整で行う土器である。

19～23は2b類土器である。19は口縁部上端に1列の棒状工具刺突文を施し、胴部には横位の貝殻条痕調整が行われる。内面はナデ調整が行われている。外面の横位貝殻条痕調整の一部が曲線的に見える部分があり、次の3類土器の可能性も考えられるが、はっきりしないため2b類土器とした。

20は平坦に整形した口唇部に棒状工具によると考えられる押圧文を施す土器である。刺突文ほど文様ははっきりせず、施文原体を押し当てている様に見えるため、ここでは押圧文とする。21～23も同様の押圧文が口唇部に確認できる。刺突文の下位にはわずかではあるが横位の貝殻条痕調整が確認できる。内面は工具ナデ調整が行われている。

21は口縁部上端に2列の棒状工具刺突文が施される土器である。文様の形状から見ると、先に下段の刺突文か

ら施されている可能性が考えられる。刺突文の下位には横位の貝殻条痕調整が行われているが、刺突文直下の2条の貝殻条痕のみ深く調整が行われており、刺突文との区画の意味で意図的にそのようにした可能性が考えられる。内面は工具ナデ調整が行われている。部分的に調整方向が縦位方向になり、器面の薄さから考えてケズリが行われた可能性も考えられる。

22も21と同様の文様・器面調整を呈す土器である。刺突文直下の2条の貝殻条痕のみが強調して施されている。土器の色調、口唇部の押圧文の施され方から21とは別個体の土器片と判断できるが、非常に類似した土器である。内面調整は工具ナデ調整が行われているが、口縁部上端のみ貝殻条痕調整後にナデ調整をしたと考えられ、貝殻条痕の筋が薄く残存しているのが確認できる。

23は口唇部が破損している2類土器である。他の2類土器と違い、細めの棒状工具により刺突文が数列施されている。刺突文の施され方は雑であり、一部は文様が潰れてしまっている。刺突文は貝殻条痕調整後に施された可能性があり、刺突文列の間に横位の貝殻条痕が確認できる。外面は横位の貝殻条痕調整、内面はナデ調整が行われている。

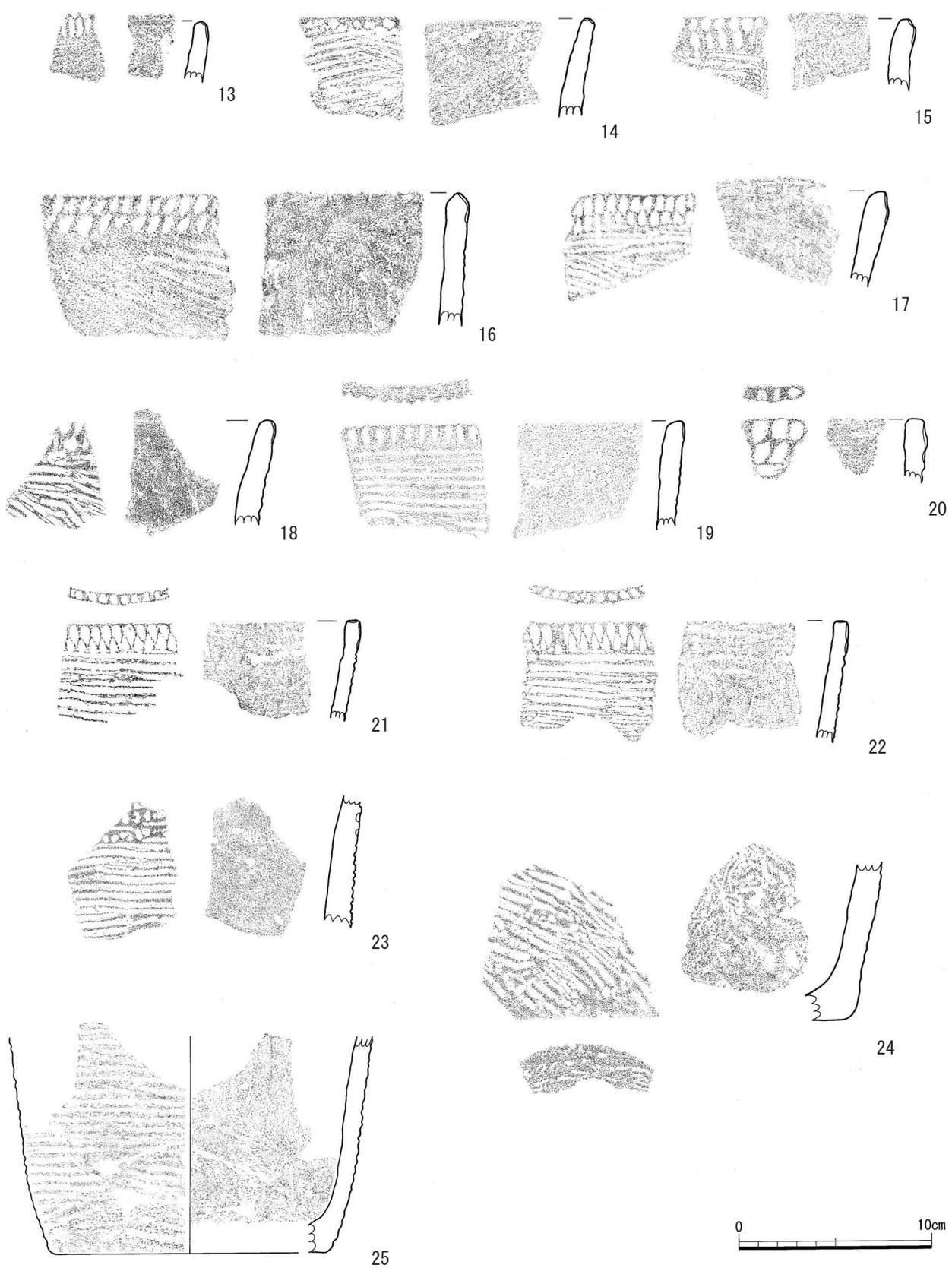
24～26は2類土器の胴部から底部の資料である。24は外面に粗めの斜位貝殻条痕調整を行なう土器である。貝殻条痕の施され方から2a類の底部である可能性が高い。内面は斜位方向の工具ナデ調整が行われている。胎土に特徴があり、他の2類土器と比較して、混和材の量が多く、また粒子が大きいのが特徴である。底部の器壁の厚みは胴部と同等である。

25は胴部に横位の貝殻条痕調整が行われている土器である。底部付近になると一部斜位方向の調整が見られる。内面は工具ナデ調整が行われている。底部の器壁は厚く、胴部の器壁の約1.8倍の厚みを持つ。

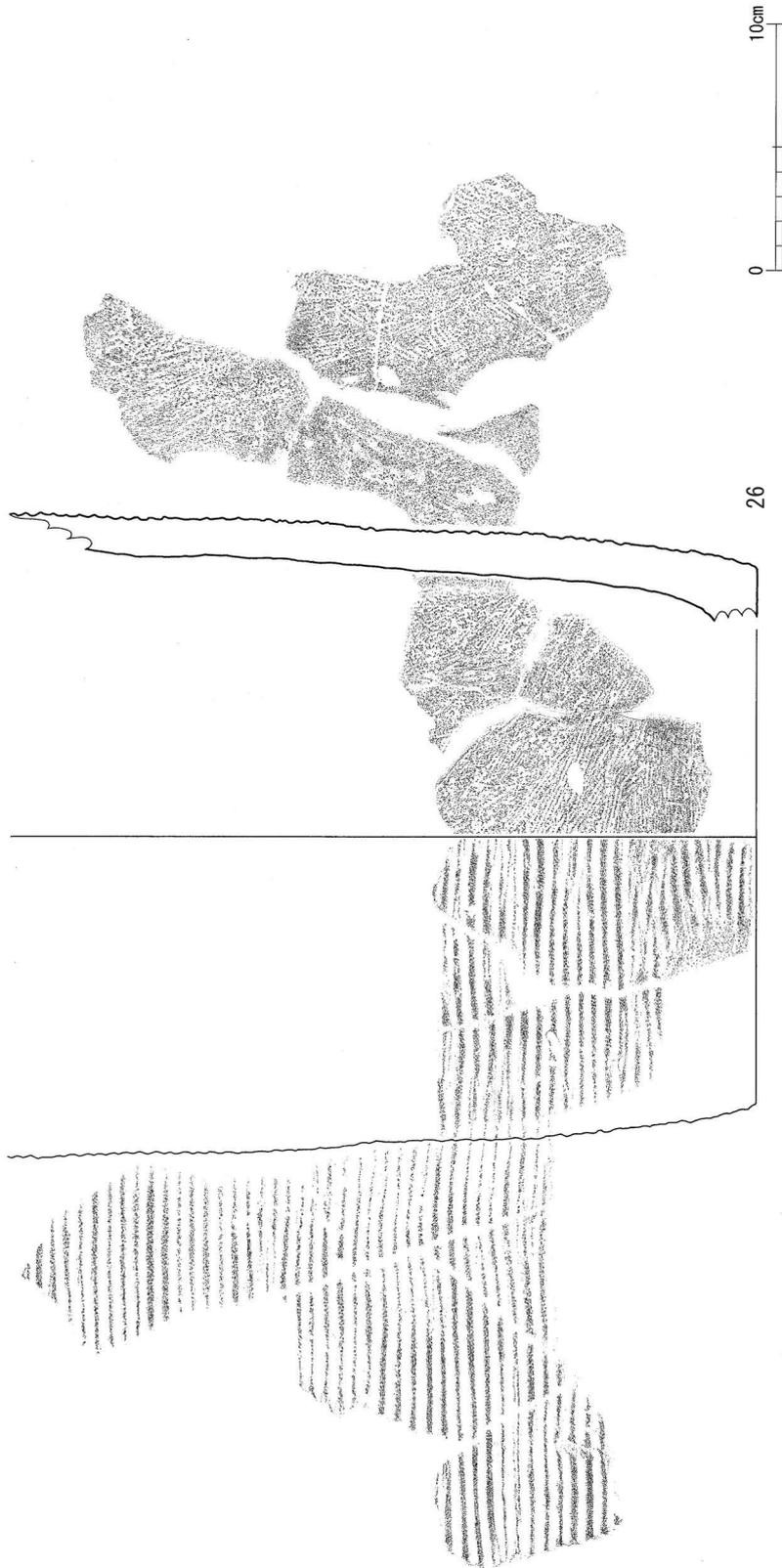
26は大型の2類土器である。底径21.9cmを測り、残存している部分で器高は約30cmとなる。外面胴部中ほどから底部まで、横位の貝殻条痕調整が施されている。内面はケズリ気味の工具ナデ調整が縦位・斜位方向に行われている。胴部の器壁は1.5cmと厚く、底部も同等に厚い。

3類土器 (第138・142図 27～37)

3類土器は底部片こそ出土していないが、緩い波状口縁を呈す角筒形土器と、円筒形土器が出土している。口縁部片は1点のみ出土しており、角筒形土器の口縁部である。角筒形土器の文様は基本的には2類土器と同様に、口縁部上端に刺突文を施し、外面胴部には文様を兼ねると考えられる貝殻条痕調整が施されている。2類と異なる点は、胴部貝殻条痕調整の上から、沈線文・流水文・刺突文等が施される点である。内面調整はケズリが行われるものが多く、そのせいか2類と比較して器壁が薄い



第140図 2類土器 1



第141図 2類土器2

第19表 2類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様(口縁部)	器面調整		胎土			色調		焼成	備考	
						外面	内面	石英	長石	角閃石	霏母	その他			外面
第140図	13	M33	VIIb	2類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	良	
	14	F31	VI	2類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	暗褐色	にぶい黄褐色	良	
	15	J27	Va	2類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	淡黄褐色	にぶい黄褐色	良	
	16	K28	VI	2類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	褐色	褐色	良	
	17	B29	IVa	2類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	
	18	J27	VIIa	2類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	褐色	褐色	良	酒和材多
	19	M32	VI	2b類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	にぶい赤褐色	明赤褐色	良	
	20	J30	VIIb	2b類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	刺突文(棒)	刺突文(棒)	良	
	21	L35	VIIa	2b類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	刺突文(棒)	刺突文(棒)	良	
22	L35	VIIa	2b類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	刺突文(棒)	刺突文(棒)	良		
23	I30	VIIa	2類土器	刺突文(棒)	貝殻条痕	ナデ	○	○	○	○	刺突文(棒)	刺突文(棒)	良		
24	K30	VIIa	2類土器	—	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	—	刺突文(棒)	刺突文(棒)	良	
25	L33	VIIb	2類土器	—	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	—	刺突文(棒)	刺突文(棒)	良	
26	L32	VIIa	2類土器	—	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○	○	—	刺突文(棒)	刺突文(棒)	良	

ものが主体的である。円筒形土器は胴部片のみが出土している。角筒形土器と同様に、胴部の貝殻条痕調整の上から、沈線文・流水文・刺突文等が施されている。3類土器の出土分布域は2類土器の分布にほぼ重なる。

27～31は角筒形土器である。27は緩い波状口縁を呈す角筒形土器である。口唇部は平坦に整形され、貝殻腹縁を使った押圧文が施されている。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が1列施され、胴部には横位の貝殻条痕調整が行われている。横位貝殻条痕調整の上には、貝殻を用いた縦位の沈線文や、斜位沈線文が「X」字状に施されている。また、土器の角部には横位貝殻刺突文が施されている。内面はケズリ、その後ナデ調整が行われている。

28・29・30はどれも若干斜位気味の横位貝殻条痕調整の上から、貝殻を用いて縦位方向の流水文を施す土器である。内面はどれも縦方向のケズリ、その後ナデ調整が行われている。

31は角筒形土器の角部片である。若干丸みを帯びた角部と胴部に、貝殻を用いて縦位方向の流水文が施されている。内面はケズリ後ナデ調整である。29・30・31は胎土中に白色の粒子が混ざる。

32～36は円筒形土器である。32は胴部の横位貝殻条痕調整の上から、貝殻を用いた斜位沈線文と、縦位方向に貝殻刺突文が施される。横位貝殻条痕調整を含めて、施文はやや粗い。内面は縦位方向の貝殻を用いたケズリ、その後ナデ調整が行われているが、ナデ消しとまではいかず、貝殻条痕が残る。胎土中には赤色の粒子が混ざる。

33は横位の貝殻条痕調整の上から、貝殻を用いて斜位の沈線文が施されている。内面は工具ナデが行われている。

34は横位の貝殻条痕調整の上から、貝殻を用いた斜位の沈線文と、横位貝殻刺突文が施されている。内面は工

具ナデのように見えるが、凹凸が激しく、ケズリ後ナデ調整が行われていると考えられる。

35は横位の貝殻条痕調整の上から、横位貝殻刺突文が施されている。内面は丁寧にナデ調整が行われているが、その前にケズリが行われている様である。

36・37は器形のはっきりしない小破片である。ともに横位の貝殻条痕調整の上から、貝殻を用いた沈線文や波状文が施され、内面はケズリ後ナデ調整が行われている。器壁の厚さ等から、いずれも角筒形土器の可能性が高い。36の胎土中には白色の粒子が混ざる。

4類土器（第143～146図 38～52）

4類土器は小破片のみが22点出土した。そのうち15点を図化している。3類と同じく角筒形土器と円筒形土器の2種類が出土している。3類土器と異なる点は、文様を連続した貝殻刺突文のみで施す点である。また、角筒形土器は地文の貝殻条痕調整がナデ消され、器壁が3類よりもさらに薄くなっている。円筒形土器も貝殻条痕調整がナデ消されているが、なかには貝殻条痕調整が残るものも見られる。角筒形土器・円筒形土器ともに、楔形の貼り付け突帯が施されるものも見られる。口縁部上端、胴部に連続貝殻刺突文で文様を施すものを4a類、口縁部上端のみに連続貝殻刺突文で文様を施し、胴部には楔形の貼り付け突帯のみ施すものを4b類、4a類と類似するが胴部の連続貝殻刺突文を密に施すものを4c類とし細分した。

38～43は4a類土器である。38～40は角筒形土器である。38は角筒形土器の口縁部片である。緩い波状口縁を呈し、平坦もしくはやや外傾気味に整形された口唇部には細かな刻目が施される。口縁部上端には横位の連続した貝殻刺突文が3条施されている。小破片であるため、

第20表 3類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第142図	27	L33	VIIa	3類土器	貝殻刺突文ほか	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	橙色	良	角筒形土器
	28	L33	VIIa		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		褐色	にぶい黄褐	良	角筒形土器
	29	L33	VIIb		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良	角筒形土器
	30	H29	VI		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	黒褐色	にぶい黄褐	良	角筒形土器
	31	G33	VIIb		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	暗褐色	にぶい褐色	良	角筒形土器
	32	L31	VIIb		沈線文・刺突文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	橙色	明赤褐色	良	円筒形土器
	33	L35	VIIa		沈線文	貝殻条痕	工具ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	暗褐色	良	円筒形土器
	34	L35	VI		沈線文・刺突文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	円筒形土器
	35	M33	VI		刺突文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	円筒形土器
	36	B28	VI		沈線文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	にぶい褐色	にぶい黄褐	良	(角筒形土器)
	37	M34	VIIa		流水文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	黒褐色	良	(角筒形土器)

口縁部上端以下の文様は確認できない。器面調整は、外面は貝殻条痕調整後ナデ調整が行われており、極わずかに貝殻条痕の痕跡が確認できる。内面はナデ調整が行われている。器壁は4mmと薄い。

39は角筒形土器の口縁部片である。平坦に整形された口唇部はやや内傾しキザミが施される。口縁部上端には3条の横位貝殻刺突文が施され、その下位には幅2mm程度の精緻な楔形突帯が張り付けられている。3条目の横位貝殻刺突文の上に貼り付け突帯が施されていることから、突帯が後から施されたことが分かる。貼り付け突帯の両側には沈線文が確認できる。器面調整は内外ともにナデ調整が行われている。

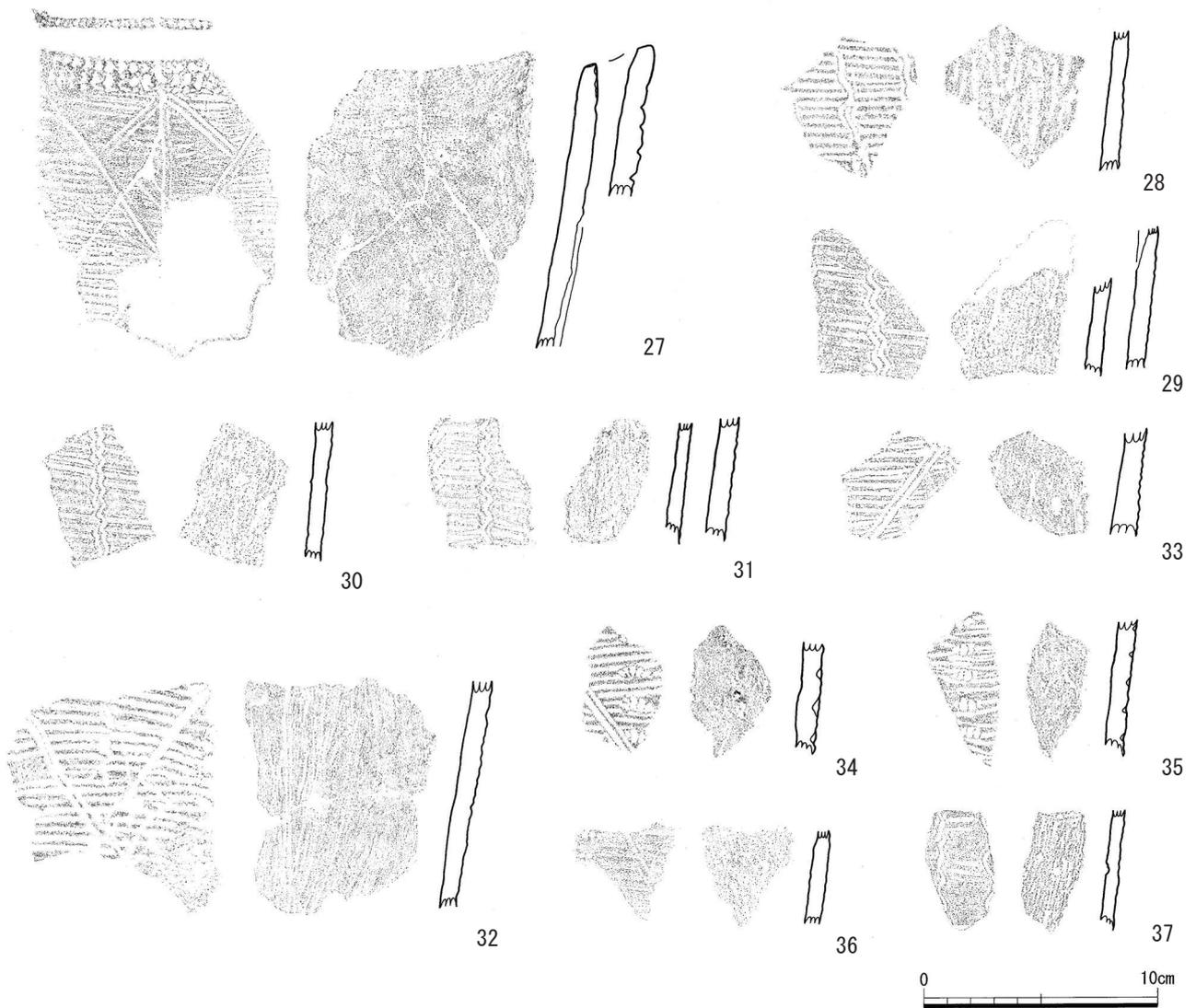
40は角筒形土器の胴部片である。楔形突帯が張り付けられており、その両側及び周囲に縦位及び斜位の貝殻刺突文が施されている。器面調整は、外面は丁寧なナデ調整が行われているが、うっすらと貝殻条痕が確認できる

ため、貝殻条痕調整後にナデ調整が行われたと考えられる。内面器面調整はナデ調整が行われている。器壁の厚さは4mmと薄い。胎土中に雲母が混ざるのが特徴である。

41～45は円筒形土器である。41・42は円筒形土器の口縁部片である。41は摩滅が激しく口唇部の文様は確認できない。42は平坦に整形された口唇部に刻目を施している。41・42ともに口縁部上端には横位の連続貝殻刺突文が3条施されている。41の胴部には縦位・斜位の貝殻刺突文が施されている。器面調整は41・42ともに、内外ともナデ調整が行われている。

43～45は円筒形土器の胴部片である。43には縦位の連続貝殻刺突文が施されている。器面調整は、外面は斜位の貝殻条痕調整がはっきりと行われている。内面はケズリ後ナデ調整が行われている。胎土には3類に土器にも見られた白色の粒子が混ざる。

44の器面は特に外面が摩滅しており、楔形突帯の痕跡



第142図 3類土器

は確認できるがはっきりとはしない。ただ、楔形突帯の両側に細かな円形の刺突文が施されているのが確認できる。この楔形突帯の両側に施される刺突文は40でも確認できる。文様は器面の摩滅が激しいため一部分しか確認できないが、縦位の連続貝殻刺突文が施されている。器面調整は、内外面ともにナデ調整が行われている様である。器壁の厚さは3mmと薄い。胎土中に雲母が混ざるのが特徴である。

45は外面の器面が激しく摩滅しているが、縦位の連続貝殻刺突文と、斜位の貝殻条痕調整が確認できる。器面が摩滅しているため、貝殻条痕調整後にナデ調整を行ったかは不明である。内面はナデ調整が行われている。

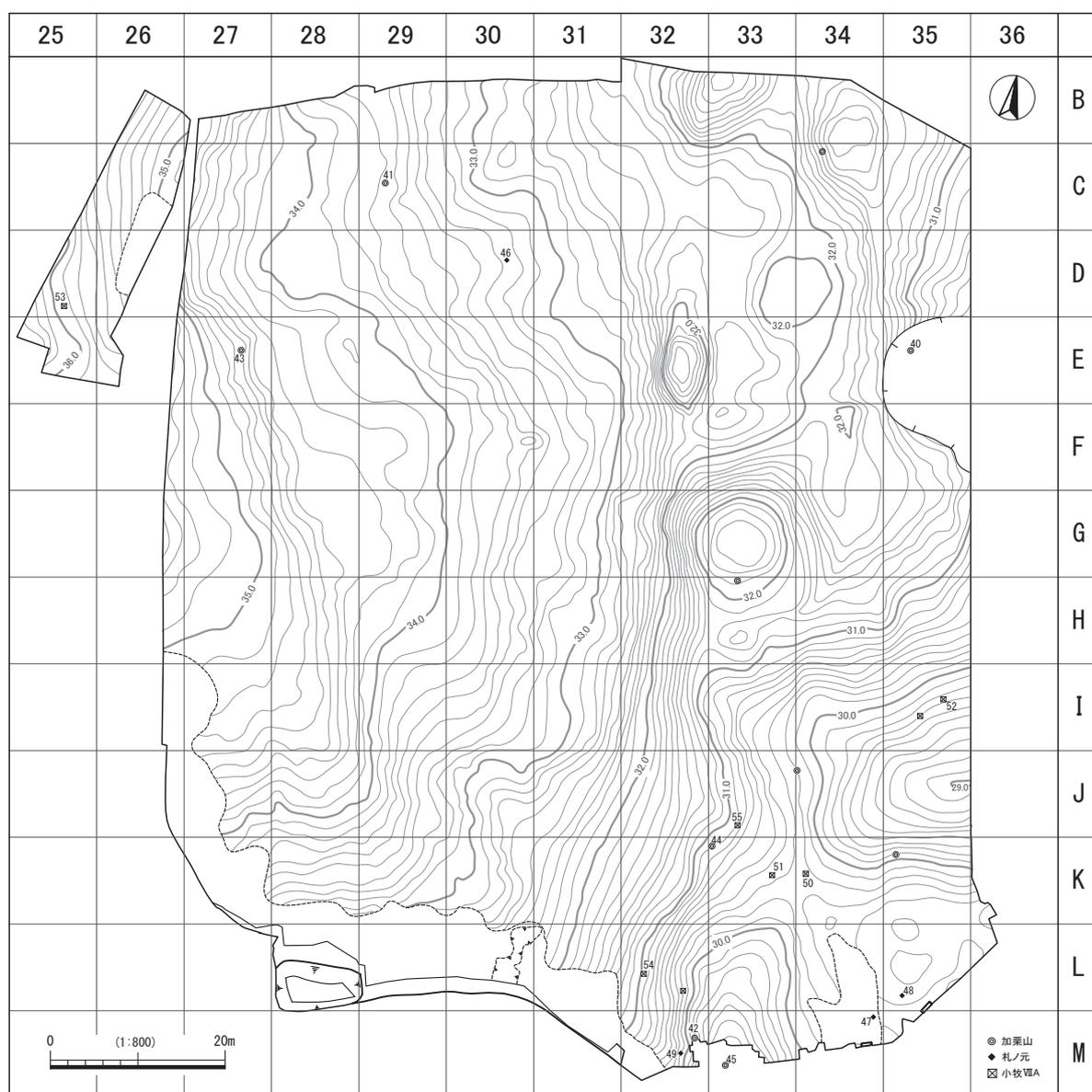
46~47は4b類土器である。張り付けられる突帯が4a類と比較すると、楔形というよりはややボテツとした

太めの形状の突帯となる。

46は口縁部片である。平坦に整形した口唇部に丁寧にキザミを施している。口縁部上端には横位の連続貝殻刺突文が2条施される。その下位には太めの楔形突帯が張り付けられている。器面調整は内外面ともに工具ナデ調整が行われている。

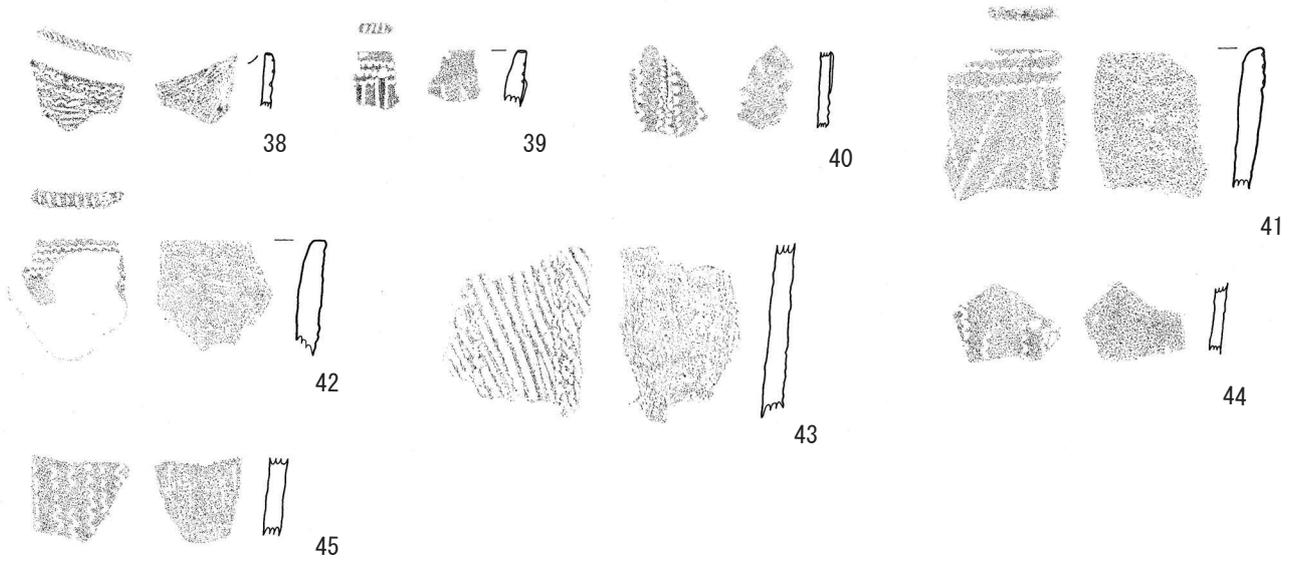
47は胴部片である。細めの楔形突帯が貼り付けられているが、他に文様は確認できない。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われており、内面には指頭圧痕も確認できる。胎土は石英の割合がやや多いのが特徴である。

48~52は4c類土器である。文様等の特徴は4a類土器に類似するが、主に縦位の連続貝殻刺突文を隙間なく器面全体に施すのが特徴である。器形は5点全て円筒形土器である。

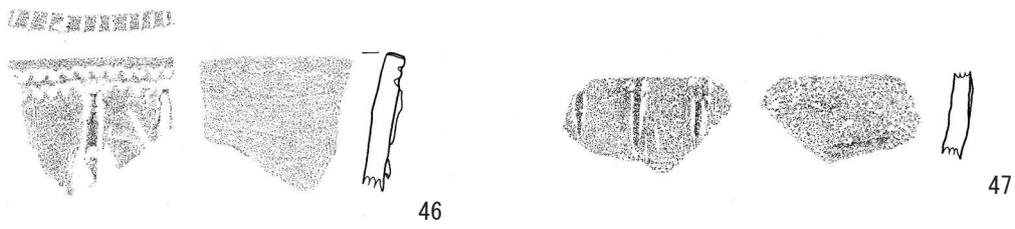


VIII層コンタ図

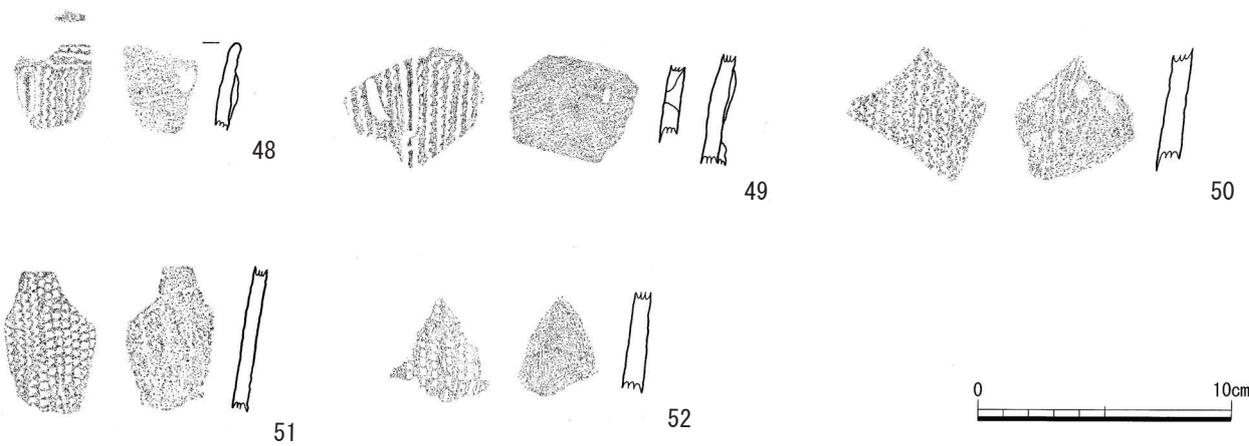
第143図 4類土器分布図



第144図 4 a 類土器



第145図 4 b 類土器



第146図 4 c 類土器

48は口縁部片である。丸みを帯びた口唇部には刻目が施されている。口縁部上端には、横位の連続貝殻刺突文が3条施されている。その下位には楔形突帯と、縦位の連続貝殻刺突文が隙間なく施されている。器面調整は内外ともにナデ調整が行われている。

49～52は胴部片である。49は楔形突帯と、縦位の連続貝殻刺突文が隙間なく施文されている。縦位の連続刺突文の上位にわずかではあるが、横位の貝殻刺突文が確認できることと、楔形突帯から口縁部に近い胴部片であることが分かる。また、縦長の擦り切り技法により作られた補修孔が確認できる。この補修孔は主に外面からのみ穿孔されているのが特徴である。器面調整は内外ともにナデ調整が行われている。

50・51は縦位の連続貝殻刺突文が隙間なく施される土器である。器面調整は外面とともにナデ調整、内面は50はケズリ後ナデ調整、51はナデ調整が行われている。

52は底部付近と考えられる資料である。縦位の連続貝殻刺突文の下位に、斜位の貝殻条痕もしくはキザミが確認できる。器面調整は外面がナデ調整、内面がケズリ後ナデ調整が行われている。

5 類土器 (第147～149図 53～68)

5 類土器は口縁部がやや外反する平底の円筒形土器である。文様は口縁部上端に貝殻刺突文もしくは貝殻押引文が施され、胴部には貝殻押引文もしくは貝殻条痕文が

施される。口唇部は平坦に整形されるものが多く、キザミが施される。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土は他の土器と比較して角閃石が目立たない。

53～59は口縁部上端に貝殻刺突文、胴部に貝殻押引文が施される土器である。

53は口縁部がほぼ1/2程度残存している土器である。口径は約26.7cmを測る。平坦に整形された口唇部はやや外傾し、キザミが施されている。口縁部上端には横位の貝殻連続刺突文が2条、その下位には貝殻を2回押し引いた貝殻押引文が間隔を空けて施されている。胴部には貝殻押引文が施されているが、摩滅が激しく下位にいくほど文様ははっきりとしない。胎土には石英・長石が多く含まれている。

54は口縁部から胴部下半までが残存している土器である。口径は約27cmを測り、53とはほぼ同じような口径を持つことが分かる。文様も53と同様の文様が施されている。胴部には押引文を連続して浅く施す条痕文風の押引文と、押引文を刺突しながら押引く、刺突文風押引文の2種類の貝殻押引文が施されている。補修孔が1か所確認でき、擦り切り技法により穿孔が施されている。穿孔は外面側からのみ行われており、内面側からの穿孔の痕跡は見られない。器面調整は内外面ともにナデ調整が施されているが、内面には指ナデの痕跡も確認できる。胎土には極わずかに雲母が確認できる。

第21表 4 類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第144図	38	E35	VIIa	4a類土器	連続貝殻刺突文	貝→ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	黒褐色	良	角筒形土器
	39	C29	VIIa		連続貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	明赤褐色	良	角筒形土器
	40	M32	VIIa		連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	貝→ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	角筒形土器
	41	M34	VI		連続貝殻刺突文	ナデ	不明	○	○	○		○		にぶい黄橙	褐色	良	円筒形土器
	42	L35	VI		連続貝殻刺突文	ナデ	工具ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	円筒形土器
	43	E27	VIIa		連続貝殻刺突文	貝殻条痕	ケズリ→ナデ	○	○	○		○	○	明赤褐色	黒褐色	良	円筒形土器
	44	K33	VIIa		連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		褐色	褐色	良	円筒形土器
	45	M33	VIIb		連続貝殻刺突文	貝殻条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい褐色	良
第145図	46	D30	VIIa	4b類	連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	工具ナデ	工具ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	明赤褐色	良	
	47	M32	VI		楔形貼付突帯	ナデ	ナデ	◎	○	○		○		極暗赤褐色	極暗赤褐色	良	石英が多い
第146図	48	K34	VI	4c類土器	連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	49	K33	VIIa		連続貝殻刺突文 楔形貼付突帯	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	褐色	良	
	50	I35	VI		連続貝殻刺突文	ナデ	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	51	D25	VI		連続貝殻刺突文	ナデ	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	52	L32	VI		連続貝殻刺突文	ナデ	ケズリ→ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	暗赤褐色	良	

55も平坦に整形されたやや外傾する口唇部にキザミが施される。口縁部上端には横位の連続貝殻刺突文が2条施され、その下位には斜位の貝殻刺突文がやや幾何学的に施される。貝殻刺突文は部分的には押し引かれる。胴部は摩滅が激しく文様がほとんど確認できないが、貝殻刺突文が連続して施されている。

56は55と同様の器形・文様を持つ土器である。胴部文様は連続した貝殻刺突文と貝殻押引文の2種類の文様が施されている。

57・58は口縁部上端に横位の貝殻連続刺突文が3条施されている。胴部には54と同様に2種類の貝殻押引文が施される。

59は外傾する丸みを帯びた口唇部にキザミが施される。口縁部上端には横位の貝殻連続刺突文が2条施されている。この横位の貝殻連続刺突文は他と比較してより直線的に施されている。胴部には貝殻押引文が施されているが摩滅が激しい。

60～64は胴部に貝殻条痕文が施される土器である。

60は口縁部から胴部下半までの資料である。平坦に整形された口唇部は外傾し無文である。口縁部上端には4条の横位連続貝殻刺突文、胴部には貝殻条痕文が施されている。胎土には1～2mm程度の白色の小礫が大量に含まれている。

61は口縁部に貝殻押引文2条、その下位に連続貝殻刺突文1条、さらにその下位に上段とは逆方向の貝殻押引文と3種類の文様が施されている。中段の貝殻刺突文を挟んで、上段と下段の貝殻押引文は施される方向も違うが、貝殻の大きさも異なる。また、下段の貝殻押引文に関しては、深い押引文が1条のみ施されていることから、施文原体である貝殻は原型を保っていない可能性が考えられる。胴部には貝殻条痕文が施される。胎土には雲母が含まれている。

62はわずかに口縁部が破損している胴部片である。こちらも63と同様に口縁部には3種類の文様が施され、胴部には貝殻条痕文が施される。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われているが、内面には指ナデの痕跡が確認できる。

63は丸みを帯びた口唇部に鋸歯状のキザミが施されている。口縁部上端には横位の連続貝殻刺突文が3条、胴部には貝殻条痕文が施されている。

64の口唇部は丸みを帯び無文である。口縁部上端には縦位の貝殻刺突文が連続して1列施されている。口縁部直下は剥落しているが、わずかに貝殻条痕文が確認できる。胎土は、他の5類土器と比較して白色の小礫が目立つ。

65は口縁部に連続貝殻刺突文を3条施し、その下位に縦位の貝殻刺突文を1列施している。胴部には文様は確認できない。

66～68は口縁部片のみの破片資料であり、胴部の文様は不明である。

66は2条の貝殻押引文の下位に、1条の連続貝殻刺突文が施されている。

67は口縁部に2種類の刺突文が施されている。特に2列目の刺突文は形状が半円状となっている。施文原体は不明であるが、棒状工具の可能性も考えられる。

68は底部片である。胴部には貝殻条痕文が施され、底部付近にはキザミが1列施されている。底面は丁寧なナデ調整が施されている。

6類土器（第150～162図 69～149）

6類土器は約600点の土器片が出土した。口縁部の形態から、6a類：口縁部が外反するものと、6b類：口縁部が外傾するものに分類した。口縁部が完全に直行するものは確認されていない。口縁部には貝殻刺突文を施し、胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。底部資料は少ないが、外面の底部付近には横位の貝殻条痕が施され、平底を呈している。

69～97は6a類土器であり、口縁部が外反する。

69は口唇部が欠けているが、口縁部資料であり、口縁部上端に「く」の字状に貝殻刺突文を施す土器である。胴部には貝殻条痕が確認できる。内面はナデ調整が行われている。

70～82は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施す土器である。

70～74の口唇部にはキザミもしくは刺突文が施される。71は斜位貝殻刺突文の下位に、横位貝殻刺突文が1条施され、胴部の綾杉状の貝殻条痕文との文様区画となっている。75・78も同様である。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。76は残存状況が悪いが、口縁部に「く」の字状に貝殻刺突文が施されていると考えられる。

79は口唇部が欠けているが、外反すると考えられる資料である。斜位の貝殻刺突文の下位には、綾杉状の貝殻条痕文が施されており、その文様から小型の貝殻を用いて施されたと考えられる。内面はナデ調整が行われている。

80は内面に段を設ける資料である。内面の口縁部付近は大きく削られている。他の部分は内外面ともに丁寧なナデ調整が行われている。

81は波状口縁を呈す口縁部片である。外反する口縁部は、胴部と比べやや肥厚、丸みを帯びる口唇部には刺突文が施されている。口唇部刺突文は貝殻を用いて施されていると考えられるが、摩滅が激しくはっきりしない。口縁部には斜位の貝殻刺突文が施されているが、「く」の字状になる可能性が高い。内外面ともに丁寧なナデ調整が行われている。

82は波状口縁を呈す口縁部から胴部にかけての資料で

ある。波頂部はやや肥厚し、口唇部には刺突文が施されている。口縁部には斜位方向の貝殻刺突文が施されているが、他の資料と違い、短い刺突文が2列施されているようである。胴部は無文であるが、わずかに貝殻条痕が確認できるため、貝殻条痕調整を行った後に、ナデ消し調整を行った可能性が考えられる。内面は丁寧なナデ調整が行われている。補修孔が1か所確認でき、内外面から回転穿孔が行われている。穿孔方向は水平ではなく、外面から内面へ、やや下方向に向けて穿孔が行われている。

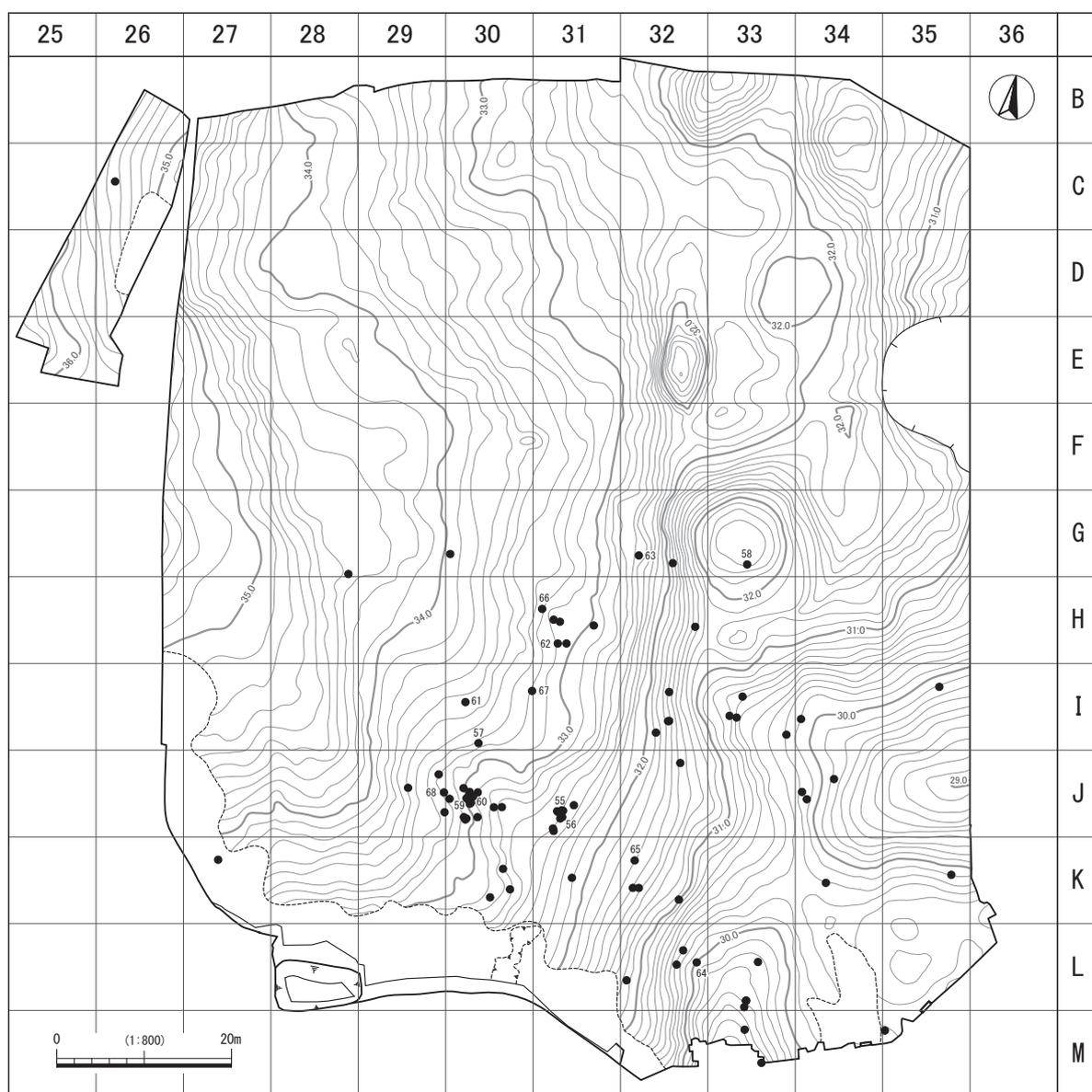
83～91は口縁部に横位の貝殻刺突文を施す土器である。4条～2条の貝殻刺突文が施される。

83は口縁部から底部まで確認できる資料である。口径31.2cm、器高22.7cm、底径22.2cmを測る。計算では満杯

の状態で12.83ℓが入る容量である。やや外傾する口唇部は平坦に整形され、文様は施されない。口縁部上端には3条の横位貝殻刺突文が施され、胴部には下向きの弧状の貝殻条痕文が底部まで施されている。確認できる範囲では4列ほど施されているようである。底部は一部しか残存していないが、平底を呈する。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われており、特に外面のナデ調整は非常に丁寧に行われている。

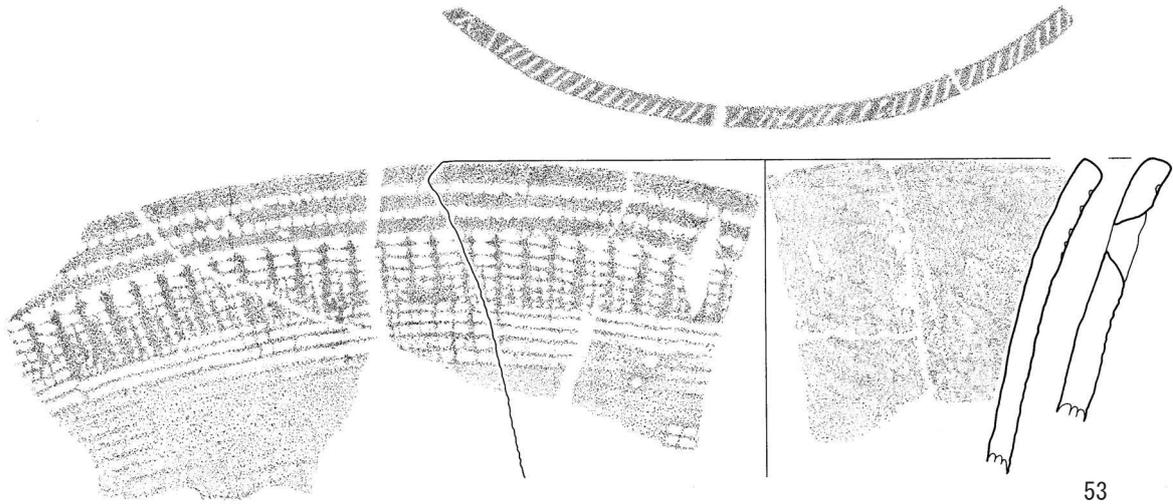
84は83と同一個体の口縁部片である。補修孔が1か所確認でき、縦方向の擦り切り技法による穿孔が行われている。穿孔の8割は外面からの穿孔である。

85は丸みを帯びた口唇部を持つ土器である。口縁部上端にやや密に3条の横位貝殻刺突文を施し、その下位に斜位貝殻刺突文が施されている。内外面ともにナデ調整

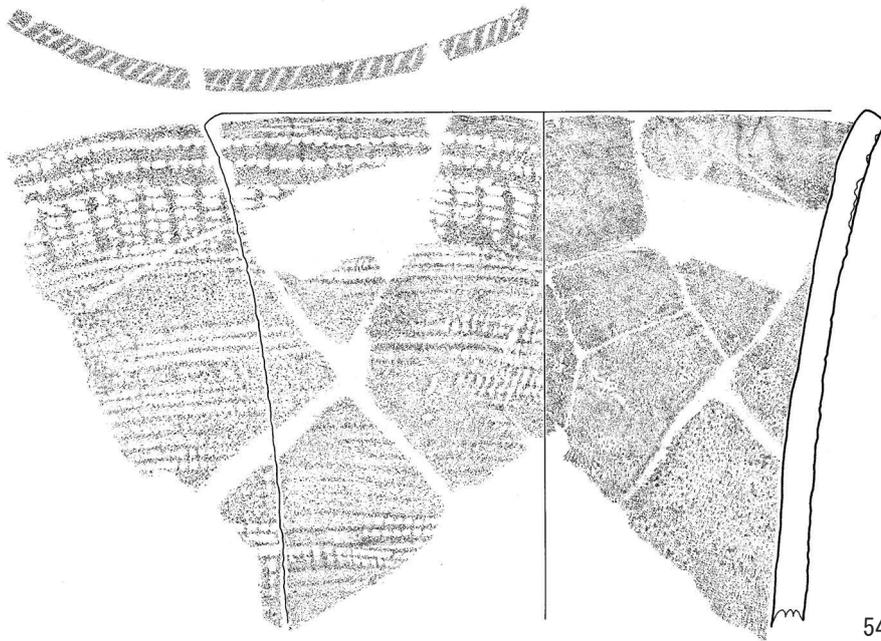


Ⅷ層上面コンタ図

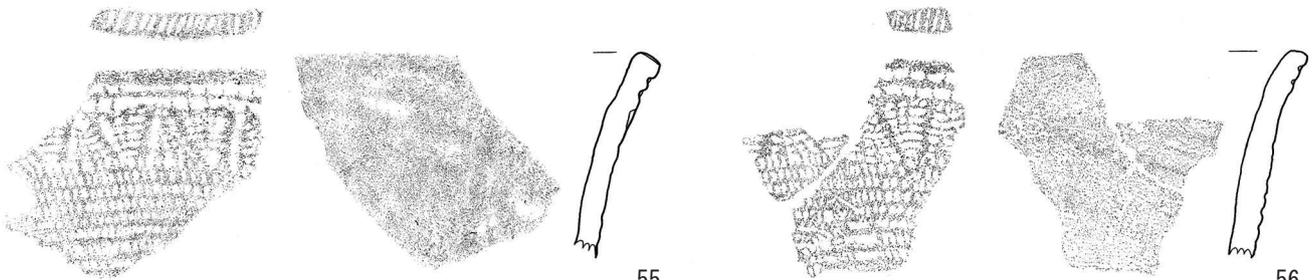
第147図 5類土器分布図



53



54

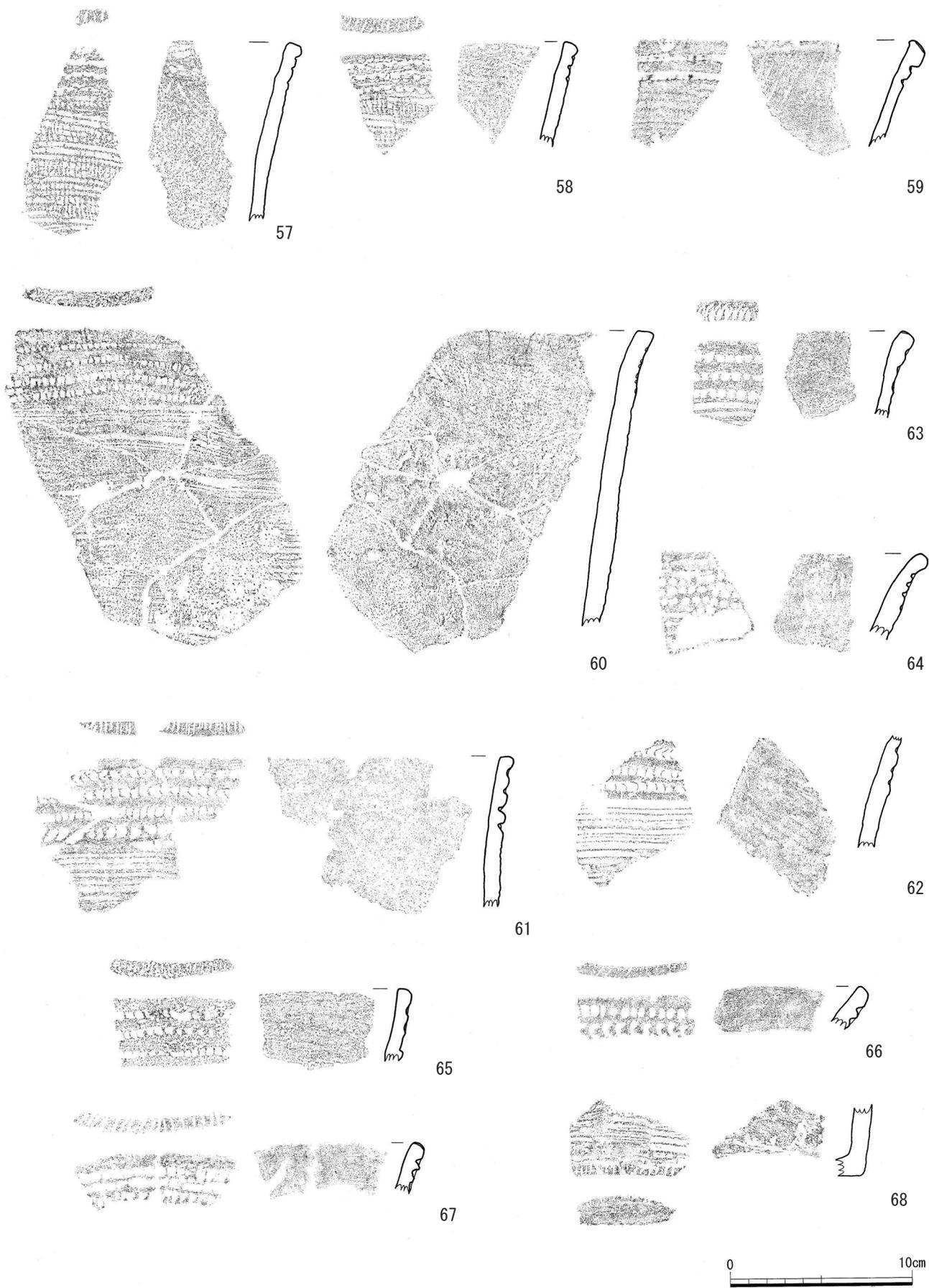


55

56



第148図 5類土器 1



第149图 5類土器2

が行われている。

86も85と同様の文様が施されるが、こちらの横位貝殻刺突文は4条である。肉眼ではほとんど確認できないが、口唇部にはキザミが施されているようである。

87～91は口縁部に2条の横位貝殻刺突文を施す土器である。器面調整はすべて内外面ともにナデ調整が行われている。

87～89の口唇部にはキザミもしくは刺突文が施されている。

87は外傾し、やや丸みを帯びた口唇部にキザミを施す土器である。口縁部の2条の横位貝殻刺突文の下位には、斜位方向の短い刺突文が1列施されている。胴部にははっきりとしないが綾杉状の貝殻条痕文が施されているようである。

88は外傾し、やや丸みを帯びた口唇部に貝殻刺突文を施す土器である。口縁部には同じ貝殻を用いて貝殻刺突文が施されているが、横位と言うよりは、やや斜位気味の短い刺突文列が2列施されている。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。

89は丸みを帯びた口唇部にキザミを施す土器である。口縁部の2条の横位貝殻刺突文の下位には、斜位の貝殻

刺突文が1列施されている。この斜位の貝殻刺突文は、貝殻条痕の上から施されており、二重施文となっている。

90は横位貝殻刺突文の下位に、貝殻刺突文が1列施されている。

91は口縁部上端の文様がはっきりとはしないが、横位の貝殻刺突文のようにも見える土器である。

92は波状口縁を呈す土器である。波頂部には瘤状突起が張り付けられている。波状の口縁部に沿うように横位の貝殻刺突文が1条施されており、その下位にも間隔を空けて、横位の貝殻刺突文がもう1条施されている。胴部には縦位の貝殻条痕が確認でき、2条目の横位貝殻刺突文は、この貝殻条痕の上から施されている。瘤状突起の直下では貝殻条痕が確認できないため、貝殻条痕は全面に施されているわけではないようである。

93と94は同一個体である。平坦に整形した口唇部にはキザミが施され、口縁部には2列の貝殻刺突文が施される。胴部には縦位と斜位の貝殻条痕文が施されている。93には補修孔が1か所確認でき、回転穿孔により穿孔されている。内外面からほぼ同程度の割合で穿孔されているが、穿孔位置が内外で微妙にズレたためか、補修孔自体はややいびつな形状をしている。器面調整は内外面と

第22表 5類土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	出土 層位	分類	文様	器面調整		胎土					色調		焼 成	備考	
						外面	内面	石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	小 礫	そ の 他	外面			内面
第 148 図	53	J31	VIIa	5 類 土 器	貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	◎	◎	○		○		褐色	にぶい橙色	良	補修孔あり
	54	J31	VIIa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ 指ナデ	○	○	○	△			にぶい橙色	にぶい橙色	良	雲母は極少量
	55	I30	VI		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○				黒褐色	にぶい橙色	良	
	56	J33	VIIa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	△				にぶい黄橙	にぶい橙色	良	
第 149 図	57	J30	VIIa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	58	J30	VIIa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	△				灰黄褐色	灰黄褐色	良	
	59	I30	VIIa		貝殻刺突文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	△	○			にぶい黄褐	にぶい黄褐	良	
	60	D26	VIIa上		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		◎		橙色	にぶい黄褐	良	白色小礫多
	61	H31	VIIa		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			明赤褐色	にぶい橙色	良	
	62	G32	VI		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ 指ナデ	○	○	○	△	○		にぶい赤褐	にぶい褐色	良	
	63	L32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	△				灰黄褐色	にぶい黄橙	良	
	64	K32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		黒褐色	黒褐色	良	
	65	H31	VIIa		貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○	◎			にぶい褐色	にぶい黄褐	良	
	66	I30	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	△	△	△				にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	67	L33	VIIa	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		橙色	にぶい赤褐	良		
	68	I29	VIIa	貝殻条痕文 キザミ	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	灰褐色	良		

もにナデ調整が行われている。

95は外傾する口唇部に貝殻刺突文を施し、口縁部には口唇部と同じ貝殻を用いて、縦位の貝殻刺突文を1列施している。縦位貝殻刺突文は地文の貝殻条痕調整の上から施されている。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。内面はナデ調整が行われている。

96は丸みを帯びた口唇部に貝殻刺突文を施す土器である。同じ刺突文が口縁部にも縦位・斜位方向に施されている。

97は波状口縁を呈す土器である。波頂部は肥厚する。外面には貝殻条痕のみが確認できる。内面はナデ調整が行われている。

98～140は6b類土器であり、口縁部が外傾する。

98～104は平坦に整形、もしくはやや丸みを帯びた口唇部にキザミを施し、口縁部に「く」の字状に貝殻刺突文を施し、胴部には綾杉状の貝殻条痕を施す土器である。どれも口縁部はわずかに外傾、もしくは外傾している。

98・99・101は口縁部の貝殻刺突文と、胴部の綾杉状の貝殻条痕文の間に、横位の貝殻刺突文を施し、文様を区画している。内面はどれもナデ調整が行われている。

105～112は口縁部に斜位の貝殻刺突文を施し、胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施す土器である。口唇部は平坦に整形、もしくは丸みを帯び、キザミを施すものと無文のものが見られる。

105は口径30.6cmを測る口縁部片である。口唇部は丸みを帯び、キザミが施されているが、キザミは部分的に施され、無文の部分も見られる。口縁部に斜位の貝殻刺突文、胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されている。文様は全体的に薄く施され、はっきりしない。これは使用による摩滅等ではなく、製作段階からこのような文様の施し方をしたものと考えられる。外面器面調整は丁寧なナデ調整が行われている。内面器面調整もナデ調整が行われている。胎土は大量の小礫が含まれ、特に内面の口縁部付近では、ナデ調整により小礫が引っ張られた痕跡が顕著に残る。雲母も含まれている。105の口縁部には一部突帯が剥がれたような部分があり、口唇部もその部分はわずかに隆起しているようである。

106・107は口唇部にキザミを施す土器である。106は横位の貝殻刺突文により、口縁部文様と胴部文様の区画が行われている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

108～112の口唇部は無文である。108は横位の貝殻刺突文により、口縁部文様と胴部文様の区画が行われている。全て器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

113～135は口縁部に横位の貝殻刺突文を施す土器である。ほとんどが口縁部上端に3条もしくは2条の貝殻刺突文を施し、胴部には綾杉状の貝殻条痕文を施すもので

あるが、縦位の貝殻条痕文等を施すものも見られる。また、口縁部の刺突文を施す部分にナデ調整を施さず、貝殻条痕の上から刺突文を施すものも見られる。内面は全てナデ調整が施されている。

113は口縁部に瘤状突起を持つ土器である。口縁部は約1/2が残存しており、瘤状突起は2か所に作られていると考えられる。丸みを帯びながら外傾する口唇部にはキザミ、口縁部上端には6列の横位貝殻刺突文が施されている。胴部には綾杉状を意識したと考えられる貝殻条痕文が施されているが、やや文様が崩れ、部分的には縦位や横位の貝殻条痕文も確認できる。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

114～119は口縁部に3条の横位貝殻刺突文を施す土器である。

114・115の口唇部には刺突文が施される。

116～135は口縁部に3条もしくは2条の横位貝殻刺突文を施す土器である。

116～126の口唇部には、キザミもしくは刺突文が施される。

130は口縁部の2条の横位貝殻刺突文の下位に、横位貝殻刺突文とは異なる施文原体により、刺突文が1列施されている。刺突文の形状より、棒状工具を用いたようにも見えるが、6類土器は一連の文様を貝殻を用いて施していることから、貝殻を利用して刺突文を施している可能性も考えられる。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が施されるが、文様はやや崩れている。

132～135は口縁部に2条の横位貝殻刺突文が施されているが、2条の貝殻刺突文列間がやや開く土器である。口唇部は全て無文である。2条の横位貝殻刺突文は、貝殻条痕の上から施されている。

136は胴部と比較して口縁部がわずかに肥厚する土器である。やや外傾する口唇部にはキザミが施され、口縁部には1列の縦位貝殻刺突文が施され、その下位に横位の貝殻刺突文が1条施され、胴部の貝殻条痕文との文様区画となっている。内外面ともにナデ調整が行われている。

137は波状口縁を呈す土器であり、波頂部が肥厚し、瘤状突起となる。口唇部にはキザミが施されているが、摩滅が激しく、肉眼ではほとんど確認できない。口縁部には貝殻刺突文が施されている。内外面ともにナデ調整が行われている。

138・139は同一個体と考えられる土器である。口唇部は外傾もしくは、やや丸みを帯び無文である。口縁部には、大きめの貝殻を用いて縦位の貝殻刺突文が施されている。胴部には貝殻条痕が確認できる。内外面ともにナデ調整が行われ、器面が大きく剥落しているのが特徴である。

140はやや内傾する無文の口唇部を持ち、口縁部から

胴部にかけて、綾杉状の貝殻条痕文が施されている。内面は丁寧なナデ調整が行われている。

141～147は胴部片である。

141は上部に3条の横位貝殻刺突文が、下部に横位方向の貝殻条痕文が確認できることから、口縁部付近から底部付近まで確認できる資料である。残存部のみで器高は30.2cmを測り、推定される器高は約31cmである。胴部には綾杉状の貝殻条痕文が丁寧に施され、内面の器面調整は丁寧なナデ調整が行われている。

142は1条の横位貝殻刺突文が確認できる胴部片である。回転穿孔による補修孔も1か所確認できる。

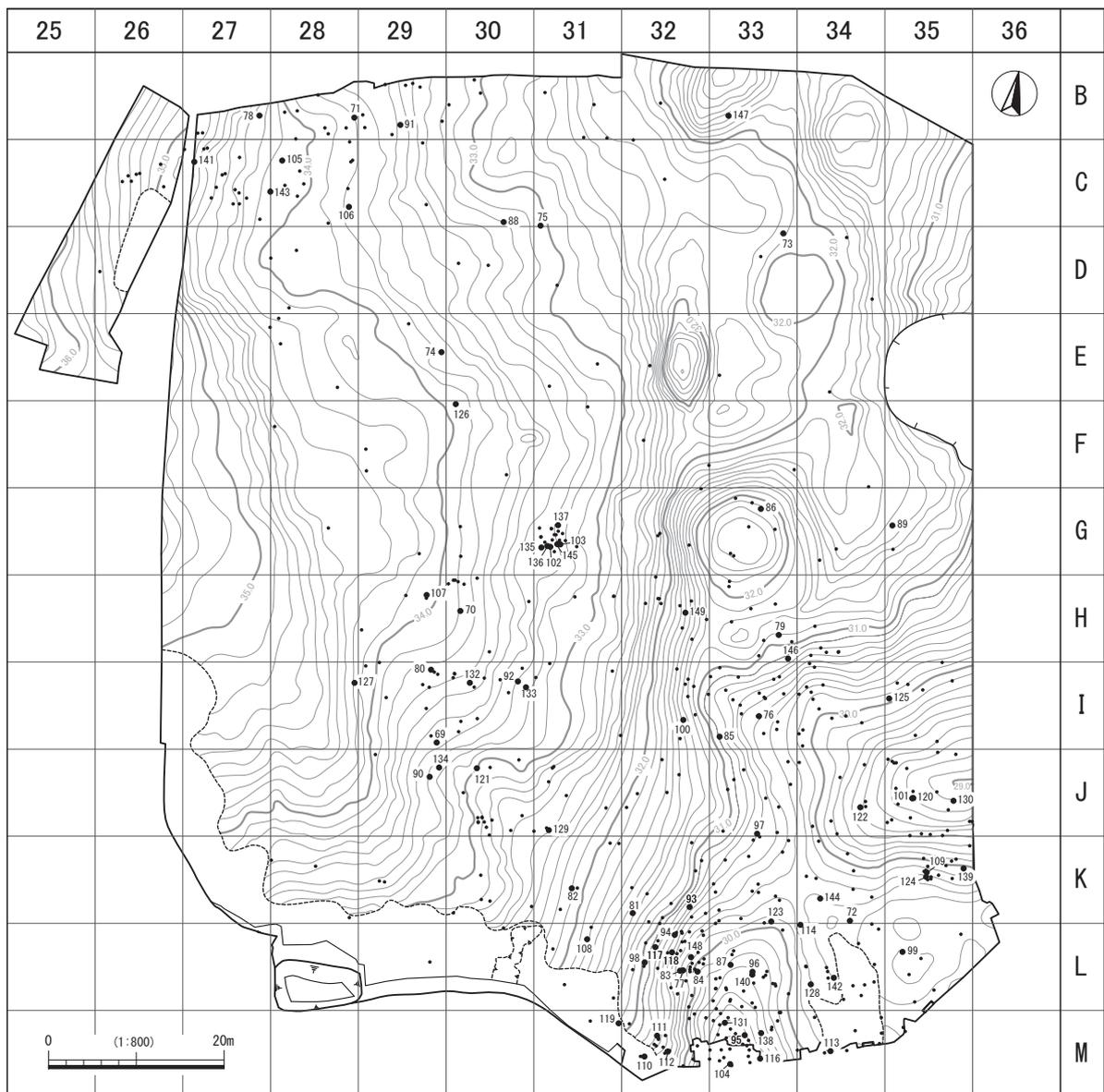
143は貝殻条痕文が確認できるが、条痕が薄く、これは摩滅等の後天的な影響ではなく、施文時から薄く施されたと考えられる。割れ口は上下とも接合面で外れたと

考えられ、非常に滑らかな断面形状となっている。

144はナデ調整が行われた胴部に、貝殻条痕文が施されている。貝殻条痕文は綾杉状に施されていると考えられるが、施文は粗い。内面は貝殻条痕調整後にナデ調整が行われている。

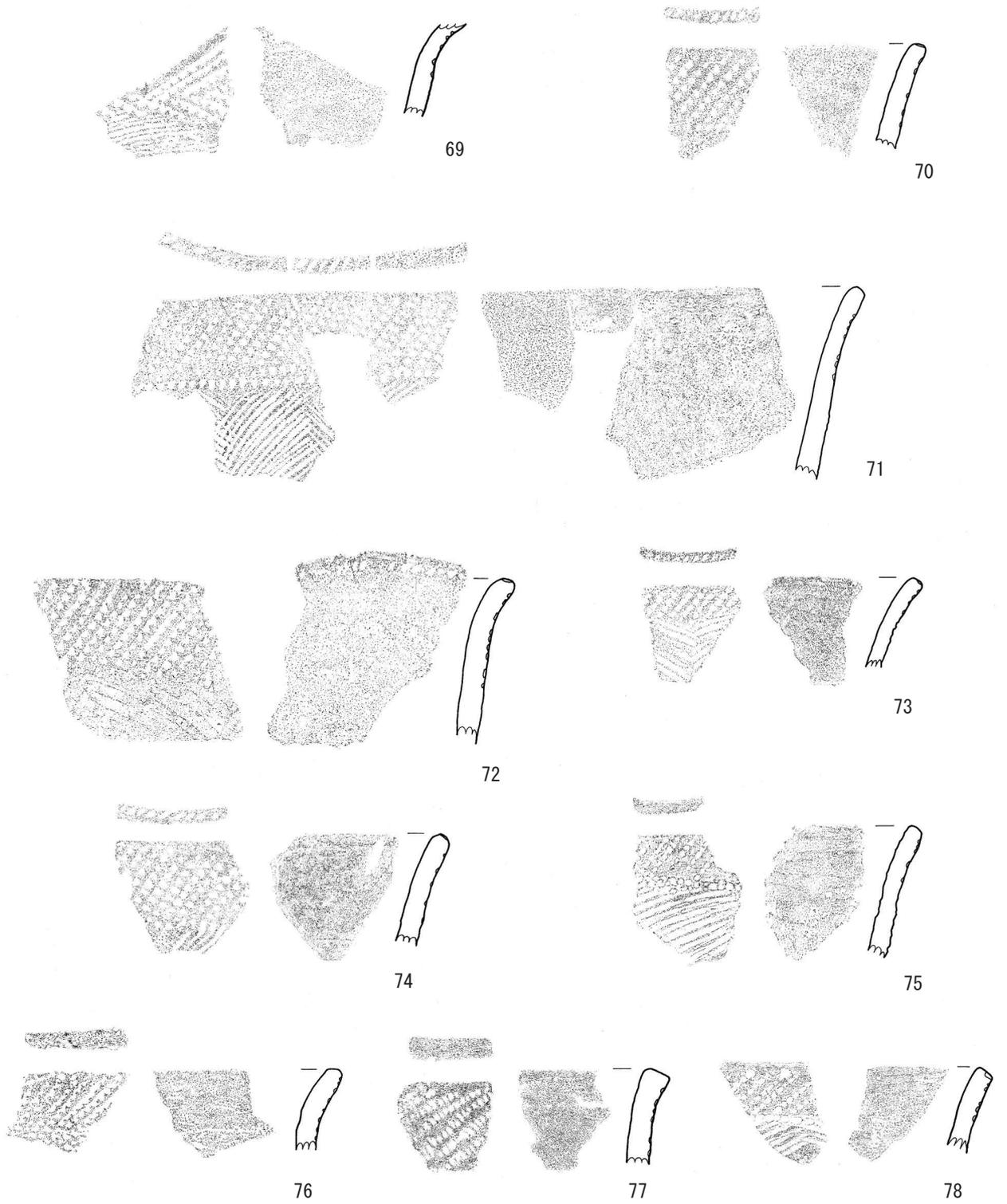
145は胴部から底部付近の破片である。残存部での器高は20.7cmであり、底部径は約14.4cmである。胴部には綾杉状を意識したと考えられる斜位方向の貝殻条痕文が施されているが、施文は粗い。底部付近は横位の貝殻条痕文が施されている。斜位の貝殻条痕文が横位貝殻条痕文に切られており、施文順位は横位貝殻条痕文が後から施されていることが分かる。内面は丁寧なナデ調整が行われている。

146・147は底部付近の破片資料である。ともに内面は

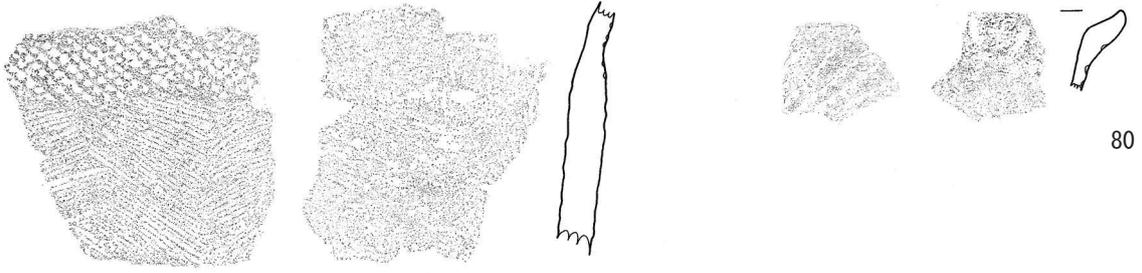


Ⅶ層コンタ図

第150図 6類土器分布図

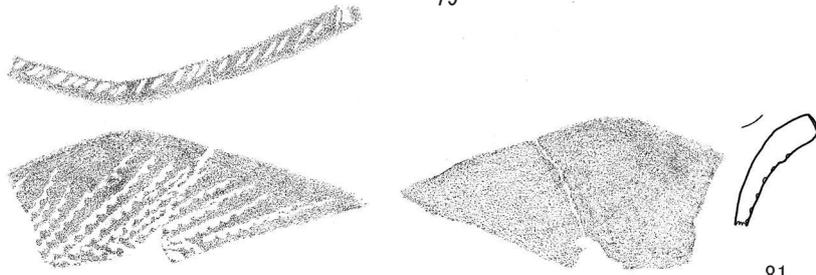


第151图 6類土器 1



79

80



81



82



第152図 6類土器2



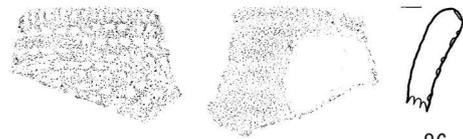
83



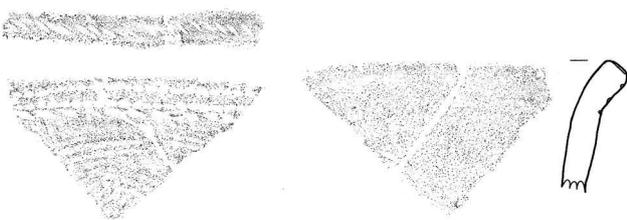
84



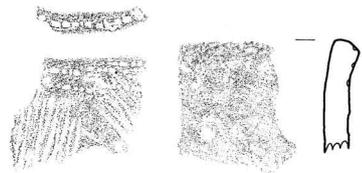
85



86



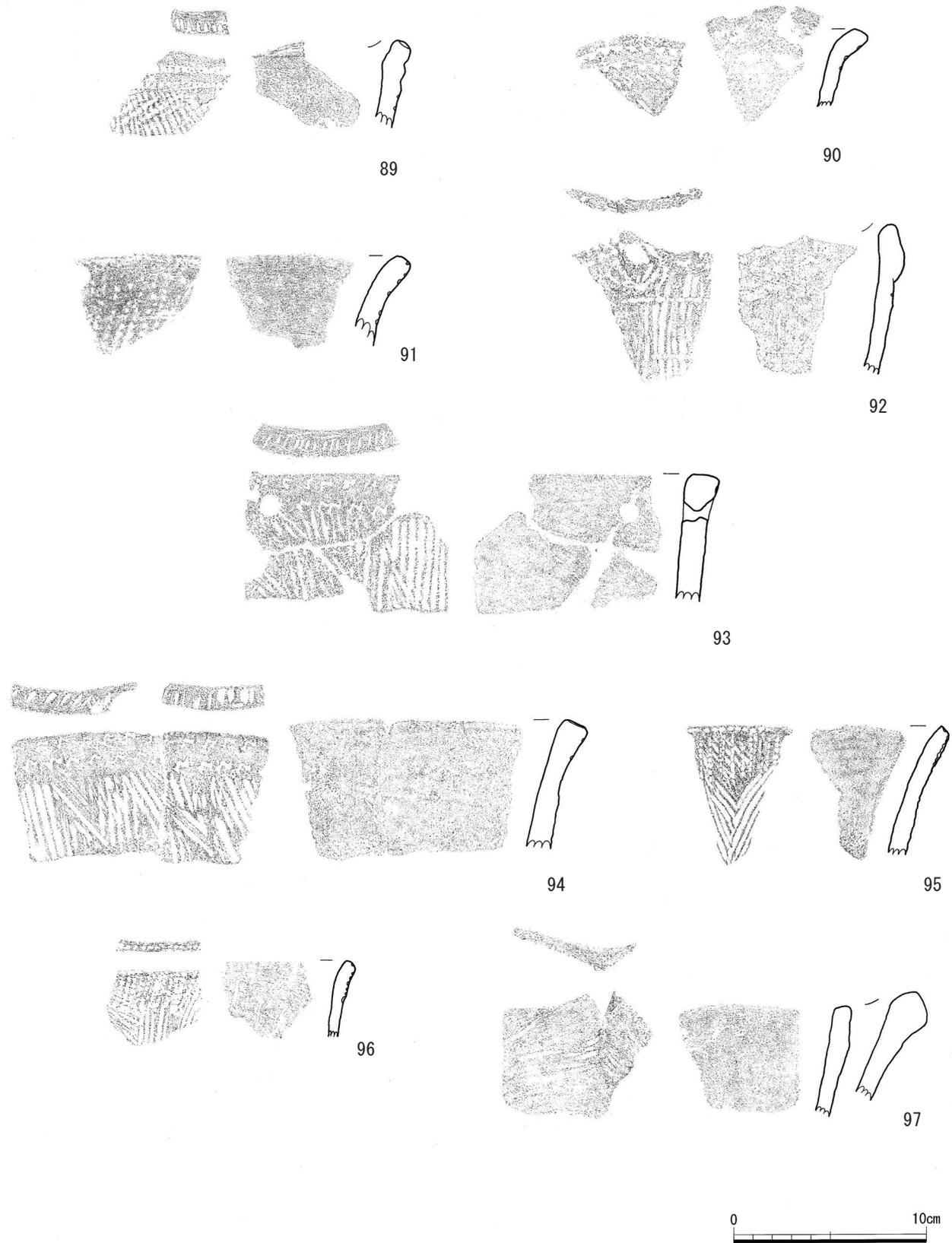
87



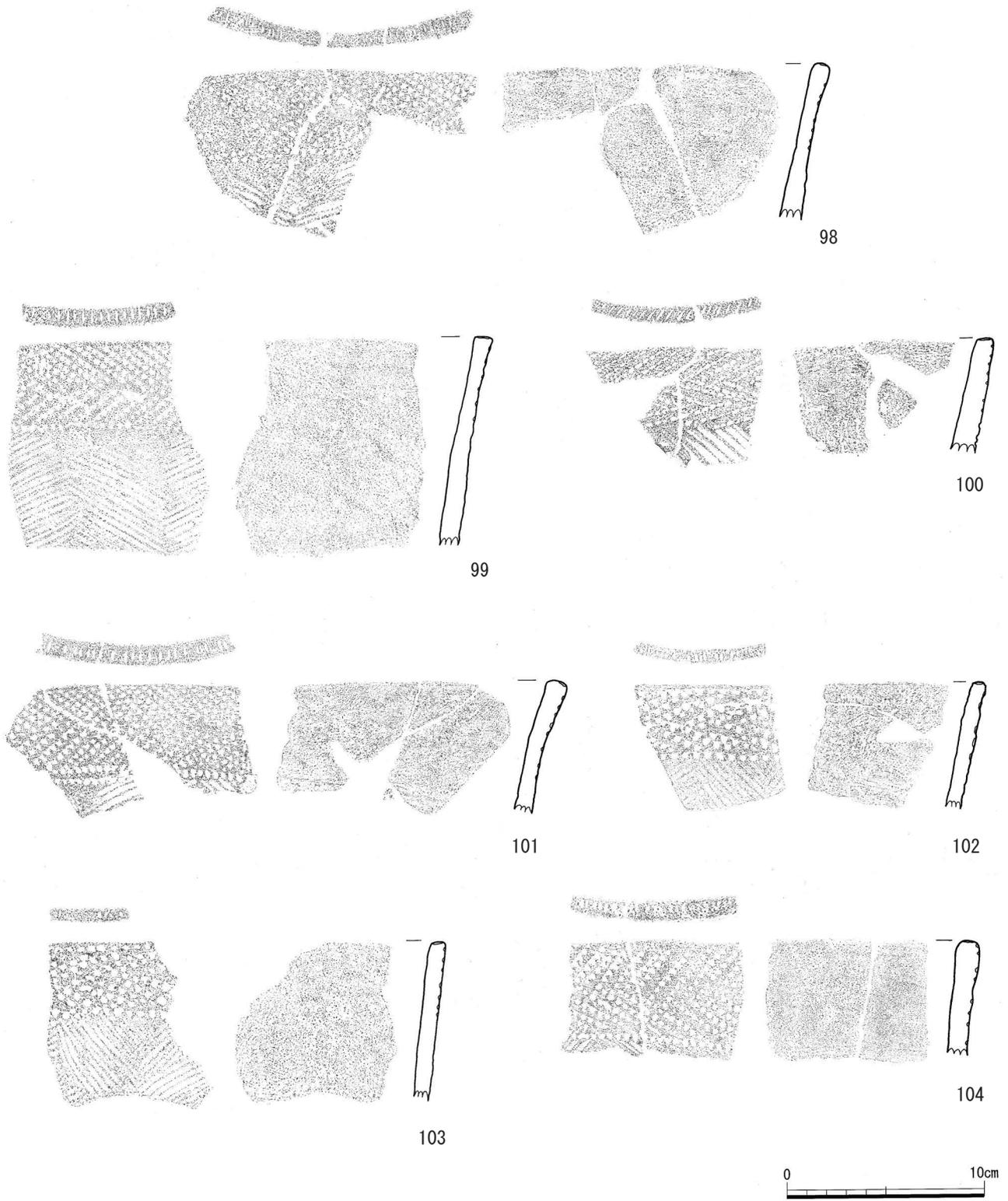
88



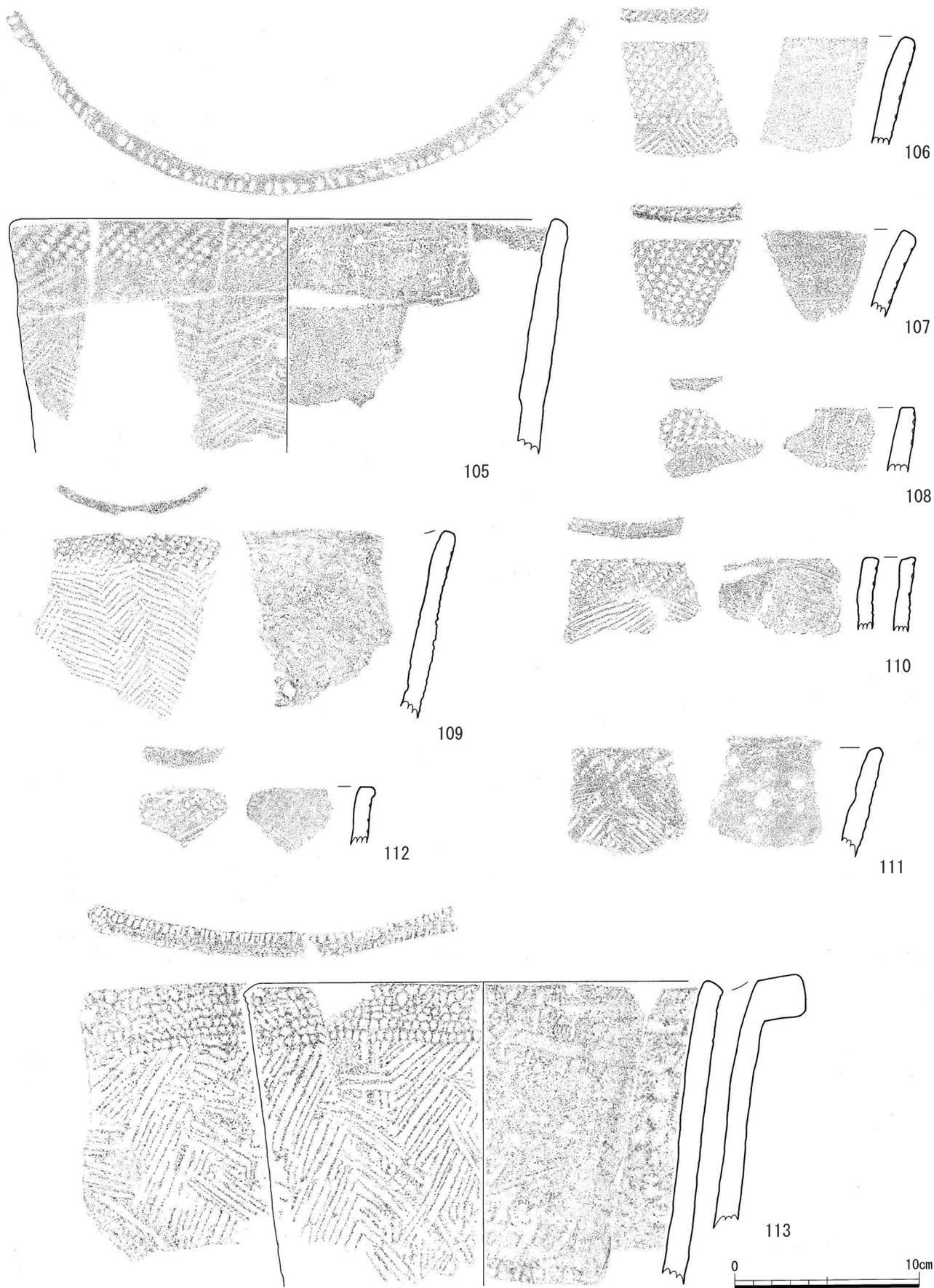
第153図 6類土器3



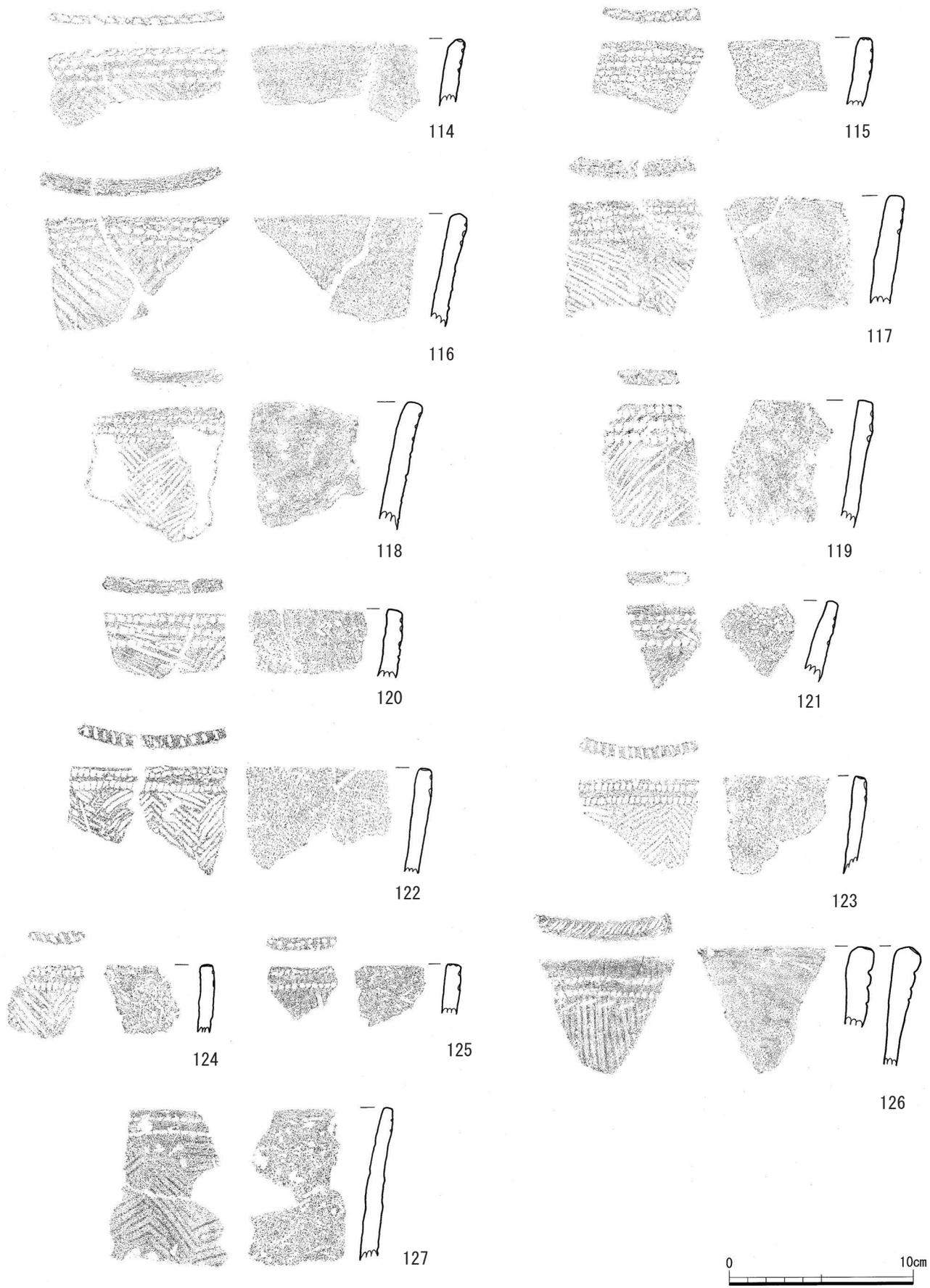
第154図 6類土器4



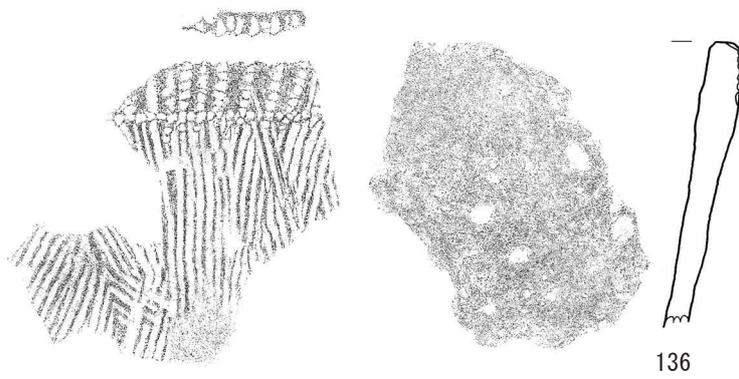
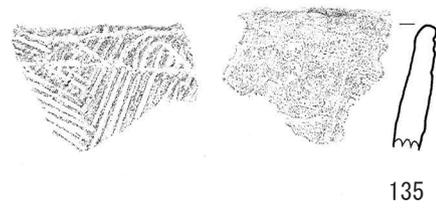
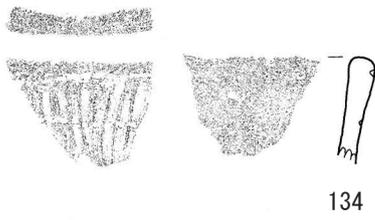
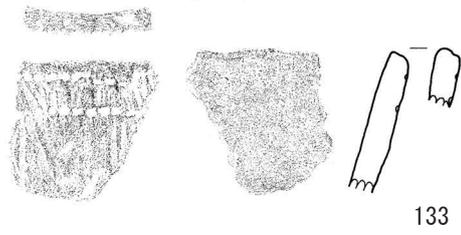
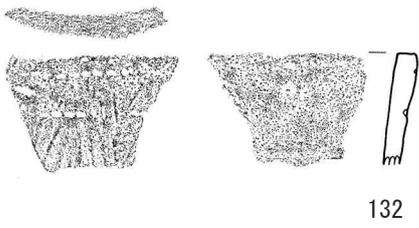
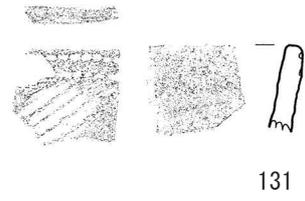
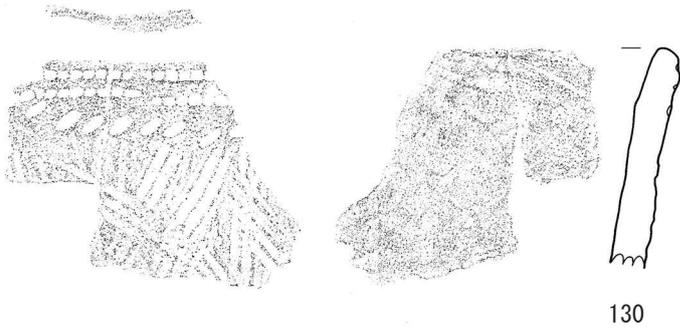
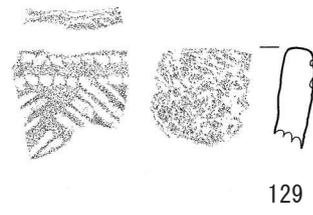
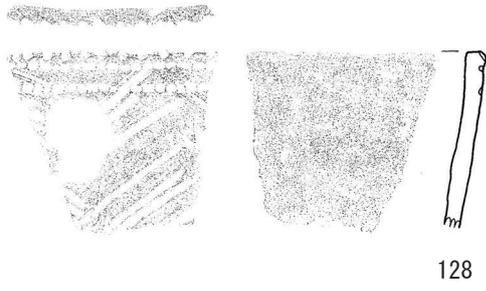
第155図 6類土器5



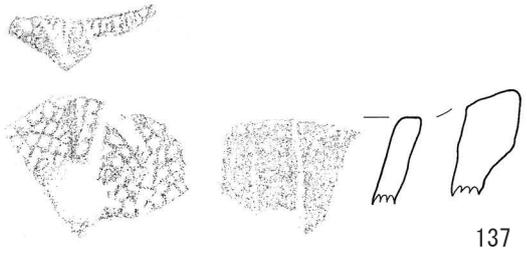
第156図 6類土器6



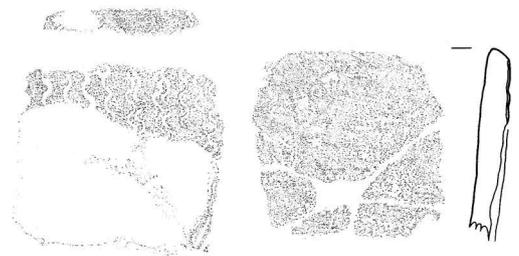
第157图 6類土器7



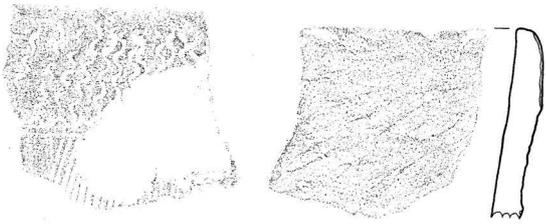
第158図 6類土器8



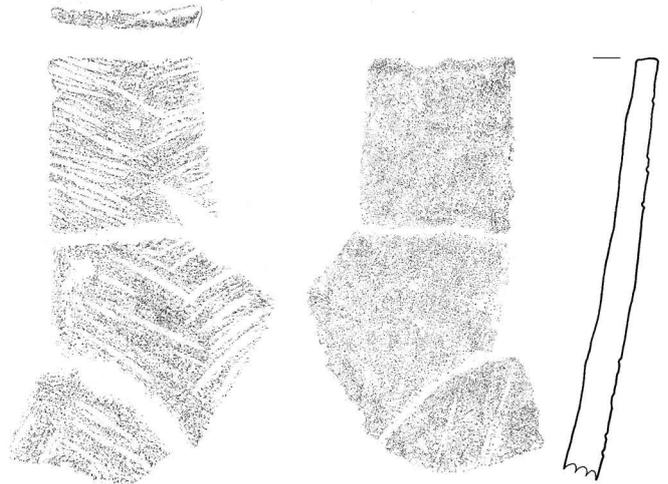
137



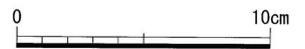
138



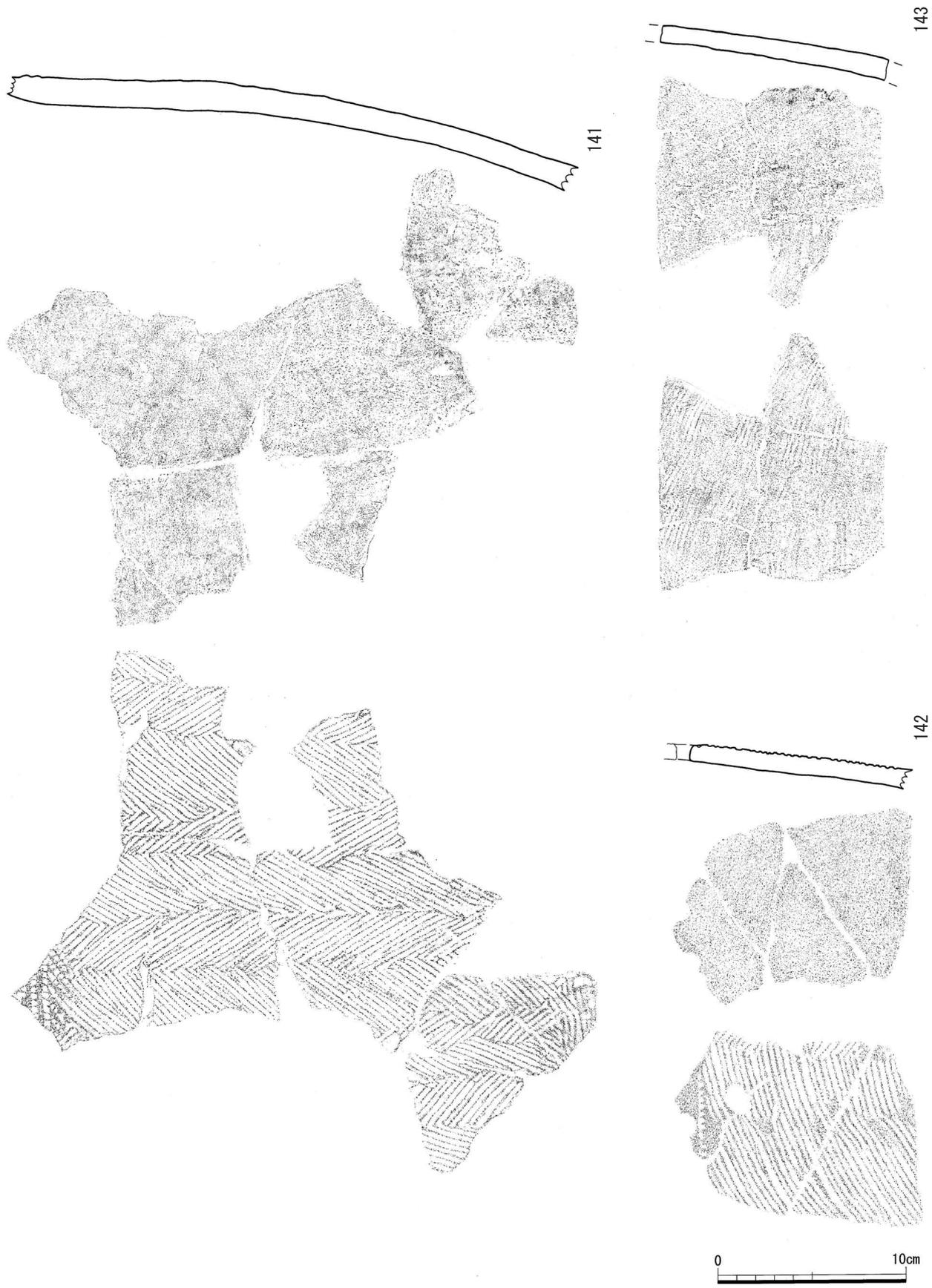
139



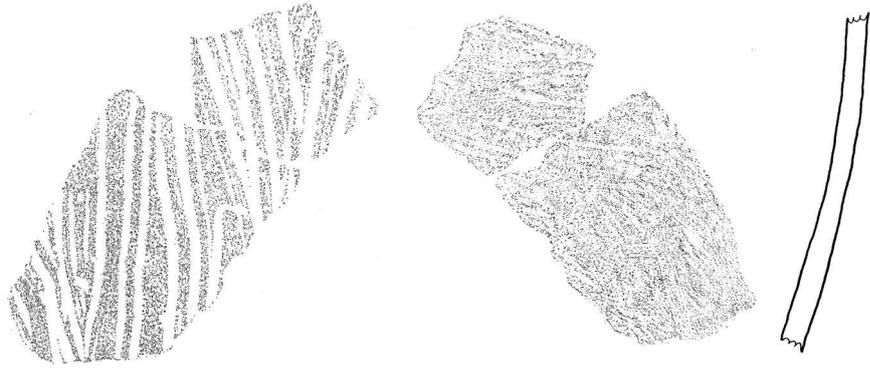
140



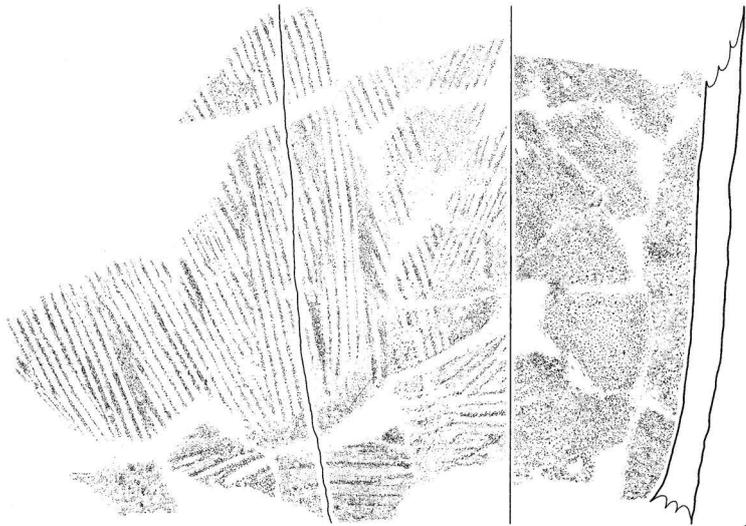
第159図 6類土器9



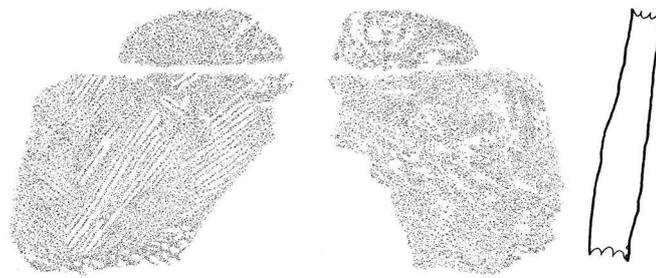
第160図 6類土器10



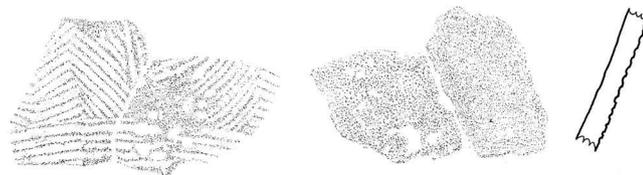
144



145



146



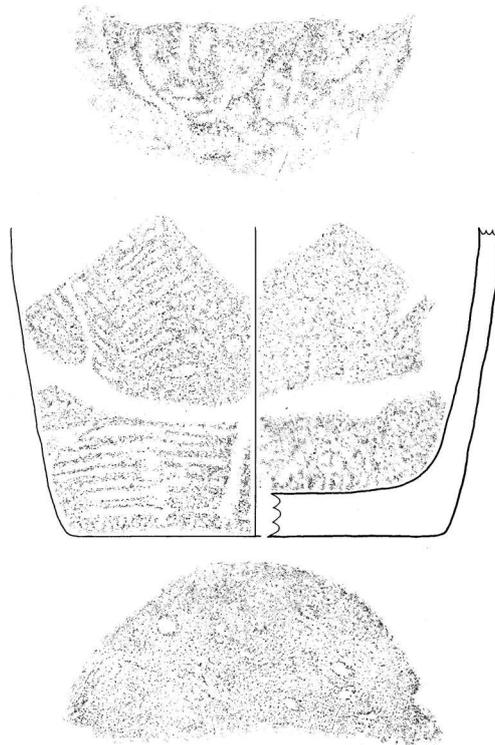
147



第161図 6類土器11



148



149



第162図 6類土器12

第23表 6類土器観察表1

挿図 番号	遺物 番号	出土区	出土 層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼 成	備考
						外面	内面	石 英	長 石	角 閃 石	雲 母	小 礫	そ の 他	外面	内面		
第 151 図	69	I29	VIIb	6 a 類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい赤褐	良	
	70	H30	VI		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	71	B28	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	72	K34	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	73	D33	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	74	E29	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				灰褐色	にぶい橙色	良	
	75	C31	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄褐	良	
	76	I33	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	77	L32	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	78	B27	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	1cm程の礫混入
第 152 図	79	H33	VIIa	6 a 類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	80	I29	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		暗赤褐色	にぶい赤褐	良	
	81	K32	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい赤褐	にぶい橙色	良	
	82	K31	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	暗褐色	良	
第 153 図	83	L32	VIIa	6 a 類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	84	L32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	補修孔あり
	85	I33	VI		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	86	G33	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	87	L33	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				橙色	橙色	良	
	88	C30	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	にぶい褐色	良	
第 154 図	89	G35	VIIa	6 a 類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				橙色	にぶい赤褐	良	波状口縁
	90	—	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	91	B29	VIIb		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				橙色	灰褐色	良	外面にスス
	92	I30	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	波状口縁
	93	L32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	にぶい褐色	良	補修孔あり
	94	L32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	95	M33	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい赤褐	良	
	96	L33	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		橙色	にぶい褐色	良	
	97	J33	VIIa		貝殻条痕文	ナデ	—	○	○	○		○		暗赤褐色	明赤褐色	良	
第 155 図	98	L32	VIIa	6 b 類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	99	L35	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	100	I32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	暗褐色	良	
	101	J35	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	橙色	良	
	102	G31	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	103	G31	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい褐色	良	
	104	M33	VIIb上		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		暗褐色	橙色	良	

第24表 6類土器観察表2

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第156図	105	C28	VIIa	6b類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	106	C28	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		灰褐色	にぶい橙色	良	
	107	H29	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				灰褐色	にぶい橙色	良	
	108	L31	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			にぶい褐色	明赤褐色	良	
	109	K35	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	110	M32	VI		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ケズリ 後ナデ	○	○	○	○			にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	111	M32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	112	M32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			橙色	にぶい褐色	良	
	113	M34	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい赤褐	良	
第157図	114	K32	VI	6b類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		灰黄褐色	にぶい黄褐	良	
	115	L34	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい黄橙	良	
	116	M33	VIIa下		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	
	117	L32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	118	L32	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				灰褐色	にぶい褐色	良	
	119	M31	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい黄褐	良	
	120	J35	VI		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	△		にぶい褐色	灰褐色	良	
	121	J30	VI		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	122	K34	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	123	K33	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	△	○		にぶい褐色	灰褐色	良	
	124	K35	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ケズリ 後ナデ	○	○	○	△	○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
	125	I35	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	
	126	F30	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	127	I28	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	
第158図	128	L34	VIIa	6b類	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		△		にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	
	129	J31	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			灰褐色	にぶい橙色	良	
	130	J35	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	131	M33	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	132	I30	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	133	I30	VIIb		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい橙色	にぶい黄橙	良	波状口縁
	134	J29	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	にぶい褐色	良	
	135	G31	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい褐色	灰褐色	良	
	136	G31	VIIb		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○			にぶい褐色	にぶい赤褐	良	

丁寧なナデ調整が行われている。

146の外面には、丁寧なナデ調整の後に、綾杉状の貝殻条痕文が部分的に施されている。下位には貝殻刺突文が確認でき、底部付近と考えられる。

147は胴部に綾杉状の貝殻条痕文、底部付近に横位の貝殻条痕文が施されている。

148・149は底部片である。ともに胴部に綾杉状の貝殻条痕文、底部付近に横位の貝殻条痕文が施されている。底部は平底を呈し、ナデ調整が行われている。

148の綾杉状の貝殻条痕文は部分的であり、施文が浅い。器面調整は外面はナデ調整、内面は縦方向のケズリ後ナデ調整が行われている。

149は底部径15cmを測る。胴部の厚さ約9mmに対し、底部の厚さは約18mmと厚い。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

7 類土器 (第163・164図 150~161)

7 類土器は斜位の貝殻刺突文や、斜位の沈線文を主とする文様構成を持つ土器である。貝殻刺突文のものを7 a 類、沈線文のものを7 b 類とする。

150~157は7 a 類土器である。150・151は口縁部片である。

150はやや外傾する平坦に整形した口唇部に貝殻刺突文を施す。一見、キザミのようにも見えるが、よく観察すると貝殻刺突文であることが分かる。口縁部には斜位の貝殻刺突文を連続で横位羽状に施している。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

151は文様構成等は150と同様であるが、口唇部がやや内傾する。

152~156は胴部片である。

152は斜位の貝殻刺突文と、横位の貝殻刺突文が施されている。横位の貝殻刺突文の下位には文様は確認できないことと、下部の割れ口の形状から、底部付近の破片である可能性が考えられる。

153は7 類土器の中では最も大きな破片資料である。貝殻刺突文を羽状に2列施し、その下位には貝殻腹縁を用いた縦位方向の短い条線文を施している。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土には雲母が含まれている。

154は羽状の貝殻刺突文、155は斜位の貝殻刺突文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

156は羽状の貝殻刺突文の間に、横位の貝殻刺突文を1条施している土器である。破片資料であるため、この文様が羽状の貝殻刺突文を区画しているのか、または魚骨状の貝殻刺突文となるかは不明である。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

157は底部付近の破片資料である。横位の貝殻刺突文が密接に施されている。貝殻刺突文は連続して施されず、線状にはならない。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土には雲母が含まれている。

158~161は7 b 類土器である。

158・159は口縁部片である。

158は内傾する平坦に整形した口唇部を持つ土器であ

第25表 6 類土器観察表 3

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考	
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面			
第159図	137	G31	VIIa	6 b 類	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	橙色	良		
	138	M33	VI		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	橙色	良		
	139	K35	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良		
	140	M34	VIIa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	明赤褐色	良		
第160図	141	C26	VI	6 類 胴部	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○			○		橙色	明赤褐色	良	
	142	L34	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				○	橙色	にぶい橙色	良	
	143	C28	VIIb		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		○	橙色	橙色	良	
第161図	144	K34	VI	6 類 胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良		
	145	G31	VIIb		貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		○	明赤褐色	にぶい赤褐	良	
	146	H33	VIIa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		○	橙色	にぶい橙色	良	
	147	B33	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		○	橙色	灰褐色	良	
162図	148	L32	VIIa	6 類	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	◎	○		にぶい橙色	にぶい黄褐	良	底部	
	149	I34	VIIa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		○	橙色	橙色	良	底部

る。口唇部は無文であり、丁寧なナデ調整が行われている。口縁部はやや肥厚し、内湾する。口縁部上端には2列の刺突文が施されている。施文原体は不明であるが、形状は直径2mm程の円形を呈し、棒状工具の可能性が高い。その下位には、斜位短沈線文を組み合わせた羽状文が2列施されており、さらにその下位には2列の刺突文が確認できる。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われているが、内面は口縁部上端の約1.5cmの幅で、横位方向の混和材の流れが顕著に確認できるため、口縁部付近のみケズリ後ナデ調整が行われたと考えられる。

159は器形は158と同様であるが、口縁部付近は明らかに肥厚しており、口縁部付近で1.3cm、残存部の最下部で7mmと、口縁部付近の厚みが約2倍となっている。文様は斜位の短沈線文を組み合わせた羽状文が施されてい

る。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

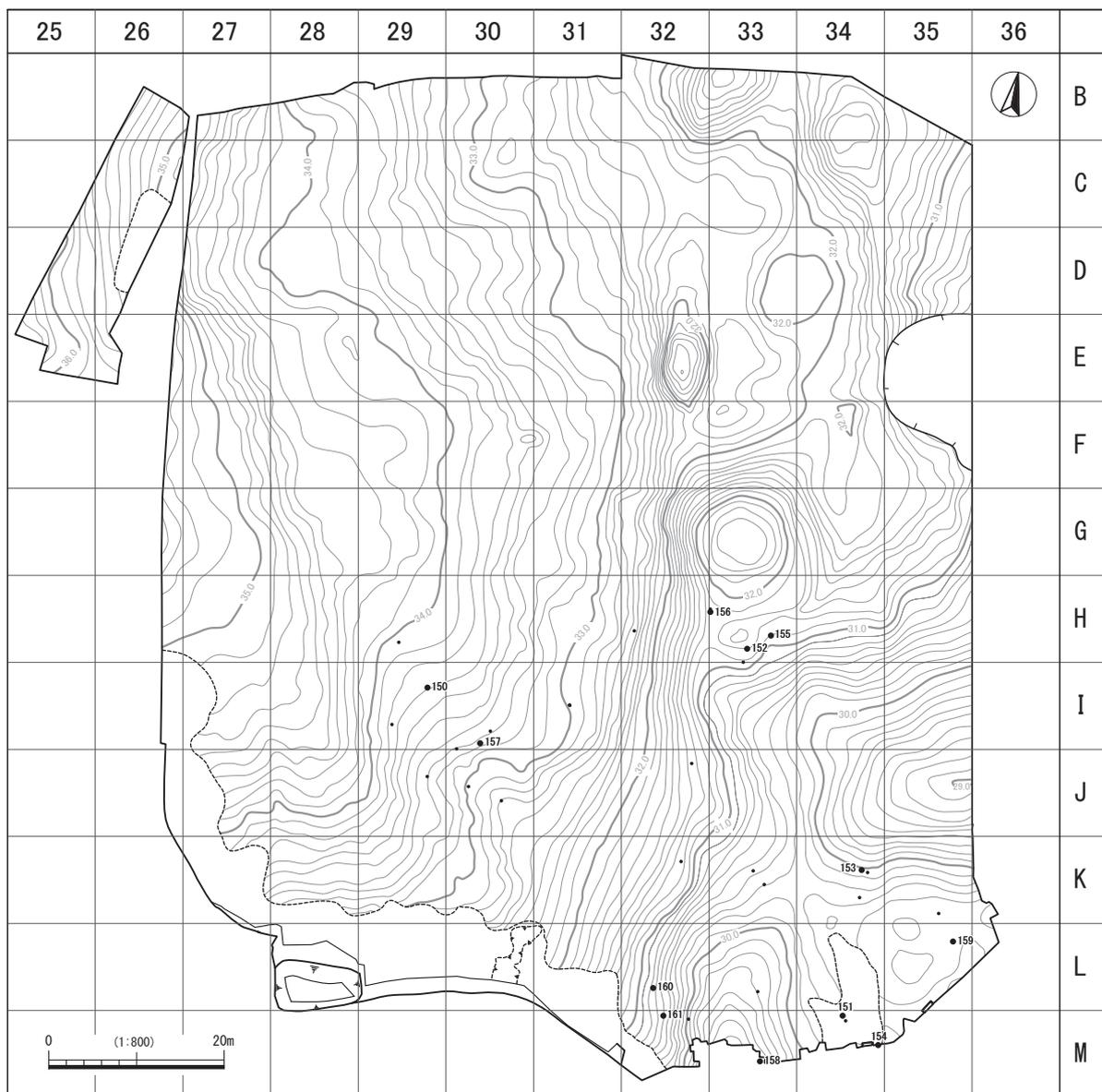
160・161は胴部片である。ともに斜位の短沈線文を組み合わせた羽状文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

8類土器(第165・166図 162~169)

8類土器は回転施文具により押型文を施す土器である。

162~165は口縁部片である。

162・163の口唇部は丸みを帯び、外傾し、一見するとキザミを施しているようにも見えるが、口縁部に施されている押型文と同じ施文原体である回転施文具を用いて文様が施されている。口縁部は回転施文具を横位方向に転がすことにより、山形押型文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。



VIII層コンタ図

第163図 7類土器分布図

164は平坦に整形され、外傾する口唇部にキザミが施されている。口縁部には回転施文具により山形押型文が施されている。器面調整は外面はナデ調整、内面は口縁部上端2.4cm幅はナデ調整が行われているが、その下位はケズリが行われている。

165は丸みを帯びた口唇部にキザミが施されている。文様・器面調整は164と同様であり、内面は口縁部上端はナデ調整、その下位はケズリが行われている。そのため、ケズリが行われている部分は、口縁部上端よりも2mm程度器壁が薄くなっている。

166～169は胴部片である。166～168を見ると、口縁部付近とは違い回転施文具を縦方向や斜位方向に転がし文様を施している。166は器壁が薄く9類土器に近い特徴を持つ。

169は下部に無文帯が確認でき、また下部の器壁が厚くなっているため底部付近の資料であると考えられる。回転施文具により円形押型文が施されている。

9類土器(第165・167図 170～172)

9類土器は8類土器と同じく回転施文具により押型文が施される土器であるが、8類土器と比して、器壁が薄

く、口縁部が大きく外反し、胴部にくびれを持つ土器である。

170・171は口縁部片である。口唇部はともに丸みを帯びるが、170はやや平坦な部分も見られる。器壁は薄く5mm程度の厚みしか持たない。外面には縦位方向の山形押型文が施される。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土には雲母が多く含まれている。

172は胴部片である。くびれ部を持つ。外面には縦位方向の山形押型文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

10類土器(第165・168図 173)

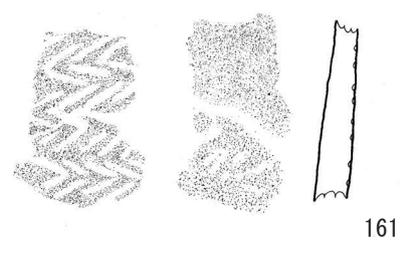
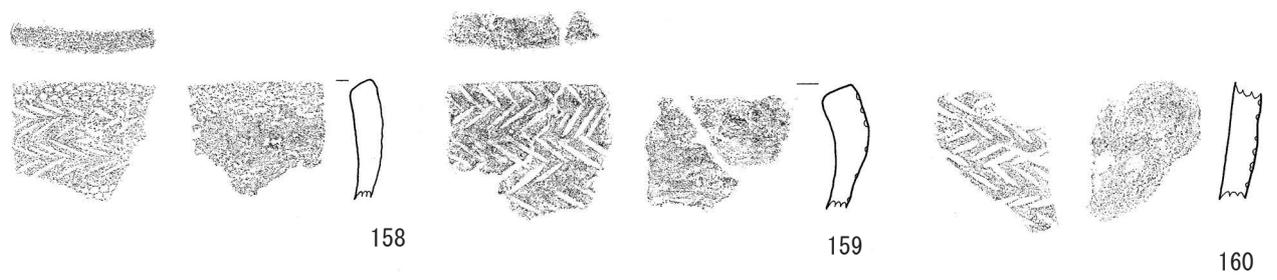
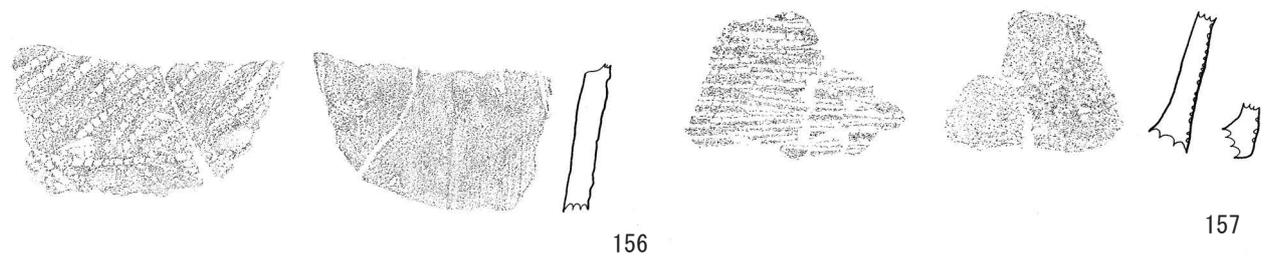
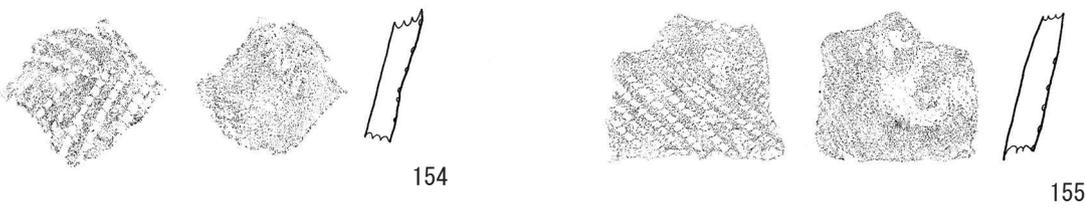
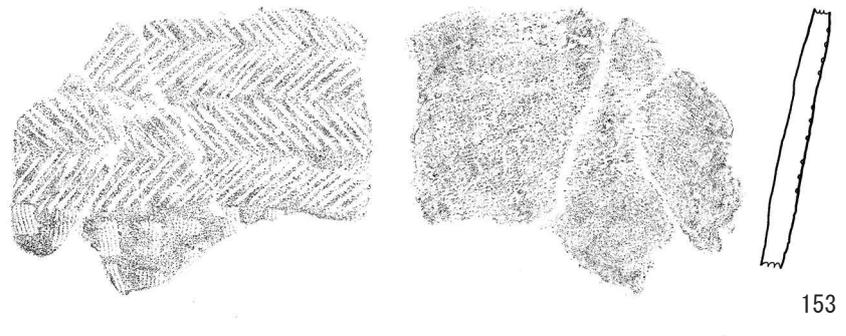
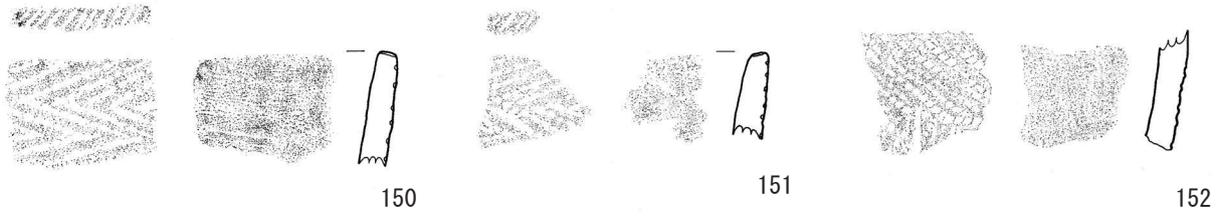
173は回転施文具により捺糸文を施す土器である。口縁部から胴部が残存するほぼ完形品であるが、底部のみが欠けている。器形は口縁部が外反し頸部ですぼまり、胴部上位がやや膨らんで胴部下位ですぼまる器形を呈す。口縁径25cm、底部は欠損しているが、残存部分の器高21.5cm、器壁の厚さは口縁部から底部までほぼ均等で約10mmを測る。文様は口縁部上端から胴部にかけて、3～4条の捺糸文を縦位の連弧状に施す。文様は部分的に8の字状になっている部分も見られる。また連弧状や8の

第26表 7a類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第164図	150	I29	VIIa	7a類土器	貝殻刺突文(羽状)	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄褐	にぶい黄橙	良	
	151	M34	VIIa		貝殻刺突文(羽状)	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	
	152	H33	VIIa		貝殻刺突文(斜位・横位)	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい褐色	良	
	153	K34	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	灰褐色	良	
	154	M34	VIIa		貝殻刺突文(羽状)	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	
	155	H33	VIIa		貝殻刺突文(斜位・横位)	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	褐色	良	
	156	H33	VIIa		貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	
	157	I30	VI		貝殻刺突文(横位)	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	黒褐色	良	

第27表 7b類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第164図	158	M33	VIIa	7b類土器	刺突文 短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	灰褐色	良	
	159	L35	VIIa		短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	△	○		にぶい褐色	黒褐色	良	
	160	L32	VIIa		短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	161	L32	VI		短沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○	◎	○		橙色	にぶい褐色	良	



第164図 7類土器

字文様の中心を通る直線的な太い捺糸文様を確認できる。胴部が最も膨らむ部分には、縦位の連弧状の捺糸文に重ねて、横位または斜位の捺糸文が連弧状に施されている。内面は無文である。器面調整は内外面ともナデ調整が行われている。焼成は堅く緻密である。色調は内外面ともに橙色で、口縁部から胴部上位外面の広い範囲に黒斑が見られる。胎土には1mm以下～2mm程の雲母が多く含まれている。

11類土器（第169・170図 174～179）

11類土器は2本の並行する沈線間に捺糸文を施す土器である。全体的に器壁が薄く、文様は精緻であり、内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

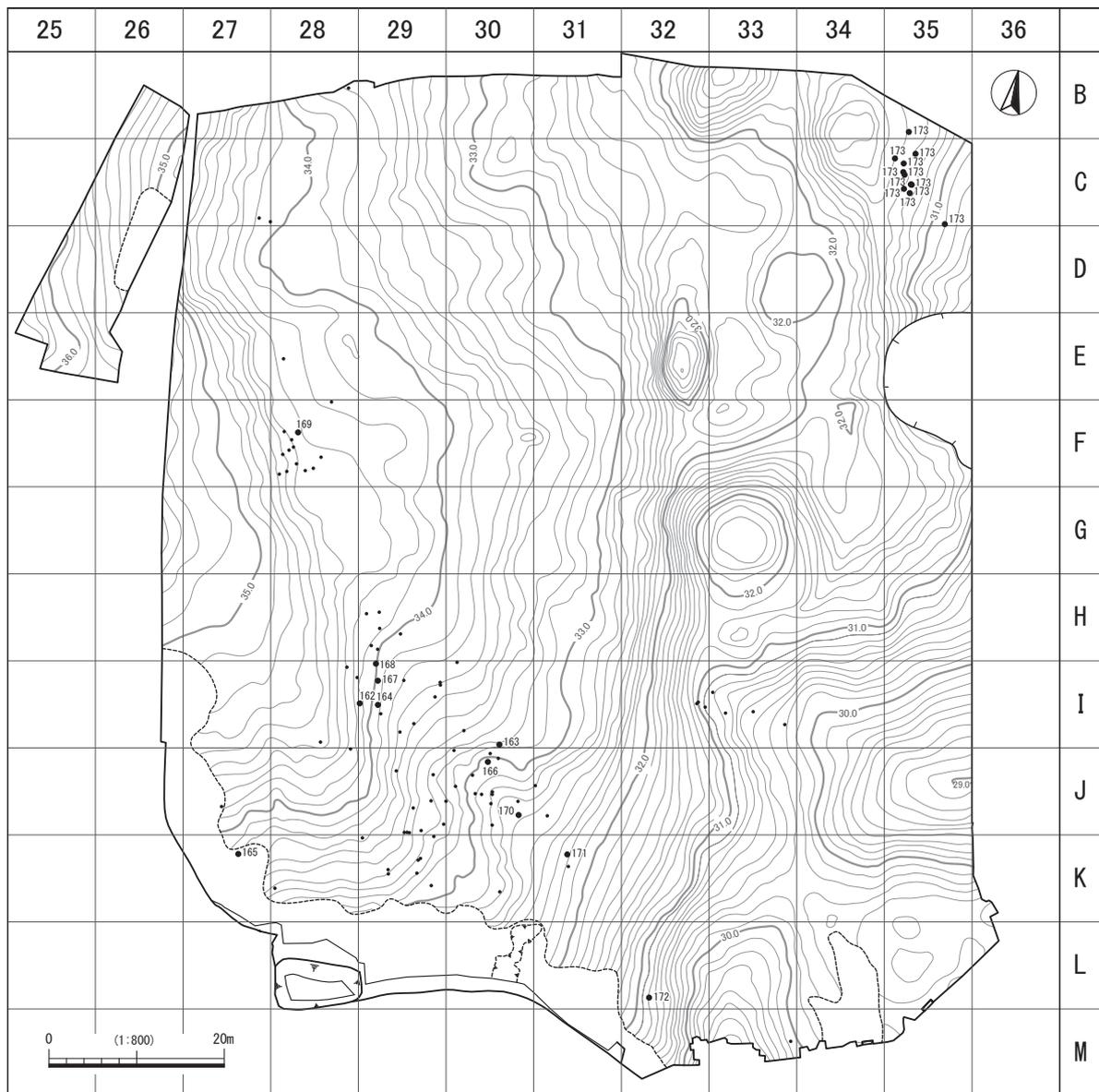
174は口縁部片である。口唇部は外傾し刺突文が施されている。器面には沈線文で文様区画を行った中に条痕文（一部、捺糸文）が施されている。一部の文様が区画の外に確認できるため、条痕文を施した後に区画を施したと考えられる。

175は頸部片である。沈線文と2種類の刺突文が施されている。内外面ともに非常に丁寧なナデ調整が行われている。

176～178は胴部片である。176は横位・斜位の貝殻条痕文、刺突文、縦位の捺糸文が施されている。施文の順番は捺糸文をまず施し、その後他の文様を施している。

177は捺糸文が施されている。文様の区画はない。

178は沈線文の区画の中に捺糸文が施されている。こ



Ⅷ層コンタ図

第165図 8～10類土器分布図

ちらも176と同様に撚糸文を施した後に、沈線文を施していると考えられるが、一部、区画内に無文部分も確認できる。外面は丁寧なナデ調整が行われている。内面はケズリが行われ、調整は粗い。胎土に雲母が含まれている。

179は底部片である。178と同一個体の可能性が高い。底部付近ほど文様区画内の無文部分が多くなる。底部は平底で、部分的にしか残存していないが、胴部よりも器壁が薄い。器面調整は外面が丁寧なナデ調整、内面はケズリ後ナデ調整が行われている。

12類土器（第171～180図 180～233）

12類土器は縄文時代早期の遺物の中で最も多く出土した土器である。基本的には施文原体として貝殻を用いて文様を施している。

180～197は主として貝殻条痕で文様が施される土器で

ある。180は底部以外が確認できる資料である。器形は胴部が膨らんで立ち上がり、頸部でくびれ口縁部がやや外反する。口唇部には貝殻によるキザミを施し、口縁部から頸部にかけては横位の貝殻条痕文を施す。頸部には横位の貝殻刺突文を1列施し、それを文様区画とし、胴部には斜位の貝殻条痕を菱形状に施している。器面調整は内外面ともにケズリ後ナデ調整である。

181は胴部下半までが確認できる資料である。器形は口縁部が膨らみ、頸部以下がすばまる形状を呈している。口唇部には刺突文、口縁部上端には横位貝殻条痕、その下位には貝殻刺突文が施される。その下位から頸部にかけては楕円状や斜位の貝殻条痕文が施される。頸部から胴部半ほどまでには4列の貝殻刺突文が間隔を空けて施されており、その下位には貝殻条痕文が弧状に施される。全体的に貝殻条痕文の施文は粗い。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

第28表 8類土器観察表

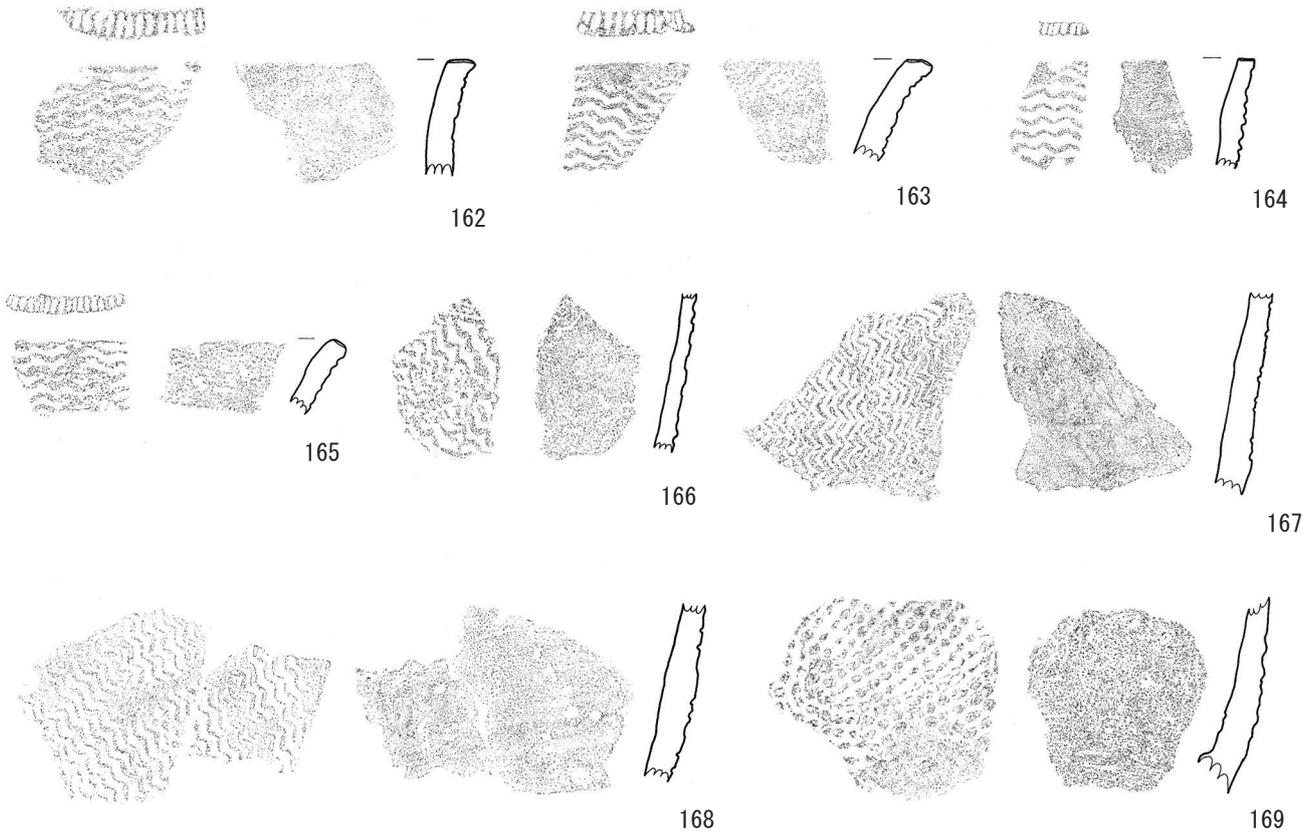
挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第166図	162	I29	VIIb	8類土器	山形押型文	ナデ	ナデ				○	◎		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	
	163	K27	IVa		山形押型文	ナデ	ナデ				○	◎		にぶい黄褐	黒褐色	良	
	164	I29	VI		山形押型文	ナデ	ナデ ケズリ			△	○	◎		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	
	165	K27	IVa		山形押型文	ナデ	ナデ ケズリ	○	○		○	◎		にぶい橙色	にぶい黄褐	良	
	166	J30	VIIa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○		○	○		にぶい黄橙	灰黄褐色	良	大きめの石英が混入
	167	I29	VIIa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○		○	○		橙色	黒褐色	良	大きめの石英が混入
	168	H29	VIIa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○		○	○		にぶい橙色	灰褐色	良	大きめの石英が混入
	169	F28	VIIa		円形押型文	ナデ	ナデ	◎	○		○	○		橙色	灰褐色	良	大きめの石英が多く混入

第29表 9類土器観察表

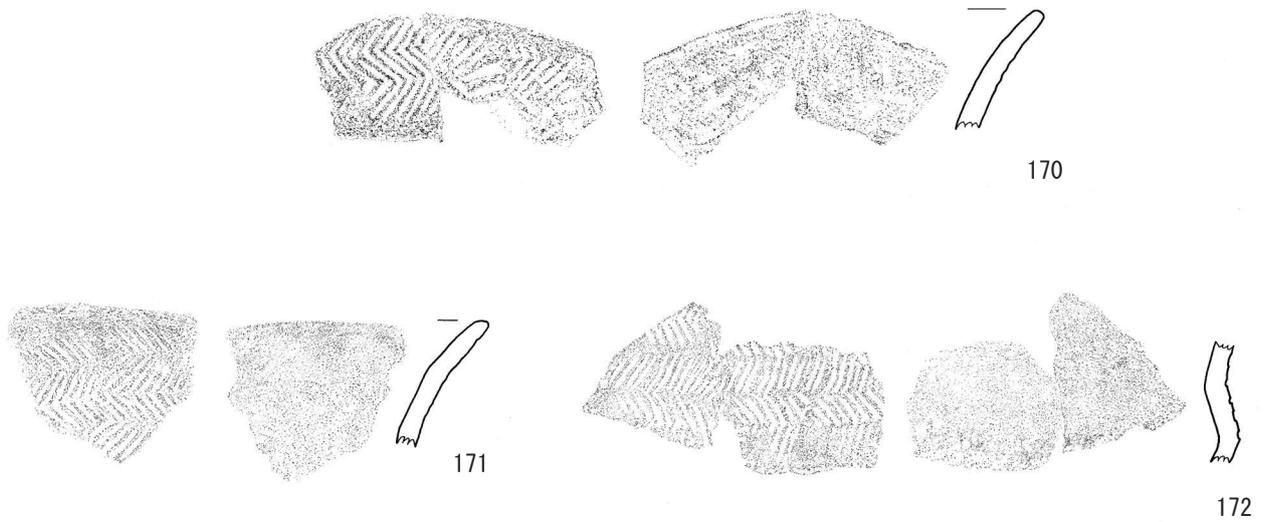
挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第167図	170	J30	VIIa	9類土器	山形押型文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい黄褐	良	
	171	K31	VIIa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	橙色	良	
	172	L32	VIIa		山形押型文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	

第30表 10類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
168図	173	C35	VI	10類	変形撚糸文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	褐色	良	



第166図 8類土器



第167図 9類土器

182は口縁部から胴部の破片である。口縁部が外反する器形を呈す。口唇部は残りが悪いが、部分的に刺突文が確認できる。口縁部には斜位の貝殻条痕文が施され、沈線文による区画が行われている。頸部には2列の貝殻刺突文が施され、胴部には斜位の貝殻条痕文が施される。胴部文様に関しては区画の有無ははっきりしない。器面調整は外面は貝殻条痕後ナデ調整、内面は貝殻条痕もしくはケズリ後ナデ調整が行われている。

183は口唇部に刺突文、口縁部に横位の貝殻条痕文が施される。

184~186は口唇部に刺突文、口縁部に横位・斜位の貝殻条痕文が施される。185の文様の一部は曲線を描く。

187は口唇部に間隔を空けたキザミを施す。口縁部上端には先端の細い工具で沈線文が施され、その下位には貝殻条痕文が施されている。

188は口唇端部に貝殻刺突文が施されている。口縁部には貝殻刺突文、貝殻押引文、縦位貝殻条痕文の順で文様が施されている。

189・190は口縁部上端に貝殻刺突文が1列、その下位には斜位の貝殻条痕文が施されている。

191~197は貝殻条痕文が施されるが、施文が粗い一群であり、施文のはっきりしないものも見られる。

198~205は主として沈線文で文様が施される土器である。198は外反する口縁部片である。口唇部にキザミを施し、口縁部には沈線文による区画の中に斜位沈線文を

施している。器面調整は内外面ともに貝殻条痕後ナデ調整が行われているが、外面には条痕がはっきりと確認できる。

199は口縁部上端に刺突文、その下位には斜位沈線文が交差するように施されている。

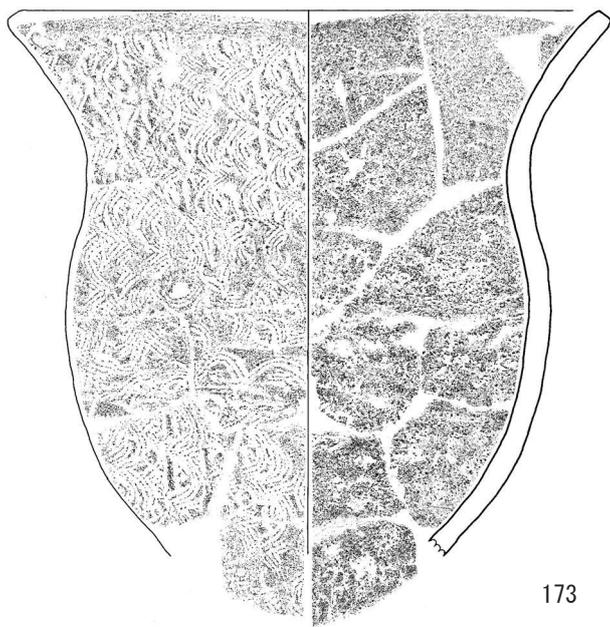
200は口縁部上端に横位沈線文、その下位に斜位沈線文を交差するように施している。文様は粗い。

205は胴部片である。横位貝殻条痕文の下位に沈線文が格子状に施されている。胎土には雲母が見られる。

206~216は主として連続した貝殻刺突文により文様が施される土器である。206は口縁部から胴部下半までの資料である。口縁部は外反し、頸部がわずかにくびれ、胴部がわずかに張る器形を呈す。口縁部から頸部にかけては4列の貝殻刺突文が横位に連続して施されている。胴部には沈線文による区画の中に、斜位の貝殻条痕文が「く」の字状に施されている。器面調整は内外面ともに貝殻条痕後ナデ調整が行われているが、全体的に器面調整は粗く、特に内面は下位ほど貝殻条痕が残る。

207は口縁部から胴部半ほどまでの資料である。頸部に稜を持ち、口縁部が外傾する器形を呈す。外傾する口唇部には貝殻刺突文が施され、口縁部から頸部に2列の貝殻刺突文が施されている。胴部には横位・斜位の貝殻条痕文が施される。器面調整は外面はナデ調整、内面は貝殻条痕後ナデ調整が行われている。

208は口縁部から胴部半ほどまでの資料である。くび



173



第168図 10類土器

れを持たず、ほぼ直行する口縁部は胴部上半からすぼまる器形をしている。口唇端部に貝殻刺突文を施し、口縁部には4列の貝殻刺突文を施す。胴部には横位の貝殻条痕文が7条確認でき、その下位には縦位や斜位方向の貝殻条痕文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

209～216は口縁部片である。209・210は口縁部が「く」の字に屈曲する。

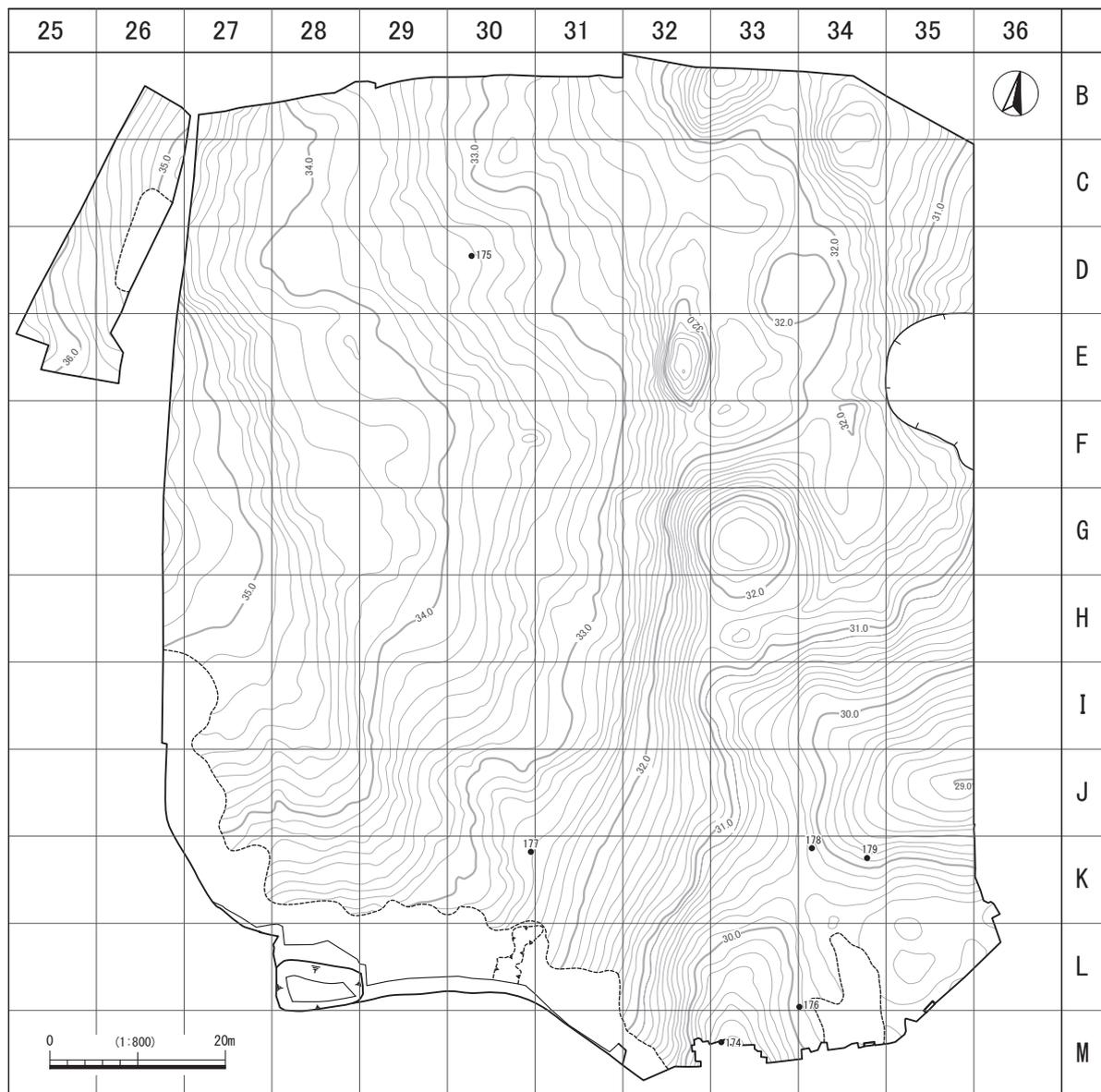
211は波状口縁を呈し、連続した貝殻刺突文が横位や縦位に施される。

212・214・215は連続した貝殻刺突文が斜位・横位に施されているが、一部は押引文のように施されている。

217～220は無文部分が多い土器である。部分的に貝殻刺突文・貝殻条痕文などが施されている。

221～226は貝殻押引文が施される土器である。

221は口縁部から底部付近までが残存する資料である。口径約25.5cm、残存している器高約30cmを呈し、胴部がわずかにくびれる器形を呈している。波状口縁であり、残存している波頂部は2か所であるが、本来は4か所に波頂部を持つと考えられる。口唇は丸みを帯び、明確な文様は確認できない。器面に施される文様は2つの文様帯から成り、文様帯は2列の貝殻押引文により区画されている。口縁部上端から胴部のくびれ部までの第1文様帯には、斜位・縦位の貝殻押引文が施され、それらに区画された空間に円形または半円形の貝殻押引文が施される。胴部くびれ部から胴部下半までの第2文様帯には、斜位の貝殻条痕文が「X」字状に施されている。横位の貝殻押引文で区画された第2文様帯の下位から底部にか



VIII層コンタ図

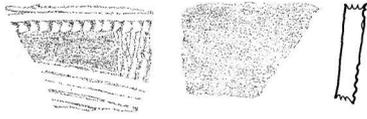
第169図 11類土器分布図



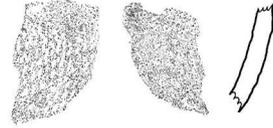
174



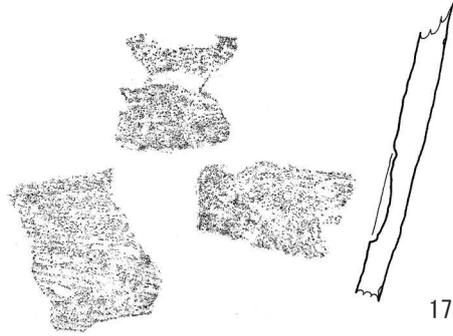
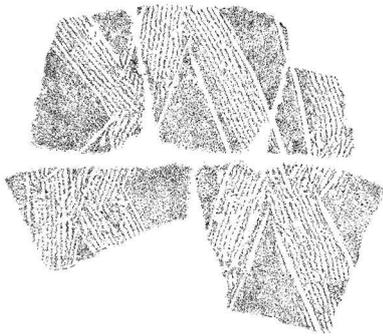
175



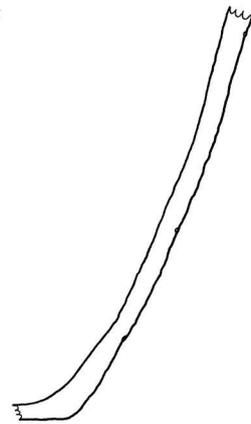
176



177



178



179



第170图 11類土器

けては無文帯と考えられる。器面調整は外面はナデ調整、内面は貝殻条痕後ナデ調整が行われている。

222は口縁部から胴部半ほどまでが残存する資料である。器形は頸部でわずかに屈曲し、口縁部もわずかに外反する器形を呈している。波状口縁を呈し、4か所に波頂部を持つと考えられる。口唇部は丸みを帯び、文様は確認できない。口縁部上端に連続した貝殻押引文を1列、その下位には斜位・縦位の貝殻条痕文や曲線文が施されている。貝殻条痕文の下位には胴部半ほどまで、4列の連続した貝殻押引文が施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。胎土には5mm程の礫が含まれている。

223は外傾する口縁部片である。口縁部上端に貝殻刺突文を1列巡らし、下位には貝殻条痕文と貝殻押引文が交互に施されている。器面調整は外面はナデ調整、内面はケズリ後ナデ調整が行われている。

224・225は波状口縁を呈す口縁部片である。

227～231は胴部片である。

232は底部付近の胴部片、233は底部片である。ともに無文である。

232は下部に底部との接合面が確認できる資料であり、このことから底部とは側面で接合するのではなく、底部に乗せる形で接合していることが分かる。器面調整は外面はナデ調整、内面は胴部でケズリが行われ、底部付近ではケズリ後ナデ調整が行われている。

233は上げ底状の底部を持つ資料である。底部の縁側約2cm程が平坦に整形され、その内側は中心部で約1cm程の上げ底状になっている。文様は斜位の貝殻条痕文が確認できる。器面調整は外面がケズリ後ナデ調整で、全体的に調整が粗いが、底部付近はやや丁寧な横方向のナデ調整が行われている。内面は貝殻条痕後ナデ調整が行われている。底部の器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

13類土器（第181・183図 234～240）

13類土器は土器の器面に、刺突を施した短い突帯を張り付ける土器である。基本的に器壁が厚いのが特徴である。

234は口縁部片である。口唇部は内傾し無文である。やや外傾する口縁部に4本の突帯が横位に張り付けられている。突帯には貝殻を用いて施されたと考えられる刺突文が施されている。器面調整は外面は貝殻条痕後ナデ調整が行われ、部分的に貝殻条痕が残る。内面はケズリ後ナデ調整が行われている。

235～240は胴部片である。236は縦位の突帯が張り付けられている。突帯には貝殻刺突文が確認できる。

237・238には部分的に貝殻押引文が施されている。

240は横位の短い突帯が張り付けられており、刺突文が施されている。器面には幅の短い横位貝殻条痕文が施されている。内外面ともにナデ調整が行われている。

14類土器（第181・184図 241～244）

14類土器はナデ調整が行われた器面に、ミミズばれ状の突帯を施す土器である。約40点程の破片が集中して出土しており、文様・器壁の厚さ・調整・胎土などの共通点からすべて同一個体の破片資料であると考えられる。器壁は5～7mm程度と薄い。

241は口縁部片である。丸みを帯びる口唇端部には刺突文が施されている。口縁部上端には5条のミミズばれ状の突帯が巡り、下位にはミミズばれ突帯により曲線文などが施されている。器面調整は内外面ともにナデ調整が行われている。

242～244は胴部片である。どれもミミズばれ状の突帯により曲線文が施されている。

15類土器（第181・185図 245～247）

15類土器は器面全体に貝殻条痕文で文様が施される土器である。出土量は少ない。

第31表 11類土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第170図	174	M33	VIIa	11類土器	燃糸文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	175	L33	VIIa		燃糸文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰褐色	良	
	176	L34	VIIa		燃糸文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○				にぶい橙色	にぶい褐色	良	外面スス付着
	177	K30	VI		燃糸文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	178	K34	VIIa		燃糸文 沈線文	ナデ	ケズリ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	褐灰色	良	
	179	K35	VI		燃糸文 沈線文	ナデ	ケズリ後 ナデ	○	○	○	○	○		にぶい黄橙	褐灰色	良	

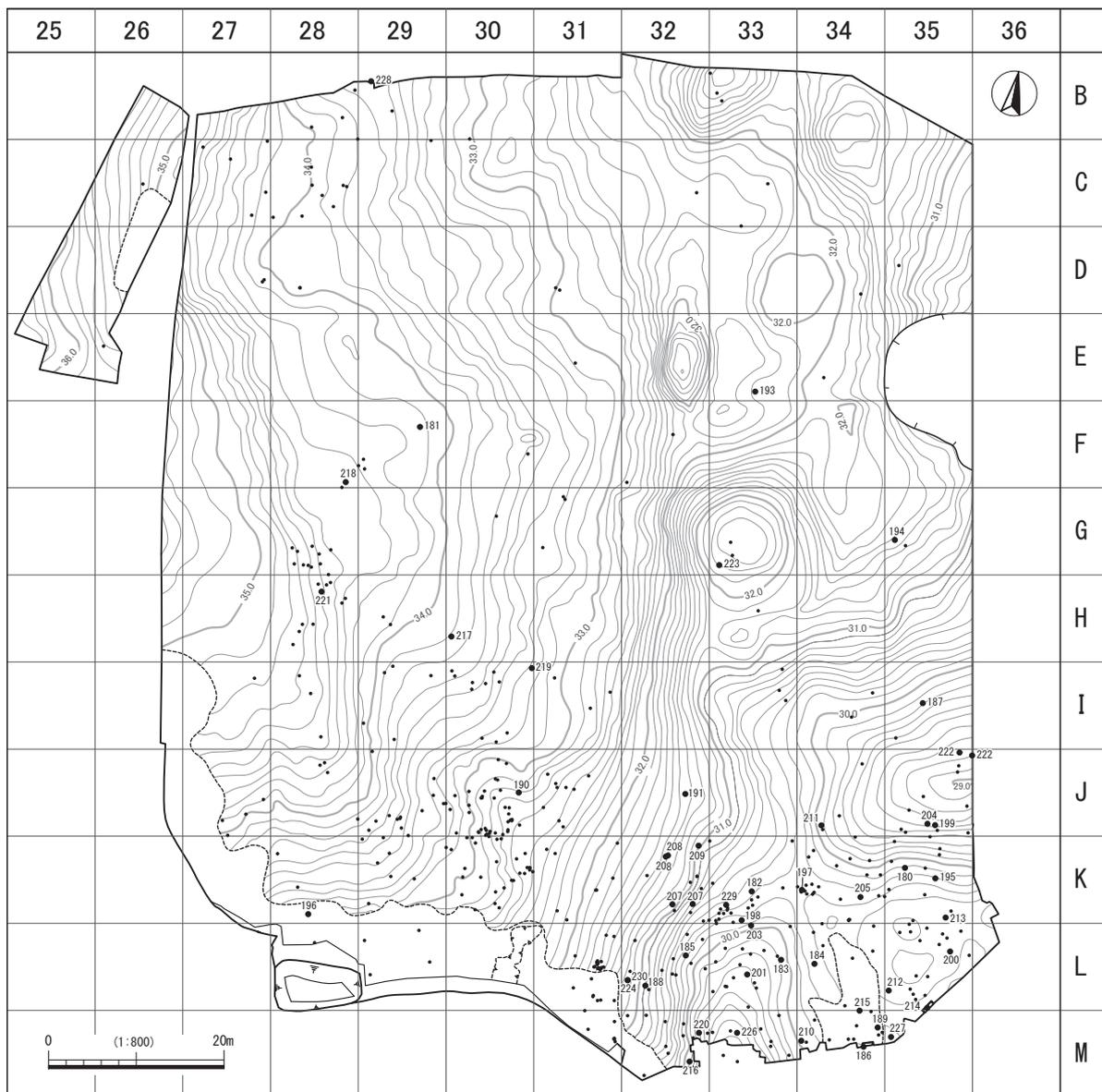
245は口縁部片である。外傾する口縁部は、極わずかに肥厚している。口唇部は内傾し、無文である。口縁部上端に横位の貝殻条痕文が施されている。その下位には、破片資料であるためはっきりはしないが、斜位の貝殻条痕文が綾杉状に施されているようである。器面調整は外面は丁寧なナデ、内面はケズリ、一部ケズリ後ナデ調整が行われている。内面調整は口縁部上端のみ横方向のケズリが行われ、その下位は斜位方向のケズリが行われている。調整の重なり具合から、口縁部の横方向のケズリを最後に行ったのが分かる。

246・247は胴部片である。ともに縦位の貝殻条痕文の上から曲線気味の斜位貝殻条痕文を施している。器面調整は246の内面は非常に丁寧なナデ調整、247の内面は貝

殻条痕後ナデ調整が行われている。3点の資料は調整・色調や胎土が異なることから少なくとも3個体の15類土器が存在していたことが確認できる。

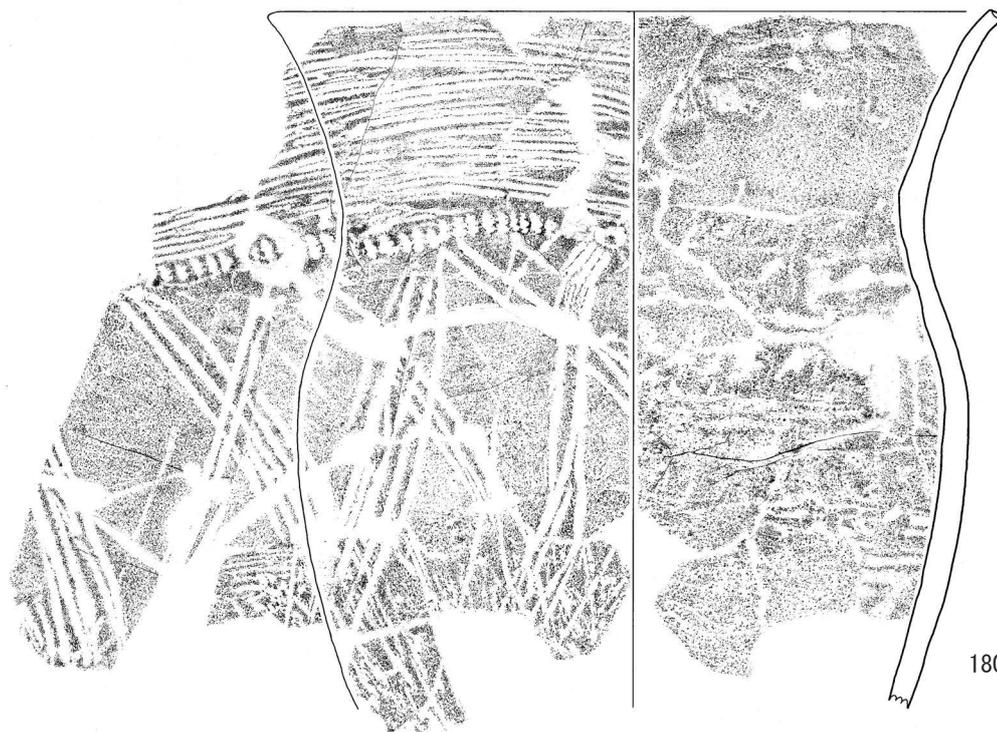
その他の土器(第181・185図 248・249)

248・249は型式不明の土器である。ともに調査区の南側L33区のVI層(縄文時代早期後半)から出土している。小破片であるため土器の上下ははっきりしない。半円状の突帯文が丁寧に張り付けられており、突帯には刺突文などは確認できない。突帯の断面形状は山形であり、半円形の頂部が最も高く3~4mm、端部にいくほど低くなり、最端部では1mm程度の高さしかない。貝殻条痕調整が行われているが、突帯の周辺は突帯を張り付けたた



VIII層コンタ図

第171図 12類土器分布図



180



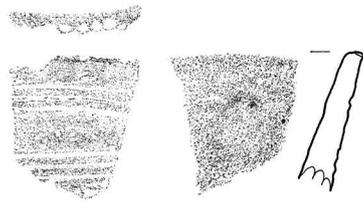
181



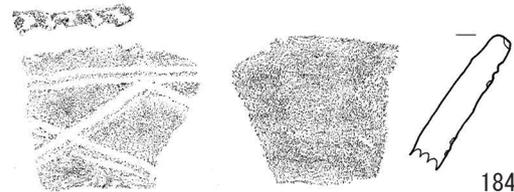
第172図 12類土器 1



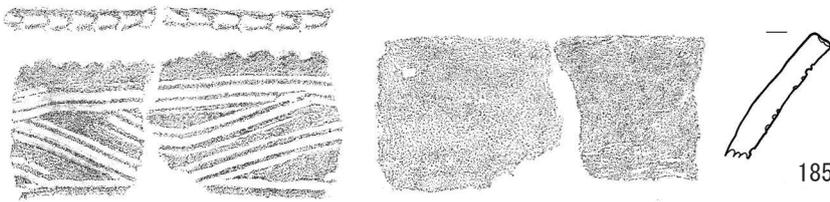
182



183



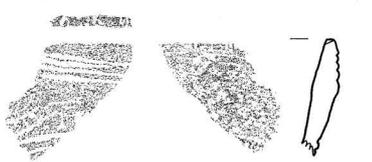
184



185



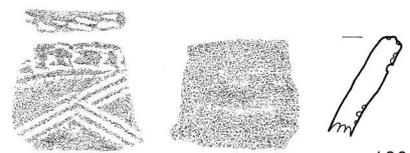
186



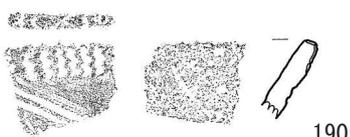
187



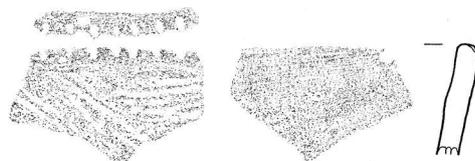
188



189



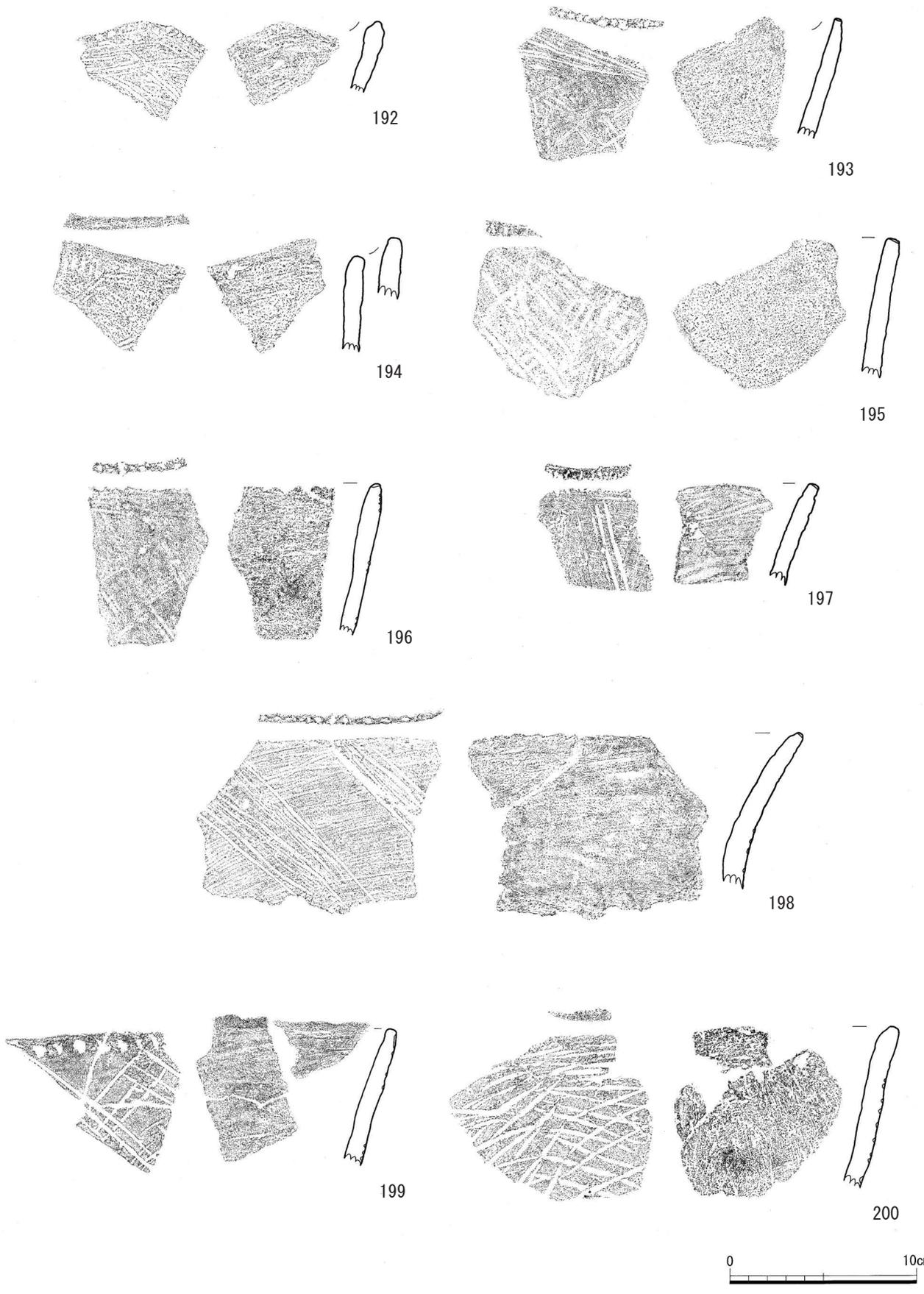
190



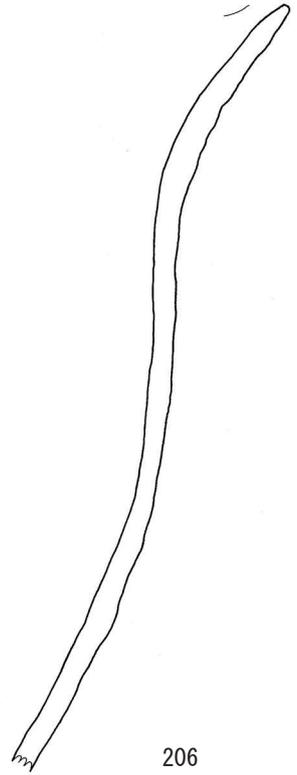
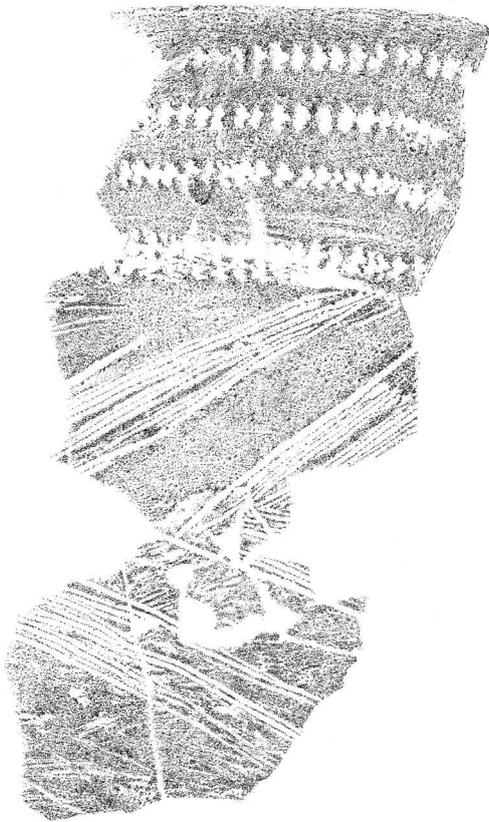
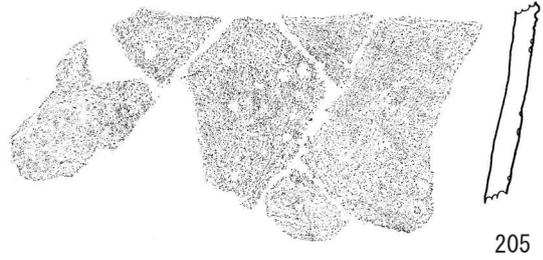
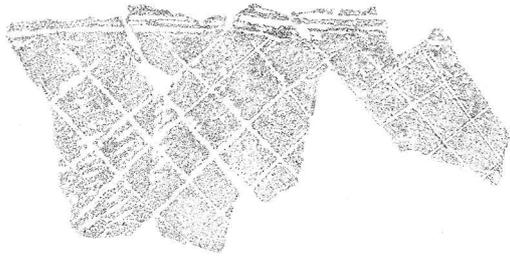
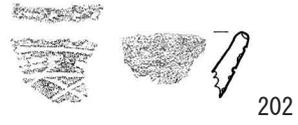
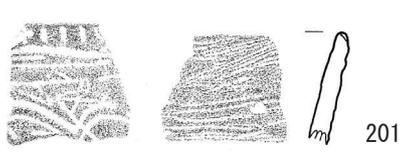
191



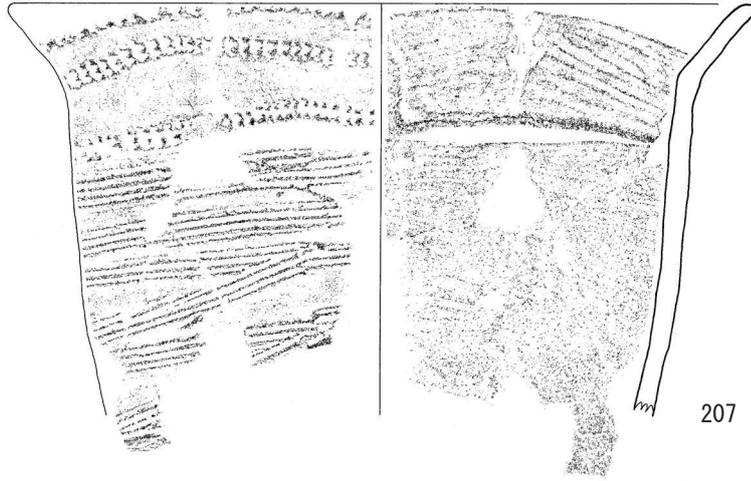
第173図 12類土器2



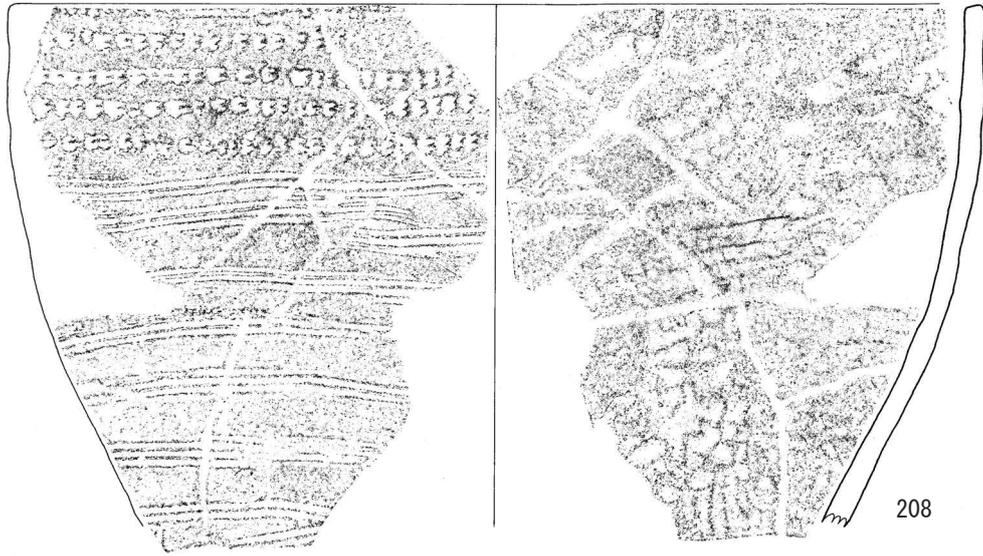
第174図 12類土器 3



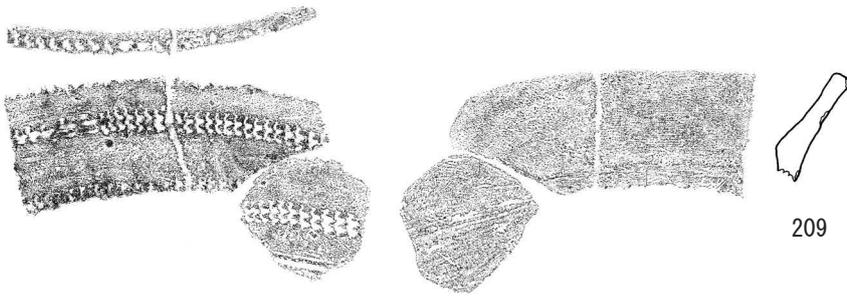
第175図 12類土器 4



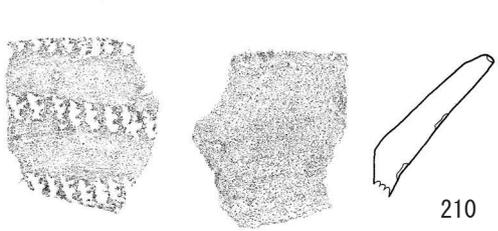
207



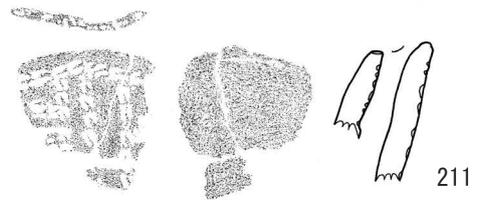
208



209



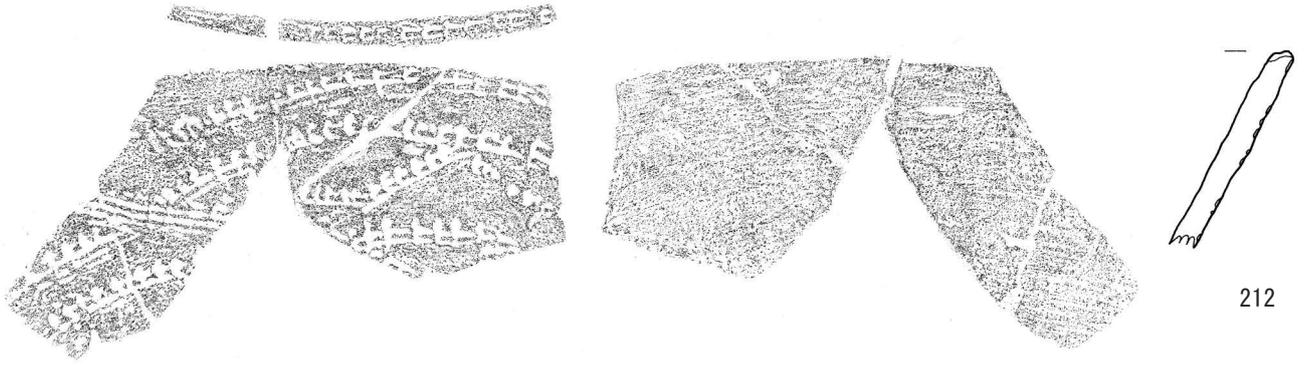
210



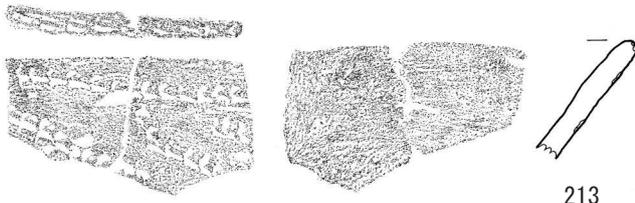
211



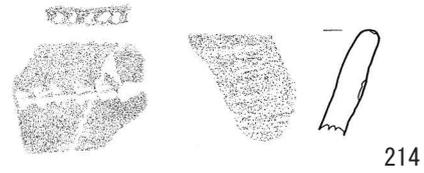
第176図 12類土器 5



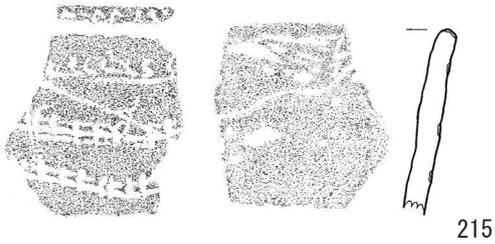
212



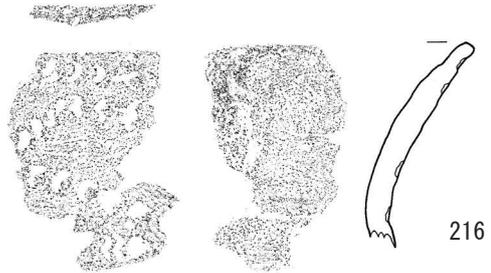
213



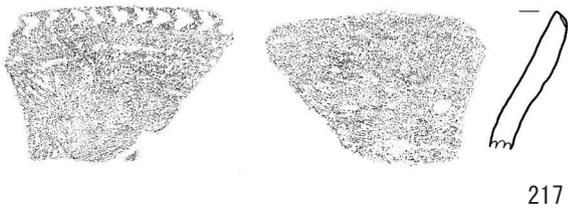
214



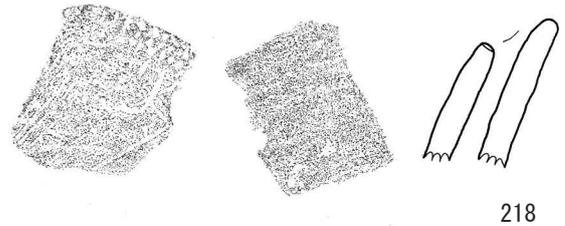
215



216



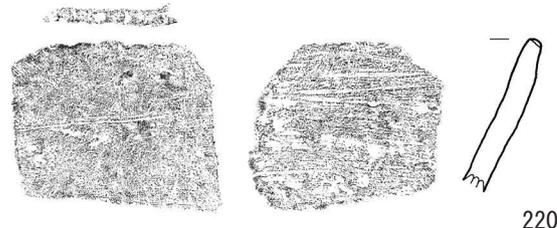
217



218



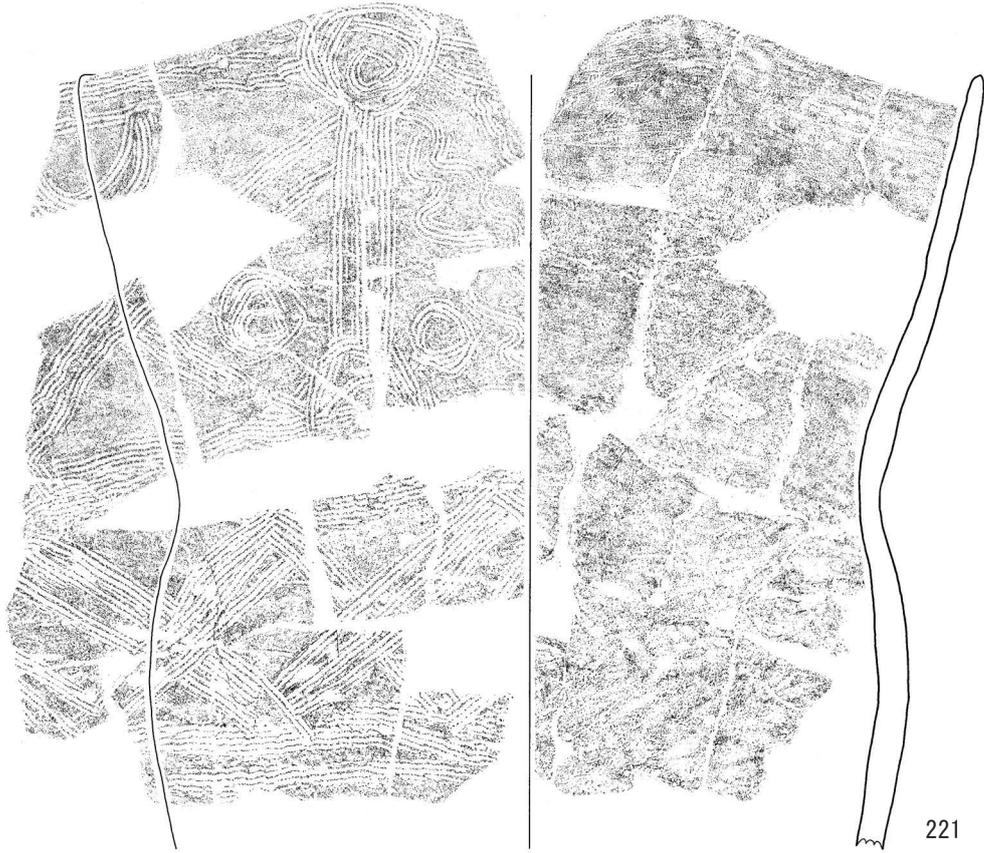
219



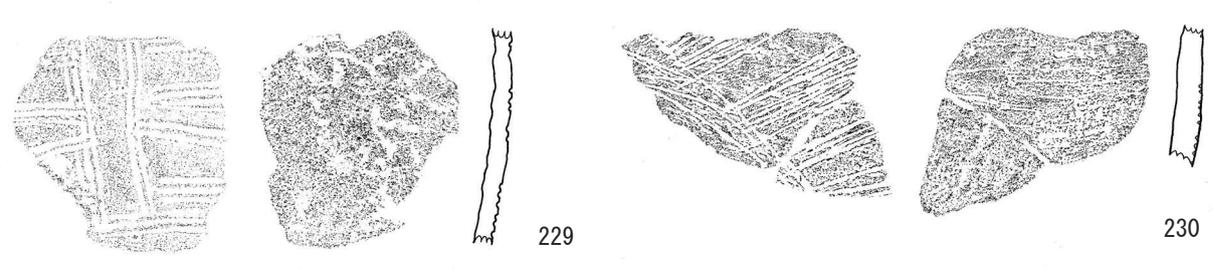
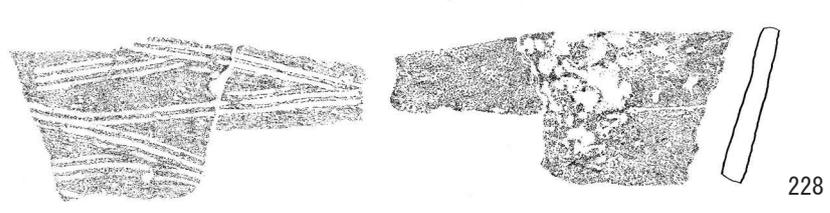
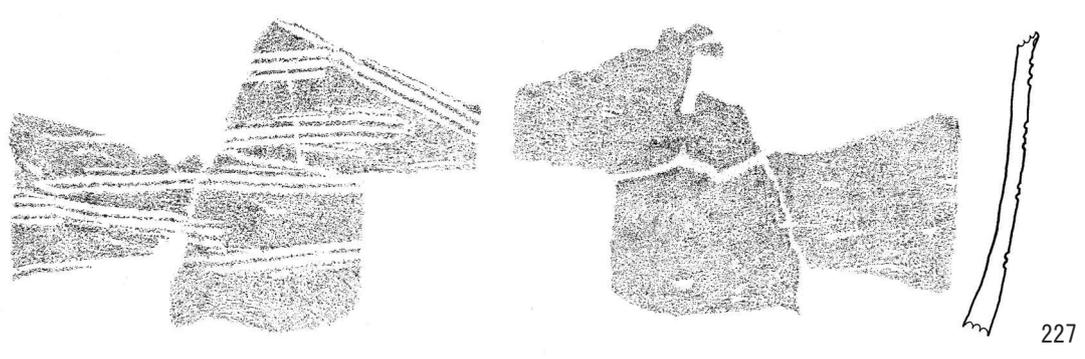
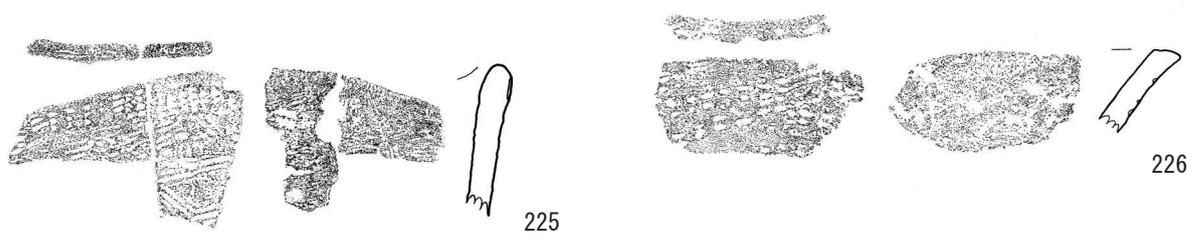
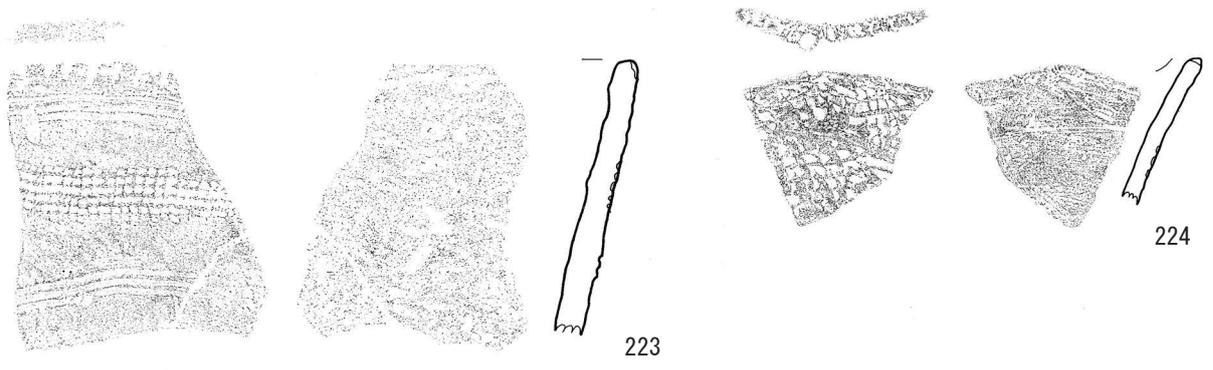
220



第177図 12類土器6

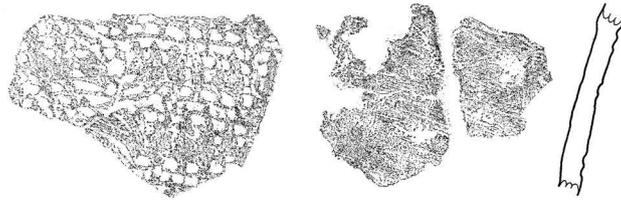


第178図 12類土器 7

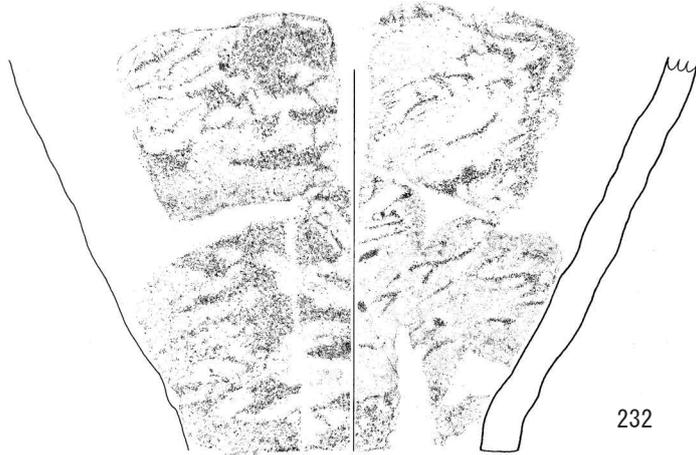


第179図 12類土器 8





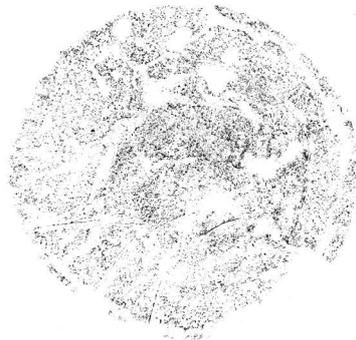
231



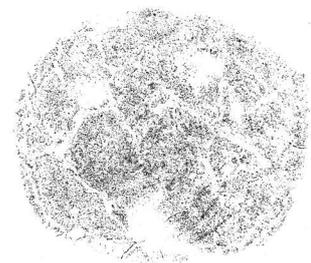
232



233



233 底部外面



233 底部内面



第180図 12類土器 9

第32表 12類土器観察表 1

挿図 番号	遺物 番号	出土区	出土 層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第 172 図	180	K35	VI	12 類 土 器	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ケズリ後 ナデ	ケズリ後 ナデ	○	○	○		○		灰褐色	にぶい黄褐	良	
	181	F29	VI		貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	灰褐色	良	
第 173 図	182	K33	VIIa		貝殻条痕文 貝殻刺突文	貝殻条痕後 ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	にぶい橙色	良	
	183	L33	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		橙色	浅黄橙色	良	
	184	L34	V a		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		黒褐色	にぶい橙色	良	
	185	L32	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい赤褐	良	
	186	M34	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	187	K35	VIIa		貝殻条痕文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	橙色	良	
	188	L32	VI		貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		灰黄褐色	にぶい橙色	良	
	189	M34	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	190	J30	遺構内		貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	暗赤褐色	良	古墳時代遺構内
	191	J32	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	◎	○	○		○		にぶい橙色	にぶい橙色	良	
第 174 図	192	G36	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ ケズリ	○	○	○		○		にぶい褐色	灰褐色	良	
	193	E33	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	橙色	良	
	194	—	—		貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	灰褐色	良	
	195	K35	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	白色粒子多い
	196	K28	V a		貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後 ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	灰褐色	良	
	197	K34	VI		貝殻条痕文	貝殻条痕後 ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	灰褐色	良	
	198	K33	VI		沈線文	貝殻条痕後 ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄褐	良	
	199	J35	VIIa		貝殻刺突文 沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	灰褐色	良	
	200	L35	VIIa		沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	黒褐色	良	
第 175 図	201	L33	VIIa	沈線文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	にぶい黄橙	良		
	202	—	—	沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		—	—	良		
	203	L33	VI	沈線文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	黒褐色	良		
	204	J35	VI	貝殻刺突文 沈線文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	黒褐色	良		
	205	K34	VI	沈線文	貝殻条痕後 ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい褐色	良		
	206	K33	VIIa	貝殻刺突文 貝殻条痕文	貝殻条痕後 ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	明赤褐色	良		
第 176 図	207	K32	VI	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい褐色	良		
	208	K32	VI	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	にぶい褐色	良		
	209	K32	VI	貝殻刺突文 貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良		
	210	M34	VIIa	貝殻刺突文	貝殻条痕後 ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○	○	○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良		
	211	J34	VIIa	貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい褐色	良		

め、貝殻条痕がナデ消されている。内面は貝殻条痕調整が行われており、胎土には雲母を含む。特徴から2点は同一個体と考えられる。

耳栓・垂飾品（第182・186・187図 250～254）

250～253は耳栓である。どれも破損しており、完形品はない。全て調査区の南側L33～35区のVI層から出土している。内外面および側面は、程度は異なるがどれも屈曲する。器面調整はナデ調整が施されている。

251は直径5.2cm、厚さは2cmを測り、無文である。

252は直径5.6cmと4.5cmと内外面で異なる径をもつ。厚さは1.4cmを測り、無文である。

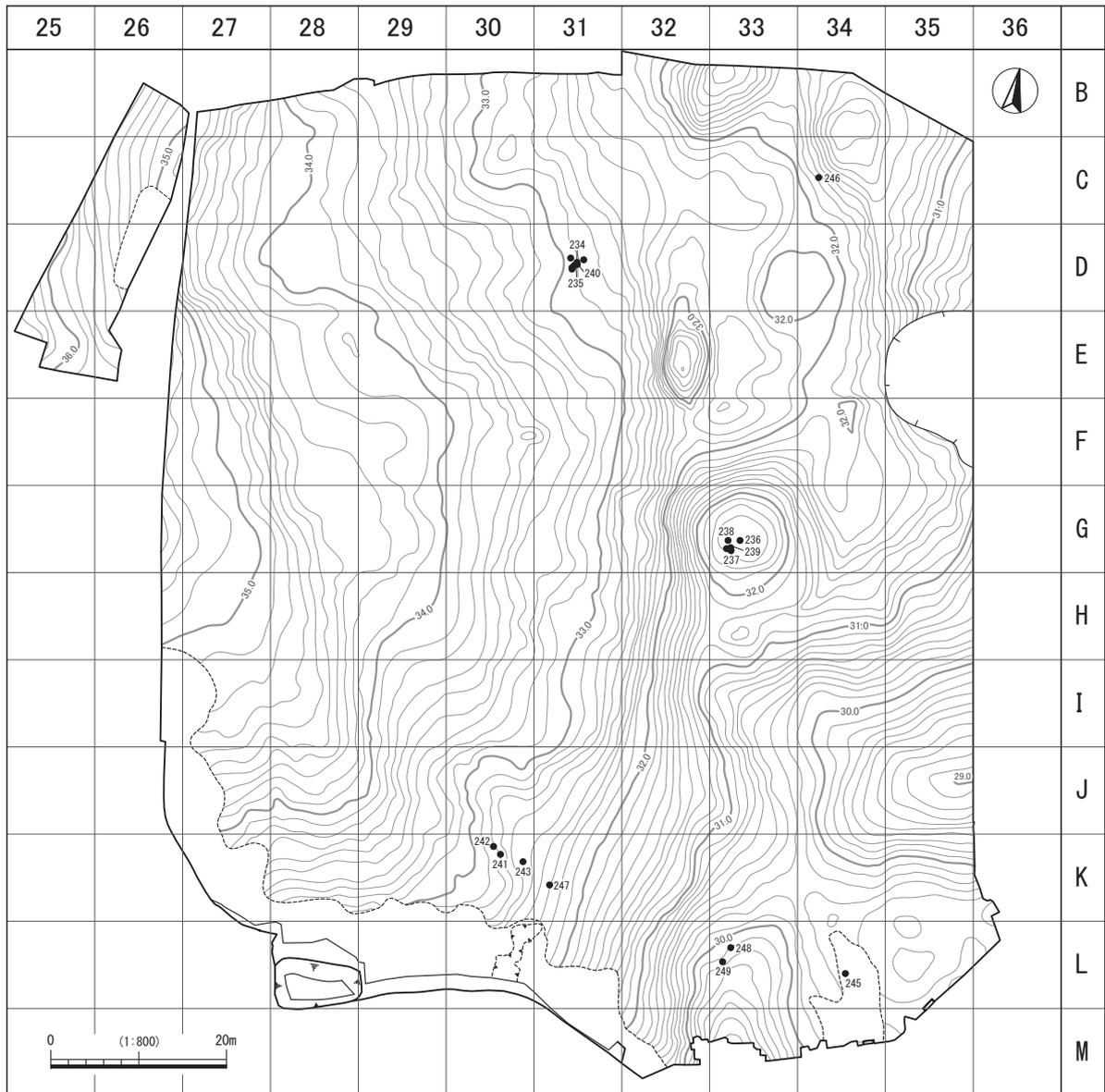
253は直径5cmと4.2cmと内外面で異なる径をもつ。厚さは2cmを測る。片方の面に円形の沈線文が施され、その中は同じく沈線文が格子状に施されている。

254は直径4.8cmと4.6cmと内外面でほぼ同程度の径をもち、厚さは1.6cmを測る。片方の面に先端の尖った工具により細沈線文で曲線文が施されている。また、側面にも細沈線文により鋸歯文が施されている。

254は頁岩製の垂飾品である。当初は塊状耳飾りと考えていたが、切れ目にあたる部分がなく、穿孔の上下ともに破損しているため、垂飾品とした。穿孔は両面から均等に行われている。

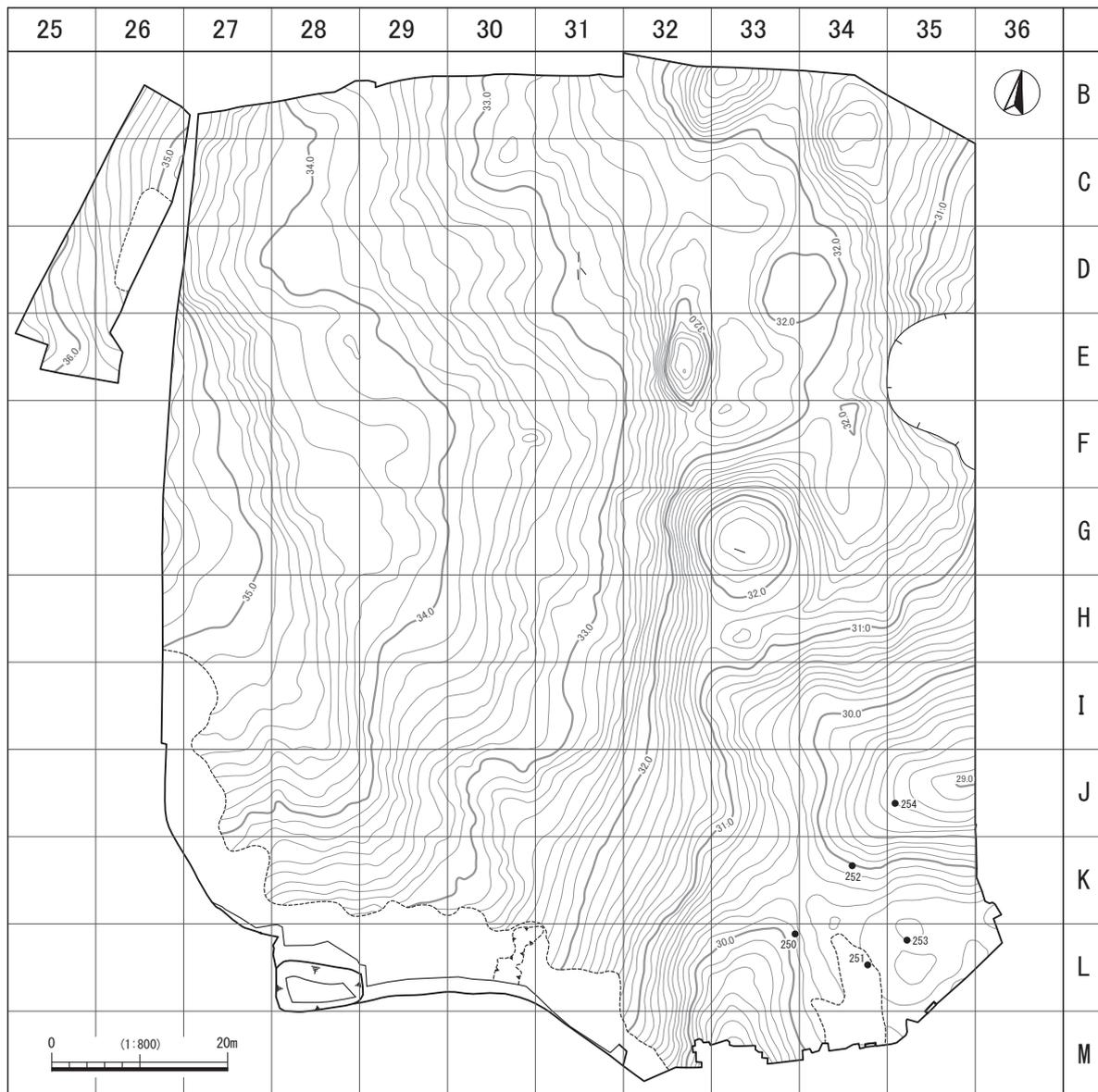
第33表 12類土器観察表2

挿図番号	遺物番号	出土区	出土層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第177図	212	M35	VI	12類土器	貝殻刺突文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	213	M34	VI		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄橙	良	
	214	L35	VIIa		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	にぶい褐色	良	
	215	L34	VI		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい黄褐	良	
	216	M32	VI		貝殻刺突文	ナデ	ナデ	○	○	○	◎	○		にぶい褐色	にぶい橙色	良	
	217	K30	VI		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	218	F28	VI		貝殻刺突文	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい黄橙	灰黄褐	良	
	219	I30	VI		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい黄褐	良	
	220	M32	VI		無文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○	○	○		灰黄褐色	にぶい褐色	良	
第178図	221	H28	VI		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	
	222	J35	VIIa		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		褐色	褐色	良	
第179図	223	G33	VIIa		貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	明赤褐色	良	
	224	L32	VI	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		灰褐色	灰褐色	良		
	225	—	—	貝殻押引文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		—	—	良		
	226	M33	VIIa	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		灰褐色	灰褐色	良	胴部	
	227	M35	VI	貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後ナデ	○	○	○		○		灰褐色	にぶい褐色	良	胴部 白色粒子多い	
	228	K33	VI	貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後ナデ	○	○	○		○		にぶい黄褐	にぶい褐色	良	胴部 白色粒子多い	
	229	K33	VIIa	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○	○	○		にぶい褐色	暗褐色	良	胴部	
	230	—	—	沈線文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		—	—	良	胴部	
第180図	231	L32	VI	貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい赤褐	にぶい赤褐	良	胴部	
	232	K33	VI	無文	ナデ	ナデ ケズリ後ナデ	○	○	○		○		褐色	灰褐色	良	底部付近	
	233	K35	VI	無文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい褐色	にぶい褐色	良	底部	



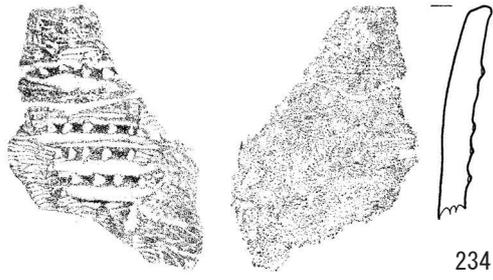
Ⅷ層上面コンタ図

第181図 13~15類土器分布図

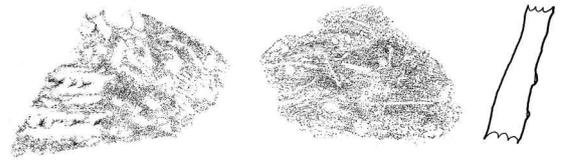


Ⅷ層上面コンタ図

第182図 耳栓・垂飾品分布図



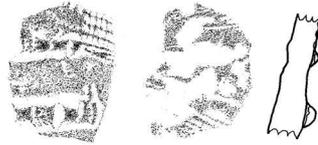
234



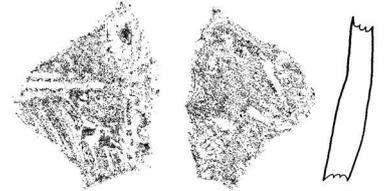
235



236



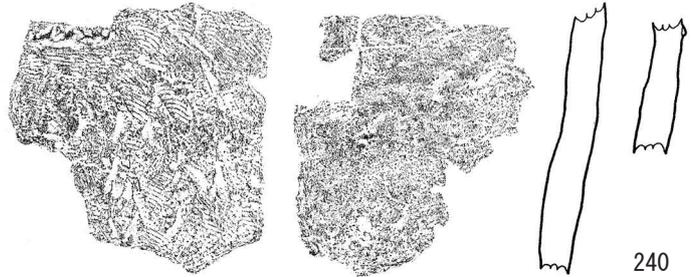
237



238

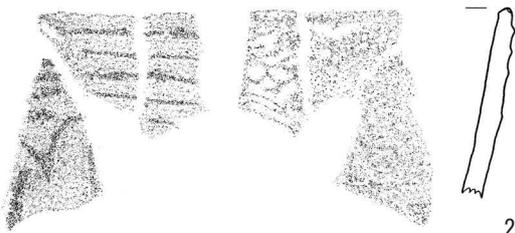


239

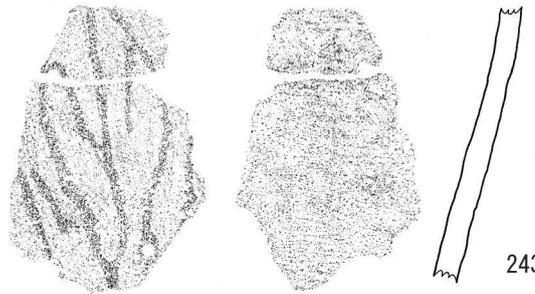


240

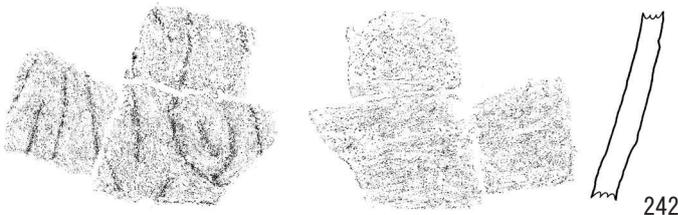
第183圖 13類土器



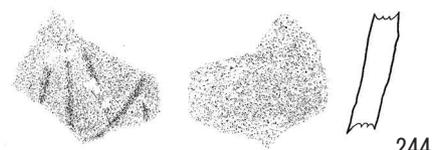
241



243



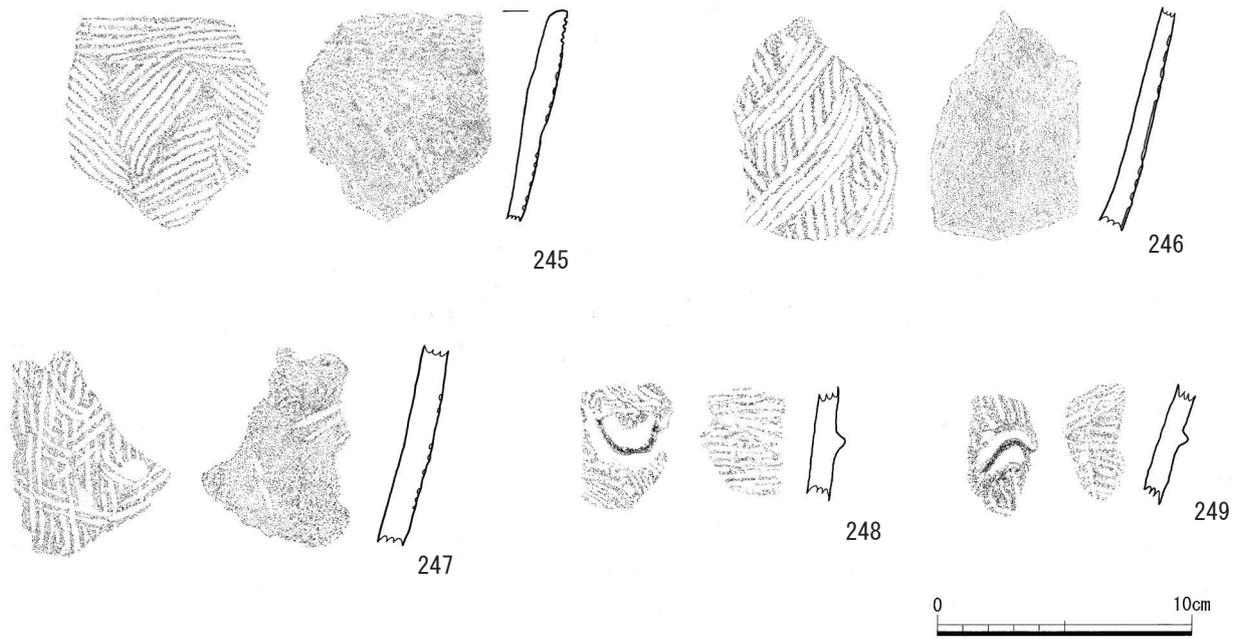
242



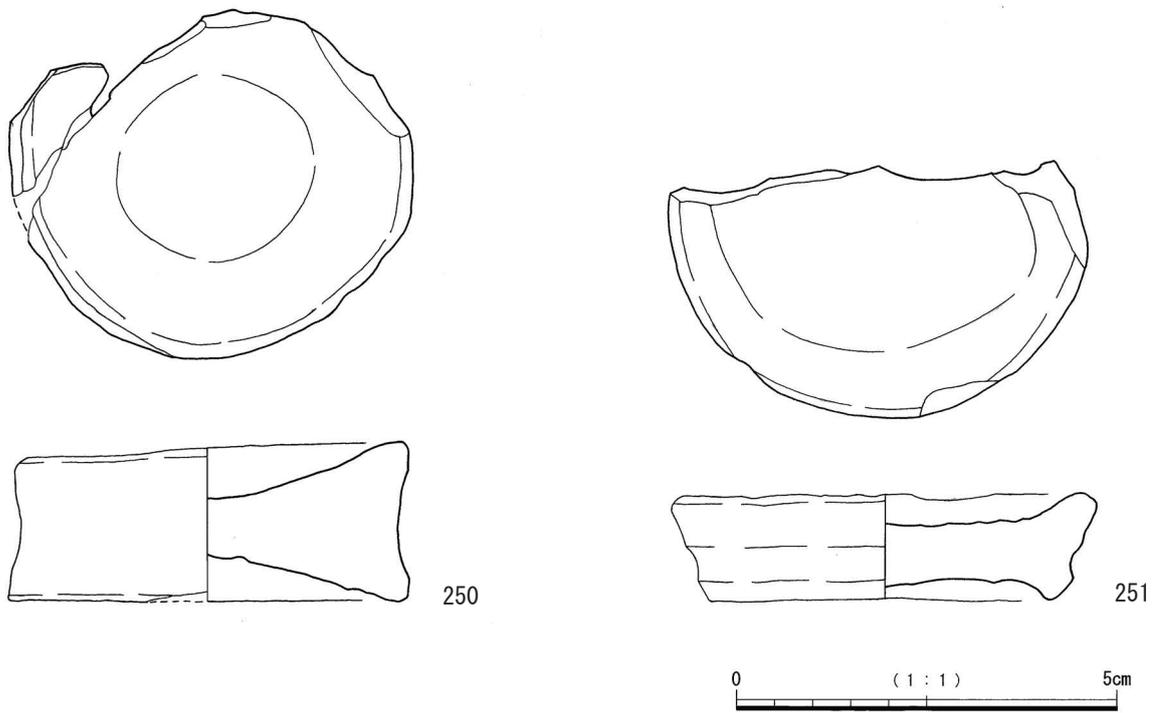
244



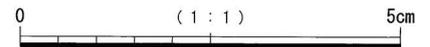
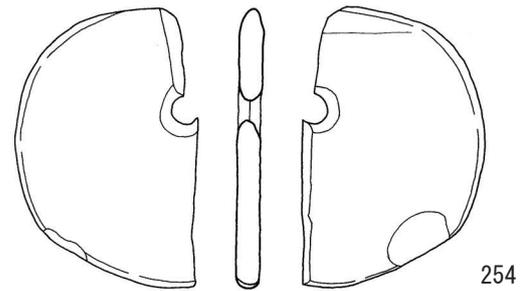
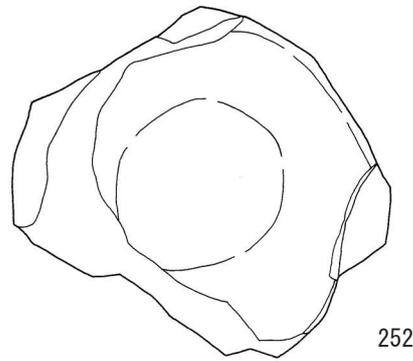
第184圖 14類土器



第185図 15類土器・その他土器



第186図 耳栓 1



第187図 耳栓2・垂飾品

第34表 13類土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	出土 層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第 183 図	234	D31	VI	13 類 土 器	突帯文 (貝殻刺突)	貝殻条痕後 ナデ	ケズリ後 ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	235	—	VI		突帯文 (貝殻刺突)	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	236	G33	VI		突帯文 (貝殻刺突)	貝殻条痕後 ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		明赤褐色	橙色	良	
	237	G33	VI		突帯文 貝殻押引文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	238	G33	VI		突帯文 貝殻押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい黄褐	良	
	239	G33	VI		突帯文 (貝殻刺突)	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	にぶい橙色	良	
	240	D31	VI		突帯文 貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		にぶい橙色	灰黄褐色	良	

第35表 14類土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	出土 層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第 184 図	241	K31	VI	14 類 土 器	ミミズばれ 突帯文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	242	K30	VI		ミミズばれ 突帯文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	243	K30	VI		ミミズばれ 突帯文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	
	244	K30	VI		ミミズばれ 突帯文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	橙色	良	

第36表 15類土器・その他土器・耳栓観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	出土 層位	分類	文様	器面調整		胎土						色調		焼成	備考
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	その他	外面	内面		
第 185 図	245	L34	VIIa	15 類 土 器	貝殻条痕文	ナデ	ケズリ後 ナデ	○	○	○		○		浅黄橙色	浅黄褐色	良	
	246	C34	VIIa		貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○	○	○		○		橙色	灰黄褐色	良	
	247	K31	VIIa		貝殻条痕文	ナデ	貝殻条痕後 ナデ	○	○	○		○		橙色	黒褐色	良	
	248	L33	VI	そ の 他	突帯文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○	○	○		橙色	灰黄褐色	良	
	249	L33	VI		突帯文	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○	○	○		橙色	灰黄褐色	良	
第 186 図	250	L33	VI	耳 栓	無文	ナデ		○	○	○		○		にぶい橙色		良	
	251	L34	VI		無文	ナデ		○	○	○	○	○		にぶい赤褐		良	
第 187 図	252	K34	VI		沈線文	ナデ		○	○	○		○		褐灰色		良	
	253	L35	VI		沈線文	ナデ		○	○	○		○		橙色		良	

(2) 石器

Ⅶb・Ⅶa層及びⅥ層は、縄文時代早期に比定される層位である。石器は両層位合わせて111点を図化した。報告に際しては、遺物を出土層位別及び器種別に掲載し、図化した遺物については遺物分布図を作成して掲載した。なお、Ⅶb・Ⅶa層から出土した遺物については、Ⅶ層出土石器として合わせて報告する。

Ⅶ層出土石器 (第188図)

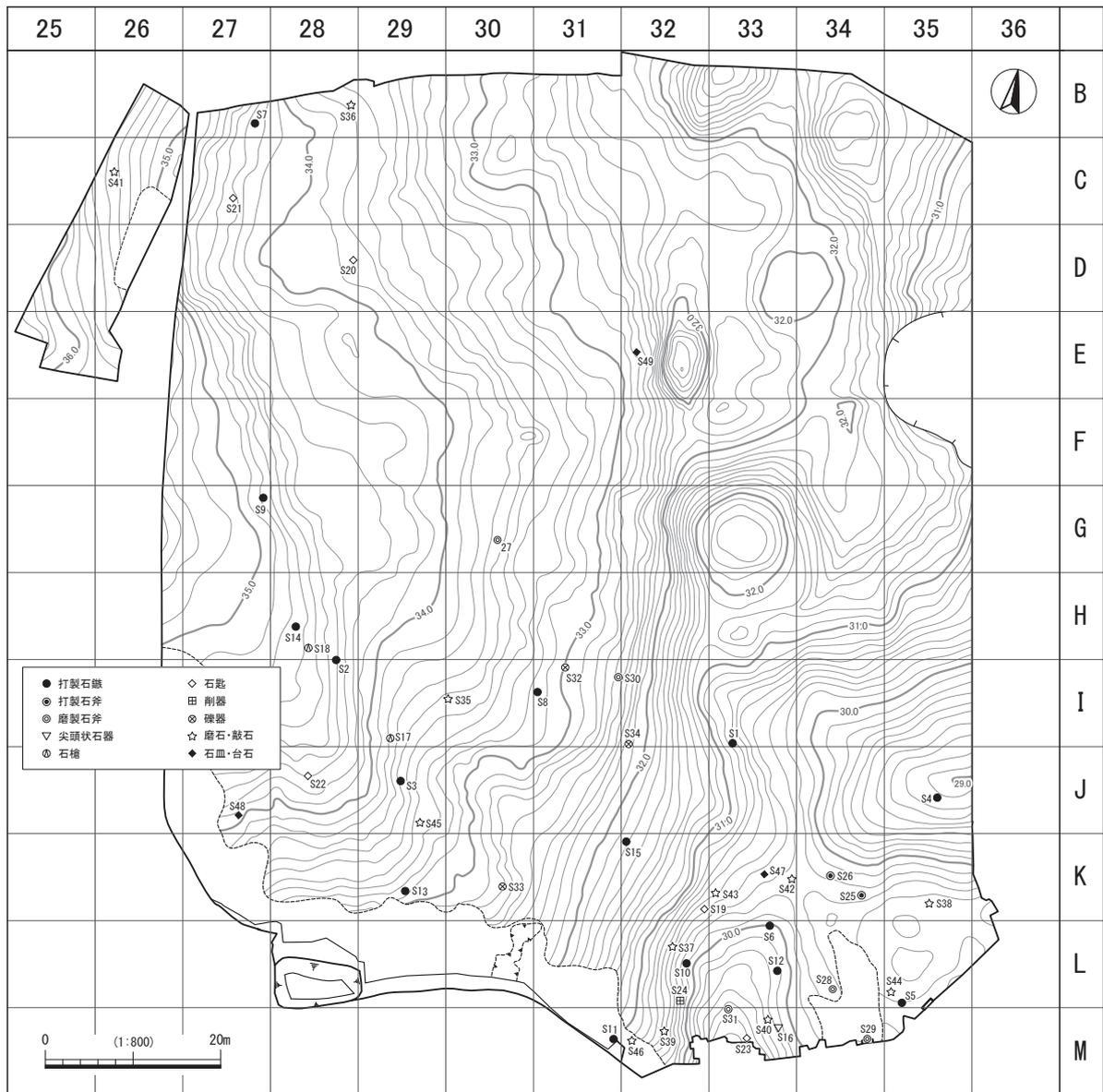
本層位からは、打製石鏃32点、尖頭状石器1点、石槍2点、石匙9点、削器3点、打製石斧3点、磨製石斧6点、礫器8点、磨・敲石59点、石皿・台石13点、石核1点、剥片類4点が出土しており、そのうち、49点を図化した。図化した石器類の遺物分布を見ると、主な分布域

が2か所に分かれる。1か所はⅠ区以南の調査区南部であり、もう1か所はB～D26～28区の調査区北西部である。調査区北東部では遺物の分布はほとんど見られない。遺物は散在した状況で分布しているが、調査区南東部で分布がやや密になる傾向が見られる。遺物分布を器種別に見ると、磨・敲石はK～M32～35区でまとまった分布が見られるが、その他の器種については散在した状況である。

打製石鏃 (第190図 S1～S15)

S1～S15は打製石鏃であり、S1・S2は1類、S3～S9は2類、S10は3類、S11～S15は5類に分類される。

S1は形状が正三角形を呈し、基部に抉りは見られない。裏面に自然面を残す。S2は形状が正三角形を呈し、



Ⅶ層上面コンタ図

第188図 Ⅶ層出土石器分布図

基部に挟りは見られない。先端部と左脚端部を欠失している。裏面には素材の剥離面が残る。S3は形状が二等辺三角形を呈し、基部には浅く挟りが入る。先端部を欠失している。S4は裏面に主剥離面を大きく残している。先端部と左脚端部の一部を欠失している。S5は側縁中央で浅くくびれる形状を呈している。基部の挟りは浅い。S6は両側縁部の中央から下半にかけてわずかに鋸歯状を呈している。S7は基部に「U」字状に挟りが入り、左脚部を欠失している。S8は基部に浅く挟りが入る。先端部と左脚端部を欠失している。S9は大型の石鏃であり、基部には深く挟りが入る。先端部と左脚部を欠失している。非常に細かい二次加工が施されている。S10は五角形状を呈し、基部には「U」字状の挟りが入る。肩部が下位に位置し、肩部から脚部にかけて幅が狭まる。表面中央には研磨の跡と思われる擦痕が確認できる。裏面には主剥離面が残る。S11は打製石鏃の未製品であり、表裏面ともに粗い剥離が残る。S12はいわゆる「トロトロ石器」に類似しているが、摩滅等は見られない。先端部を欠失しており、両脚部は左右非対称である。S13は横に広い二等辺三角形を呈し、基部には浅く挟りが入る。S14は側縁部がわずかに内湾しており、基部には浅く挟りが入る。左右非対称である。左脚部を欠失している。S15はS12と類似したものであり、先端部と脚部を欠失している。

尖頭状石器 (第191図 S16)

S16は尖頭状石器である。節理を有する中型の剥片を素材としており、三角形に整形されている。右側縁は表裏面から連続した二次加工が施され、緩やかな弧状を呈する等、両側縁で二次加工や形状の相違が見られる。右側等刃部とする石匙の再利用品の可能性が考えられる。

石槍 (第191図 S17・S18)

S17・S18は石槍である。S17はほぼ完形品であり、丁寧な両面加工が施されている。上半部と比べ下半部がやや広で、基端部が尖る形状である。S18はS17と類似した形状であるが、基部は尖らない。尖頭部を欠失している。

石匙 (第192図 S19～S23)

S19～S23は石匙であり、S19～S21は1類、S22～S23は2類に分類される。S19は三角形を呈しており、摘み部から胴部にかけて浅い挟りを有している。摘み部には自然面を残し、刃部には角度の浅い二次加工が施されている。S20は横長の剥片を素材としており、素材の末端側に刃部が形成されている。S21は小型で、二次加工は部分的に施されるのみである。S22は小型でやや厚みのある剥片が素材であり、右側面に折断面を有している。S23は刃部幅が広い形状である。

削器 (第193図 S24)

S24は削器である。ホルンフェルス製の横長の剥片を

素材にしており、素材の末端側に連続した二次加工が施されて直線状の刃部が作出されている。素材の打面は除去されている。両側縁にも二次加工が施されている。

打製石斧 (第193図 S25・S26)

S25・S26は打製石斧であり、いずれも1類に分類される。S25は器厚が薄く、短冊形を呈する。ほぼ全面に自然面を残している。裏面の右側面には角度の浅い二次加工が平行に施されており、両側面で加工が異なっている。VII a層出土だが、上層からの混入の可能性もある。S26は刃部が欠失しているが、短冊形を呈すると想定される。器厚は厚い。両側縁粗整形後に細加工が施されて整形されている。裏面には自然面を残す。

磨製石斧 (第194図 S27～S31)

S27～S31は磨製石斧であり、S27～S29は2類、S30・S31は3類に分類される。S27は刃部片であり、基部を欠失している。研磨により刃部が作出されている。刃部から側縁部にかけて摩滅・摩耗が確認される。S28は基部を欠失している。刃部の表面には使用時の剥離痕と思われる研磨後の剥離痕が確認できる。S29は刃部片である。両側縁には潰れ痕が確認できる。S30は鑿状を呈する小型の石斧である。基部を欠失している。自然面を有するやや薄手の剥片が素材である。刃部と側縁部に摩耗が見られる。S31は鑿状を呈する。全体的に風化が進んでいるが、表面や右側縁等に研磨痕が確認できる。刃部には使用痕と思われる剥離が見られる。

礫器 (第195図 S32～S34)

S32～S34は礫器である。S32は扁平な角礫を素材とし、両側縁に裏面側から二次加工が施されて刃部が作出されている。上面及び裏面には自然面をそのまま残している。S33は三角形を呈する角礫の一边に片面加工の刃部が作出されている。裏面下半部には敲打痕に類似した跡が部分的に確認できる。S34は扁平な角礫の一边に片面加工が施されて、弧状を呈する刃部が作出されている。刃部の作出以外の二次加工は見られない。

磨・敲石 (第195～197図 S35～S46)

S35～S46は磨・敲石である。S35は裏面中央に凹みを持ち、表面中央にも浅い凹みが見られる。側面には敲打痕が確認でき、表裏面には磨面が見られる。S36は扁平な円礫を素材としている。表裏面を磨面として利用し、側面は全周にわたって敲打痕が見られる。裏面上半に欠損箇所が見られる。S37は扁平な礫を素材としている。敲打痕は主に両側面に見られ、表裏面には磨面が確認される。S38は表裏面を磨面として利用している。S39は棒状を呈する礫を素材としている。素材の両端を敲石として利用しており、敲打痕は側面まで広がって見られる。S40は表面中央に浅い凹みを持ち、裏面や側面に敲打痕が見られる。S41は大半が欠損しており、残存長は5.5cmを呈する。表裏面に磨面や敲打痕が見られる。S

42は表面中央にはやや浅い凹みが見られる。S43は楕円形を呈する礫を素材としている。側面下半を中心に敲打痕が見られる。S44は側面に敲打痕が確認でき、表裏面にも敲打痕が見られる。S45は楕円形を呈する。両側面及び上面に敲打痕が確認できる。S46は表裏面に主に磨面が見られ、敲打痕は部分的に確認できる。

石皿 (第197図 S47~S49)

S47~S49は石皿類である。S47は表裏面及び右側面の3面に研磨面が形成されており、研磨面はわずかに凹む程度の緩やかな曲面状を呈している。また、表裏面には部分的に敲打痕が確認できることから、石皿から砥石に転用された資料と考えられる。当初は石皿として利用されていたと考えられるため、石皿に分類している。S48は緩やかな凹みを持つ石皿片であり、両側面及び下半部を欠失している。S49は扁平な礫を素材とした大型の石皿で、表面中央に浅い凹みが見られる。表面の右下には欠損箇所が見られる。

VI層出土石器 (第189図)

本層位からは、打製石鏃65点、磨製石鏃1点、石匙18点、削器3点、石錐5点、異形石器1点、打製石斧4点、磨製石斧4点、礫器8点、磨・敲石68点、石皿・台石10点、軽石製品3点及び剥片類5点が出土しており、そのうち、62点を図化した。図化した石器類の遺物分布を見ると、主な分布域が3か所に分かれる。1か所はI~M33~35区の調査区南東部であり、残り2か所はH~J28~30区の調査区南西部、及び、B~H32~35区の調査区北東部である。遺物分布を器種別に見ると、石鏃は33区以東に、磨・敲石はK・M34・35区に分布のまとまりが見られる。

打製石鏃 (第198~199図 S50~S64)

S50~S64は打製石鏃であり、S50は1類、S51~S63は2類、S64は5類に分類される。S50は形状が正三角形を呈し、基部はわずかに外湾する。表裏面ともに中央に素材の剥離面を残す。S51は形状が二等辺三角形を呈し、基部には抉りが入る。両側縁がわずかに弧状を呈する。S52は形状が二等辺三角形を呈し、基部には抉りが入る。両脚部は左右非対称になっている。S53は側縁中央から脚部にかけて鋸歯状になっている。S54は側縁中央にわずかにくびれが入る。S55は形状が二等辺三角形を呈し、基部には抉りが入る。S56は先端部と脚部を欠失しているが、二等辺三角形を呈すると想定される。S57は形状が二等辺三角形を呈し、側縁部中央がわずかにくびれる。先端部と右脚端部が欠失している。S58は形状が二等辺三角形を呈し、基部には抉りが入る。右脚端部が欠失している。S59は基部にわずかに抉りが入る。S60は形状が二等辺三角形を呈し、基部には抉りが入る。S61は形状が二等辺三角形を呈する。左脚部が欠失して

いる。S62はやや大型の石鏃であり、基部には抉りが入る。裏面には主剥離面が残る、両側縁部の下半で浅くくびれが入り、脚部で弧状を呈する。S63は左半部を欠失している。側縁部には深く剥離が施される。S64は「トロトロ石器」に類似しているが、摩擦は見られない。左脚部を欠失している。

磨製石鏃 (第199図 S65)

S65は磨製石鏃である。基部にわずかに抉りが入る。基部に研磨後にできた剥離面が見られる。先端部から右側縁部の上半を欠失している。

石匙 (第199~203図 S66~S76)

S66~S76は石匙であり、全て2類に分類される。S66は素材剥片の末端側に刃部が作出されている。左右非対称形を呈しており、摘み部は欠損している。S67は横長の剥片の打面部に小さな摘み部が作出されている。刃部は弧状を呈している。S68は刃部が直線状を呈しており、摘み部を部分的に欠失している。風化の進んだ素材を使用しており裏面中央には剥落痕が見られる。二次加工はやや粗雑である。S69は厚みのある素材を使用しており、三角形を呈する。刃部右端は欠損である。S70は縦長の剥片を横用に用い、片方の側縁に刃部が作出されている。右側縁には素材の打面が残されている。素材の剥離面を大きく残している。S71は横長の剥片の末端側に直線状の刃部が作出されている。左半を欠失している。S72は薄手の剥片が素材と思われるが、風化が著しく剥離面はやや不明瞭である。素材の剥離面を大きく残している。幅の広い摘み部で、刃部は弧状を呈している。S73は刃部がやや屈曲して左右非対称形を呈している。刃部加工は左側縁から刃部中央付近まで施されており、刃部右半は素材の縁辺をそのまま刃部に利用している。右側縁に部分的に欠損が見られる。S74は裏面が素材の主要剥離面であり、横長の剥片の末端側に刃部が作出されている。両側縁及び摘み部は欠損している。S75は細身・横長の石匙であり、裏面に素材の主要剥離面を据え、素材の末端側に直線状の刃部が作出されている。S76は扁平で自然面を大きく残す剥片を素材に利用している。両側縁を欠損している。

削器 (第204図 S77)

S77は削器である。縦長の剥片の片側縁に表裏面側から二次加工が施されて刃部が作出されている。左側面は自然面で素材の打面であり、上面にも自然面を残す。右側面は折断面である。

石錐 (第204図 S78・S79)

S78・S79は石錐である。S78は摘み状の頭部と長い錐部を持つ定型的な石錐で、摘み部には素材の剥離面をそのまま残している。S79は三角形を呈しており、裏面に主要剥離面を残している。先端部を欠損している。

異形石器 (第204図 S80)

S80は異形石器である。「U」字状を呈するが左右非対称であり、右側縁から左側縁に向かうにつれて幅が広がる。用途は不明である。

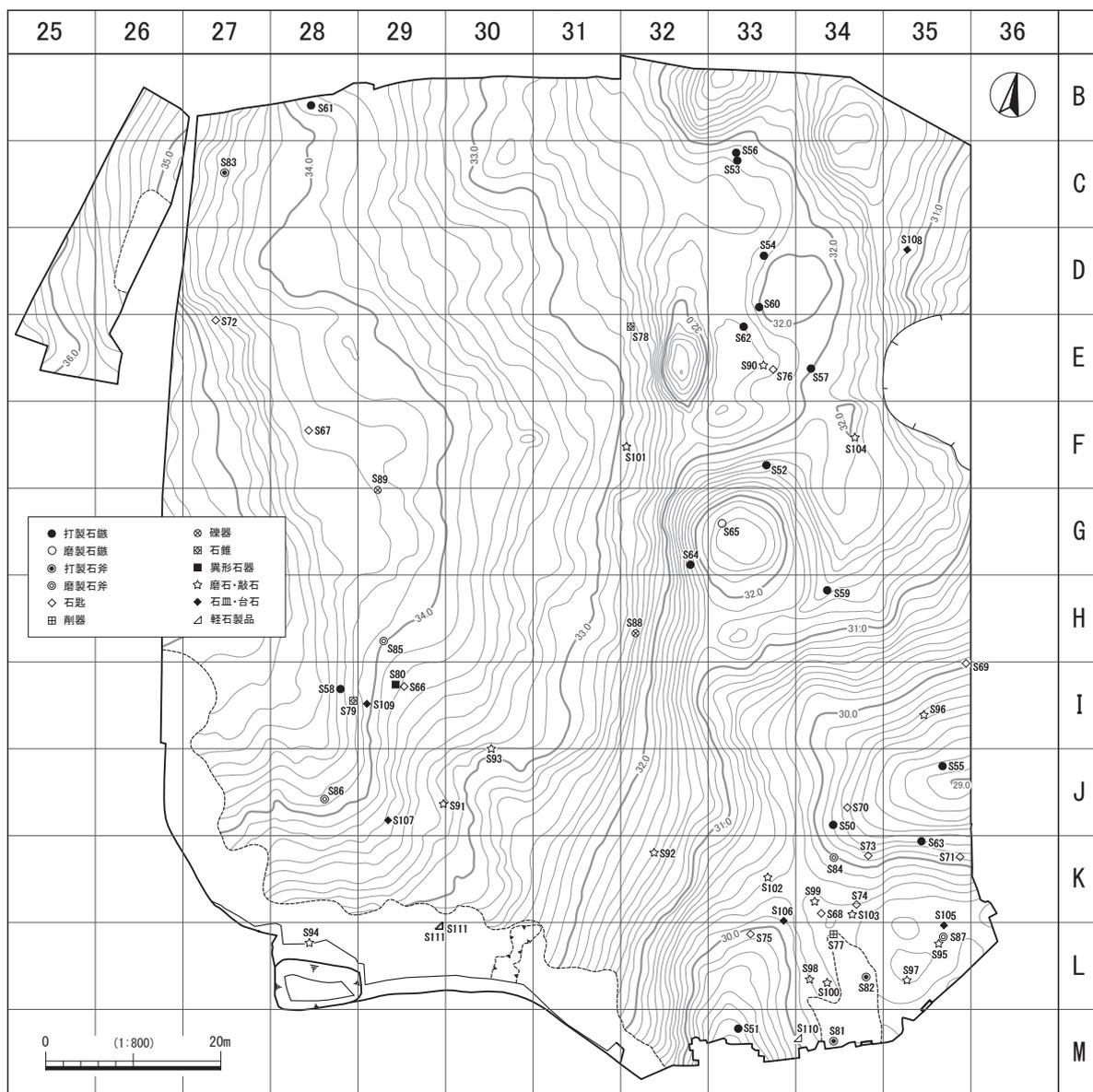
打製石斧 (第204・205図 S81～S83)

S81～S83は打製石斧であり、いずれも2類に分類される。S81は撥形を呈する石斧である。表裏面ともに研磨痕が見られ、研磨後に刃部を作出していることから、磨製石斧を転用したものと考えられる。基部と側縁部に自然面が部分的に残る。側縁下半に緩やかにくびれが見られる。S82は扁平な礫を素材としており、撥形を呈する。刃部と基部に部分的に剥離が見られる。側縁部中央に緩やかにくびれが見られる。S83は扁平な礫を素材とする石斧であり、撥形を呈する。全体的に摩滅が見られ、

刃部にも部分的に摩滅が確認できる。

磨製石斧 (第206図 S84～S87)

S84～S87は磨製石斧であり、S84・S85は1類、S86は2類、S87は3類に分類される。S84は刃部が蛤刃を呈する石斧である。基部に自然面が部分的に残る。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕が見られる。S85は刃部が蛤刃を呈する石斧であり、器厚は薄い。表面には、風化による剥落痕が部分的に見られる。S86は短冊形を呈する石斧で、研磨は基部にまで及んでいる。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕や摩滅が見られる。両側縁部には装着痕と思われる摩滅が確認される。S87は鑿状を呈する小型の石斧である。刃部には使用時に生じたと思われる剥離痕が見られる。



Ⅷ層上面コンタ図

第189図 VI層出土石器分布図

礫器 (第207図 S88・S89)

S88・S89は礫器である。S88は節理を有する楕円礫を素材としたもので、一部を残して縁辺に沿うように裏面側から二次加工を施し、片刃の刃部が作出されている。S89は三角形を呈する礫の一辺に片刃の刃部が作出されている。

磨・敲石 (第207～209図 S90～S104)

S90～S104は磨・敲石である。S90は側面上部と下部を中心に敲打痕が見られる。S91は楕円形を呈する小型の磨石であり、表裏面は磨面として利用している。S92は表裏面を磨面として利用し、裏面には部分的に欠失が見られる。S93は上面と右側面を中心に敲打痕が見られる。S94は表裏面を磨面として利用しており、側面のほぼ全面に敲打痕が見られる。S95は側面の大半に敲打痕が見られ、表裏面を磨面として利用している。裏面には欠失が一部見られる。S96は大半が欠失している。敲打痕は裏面の左側縁部と上面に見られる。S97は楕円形を呈する礫を素材としている。表面に浅い凹状の敲打痕を持ち、側面にもほぼ全面に見られる。S98は扁平な楕円形を呈する礫を素材としている。裏面の左側縁上部に敲打痕が見られ、下面にも確認できる。表面の右側縁上部を欠失している。S99は敲打痕が側面のほぼ全面に見られ、表裏面にも部分的に確認できる。S100は上面と表面右側縁下部に敲打痕が見られる。S101は扁平な円礫を素材としている。表裏面を磨面として利用しており、

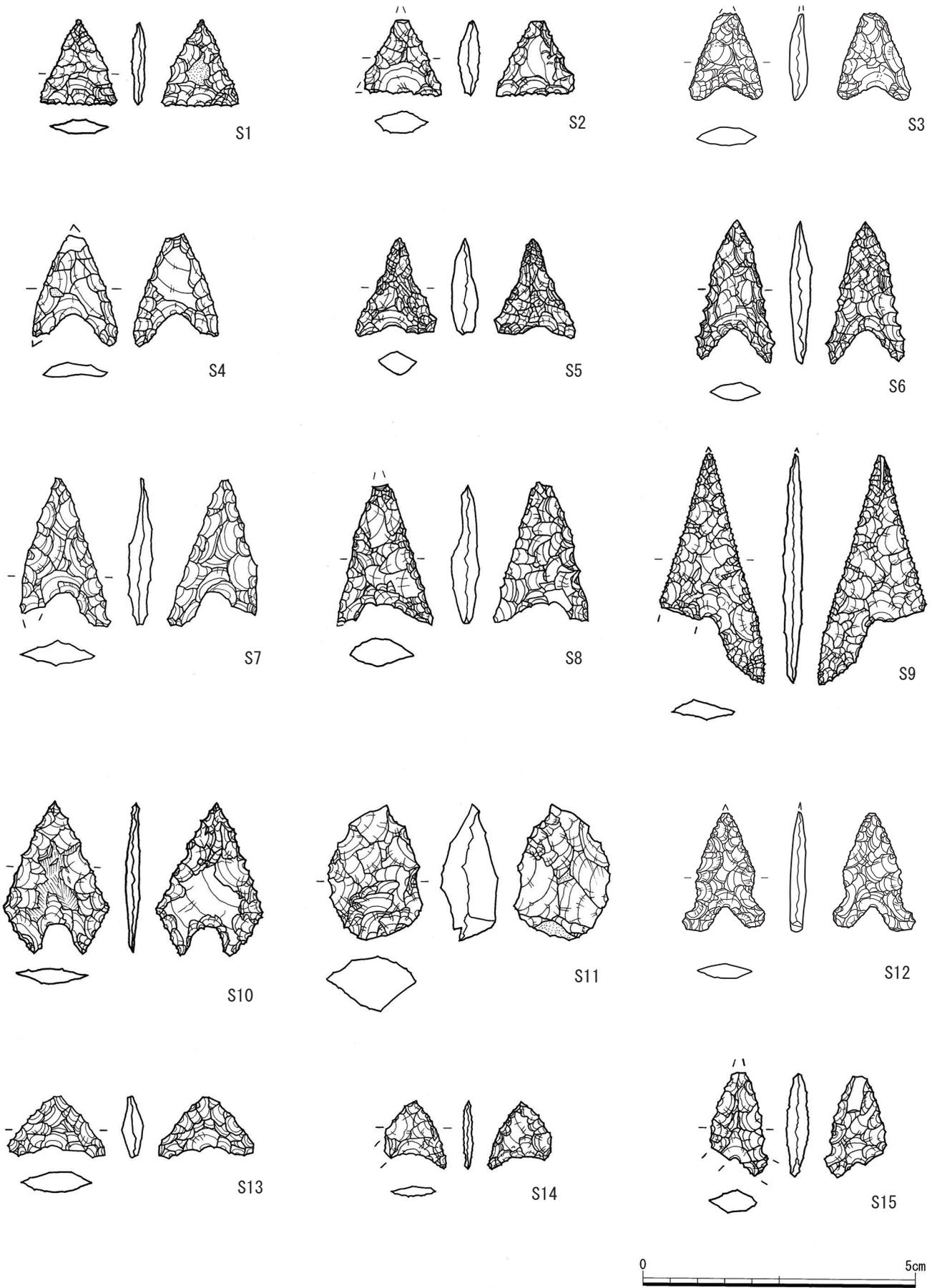
敲打痕は右側面から下面にかけて確認できる。S102は表裏面を磨面として利用している。右側面下半に欠失が部分的に見られる。S103は楕円形を呈する礫を素材としている。側面のほぼ全面に敲打痕が見られ、裏面下半に欠失が部分的に見られる。S104は扁平な楕円形を呈する礫を素材としており、表面中央に浅い凹みを持つ。左側面と下面に敲打痕が見られ、裏面の側縁部にも部分的に確認できる。

石皿 (第209～211図 S105～S109)

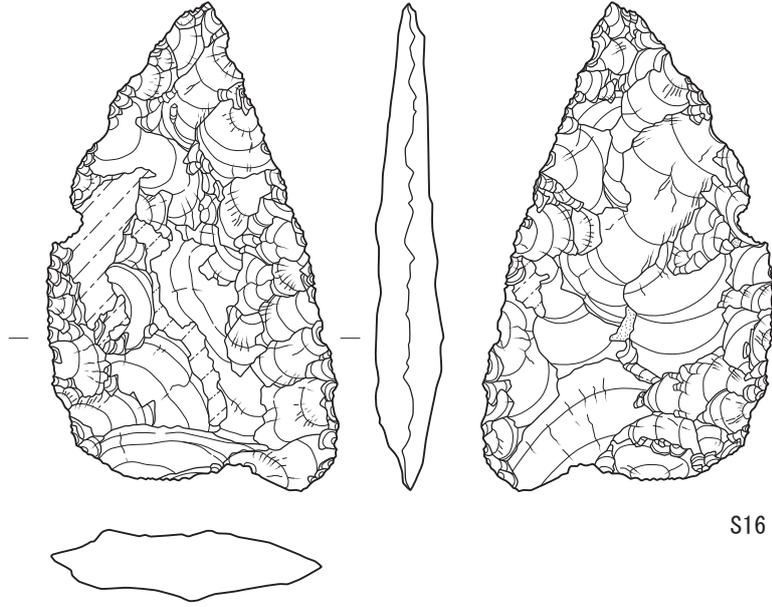
S105～S109は石皿である。S105は表裏面に敲打痕が見られる。大半を欠失している。S106は表面にわずかに凹みが見られる。大半を欠失している。S107は表裏面に緩やかな凹みを持ち、下半部を部分的に欠失している。裏面中央には敲打痕が見られる。S108は扁平な礫を素材とした大型の石皿である。表面には敲打痕が部分的に確認できる。上半部と下半部の一部、左側面を欠失している。S109は大型の石皿である。表面に緩やかな凹みが見られ、中央には敲打痕が確認できる。右側面を欠失している。

軽石製品 (第211図 S110・S111)

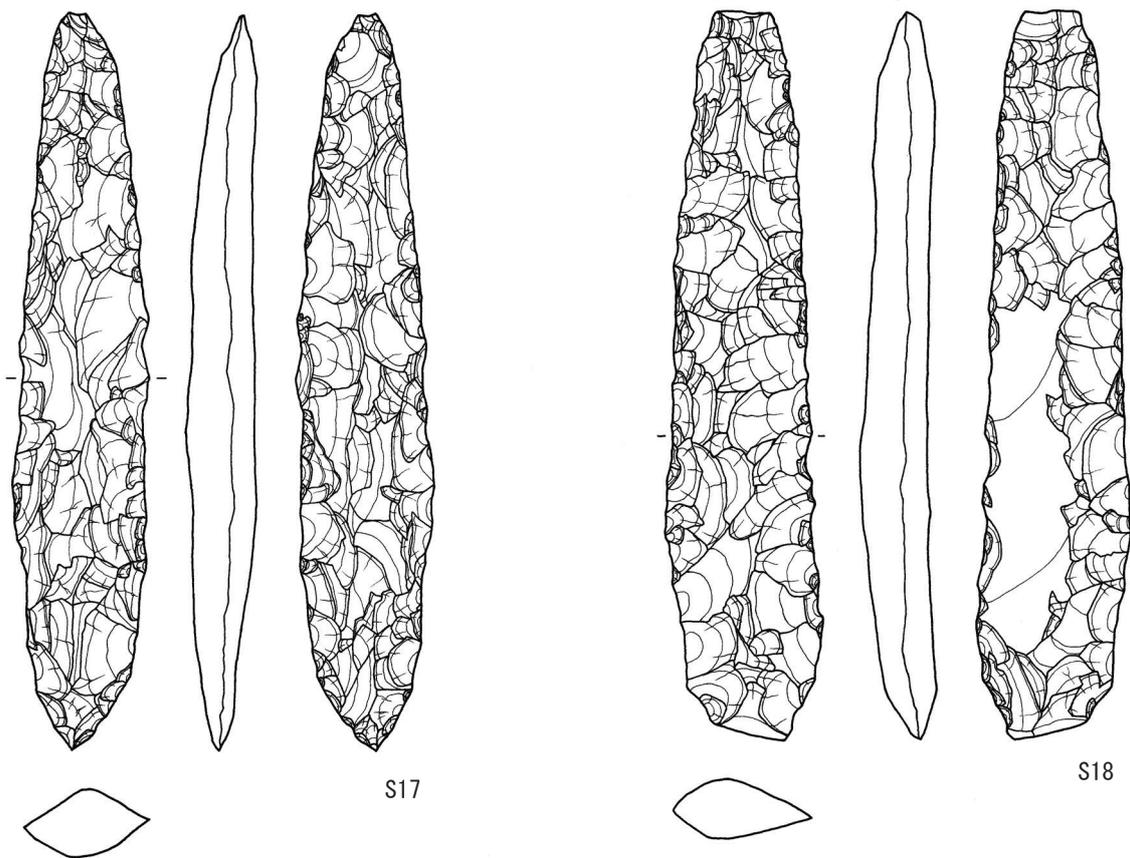
S110・S111は軽石製品である。S110は扁平で円形を呈する軽石製品である。穿孔等は確認できない。S111は正面に浅い凹みを持ち側面観が船底状を呈するもので、全長約13.0cmを測る。



第190图 VII层出土石器 1



S16

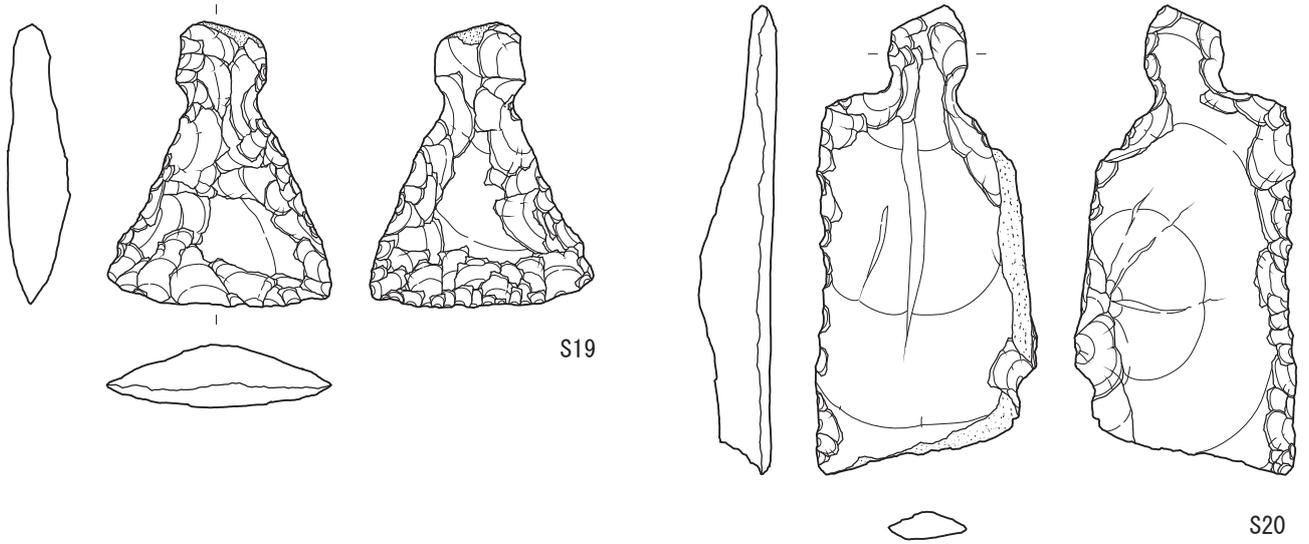


S17

S18

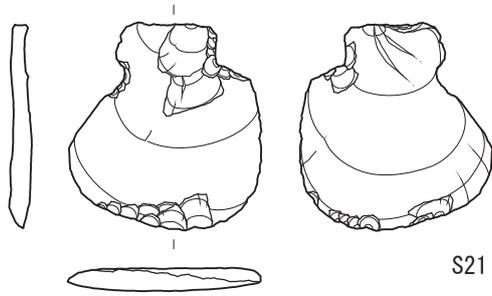


第191图 VII層出土石器2

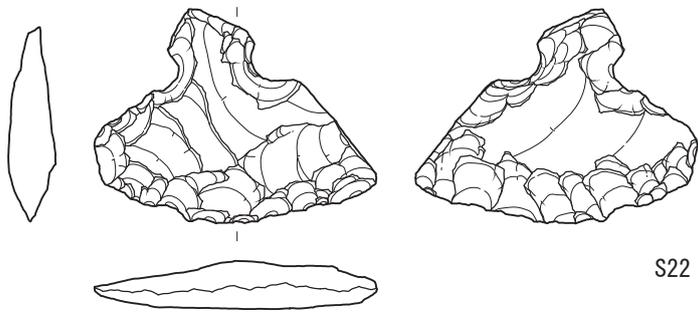


S19

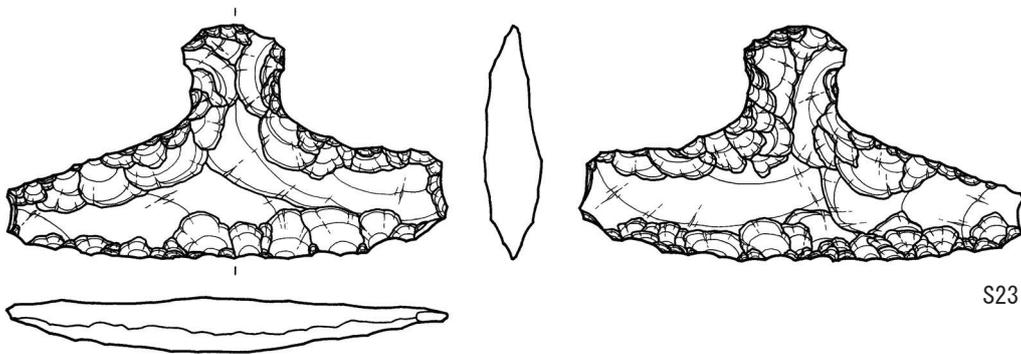
S20



S21



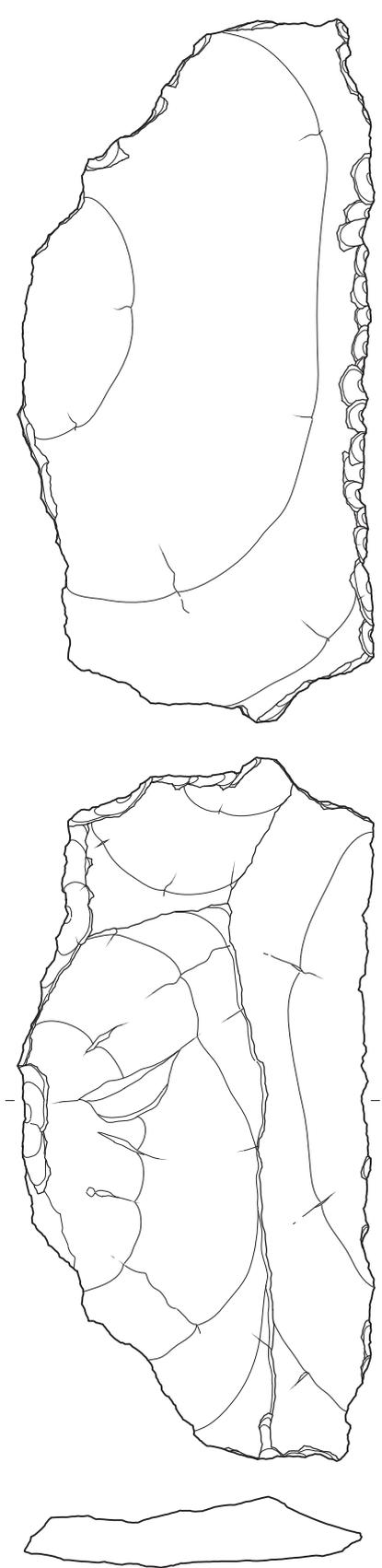
S22



S23



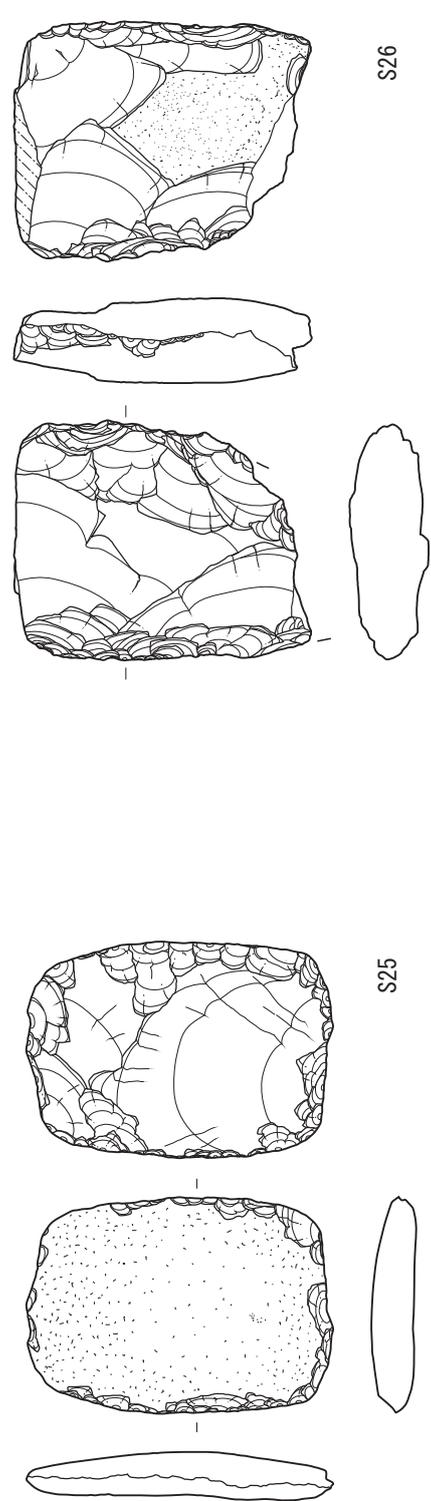
第192图 VII層出土石器3



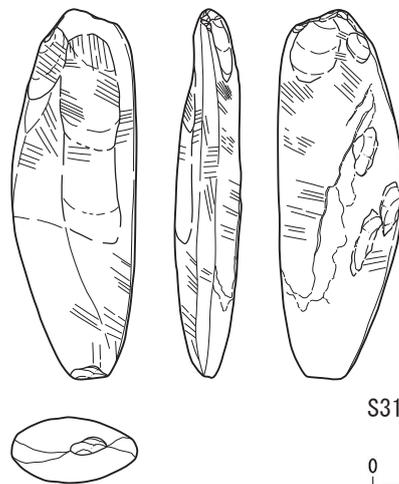
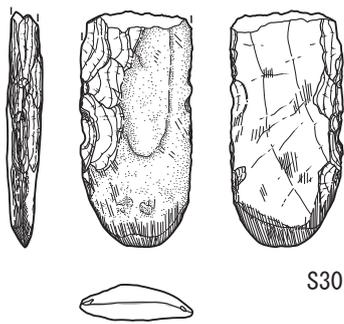
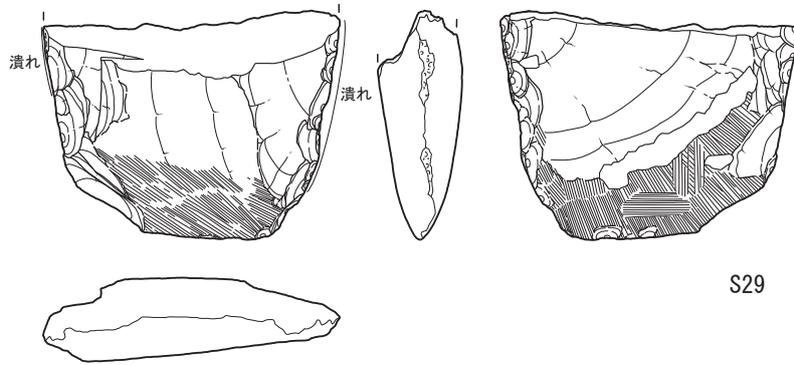
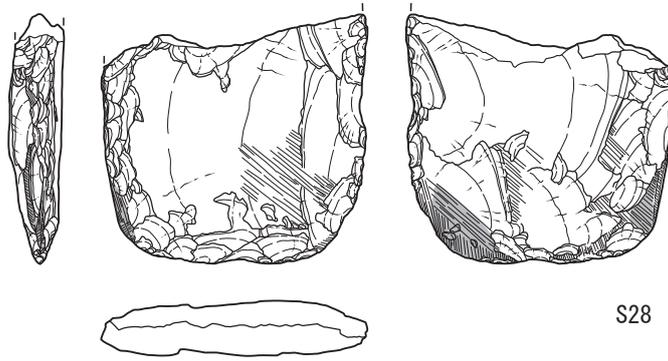
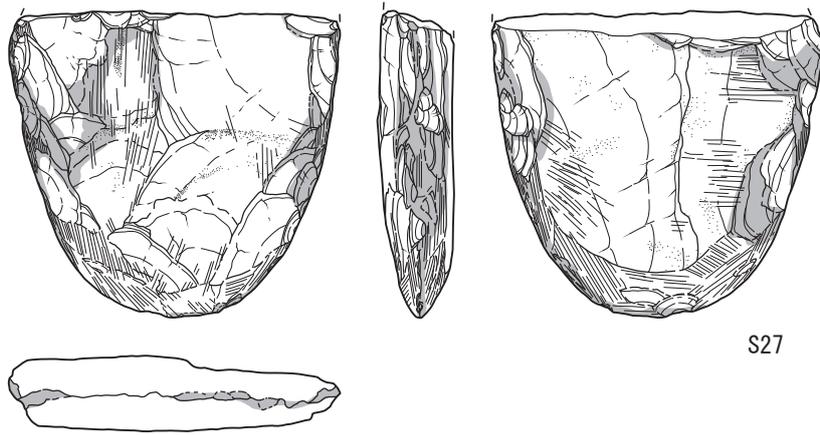
S24

S26

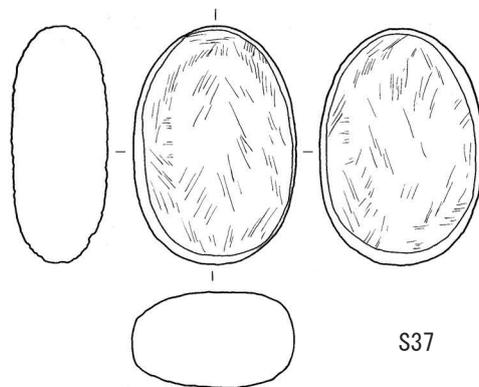
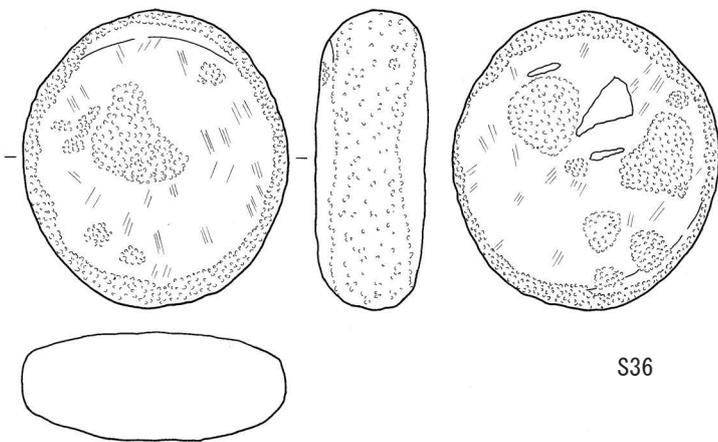
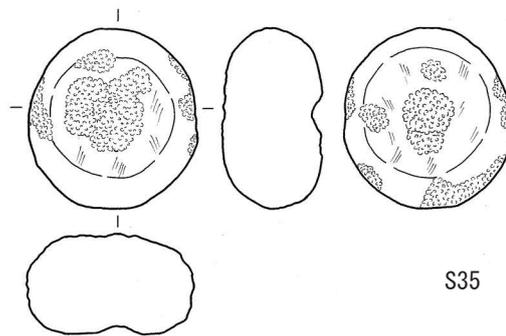
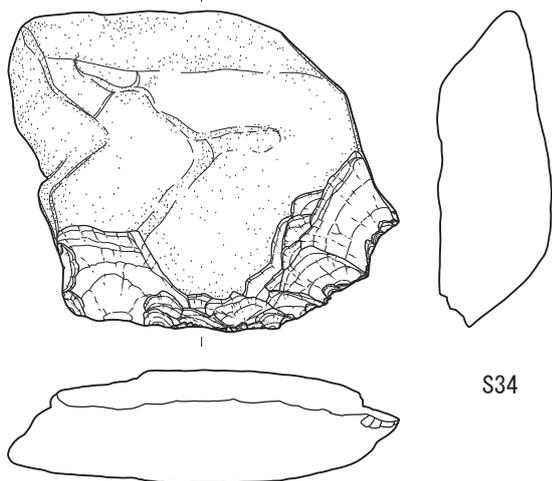
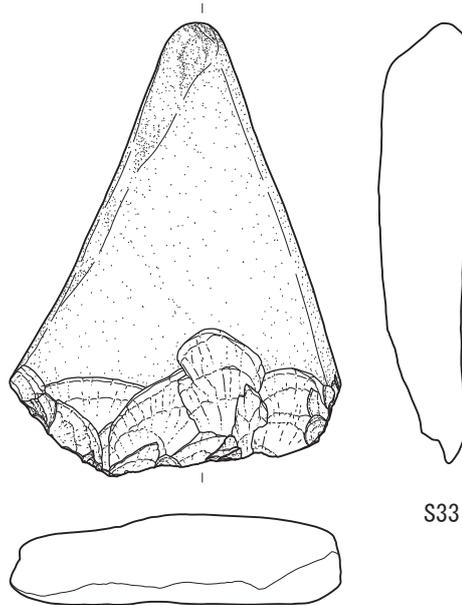
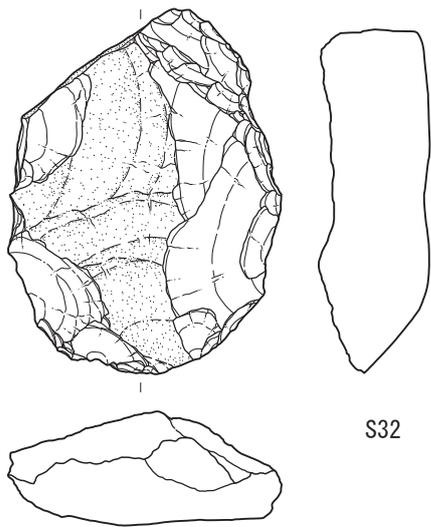
S25



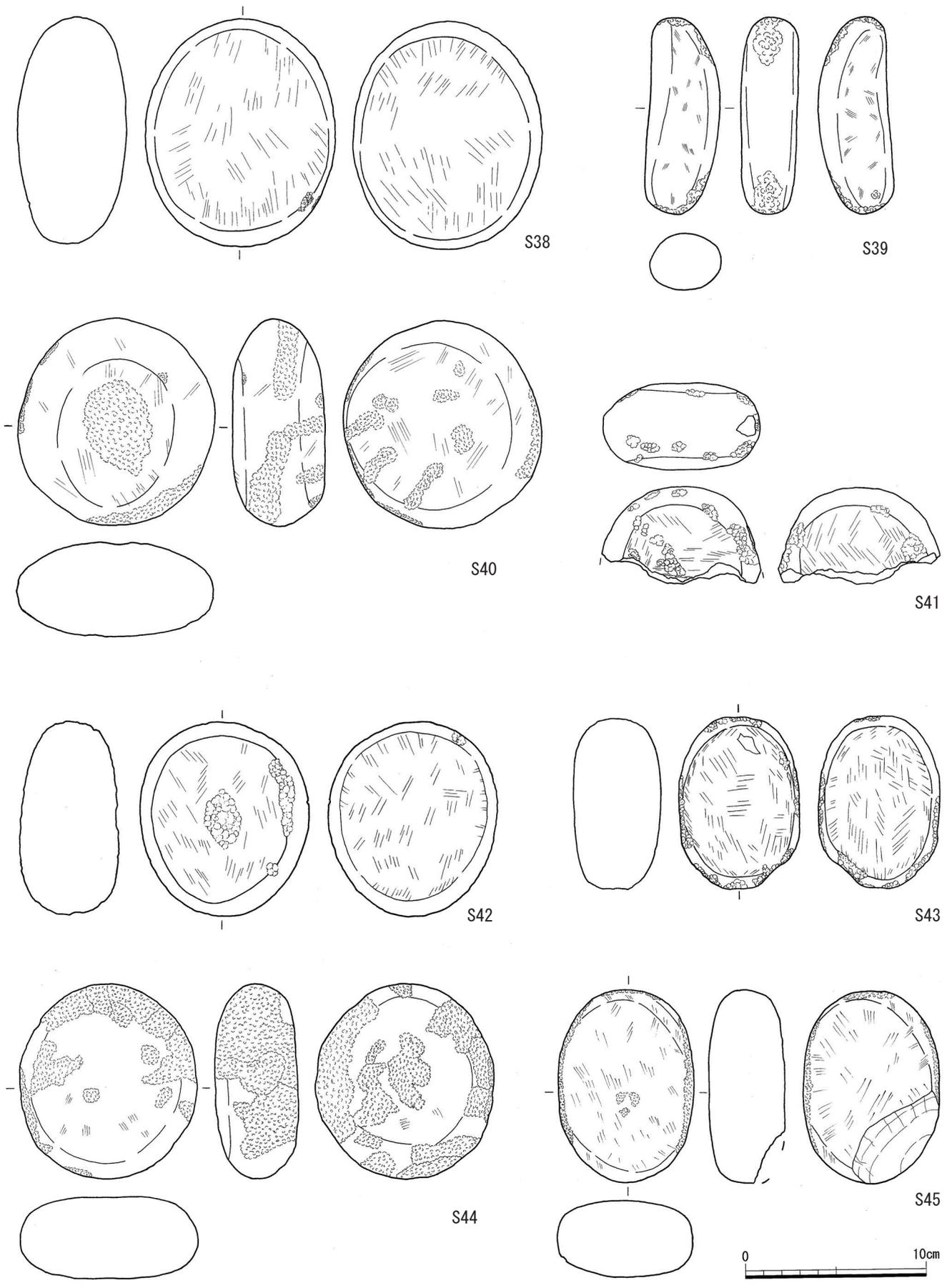
第193图 VII層出土石器4



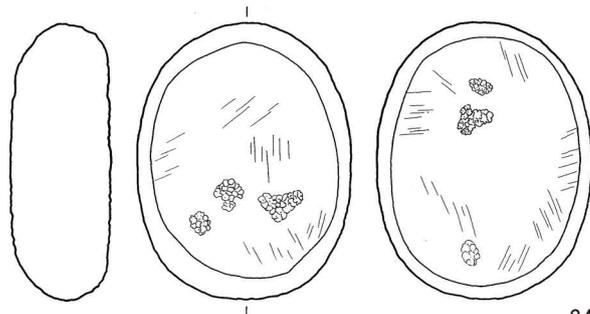
第194图 VII層出土石器5



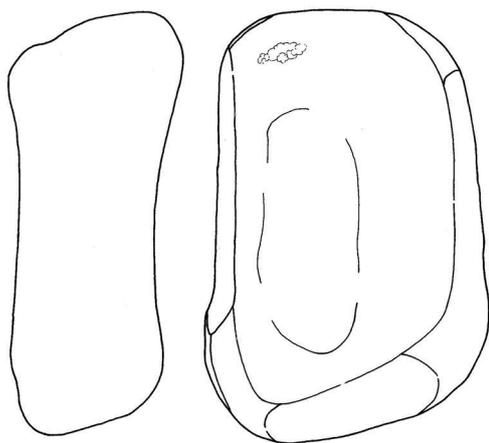
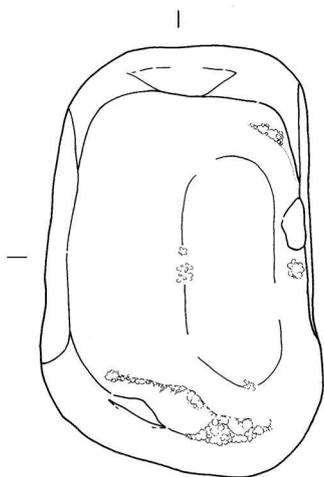
第195图 VII層出土石器6



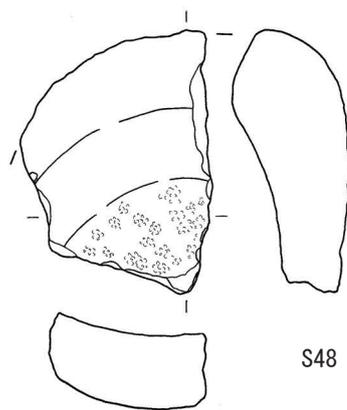
第196图 VII层出土石器7



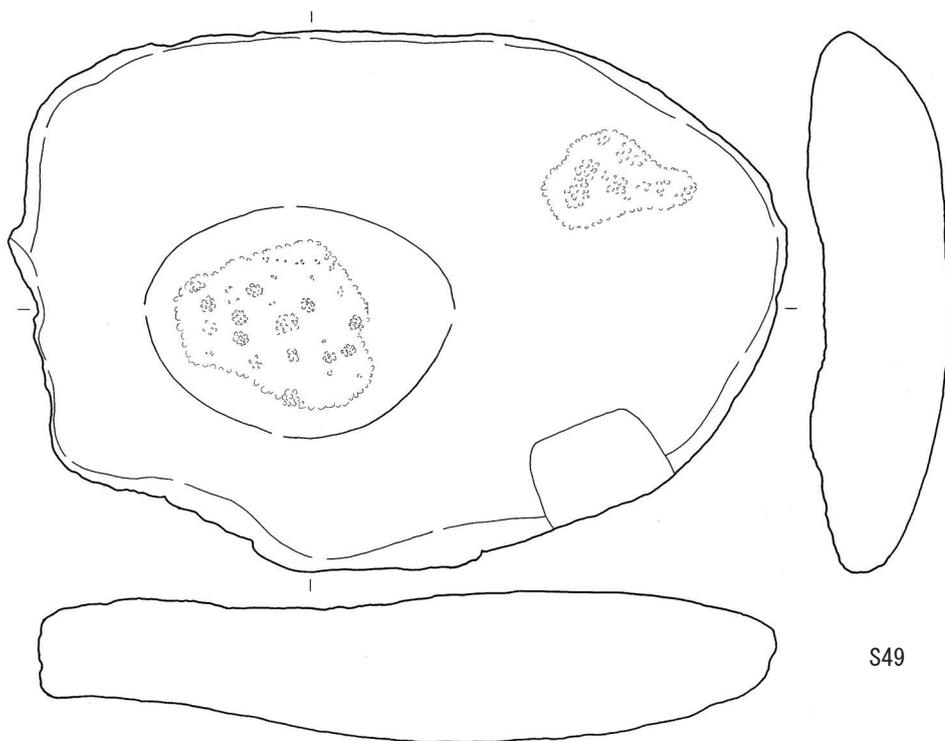
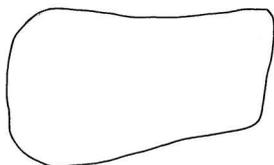
S46



S47



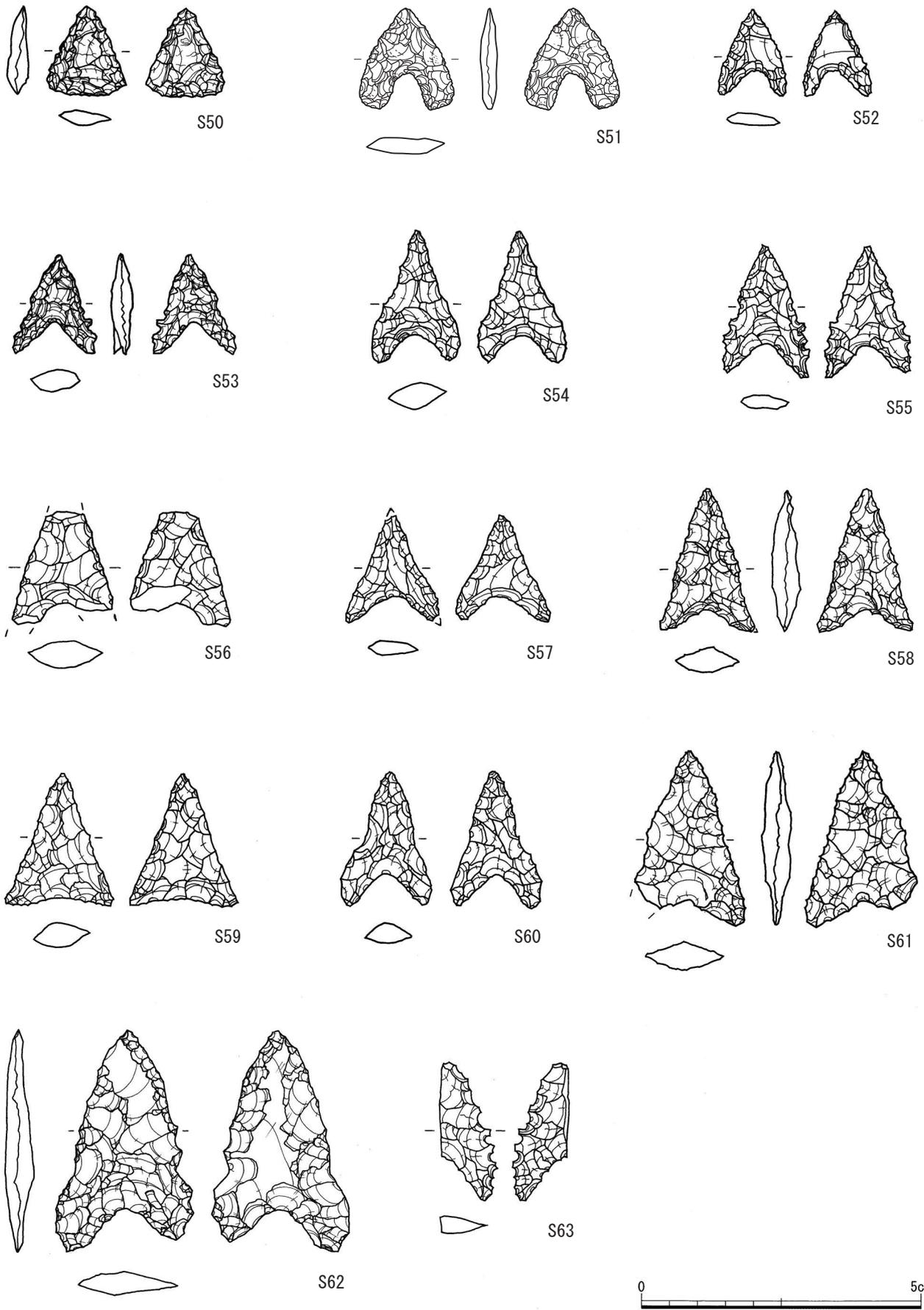
S48



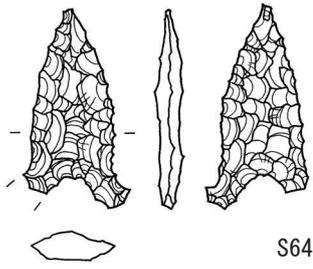
S49



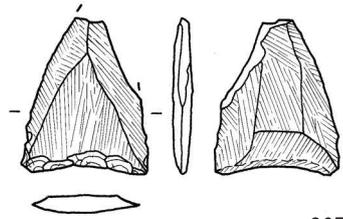
第197图 VII層出土石器8



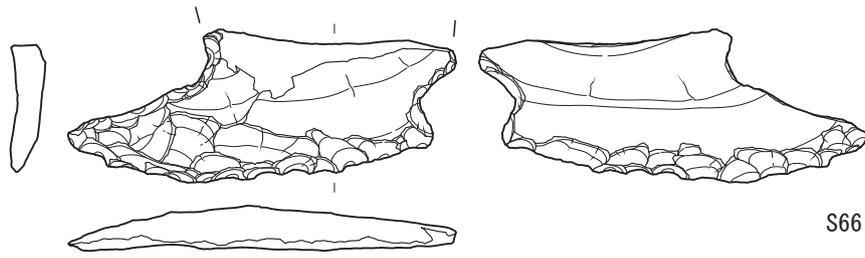
第198圖 VI層出土石器 1



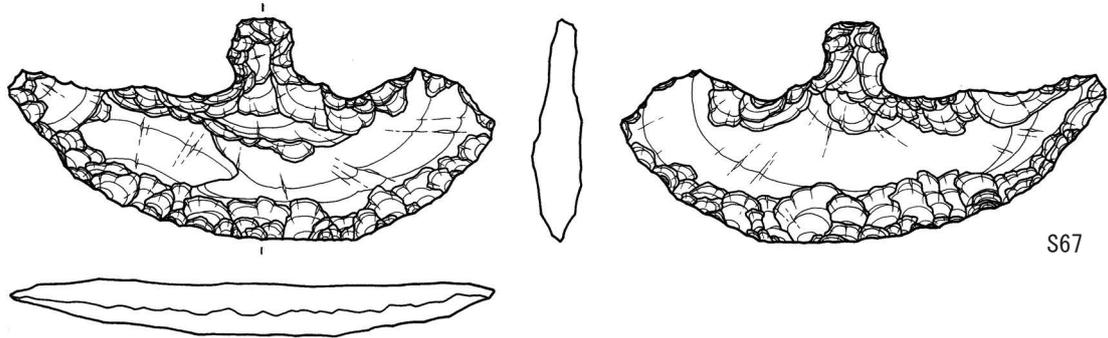
S64



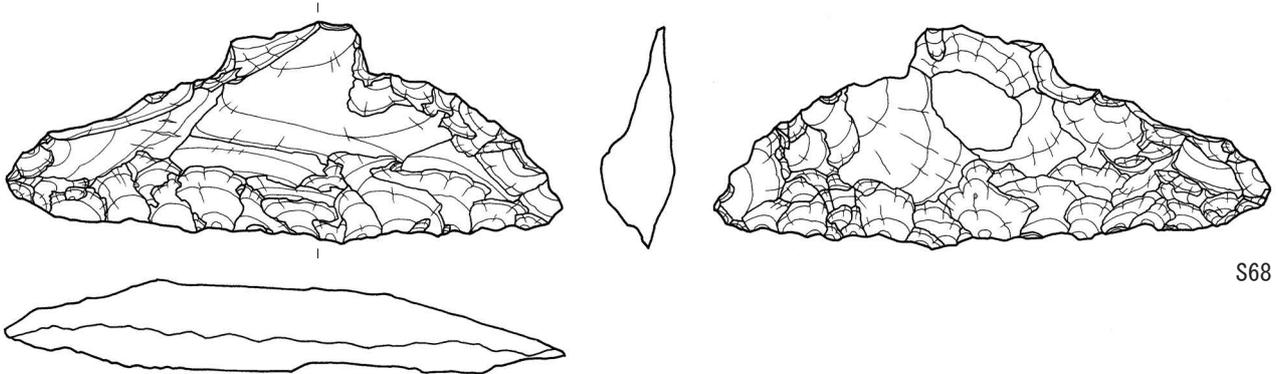
S65



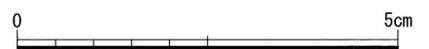
S66



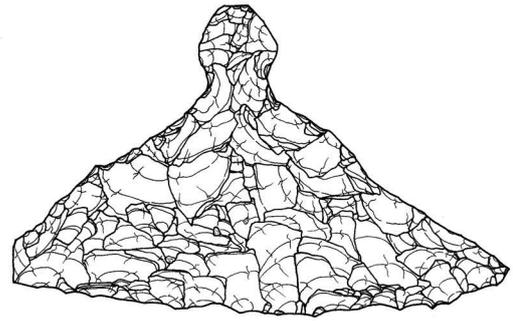
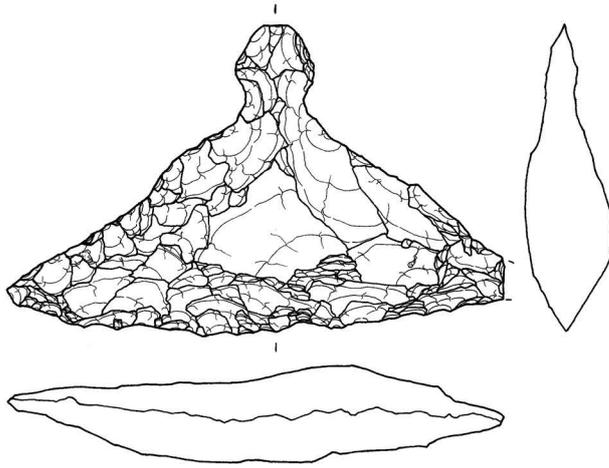
S67



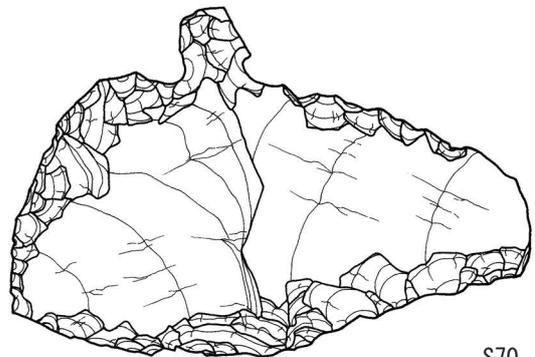
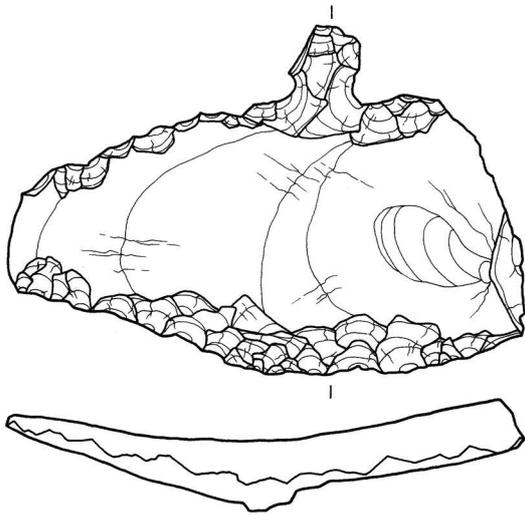
S68



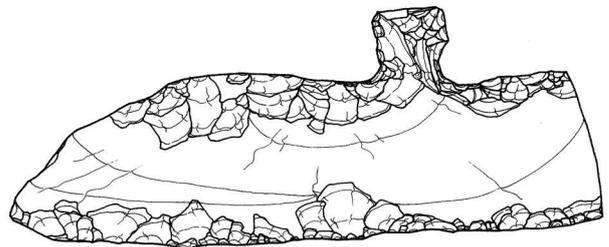
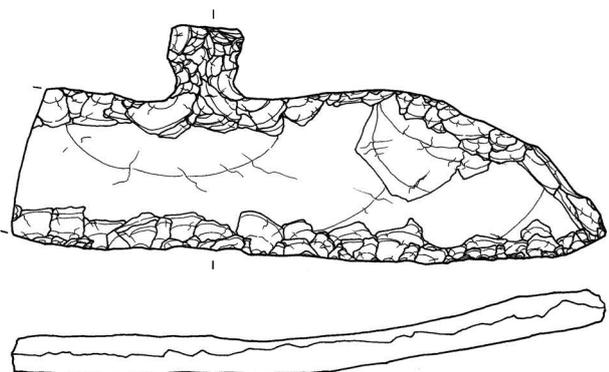
第199圖 VI層出土石器2



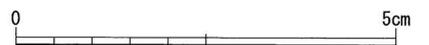
S69



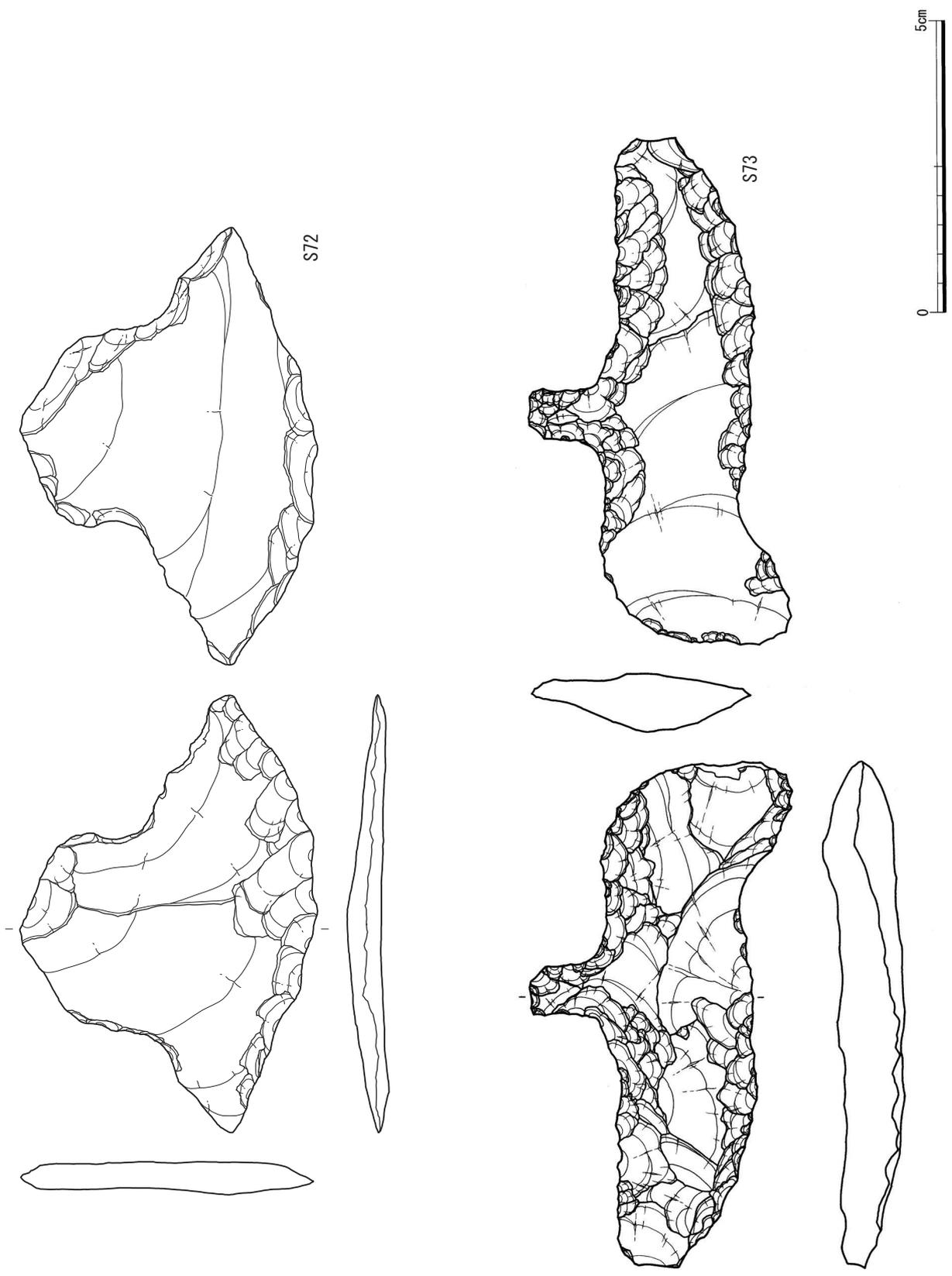
S70



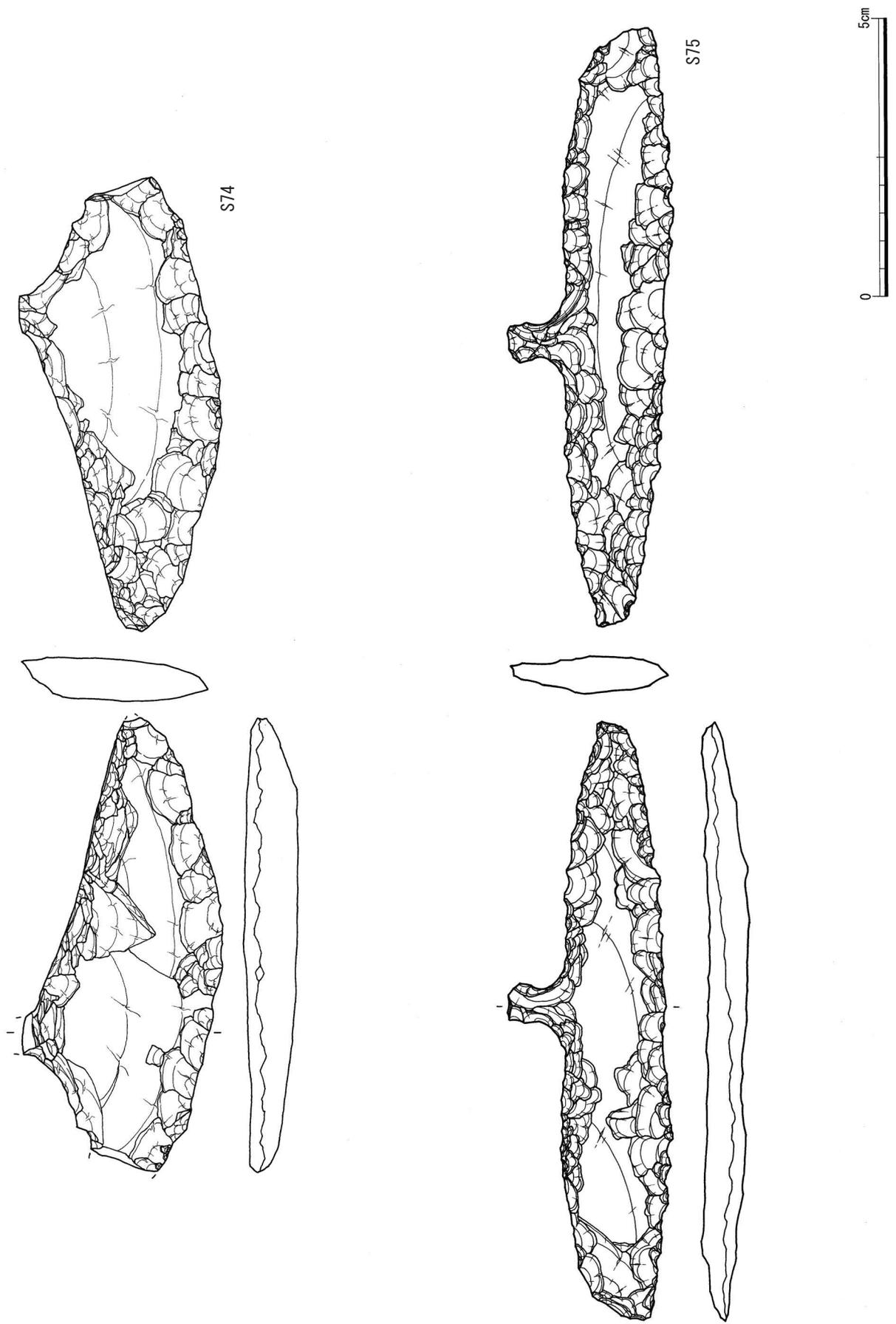
S71



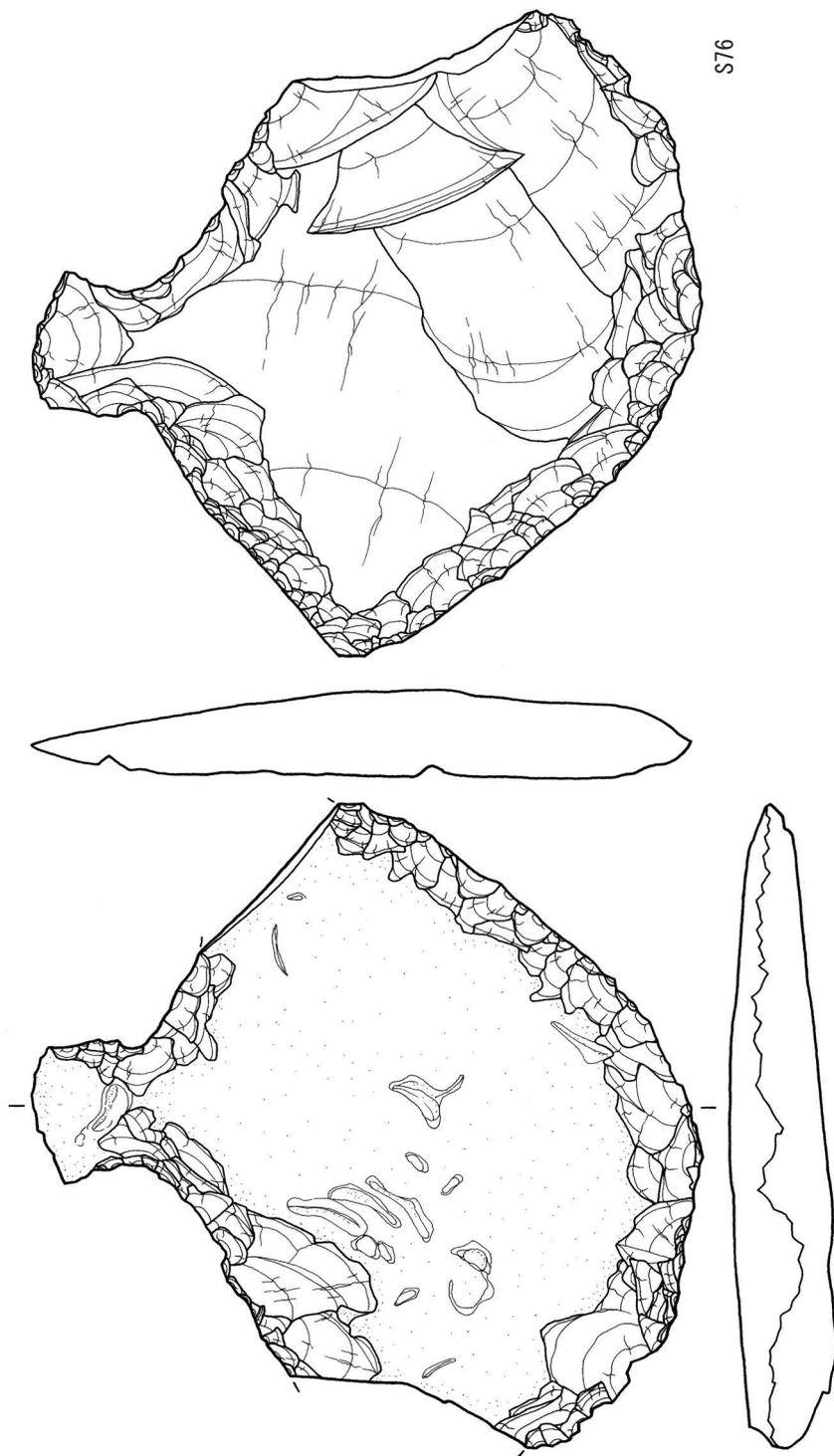
第200图 VI層出土石器3



第201图 VI層出土石器4



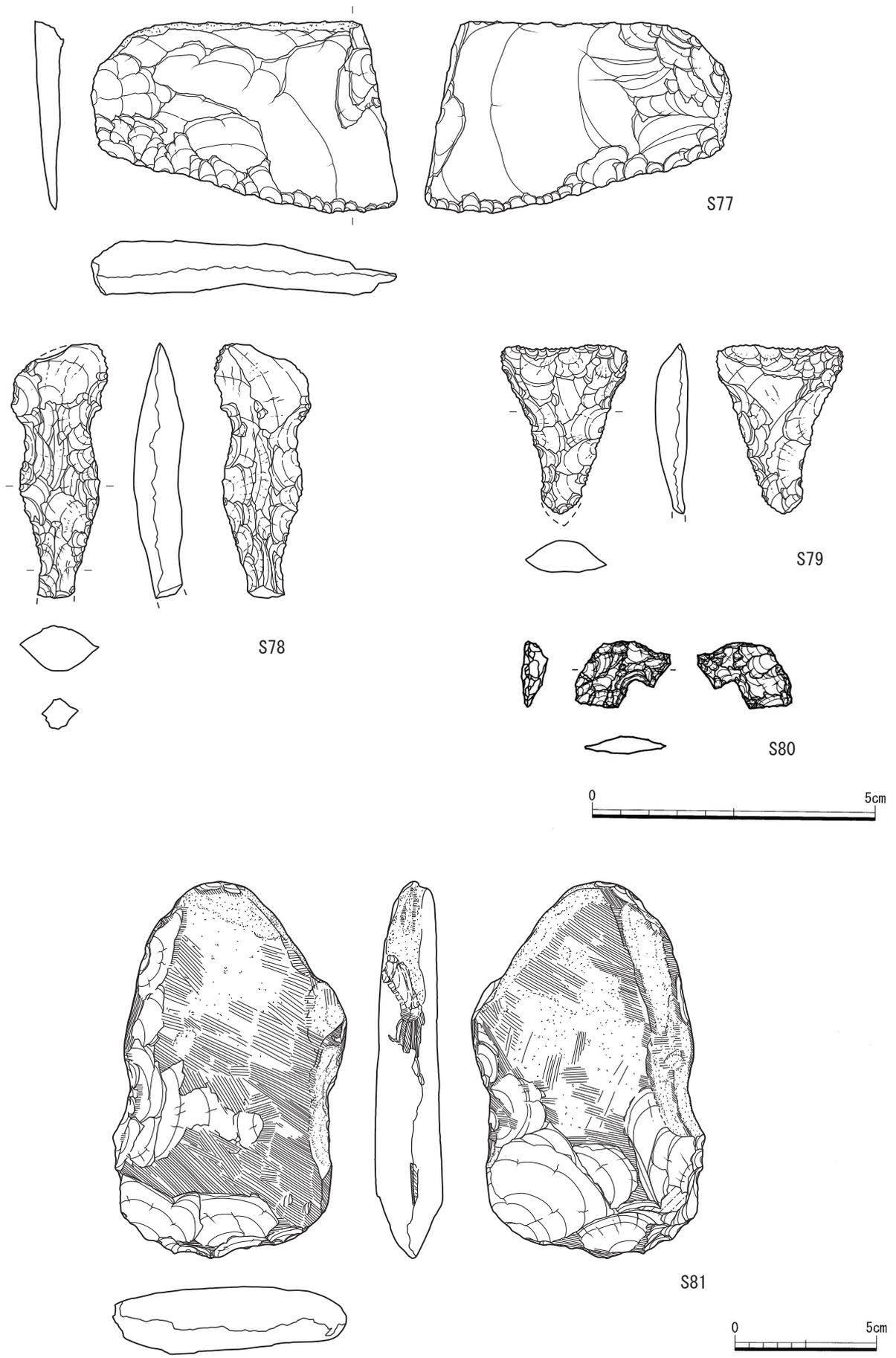
第202图 VI層出土石器5



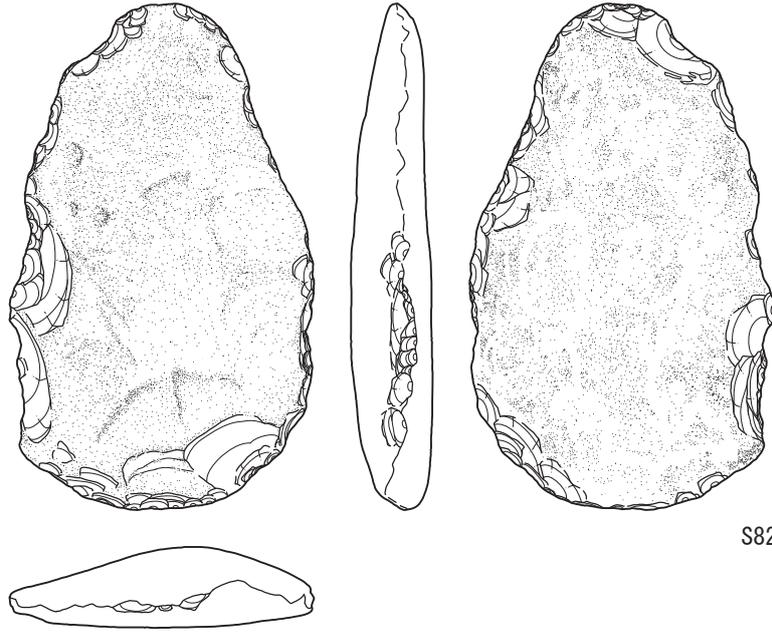
S76



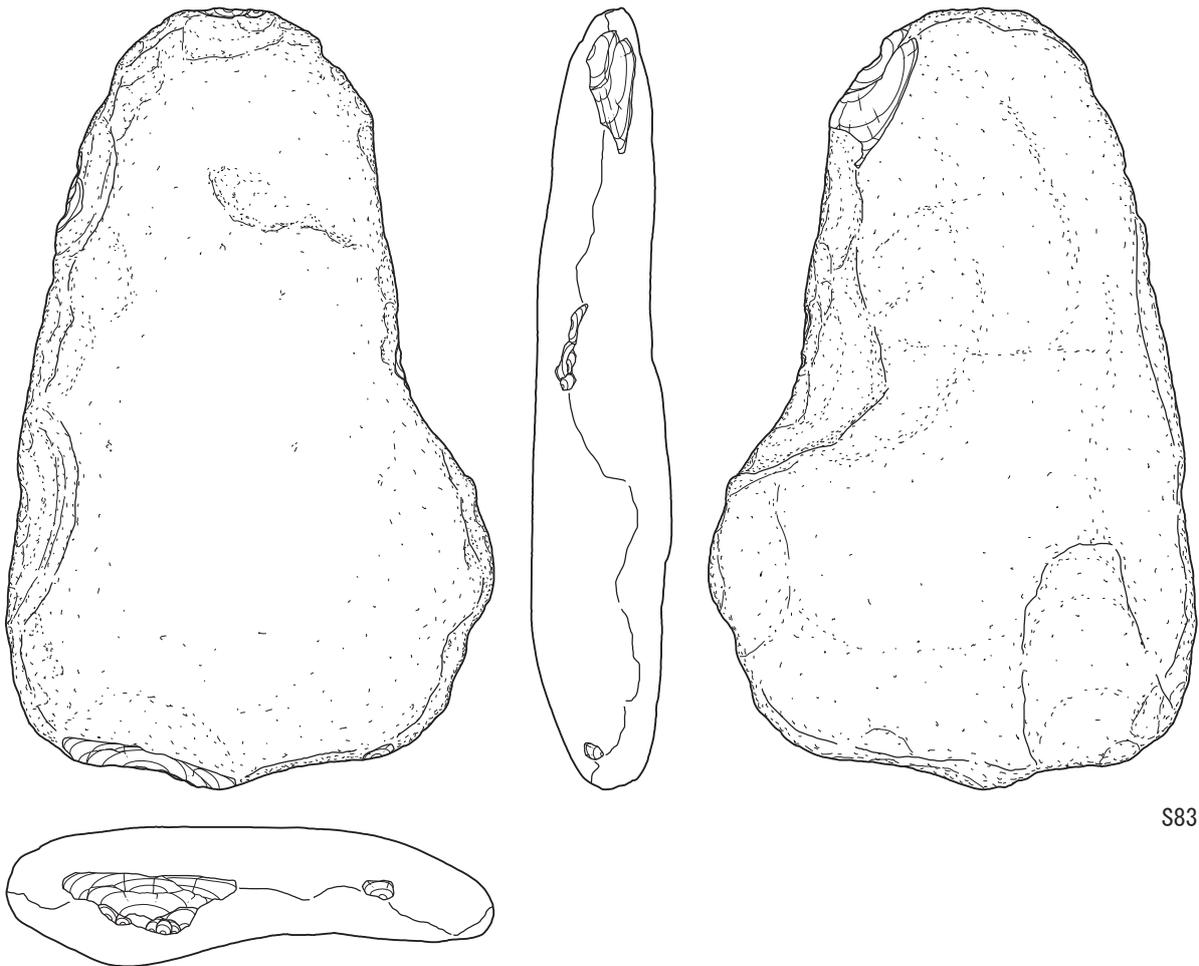
第203图 VI層出土石器6



第204图 VI層出土石器7



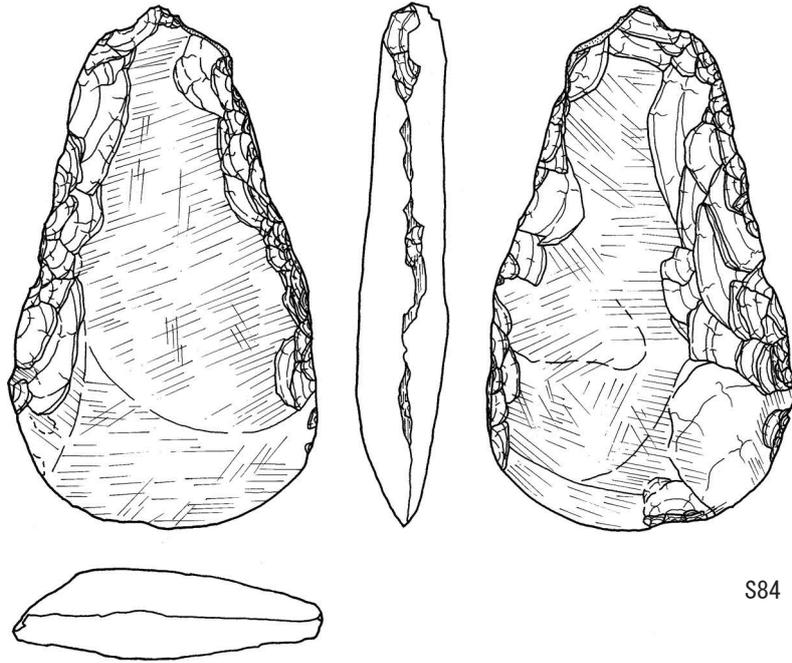
S82



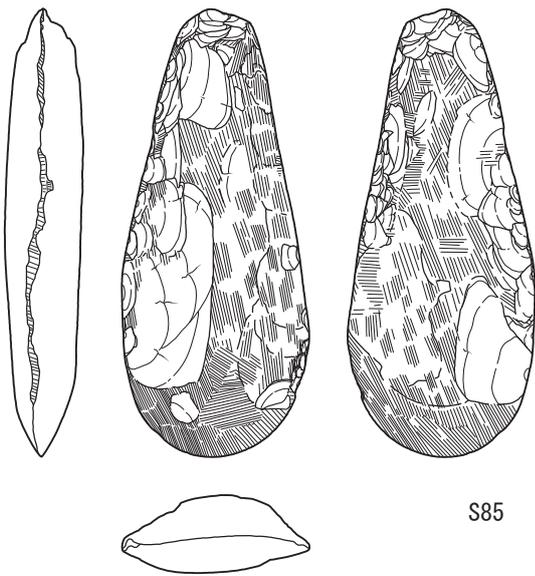
S83



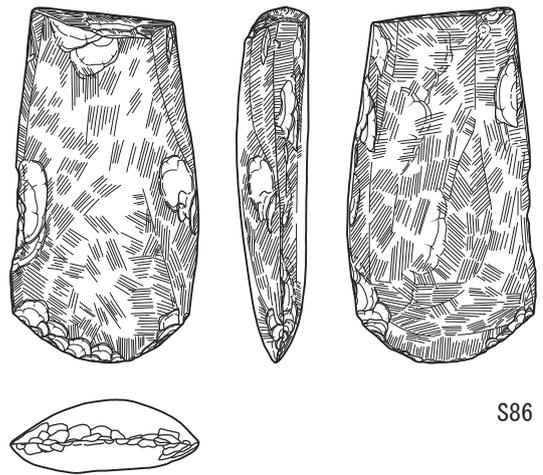
第205图 VI層出土石器8



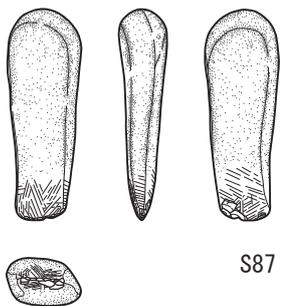
S84



S85



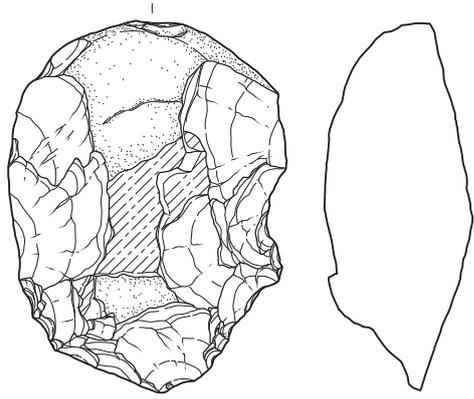
S86



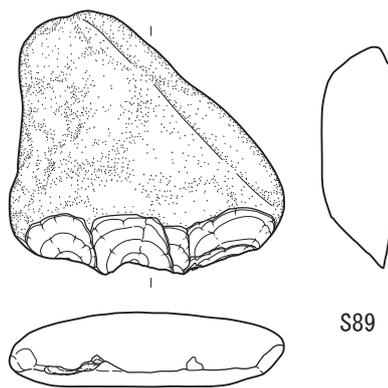
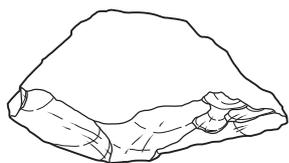
S87



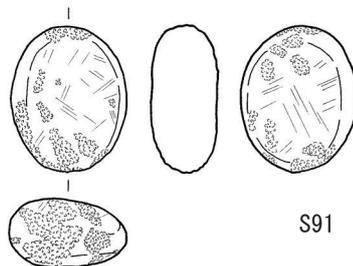
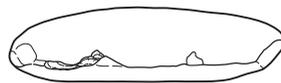
第206图 VI層出土石器9



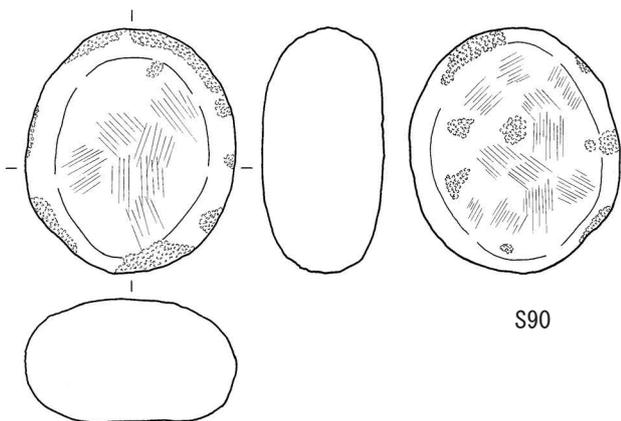
S88



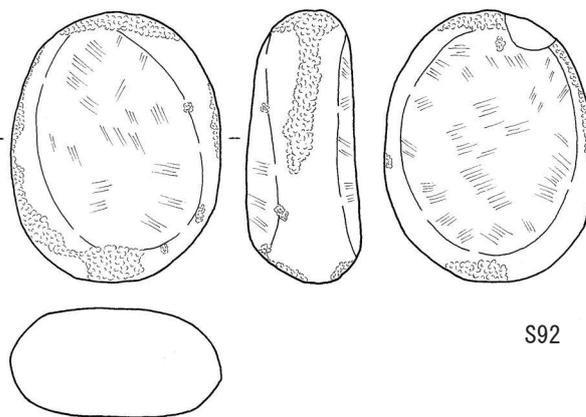
S89



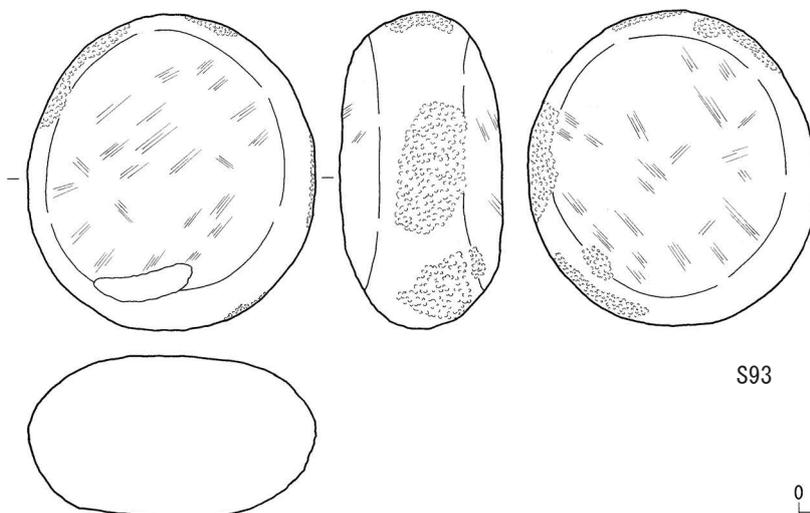
S91



S90



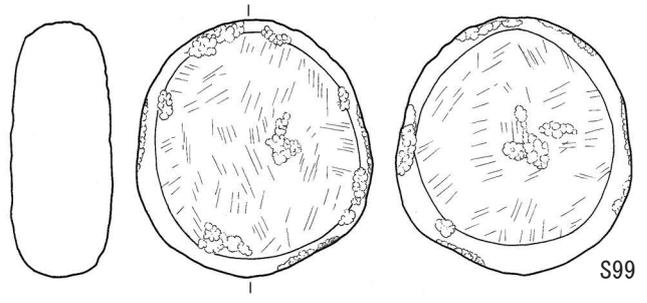
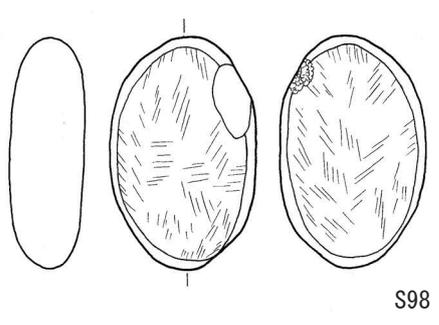
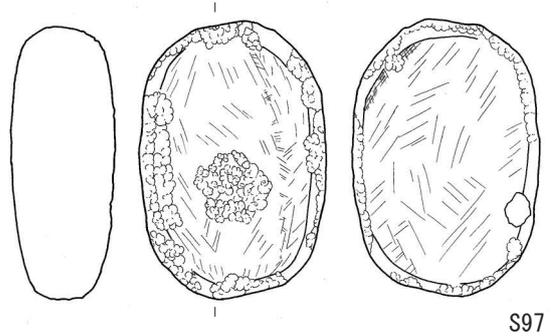
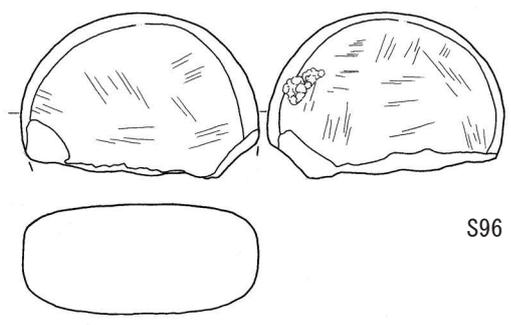
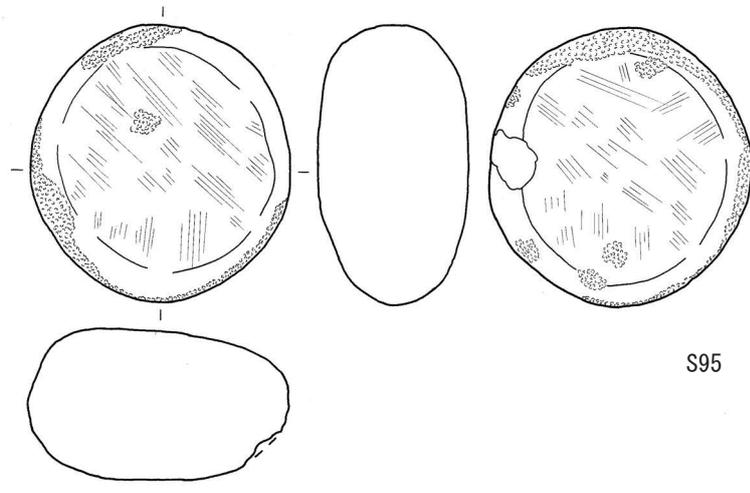
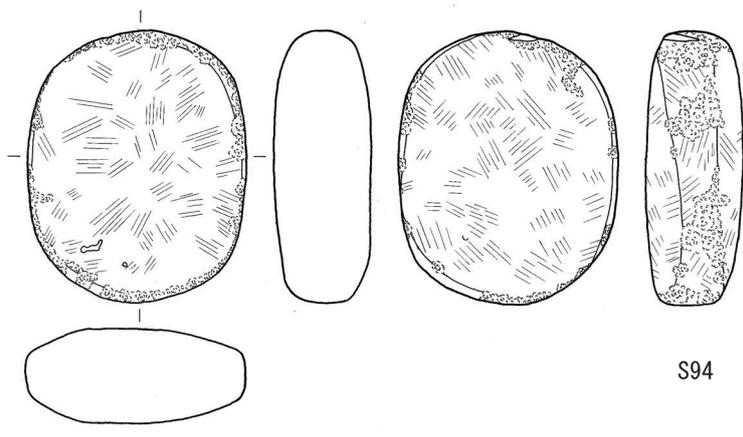
S92



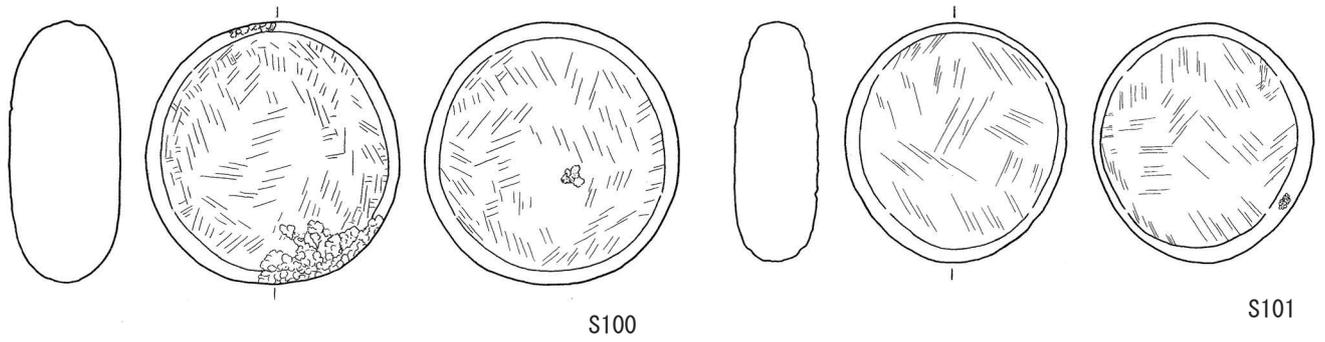
S93



第207图 VI層出土石器10

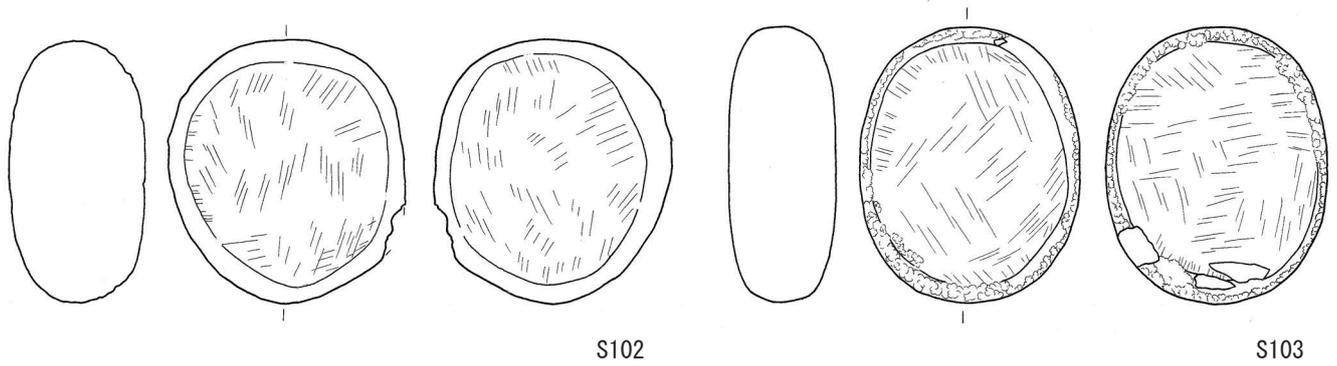


第208图 VI層出土石器11



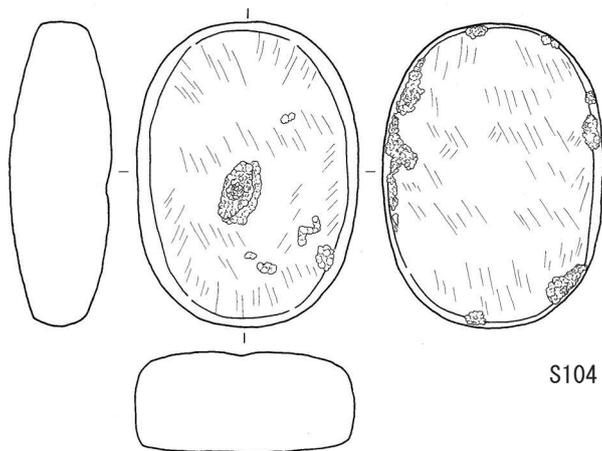
S100

S101

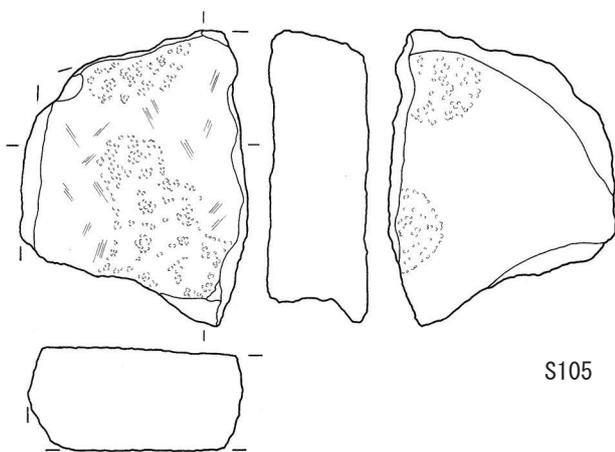


S102

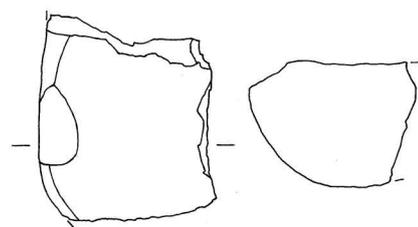
S103



S104



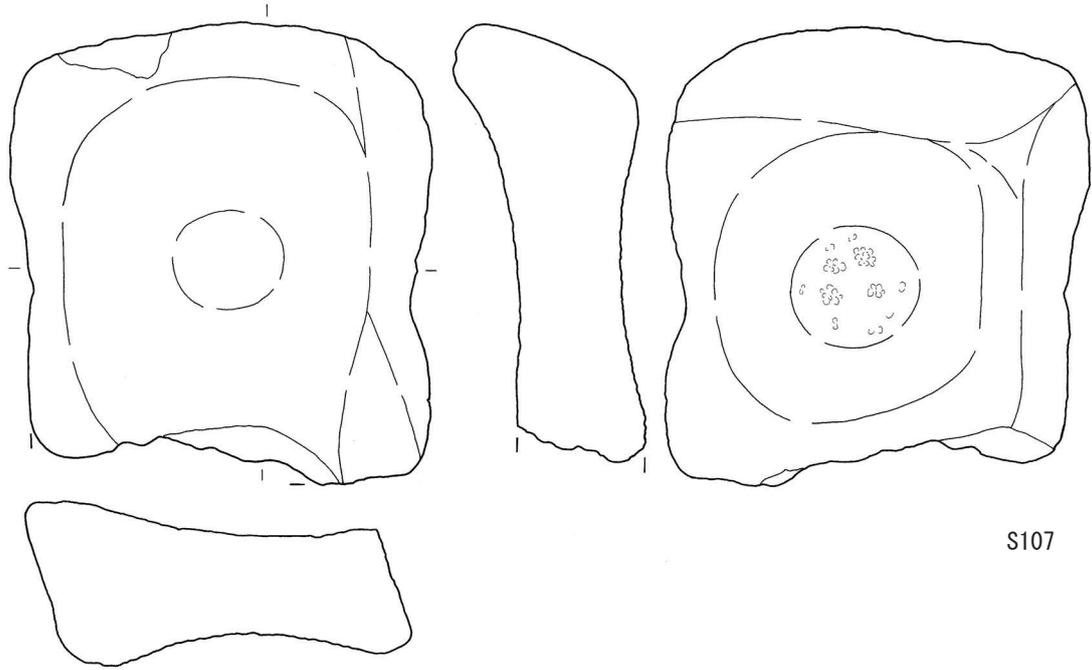
S105



S106



第209图 VI層出土石器12



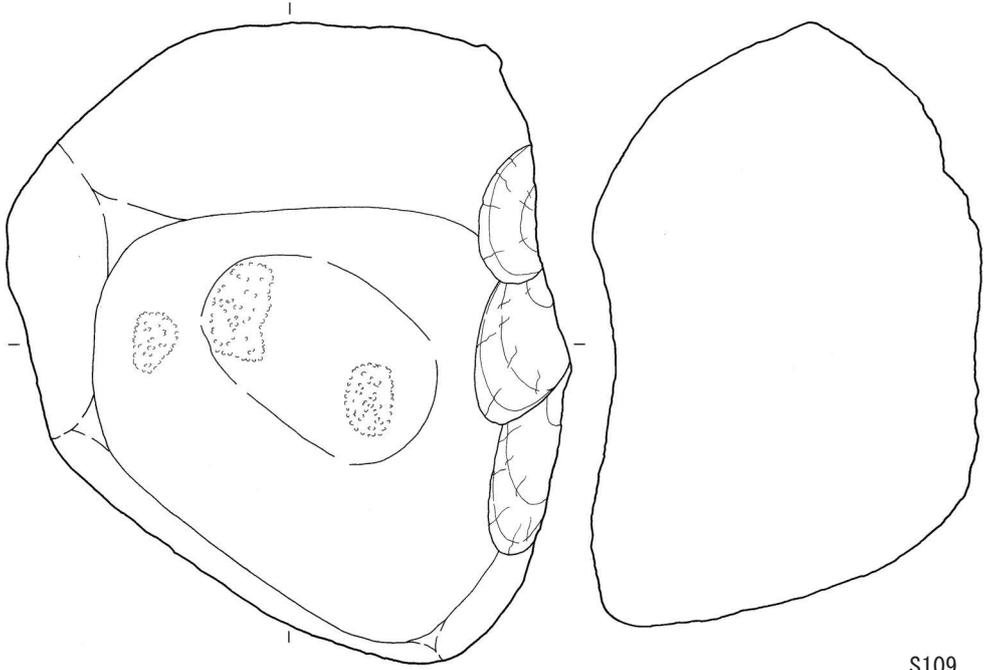
S107



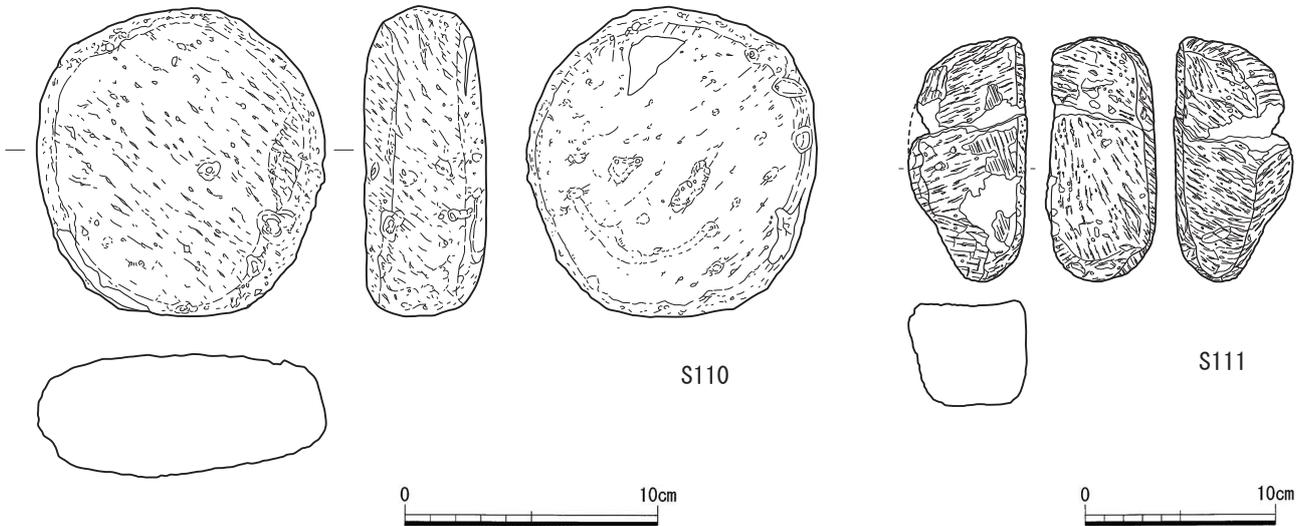
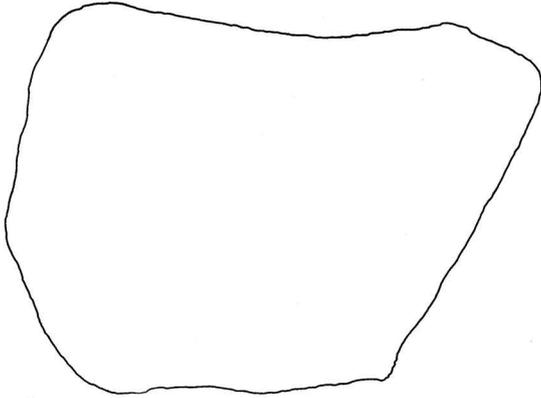
S108



第210图 VI層出土石器13



S109



S110

S111

第211图 VI層出土石器14

第37表 VII層出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
190	S 1	打製石鏃 1	チャート	J 33	VII a	1.60	1.35	0.25	0.41	70837	
	S 2	打製石鏃 1	安山岩 1 b	I 28	VII b	1.40	1.40	0.40	0.62	96399	
	S 3	打製石鏃 2	安山岩 2	J 29	VII a	1.60	1.30	0.30	0.60	96512	
	S 4	打製石鏃 2	安山岩 1 b	J 35	VII a	2.04	1.54	0.29	0.60	27314	
	S 5	打製石鏃 2	安山岩 1 b	L 35	VII a	1.80	1.50	0.50	0.63	57564	
	S 6	打製石鏃 2	安山岩 1 b	L 33	VII a	2.70	1.40	0.40	0.84	55449	
	S 7	打製石鏃 2	安山岩 4	B 27	VII a	2.70	1.70	0.45	1.09	77949	
	S 8	打製石鏃 2	黒曜石 7	I 31	VII a	2.55	1.75	0.50	1.20	111082	
	S 9	打製石鏃 2	チャート	G 27	VII a	4.30	1.95	0.35	1.74	101718	
	S 10	打製石鏃 3	頁岩 5	L 32	VII b	2.80	1.95	0.25	1.10	60102	
	S 11	打製石鏃 5	黒曜石 2	M 31	VII a	2.50	1.70	1.00	3.35	101585	
	S 12	打製石鏃 5	黒曜石 6	L 33	VII b	2.20	1.50	0.30	0.60	61896	
	S 13	打製石鏃 5	黒曜石 1	K 29	VII a	1.10	1.80	0.35	0.47	86456	
	S 14	打製石鏃 5	安山岩 1 a	H 28	VII b	1.30	1.10	0.20	0.20	87690	
	S 15	打製石鏃 5	黒曜石 6	K 32	VII a	1.90	1.05	0.40	0.60	63531	
191	S 16	尖頭状石器	メノウ系	M 33	VII a	6.50	3.80	0.90	18.90	74020	
	S 17	石槍	安山岩 1 b	I 29	VII b	9.70	1.80	0.90	14.58	96427	
	S 18	石槍	安山岩 1 b	H 28	VII a	9.60	2.05	0.80	20.00	87165	
192	S 19	石匙 1	安山岩 1 b	K 32	VII a	3.80	3.00	0.80	6.90	57230	
	S 20	石匙 1	安山岩 1 b	D 28	VII a	6.20	2.90	1.00	13.00	75619	
	S 21	石匙 1	安山岩 1 b	C 27	VII a	2.80	2.50	0.30	2.30	75307	
	S 22	石匙 2	安山岩 1 b	J 28	VII a	2.80	3.70	0.60	5.70	85828	
	S 23	石匙 2	安山岩 1 b	M 33	VII a	3.10	5.75	0.75	8.50	58777	
193	S 24	削器	安山岩 4	L 32	VII a	5.10	10.10	1.30	54.90	58484	
	S 25	打製石斧 1	頁岩 1	K 34	VII a	8.10	5.80	1.30	83.90	55845	
	S 26	打製石斧 1	頁岩 1	K 34	VII a	7.80	6.40	2.20	147.40	57602	
194	S 27	磨製石斧 2	頁岩 2	G 30	VII b	8.10	8.70	2.00	195.00	109700	
	S 28	磨製石斧 2	頁岩 2	L 34	VII a	6.60	7.00	1.40	87.90	59262	
	S 29	磨製石斧 2	頁岩 1	M 34	VII a	6.10	7.80	2.20	115.20	57554	
	S 30	磨製石斧 3	頁岩 7	I 31	VII a	6.30	3.00	1.00	23.20	110999	
	S 31	磨製石斧 3	頁岩 1	L 33	VII a	9.80	3.30	1.75	72.40	63414	
195	S 32	礫器	ホルンフェルス	I 31	VII a	14.50	10.80	4.50	798.00	111013	
	S 33	礫器	砂岩 1	K 30	VII a	18.10	13.10	3.60	943.00	85227	
	S 34	礫器	ホルンフェルス	I 32	VII a	12.80	15.50	4.50	1079.00	70286	
	S 35	磨・敲石	安山岩 4	I 30	VII a	7.10	6.60	3.95	243.00	96024	
	S 36	磨・敲石	砂岩 1	B 28	VII a	11.70	10.40	4.40	681.00	77886	
	S 37	磨・敲石	安山岩 4	L 32	VII a	9.40	6.30	3.80	327.00	57260	
196	S 38	磨・敲石	安山岩 4	L 35	VII a	12.10	10.40	6.10	1235.00	55867	
	S 39	磨・敲石	安山岩 4	M 32	VII	10.85	4.20	3.25	210.00	53681	
	S 40	磨・敲石	安山岩 4	M 33	VII a	11.40	108.00	5.10	840.00	58225	
	S 41	磨・敲石	安山岩 4	C 26	VII a	5.40	8.70	4.35	298.00	42219	
	S 42	磨・敲石	花崗岩	K 33	VII a	10.80	9.30	5.50	830.00	55456	
	S 43	磨・敲石	安山岩 4	K 33	VII a	9.50	6.64	4.83	479.00	57234	
	S 44	磨・敲石	花崗岩	L 35	VII a	10.70	9.80	4.60	720.00	58818	
	S 45	磨・敲石	安山岩 4	J 29	VII a	10.60	7.40	4.20	490.00	83123	
197	S 46	磨・敲石	安山岩 4	M 32	VII	11.00	8.40	3.90	566.00	53127	
	S 47	石皿・台石	砂岩 2	K 33	VII	23.00	14.80	9.20	4820.00	52901	
	S 48	石皿・台石	安山岩 4	J 27	VII a	13.90	10.10	3.80	807.00	86912	
	S 49	石皿・台石	凝灰岩	E 32	VII a	28.60	41.00	7.90	9520.00	28601	

第38表 VI層出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	石材	出土区	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
198	S 50	打製石鏃 1	安山岩 1 b	J 34	VI	1.65	1.45	0.40	0.60	26273	
	S 51	打製石鏃 2	安山岩 2	M33	VI	1.80	1.70	0.30	0.80	60921	
	S 52	打製石鏃 2	黒曜石 4	F 33	VI	1.53	1.21	0.24	0.30	25902	
	S 53	打製石鏃 2	安山岩 1 b	B C 33	VI	1.80	1.50	0.40	0.48	25666	
	S 54	打製石鏃 2	黒曜石 6	D 33	VI	2.36	1.58	0.50	0.78	25598	
	S 55	打製石鏃 2	安山岩 1 b	J 35	VI	2.36	1.51	0.26	1.00	27295	
	S 56	打製石鏃 2	黒曜石 4	C 33	VI	2.01	1.79	0.51	1.37	25435	
	S 57	打製石鏃 2	安山岩 1 b	E 34	VI	1.92	1.66	0.29	0.59	26193	
	S 58	打製石鏃 2	頁岩 5	I 28	VI	2.55	1.70	0.50	1.00	88217	
	S 59	打製石鏃 2	チャート	H 34	VI	2.37	1.91	0.52	1.62	26134	
	S 60	打製石鏃 2	黒曜石 6	D 33	VI	2.42	1.62	0.39	0.93	25394	
	S 61	打製石鏃 2	黒曜石 6	B 28	VI	3.15	2.00	0.50	1.80	67131	
	S 62	打製石鏃 2	黒曜石 6	E 33	VI上	4.00	2.50	0.50	2.82	24927	
S 63	打製石鏃 2	黒曜石 4	K 35	VI	2.46	1.00	0.39	0.61	25353		
199	S 64	打製石鏃 5	黒曜石 7	G 32	VI	2.70	1.35	0.40	0.86	65785	
	S 65	磨製石鏃	頁岩 4	G 33	VI	2.05	1.65	0.25	0.90	64538	
	S 66	石匙 2	安山岩 1 b	I 29	VI	2.00	5.10	0.60	5.00	95041	
	S 67	石匙 2	安山岩 1 a	F 28	VI	2.90	6.30	0.60	9.91	99739	
	S 68	石匙 2	安山岩 1 b	K 34	VI	2.90	7.30	0.90	16.90	53734	
200	S 69	石匙 2	安山岩 1 b	I 35	VI	4.10	6.55	1.30	17.90	25368	
	S 70	石匙 2	安山岩 1 b	J 34	VI	4.60	6.80	0.60	19.90	25486	
	S 71	石匙 2	安山岩 1 b	K 35	VI	3.20	7.80	0.50	10.60	27348	
201	S 72	石匙 2	粘板岩	D 27	VI	5.00	7.50	0.70	18.90	76136	
	S 73	石匙 2	安山岩 1 b	K 34	VI	4.45	8.65	1.00	28.70	49927	
202	S 74	石匙 2	安山岩 1 b	K 34	VI	4.70	8.10	0.85	24.80	49234	
	S 75	石匙 2	安山岩 1 a	L 33	VI	2.95	10.70	0.70	17.40	47150	
203	S 76	石匙 2	安山岩 1 b	E 33	VI	8.80	8.65	1.25	93.30	25313	
204	S 77	削器	安山岩 1 b	L 34	VI	3.40	5.40	1.00	17.80	51883	
	S 78	石錐	安山岩 1 b	E 32	VI	(4.50)	1.70	0.80	5.10	25609	
	S 79	石錐	安山岩 1 a	I 28	VI	3.00	2.20	0.60	3.30	89624	
	S 80	異形石器	黒曜石 1	I 29	VI	1.15	1.65	0.35	0.50	89836	
	S 81	打製石斧 2	頁岩 4	M 34	VI	13.40	8.30	2.40	360.00	55354	
205	S 82	打製石斧 2	頁岩 2	L 34	VI	13.40	8.00	2.10	300.00	58246	
	S 83	打製石斧 2	頁岩 2	C 27	VI	20.70	12.80	3.70	1160.00	75328	
206	S 84	磨製石斧 1	頁岩 3	K 34	VI	13.80	8.00	2.50	300.00	48832	
	S 85	磨製石斧 1	頁岩 1	H 29	VI	11.90	4.90	2.00	132.80	97395	
	S 86	磨製石斧 2	頁岩 8	G 28	VI	9.40	5.00	1.90	129.00	79870	
	S 87	磨製石斧 3	頁岩 4	L 35	VI	5.60	1.95	1.25	15.10	48100	
207	S 88	礫器	ホルンフェルス	H 32	VI	14.80	11.00	6.10	980.00	64431	
	S 89	礫器	ホルンフェルス	G 29	VI	10.50	10.80	2.90	405.00	104663	
	S 90	磨・敲石	安山岩 4	E 33	VI	9.65	8.25	4.80	530.00	26963	
	S 91	磨・敲石	安山岩 4	J 29	VI	5.80	4.60	2.70	82.00	83217	
	S 92	磨・敲石	砂岩 2	K 32	VI	10.75	8.20	4.45	585.00	63512	
	S 93	磨・敲石	花崗岩	I 30	VI	12.50	11.30	6.40	1343.00	110707	
208	S 94	磨・敲石	安山岩 4	K 28	VI	10.70	8.65	3.90	574.00	82192	
	S 95	磨・敲石	安山岩 4	L 35	VI	11.00	10.20	6.00	950.00	55906	
	S 96	磨・敲石	安山岩 4	I 35	VI	6.60	9.30	4.30	438.00	27260	
	S 97	磨・敲石	安山岩 4	L 35	VI	10.95	7.25	4.10	432.00	54692	
	S 98	磨・敲石	安山岩 4	L 34	VI	9.15	5.70	2.90	230.00	54384	
	S 99	磨・敲石	安山岩 4	K 34	VI	10.20	9.30	4.10	549.00	54724	
209	S 100	磨・敲石	安山岩 4	L 34	VI	10.30	9.95	4.40	654.00	55380	
	S 101	磨・敲石	安山岩 4	E 32	VI	9.40	8.60	3.30	391.00	26144	
	S 102	磨・敲石	安山岩 4	K 33	VI	10.45	9.40	5.40	785.00	54761	
	S 103	磨・敲石	安山岩 4	K 34	VI	10.90	8.70	4.25	656.00	54427	
	S 104	磨・敲石	安山岩 4	F 34	VI	12.10	8.25	4.10	663.00	27073	
	S 105	石皿・台石	花崗岩	L 35	VI	15.70	12.00	5.30	1410.00	48095	
	S 106	石皿・台石	安山岩 4	K 33	VI	10.90	9.40	6.70	1102.00	51903	
210	S 107	石皿・台石	安山岩 4	J 29	VI	24.50	22.20	9.50	6360.00	83036	
	S 108	石皿・台石	安山岩 4	D 35	VI	34.20	45.20	13.00	23900.00	26349	
211	S 109	石皿・台石	安山岩 4	I 29	VI	34.00	29.70	20.80	24100.00	89660	
	S 110	軽石製品	軽石	M 34	VI	4.10	3.80	1.60	6.20	54397	
	S 111	軽石製品	軽石	L 30	VI	13.00	6.30	5.60	96.50	79605・79606	

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（38）
東九州自動車道建設（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川久保遺跡 4 A地点

縄文時代早期編（第 1 分冊）

発行年月 2021年3月

編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印刷 株式会社 あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
TEL 099-214-3757 FAX 099-214-3758



鹿児島県